THE CENTRAL REVIEW

中央公論

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
昭和五年七月十八日印刷納本
昭和五年八月一日發行（毎月一回一日發行）

八月號

第四十五年 第八號 第五百十一號

太陽の光線は七色だ！この太陽の明朗さは

凡ゆる社會の色彩を包攝した所から生ずる！

近刊豫告

貴女と私の太陽！

この太陽

乞ふ—發賣の日を待て

牧逸馬著

作者はX線の如く螢光の如く人體、密室の隅々までも浸透し照出する。有閑夫人新時代の令嬢を廻る戀愛の種々相。現下の兩性問題は剩す所なく浮彫された。

鬼才谷讓次の筆鋒は愈々鋭く愈々輕快に彼の存在それ自身の如くユニークな獨壇場を開拓主張してゐる。

狹小なイゴイズムに囚はれることなく彼の才筆は社會の全面相に浸透する。

妖艶毒獸の如き夫人麗子、理知的な典雅な**瞳子の水晶の如き純情**、妖蕩極りなき中年夫人の**戀愛遊戲の虜**となつて初めて知る肉の味に醉ひ痴れる**美青年元雄**—を圍繞する博士、少壯社會科學者資本家、モダン老人等々が織りなす複雜にして透徹した**經緯**は作者の**結婚觀の總決算**として異常な成功を齎らした近年の快作。今や日活は超特作としてこれを映畫化せんとしてゐる。

東日に七月一ぱい連載、完結を待ち直ちに美裝刊行す

東京驛前丸ビル 中央公論社出版部

近代的明朗、イットとウイットそれがモダニズムの精髓だと言ふならば是は正に王座に位する併も叡智とユーモアの隨處に輝けるに於いてをや！

中間物選集

イデイオロギイに疲れナンセンスに飽きた時諸君を救ふのはこの選集のみだ。何といふ明朗な空氣、芳醇な香氣、多彩多角なその明暗……それはネオンライトに照明さるる夜のフルーツパーラーです。其尖端的エロの惱ましさは葉巻とカクテルに更けゆる夜のサロンです

柳澤健　巴里を語る
巴里を去りて巴里を語る、佛蘭西文藝點景、ヴン・ドンゲン邸の夜會、流行見ピランデロ、愛怨遺事三篇等二十一篇

石川欣一　山へ入る日
山と酒、山と女、山と煙草、山に登る理由、鹿島槍の月、雪線の下にて、柳・パス・マグノリア、中年者の幻想等四〇篇

淺原六朗　都會の點描派
蛋と美顔博士と一億圓、マネキンガール點描、膝の會話、戀をのせたタキシ、深夜の乘客、交叉點の昂奮等四十六篇

新居格　近代明色
季節の瞳、細線の秋、濾影鏡、流行問答、徽章點彩、近代型、ステッキガール抗辯、早婚者の手記、斷截美學等五十三篇

さゝきふさ　或る斷層
漫乘揮話、結婚幇助、忘れられマニア、好きな男、嫌ひな男、多點的存在、三圓の相對性、つまらない、一服等六十三篇

下村千秋　月寒の女
良人を御用心、ギブスの床、枇杷の實、狂つた人の狂はぬ言葉、私のノスタルヂア、月寒の女まで、四國遍路等十八篇

林房雄　都會の論理
明日の女性、新戀愛道、情死を嗤ふ、菊池寛に與へる公開狀、伏せ字について、圓タクガール、赤い子守唄等二十七篇

小島政二郎　場末風流
夫婦の寢室、若葉の森の戀人、ベッドに横たはる論、食しん坊、賢人の座談、惡魔の作美女、白扇の美女等二十八篇

片岡鐵兵　彼女等と語る時
美人論、文學と不良少女、よくない男、十二月の記憶と夢、女學生氣質、モダンガアル考、形式と速度の生活等三十三篇

下田將美　東京と大阪
道灌山附近、八石教會の跡、根津の話、大阪を見ろ、高野の萬年草、關西文化の東漸、猫、倫敦と東京等十四篇

酒井眞人　映寫幕上の獨裁者
第三十九の接吻、シナリストか監督か、ストオリかテーマか、映畫定石、チヤップリンびいき、動く虎等七十八篇

長田幹彥　女優部屋
新東京風景、月夜の歡樂場、深夜の圖メク、銀座夜曲、陽氣な風車、青衿の女、女優部屋、女樂士等五篇二十一章

丸木砂土　變な笑ひ顏で
女は匂ひなり、秋の兵隊、女の足、乳抑へ、メイヒスト物語、獨逸の餅飢、徵毒藝術家、靴下どめ、アヹマリア等冊三篇

四六判　紙装　三百數十頁・定價各册八十錢　送料內地八錢　滿鮮十八錢

東京丸ビル　**中央公論社版**　振替東京三[illegible]

モウベックス、カメラ

十六ミリ活動寫眞機（四十呎）

最も新しくて、最も廉價です



ビリー、カメラ

（ブローニー形ロールフィルム用）

全く初めての方でも

文句なしに好く寫せます



アグファ合名會社

大阪　東京

日本決定版

昆蟲記

全十一巻

なしの豫約募集

七月卅一日締切
内容見本送呈

び大増刷敢行!!

第一回は全國書店にあり

選擇は讀書の半ばだ
片々たるザラ本を山と積むより『昆蟲記』で自己の足場をガッチリ築け。ファブルの『昆蟲記』こそは既に一切の批判を超越して世界的榮光の王座に列してゐる。『昆蟲記』によつて科學者は未知の世界を、哲學者は永遠の眞理を、宗教家は神の叡知を、藝術家は生命の歡を、社會科學者は社會性を攝取すべき人類の聖典である。

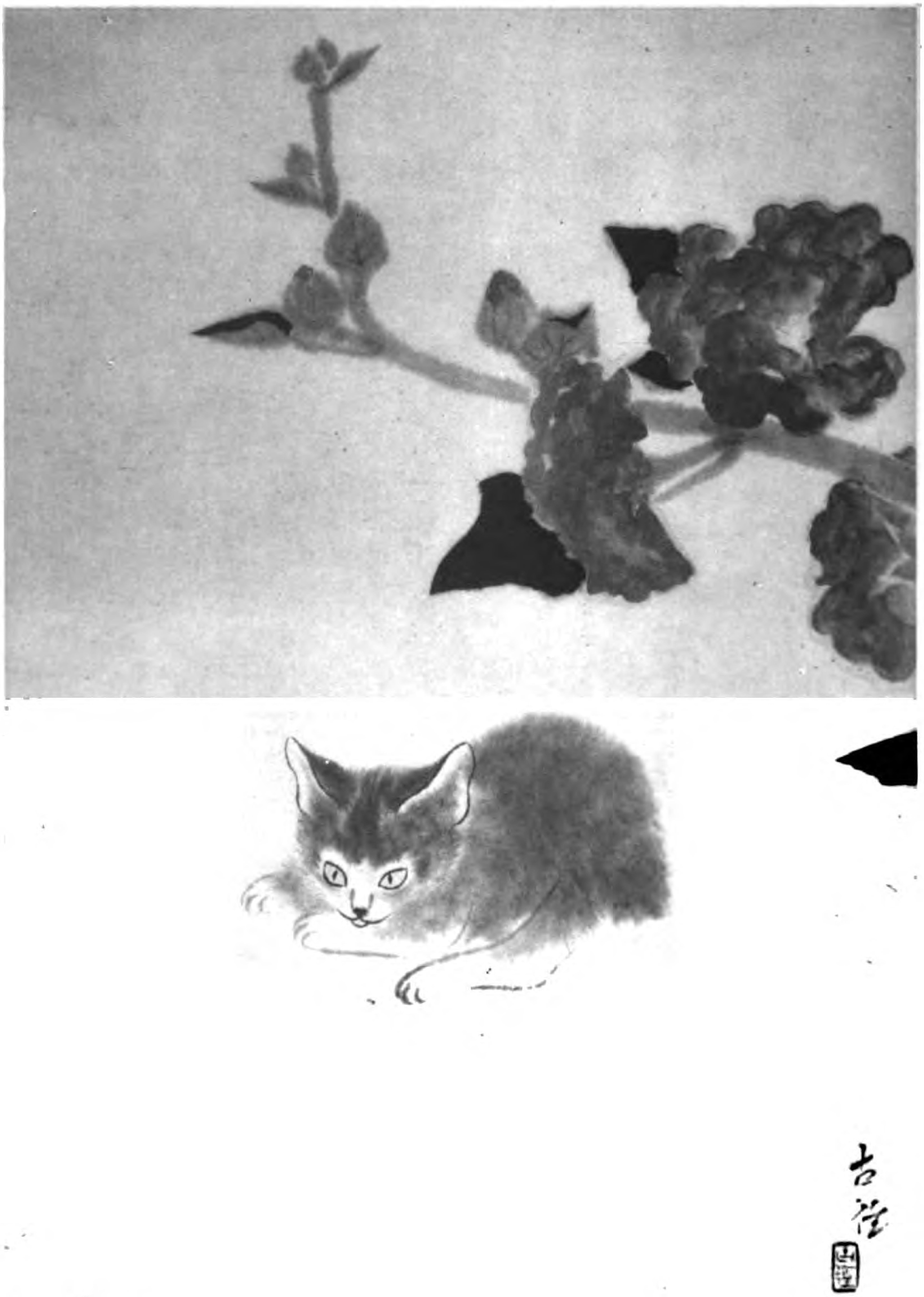
小社は今や彼が大衆への教育的貢獻たる『科學知識全集』の刊行を了し、更に彼が生涯の偉業たる『昆蟲記』の完全譯を移植し、以て偉大なる彼の全著作紹介の大事業を完成せんとするものである。

譯出はドラグラーヴ佛蘭西決定版による全巻全譯!
装幀は莊麗なる原本を髣髴せしむる重厚絢爛の美装!
これこそ誇示すべき **日本決定版だ**

一冊一圓五十錢　送料十四錢　全額割引十五円　送料一円五十四錢

第一回 地球の解剖 配本開始
全國書店にあり。すぐ御申込下さい
全十三巻
申込金不要
一冊一圓五十錢 送料十二錢
全額十五圓 送料一圓五十六錢

東京神田今川小路
振替東京二四八八八
アルス



猫

小林古径筆

第八拾五版

友愛結婚

リンゼイ判事著
原田實譯

俄然、物議を捲き起した問題の書

四六判五六〇頁
定價一圓八十錢
送料内地十二錢

中央公論社

東京驛前丸ビル五階
振替口座東京三四番

書店に品切の時は本社へ

小說界の劃期的名作

女給……廣津和郎



これは銀座の一女給の物語である。現代日本の最も尖端的存在たる女給――その女給の中でも最も尖端的と稱せられてゐるTカフエーの一女給が半生の哀史である。華かなネオンライトの下に、孔雀の如く傲らかに踊り狂ふ彼女等のエプロンの影には、數々の哀愁が隱されてゐる。三十錢、五十錢のチップを拾ひ集めてゐる彼女等に、四五枚の十圓札を、そつと握手に事寄せて掴ませるお客は、彼女等にとつての大なる魅惑である。曾ては思ひも及ばなかつた一世の名士が彼女の耳にさゝやく愛の言葉は、彼女の胸を不當に高鳴らせる。自家用のパッカードを門に待たせてドライブを誘はれては、公休日でなくとも彼女の心は動かざるを得ない。さうして彼女の墮ち行くところは：：？「お支度のしてある」室に、いいじやないかと誘ふのは文名一世に高い○○○氏であつた。「この子の父親だといふことだけでも認めて下さい」と言つて賴んでも訊かれなかつた氣の毒な友達のことが思ひ出される。：：：彼女の告白には痛ましい現代的女性の裸形と痛憤とさうして悲涙とが織交ぜられてゐる。作者廣津氏筆を執りて泣き、廣津夫人原稿を整理しながらまた泣き、挿繪畫家加藤靜兒氏泣いて彼女のあとを追つたといふ發表前すでに問題の小說である。

▼**子を殺させにやる親心**……賀川豐彦
▼**迷へる女の世相暴露**……祝田二郎・赤木麓
▼新婚旅行日記……眞鍋・吉岡
▼**若きわれらの惱み**……
■**働く女の服裝と生活座談會**
▼カロル新帝戀のロマンス……岩瀨東一郎
▼產兒制限の前衞軍から……上野文枝
▼**スクリーン懺悔**……八雲・入江・栗島・伏見
▼**內外時評**……山川菊枝
▼蒲田俳優と子爵令孃の灼熱結婚
▼親友に戀人を奪はれた女の手記
▼**夏宵妖話**

悩める現代の女性に與ふ

平林初之輔

社會的には些かも人間的であることなく、單に娘であり、妻であり、母であるしかなかつた婦人は今や家庭から社會の中にひき出された。而も思想的經濟的に動搖極まりなきこの現代過渡期の眞只中へ。彼女等は何處へ行く？——その根本的な問題に解決を與へんとしたものである。現代婦人の悩みは、現代の人類そのものの悩みの中に埋沒する。大衆と共に悩め。解決せよ。

未だ見ぬ妻へ

藤澤桓夫

姦淫と賣淫を條件にもつ現代の結婚。この呪はれた結婚の相こそ女の名にかけて叩き毀さねばならない制度である。砂を嚙んで生きる愚は去らねばならぬ。單純で、ほがらかで實際的な男と女の交渉。若きコミユニストの結婚觀こそ、餘りに多くの時代的示唆を含んでゐる。

失業者の妻の歎き

職と食とを奪はれて、骸骨踊を踊る蒼白い妻の皮膚。臭氣紛々たる彼女達の肉體がもの云ふこの凄慘。この地獄の癌を手術するものは誰れぞ。この妻の歎きに耳を藏ふものは誰れぞ。

婦人闘士物語

平林たい子

アナとボルの區別さへなかつた所謂曉民會一派の昔から、去んぬる四・一六事件にまで發展した、我國婦人社會運動の正面圖で、この戰場と墓場の慘苦の中に身をもつて主義を闘ひとつた婦人闘士の血傷記。獄中に斃れた同志の壘々たる屍を踏み越えて進軍する彼女達の跫音は諸君の胸に地ひびきする。

昔の愛人にあつた場合

岡田三郎
大宅壯一
林芙美子
筑波雪子

別れた愛人と會つた時——それは丁度カクテルの中にぽつかり浮んだ赤い櫻桃にでもたとへたいやうな甘い記憶だ。皆さんもきつとさういふものを思ひ出のポケットの中に二つ三つ忍ばせておいでせう。食滯するこの夏の宵にこそ口に心に爽かなこの清涼味を。

婦人公論

八月特輯號

七月十六日發賣
定價 七十錢

中央公論社發行

□連載小説

▼ミスター・ニッポン……………郡司次郎正
▼極　光……………里見　弴
▼遍路行……………下村千秋
▼江戸巷塵譜……………林　不忘
▼肉身の殺人……………濱尾四郎

□家庭モダン納涼法

▼夏季の衛生

□眞夏の食卓

□避暑の實用メモ

十四で處女を盗まれた女の手記

陸軍少將の令孃である彼女は十四で貴き處女を破られた。財產を廻る骨肉相剋の犧牲となつて。現代上流階級のこの頽廢を見よ。

ホテル祕話

「一週間以上禁慾すると頭の具合が惡い」と眞面目に「おめかけ」さんを賴む外人老博士。ホテルを仕事場にしてゐる文士S。彼等がホテルの底から拾ひ出す美しい眞珠との情痴の姿は窓越しに見る影繪のやうに潤ふのだ。

我社の夏季大學

——(卷頭言)——

中央公論夏季大學の計畫を發表するや、之が參加を希望せらるる向、各部面に亙りて非常の多數に上つた。斯種の企は近年の流行であるとは云へ、中央公論に寄せられたる多年の同情と信頼との自らこの計畫に反映せるものなくんば、決して斯の如き結果を見得ないのであらう。夫れにつけても我社は、講師諸氏と共に層一層の奮勵を以て眞に中央公論夏季大學の名に背かざるものたらしめんと努めつゝある。滿天下讀者の聲援に對しては呉々も感謝して措かざる所である。

我社が多年文筆を以て近代文化の振興に竭し來りしは今更自畫自讃するまでもあるまい。更に一歩を進めて言説を以て同じく都鄙文運の進歩に貢獻せんことは實は近年社内にうごめき來れる野望であつた。本年漸く一段落の準備を終り玆に夏季講座の開設を見るに至つた譯だが、我社の言説を以て天下に乘出さんとするの抱負は固より之に盡くるのではない。

顧ふに夏季の休養期を特殊の修養に利用するの企は、もと基督教學生青年會の創始する所、明治二十二年京都に全國の學生を集めて開かれたるを嚆矢とする。之は西洋のサムマア・スクールに倣つたもので從てまた其名を夏季學校と唱へてゐた。爾來之は毎年開かれて今日に至つて居るが、當初暫くの間はこの基督教主義の會合の外に夏季の修養機關と云ふものは無かつたやうである。やがて小學校並に中學校教員の爲にそれ〴〵專門の學術を短期講授するの設備が現れる。所謂夏季講習會なるものが是だ。之は講授をうくる者に取て必要であり且つ監督官廳でも奬勵勸誘したので、忽ち各地に流行し、今日では各縣を通じ普ねく教育界年中行事の一つとなつて居る。併し乍ら之等の設備は要するに教員の頭の色揚げのやうなものに過ぎず、嚴格な意味に於て民間文化の振興に交渉あるものと云ふことは出來ない。

大正の始めに至り教師學生の制限なく普ねく民間の有志に訴へて夏期講座を開くものを生じた。西洋の所謂大學普及の趣旨を採つた所から夏季大學の名稱を冠したのが人氣に投じたものと見へ、瞬く間に非常な流行を示すことになつた。今年に限つた事ではないが、夏季大學の名を冠して多少組織的に專門の學藝を講授するものの全國に幾つあるだらうか。而して我社の夏季大學も要するに之等の流行の一種に相違はない。たゞ中央公論が雜誌界に於て獨特の異色を放つと同じ意味に於て、我社の夏季大學の他の類似のものと斷然區別せらるべきものなるは云ふまでもない。

併し我社は斯種の夏季講座のみを以て滿足するものではない。固より中央の智識を所在に振撒くは必要な事であり、更に出來るなら到る處に之を開くべきだとは考ふるが、之と同時に必要なるは、中央の智識をして田舍の各方面の經驗と切實なる觸接を保たしめる事である。講師から教へられるばかりでない、狹い田舍の經驗が又講師に教へると云ふのである。大工場式の夏季講座もいゝが、もツと狹く講師と聽講者との協力に依る研究機關が將來各地に於て施設せらるるの必要はないか。斯くてこそ夏季の特殊施設は更に大に文化の進運に貢獻することが出來るのであらう。具體的の事は今は云はぬ。我社は漸次準備を整へて夏季講座の大衆化輕便化へと進んで行きたいと考へて居る。

中央公論



第四十五年第八號
八月號
第五百十一號

帝國主義ブルジョアジーの武器としての勞働組合法政府案

大山郁夫

一 産業合理化政策に附屬する一つの新武器

今年の初頭に於て金融資本家の典型的な代辯者濱口民政黨内閣によつて「如何なる犧牲を拂つても」との觸れ込みの下に

断行された金解禁は、果然年來の殺人的不景氣に力強き拍車を加へた。「犧牲」は餘りにも覿面に拂はれねばならなかつた。一握りの大財閥とその周圍の衛星群にのみ異常に輝かしき展望を切り開くべく、資本家地主の政府の手によつて異常の努力を以て進められつゝある產業合理化政策の下に於て、廣汎なる一般大衆の生活は、無限の深淵に突き落されつゝある。荒れ狂ふ失業の嵐、高まり行くストライキの波、間斷なく街頭へ投げ出されて力なく餓死線上を彷徨する百萬の失業者の大群。全社會は今、烈しき動搖のたゞ中に呻めいてゐる。

かゝる雰圍氣のうちに、階級對立は刻々尖鋭化しつゝある。プロレタリアートは、したゝかに打ちのめされたまゝ××に大地にひれ伏して居るものでない。プロレタリアートは常に、倒れては起き上がり、倒れては起き上がる。しかもその度毎に、大地から新鋭の氣を吸收したものゝやうに、以前に幾倍する闘爭的氣魄を以て起き上がる。由來敗北の中から勝利を戰ひ取ることが、プロレタリアートのために定められた運命であるものゝ如くである。プロレタリアート解放の歴史が、それを誤まりなく證明する。今やわが國の無產階級も、打ち續く反動時代の下に於て異常に苦難な經驗の間に鍛ひあげた階級意識と闘爭力を提げて猛然として蹶起し、まつしぐらに金融資本の堅壘に肉薄しようとしてゐるのだ。

時代の潮に乘つてゐるかに見える金融資本も、決して無人の野を行くが如くに進軍し得るものでない。それはそれ自身の前途に一大強敵を控えてゐる。歴史の何れの時期に登場した何れの支配階級にしても未だ曾て盲目であつた例しがなかつた通りに、現代に君臨する金融資本とても、斷じて盲目ではあり得ない。それどころでなく、金融資本の鋭き眼光は今日打ちのめされて大地にひれ伏してゐる無產階級のうちに潜在してゐる明日の強敵を既に明かに見てゐる。それ故にそれは、やがてその強敵に向つて用ひようとする武器の數々を刻々に用意しつゝあるのだ。

我々は今、濱口內閣によつて示された勞働組合法案――それは社會局案といはれてゐるが實質上政府案として見られるべきものである――を、さうした金融資本の武器の一つとして見てゐる。そして、かうした觀點からのみ、この武器の解

來の用途をトすることが出來るものであることを信じてゐる。それは先づ第一に、濱口内閣が資本家地主の政府として、特に金融資本家の政治的代辯者として、その指揮の下に着々遂行しつゝある産業合理化政策に附屬するものとして作りあげられたものである。從つてこの産業合理化政策の將來の進路が、この武器の今後の使用の方向を決定すべきものであらねばならぬ。

いはゆる金解禁の善後處置の一策として益々活きた意味を帶びしめられた産業合理化の徹底化が必然に無産階級の猛烈なる反抗逆襲を喚び起さないで已まないであらうことは、濱口内閣が初めから十分に豫期して掛かつたことであつた。かの組閣當時に於て井上藏相が傲然として、「如何なる犧牲を拂つても金解禁を斷行するであらうことを宣言した際に、彼を始め全閣僚は、この事を十分念頭に置いてゐたに違ひないのだ。

無論、資本家本位の産業合理化の徹底化に對して必然に起るべき無産階級の反抗逆襲を阻止するためには、既製の武器が無限に豐富に支配階級の武器庫の中に藏されてゐる。なかんづく、治安維持法、治安警察法、暴力取締法等々を始めとして、新たに第五十八議會で製造された盜犯防止法までを含めての一切の無産階級彈壓法律は最も鋭利なものとして、しかも殆んどすべてがその偉大な效力に關して試驗濟みの札を貼られてゐるものである。そしてそれらの武器は、資本家地主の政府の手によつて、今後益々頻繁に持ち出され使用されるであらう。だが支配階級は、最早たゞそれだけでは飽き足らず、益々多く、より精巧なる武器を要求するやうになつて來てゐる。濱口内閣の勞働組合法案は、さうした支配階級の欲望に應じて新鑄されたものである。我々はやがて、それが如何に精巧なるものであるかを見るであらう。何れにせよ我我は、支配階級が多年の支配的經驗の集積の中から得た政治的技術の決して尋常一樣のものではないことの一例を、そこにまざまざと見ることが出來る。無産階級は無論、毫もそれを恐れる必要はないが、同時に逆にそれを輕視することは少くとも一種の階級的怠惰だといはなければならないのだ。

二　批判および反批判

更らにまた我々は、濱口內閣の勞働組合法案が喚び起した各方面の反響——および反響に對する反反響を注意しなければならない。該法案が一たび具體的に問題化され始めた時、資本家階級の陣營からも、無產階級の陣營からも、様々の批判の聲が囂々として卷き起つた。その間に、全國の資本家諸團體の反對の烽火も擧げられた。資本家の利益のための勞働組合法案に對する資本家のその論難は、しかし實質上、金融資本家の要求に對して產業資本家の要求を對照せしめたものであつたのだ。ところが、問題はそれで打ち止めにならなかつた。濱口內閣の勞働組合法案に對する資本家諸團體の反對は直ちに、それ自身に對する社民・大衆兩黨の反對を喚び起した。無產黨の列中に位置を占めてゐるこれら兩黨が資本家諸團體の態度に反對してゐるのは當然のことに見えるが、しかしその結果が皮肉にも實質上、資本家の利益のために作られた濱口內閣の勞働組合法案に對するこれら兩黨の支持といふ點に歸着した。それは一見恰かも大なる矛盾とすべきが如くであるが、實は決してさうでない。我々はやがて、かゝる事實の原因をも闡明するであらう。だが我々は當面、わが勞農黨の態度をも茲に一言書き加へておかねばならぬ。卽ちわが勞農黨は、資本家諸團體の態度に反對であることは無論、同時にまた社民・大衆兩黨の態度にも反對であり、更らに濱口內閣の勞働組合法案には最も反對であつて、そしてそれへの攻擊に主力を集中してゐるのだ。

武器の批判は、或る意味に於て批判の武器に轉化した。卽ち社民・大衆の兩黨およびわが勞農黨は、それぞれに如上の自黨の態度を反映する獨自の勞働組合法案を作つた。そのうち、社民・大衆兩黨の勞働組合法案は、論理の當然の歸結として根本に於て政府案と同一——少くとも大同小異の本質・內容を具へてゐるものであるが、これに反してわが勞農黨のそれは、その因つて立つ所の根本原則に於て、政府案とも社民・大衆黨案とも全然反對の方向を指し示してゐるものである。

かゝる事態は、階級對立の關係の現狀の複雜相をまざ〳〵と反映してゐる以外の何物でもない。階級對立の尖鋭化は必ずしも常にその單純化を意味するものとは限らない。殊に無產階級陣營の內部に於て資本家階級の利益に奉仕してゐる一聯の社會民主々義幹部が介在してゐる事實は、階級對立關係の現狀の複雜相の最大の原因をなしてゐるものである。今日同じ一つの無產階級陣營から、互に全然その本質・內容および根本原則を異にする幾組もの勞働組合法案が同時に提出されてゐるといふが如き事實が生じたのも、主としてその一點に基因するものである。從つて我々は、それらの幾組もの勞働組合法案のうち、果していづれが眞に無產大衆の階級的利益を代表してゐるものであるかを、最も愼重に批判しなければならないのだ。よし我々がこの重要なる仕事を怠らうとも、大衆の正しき審判は究極に於て誤りなく下されるであらう。

三　濱口內閣の勞働組合法案が現はれるまで

わが國に於て勞働組合法の制定が多少とも現實性を帶びた問題として取扱はれるやうになり始めてから、既に約十年にもなる。その間に實際の勞働組合運動は、ぐん〳〵と伸びて行つた。勞働組合法がなくとも、勞働組合そのものは、次から次へと益々廣範圍に組織されるやうになり、またその種別も次第に複雜化して行つた。職業別組合、產業別組合、『合同』型組合、組合聯合體。――更らに各組合によつて代表されるイデオロギーからの種別としては、協調主義的右翼組合、戰鬪的左翼組合、それに樣々の色合ひの中間派組合、等々々。――かうしたものが悉く事實上の存在となるに至つた。そして、かゝる事態は、やがてそれに續いて起つた無產黨運動に引き絡んで、異常に複雜な渦紋を描き出すやうになつた。すべてが世界大戰後に於ける全般の社會的激動の中を急テンポを以て進んだ。他方、かゝる狀勢の下に於て、勞働組合法制定の必要が各方面に於て、無論それ〴〵に異つた立場からではあり、從つてそれ〴〵に異つた動機からではあるが、又しても又しても問題にされつゞけながら、最終的に解決されるといふこともないまゝに、今日に及んだのである。

そこで、勞働組合法案がわが國の議會の門戸を潜ぐつたのも、既に一再に止まらなかつた。その最初のものは、大正十年に憲政會の手によつて第四十四議會に提出されたものである。その後も勞働組合法案は時々議員側から議會に提出されたが、しかし政府案が最初に日程に上されたのは、加藤(高)若槻內閣在職當時(大正十五年)の第五十一議會に於てゞあつて、それは衆議院の委員會で審議未了の下に葬り去られた。更らに翌年の昭和二年に、同じ內容のものが政府によつて第五十二議會に提出されたが、これもまた同じ運命を見た。それから暫らく政府案は再び姿を見せなくなつたが、その代はりに社民黨案が昭和四年の第五十六議會および昭和五年の第五十八議會に於て瞬間的に議場を覗いた。

昨年七月、濱口民政黨內閣が田中政友會內閣瓦解の後を承けて成立してから、勞働組合法制定の機運が再び濃厚になつたやうに見えだした。新內閣は前內閣の餘りにも露骨な反動振りがそれに對する世間の人氣を異常に惡化したのに鑑みて、頻りに自由主義の假面を冠ぶることに憂き身をやつし、同時に社會政策の實施をその看板の上に書き加へた。かくして新內閣は組閣匆々、一聯の閣僚・學者・貴衆兩院議員から成る社會政策審議會を組織して內閣直屬の一機關とし、それに向つて「現下の社會狀態に鑑み勞働組合法制定に關するその會の意見を問ふ」といふ諮問を發した。それから半年を經た十二月に至つて、社會政策審議會は、新たに制定されるべき勞働組合法の內容の基礎とすべきものとしての要項七個條を掲げて右の諮問に答申した。政府はその答申を「適當と認め」、社會局をしてその趣旨によつて法案を起草せしめた。間もなく年末に及んで、勞働組合法案社會局案なるものが發表された。それは、濱口內閣が第五十七議會に提出しようとしてゐることを自ら言ひ觸らしてゐた法案である。かくてそれは、社會局案とは言ひ條、實質に於て政府案と見られるべきものである。(本論文に於て單に『政府案』と呼んでゐるものは、それを指してゐるものだ。)

第五十七議會は一月下旬の休會明けと共に突如として解散されたから、その政府案が上程される暇がなかつたことは事實である。だが、次いで第五十八議會が四月下旬に開かれたけれども、濱口內閣はしかし、それが特別議會だからといふ

口實で、その時は同案の提出を見合はせた。そして議會閉會後になつてから、頻りに同案を次期の議會に提出するのだと吹聽しだした。多年の懸案となり來つた勞働組合法案の具體的制定の日が愈々近く迫つて來たとの印象が、それによつて大衆の間に普ねく廣められるやうになつた。政府案が全社會の注意の對象となつたのは、まさにそれからのことである。

四　政府案の骨子

かくて政府案は、今や各方面に於て批判の俎上に上ぼせられてゐる。それが「階級鬪爭を激發するやうな過激なもの」であり、「勞働者の保護に偏する片手落ちのものだ」と言つていきまいてゐるものは、例の全國の資本家團體だ。口先でその『缺陷』を言ひ立てながらも行動に於てそれを支持してゐるものは、社民黨・大衆黨・等々の社會民主主義幹部諸君だ。政府案は勞働者保護に名を借る惡辣極まる取締法だと揚言して、その欺瞞性および反動性を餘すところなく暴露し糺彈して、その徹底的粉碎を期してゐるものがわが勞農黨だ。濱口內閣が「穩健中正」な勞働組合法案だとして世間に誇示してゐる同じ一つの政府案に對して、かくの如く根本的に相異した樣々の態度が各方面から表示されてゐる事實こそは、最も注意すべき現象であらねばならぬ。

では、その政府案の本質・內容は、一體如何なものであるか？

前に言つた通り、政府案は濱口內閣の諮問に對する社會政策審議會の答申に掲げられた七個條の要項に準據——極めて忠實に準據して、社會局に於て丹念に立案されたものである。それ故に、その政府案の本質・內容を概觀しようとすれば、我々は勢ひまづ順序として右の七個條の要項を見るのを、少くとも簡便とする。それは次の通りのものである。

一、組合ハ職業別又ハ產業別ノモノノミニ限ラザルコト

二、組合ノ組織ヲ認ムルコト

三、法人格取得ヲ組合ノ任意規定トスルコト但シ法人タル組合ニ付テハ其ノ法人タルコトヲ外部ヨリ識別シ得ベキ方法ヲ講ズルコト

四、組合員ノ保護ニ關シテハ左ノ趣旨ノ規定ヲ設クルコト

「雇傭者ハ勞働者ガ組合員タルノ故ヲ以テ之ヲ解雇スルコトヲ得ズ、雇傭者ハ勞働者ガ組合ニ加入セザルコト又ハ組合ヨリ脱退スルコトヲ雇傭條件ト爲スコトヲ得ズ」

右ニ關シテハ制裁規定ヲ設ケザルコト

五、組合ガ勞働爭議ニ因リ雇者ニ損害ヲ生ゼシムルコトアルモ組合及其役員等ニ賠償ノ責ナキモノトスルコト

六、組合ノ監督ニ關シテハ左ノ趣旨ニ依ルコト

(一)行政官廳ハ業務若クハ財產ノ狀況又ハ組合員ノ員數ニ關シ報告ヲ求メ得ルコト

(二)會議ノ決議法令ニ違反シ又ハ公益ヲ害スルトキハ行政官廳ハ之ヲ取消シ得ルコト

(三)組合ノ規約法令ニ違反シ又ハ公益ヲ害スルトキハ行政官廳ハ其ノ變更ヲ命ジ得ルコト

(四)組合ノ行爲安寧ヲ紊ルトキハ主務大臣ハ組合ノ解散ヲ命ジ得ルコト

七、勞働協約ニ關スル規定ハ組合法中ニ之ヲ設ケザルコト

五 巧妙なる立法技術

以上の要項を基礎として立案された政府案を卒然として一瞥すれば、それに含まれてゐる極端なる反動性が丸でボヤけて見えて、却つて多くの個處に於て或る程度に進步的に見えるやうにさへ修飾されてゐる部分が著るしく目に立つ。また事實上に於ても、それは或る一二の點に於ては、少くとも初期の政府案に比して幾分かでも進步的でさへある。たとへば、新政府案は組合の組織に關しては職業別・產業別の區別を撤去して組合聯合體をも認めたり、また組合の法人としての存立を任意規定としたりなどしてゐるが、かうした點は、これを先きに加藤(高)若槻內閣當時に議會に提出された舊政府案に比較すれば、少くとも時代の背景との聯關を拔きにして單に抽象的形式的意味だけに於ていへば、たしかに進步的であり自由主義的であるといへる。だがその代りに、組合員の故を以て勞働者を解雇したり採用を拒否したりする資本家の行爲

を無效としたのみならず、それに罰則をも附してゐたところの、かつての社會局原案なるもの、傍に竝び立たせるときには、新政府案は明かに逆行的なものに見える。かうした關係からも、濱口內閣は新政府案の上に「穩健中正」のレッテルを貼りつけてゐるのだ。

だが我々は、斷じてさうした手前勝手の宣傳の民に掛つてはならぬ。新政府案が舊政府案に比して事實上幾分か進步的なものになつてゐる部分は、第一には有つても無くても勞働組合の實質上の利益を毛頭增減しないやうな枝葉末節に屬する規定に關するものであり、第二にはわが國の勞働組合運動の上に於て最早牢乎として動かすべからざるものになつてしまつてゐる既成事實を公認した規定に關するものにすぎないものである。前者は法人組織に關する任意規定がそれであり、後者は職業別產業別組合および組合聯合體を公認する規定がそれである。それら以外の一切の進步的に見える樣々の辭句は實にそれ〴〵の條項の極端に反動的な內容の上にメッキを掛ける必要を充たさうがために用ひられたもののみである。直接に該法案の立案の衝に當つたと自稱する一戶社會局勞政課長が或る資本家集團に向つて與へた說明には、その間の實情が次の如く物語られてゐる。曰く、

『要するに現在の事實として存在して居ります勞働組合に對しては何物も與へないのであります。又同時に何物をも奪ひませぬけれども、何物も之に加へて居らぬのであります。唯現在或ひは當然のこと或ひは已むを得ないこととして認められますことを法の上で認めまして、國としてそれらのことを正當づけたといふことであります。』――

――この政府案が既存の勞働組合から何物をも奪はないといふのは眞赤な噓だが、しかしそれに對して何物をも與へないといふのは百パーセントその通りである。かゝる赤裸々な眞實が政府の一當路者の口から率直に語られたのは、資本家集團の會合に於てやあればこそだ。いづれにしても、この手形は我々が額面通りに引き受ける。

かくの如く、濱口內閣の勞働組合法案は、水際立つて巧妙なる立法技術の行使によつて、その內容の極端な反動性を、表面上相當に進步的に見える辭句を以て隱蔽し修飾してゐる。だが、我々が細心の注意を以てそれを檢討するとき、我々

がその欺瞞のからくりを見やぶることは、さしたる難事ではないのだ。そして我々は一應、それは勞働者保護に名を借る惡辣な取締法であることをそれ自身の目的としてゐるものであることを看取することが出來る。

だが、問題はそれで終結するほど單純ではない。それは無論取締法であることをそれ自身の目的とするものに相違ないが、しかしその取締りの鋒先きを如何なる種類の勞働組合にも一樣に向けてゐる、といふやうなものでは決してない。この點は尚ほ後に更らに詳論することにして、茲でたゞ簡單に結論だけをいへば、政府案は特に戰鬪的左翼勞働組合の組織・活動を絕對に阻止することを最も中心的な狙ひどころとしてゐるものである。そして、この目的を完全に達成するために、協調的右翼勞働組合に對しては寧ろ進んで相當程度の保護の手をさし延べようとしてゐるものである。そこに該法案の主として金融資本の武器である所以が鮮明に發揮されてゐるのであり、そこにまた該法案に對する産業資本家の反對と社會民主主義幹部の支持とが出て來る原因が包藏されてゐるのである。

以下我々は、該法案が取締法として持つ特徵を闡明するために、特にその欺瞞性および反動性を出來るだけ徹底的に曝露するであらう。

六　政府案の中心目標——勞働組合の政治的活動の封鎖

勞働組合の政治的活動の封鎖。——それは政府案には見えざる文字で書かれてあるが、それにも拘はらず、それは該法案の背骨をなしてゐるものである。各條項の中に含まれてゐる一切の取締り的・禁止的規定は皆、それから出發してそれに復歸してゐる。そこにこそ無産階級にとつて最も危險な罠が伏せられてゐるのであり、またそこにこそ該法案の欺瞞性および反動性が集中的に結晶されてゐるのだ。從つて、我々が全力を擧げて該法案を粉碎することを期してゐるのも、畢竟それを中心的理由としてゐるものに外ならないのである。

先づ關係條文の審議から始めよう。政府案の第一條には、かういふことが規定されてある。

第一條　本法ニ於テ勞働組合ト稱スルハ勞働條件ノ維持改善ヲ目的トスル勞働者ノ團體又ハ其ノ聯合體ヲ謂フ勞働組合ハ前項ニ掲グルモノノ外組合員ノ共濟修養其ノ他共同利益ノ保護增進ヲ目的ト爲スコトヲ得

これによると勞働組合は、「勞働條件の維持改善、組合員の共濟、修養その他共同利益の保護增進」といふことだけを目的とするところの勞働者の團體だといふことになる。從つて、勞働組合が政治的目的のために活動することは、一切、禁止されることになるのである。尤も、第二項の「共同利益の保護增進」といふ字句を極めて廣義に解釋すれば、この法案は、必ずしも勞働組合の政治的活動を禁止しようとしてゐるものではないといふやうな解釋も成り立たない譯ではない。しかし、政府案が「共同利益の保護增進」と言つてゐるのは、無論さうした廣義のものではない。そのことは、この法案の骨子を作製した社會政策審議會が、去る昭和四年十一月二十二日の會議で「勞働組合の政治的活動は禁止すべきだ」といふ意味の決議をしてゐるのを見ても明らかである。また、この法案を作製した內務省社會局の一戶勞政課長は「勞働組合の存すべき目的は、勞働條件の維持改善と共同利益の保護增進といふことに限られて居りまして、政治を目的とすることは、勿論、許されませぬ……。」云々と明言してゐる。さらに最近盛に新聞紙を通じて發表されてゐる政府當局の說明の中にも、その事が特に明確に言はれてゐる。かくて政府が、新たに勞働組合法を制定することによつて勞働組合の政治的活動を禁止しようとしてゐることは、もはや一點疑ひを容れる餘地のないことである。

七　濱口內閣は何故勞働組合の政治的活動を禁止しようとしてゐるか？

ところで、濱口內閣は何故勞働組合の政治的活動を禁壓しようとしてゐるのであるか？　次にその點を究明しよう。

一般に知られてゐる通り、勞働組合は、勞働條件――賃銀の値上げ、勞働時間の短縮、工場設備の改良、等々の問題の

維持改善のために、資本家と戰ふことを目的としてゐるものである。この點は間違ひのない事實だ。だが、現在――即ち資本主義崩壞の前後に不撓不屈の活動をつゞけてゐる一切の戰鬪的勞働組合は、單に勞働條件の維持改善といふことだけを目的としてゐるものでは斷じてない。勞働組合が個々の工場、職場に於ける勞働條件の維持改善といふことだけを目的として戰つてゐたのは既に過去のことである。

なるほど、勞働組合は、その發生の歷史から言へば、たしかに勞働條件の維持改善を目的として生れたものだと言へる。だが、勞働組合の役割は、長い間の鬪爭を經てゐるうちに、斷然、發展し轉化した。それについてマルクスは、かういふ意味のことを、ところ〴〵で言つてゐる。

一、近代的大產業は、多數の見ず知らずの勞働者を一個所に集める。最初のうち、それらの勞働者は、互に競爭することによつて分裂する。だが、やがて、それらの勞働者は、勞賃の維持といふ共通の利益のために、協力して資本家に對抗するやうになる。かくして勞働者の團結が生れる。

二、勞働者の資本家に對する抗爭は、最初は單に勞賃の維持といふことを目的としてゐたにすぎないが、しかし資本家側がそれを抑制するために、お互ひに相結合するにしたがつて、始めの間は孤立的であつた勞働者側の團結も次第に合同に赴くやうになり、やがて組合の維持といふことが、勞賃の維持といふことよりも、一層必要なことになつて來る。

三、それと同時に、最初、個々の工場または職場に於て、個々の資本家から奪ひ取つてゐた『勞働時間の制限』等々は、やがて『八時間勞働制』等々の獲得運動に發展する。かくして一般に、勞働者の個々の經濟的運動から、一の政治的運動が生長する。

四、しかし勞働者階級の政治的運動は、やがて『賃銀制度そのものの撤廢』を目的とするに至る。即ち勞働者階級は『正當なる一日分の勞働に對して正當なる一日分の勞賃』といふ保守的な格言の代りに、彼等の旗印の上に革命的な警句『勞賃制度の全廢』を書きしるすやうになる。

五、勞働者階級の組織された力が、勞働者階級の最後の解放、即ち勞賃制度の奴隷の廢止に向つて使用されるやうになれば、その段階に於ける勞働者階級の運動は、ブルジョア政治權力の徹底的克服をその目標とするに至る。

六、階級と階級との間の鬪爭は、だが一の政治鬪爭である。

世界各國のプロレタリアートの運動は既に、この最後の段階に××してゐる。わが國に於ても然うだ。したがつて、

一切の戰鬪的勞働組合は單に勞働條件の維持改善を目的としてゐるだけでなく、ブルジョア××に對するプロレタリアとの全面的鬪爭に於て、極めて重大なる役割を持つてゐるのである。

プロレタリアートの運動が、この段階に達する頃には、いづれの國に於ても、その運動を全體的に指導する勞働者の政黨が生れる。だが全勞働者大衆を政黨に組織することは、ブルジョアジーが、政治的に經濟的に社會的に全面的に支配してゐる社會では、全く不可能なことである。したがつて、勞働者の政黨が勞働者階級の「頭部」として組織される。かうした關係の下に、『政黨』はプロレタリアートの政治鬪爭に於ける參謀本部としての役目を、そして勞働組合は正にその「本隊」としての役目をもつに至るのである。この本隊なくしては、參謀本部は全く無力である。換言すれば、勞働組合――および農民組合等々の――意識的活動なくしては、黨が數十萬數百萬の大衆を政治鬪爭に動員することは全く不可能である。かくして勞働組合はプロレタリアートの政治的鬪爭に於て、黨と大衆とを結びつけるためのベルトの役目を果してゐる。そこに勞働組合の重大なる政治的役割がある。わが國の戰鬪的勞働組合は、彼等のその役割を果すために、常に全被壓迫大衆の前衞隊として、あらゆる政治的鬪爭の先頭に立つて鬪ひ進んでゐる。これこそ現段階に於ける勞働組合の最も光輝ある階級的任務なのだ！

だが支配階級が最も恐れてゐるのは、勞働者階級のさうした政治的活動である。彼等は、勞働者が勞働條件の維持改善といふやうな經濟的要求のために鬪つてゐる間は、まだ〳〵安心してゐられる。何となれば、その段階では、全體としての資本家階級の××はビクともしないからだ。だが勞働者が、だん〳〵目醒めてきて、勞働條件の維持改善といふやうな經濟的鬪爭から賃銀制度の撤廢といふやうな純粹に政治的な鬪爭へ、言ひ換へれば、個々の資本家に對する鬪爭から資本家階級の政治的××に對する鬪爭に乘り出すやうになると、彼等は極度の恐怖を感ずるに至るのである。何となれば、今度こそは、ブルジョア××そのものが、根柢から搖り動かされるやうになるからだ。したがつて彼等は、さうした段階に

於ては、あらゆる狂暴なる手段を用ひて、勞働者の政治的進出を抑へようとする。日本のブルジョア政府は、さきに治安維持法を制定して、プロレタリアートの政治闘爭に嚴重なる限界を設けようとしたが、今や更らに一歩前進して、勞働者階級の階級組織の本隊である勞働組合に對して一切の政治的活動を××し——治安維持法による禁止條項は無論のこと、それ以外の一切の政治的活動を封鎖しようとしてゐるのだ！——プロレタリア陣營に向つて、全面的な一大攻勢を開始しようとしてゐるのである。この意味に於て、濱口內閣の勞働組合法案は、明かに治安維持法の××である。我々が濱口內閣の勞働組合法案を極力排撃してゐるのも、無論、彼等のかうした意圖をハッキリと看破したからである。

八　當面の客觀的情勢を背景として見ての政府案の中心目標

今、一歩を進めて、以上の所論を當面の客觀的狀勢との聯關に於て追究すれば、勞働組合の政治的活動を××しようとする政府の意圖の現實的意味が、更らに一層明瞭に展開して來る。

當面の客觀的狀勢——それは言ふまでもなく、資本主義の××の段階に於ける資本の總攻擊と、正面から敢然としてそれに打つ突かつて行く勞働者階級の決死的抗爭との作用・反作用が惹き起す巨大なる渦卷きが、それの中心的特徵をなしてゐる。

そこで先づ資本家側の陣營を見れば、彼等は個々の工場、鑛山、職場に於ける勞働者との對立に於て、今や事每に積極的攻勢に出てゐる。賃銀の値下げ、勞働時間の延長、產業合理化による勞働の强度化、大量的馘首、等々の大ッピラな敢行は、今日では、全國のあらゆる產業に共通の現象である。そしてまた、個々の資本家——もしくは資本家團——のかゝる攻勢的態度は、そのまゝ資本家階級の政治的支配の上に集中的に表現されてゐる。ブルジョアジーの政府は、彼等の攻勢に對するプロレタリアートの逆襲を阻止しようがために、最近の數ヶ年の間に、矢つぎ早に樣々の反動的諸法律を制定

した。そしてそれを、在來のあらゆる反動的諸法律に結び附けて、階級鬪爭のあらゆる場面に布きめぐらしてゐる。治安維持法、暴力行爲取締法、治安警察法、行政執行法、反動的出版法、勞働爭議調停法、盜犯防止法等、その他刑法中の反動的諸規定、等々。更らにそれらの諸法律の合法的非合法的適用による狂暴なる彈壓。――第一次第二次共產黨の檢擧勞働農民黨、勞働組合評議會、無產青年同盟、等の破壞、等々。更らに最近益々急速に激化の形勢にある經濟的爭議に對する彼等の執拗殘忍なる暴壓、並びに無產大衆の一切の言論・集會・結社に對する極端なる干渉壓迫、等々。――かくして今や、まさに崩壞の前夜にある日本のブルジョアジーは、政治的に經濟的に、あらゆる場面に於て死物狂ひの攻勢に轉じ、彼等の帝國主義××準備のための暴慢なる諸行動に於て、まさに阿修羅の如き形相を示しつゝ、全被壓迫大衆の上に襲ひかゝつてゐるのである。

他方、無產階級陣營の狀勢はどうか？　今や、わが國のプロレタリアートは、戰鬪的農民との固き提携の下に、敵のあらゆる猛襲に對して、文字通り決死的な諸鬪爭を敢然と遂行しつゝある。その最も尖端的な一部は、既に自らをプロレタリアートの黨に結集し、公然とその姿を大衆の前に現はした。そこでの最も勇敢な鬪士たちは、再三再四の敵の襲擊のために、大部分は敵陣にさらはれて行つたが、しかし、わが國の無產階級陣營内に於ける最も戰鬪的な勞働者農民大衆はそれにも屈せず、益々固く團結して、吹き募る反動の嵐を衝いて堂々と前進を續け、昨秋つひに、自らの大衆的政黨である勞農黨の旗を奪還した。そして今や更らに、全國各地に於て、一旦破壞されたる戰鬪的勞働組合を着々再建しつゝ、やがて舊勞働組合評議會の光輝ある旗をも奪還しようと努力してゐる。これらの大衆は、言ふまでもなく、明確なる階級意識の下に、常に全被壓迫大衆の先端に立つて不屈不撓に戰ひ進んでゐるのである。そして、そこに高らかに掲げられてあるスローガンは、『言論・集會・結社の自由の獲得！』『治安維持法の撤廢！』『帝國主義戰爭絕對反對！』『資本家地主の政府打倒！』等々である、これらのスローガンは、無論、單なる勞働條件の維持改善のためのスローガンではない。それこそは、

賃銀制度の××を、言ひ換えれば、全被壓迫大衆の完全なる解放をめざしてゐるプロレタリアートが、當面の客觀的狀勢の下に於て掲げてゐるところの最も戰鬪的な政治的スローガンである。

無論、わが國の無産階級陣營内にも、口に階級的言辭を弄しながら、その實、行動に於てブルジョアジーの侍女としての役目をつとめてゐる多くの社會民主主義幹部諸君がゐる。しかし、勞働者農民大衆は、――それらの社會民主主義幹部諸君の指導下にある大衆ですら、――今や急速に戰鬪化し、左翼化しつゝある。假借なき資本家地主の攻勢、――ブルジョアジーの政治的經濟的強壓が、無産大衆を急テンポに自覺させつゝあるのだ。見よ！　全國的に益々高まりつゝあるストライキの波を、小作爭議の怒濤を。そしてそれらが例外なく××鬪爭に轉化しつゝある狀勢を。それは一體、何を物語つてゐるか？

今や資本家地主の全力を擧げての攻勢と、勞働者農民の全力を擧げての逆襲とが、各處に火花を散らし、××を流し、今にも轟然たる大××を立てゝ××しようとしてゐるのだ。

濱口内閣が、如何なる難關を突破しても、勞働組合の政治的活動を嚴重に××することを中心目標としてゐる政府案を成立せしめようとしてゐるのは、如上の狀勢を前にしてでのことである。こゝに至つて始めて、濱口内閣がそれによつて實現しようとしてゐる最も根本的な眞意が、強烈なる脚光に照らされつゝ、餘りにもくつきりと浮び出て來るではないか！

九　勞働組合の政治的活動の禁止に伴ふべき直接の結果

ところで、勞働組合の政治的活動が、濱口内閣が期待してゐる通りに嚴重に封鎖された曉には、その後の狀勢は一體どんな風に變つて行くであらうか？　その點を手近な例によつて具體的に考へて見よう。先づ第一に我々の念頭に浮んで來ることは、現在、あらゆる戰鬪的勞働組合が掲げてゐる政治的スローガンは、すべて撤回せざるを得なくなるであらう、

といふことだ。例へば、先きに擧げた「言論・集會・結社の自由の獲得！」「政黨加入の自由！」「治安維持法の撤廢！」「帝國主義戰爭絕對反對！」「資本家地主の政府打倒！」――かういつた一切の戰鬪的スローガンは、もはや、――少くも合法的には――勞働組合のスローガンたり得なくなるのだ。

それと同時に、從來のやうに、戰鬪的勞働組合が先頭に立つて「出兵反對！」とか、「議會解散要求！」とかの大衆鬪爭を卷き起すことや、その他何等かの目的のための政治的ストライキを敢行することなども、無論出來なくなるに違ひないのだ。まかり間違へば――力關係の如何によつて――メーデーの示威行進すら禁止されるかも知れない。少くとも、メーデーに政治的スローガンを掲げることが出來なくなるであらうことは確かである。

更らに、より一層始末の惡いことには、政府の反動的勞働組合法が實施された後には、經濟的ストライキの際に於ける勞働組合の鬪爭までが、愈々窮地に陷れられるであらうことが、火を見るよりも明かである。誰れもが知つてゐる通りに、殊に最近に於けるあらゆる爭議には、必ず官憲の××なる××が例外なく伴つてゐる。すべての戰鬪的勞働組合は、否應なしにかゝる××の暴壓に對する鬪爭を敢行しなければならないし、また敢行してゐる。それが現在の實狀である。ところが、政府の勞働組合法が制定された後には、さうした場合にも、勞働組合の××相手の鬪爭は、最初から「目的外」の行動として嚴重に取締られ、今までのやうに、勞働組合の正式機關の決議に基いて、堂々と××相手の大衆鬪爭を組織したり、或ひは暴壓糺彈の演說會を計畫的に開催したりすることは全く不可能になるのだ！　かくして、××官吏の暴行が益々その度を增すであらうことは、火を見るよりもあきらかではないか！　これが戰鬪的勞働組合を××のめさうとする陰謀でなくて何であるか！

しかも、さうした樣々の束縛に對して、もし戰鬪的勞働組合が敢然として××したとすれば、その時には、早速支配階級は、彼等の虎の卷であるべき勞働組合法第十七條を舁ぎ出して、組合に解散を命じ、その指導者たちを何等かの名目で

縛り上げるに相違ないのだ。

かうなると、戰鬪的勞働組合は、――少くも合法的には――手も足も出せないことになるであらう。そこで勞働組合法に束縛されまいとすれば忽ち『解散』をもつて脅威されるし、もし勞働組合法の範圍内でやつて行かうとすれば、いやでも應でも、經濟主義――日和見主義――の殼の中へ這入り込んで行かない譯に行かなくなるのだ。狂暴なる帝國主義の彈壓下にあつて、政治的活動の自由を××された勞働組合！　それはまさに牙を拔かれた狼ではないか！　しかもそこが、支配階級の××の狙ひどころなのだ！

一〇　取締法としての政府案の正體

勞働組合の政治的活動を嚴重に××することによつて、すべての勞働組合をヘナ／＼の骨拔き組合にしてしまはうとするのが、濱口政府の反動的勞働組合法の中心的眼目であるが、政府は、その目的を最も效果的に果すために、樣々の取締り規定を設けて勞働組合の行動に干渉し、すべての勞働組合を、政府――内務省――地方行政官廳――警察――の完全なる統制下に置かうとしてゐる。政府案が、その點、如何に巧妙に出來上つてゐるかを次に分析しよう。

(イ)規約その他の屆出の强制。政府の法案の第二條は、勞働組合の『代表者の住所氏名』『主たる事務所の所在地』並に『規約』を、組合設立の日から二週間以内に行政官廳に屆け出ることを强制してゐる。そしてその『規約』には左の事項を記載せねばならぬことになつてゐる。(政府案第二條および第三條)

一、名稱　二、目的　三、主たる事務所の所在地　四、組合の構成に關する規定　五、會議に關する規定　六、組合費その他會計に關する規定

これだけのことを調べて置けば、その組合の骨組がどういふ風に出來上つてゐるかは、十分に知り盡すことが出來る。

政府案が以上のことを屆け出ることを勞働組合公認の必要條件としてゐるのは、全國のすべての勞働組合を一絲亂れぬ統一的の取締りの下に置かうとする意圖からだ。無論、組合の「規約」に記載される事項は一般的な抽象的な規定にすぎないのであるから、これをいくら調べたところで、それだけではその組合の實際の狀態を知ることは出來ない。だから、もし政府案が、かゝる抽象的規定の屆出でだけを強制してゐるのならば、勞働組合の蒙むる迷惑はさして問題にするほどのことはないかも知れないのだ。ところが、政府の法案は、先づこの第二條、第三條の規定を筆頭として、これ以外にも、これと聯關する樣々の取締規定を設けてゐるのである。そしてこれらは、すべてが巧みに組み合はされて、一つの完全な水も漏らさぬばかりの峻嚴なる取締法として形成されてゐるのである。だから、この第二條第三條の規定も、さうした全體との聯關の下に於て見返すならば、驚くべき反動的取締法の重要なる一環を構成してゐることが明瞭になる。以下、彼等の取締法の全機構を曝露して行かう。

(ロ)『業務』並に『財産』の狀況の調査で　政府案の取締規則の中で最も始末の悪いのは、第十四條の規定である。それは、かういふものである。

第十四條、行政官廳ハ勞働組合ニ對シ其ノ業務若ハ財産ノ狀況又ハ組合員ノ員數ニ關シ報告ヲ爲サシムルコトヲ得

政府案が實施されるやうになると、だから、警察官吏は、いつ何時でも、組合の事務所へやつて來て、組合の業務の狀況や財産の狀態を勝手に調査することが出來るやうになる。無論、現在でも、警察官吏が隨時に組合の事務所へやつて來て、手をかへ品をかへて、さうした事項を調べようと試みるのは事實である。だが彼等は現在では何等の『權限』をもつてゐないし、組合でも彼等にそれを『報告』してはゐない。ところが、政府案が實施されたとなると、その時こそ彼等は、大ッピラに組合の事務所へやつて來て、『業務の狀況』や『財産の狀態』の『報告』を強徵するに相違ないのだ。もしそれを拒否するならば、彼等は早速勞働組合法第二十七條を適用するだらう。そこでは『第十四條ノ報告ニ付之ヲ怠リ又ハ虛僞ノ屆

出若ハ報告ヲ爲シタルトキ」は「五十圓以下ノ過料ニ處ス」と規定されてある。だから組合は否でも、應でも政府の調査に應じなければならないことになるのだ。

ところで、勞働組合の『業務の狀況』の調査といへば、言ふまでもなく、組合の全活動狀態の調査といふことではないか！　だから、例へば、いつ何處で執行委員會が開かれたか、その時、誰々がそこへ出席したか、そこで何が決議されたか、その決議が各地の支部や分會でどんな風に實行されたか、等々。或ひはまた、組合のニュースは誰れが書いてゐるか、書記は何人ぐらゐ居るか、その書記達の過去の履歴はどんな風であつたか、等々々。かうした組合の活動に關聯する一切合財が、みなこの『業務の狀況』といふ文字の中に含まれてゐるのである。もし、そんなことのすべてを事實上常に資本家共の手先きを勤めてゐる××官吏にいつ何時でも勝手に調査させるとしたら、それこそ、勞働組合がホンの小さなストライキを效果的に指導することさへ、思ひも及ばない事になるのだ！

財政狀態の調査に至つては、尙ほ更ら言語道斷である。本來、勞働組合の財政狀態は、敵との抗爭に於て最も祕密を必要とするので、組合の大會に於てさへ場合によつては、報告しないことがあるのだ。殊に、組合でストライキを指導する場合には、組合の基金をストライキ資金に流用することは當然のことであるが、さうした場合に、監督官吏が、隨時に組合の事務所や爭議團本部を訪づれて、巨細に組合の財政狀態を調べ上げることが出來るとしたとしたら、爭議の戰術は全く施すに途がなくなつてしまふことになる。そんなベラボーな話がどこの世界にあるか。

又、組合員の員數に關する調査も同然である。それが組合員の總數の調査だけだつたら、まだしものことだが、もし、何々分會――何々工場もしくは、どこそこの職場――には、組合員が幾人居るか、といふやうな調査の強行までを甘んじて受けなければならないとしたら、それこそ、支配階級にブラック・リスト調製のための手引きをするやうなものではないか！

かくして、この政府案第十四條は、さきの第二・三條の規定と組み合はされるとき、それが最も徹底的な反動的取締規定として活用されるに至るのだ。かゝる悪辣なる取締規定は、おそらく全世界のどの國にも類例のないものであらう。だが、政府の組合法案が取締法として持つ面目は、以上に盡きてゐるものではない。そこには更に次の如きものがある。

(ハ)組合の『規約』に干渉する規定。政府の勞働組合法案には左の如き規定が麗々しく並べられてある。

第十六條　勞働組合ノ規約法令ニ違反シ又ハ公益ヲ害スルトキハ行政官廳ハ其ノ變更ヲ命ズルコトヲ得

政府案は、勞働組合の規約が『法令ニ違反シ』または『公益ヲ害スルトキ』は、それを取り消させることが出來るやうに規定して、行政官廳が正面から堂々と勞働組合の規約の内容にまで干渉することが出來るやうに仕組んでゐるのだ。さきにも指摘したやうに、政府案は、その第一條に於て、勞働組合が政治的目的を持つことを禁止してゐるのであるから、もし勞働組合の設立者が、その規約の中の『目的』といふ條項の中に、従來のやうに、『本組合は賃銀制度の撤廢を期す』とか、『本組合は勞働者階級の解放を目的とす』とか、といつたやうな項目を掲げれば、行政官廳は早速この第十六條を持ち出して來て、『法令に違反』してゐるからといふ理由の下に、それの『變更』を强制して來るに相違ないのである。——その他既成の『法令』に違反してゐる場合は無論のことだ。——もともと、政府案第一條のやうな『法規』は、支配階級が勝手に作り上げやうとしてゐるものにすぎないのであるが、彼等は、どんな勝手な『法令』でも、一旦それを制定してしまふと、それに違反したものには假借なく權力を以て襲ひかゝつて來る。そして彼等は『法令に違反したものを取締るのは當然だ!』と稱して、彼等の事實上の反動的專制支配を一般大衆の前に法的に合理化するのである。この點は、すべてのブルジョア法律に共通してゐるカラクリであるが、特に治安維持法以下のあらゆる『彈壓法令』と共に、彼等がその制定を急いでゐるこの勞働組合法は、その最好適例を示してゐるものである。

更らにまた、最も警戒を要する點は、彼等の用ひてゐる『公益』云々の表現である。一體、勞働組合の規約が『公益』を害

するものであるか否かを、彼等は如何なる基準によつて見定めようといふのであるか？ 考へても見よ！ ××間の利害關係の全く相反してゐる現在の社會で、勞働者が自己の階級的主張の下に行動するとき、それが資本家階級の「公益」を害しないものがあるか？ また資本家が自己の階級的主張を強行する時、それが勞働者階級の「公益」を害しないものがあるか？ 「公益」とはいづれの階級の公益を言ふのであるか？――この點は、あとに出て來る「安寧秩序」云々の場合も同斷だ――かうなると問題は既に明白だ。彼等はこの規定によつて勞働組合の少し骨ッぽい主張に對しては、悉くそれの「變更」を命ずるに至るに相違ないのである。再び繰り返して言ふが、政府が勞働組合法を制定しようとしてゐる目的は、すべての勞働組合をヘナヘナの骨拔き組合にしてしまはうとする點に在るのだ。

（二）勞働組合の「決議」に對する干渉。政府の反動的取締網は他の方面にも張りめぐらされてゐる。それは組合の決議に對する干渉規定である。支配階級は組合の大會や執行機關の決議に對しても、どしどし干渉しようといふのだ。政府案の第十五條にはかう書いてある。

第十五條 勞働組合ノ會議ノ決議法令ニ違反シ又ハ公益ヲ害スルトキハ行政官廳ハ之ヲ取消スコトヲ得

この政府案の反動ぶりを見よ！ もしかゝる法律が制定されるならば、行政官廳――實務に當るのは警察官吏――は、勞働組合のいかなる會議にも堂々と乘り込んで來て、その決議に干渉することになるのである。今までならば、警察官吏が勞働組合の會議に臨監してゐて、「辯士中止！」の連發でその決議を妨害しようとしても、勇敢な鬪士が五六人で代はり合つて關係議案を說明すれば、それは大抵の場合滿場一致で可決される。そして、大抵の場合には、警察官吏も、それ以上には手の出しようがないのである。ところが、この勞働組合法が制定されると、たとへ或る議案が滿場一致で可決採用されても、行政官廳は、「法令に違反」してゐるとか「公益を害する」からとかいつたやうな口實をつけて、その決議の撤回を要求して來るに相違なく、從つてその實行は尙ほ更ら問題にさへならないのである。かうなると、勞働組合は、その綱領

に戰鬪的・政治的スローガンを堂々と掲げることが出來ないばかりでなく、事實上、どんな小さなカンパニアも、一々支配階級の認可を得なければそれを敢行することが出來なくなるのだ。政府の反動的勞働組合法案は、その點についても、實に綿密な取締網を張り廻ぐらしてゐるのである。

(ホ)反動的解散規定。政府の勞働組合法案には、更らに次のやうな規定がある。

第十七條　勞働組合ノ行爲安寧秩序ヲ紊ルトキハ主務大臣ハ勞働組合ノ解散ヲ命スルコトヲ得

だから、政府案による勞働組合法が制定されると、あらゆる鬪爭の場面に於て、常に所謂「安寧秩序」を紊ることを餘儀なくされてゐる戰鬪的左翼勞働組合は、いつでも解散の脅威にさらされる譯である。無論、勞働組合法が制定されなくとも、支配階級は治安警察法の適用によつて勝手に勞働組合を解散させることが出來る。舊勞働組合評議會が、治安警察法で解散されたことは誰れでも知つてゐることだ。だが、彼等が、何故治安警察法の規定以外に、更らに勞働組合法の中へか丶る解散規定を特に設けたかを考へて見よ！　無論それは、勞働組合の解散を至極簡單にやつてのけやうとする目算からである。こ丶にも政府の勞働組合法の反動性が强烈に現はれてゐるではないか！

(ヘ)軍人軍屬に關する除外規定。政府の法案によると、軍人軍屬は勞働組合を組織し又はそれに加入することを得ないことになつてゐる。(政府案の第二十六條)だが、何人も知つてゐる通りに、日本には、陸軍もしくは海軍關係の工場に働いてゐる勞働者が非常に多い。ところが、それらの諸君は、政府の法案が實施されると、多くは軍屬の名にしばられて、勞働組合を組織することも、それに加入することも出來なくなるのだ。更らにまた、既に勞働組合の組合員であつた勞働者が××に編入されると、彼は忽ち勞働者としての團結權を剝奪されることになる。政府があらゆる手段をつくして勞働者の團結を××しようとしてゐることは、この一個の規定の上にすら明白に顯はれてゐるのである。

以上の極めて部分的な究明によつてでさへ、政府の勞働組合法が、その外面を如何にも尤もらしく取り繕つてゐるに拘らず、その實質に於て如何に惡辣な勞働組合取締法であるかは、十分明瞭ではないか！

だが政府は、かゝる反動的法案をすら、『最も進歩的な』『勞働者の利益を擁護するところの』勞働組合法だと稱してゐるのである。で、我々は更らに進んで政府案の欺瞞性を徹底的に暴露する必要がある。

二　『オブラート』に包まれた毒藥――政府案の欺瞞的諸條項

政府案中の立法技術による數々の欺瞞的仕掛けは、思ひ切り反動的な内容を極めて巧妙なる表現によつてカームフラージユしてゐる點に於てその極致に達してゐる。我々が漫然としてそれを讀みすごしてゐると、我々はその内面の反動性を十分に掴むことが出來るどころか、却つてそれが勞働者の團結權や罷業權を鄭重に保護してゐる、相當に進歩的な法案であるかの如き印象を受け勝ちになる。それで、我々の同志の一人は、この政府案を見て、『オブラートに包まれた毒藥だ！』と稱したが、それは確かに圖星を指してゐる。

この點を今少し具體的にいへば、まづ第一に、政府案の第一條は、既に述べた通りに、勞働組合の政治的活動の禁止といふ全案の中心目標を包含してゐるものであるが、しかしその事を明示する言葉をオクビにも出さないで、その代りに『本法ニ於テ勞働組合ト稱スルモノハ勞働條件ノ維持改善ヲ目的トスル勞働者ノ團體又ハ其ノ聯合體ヲイフ。勞働組合ハ前項ニ掲グルモノノ外……』といつたやうな調子で、所謂「列擧主義」式書き方を用ひてゐる。それで十分に事が足りてゐるのだ！　一體ブジルヨア法律の慣習として、或る條文が列擧主義式に書かれてある場合には、そこに列擧されてゐる事柄以外のものは一切問題とされないことになつてゐる。該法案の起草者たちは、そのトリックをこの場合に極めて器用に用ひてゐるのみならず、全案を通じてそれを隨處に撒き散らしてゐる。從つて、政府案の欺瞞性を問題にする場合には、

人は眞ッ先に×××を注意しなければならない。だが同時に、政府案中には政府が特に「進歩的」だといつて誇示してゐる若干の諸條項があるが、無論それらも××の表皮を被つてゐる以外の何物でもない。で、それらも細心に觀察されなければならぬ。

(イ)「屆出主義」の欺瞞。ブル政治家や御用學者等に言はせると、政府の勞働組合法案は「認可主義」を排斥して、「屆出主義」を採用してゐる點が非常に進歩的だ、といふのである。即ち「認可主義」だと勞働組合を作るのに一々政府の認可が必要だが、屆出主義だと、さうした面倒もなしに自由に勞働組合が作れるのだから、勞働者の團結權は、この規定によつて正式に擁護されてゐる譯だと、かういふのである。だが當面の政府案に即して考へれば、屆出主義も、結局同じことになるのである。

さきにも述べたやうに、政府の法案は、勞働組合の政治的活動を禁止し、尚ほその他の樣々の規定によつて勞働組合の諸般の活動を制限してゐる。したがつて形式的に所謂「屆出主義」が採用してあつたところで、勞働者が自分達の欲する樣な勞働組合を自由に作ることが出來るやうになつてゐるわけでは斷じてない。勞働者がこの法律によつて作り得る勞働組合の性質は、最初から極度に限局されてゐる。だから、たとへば、——黄色組合の組織の自由に關してなら別問題だが、——我々が帝國主義戰爭反對や治安維持法撤廢などのために戰はうとする戰鬪的勞働組合を作つて「屆出」をして見たところで、彼等がそれを受理する氣づかひは毫もないのだ。だとすれば、玆で屆出主義が採用されてあつても、事實上、我々の團結權がそれによつて確保されたわけでは絶對になく、却つて、この法律の制定によつて、戰鬪的勞働組合組織の自由は徹底的に××されることになり、その結果は「認可主義」が採用されてあるのと少しもかはりないのだ。

(ロ)「組合ナルガ故ニ……」云々の欺瞞。それからまた、彼等が保護規定だと稱してゐるものの中には、かういふのがある。

第十二條　雇傭者ハ勞働者ガ勞働組合ノ組合員タルノ故ヲ以テ之ヲ解雇スルコトヲ得ズ
雇傭者ハ勞働者ガ勞働組合ニ加入セザルコト又ハ組合ヨリ脫退スルコトヲ雇傭條件ト爲スコトヲ得ズ

政府はこの規定を保護規定の隨一にかぞへ、中小資本家は、『この規定はたゞ組合員だけに不當に利益を與へる片手落ちのものだ』と言つて猛烈に反對してゐる。だが、それは單に表面上に止まるものであつて、實はさういふ結果が現實に發生すべき場合は殆んどないのである。政府當局は自ら、中小資本家のさうした反對に對して、『たとへ組合員といへども、或ひは企業の統制を紊亂するため、或ひは職務を怠るため、或ひはストライキのために馘首することは違法とはならぬ』などと說明してゐる。そこにいはゆる『立法者の意思』が露骨にその尖端を表はしてゐるのが見られる。

それと同時に、右の一點は、次の觀點からも見られなければならぬ。卽ち、現行ブルジョア法律では、資本家は勞働者を解雇しようと思へば、十四日以前に豫告しさへすれば、どんな理由ででも勝手に解雇出來るやうになつてゐるのである。否、それどころか、もし彼等が僅か二週間分の賃銀を拂ふ氣にさへなれば、いつ何時でも何の豫告もなしに、勝手な理由で被傭者を解雇することが出來る。(工場法施行二十七條參照)。從つて彼等はよし、『組合員だから』といふ理由で勞働者を解雇することが出來なくなつたとしても、解雇しなければ他の勝手な理由をつけて容易にさうすることが出來る。だから、こんな規定がいくら麗々しく揭げられてあつたところで、これで、組合の戰鬪的勞働者が解雇されなくなる、といふわけでは絕對にないのだ。殊に、現在のブルジョア法律は、『職工の責に歸すべき事由によつて解雇する』場合には、十四日前に豫告する必要も、二週間分の解雇手當を出す必要もないといふ風に出來上つてゐるのだから、尙ほ更ら萬事が資本家共に都合よく出來てゐる、と言へるのだ。かてゝ加へて××官吏は、恰度資本家共が安んじて『職工の責に歸すべき事由によつて解雇し得』るための口實を作るためかの如く、隨時に戰鬪的勞働者を××したり、拘留したりしてゐるのだ。勞働者が拘留處分でも喰つて工場を缺勤すれば、忽ち『職工の責に歸すべき事由』が出來上る譯である。かくして政府が『組合員

タルガ故ニ解雇スルコトヲ得ズ』といふ規定を振り廻すことによつて、彼等の勞働組合法自體の反動性をごまかさうとしてゐることが如何に欺瞞的であるかゞ、益々明白になつて來るのだ。無論、我が勞農黨の草案の中にも、これに似た規定が設けられてある。(勞農黨案、第八條)。だが我々がそれを設けた主眼點は、もしさうした規定を設けないならば、資本家は、『組合員』だからとか『組合の役員だから』とか、いふやうな理由をわざ〱持ち出して、勞働組合の擴大强化を妨害しようとするに違ひないといふ我々の見透しから、これを阻止するために、さうした規定を設けたにすぎないのである。かゝる規定によつて、組合員が一切解雇を免れるなどといふことは夢にも考へられないのである。

(ハ)勞働組合の賠償の免責に關する欺瞞。政府の勞働組合法案には、今一つ、大きな欺瞞的規定がある。それは第十三條の規定だ。

第十三條　勞働組合ノ役員又ハ組合員ガ勞働條件ノ維持又ハ改善ニ關シ勸誘其ノ他ノ方法ニ依リ他人ヲシテ勞務ヲ停廢セシメ又ハ雇傭契約ヲ解除セシメ若ハ之ヲ締結セザラシメタルニ因リ雇傭者ニ生ゼシメタル損害ニ付テハ勞働組合、其ノ役員及組合員ハ賠償ノ責ニ任セズ

この條文は、ストライキの場合、勞働組合が資本家に損害を與へても、勞働組合、その役員、組合員は、賠償の責任を負ふ必要がないといふことを規定してゐるのだが、この政府案の條文を綿密に讀み返すと、そこにも、恐るべき陷穽が伏せられてある。そこには『勸誘ソノ他ノ方法ニヨリ云々』の文句の上に、『勞働條件ノ維持又ハ改善ニ關シ』といふ文句が嚴重に負ひ冠ぶされてゐるのだ、だから、『勞働條件ノ維持改善』以外のストライキの場合には、――たとへば、同情ストライキや、政治的ストライキを斷行せしめた場合には、――それによつて資本家に與へた『損害』は、勞働組合が『賠償ノ責』を負はされることになるのだ。何といふ巧みな××だ！　諸君は一切の政治的ストライキを××しようとするこの規定を『保護』規定だと思ふか？　それとも『威嚇』規定だと思ふか？　ブルジョア政府の『保護』などと稱するのは、大凡そ、この××のものだ。

結語――勞働者のための勞働組合法獲得の大衆鬪爭へ！

上來の究明を通じて我々が見て來た通りに、濱口內閣の勞働組合取締法案は、當面の客觀的狀勢との聯關に於て金融資本家――帝國主義ブルジョアジーの武器として偉效を××するやうに仕組まれてゐるものである。この觀角からのみ我々は、該法案が一方に於て勞働者保護の名を借る峻酷なる取締法としての本質を完全に具備してゐながら、他方、それにも拘らず尙ほ或る種の勞働組合に對しては相當程度に有利な條件を與へようとする意を示してゐる、といふことの祕密を理解することが出來るのである。卽ちそれが飽くまで峻酷に取締らうとしてゐるものは、あらゆる鬪爭を、「帝國主義戰爭反對」「治安維持法反對」「勞働者農民の政治的自由獲得」等々の政治鬪爭にまで高めることによつて帝國主義ブルジョアジーの政治權力に向つて徹底的に抗爭しようとする戰鬪的左翼組合である。これに反して、それが手厚く保護しようとしてゐるものは、社會民主主義幹部諸君の指導の下に帝國主義ブルジョアジーの政策遂行に協調しようとする妥協的右翼勞働組合である。この意味に於て濱口內閣勞働組合法案は、現在支配階級が熱望して已まない無產階級戰線の分裂の事業までを一ト刷毛に完成しようとする××を含んでゐるものである。

金融資本家は今日すでにかゝる冒險に乘り出すことを躊躇しないまでに、自己の力を意識してゐる。だが一般の產業資本家は、殊に當面の大不況時代を前にして、政府がその制定を急いでゐるやうな勞働組合法の下に一部の妥協的右翼勞働組合が或る程度に保護を受けるであらうことの豫想にすら堪へ得ないのである。彼等は現在、自己の上に强力な統制の手を下してゐる金融資本家の上からの壓迫と、日常利益の主張に卽して自己に挑戰して來る勞働者大衆の下からの强襲との間に挾み擊ちに會つて、さし詰め當惑に暮れてゐる。そして彼等はたゞ、金融資本家の側から自己の頭上に押し附けられる重荷を直接に勞働者大衆の肩上に轉嫁する外に、自己の現地位を××して行く途がないことを知つてゐるのだ。それ故

に彼等は、如何なる妥協的な黄色組合に對してすらも、保護を要求するよりは寧ろ彈壓を要求しつゝ、喧々囂々として政府の勞働組合法案に異議を唱へてゐるのである。だが、金融資本家の指揮のまゝに動く政府は、彼等のさうした反對をも無遠慮に突き退けて、少くとも何等原則上の變更を加へることなしに、該法案を遮二無二押し通すことに努力しつゝあるのだ。

産業資本家は、金融資本家のヘゲモニーの下に、共同の階級的利益に均霑してこそゐるが、併し緊密なる金融統制が事實上尚ほその完成の道程の上にあるにすぎない今日にあつては、彼等産業資本家は、部分的には尙ほ多くの點に於て、金融資本家に對して獨自の特殊利益を主張しなければならない地位にある。そしてそれが、兩者の間に於ける或る種の對立の端を孕んでゐるのである。最近に於ける所謂株式配當の源泉課税の問題の上にもそれが明かに見られるが、特に勞働組合法の問題を通じてそれが最も顯著に見られるのである。

この事實は、しかし差し當り何を我々に敎へるか？　我ゝはそれを通じて、今日に於て金融資本の支配は何等の內的矛盾なしに完成され得るものではないといふことの一新例を見た。金融資本が全被壓迫大衆の生活を××にすることなくしては最早やその支配的地位を維持することが出來なくなつて來てゐるといふことが、さうした內的矛盾の一つである通りに、産業資本との間の部分的對立の生長といふこともまた、より、少く根本的でこそあれ、同じくさうした內的矛盾の他の一つである。

更らにまた我々は、金融資本家と産業資本家との間にさうした對立が現實に存してゐればこそ、社會民主主義政黨および組合幹部諸君が、一方、反資本主義的主張を高々と唱へながらも、他方、帝國主義ブルジョアジーの武器としての勞働組合法案をまで支持するやうな態度を取り得るのだといふ敎訓をも、餘りにも泌々と學び取つた。社民・大衆兩黨の幹部諸君がそれ〴〵に作成した勞働組合法案を見よ！　その枝葉末節に亙る部分に就いては兎も角、その最重要部分に於ては、

どこに政府案と根本的に本質を異にしたものが見られ得るか？　また、右の兩黨幹部諸君が勞働組合法案に關聯して出した共同聲明書を讀め！　成る程それは處々に政府案の『反動的缺陷』を言ひ立てたり、政府案の或る部分を『不備であり不滿とする』など、批評したりなどしてはゐるが、しかし政府案の反動性や欺瞞性を徹底的に暴露し指摘することをしないで、寧ろ主力をそれに對する資本家團體の反對への糺彈に集中してゐるではないか！　最近大衆・全民・社民の諸黨および統一協議會の幹部諸君は相集つて組合法獲得無產黨共同鬪爭委員會を組織したが、その際彼等は、わが勞農黨がそれへの參加の條件として提ち出した『政府の勞働組合法案絕對反對！』のスローガンの採用の件を斷乎として峻拒したではないか！　更らに昨今に及んでは、それらの幹部諸君の多くは、彼等の熱望する勞働組合法の制定を促進するために、政府を鞭撻する『運動を層一層熱心に繼續してゐるではないか！　さうした彼等の行動をしも無產階級に對する許すべからざる反逆と叫ぶことが出來なければ、何が一體それなのだ！　我々は確信する。現在彼等の指導下にある各黨大衆諸君の階級的意識は、彼等のさうした裏切り的態度を斷乎として否定する決意を、やがて各黨大衆諸君みづからの行動の上に具體的に表示するであらうことを。

今や我々は、當面の勞働組合法案の問題を契機として、帝國主義ブルジョアジーの協同者としての社會民主主義幹部諸君のあるがまゝの姿を、未だ曾て見なかつたほど明確に見究めることが出來た。そこでわが勞農黨は、それらの幹部諸君の非階級的態度を一蹴して、全無產大衆と固く提携して全力的に濱口內閣の反動的勞働組合法案に立ち向つて、それが徹底的粉碎を誓つて蹶起してゐるのである。

帝國主義ブルジョアジーの武器への我々の批判は、必然に我々自身の批判の武器を生んだ。それは、わが勞農黨獨自の勞働組合法案である。我々は今茲でその內容を巨細に說明することは出來ないが、それは一言にしていへば、政府案の否

定から出發して、當面の客觀的狀勢下に於て帝國主義ブルジョアジーと決死的に鬪爭しようと決意してゐる全無產大衆の其の階級的要求を具體化することを期して作り上げられたものである。それ故にそれは、何よりも殊に勞働組合の政治的活動の自由を强調してゐる。更らにそれに、勞働組合の言論・集合・結社の自由を確得しようとしてゐる。殊に爭議に際しての無產階級抑壓諸法令の發動を阻止するための反對規定を設けて、勞働組合の自衞權の確立の主張にまで及んでゐる。かくてそれは、勞働組合の存立權およびその政治的自由、ならびに團結權・罷業權・その他一切の權利・利益を擁護し、賠償免責の規定をも現實的・效果的なものにしようとする主張にまで及んでゐる。等々々。我々はあくまで確信する、わが勞農黨のこの法案こそは、階級意識にめざめた全無產大衆の眞の要求をまざ〴〵と反映してゐる現在唯一の勞働組合法案であり、帝國主義ブルジョアジーの××に對する勞働者階級の武器としての實質を具備してゐるものであることを。我々は今や、我々のこの階級的武器を提げて、まつしぐらに敵陣に肉薄しようとするに當つて、全無產階級に向つて次の如く叫びかける。——

勞働者のための勞働組合法獲得の大衆鬪爭へ!

濱口內閣の反動的勞働組合法の粉碎!

階級的勞働組合法獲得鬪爭を通じて眞の階級的戰線統一へ!

資本主義の『一般的危機』と『恐慌』の變化

石濱知行

一

六月二十一日のニユー・ヨーク電報は、つぎのごとき事實を報導してゐる。

『本日のニユー・ヨーク株式市場は、ステイール株を中心として思惑賣り殺到して値段はいちじるしく低落、賣り方はますます增加した。同時に、コットン株、小麥株も低落、小麥株は十五年來の新安値に達した。』

この電報が我々にしめすアメリカ最近の經濟事情は、千九百二十九年末にアメリカを襲つた大規模の取引所恐慌につゞく經濟恐慌の嵐が、大統領フーヴァーの採つた諸政策、ことに銀行割引率の低下自由市場に對する引受賣買の聯邦準備銀行政策等の所謂景氣恢復の苦肉の策にもかゝわらず、また資本家の機關新聞たるマヌファクチューア・レコード紙が取引所恐慌後の小康をもつて「いまや太陽は再びアメリカのうへにあがつた」と揚言したるにもかゝわらず、いまだ決して終熄せずして依然として繼續し、かへつてさらにますます發展の徴あることを事實をもつて示してゐる。この恐慌の暗雲は、先づアメリカに忽然として現出したのではない。我々は、その暗雲の徂來を、アメリカ恐慌以前に、すでに、南アメリカに於いて、發見してゐる。

南アメリカは、中部アメリカとともに、アメリカ合衆國帝國主義の覇翼のもとにあつた。合衆國の金融資本は、その地のあらゆる利權に喰ひ込み、それを通じてその地の諸國の政治をも自由に操縱してゐた。その南アメリカに於いては、千九百二十九年の初期に、すでに部分的な恐慌が發生し、その地の特產物

たる珈琲、香料、ゴム、麥、木棉の輸出價格はいちじるしく低下し、從つてそれら諸國の經濟狀態を惡化せしめた。アルゼンチンおよびブラジルに於いては金本位制の存立を脅かし、金の輸出制限の必要にせまられ、ために爲替相場は慘落した。か丶る南アメリカ諸國の部分的恐慌は、その必然の結果として、その地に資本ならびに商品を輸出してゐる大資本主義諸國の經濟的活動を窄束せしめたのである。

　アメリカの取引所恐慌は、一般の人達には突如として青天の霹靂のごとく勃發した。しかし、か丶る傾向は、アメリカの經濟の趨向に對して銳き觀察を怠らないものにとつては、決してそれが、『偶然なる突發事件』でもなければ、豫期せざる變動でもなかつたのである。千九百二十五年ごろからアメリカの生産指數は上昇の傾向にあるにもか丶はらず（千九百二十五年──廿九年は一般にアメリカ經濟の繁榮期と思惟されてゐた）、消費力の基礎をなす賃銀指數は漸次下向の形勢にあつたのである。そして生産力と消費力との差は鋏形狀を呈し、兩者の開きは漸次擴大しつつあつたのである。これは、恐慌の原因である生産と消費の不釣合の增加を物語つてゐる。

　市民的經濟學者たるロージャース・バブソンの如きも早くからこの恐慌來の形勢を察知して、財界への警告を怠らなかつたが、政府、聯邦準備銀行等のみならず、社會の木鐸をもつて自ら任ずる新聞・雜誌等までが、彼をもつて不吉なる豫言をなすもの、財界攪亂を患するものとして非難した。

　十月の中旬に至つてアメリカの取引所恐慌は果然、事實となつて爆發した。この恐慌は、コンマーシャル・エンド・フイナンシアル・クロニク紙が、正直に自白してゐるやうに、『こ丶數百年のうちの最大の取引所カタストロフイーで、アメリカ合衆國の歷史のうちで疑ひもなく最惡のものであつた』のである。そしてその結果は、『暴落後株價はや丶持ち直したが、暴落によつてすべてを失つた人達はそれによつて何ものをも得ることが出來なかつた。株價の恢復によつて利益を得るものは、大金を所有し從來株價の低落によつてかへつて利益を得てゐたごく小數の人達である。大多數は陸上にあげられた魚のごとくあへぎつつ家計を緊縮せざるを得なかつた。このことは、購買力の遞減となつて、生産部門、商業部門に大なる影響を及ぼすことは、まつたく、疑がない』

　すなはち、このことは、生産力と購買力との鋏形の離差を更に大ならしめる。

　取引所恐慌は如何なる性質を有するか。

『取引所恐慌は、貨幣市場において、また信用關係について、生

する變化によつて直接惹起されるのである。この恐慌の襲來は直接にはたゞ利子率の高さ如何にかゝつてゐるのみであるから、從つてそれは一般商工業恐慌の襲來よりもすこし以前にすでに起り得る。がそれは一般商工業恐慌の一の徴候であり、一の前兆であるにすぎない、けだし貨幣市場に於ける變動は、實に恐慌にみちびくべき生產上の變動を條件とするからである。』(ヒルフアーディング、金融資本論)

以上の事から、アメリカの取引所恐慌はそれだけで完了するものにあらずして、質・量ともに、より大なる規模の恐慌を繼起させるべき多くの必然性を有するものたる事、が明瞭であらう。

アメリカに恐慌が爆發するや、フーヴァーを首班とする政府、聯邦銀行等は、それに對する對策に腐心した。千九百三十年の一月、二月に入るとともに、アメリカの經濟界はやゝすこしく安定化したかに見えた。いま、千九百二十三年から二十五年までの總工業部門の生產平均指數を一〇〇とするときは、千九百二十九年の一月の總工業生產部門生產指數は一一七、同年二月は一一七、取引所恐慌後の十二月は九九、千九百三十年初頭の一月は一〇三、二月は一〇五である。これによつて見れば、一月、二月は恐慌直後の十二月よりはやゝ良好に向つたと推せられるが、之を昨年の同月に比較するときは、大なる衰退を見せてゐる。

また、これを勞働力の提供者たる勞働者の勞働市場よりの放逐について見るも、千九百三十年に入つて失業者はますます增加してゐる。

これらの徴候によつて、取引所恐慌以後に於いても、恐慌は繼續してゐることは否定し得ない。フーヴァーは、ヤング以下の大資本家を集めた委員會に於いて、アメリカの經濟は最早常態に復したと言つてゐるが、事實はそのしからざるを明白に語つてゐる。

六月中旬に至つて、上下兩院は、關稅改正案を通過せしめ、その案は十八日フーヴァー大統領の裁下によつて實施せられんとしてゐる。この改正案は、千九百二十八年大統領選擧に際して共和黨が宣言した約束を實行せんとするもので、その宣言は、(一)從來保護せられざりし產業を保護する爲めの稅率、課稅物件の改正、(二)一體の稅率をより高くせしむること、(三)農業保護のための農業關稅をも包含せしむること等を期してゐる。

近來の關稅の性質は、育成關稅より獨占體保護のためのカルテル保護關稅へと變化した。しかして、それは資本主義が帝國主義の段階にすゝむとともに、ますますかゝる傾向が顯著である。帝國主義段階に於ける高率なる關稅は何故、獨占體にとつ

て有利であるか。』外國競爭の排除がカルテルの形成をいちじるしく促すものなることは、疑がない。その直接の理由としては競爭者の減少によつて彼等の團結が容易ならしめらるることである。間接の理由としては、保護關税が、その實際の構成に於いても、またその起源に於いても、通常これらの産業にとつては輸出向き完成品産業に取つてよりもより有利なとである。かかる事情こそは實に、生産手段の生産にあたる諸産業の發展を助成し、これら産業の技術的發達に必要なる一切の資本を融通し、これら産業を高級なる有機的構成へ進歩せしめ、以てこれら産業の集中および集積を速め、かくてこれら産業のカルテル化の前提條件をつくらざるを得なかつたのである。』（ヒルフアーデング金融資本論）

かくのごとき理由によつてカルテルの形成および強化のための保護の性質を有するに至つた關税は、アメリカに於いては千八百九十六年のディングリー關税の高率五七パーセントに於いてその端緒を見出し得ると思はれるが、千九百二十二年共和黨によつて實施せられたフオードネイ・マッカンバー關税のより高い保護關税率の出現によつて、もつとも明確となつた。

この改正關税案は第一に獨占體を保護する性質を持つてゐるしかし、『これらの保護關税それ自身が、世界市場の制覇を決定すべき最後の一般的産業戰爭への戰鬪準備以外の何ものでもない。舊來の諸恐慌の反覆に對抗する諸要素（カルテル、トラスト、關税等を指示する）は、より暴力的な未來の恐慌への萠芽をそれ自身のうちに包藏してゐるか。』（エンゲルス、資本論第三卷第二部の補註）だから、フーヴァーが關税改正案の實施近きを示しても、いまだ經濟界の混亂状態が整理し得られない。その證據として、本文の劈頭にかゝげた六月廿一日最近の株式大低落がある。

また、改正關税案は農業保護の性質を有するにもかゝはらず、農業恐慌は依然として終熄しない。

アメリカの關税改正はまた當然に、他の諸國の報復關税を呼びおこす。すでに、六月二十三日のニュー・ヨーク電報によれば、カナダ、スペイン、ベルギー等の諸國は、アメリカの關税改正に對して更に高率の關税率を施行すべき用意と決意あることを示してゐる。ドイツも亦しかり。

關税戰爭の休止が、あたかも軍備縮小のごとく各國によつて聲高く唱へられてはゐるが、そしてジュネーヴではそのために關税戰休止會議が開催せられたにもかゝはらず、有力なるアメリカはその會議に參加しないで、會議は、結局有耶無耶の裡に葬られてゐる。

かゝる關稅戰爭は、金融資本の欲求によつて築き上げられた高い關稅壁によつて惹きおこされたものであるが、その結果は他國の關稅壁をもより高からしめて商品輸出の可能を限局せしめ利潤を限定せしめる。從つて自國だけ稅率を高めても結局はその國の恐慌的狀態にある産業を救濟する可能性はすこぶるすくないと言はなければならない。

要するに、國内政策によつて金融資本に操縱さるる獨占體の形成・發展を促進しても、また關稅率の增加、關稅保護種目の增加が行つても、襲ひきたる恐慌のまへには、崩れむとする大厦を支へる一樹の役目をなすにすぎない。

アメリカの取引所恐慌は、それゆえに、單にそれだけのもの、偶發的な事件としてのみ把握せらるべきものにあらずして、經濟的恐慌の序幕であり、千九百二十七年以來、好景氣、永久の繁榮、例外的の輝かしき存在等、等のうるはしく華やかなりし幻影のかげに潛在してゐたところの、增加する生産可能性と減退し行く一般大衆の消費力との、資本主義的生産のうちに内在する根本的矛盾を、暴力的に爆發せしめた所のものである。

今日の、世界の各部分は、全體として一大機構を結成し、あるひは資本を通じ、あるひは商品を通じ、あるひは原料を通じ、あるひはそれらのコンビネーションを通じて、緊密なる結合をなしてゐる。しかして、アメリカは、資本主義の尖端國として、それらの各地方の上に君臨してゐる。世界の金融中心地はロンバート・ストリートを去つて、ウォール・ストリートに移つてゐる。昨年のパリー會議およびハーグ會議に於いてアメリカが三億ダラーの國際賠償銀行を設置せんとしたこころみも、金融の覇權を全く自己の手中に掌握せんとする野心より出でたものである。

世界經濟のうちに、かゝる地位を占むるアメリカの經濟恐慌は、當然世界の他の諸國の上にも大なる影響を及ぼさざるを得ない。

アメリカの恐慌と前後して、すでにヨーロッパ内部にも恐慌が發生してゐる。その一はポーランド、チエッコ・スロヴアキア、ハンガリー、オーストリア、ルーマニア等の群小諸國を一團とする東歐諸國がある。これらの諸國は、アメリカ恐慌の影響をうけずして、それより以前よりすでに、恐慌狀態に入つてゐる。一例としてポーランドの經濟恐慌を一瞥する。

ポーランドは元來經濟的にすこぶる惠まれざる國家である。從つてそこに恐慌が勃發すると、その強度、範圍等は他の秀れたる資本主義諸國の場合とは異つて、數等異常なる發展をしめす。ポーランド今次の恐慌は、全産業部門に及んでゐる。纖維工

業に於いては、完全なる停滯が行はれ、シャイブレル、グローマン、ボツナンスキ、ウイツドソー等の各大工場は一週間のうち二日乃至三日しか作業をしない。國內大衆の一般的窮乏のために、國內の販賣はとどまり、ロッツエル工場のごときはその生產品が全部滯貨として倉庫內に堆積されてゐる。外國への賣出しも激減してゐる。建築工業も將來の豫測さへつき難いほどの不景氣のドン底にある。製鐵および製鋼業も不況で、昨年の十月に比して十一月には二十五パーセントの註文の激減を來し、從つて失業者は激增してゐる。チエンストチヨウ、バンコワ、ビスマルク鑛山のごときは作業を制限するか、あるひは、作業を中止してゐる。金屬工業も生產を制限し、一週間の作業を完全には行はない。農業も全く恐慌に襲はれてゐる。農業恐慌は農業に肥料を供給する化學工業の上に大影響をあたへ、有名なチヨズーの工場のごときは生產のうへに大制限を行つてゐる。採炭業のみは、スカンヂナヴィアよりの需要と內國よりの褐炭の需要によつて、昨年十一月までは、生產の增加を見せたが、それ以後は、內國工業の作業短縮または中止のために、各種石炭に對する需要が激減し、それにつれて作業を短縮し、一週間のうち休業する日が多くなり、勞働者はかゝる休業を皮肉つて、『小祭日』と呼んでゐる。採油業にも短縮が行はれてゐる。その他、木材工業、皮革工業等の產業部門にも恐慌の相が現出してゐる。かくして、ポーランドに於ける不景氣は、千九百三十年に至つて、ますます、强度と範圍とを擴大するであらうと推測されてゐる。失業者數も、三十年の三月に四十萬に及んでゐる。

ポーランド以外の中歐諸國も、多少の相違を別として、全く同じく恐慌への路を步んでゐる。チエッコ・スロヴァキアでは、千九百二十九年末には前年度と比較して約八十億クローネの輸出激減を示してゐる。これら各國の恐慌は、所謂部分的の恐慌であつて、アメリカの大恐慌以前に發生の徵候歷然たりしものであつた。一度びアメリカ恐慌の影響がそれらの諸國におよぶ時には、恐慌はさらに激烈さを加へるであらう。

東歐諸國以外に、ヨーロッパでは、すでにドイツに恐慌が發展しつゝある。

ドイツは、ヨーロッパ大戰で、經濟的に最も大なる創痍をかうむつたが、その後アメリカその他の戰勝諸國の庇護をうけて、漸次經濟再興の途に上り、產業の合理化、獨占の强行等の經濟政策によつて、昨年には、戰前の生產標準にまで到達することが出來るに至つた。もつとも、その間に、戰後の好景氣の反動としての恐慌が、千九百二十二年——二十三年におこり、また所謂相對的安定の時期にも、千九百二十五年から二十六年にかけ

て合理化の結果としての恐慌が爆發してゐる。昨年末近くより今日まで繼續せるドイツの恐慌は戰後第三回目に勃發せるものである。この第三回の今おこりつつある恐慌は、千九百二十三年のそれより更に強度であり、後者が尙は多分にイラシテイシテイーを有し將來への望ある展望のもとに爆發したが、今次のは、それらの希望もなく、前途まつたく暗憺たるものがある。

ドイツの恐慌は、昨年末のアメリカ恐慌以前から存在してゐる。それは、賠償問題と產業合理化の結果としての生產能力の發展と、それに反比例する大衆の消費力減退の結果との間の矛盾から發生したものである。生產能力は增加したにもかゝわらず、それを全部的に利用し得ないのだ。その結果、經營の破產、操業の短縮が相次いでゐる。千九百二十九年には約一萬件の破產が生じ、纖維工業および被服工業では、昨年十二月に二十三パーセント、金屬工業では一二パーセントの生產制限を行つてゐる。三十年に入つて後も重工業は生產を縮少し、その他の諸產業部門にも恐慌の徵候が及んでゐる。ドイツの資本主義は、販賣の限點に達し、その價値實現の終局にまで至つてゐる。一月末には、ドイツの經濟狀勢の特質について、景氣研究所でさへもが、つぎのごとき悲鳴を擧げてゐる。（ザアルガ、經濟及經濟政策、千九百三十年度第一輯による）

「經濟情勢は、異常に多數の失業によつて特徵づけられてゐる。この冬の溫靜なる天氣にもかゝはらず、最近の月に於ける主要保護手當をうけたものは、いつもの同期より、はるかに增加した。工業上の生產は大に減退した。建築業は異常に制限された。農業の困窮せる狀態はさらに深化した。景氣に依存する商品に於ける賣上は輕減した。物價は逆に低落した。世界經濟の衰弱とともに、外國市場に於ける競爭は增加した。」

ドイツの景氣研究所が、現時のドイツ恐慌の一特徵であると言つてゐる失業の狀態を見ると、フリッツ・ヘッケルトは、次のごとき概數を示してゐる。（ドイツに於ける失業、D. R. G. I. Berlin 1930）

一九二七年六月	五〇二、〇〇〇
一九二八年六月	七一四、〇〇〇
一九二九年六月	一、一二三、〇〇〇
一九三〇年一月	三、五〇〇、〇〇〇

また、同研究所の發表中には、今次のドイツ恐慌には、農業恐慌が合流して農村の貧窮化更に甚しきを加へたことを指摘してゐる。ドイツの農業は、牧畜をのぞいた、すべてのものが恐慌中にある。ことに東部ドイツの大土地所有地の上で裸麥を耕作せる農民の經濟に於いて甚しい。裸麥の需要は激減し、外國への輸出も制限された。

東歐諸國、およびドイツ以外のヨーロッパ諸國にも晩かれ早かれ恐慌が進行しつゝある。

フランスは、今日までの所生産指數も衰へず、大資本主義諸國のうちでは、最も恐慌から遠ざかつてゐるがごとくである。しかし、仔細に觀察する時には、そこには、最近、經濟狀態が漸次惡化する傾向が潜在せる事が察知せられる。金屬工業、織維工業、自動車工業、等の重大産業部門に於いてはその生産指數が前年度よりも低下し、加うるに、農業生産指數も低下し、他の諸國と同樣に農業生産物の價格が一年以内に三分の一崩落して、農業恐慌の徴候歴然たるものがある。

かくして、世界を概觀する時には、世界の各部分はいまや恐慌裡にある。しかも、アメリカの大恐慌はいまだそれら諸國の上に明白なる影響を及ぼしてゐない。その影響がやがて全世界に及ぶときには、大規模の世界的範圍の恐慌が豫測せられる。『千九百二十九年末アメリカに爆發した恐慌は、資本主義の恒常的周期的恐慌に個有なる特徴を有つてゐるとともに、その根柢に於いては、アメリカ資本主義の内部的發展の歸結であると同時に、一般的な世界恐慌の歸結でもあるのだ。』

二

かゝる、現在世界を脅威せる世界經濟恐慌は、戰後資本主義の如何なる段階に於いて爆發してゐるのであるか。

ヨーロッパ大戰は、二十世紀に至つて急激に發展し來つたドイツ帝國主義に對する、從來の帝國主義諸國の闘爭であつた。この所謂世界大戰は、從來平和的に發展し來つた資本主義組織内部に醱酵しつゝあつた矛盾の必然的の爆發であつた。

世界大戰は、表面上ドイツの敗北をもつて終局したかに見えたが、それは資本主義組織そのものに對して致命的な危機の崩芽をのこした。

ロシアに於ける反資本主義的な勞農社會主義聯邦――ロシアに於ける資本主義の崩壞――の成立とその他のヨーロッパ諸國の經濟的・社會的の混亂に伴なふ資本主義の深刻なる動搖とがすなはちそれである。しかして、それ以來、資本主義の反對要素としてのサヴエート聯邦は、多くの困難と妨害とにもかゝはらず、また、經濟封鎖・デマゴギーにかゝはらず確固たる歩みをつゞけ、その他の諸國の經濟的・社會的混亂の實質は、それを裝ふいくたの變り行く外面相にもかゝはらず、ますます深刻化への、傾向を辿りつゝある。かゝる意味から、ヨーロッパ大戰は、大戰以前の平和的な、上昇的な、均衡を得た資本主義の代りに、資本主義の『一般的危機』をもたらしたと言はれてゐる。

ヨーロッパ戰後の資本主義は、この「一般的危機」のうちにあるのである。

大戰直後のヨーロッパ諸國は、全くの經濟的・社會的混亂裡に反撥した。經濟的には生產手段の破壞、勞働力の激減、信用制度の混亂、インフレーション、千九百二十年の世界恐慌——戰時に擴大された生產機關を平和的・恒常的生產に轉換する作用を有した恐慌——、對外爲替の暴落、大衆の窮乏。社會的にはロシアの革命、フィンランドの革命、日本の米騷動、オーストリアおよびドイツの革命、ハンガリーの革命、バイエルンの革命、イタリーの工場占領、ワルシャウの變亂、ドイツの三月革命、ブルガリアの騷動等の勞働の攻勢と資本の退却。

かゝる經濟的・社會的混亂の最中に、千九百二十一年三月、日本に始まり、アメリカ合衆國を襲ひ、イギリス、フランス、ドイツにも及んだヨーロッパ戰後第一回目の世界恐慌が勃發した。

この突如たる情勢は、多くの人達をして、資本主義の運命についての認識に多くの錯誤をなさしめた。すなはち、タールハイメル、フリースランド、フロエーリッヒ等は、この恐慌をもつて、資本主義最後の恐慌なりとした。

しかし、社會的・經濟的情勢はすでに變化しつゝあつた。經濟的には、資本はインフレーションを巧に利用して勞働の攻勢を殺ぎ、利潤獲得の可能を再び獲得し、アメリカ、イギリスの資本がヨーロッパ經濟界に入つて、混亂救濟に働き、本位貨幣を安定せしめ、信用制度の破壞を救ふて資本の利用を可能ならしめた。また、ドーズ案、ヤング案等の賠償問題に關する外交政策は、ドイツを窮乏より救助してもつてデリケートな政治的・經濟的世界機構よりのドイツの脫落が發生せしむるところの世界的紛亂を未然に防禦した。社會的には、八時間勞働日の採用社會保險、失業手當、恐慌手當、工場委員會制度等の社會化政策の施行、普通選擧權その他の政治的自由の賦與等による勞働の攻勢の去勢。

かくして經濟的には、積極的に資本の力をつよめ、社會的には勞働者に制限的な・ある一定の段階を超えざる程度の自由をあたへることによつて××的に昂揚してゐた勞働の攻勢を殺ぎ間接的に、資本の陣營を强固ならしめた。

これら二つの條件、經濟的條件と社會的條件は、戰後の資本主義の一般的危機の最初の鋭化から、資本主義を相對的安定の段階にまでおちつかせた。相對的に安定しはじめた資本主義は、や、恢復した基礎の上に、獨占の强行、產業の合理化を行つて、生產可能力を復興せしめんとした。事實、大戰前の生產標準にまで追ひつくことを得た。

だが、相對的安定期にも、資本主義それ自體の組織に内在する諸矛盾は決して解消せずして、潛在的に擴大しつゝあつた。その諸矛盾の尖鋭化が安定期の終末を劃して、戰後の資本主義は、安定期につぐ新らしき段階に入つた。これ現在である。

この現在の段階に於いて、『永久の繁榮』をうたはれた、資本主義の唯一の金城鐵壁たりしアメリカ合衆國に、大恐慌がおこり、それが世界的の恐慌にまで發展せんとしてゐるのである。

そして、この新らしき段階に於ける恐慌は、從來の恐慌とは異なれる特質をもつて現はれたのだ。その特質とは然らば何か。

三

我々は先づ、資本主義の一般的危機と恐慌との峻別をみとめなければならぬ。ヨーロッパ大戰によつて、平和的な權衡を得てゐた資本主義内部に潛在的に擴大しつゝありし矛盾は明白に強力的に爆裂し、資本主義制度に致命的な創痍を與へた。それ以後に於いても大戰によつていためつけられた制度より發生する矛盾はつねに資本主義の存續、發展に對して大なる脅威をあたへ資本主義の危機を急足に促進せしめつゝある。これ戰後の資本主義を資本主義の一般的危機と呼ぶ所以で、この一般的危機はヨーロッパ大戰以來繼續して今日の段階に至つてますます尖鋭化しつゝある。

恐慌はこの一般的危機とは全く別である。恐慌は、すぐあとにも述べるがごとく、資本主義の發生當時よりその終焉にいたるまで、つねに存在するもので、周期性・循環性を有するものである。だから、一般的危機の期間内にも恐慌は發生して、その特徴たる周期性・循環性によつて生滅する。現に、千九百二十年の世界恐慌がそれであり、その他例へば、千九百二十二年――二十三年のドイツ恐慌のごとき部分恐慌がそれである。かゝる一般的危機期間内の恐慌は、その一般的危機そのものをさらに一層尖鋭化せしめる。

たゞ、一般的危機段階に入れる資本主義に於ける恐慌は、好景氣・繁榮の時期の短くして沈滯・不況の時期の長いといふ特質よりして、恐慌が慢性的・永續的の性質を有するがごとき錯誤せる認識をおこさしむる。かゝる誤れる認識から、一般的危機と恐慌とを同一視せしめ、ヨーロッパ大戰後恐慌は恒常的に存續し、不景氣は慢性的となつたと誤つて思惟せしむる。

しかし、かゝる認識・思惟は、恐慌の特質を無視せる謬論である。マルクスは、その著剩餘價値學說についての諸理論の第二卷第二部のうちの『資本の蓄積と恐慌』と題する章の脚註に於いて次のごとく明言してゐる。

「ここで區別しなければならぬ。スミスが利潤率の場合を資本の夥多、資本の蓄積から說明するなら、その時は永久の作用を問題とするので、これは誤りである。永久の恐慌は存在しない」

だから、一般的危機の內部にも、またそれの尖鋭化した現段階にも、また、周期的な、循環的な、恐慌が存在し得る。しかし、これらの恐慌は、ヨーロッパ大戰以前と以後に於いては、恐慌の性質・範圍等に於いて、かなりな變化が行はれて、現段階の恐慌には、戰前のそれと異なる特質が明白に顯現してゐる。

先づ、ヨーロッパ大戰以前の恒常的恐慌の特質について若干の論述をこころみる。

資本主義以前には恐慌は存在しない。勿論經濟界の混亂は發生してゐるが、その混亂は恐慌と次の重要なる諸點に於いて異なる。すなはち、かゝる混亂は、恐慌のごとく經濟法則に從つて一定の規律を有する周期性・循環性を有つて爆發するものでなくして、不作、旱魃、戰爭、內亂、疫病の流行のごとき、經濟的見地より見れば偶然的な、偶發的なカタストロフィーのみより生ずる。また、恐慌は、後にも述べるがごとく消費力に對する生產の過剩から發生するが、資本主義以前の經濟的混亂は寧ろ反對に、消費力に對する生產の不足から發生するのである。

恐慌の可能性は、貨幣が商品の流通に際して、媒介をなすこと、商品生產が廣く一般化・普遍化すること、商品生產が資本をして一定の利潤率を生ませ資本を擴大せしむる條件のもとに無規律的に行はるること、等々によつてはじめて與へられる。かるがゆえに、資本主義的經濟制度のもとに於いてのみ可能であり、その制度の發展に作つて、ますます可能性は必然性にまで轉化する。

資本主義的生產は、利潤のより多き獲得を目的とする。そのことは、各個の、互に無規律的に、無統制的に競爭する資本家をして商品生產費の低下——それによつてより廉價なる商品を生產して販賣を獨占せむがために——に努力せしめる。その結果は、新生產手段の採用、舊生產手段の改良、勞働組織編成の改良となる。それらは、それ自體が目的ではなくして、より大量的な商品の生產を結果としてもたらす。かくして、資本主義的生產そのものは、その生產がそのうちで行はれる社會的諸關係を顧みずして生產力を絕對的に發達せしめんとする傾向を有し、社會の絕對的消費能力のみが限界であるかのごとくにして生產力をひたすらに發展せしめんとする衝動を有する。換言すれば、資本主義的生產は、社會一般の現實に有する消費能力を無視して、生產を擴大せしむる本質を有する。その結果は、社

會一般の現實的・相對的消費能力を超過する過剩生産となる。それが恐慌の終局的原因である。そして、この消費と生産の矛盾が一時的に強力的に爆發するのがすなはち恐慌である。

現實的恐慌は、不作その他の自然的原因、戰爭、内亂等を機縁として、直接的のモーティーヴとして、發生する事がありうる。しかし、これらはたゞ恐慌勃發の機縁にすぎずして終局的の原因は他にある。それらをのみ原因として勃發した資本主義以前の經濟的混亂と恐慌とが區別せらるべきは實にその點である。

かくして、恐慌は、資本主義的生産の必然的の發生物であつて、資本主義の發生からその終末に至るまで、いやしくも資本主義的生産の存續するかぎり發生する。

恐慌は、資本主義生産の必然的の發生物であるばかりではなくして、逆に、資本主義的生産は恐慌なくしては存在し得ないのである。何故なら、恐慌は前にも述べたごとく、資本主義生産の矛盾を一時的に強力的に爆發せしめて、その直前に生じた經濟界の不均衡をふたたび立て直して生産を整理し、向後の資本主義的發展の發足點を固めるからである。

恐慌は、周期性・循環性をもつ。その周期は、千八百五十年までは約五年目毎であつたのが、その後は約十年毎に延長された。そしてその周期は、客觀的の情勢に應じて變化し得るが、周期性そのものは資本主義の存續するかぎり必ず存在する。恐慌の永久化といふものはない。

産業循環は繁榮期(好景氣)、沈滯期、恐慌期、不況期、景氣上向期等の諸段階に分れる。そして、大戰以前の産業循環に於いては、繁榮期の繁榮はかなり強度で、その期間も比較的長かつた。而して恐慌の時期は短かつた。總じて好景氣の段階は不景氣の段階より長かつた。

かゝる性質を有するヨーロッパ大戰前の恐慌は、資本主義の一般的危機の時期である戰後の資本主義に於いて、やゝ異れる特質を帶びるにいたり、それは、安定期後の今日の段階に於ける恐慌においてことに諸種の點に於いて獨自の特質を示すに至つた。だからして、今日の恐慌は、戰前の恐慌に對してのみならず、戰後の千九百二十年――二十一年の世界恐慌に對しても、異なれる特質を有してゐる。

いま、その異なれる特質のうち著明なるものについて次に述べる。勿論、今次の恐慌はいまだ充分なる發展を遂げないのみならず、最近の狀態に就ては信ずべき統計等をいまだ入手しないから、今日までの所に於いてやゝ明白なる點にのみ限定する。

(一)　戰前の恐慌は、いまだ上昇しつゝある資本主義の基礎の

上に行はれた。從つて、恐慌以後では、資本主義の矛盾はその強力的爆發によつて一時的に整理されて再び上昇することを得た。しかして、當時に於いては內國および外國にいまだ資本主義化しない地方が多く存在してゐたので、それらの地方に新たなる商品販賣地を獲得することを得て、もつて恐慌を克服し得た。(1)恐慌なくしては資本主義的生產、すなはち生產者にはいまだ知られざる世界市場への孤立せる生產者の生產は、成立し得ない。(レーニン、ロシアに於ける資本主義の發達)。それらの理由によつて、恐慌は、資本主義の矛盾の爆發であつたのみならず、資本主義の上昇のためにも必要があつたのだ。しかし、現段階の恐慌は、それに反して、資本主義の一般的危機の時期すなはち資本主義の下降期の基礎のうへに發生してゐる。しかして、今日の帝國主義的競爭の激甚なる時代に於いては、最早國內に於いても、國外に於いても新たなる商品販賣區域を發見することは不可能である。アフリカ、インド、オーストラリア、フランス領印度支那等外すべての植民地には、あるひはそれらの土地に資本主義が發達することにより、あるひは高率の關稅壁が設定(例へばインドは千九百二十七年綿絲關稅の引上を行ひ最近さらに綿布關稅の引上をなし、オーストラリアは數年のうちに續々として關稅の引上を行ひ最近では千九百二十九年百數種に亙る商品に關稅率引上をなし、インド支那では本國フランスの關稅率を適用して從來よりも高率なる關稅となつた)せらることによつて、新たなる商品販賣區域となることを事實上拒否してゐる。だから、戰前のごとく新たなる販賣區域の獲得によつて恐慌を克服することが不可能となつた。そのことは、恐慌が資本主義の上昇につとめた一つの役目を不可能とする。恐慌は資本主義を上昇させるどころか反つて資本主義の一般の危機を促進せしめ、恐慌よりの恢復を遲延せしめ、不景氣狀態を延長せしめる。

千九百二十年——二十一年の世界恐慌は、一般的危機の初期に行はれただけに、なほ今日の恐慌とは異つた性質を有してゐる。その恐慌は、前にも述べたるがごとく、大戰によつて混亂した生產を平和的生產に轉換するといふ點に原因を持ち、相對的安定、產業合理化による戰前生產標準への復舊の努力の時期の前に爆發した。しかし、今次の恐慌はそれら相對的安定期、產業合理化・獨占強行期の直後に、その時期の間に育成・釀成された矛盾の尖銳化として爆發した。その點で、今次の恐慌は、戰前の恐慌とはもとより、戰後の第一回世界恐慌とも異なる特質を有してゐる。

(二) 恐慌の行はるる範圍が擴大した。前にものべたごとく、

今日の段階では、東ヨーロッパ、アメリカ合衆國のみならず、イギリス、フランス等の西ヨーロッパにも恐慌が起つてゐる。七月十日の新聞にはイギリスの不況が、ますます深刻化しつつあることを報じてゐる。資本主義的發達のやゝおくれた地方では、農産物の價格下落に伴つて農業恐慌が發生してゐる。かくして恐慌の範圍は廣大なる範圍を掩ふてゐる。アメリカの恐慌は、これら世界各地の部分恐慌を綜合して世界的の恐慌にまで發展せんとしてゐる。戰前はもとより、戰後の恐慌に於いても、その範圍の廣汎なる事に於いて今次の恐慌には及ばない。

（三）　現段階の恐慌は、單に産業部門の恐慌のみならず農業恐慌をも包括して、兩者一致して恐慌の範圍および強度をつよからしめてゐる。前にものべたごとく、各國は今日畜産を除いた農業全體――穀物、食料品、生産原料、珈琲、紅茶等――にわたつて生産が過剩となりその結果農産物の價格低下となり、小作農、自作農、自作兼小作農等は全く破産に瀕して、プロレタリア層に陷沒してゐる。戰爭以前に於いては農業恐慌は一般恐慌と一致・合流するものとは決らなかつた。千九百八年の恐慌が農業恐慌を伴はざりしごときその例である。しかし、農業が資本主義化し、機械化、科學化するとともに、産業と農業との關係は、より緊密となる。原料の關係を通じて農業が産業と結び、また肥料その他の科學的經營に必要なる諸設備によつて産業が農業と結び、兩者は全く有機的な連關の下に來り、從つて一方の部門に恐慌來るときは、當然他の部門にも影響を及ぼす必然性が生じた。今次の恐慌は、それの示現である。今次の農業恐慌は單獨なる農業部門だけの恐慌ではなくして、一般恐慌の一部分を形成してゐるのである。

（四）　戰前の平和なりし資本主義の時代には、産業循環は、不況（Depression）、上向、好景氣（繁榮）、沈滯、恐慌といふ順序で行はれた。そして、かゝる段階中で、好景氣の期間は長く強度も強烈（物價の昂騰も大で、失業もこの時期に殆んど再び勞働市場に動員された）であつて、それに反して沈滯期、恐慌期は短かかつた。だが、現段階の恐慌は、その反對となつて好景氣期間短く、不景氣期間長くなり、恐慌が鋭化して激烈となり破壞的となり、しかも期間が長くなつた。恐慌終了後も上向、好景氣がそれに續く徴候は殆んど認められず、認められてもごく短期間の低度のものであり、從つて産業循環は、長い沈滯と激烈なる恐慌の交代となつた。而してその産業循環の期間は短縮された。

（五）　今次の恐慌によつて生じた失業者は、從來になく大である。ルーヴィンシュタインは、今年三月の全世界失業者總數を

千七百萬と概算したが、七月八日の東京日々の報ずるところによれば、ロシアのボロトフは、最近の失業者數はますます增加して、二千萬に達したと報告してゐる。七月十日の讀賣新聞によれば、イギリスの恐慌進行と共に二月、百五十萬であつた失業者が六月末、百九十萬に達し從來のうちで最高率に達したと報じてゐる。沈滯――恐慌の循環は、たとへ恐慌終熄後といへども、多くの失業者を慢性的に殘存せしめるであらう。

（六）從來の恐慌に於いては、恐慌期間短くして物價下落は激しかつたが、資本主義が獨占の段階に入るとともに恐慌期間が長くなりその代りに物價の下落が緩慢となつた。ところが、今次の恐慌に於いては、獨占的商品以外の商品の價格は急激なる下落を見せてゐる。

以上の外、金利、投機その他の方面に於いても、現段階の恐慌は、多くの特質を示してゐるが、ここにはそれらへの言及はこれを略する。

四

筆者が、今この稿を續けつつある際に、机上にもたらせられた朝日新聞（七月九日朝刊）には、『米國市況ことごとく惡化』と題して、七月六日には有價證券及び商品が、一せいに安を見せ、特に電氣銅は十一セント半となり、千九百二十一年以來の安値を示し、たゞ重要商品中ゴムのみロンドンに比し割安にあるのとイングランドゴム栽培業者間に二割五分減産の議たかまりつつあるため僅かに保合商狀であつたと報じてゐる。またその後に、「限産の手各方面へ伸ぶ」と題して、生産の制限が續出し、物價指數は千九百二十年の恐慌の際の半分であり、金利、物價とともに低落いちじるしき事が報じられてゐる。しかして曰く「千九百二十年の不況と異り滯貨に對する資金固定少く事業會社に相當資力あり、一度轉機到來せば、景氣回復案外に速かなるべきを目下唯一の賴みとせらる」と。

昨年末の取引所恐慌に端を發したアメリカ恐慌は、今年に入つて一月、二月やゝ衰退の徵を見せたが、前にも記した通り、六月廿一日には再び株式の暴落を見せ、いままたかゝる市況の惡化を報じ來る。これは何を語るか。

思ふに、資本主義の存續する限り産業循環は存在するのであるから、今次の恐慌もまたいつかは終熄するであらう。しかし一般的の危機は、ますます尖銳化し來つたことを見逃してはならぬ。（七月十日稿）

支那勞働運動の現階段

長岡克曉

一

支那現在の社會的諸勢力階級及びその構成分子を右より左へ分類記述すると大體左の通りとなる。

一、封建的舊勢力階級、舊軍閥を主としこれが支持者たる官僚政客及び地方の地主豪紳を有力なる分子として包含する。

二、國際的資産階級、支那は日英米佛その他の先進帝國主義資本主義國の國際的發展の結果政治的經濟的に半植民地であり各先進資本主義國の資産階級は支那の社會において重要な地位を占めてゐる。其背後に帝國主義資本主義國が控へてゐる事は勿論である。買辦階級と稱せられ國際的資産階級に附隨する事により重要な地位を獲得維持してゐる支那資産階級も亦當然これに屬する。

三、新興支那資産階級、支那の資本主義は帝國主義資本主義に壓倒せられて發展非常に遲れたが、近時漸く發展しはじめ新しく國内に獨立した資産階級の發生を見るに至つた。

四、小資産階級、近代的資本主義の發展を支那で見るに至つたのは先づ歐洲大戰中と稱すべく、それまでは前期的資本主義思想に基いて小商工業が營まれてゐたに過ぎない。從來の支那における資産階級であるが、國際的及び國内の近代的資産階級發生の結果、今は小資産階級の地位を占めるに至つたものである。

五、無産階級、都市における近代的大産業の勞働者、自由勞働者、農業勞働者、小作農、勞働失業者、土匪、下級軍人等を含みその數は三億近くに達するものである。

以上の五大社會階級は階級鬪爭場裡にあつてはその鬪爭の形

式、內容、相手の種類如何により屢々他の社會的階級と聯合し或は同一階級內において分裂して他の階級と鬪爭すると共に分裂せる同一階級間にも鬪爭を生ずる。

すでに勞働運動は無產階級解放運動の一である。支那の勞働運動は無產階級解放運動の對立抗爭階級として前記の如く封建的舊勢力階級、國際的資產階級、新興支那資產階級、小資產階級の四つを有してゐるのみならず、無產階級の少からぬ部分が分裂して他の階級支配下にあつて無產階級解放運動に一般的に反擊し來り、從つて勞働運動反對の地位に立つ事あり又時に他の階級が勞働運動に參加し來る例もある。

二

支那には前期的資本主義時代から幇と稱する一種の勞働組合が存在したが、これは近代的大產業時代の勞働組合と目する事は出來ない。近代的勞働組合に稍似たものは清朝末期より南支那に發生し、ついで一九一九年頃の學生が主體となつた帝國主義資本主義反對運動に勞働者を參加させた頃に至り、漸く形の整つた勞働運動となつた。而して一九二〇年中國無產黨組織されその指導下に別動體たる赤色勞働組合の組織を見るに至つて勞働運動は俄然として發展するに至つた。國民黨は早くから無產階級もその革命戰陣營に參加させる樣着想してゐたが、實際勞働運動に着手したのは寧ろ共產黨よりおくれた。故に支那の近代的勞働運動は發端と共に、旗色鮮明な赤色勞働運動となつた。而して中國共產黨が勞働運動を指導するに當つても最も敏活な發展をとげたのは、一九二四年より一九二七年に至る間即ち國民黨と握手して國民黨の多年培つた勢力を利用しつゝ比較的自由な活動を續けてゐた時代であつた。

孫文氏の主唱した三民主義革命思想は稍明瞭をかくが大體において小資產階級を革命の指導者となし無產階級をこれに追隨せしめ、封建的舊勢力階級及び帝國主義國際的資產階級に對する社會民主主義革命及び民族革命である。國內の資產階級はまだ充分發展してゐなかつたし、國際的資產階級に對抗するためには新興國內資產階級を或程度まで社會民主々義的指導精神により、指導援助しつゝその革命運動に參加させる必要を感じてゐた程であつた。

中國××黨及び赤色勞働組合は固より無產階級の××政治を窮極の目標としてゐたが、結黨當時は勿論現在も支那の現狀が直に獨裁政權の獲得及び運用に不適當な事を或程度に認めてゐる。結黨當時も窮極の目標は暫く別として、封建的舊勢力階級及び國際的資本階級の倒壞を當面の目標とした。共產黨がかゝる

標目の主張を一時的にしても持つて居たればこそ國民黨もこれと提携して政治運動經濟運動に當る事が出來たのである。

封建的舊勢力階級は屢々國際的資產階級及びその背後の帝國主義資本主義國の援助を受けて、政權の獲得に努めてその社會的勢力を維持して來た。國際的資產階級は又この封建的舊勢力階級の政權と苟合する事により、その社會的勢力を扶殖發展して來たものである。結局この兩階級は政治的勢力を根幹としたものである。國民黨及び共產黨は最初この兩階級の倒壞を目標とする革命達成を計つたのであるから、その指導する勞働運動は政治鬪爭に向ふ事が多かつた。赤色勞働組合も政治鬪爭に力を入れる場合少くなかつた。勿論階級意識の稀薄な支那無產階級大衆を獲得するためには純粹な政治鬪爭にのみ終始するは不可能であつて、勞働運動において目前の經濟的利益を提供して經濟鬪爭にも努力したものであつた。しかし當時の經濟鬪爭は政治鬪爭を力強からしめるべく無產階級大衆を獲得するための手段であつたと見るべきである。この傾向は無產階級獨裁政治を最後の目的とする共產黨よりも、小資產階級を指導的階級とする社會民主主義革命に無產階級を追隨せしめんとした、國民黨の指導する勞働運動において特に濃厚であつた。

一九二七年國民黨と共產黨及び赤色勞働組合とはその當面の目標とした封建的舊勢力階級及び國際的資產階級倒壞の政治革命民族革命の達成を見ずして別れるに至り、支那の勞働運動も分裂動搖を生じて今日に及んでゐる。國民黨と共產黨とが互に排擊するに至つたについては、種々の源因があるが根本的理由は一方が社會民主主義革命を目的としてゐるに、他方が無產階級革命を目的としてゐるにあつた。分裂した勞働運動がその結果として黃色及び赤色の二樣の進路に向つた事も當然である。

三

支那無產階級の解放運動陣營は、目下混亂せる分裂狀態にある。即ち封建的舊勢力階級と無產階級とはもはや斷じて妥協の餘地ないほど利害關係を異にすると思はれるのに數百萬に達する無產階級失業者が封建的舊勢力階級の味方となつてゐる。それは即ち下級兵士である。國際的資產階級がこの封建的舊勢力階級と共同戰線を張つて無產階級解放運動に反擊を加へた例は少くないが一九二三年の京漢鐵道大罷業を吳佩孚氏が、一九二五年には青島紡績罷業を張宗昌氏が、又同年香港廣東の總罷業を李濟深氏がそれ〴〵壓迫した背後に國際的資產階級及び帝國主義資本主義國が存在した事によつて容易に見出される。かく

して無產階級中の少なからぬ部分が、その革命の目標たるべき封建的舊勢力階級及び國際資產階級の勞働運動に對する反擊戰に參加してゐるわけである。

叉無產階級の一部は國內新興資產階級の陣營に走つて、反動運動に參加せるものも少くない。もと〳〵國民黨は小資產階級の指導下に社會民主々義革命を目標としたものであつたが、所謂孫文氏の三民主義か曖昧であつた事が新興支那資產階級に利用され、これを以つて封建的勢力階級及び國際資產階級に對する新興支那資產階級革命の手段とされるに至つた。かくして國民黨は他にも幾多の理由はあつたが、思想的に內訌を生じ國民黨本來の小資產階級指導下の社會民主々義革命を目的とする左派及び新興支那資產階級を指導者とする資產階級革命を目的とする右派とに別れた。前者は汪兆銘氏一派であり後者は蔣介石氏を中心とする現時の南京政權である。一九二七年國民黨と共產黨とが提携を斷絕した直後に南部及び中部支那を風靡した白色テロリズムは實に新興國內資產階級を背影とする現在の南京政權及び一時假面をかぶつて國民黨傘下に投じた封建的舊勢力階級の聯合によるものであつた。この白色テロリズムの結果生命を失つた共產黨及び赤色勞働組合の鬪士は數萬に達した。而してこの白色テロリズムに直接手を下した下級兵士は同じく無產階級に屬する人達であつた。

叉近時支那無產階級の解放運動に對し封建的舊勢力階級、國際的資產階級及び支那新興資產階級の反擊ぶりは著しく尖銳化してゐる。これ等の三階級は屢々互に相爭ふ事はあるが無產階級の解放運動特に共產黨や赤色勞働組合のそれに對して殆んど完全に聯合して反擊を試みる。これ一九二七年國民黨共產黨提携時代の階級鬪爭において無產階級が壓倒的に優勢であつて、あのまゝの推移を續けたら無產階級の獨裁制政治も實現しかねまじき趨勢を示したるに對する恐怖からである。一九二七年の白色テロリズム以後といへども共產黨及び赤色勞働組合に對する取締りは嚴重を極め、如何なる手段をも選ぶ所なく共產主義運動の撲滅を計りつゝある。無產階級革命に對する反擊かくの如く尖銳化し且つ無產階級中より幾多の裏切者が他の階級鬪爭陣營中に參加してゐるのみならず、無產階級側においては統一された陣營なく赤色運動と黃色運動とが互に相排擊しながら各別々に解放運動に當りつゝあるに過ぎない。

四

既に無產階級の解放運動が分裂して赤色黃色の二つの流れを進みつゝある結果この種解放運動の重要な部分を占める勞働運

動も亦赤色勞働運動及び黃色勞働運動の二つに分裂してゐる。

　支那における赤色勞働運動組合は中國共産黨の指導を受け且つ正式に赤色勞働組合インターナショナルにも加入してゐる。一九二七年までは名實ともに支那勞働運動の牛耳をとり目覺ましき活動を續けた物であつたが、白色テロリズム時代及びその以後は封建的舊勢力階級、國際的資産階級及び新興支那資産階級等政權保持者の大强壓を受けて多數優秀な鬪士を失つたのみならず、爾來その運動も公然行ふ事能はず僅に當局の目をかすめて潛行運動によるより他なくなつた。一種の祕密結社たるこの赤色勞働組合は現在中華全國總工會と稱し上海工聯會、鐵路總工會、海員總工會等を重要な構成分子と爲し、その他各地の鑛山、紡績等の勞働組合をも指導しつゝあり、一九二八年には組合員總計七萬數千と稱してゐる。一九二七年最も敏活な活動時には、二百五十萬の組合員を有すると中華全國總工會自ら報告してゐるに比すると非常な減少である。尤もこれ等數字は必ずしも絕對的正確なものとは稱し難いが、一時如何に支那の赤色勞働運動が熾烈であり潑剌たる活動を續けたかについて、大體推測するに難からず又一九二七年の白色テロリズム以後如何に彈壓せられたかについても推測するに足りる。

　現在では赤色勞働組合は公然と運動する事出來ず凡ての運動は潛行的であるためその活動は鮮明をかき大體を覗ふより他ない。その運動當面の目標は勞働大衆の獲得にあるが、その目的及び勞働者の產業界における經濟的地位向上のために常に各種罷業に參加指導する。勞働組合未組織の勞働群や組織不完全な組合に××かける事は勿論、黃色組合に對しては下級組合員として××し赤色組合の宣傳、黃色組合員の啓蒙、黃色組合領袖に對する反感の××にあたる。又黃色組合の××に赤色組合支部を設けて群衆の指導的地位を獲得する。常に黃色組合の微溫的鬪爭樣式を××して、直接行動に入らざるを得ない樣にしむけて罷業を××する。一旦罷業が發生した際はなるべく黃色組合組織以外に罷業委員會を作つて、罷業の××權を獲得して黃色組合幹部を指導的地位から追放し、ついでこれを赤色組合化せんとする××をとりつゝある。

　又種々の定期刊行物、不定期なパンフレット等を上海にある全國總工會常務委員の手で發行する外、此總工會所屬の地方組合も夫々種々の刊行物を發行して赤色勞働運動の理論的指導に當ると共に、赤色國際勞働運動に關する各種の飜譯を掲載し階級意識の普遍化に努めてゐる各種の刊行物の總部數は一九二八年末より一年間に於て三十萬部以上に達してゐると言はれる。

　支那では普通教育が普及してゐないため一般に勞働者の智識

低劣にして從つて階級意識の發達も極めて遲かつた。現に有識論者中には支那に階級意識なしとまで極言する人もある程である。かゝる狀態であるから一般に勞働運動指導者としては勞働大衆を獲得するに非常な困難を感ずる。單に刊行物位ではもとより充分でない。赤色勞働組合はこゝにおいて勞働者の教育に努めねばならぬ。これがため上海には勞働者讀書班及び勞働者學校の設備がある。これは昨年五月以來着手せるものである。又一般に階級意識乏しい勞働大衆を獲得するのが困難なため勞働運動指導に當るものは特別の訓練を經た者である事が絕體的に必要である。從來共產黨及び赤色勞働組合が公然と活動出來た時代にはロシヤとの交通も自由でありこの特別な訓練を經た優秀な勞働運動指導者は相當多數あつた。然るに一九二七年の白色テロリズムに於て多くの戰鬪的指導者が殺され、赤色勞働運動はこれがため大打擊を受けその後の活動に非常な不便を感じた。これがため赤色勞働組合は上海に××班をおいて勞働運動指導者養成に努めてゐる。既に訓練を終へたもの數十名ありといはれこれ等の人材は遠からず各地に配布される筈である。或は既に派遣されたものも少くあるまい。赤色勞働組合が指導後援したと稱する罷業につき一九二八年下半年の成績は總計一八七件の中完全なる勝利二五%、相當な勝利一九%、失敗一三%、未解決一一%無結果二一%、不明一一%、と組合側で發表してゐるが宣傳を含むこの發表は必ずしも客觀的に正確であるとは斷言し難い。しかしいづれにしても組合員減少し從來の壓倒的勢力を失ひ不振の狀態に陷つた事は明である。

五

一方黃色勞働運動は新興支那資產階級の承認を得てゐるのみならず小資產階級の援助も得て比較的勢力を占めつゝある。

一八二五、六年頃共產黨及び赤色勞働組合の壓倒的發展を見た國民黨右派及び新興支那資產階級は、之が對策を講ぜざるを得なかつた。國民黨に迫つて共產黨との提攜を絕つ事もその一であつた。又彼等は御用勞働組合卽ち黃色勞働組合を造つて赤色勞働組合に對抗する事も忘れなかつた。一九二五年五月一日赤色勞働組合が第二次全國勞働大會を廣東で開いて赤色勞働組合インターナショナルに參加を決議した頃にも上海でも廣東でもこの黃色組合が或程度まで組織されてこれに對抗運動を試みたものである。しかし赤色組合は組織が比較的完全であり指導者に訓練ある者多かつた事、當時全支那を蔽ふた革命指導精神に理論的に合致し得たのみならず、總てに戰鬪的氣分が漲つてゐたに對し黃色組合側は主張が微溫的にして優秀な指導者を缺

き且つ戰鬪的氣力をかいたためこの兩者の鬪爭は全然問題にならなかつた。公平に最後まで兩者を抗爭せしめれば當然に赤色勞働組合側の完全な勝利に歸すべき形勢にあつた。事實共產黨が國民黨と提携してゐた間は赤色勞働組合が壓倒的優勢であつた。然るに兩者は永く公平に抗爭する事を許されなかつた。卽ち一九二七年春には共產黨と國民黨とは完全に斷絕し、共產黨に對する壓迫は白色テロリズム化し共產黨と密接な關係にある赤色勞働組合は何れも同樣な彈壓を受けると共に黃色勞働組合は積極的な援助と保護とを國民黨その他から受けるに至つた。共產黨がともかく一時退却せざるを得なかつた如く赤色勞働組合も一大退却、組合員二百九十萬が七萬數千に下るに至つたものである。共產黨と絕緣した國民黨は左右兩派及び一時國民黨員の假面をつけた封建的舊勢力階級とに分裂したが、その舊勢力階級も完全に三民主義を捨てる事は自己の政治的立場確保の目的から見て著しく不利とする所であるから依然國民黨には忠實なるかの如く努めて裝つてゐる。新興支那資產階級及び小資產階級は大體において國民黨右派及び左派を夫々支持してゐるがこれ等の各派各階級は舉つて共產黨及び赤色勞働組合運動を壓迫して黃色勞働組合運動を助けてゐる。これ彼等が一樣に共產黨及び赤色勞働組合を極度に恐れてゐるためでもあるが同時に彼等が程度の差こそあれ、何れもその革命運動が一時に比し右傾し或は反動化したのを欺瞞するためでもある。彼等の革命戰陣營或は反革命戰陣營に無產階級大衆を獲得するか或は反對の立場に立たしめないためには、黃色勞働組合運動を多かれ少かれ援助せざるを得なかつたのである。故に彼等が赤色勞働組合運動の如き積極的階級鬪爭を否として、黃色勞働組合を助長するに當り好んで用ゐる理論は左の如きものである。

支那國民經濟の發達しないのには種々の源因あるが封建的舊勢力階級の本然の性質に基く內亂及びその搾取、之を直接間接に援助すると共に自らも支那國民經濟を搾取しつゝある國際的帝國主義、國際的資產階級によるものが大部分である。支那の資本主義は資產階級と勞働者とが正面衝突せねばならぬ程發展してゐない。資源の富裕、國土の廣大なる點に於て米國と比すべき支那は米國が資本主義國としての黃金時代に陶醉せるが如く自國產業の發達により國民經濟の豐富を期し得る筈である。故に何よりも先づ第一に封建的舊勢力階級と國際的資產階級との政治的經濟的壓迫から免れる必要がある。それがためには新興支那資產階級、小資產階級、無產階級が協力して革命達成に努カし同時に協力して國民經濟の發展を計らねばならぬ。この時にあたり赤色勞働組合運動により封建的舊勢力階級及び國際的

資産階級に對する革命戰陣營内に内訌的階級鬪爭を激成するが如き事は避けねばならぬ。三民主義の主張は土地の分配、高度の資本主義の無産階級搾取については充分考慮せる所であつて、支那に近代的産業が發展した後には現在老境に入つてゐる資本主義國に見るが如き勞資の對立、階級鬪爭を來させるものではない。しかし封建的舊勢力階級及び國際的資産階級に對する革命には勞働者も參加する必要がある。且つ勞働者の教育、福祉の增進も必要なるが故に勞働組合運動を無視するものではなく溫健な勞働組合を組織して之の目的を遂げんとするものである。

右の如き理由であるから彼等が必要又は便宜とする勞働組合は當然黃色化せざるを得ぬ。而して現在支那に政權をもつものは國民黨右派及び國民黨の假面を着たる封建的舊勢力階級であるから、黃色勞働組合は殆んど總ての政治的勢力により支持されてゐるわけである。又國民黨左派は政治的立場を持たないが、國民黨内に於てはその主義に追隨するもの少からぬ有樣で、特に地方下級黨部に隱然たる勢力をもつ。而して政治的立場をもたないだけに無産階級大衆獲得にこれ努力しつゝあるから、之又黃色組合の絕大なる後援者たるのみならず勞働運動指導者としても共産黨との提携時代に訓練を經たものが比較的にこの左派に少くないから黃色組合の指導者には國民黨左派に屬するもの多數ある。

各黃色勞働組合の數及びその組合員の數は明瞭でないが赤色組合側が「黃色組合は大多數勞働者群をその組織の中に包含するに至つた。もし現在の黃色組合が群集をもつ事を極端に否認するものあらばそれは甚しき錯誤である」と發表して居るに徵しても黃色勞働組合の發展狀況を見るに足りる。

六

新興支那資産階級の政權たる現政府は更に勞資爭議處理法、勞働組合法、同施行細則、工場法等を制定して黃色勞働組合を發展せしめ以つて赤色勞働組合の發展を沮止せんとしつゝある。その他實施に至らない施設計畫についても、同じく黃色勞働組合運動主義者たる國際勞働局長トーマ氏が一九二八年末支那を訪問した際、同氏をして感服せしめたものも少からずあつた。最近においては支那が完全代表を送る前に第十一回國際勞働會議で採擇せられた最低賃銀決定機關設置に關する條約をも批准した程である。しかしこの條約の義務を履行する見込少いほど彼等の勞働組合運動に對する態度は欺瞞的である。

黃色勞働組合がかくの如く保護されつゝある間に赤色勞働組合は殆んど總ての階級の壓迫を受けてゐるのであるから現狀頗

る不振である。しかし第三インターナショナル竝に赤色勞働組合インターナショナルは依然として赤色勞働組合を指導援助しつゝあり鬪志强いものが多少組合に殘つてゐるから表面に見ゆるが如く弱いものではない。特に國民黨の分裂、封建的舊勢力階級の再起は國内をして大戰亂に陷らしめ國際的資本主義の搾取やまない事、銀價の暴落、各地の人爲的及び自然的饑饉等は相まつて社會的大混亂を來し、各階級間及び同一階級間の各種鬪爭は赤色運動に對する警戒をともすれば忘れさせ聯合戰線も亂れ勝となる程激甚であるから赤色勞働組合にとつては大いに乘ずべき機會である。その機運は上海において武漢において又天津において旣に動きつゝある模樣である。しかし現在赤色××の最も華々しいのは都市勞働者のそれでなくて農村無產階級のそれである。

元來支那は農業國にして國民の八割以上が農業に從事し支那全體の總生產の九割以上が農產物に占められてゐる。第三インターナショナルも中國共產黨もこの事實に早くより着目し資本主義的大產業少く、階級意識に幼稚にして數も少い都市無產階級のみの手では無產階級革命の成功困難なるを知つてゐた。故に共產黨組織と共に赤色農民運動に着手し途中多少の政策の動搖は免れなかつたが北伐軍の北進と共に驚異すべき發展をとげ一九二七年春には廣東湖南湖北江西を中心として赤色農民組合に××せられた農民は五百萬人に達した。併しこれ又同年の白色テロリズムのため徹底に破碎され、僅に××農民團が地方を流轉し赤色農民組合も都市赤色勞働組合と同樣な意味で同樣な狀態に黃色化されてしまつた。しかるにその後國民黨内の分裂その他の理由で中央政府の威令地方に及ばざるに至るや武裝農民團は再び擡頭し來り湖南湖北、江西各省の農村における共產暴動は頻發しその占領した農村においてはサウェート政權樹立せられ江西省の如きは總面積の八割がその手に入つたといはれてゐる。しかも今尙その發展を續けつゝあり國民黨各派及び封建的舊勢力階級にして今にして對策を講じないならば結局全支那に及ばないにしても××主義農民××區は相當廣い地域において政權を樹立せんとする勢にある。尤もこの種農民暴動については中國共產黨内においても多少異論ある所でかくの如き暴動運動は第三インターナショナルが過去の錯誤を隱閉せんための政策にして結局共產黨の聲望を失墜する以外效果なしと見て共產黨から脫退したものもある程である。

過去三年餘に亙り各階級から壓迫に壓迫を重ねられて振はなかつた支那の赤色勞働運動は現在の政治的、社會的大混亂に乘じ幾分部内に不統一と指導精神の動搖を持ちながらも再び無產階級××政治を最後の目標として華々しき新活動に第一歩を踏み出してゐる。（昭和五・七・七）

日本農業恐慌論

稲村隆一

(一)

世界經濟の凋落の結果として發生した、農業の世界的恐慌、及びそれの現象形態の一つたる、例へば資本家的トラストが行ふ政策の結果としても發生する所の、謂ゆる「鋏」は、農民階級を烈しく襲ふて、二三の場所、例へば合衆國では、農民大衆の大衆的破滅を招來し、一時ノン・パルチザン・リーグの運動等が起つた。日本に於いては殊にこの現象は金解禁を中心として、他の物價に先行して農産物の下落甚だしく、農家の借金は一度に十五億を增加した。そして今六十億の借金を農民は持つてゐる。米、繭の下落、肥料トラストと關稅、之等はすべて農家經濟を破滅に導きつゝある。長野縣農會の發表によるも、繭の生産費が八圓であるに關らず、農家の賣るときは四圓乃至三圓五十錢である。殊に人絹の世界市場への進出は繭價を增し下落せしめる。故に今後生絲に對する對米貿易は益々悲觀すべき狀態となるであらうし、現に年々不況となつてゐたのである。例へば生絲價格は、大正十四年最高二千百三十圓、最低千七百七十圓、であるのが、その後漸次低落し昨四年の最高は千四百二十圓、最低千百五十五圓、この平均價格千三百十圓であつた。而してこの五年間に三割三分余の下落である。生絲の下落は必然にその原料たる繭價に影響する。以下は六月一日發行のエコノミストによるものであるが、大正十四年以降過去五年間の繭價全國平均價格は次の如くである。(一貫目當り、單位—圓)

	春繭 價格	春繭 掛目
十四年	一一・三〇	一〇二
元年	九・三四	八四
二年	七・一三	六四
三年	六・九〇	六二

	價格	掛目
四年	七.五八	六七

夏蠶

	價格	掛目
十四年	九.二八	九五
元年	七.五九	七八
二年	四.二三	六六
三年	四.五二	四九
四年	五.六二	四八

初秋蠶

	價格	掛目
十四年	一〇.〇三	一〇〇
元年	六.九九	七二
二年	三.八八	四二
三年	五.三五	五五
四年	六.〇六	六〇

晩秋蠶

	價格	掛目
十四年	一〇.二九	一〇〇
元年	七.四二	七四
二年	五.四九	五五
三年	六.七七	六六
四年	六.八五	六四

右の如く繭價も生絲同様低落しつゝある。殊に現在の生絲市價は補償法の發動、その他當事者の對策が盡されつゝあるにも拘らず、千百圓臺の安價をたどりつゝある。そして全國養蠶掃立枚數は四月末調査八百三十二萬五千枚、前年に比し二十二萬八千枚、二分八厘の増加を示し、收繭量また前年に比べ百三十七萬貫の増收が豫想されてゐる。從つて春蠶相場も凡そ白繭五十掛、黄繭四十八掛と豫想されてゐる。されば白繭は五圓五六十錢、黄繭は五圓七八十錢と見込まれ前年に比すれば貫當り約二圓といふ暴落である。而して繭は本邦輸出品の大宗生絲の原料でありその産額數量價格は次の如き巨額にのぼる。(單位—千貫千圓)

	數量	價格
自大正十一年至元年平均	七五、〇八九	六五四、一八五
二年	九〇、八六二	四九六、九三二
三年	九三、八四九	五五一、六七九
四年	一〇二、〇九三	六五四、九九四

即ち價格の低落ありとはいへ昨四年の産繭額は一億二百九萬三千貫、その價格六億五千四百九十餘萬圓におよぶ。さらに農家私經濟について見るも、農業所得中養蠶收入は重要な部分を占めてゐる。養蠶を營むと否とを考慮せず全國百八十一戸の農家についてなせる經濟調査にては次の如き結果を示してゐる。

(單位圓—%)

	農業總收入	養蠶收入	比率
自作農	二、二五九	三〇八	一三・六
自兼小	二、〇一五	二一六	一〇・七
小作農	一、八七七	一八七	一〇・〇
平均	二、〇六七	二四三	一一・八

即ちこれ等の事實に徴すれば養蠶業は大にしては我が國重要産業の一であり、小にしては農家所得中耕種收入に次ぐ收入源なることが判る。更に更に養蠶農家について見れば昨四年一戸平均四十六貫餘、その價格二百九十五圓におよぶから繭價二割六分餘の低落はさなきだに疲弊に喘ぐ全國農家に致命的な影響を及ぼすのである。前述の如く生絲價格は年々低落し殊に最近に於て著しい。從つて絲價が回復せぬ限り、繭價の下落は當然豫想されたにも拘らず本年の春蠶掃立枚數が前年に比べ増加してゐる。更に最近五年間の養蠶戸數、ならびに養蠶戸數の對農家總戸數比率を見るも此率増加しつゝある。その趨勢左の如し。

（單位一千戸—%）

	總戸數	養蠶戸數	比率
十四年	五、五四八	一、九四九	三五・二
元年	五、五五五	二、〇六一	三七・二
二年	五、五六二	二、一六三	三七・七
三年	五、五七六	二、一六五	三八・九
四年	—	二、二一六	—

かくの如く養蠶農家の戸數年と共に増加し現在では農家の總戸數の約四割が養蠶農家であり、從つて同時に掃立枚數も年々増加し全掃立枚數は、大正十四年から昭和四年迄の五年間に（大正十四年千七百七十三萬一千枚に比較し昭和四年には千九百十六萬九千枚となり）百四十三萬八千枚、八分強の増加を示してゐる。だから繭の價格が如何に日本の農村に大なる影響を與へてゐるかを證明するものだ。然らば日本の農村に於いて、繭の農家が増加するのは、養蠶が利益があるからであらうか？否、決してそうではない。生産費と價格とを計算して見るならば殆んど損をしてゐる。たゞ一時的に金の融通をつけるためにやつてゐるにすぎないのだ。次は蠶絲同業組合中央會が、福島、群馬、愛知、京都、鳥取、長野の主要養蠶地につき大正十三年から昭和二年に至る五ヶ年の調査と、昭和四年度の春蠶と、夏秋蠶との生産費の調査であるが、

	春蠶一貫目宛生産費
大正十二年	円 九・九九
同　十三年	八・三一
同　十四年	七・八二
昭和元年	七・七三
同　二　年	七・四八

夏秋蠶一貫目宛生産費

大正十二年	一〇・五三円
同　十三年	一〇・八四
同　十四年	八・二三
昭和元年	八・四五
同　二　年	七・二四

更に昭和四年度の一貫目の生産費は春蠶六圓九十九錢、夏蠶六圓二十五錢の生産費である。然し乍ら生産費は縣によつて一定してゐない。春蠶は最も安いのは北海道の四圓三十八錢、最も高きは八圓九十九錢、長野八圓五十五錢、群馬六圓三十四錢、また初秋蠶は最も安きは岩手の三圓八十七錢、高きは長野の七圓九十八錢、群馬の七圓三錢である。

以上の如く生産費は技術の進歩により毎年安くなるのであるが、マユの價格はそれに比較してより以上下落するから農家の損失は大したものである。卽ち次に繭價格と生産費を比較して見るならば、(單位圓、△損失)

年次	春蠶 價格	春蠶 生産費	春蠶 利益金	夏秋蠶 價格	夏秋蠶 生産費	夏秋蠶 利益金
十二年	一一・六二	九・九九	一・六三	七・九九	一〇・五三	△二・五四
十三年	七・五〇	八・三三	△〇・八三	八・八七	一〇・八四	△一・九七
十四年	一一・三一	七・八六	三・四五	九・八六	八・二三	一・六三
元年	九・五四	七・七三	一・八一	七・三三	八・四五	△一・一二
二年	七・二三	七・四八	△〇・二五	四・九二	七・二四	△二・三二
四年	七・五八	六・九九	〇・五九	六・一七	六・二五	△〇・〇八

以上の計算の示すところによれば六年間に於いて春蠶は利益四回で、損失二回である。所が秋夏蠶に至つては、利益僅かに一回で他の五回はすべて損失である。特に大正十二年は貫當り二圓五十錢である。

以上の統計は本年六月號「エコノミスト」によるものであるが、今年は金解禁の影響を受けて、繭價の下落特に甚しくして春蠶にして生産費の約半分である。だから夏秋蠶は更に甚だしいであらう。故に如何に生産費が低下しても間に合はぬ。一貫三圓の損失としても(實際は是以上と推定さる)養蠶農家二百數十萬戸の損失は正に數億であらう。而して對米生絲貿易の惡化は、如何に消費節約をやつても、輸入の激超となり、急速なる金の流出となり、爲に政府は資本主義經濟組織のために、オーストリヤやチエツコ・スロバキアの如く、再び金の輸出を禁止しなくてはならぬ様な破目に至るであらうとは、一部ブルジョア經濟學者の觀測である。

かくの如く繭價の下落は益々ひどくなるであらう。世界的な不景氣、人造絹絲の發達はこの現象を愈々深めるであらう。然らば之は二百數十萬戸の農家經濟の破滅であり、日本農業の致

命的な打撃でなくて何んであらう。

而して資本主義經濟は絶對にこの日本農業の經濟的破滅を轉回し得ないのである。

(二)

以上の如く繭の下落は原料生産として日本の農業を全く死地に陷れつゝある。かつて棉花も日本農業の主要のものであつた。然し乍ら安い原料は外國より輸入され、棉花の生産は全く亡びた。今又繭價の下落により、日本の農業の原料生産としての地位は急速に衰亡せんとしてゐる。そして殘されてゐるものは、内地人に對し、食糧を供給することが僅かに日本農業に與へられてゐるものである。然らば食糧生産としての日本農業の前途は多望であらうか? 否そうではない。即ちブルジョア政府が如何に開墾を奬勵しても、生産を機械化しても、土地飢饉は益々ひどく、食糧の需要に應じて、生産高少なく、のみならず米價は生産費に比較して安く、肥料は高く、益々多量に要するのである。だからして農家は必ずしも多く生産するを欲しないし、又生産する能はず、如何なるブルジョア政府の帝國主義的食糧政策も駄目になつてしまつた。

又土地飢饉の故に、擴大なる土地を要する資本主義的生産は急速に發達しない。しかしかくの如き困難があるにも關らず、同時に牛馬耕、機械耕の現象も除々ではあるが見られてゐる。

即ち石油發動機及び電動機は、大正九年末現在二千四百六十七であるのが大正十二年末現在では一萬一千二百九十八であり大正十四年には二萬九千五百四十一である。

一方牛馬の使用も次の如くである。

耕作用牛馬頭數(本邦農業要覽)

自明治四十四年至大正四年 平均……一、二一八、二〇一頭
自大正五年至大正九年 平均……一、三〇八、〇八二
自大正十年至大正十四年 平均……一、五二三、九八三

而して大正八年の牛馬に耕せられる耕地面積は三百十五萬四千八百一町六反なるが故に、これを大正八年の耕作用牛馬頭數二百二十二萬四千六百十五頭に割れば、一頭の牛馬にて一町五反二畝を耕作することになる。かくの如く、牛馬耕せらるゝ耕作面積は全耕地の三十六パーセントに達してゐる。

だが大部分は主として人間の勞働力にのみ生産されてゐる。かゝる事實は必然に人口の増加と共に單位面積に於ける收穫をはかるために、全力が傾注される。その爲に肥料が益々必要となる。『本邦農業要覽』によれば、内地に於ける肥料の見込高

は、次の如くである。

自明治三十八年至同四十二年平均……………五一、五二四、八八五四
自四十三年至大正三年平均……………八六、七四九、八五七、
自大正四年至八年平均……………一六二、八九四、三七九、
自大正九年至十四年平均……………二七三、六一二、五八五、

右の外に天然肥料、堆肥、緑肥、人糞尿等が用ひられその使用量も年々増大して行つてゐるものである。即ちこの天然肥料人造肥料の總消費高の推定は次の如くである。

大正十年	四九、四四五円
十一年	五二、〇八二
十二年	五九、一八二
十三年	六一、四七五
十四年	六五、二九六

かくの如く肥料は益々使用され加ふるに、排水、灌漑工事の完備が行はれ、又耕地整理の結果として、一定面積よりの收穫は、漸次増加の傾向に在る。

年次	自明治三四年至三十八年	自明治三九年至四十三年	自明治四四年至大正四年	自大正五年至九年	自大正十年至十四年
米	一、五五六石	一、六六六石	一、七五六石	一、八六四石	一、八四三石
麦	一、二六五	一、四七	一、六四二	一、六三五	一、七四四
小麦	〇、七五〇	〇、九七五	一、〇三三	一、一三九	一、一四三
麦	〇、九六	一〇五九	一、一四三	一、三二一	一、二四六
大豆	―	―	〇、七四四	〇、八五一	〇、八二六
甘藷	―貫	―貫	三六六貫	三五四貫	三四三貫
馬鈴薯	―	―	三〇七	三七〇	三五三

その中豐凶の年が加はるので、數字の上では明瞭に出てこないが、大體に於いて上昇の傾向を辿つてゐるのを見ないのである。例へば明治十二年――十六年の五ヶ年平均の反收穫量を示せば(帝國統計年鑑)

米	一・二〇石
大麦	〇・九一
小麦	〇・六〇
裸麦	〇・七九
大豆	〇・五二
甘藷	一八八貫
馬鈴薯	八四

今、大正十年――十四年の五ヶ年平均の反收穫量を、明治十二年――十六年五ヶ年平均と比較すれば、米一五二%であり、大麦は一九二%、小麦一九〇%であり、裸麦は一四五%、大豆は一六一%、甘藷一八二%、馬鈴薯三〇一%である。

以上の如く一定面積内に於ける收穫量を高めることによつて増加せる人口を扶養し、また土地飢饉を緩和せんと政府は努力してゐる。然し乍ら日本の農業も亦世界市場と關係ある以上そ

うしたことは大した效果をブルジョアジーに及ぼさないのである。即ち農民も一個の商品生産として、その時に應じて農作物を植ゑつける。

穀類とその他重要産物との作付反物の全體に對する割合比較表

品目	明治三六年×四一年	大正二年	大正八年	大正十三年
米	四一・四五%	四〇・四六%	四〇・二七%	四三・〇二%
大麥	九・五二	八・三三	六・九三	六・五三
裸麥	九・七三	九・六二	八・三八	七・六八
大豆	六・七三	六・三五	五・五七	五・八二
粟	三・一九	二・四〇	一・九三	一・六三
黍	〇・九九	〇・七四	〇・六五	〇・五一
蕎麥	×二・四一	二・〇二	一・七七	一・六四
小計	七四・五三	七〇・四〇	六五・八八	六七・一六
其他	二五・四七	二九・六〇	三四・一二	三二・八四
合計	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇

かくの如く、市場に適應するために、帝國主義政策強行の準備として、政府が如何に米作及穀物を奬勵し、肥料をやり、技術を改良して收入を一定の面積より増加するとも、世界市場と農業との關係は、稍ゝもすれば日本の穀類作の割合を減少せんとする傾向を萠してゐる。こゝに於いて帝國主義ブルジョアジーは、高率の穀物關稅を課することにより、之を防ぎとめんとしてゐる。今や食糧生産としての日本農業もより深いところの恐慌に入りつゝあるのだ。而して今述べた様に穀物耕作面積が相對的に減少しつゝあるにも關らず、消費高、特に米の消費高は、次の如く増加しつゝある。

主要穀物生産消費對照表

品目		自大正元年至五年	自大正六年至十年	自大正十一年至十四年
米	生産高	五六・六二六	五八・三五〇	五七・二一二
	消費高	五三・四六一	六二・六七五	六五・六〇九
	平均	(一・〇五九)	(一・一三二)	(一・一二六)
大麥	生産高	九・九五四	八・九三七	八・八一八
	消費高	九・七七四	九・〇四一	八・三五七
	平均	(〇・一八九)	(〇・一六二)	(〇・一四二)
小麥	生産高	五・二〇三	六・二一〇	五・五七七
	消費高	五・五四一	七・九六五	九・一二六
	平均	(〇・一〇五)	(〇・一四一)	(〇・一五六)
裸麥	生産高	八・一〇一	七・七八九	六・六二六
	消費高	八・一〇一	七・七八九	六・六二六
	平均	(〇・一五一)	(〇・一四二)	(〇・一一四)
大豆	生産高	三・五三四	三・八〇一	三・六四四
	消費高	六・五六八	七・七三七	七・九三二
	平均	(〇・一二五)	(〇・一四〇)	(〇・一三四)
小豆	生産高	〇・八七六	〇・九〇三	〇・九九三
	消費高	一・〇五〇	一・二三六	一・三五二
	平均	(〇・〇二〇)	(〇・〇二一)	(〇・〇二四)

(註)(1)單位は千石
(2)括弧内は、一人消費額、單位は石

消費高減少の爲の耕作割合の減少は裸麥以外にはない。即ち他の方は消費の増加にも拘らず、作付割合が減少してゐる。

特に大正六年――十年は日本資本主義の絶頂期であり、一人當りの消費量も大なる時であつた。しかるにこのとき作付割合は最も減少せる時であつた。かくの如く日本農業の生産は消費とは平衡しない。しからば以上の如くに表れたる數字であるならば、云ふまでもなく需要を、輸入によつて充たすより他に道がない。こゝに國内の食糧品供給としての日本農業の行きつまりを又見ることが出來るのである、今此の主要穀物輸入超過の表を見れば、

年次	大正四年	大正九年	大正十四年
米	二、三〇三 (三・九一%)	二、八四四 (四・五六)	一〇、〇七二 (一五・〇三)
大麥	△五六 (〇)	四五 (〇・四四)	△九 (〇)
小麥	△一一八 (〇)	一、一八五 (一四・七四)	四、一一九 (四〇・二三)
大豆	一、七二三 (二三・四二)	二、五七五 (三四・五五)	四、一二一 (五七・四二)
小豆	一八一 (一六・九二)	―	―
甘藷	△四・一三三千円 (〇)	三、七五九 (一・九一)	二八、〇二六 (二・七四)
裸麥	―	―	―
馬鈴薯	△二・七七七千貫 (〇)	△二、五六〇 (〇)	二、四一四 (〇)

(本邦農業要覽)

(註)(一)△印は輸出超過　(二)單位千石　(三)括弧內總消費量に對する比

以上の如く日本農業の內地人口に對する食糧生産は消費高との不均衡のため、他より食糧の輸入となる。保護關税によつても、穀價の相對的下落は防止出來ない。かくの如く日本の農業は穀價の下落によつて衰亡に向ひつゝあると共に、國內食糧生産としても、農家の窮乏は絶對的である。しかも米麥の賣買價格は生産費を償はない。だがもし日本の農業に於いて耕地面積を擴大し得て、多量生産をなすことが出來るならば、(需要に應ずることが出來る) 生産費を減少することが出來るならば、世界市場に於いて競爭し得るかも知れない。しかしソンナ事は夢である。內地人口の食糧を滿す程の生産は土地過少のために不可能である。然らば需要に對する生産の相對的減少は高い穀價を維持するであらうかと云ふにそうでもない。過小經營による過多なる生産費と、不足による食糧の輸入超過は共に農家經濟を安定せしめないし、差引利益せしめないのである。

(三)

かくの如き農業恐慌の中にあつて、日本資本主義の最も薄弱なる部分の中小産業資本の沒落は失業者を數十萬と歸農せしめ――政府は失業の歸村を奬勵してゐる――人口增加と相俟つて、農民をして益々土地飢餓に陷れてゐる。農民は今や利益のため

に農業をやるのではなく食ふためにやるのである。如何に不利益と雖も不景氣は他に仕事を見出し得ないから利害を超越して小さな土地を守つてゐるより外に仕方がない。他に職業のあるときは收支償はざる農業を離れて、都會に出たであらう。高い小作料を搾取さるゝ土地を捨てたであらう。だが今では土地から離れることは死ぬことである。だから、王番田、前田の様な數十人の刑事々件の爭議が到るところに頻發するのである。

農業恐慌は益々農家の借金を増加せしめる。借金支拂猶豫の運動が農村に起りつゝある。農家の借金は年々倍加するであらう。そのために中小地主の沒落による土地取上、それに對する反對の鬪爭は深刻を極めてゐる。即ち日本資本主義の盛花期と異なり、今農民が土地を離すことは死ぬことだからである。

土地問題を中心として、借金、稅金の問題に對して大衆的鬪爭が、今や農村にまき起りつゝある。この農業恐慌は農民大衆を大衆的に鬪爭に動員する。土地飢饉に際し土地を死守せしむる。大正十四年農林省の統計によれば、耕作面積は

五反以下	三五%
五反以上—一町以下	三四%
一町以上—二町以下	二一%
二町以上—三町以下	六%
三町以上	四%

大正十四年に於いてすらこの土地狀態である。しかも失業者の歸農せる今日尙のことである。しかも土地の増加率は明治四十三年から大正十四年迄の二十一ヶ年の間に僅か五%である。最近政府は失業者の救濟のため開墾を獎勵すると云つてゐるが、恐らく痴人の夢であらう。日本の農業に於いて資本主義の下では土地飢饉は絕對的宿命である。而して、何はともあれ、農業恐慌は土地問題の鬪爭を益々激化せしめることは、小供と雖も知ることが出來る。況んや農民運動に從事するものは如何に右翼幹部と雖も土地立入禁止絕對反對、××の土地を農民への鬪爭が農民運動の主體となることを認めるであらう。所が最近プロレタリア科學研究の四月號に於て農業問題の尊敬すべき理論家星野愼一氏は親切に僕にこのことを教示してくれてゐる。

(註)プロレタリア科學研究四月號の「農業問題」に關する二三の論點なるこの星野君の論文は注目すべきものである。有名なる農業問題の極左的理論家にして、實踐的破産者たる靑木恵一君の批評の如きは問題ではない。

その批評によれば、僕が「日本に於ける農村問題」の一二三頁以下に於て、地主の土地取上げより、賃銀勞働者の發生と農業の資本主義化を促し、新たなる一つの階級關係を形成しつゝあるを述べたるに對し、星野氏は

『もし右にのべられた事實の進行が支配的に行はれてゐるとするな

らば、小作農民の闘爭は小作料の値下げにとゞまるものであつて、土地所有關係全體の××に迄すゝみ得ない。(その前に農業勞働者となるわけだ)

農業××、小作料、小作權問題から、地主の土地××國有に迄に發展する道をとらずに小作料値下げのある程度の勝利——地主資本家への、小作人の賃働への轉形の道をとつてすゝむことになる。之は上からの農業革命である。……小作人の減免鬪爭は、平和的のある程度の減額にとゞまらない。それは××的闘爭の土地問題の解決にすゝむであらう。』

『日本に於ける農村問題の著者は農業の資本主義化の問題に注意を向けた功績を主張し得るかも知れない。しかし農民闘爭の××的性質は全く評價されてゐない。そこには平和的に小作料の減免に成功し(筆者註、小作料の減免が平和的に成功するものか、それは實に血の闘爭によつて成功するのだ)……そして忽然として地主と小作人との關係から農業勞働者との關係に變化する……と述べられてゐる。而してこの見とほしは新勞農黨の幹部であり(筆者註、殘念乍ら僕は勞農黨の幹部ではない無力な平黨員である)新潟縣の農民組合を指導する著者の政治的見解に相應するものであらうか!(プロタレリア科學研究三八頁—三九頁)』

右の星野氏の僕に對する御批評は誠に感謝するが、僕も現在王番田爭議及び最近數十町の立禁を喰つた大蒲原の爭議に携つてるので、日本に於ける農民運動の中心は土地××にあること位は身を以ての體驗で知つてるのだ。されば『日本に於ける農村問題』の二一九頁から二二〇頁に於いてブハリンのテーゼを引用し、日本に於いてもやはり、封建的遺制の殘存せる進進國に於けると等しく漸く一部が資本化したばかりの、半封建的な關係に基く土地所有に對する土地××が當面の問題になつてることを述べてゐるのだ。たゞ組合組織の弱い所、或はないところは今でも到るところに地主に土地を取り上げられてゐる。そして地主は自作し又は日雇勞働者を雇つて經營してゐる。かくの如き地主の土地取上に闘爭し得るものは堅固な組合だけだ。だからそこには××的な土地闘爭は展開されてるが、又一面に於いて地主に容易に土地を取上げられ、農業勞働者によつて經營されてゐるところもあるのだ。されば星野氏も矢張り德島縣某小作官の言葉を引用して、之等の事實を認めてるではないか? 私はこの傾向を支配的だなどゝと氣狂ひでない以上云はない。土地××が農業××の中心問題たることは、ブルジョア政府すら知つてるのだ。だからして自作創定などゝ云つて農民の土地の要求をゴマかして、滿足させようとしてるのだ。

五ケ年計畫の成果と展望

サヴエート共和國の産業合理化

高山洋吉

一

五ケ年計畫、詳しくは、サヴエート同盟の國民經濟の社會主義的改造の五ケ年計畫は、既に一ケ年半の歴史を持ち、その間、サヴエート同盟共産黨のレーニン主義的指導の下に、サヴエート同盟の勞働者農民の未聞の感激と熱意とにより、全世界の勞働者階級、植民地半植民地の被抑壓民衆の國際連帶的な××・××によつて達せられた素晴しい成果は、この偉大なる計畫の實現に十二分の保證を與へてゐる。

私は今、この計畫の初年の成果を見るのであるが、然し、その前に、抑々五ケ年計畫とはどんな計畫であるか、を簡單に紹介したい。從來わが國に於て、五ケ年計畫といふ一見平凡な名稱から、それに値ひするだけの注意が拂はれなかつたやうに思はれるからである。

經濟的に後れたロシアに於て社會主義××を建設するに當つて、最も重要な任務は社會主義的大工業を發展させることであつた。農業を改造し、プロレタリア獨裁の國の國防力を高め、そしてサヴエート同盟の國民經濟を資本主義諸國から獨立させ得る如き社會主義的大工業を發展させることであつた。そしてこの社會主義的大工業の發展こそ、サヴエート同盟に於ける社會主義建設のプログラムの基礎をなして來たのである。五ケ年計畫は、新たなる情勢の下に於てこのプログラムを實現しようとする計畫であつて、謂はゞ社會主義××の「第二の綱領」(レーニンの言葉)である。

一九二七年末に開かれたサヴエート同盟共產黨第十五回大會は、この前提から出發し、計畫經濟十年の經驗の分析の基礎の上に立つて「國民經濟五ケ年計畫立案のための指令」を採用し、翌年の第十六回黨會議は、この計畫を承認し、一九二八—一九年より一九三二—三三年を期して、その遂行に着手した。

先づ、この計畫原案の基本的な内容を略記すれば、——

(一)五ケ年計畫は、この期間に工業生產の一八〇%の增加(卽ち略ゞ三倍化)、生產手段の生產の二三一%の增加、機械製作の二五〇%の增加、及び農用機械製作の三〇〇%の增加、を豫定した。

建設のテムポについての概念は、これを計畫前のそれと比較すれば明瞭になる。卽ち、

投資額(單位十億ルーブル)	自一九二三—二四年 至一九二七—二八年	自一九二八—二九年 至一九三二—三三年
國民經濟全體	二六、五	六四、六
農業	一五、〇	二三、二
工業	四、四	一六、四
發電所建設	〇、九	三、一
運輸	一九、〇	五一、〇

(註)「インプレコル」誌、一九二九年、第九四號所載、「社會主義建設の十二年」より。

(二)大工業の發展が、社會主義建設の根幹であることは前に述べた通りであるが、今、重要工業について、五ケ年計畫前後の數字を比較して、その建設のテムポを見るならば、次の如くである。

	一九二七—二八年	一九三二—三三年	單位
工業生產	一八、三	四三、二	十億ルーブル
電力	五	二二	十億キロワット
鑛業	三、五	一〇	百萬噸
石炭	三五	七五	〃
人造肥料	一七五	八	〃

(註)同上。

工業のうちでも、生產手段を生產する部門の發展には、特に留意されてゐる。卽ち、「消費資料の生產增加は、この五ケ年間に一四四%と豫定されてゐるに對して生產手段の生產は二三一%の增加が豫定されてゐる。

(三)「資本主義諸國に追つき、そして追越せ」——これが五ケ年計畫の中心的スローガンである。サヴエート同盟は、五ケ年のあひだに、採炭額に於てはフランスを凌いで全世界の第五位より第四位に昇り、銑鐵生產では佛・英・伊を凌いで第六位より第三位に昇る豫定である。

(四)五ケ年計畫は、社會主義建設計畫である。五ケ年計畫によれば、工業總生產のうち、社會主義的部分の占むる割合は、五ケ年の間に八〇%から九二%に昇り、農業に於けるそれは、

二%から一五%に昇る豫定である。五ヶ年の後には、農業の市場生産の四三%、即ち約半分が社會主義的部分（共同經營や國營農場）によつて供給される豫定である。

（五）農業の社會主義的改造が五ヶ年計畫の大きな部分を占めてゐることは既に述べた。計畫は、この五ヶ年のあひだに農民經濟の二五%を共同經營に編入することを豫定した。五ヶ年のあひだに全農民の四分の一のものが後れた個人主義的經濟の束縛から解放されるのである。トラクター、その他幾百萬といふ最新機械が農業に供給され、農村は電化され、農産物を加工するための工場が櫛比し、全く農業に歴史的な變革が齎らされ、工業と農業とを隔てた障壁は除かれ、所謂「穀物大工場」が到る處に現出するに至る。

（六）五ヶ年計畫は、階級構成に大きな××を惹き起す。階級としてのプロレタリアートを强め、勤勞者の新しい層を社會主義的生産に引き入れ、社會主義的工場に引き入れて、一般國民經濟の上にプロレタリアートの占むる割合を急激に増加させる。また、國營農場の建設や農業の機械化を通じて、プロレタリアートはサヴエート農村に次第に有力な地位を占めて行く。これらのものを據所にして大農に對するプロレタリアートの攻撃が開始されるのである。かくして、五ヶ年計劃は、資本主義的分子に決定的な打撃を與へる。今までは大農の驅逐が問題であつたが、今や階級としての大農の廢絶が問題となり得るに至つたのである。

（七）五ヶ年計畫は、文化革命の方面に於ても、一大飛躍を齎らす。第一に、大衆の物質的文化的水準がこの計畫の遂行によつて著しく高められる。プロレタリアートの實質賃銀は、七一%高められ、五年の終りには全産業に七時間勞働日が實施される筈である。また勞働者住宅の建設には、幾十億といふ巨額が支出される筈である。

五ヶ年計畫はまた、失業を著しく減ぜしめる。從來、農村の後れた技術は貧農大衆を都市へ追ひ立てゝ、失業者數を殖してゐたのであるが、農村に於ける技術的革命は、共同經營農場、國營農場等を通じて、これらの貧農大衆を生産行程に編入して行くのである。

五ヶ年計畫はまた、勞働者階級のあひだから、幾萬の技師、技術家をつくり出し、生産行程に送ることを計劃してゐる。

そのほか、一般的な義務教育制度が施かれる（ツアールの下では全人口の三分の二以上のものが文盲であつた）、高等教育機關が從來の四倍も擴張される、大工場には銘々クラブがつくられる、夜間大學、日曜大學が著しく殖えて幾百萬の勞働者農民

を教育するやうになる、都市にも農村にもラヂオ網が張り巡らされる、等々。殊にサヴエトト同盟内の民族自治共和國や、今まで後れてゐた地方の文化的水準の高上は、驚異的なテムポで進められる。

以上私は、計畫の原案の基本的内容について列擧略說したのであるが、五ケ年計畫は單に、サヴエート同盟内の技術的組織的な問題ではない。五ケ年計畫は、世界史的な意義を持つてゐる。五ケ年計畫は、闘爭計畫である。闘爭計畫であるばかりでなく、攻擊計畫である。ロシアの先進プロレタリアートはこの五ケ年計畫を遂行することによつて、内は資本主義的分子——彼等の背後には帝國主義者が控えてゐる——を絶滅させ、ロシアに於ける社會主義の勝利を確保し、辛ふじて保つてゐる資本支配の安定を××させ、世界プロレタリアートの階級闘爭の條件を著しくよくする。と同時に國際プロレタリアートは、自國の××××のサヴエート・ロシア××を防害し、サヴエート・ロシア××の闘爭を展開して、この偉大なる計畫の完全なる遂行を擁護する。五ケ年計畫の遂行は、ロシアのプロレタリアートの問題であると同時に、國際プロレタリアートの問題であり、幾億の植民地被壓迫民衆の問題である。

二

五ケ年計畫の實行に着手されてから既に一ケ年半經過した。この一ケ年半は、階級闘爭と社會主義建設との山なす經驗を殘した。サヴエート同盟の勞働者農民は、外は列國帝國主義の强襲と國内資本主義分子の死物狂ひの抵抗との中に、全世界の他の何處にも見られぬ勞働者的感激と熱意とをもつてこの闘爭計畫の遂行に當つた。不休勞働週間、社會主義的競爭、突擊部隊等々の「偉大なる創意」は、人類の歷史にかつて見られなかつたものである。國際プロレタリアートは、全世界の隅々からサヴエート同盟の××を叫んだ。サヴエート・ロシアの勞働者大衆のこの勞働者的創意と、サヴエート同盟共產黨のレーニン主義的指導と、國際プロレタリアートの國際連帶的××とは、ブルジョアジーの期待を裏切り、日和見主義者の暗い豫想に反して、素晴しい事實を齎した。計畫された發展のテムポが、その基本的な點に於て完全に實現されたばかりでなく、多くの產業部門に於て、それを遙かに凌駕したのである。

サヴエート同盟共產黨は、昨年末に開かれた中央委員會總會に於て、第一年の結果に關して暫定的な決算を出し、それから若干の結論を惹き出した。次に、それについて、二三の數字を

擧げることにする、――

（一）工業。第一年の結果は、計畫工業（五ヶ年計畫に編入されてゐる工業）が、總生產について言へば、計畫に豫定されてゐた增加率を超えたことを示した。

	增加豫定率	增加率
社會主義的大工業の生產	二一・四%	二三・七%
生產手段を生產する工業	二五・六%	三〇・七%
電力生產	一四・〇%	二二・一%

第一年のこの結果は、第二年度、卽ち一九二九――三〇年度に於ける生產增加の豫想を著しく高めることを可能ならしめ、五ヶ年計畫の原案では一九二九――三〇年の增加率が二一・五%と豫定されてゐたに對して、三一・三%を豫定する「統制數字」が揭げられた。

然るに第二年度の最初の二三ヶ月の成績を見ると、計畫原案の水準は越すが、「統制數字」の三一・三%といふ增加率は達せられさうもなく思はれた。そしてそのために本年度に於ける全計畫の完全なる遂行が妨げられるかに思はれた。この工業計畫を完全に遂行するため、こゝに現はれた缺點を除くため、共產黨は中央委員會の指導の下に、勞働者階級のすべての力を動員した。その結果、可成りの進步は見られたが、まだ「統制數字」に示されたテムポには達してゐない。旣に第二年の上半期も過ぎた。この半年に於ける結果の總決算が出されたが、それによると增加率は二九・四%に達してゐることを示した。（「統制數字」では三一・三%）。

この上半期の成績から次の如き豫想が與へられた、――前にも述べた通り、特に生產手段を生產する部門の促進に注意と努力とが集中された結果、重工業の總生產額は、この二年間に計畫原案の五八・四%に對して、八八%の增加することが豫想される。そしてその結果、全計畫工業のうちで重工業の占むる割合は一九二七――二八年の四二%から一九二九――三〇年の四八%に高まる筈である。

今、重工業のうち二三の最も重要な部門について與へられた豫想を見れば、次の如し、――

機械製作に於ては、この二ヶ年間に二倍以上になり、全工業の一般的增加率をもまた重工業のそれをも越えることになる。

電氣工業の生產額は、一九二九――三〇年には一九二七――二八年の二・七倍（計畫原案では一・八倍）になる。

農業機械の製作では、この二年間に、計畫原案の三一・六%に對して四五・八%の增加率を示し、戰前の生產の七八%も越えることになる。

石油生産は、計畫原案の二六・五%に對し三七・八%の増加を示し、戰前のそれを七四%も超えることになる。

セメント生産は、計畫原案の六三・九%に對し、八四・九%増加するであらう。

投下資本は、一九二八――二九年には十八億ルーブルに達し、一九二九――三〇年には四十億ルーブルに達する筈である。從つてこの二年間に、計畫原案の三十九億に對し五十八億ルーブル投資される筈である。

五ヶ年計畫實行以來、工業がかくの如く急速に發展した結果、勞働者階級が數的に著しく増加し(一九二七年末の第十五回大會以來五十二萬以上の増加を見た)、失業者數は相對的にも絶對的にも減少した。その結果勞働者階級の物質的文化的狀態も著しく改善された。賃銀は高められ、七時間勞働日は益々廣い範圍に實施され、社會保險のための豫算が殖え(それは一九二九――三〇年には十四億ルーブル以上になつた)、勞働者住宅建設のための支出も増額されて、勞働者の生活も著しく向上した。

(二)農業。この期間に於て農業の社會主義的改造も一大飛躍を遂げた。貧農のみならず、中農も大衆的に共同經營に朝宗してきた。第一年の結果に關する次の如き事實が明瞭にそれを裏書きしてゐる。即ち、五ヶ年計畫の原案では第一年に於て十二萬の農場を共同經營化する豫定であつたが、事實上は六十萬の即ち豫定の五倍もの共同經營化が行はれた。その耕作面積も一九二七――八年の百四十萬ヘクターから一九二八――二九年の四百二十萬ヘクターに激増した。既に第二年の上半期の決算も出された。それによると、それまでに(即ち一九三〇年四月三十日までに)、重要な穀物地方に於て農民經濟の四〇%乃至五〇%が共同經營化された。全ロシアの共同經營化された農業の耕作面積も、一九三〇年の初頭に於て三千萬乃至三千五百萬ヘクターに達したと言はれてゐる(冬期播種の分を除く)。その結果、一九三〇年には、共同經營化された農場と國營農場とで市場向穀物の過半を供給するに至ると言はれてゐる。ヤコフレフ氏がサヴエート同盟共産黨第十六回黨のためになした報告に對してつくられたテーゼは、農業の社會主義的改造一年半の結果を確かめ、その歷史的意義について次の如く言つてゐる、――

「一、主要な穀物地方に於ける中農大衆の著しい部分が、貧農に從つて、大共同經營の利益を認識し、進んで共同經營に入り……、社會主義の途を進んだ。かくて、プロレタリアートの獨裁の下で、後れた、收益の尠い、個人主義的な小農及び細農經濟から、直接、共同的な、收益の多い大經濟に移る可能性が、理論的にばかりでなく、幾百萬の人間の經驗に基づいて證明されてゐる。

二、サヴエート同盟の多くの地方の百パーセントの共同經營化の

展開に基づいて黨は、農村に於ける資本主義的分子の制限及び驅逐といふ從前の政策から、その新たなる政策、階級としての大農の廢絶といふ政策に移つてゐる。……

三、共同經營農場及び國營農場が大衆的に發展せしめられ、大農階級の廢絶が始められた結果、サヴエート同盟の經濟體系に於ける諸關係が變つて來た。工業によつて代表されてゐる社會主義的體制と並んで、サヴエート同盟の農業に於ける社會主義的體制——それは資本主義的體制を驅逐する——が生じて來た。

四、今まで殆んど專ら社會主義的工業を基礎としてゐたサヴエート同盟に於ける社會主義的諸關係は、爾後、急速に發展して行きつゝある農業の社會主義的部分……を基礎とするやうになる。それによつて、プロレタリア革命の大きな困難、プロレタリア權力が『根本に於て工業の極く僅かな上層によつて利用されてゐて、農業が少しも觸れずにゐた資本主義の最も發展した發展形態を持たなければ何等鞏固な社會主義的關係を導き入れ得ない』（レーニンの言葉）といふ困難を克服する可能性が生じた。……」

五ヶ年計畫の第一年及び第二年の上半期に於けるこの成果は何を物語つたか？

第一に、工業發展計畫のテムポを以て架空な空想とした右翼の理論が經驗によつて覆へされた。第二に、五ヶ年計畫の遂行は中農とプロレタリアートとを分離させるものだとなす、これも右翼の主張が完全に誤つてゐたことが實證された。貧農ばかりでなく中農の決定的大衆も共同經營に大衆的に入り込んで來たことは前述の通りである。

ブハーリンを初め右翼は、第一年の成果を見て、自己の理論と主張の誤れることを認め、昨年十一月に開かれた黨の中央委員會總會に於て中央委員會に歸順を誓はざるを得なくなつた。

かくの如くにして、「×××は、理論の上ばかりでなく實踐に於てその生存能力とその優越性とその歴史的進步性を、地球の六分の一を占むる國に於ける一億五千萬の民衆の創造によつて實證した」のである。

三

社會主義建設の成功、五ヶ年計畫の成行は、かくの如く、顯著な事實である。然しこの成功も決してネヴスキーの舗石路を進むやうに平坦容易な途を通つて贏ち得られたものではない。ツアールのロシアの遺物であつた經濟的後進性、經濟狀態の小ブルジョア的性質等の不利な條件を克服し、資本主義的分子の抵抗を打ち破り、左右の日和見主義的理論や主張を斥け、帝國主義者の封鎖・干渉・××を擊退し、さうした荊の途を通つて漸く遂せられた成功であつたのである。と同樣に、この五ヶ年計劃を今後成功的に遂行し、貧農及び中農大衆を更に社會主義の途へ引き込み、大農分子に對する攻擊を強め、進んで階級として

の大農の××の政策に移つて行く途上に於ては、必ずや、國内の階級鬪爭は更に激化し、世界帝國主義及びその手先共は反露侵略を更に強化させて行くに違ひない。

かゝる客觀的情勢は、工業化及農業の社會化の問題に於て、またあらゆる種類の日和見主義に對する鬪爭の問題に於て、徹底的にレーニン主義的な方針を遂行することを要求してゐる。計畫遂行上の直接的内的缺陷や困難も克服されなければならない。右翼、及び極左翼的偏向も絶えず現はれてゐる。右翼は今まで執拗に黨の政策と對立し抗爭し來つた。然し、右翼日和見主義者に對する不斷の鬪爭は、よく黨をして五ケ年計畫の遂行に當つてこの大きな成功を贏ち得しめたのである。黨はまた、新たな裝ひをこらしたトロツキー主義、「超工業化」政策――それは結局、プロレタリアートと農民の決定的大衆とを分離せしめようとする政策である――とも言ふべき極左翼的な偏向とも鬪爭せねばならなかつた。

農業の共同經營化の遂行に關しても同じことが言へる。「地主の土地の××が農村に於ける十月革命の第一歩であつたとすれば、共同經營への移行は第二歩、而かもサヴエート同盟に於ける社會主義××の基礎の重要な段階をなすところの決定的な一歩である」。小さな個人主義的な農民經濟が社會的大經濟に移るといふやうな幾百萬の人間の生活の一大變革が、國内の階級敵の反抗や外國資本主義の包圍によつて惹き起される幾多の軋轢爭鬪を伴ふことは不可避的である。大農もまだ完全に征服されてしまつてはゐない、そして共同經營化の運動が進められれば、益々猛烈に抵抗して來るに違ひない。階級としてのこの大農を××するには、大農に對して執拗にして徹底的な××が行はれねばならない、共同經營化の遂行のために系統立つた活動が進められねばならない、農業の共同經營化の政策が成功したのも、プロレタリアートと農民の主要大衆との同盟を破壞するトロツキー主義や、工業化政策を拋棄し、國營農場の體系の完成と共同經營農場の發展を拋棄し、大農に對する屈服を説く右翼に對する徹底的な鬪爭が行はれたからだ。

黨中央委員會のこの正しいボルシエヴィキー的政策の續行は社會主義建設の今後の成功のための大きな保證である。

これと全く對蹠的な發展傾向を示してゐるのは、最近の世界資本主義の情勢である。ラブストンやペッパーの言ふところによれば此處だけは例外である筈の「繁榮の國」アメリカ合衆國から捲き起つた恐慌の大渦は、既に全世界の殆んどすべての主要諸國を呑み込んでしまつた。その直接的な結果は、極端な資本主義合理化、勞働者の生活に對する強壓、千八百萬（極めて不完

全な統計によつてもなほこの尨大な數だ）の失業、階級鬪爭の極度の××、である。印度、支那、××等に於ける反××主義××運動の素晴しい發展も、最近の情勢の最も大きな特徴である。今まで資本主義の一時的安定の動搖が問題であつたとすれば、今やその××が始まつたのである。

急勾配の下向線を×る世界資本主義、國際××的勢力の急激な強化、——これは現在の全國際情勢を貫く太い線である。馬鹿と成心ある社會民主主義者を除く何ひとも認めないわけには行かない基本的な發展の線である。

而してサヴエート同盟に於ける社會主義建設の成功がこの傾向を著しく××させる要因であることは、今更云ふまでもない。社會主義建設の成功的な遂行は、世界資本主義××そのものを脅かす。ドイツの或る反動新聞は「五ケ年計劃が成功すれば、ヨーロッパはもうおしまひだ」と言つてワメキ立ててゐるが、「おしまひ」なのはヨーロッパばかりではない。されぱこそ、列強の帝國主義者は、益々狂氣にサヴエート同盟に喰つてかゝるのである。一昨年の東支鐵道襲撃事件、アフガニスタンの反動的陰謀使嗾事件、ポーランド大使館爆破陰謀事件等を考へただけでもこのことは明瞭である。ローマ法皇を盟主とする反サヴエート宗教十字軍の組織が五ケ年計畫の第一年の成功を見たそのときに始められたのも決して偶然ではない。その他「クーチエボフ失踪事件、捏造裁判事件等々、枚擧に遑なき程である。帝國主義者のこの焦燥にも拘らず、プロレタリア××の國は未だ彼等帝國主義者に一指も染められずにゐる。これは彼等の間の矛盾對立と彼等の足下からの××的勢力によるものである。然し、このことがサヴエート同盟に對する帝國主義者の干渉の危険が瞬時も消失することを意味しないのは言ふまでもない。否、世界資本主義の××は、全世界の××的勢力の××、サヴエート同盟の存在を地球から消失せしめない限り保たれないのであり、從つて、その危機が深まれば深まるほど、帝國主義者は益々性急にこの強襲を企てざるを得ないのである。

一國に於ける社會主義の××は可能である。然し、その決定的な××を保證するものは國際プロレタリアートの行動によるプロレタリア××國の××・××・××である。

五ケ年計劃は、かくて、全世界の勞働者階級、植民地半植民地の被壓迫民衆の問題である、而してその完全なる遂行のためのもう一つの保證は、彼等の××によるサヴエート同盟××である。

紫式部論

彼女の性格・彼女の文學・彼女の時代

淺野正一

平安朝は、吾が國文學の黄金時代である。

竹取物語・宇津保物語・落窪物語・狹衣物語・濱松中納言日記・蜻蛉日記の道綱の母・枕草紙の清少納言・榮花物語の赤染衛門・更科日記の菅原孝標の女等々は、當時の文化を飾る燦爛たる一團の光雲である。だが源氏物語の著者紫式部は、此の星群の中にあつて、高く北斗の星座を占めるものであらう。

然し此處では、紫式部を頂點とする平安文化に對して、その天空の美觀を讃へる詩を書き連ねようとするのでは毛頭ない。それどころか、私は、紫式部にピントを合せた科學的なレンズで此の星月夜を覗かうとしてゐる。凡そ散文的な仕事である。然し星群の美に見とれて足許の泥沼に落込んだ御伽話の詩人より、レンズを覗く現實の天文學者の方がより慘めとは言ひ得ないかも知れない。

扨てどんな方法にせよ、紫式部を語るについて、その材料となるものと言つては、彼女の文學的な仕事である源氏物語と紫式部和歌集及び紫式部日記ばかりである。これでは到底斷言的にものを言ふことは出來ない。然し又觀方に依つては、此等の著作が、甚だ暗示的ではあるが、相當に彼女自身を語つてゐると言へないこともない。

處で先づ彼女の源氏物語である――

國文學者たちは、源氏物語を前にして、一體式部が此の物語りに依つて何を描かうとしたかについて論じ合つた。或人は、佛教の哲理だと言つた。或人は「もののあはれ」だと言つた。又或人は、正史以上の歷史と、女性の本領とだと言つた。源氏

物語は、聲に應じて響を發する美しい水精エコーだ。と言つても私は、此處で、其等の人々に伍して、ジユーノーに自由の舌を封ぜられたエコーの聲を聞かうと言ふのではない。私の關心は、式部が源氏物語に依つて何を描き出さうとしたかにあるのではなくて、源氏物語に於いて、現實に何が描かれてゐるかにある。

源氏物語に描かれてゐるものは凡そ次の四つに盡きる。それは、詩歌管絃の饗宴であり、佛事祭禮の行事であり、壯麗閑雅な建築であり、濃艶な情痴の世界である。今「すみれ草」に就いて夫等の主なものを統計すると、建築五、饗宴二十二、佛事祭禮三十、戀愛に就いては、源氏の關係ある女性十五と言ふ概數である。そして此の四つのものを除くと、源氏五十四帖殆ど何ものも殘らない。然も此等のものは、その數に於いて頻繁であつたばかりでなく、その規模もまた、素晴らしいものであつた。

乙女の卷には、六條院造營のことが記されてゐるが、その庭園の樹木・築山・遣り水の布置は「嵯峨の大井のわたりの野山、むとくに、けおされたる秋なり」といふ風情である。花宴の卷に、二條右大臣の館に於ける華麗な藤の宴の有樣が描かれてゐる。此の時、光の君は「櫻の唐綺の御直衣、ゑび染の下襲、裾いと長く引きて」といふ裝立で「花の匂もけおされ」るばかりであつた。佛事・祭禮の行事に就いては、川柳子が、「祭の喧嘩まで書いた物語」と鋭く穿つてゐるほどである。蓬生の卷には源氏の御八講のことが記されてゐるが、それに參つた禪師の君の言葉に、「いとかしこう生ける淨土のかざりに劣らず、嚴しうおもしろき事どもの限をなむし給ひぬる」とある。又情痴の世界の描寫に就いて言へば、源氏五十四帖また一篇の戀愛情史でもある。光源氏を取卷く女性は女三宮・藤壺女御・朧月夜内侍の身分貴きより身分卑しき夕顏に及んで居り、その中にあつて、紫上は、式部の永遠の女性であり、藤壺は母性豐かな女性であり、六條御息所は苛烈な情炎の女性であり、葵上は氣貴く冷めたき女性であり、朧月夜内侍は妖麗、夕顏は薄命、空蟬は清純、明石上は純情、花散里は淑順な女性である。翻つて藤壺は父帝の女御であり、朧月夜内侍は兒皇太子に參るべき女であり、空蟬は人妻であり、玉葛（此の戀は遂げられず）は養女であり、六條御息所は寡婦であり、源内侍は老女であり、末摘花は醜女である。まことに、「石山で出來た書物の柔らかさ」である。
——尤も石山で出來たといふことは信じ難いのであるが。

源氏物語の素材に於ける此の樣な特色は——そしてそれは又

榮花にしろ狹衣にしろ、當時の平安朝文學のすべてが具へてるたものであるが——どこから來たのであらうか？

平安朝時代は、大化改新と鎌倉幕府建設といふ二つの大きな社會的變動の間に挾つて、正に奴隷經濟から莊園經濟への過渡期をなしてゐる。愚管抄の著者の『寬平迄は、上古正法のすゑとをぼゆ。延喜天曆はそのすゑ、中古のはじめにて』といふ言葉は興味深い。此の如く過渡期であるといふことは、夫自體大きな意義を有つ。乍併、奴隷經濟も莊園經濟も共に單純再生產の經濟であり、然も氏の上或は莊園領主の消費を、その根本的動機とするものである。

平安朝時代が、か丶る自然經濟である限りに於いて、平安貴族の生活は、奢侈・遊樂の生活であり、『櫻かざ』せるいとまある生活であり、その文化は、文學・美術・工藝の一切は、先づ貴族の享樂の對象としてのみ、その生誕と發展とが約束されてゐる。源氏物語の素材が、右の四つのものに盡きるのも當然な話である。

源氏物語に描かれてゐる生活と、紫式部日記に描かれてゐる土御門殿に於ける人々の現實の生活とは、何と甚しい相似を示してゐることか！

源氏物語の第二卷帚木の卷の冒頭に、

『光源氏、名のみこと〴〵しう、言ひ消され給ふ咎多かるに、いとゞかゝる好色事どもを、末の世にも聞き傳へて、輕びたる名を流さむと、忍び給ひける隱ひ事をさへ、語り傳へけん人の物言ひさがなさよ』

と、突如戀の英雄としての源氏を提出されたところで、吾々は、そして當時の讀者は、——たとへ、源氏物語原典といつたものの存在を想像しなくとも、——決して唐突の感じを抱かないであらう。却て讀者は、此の戀の英雄を當時の貴族の何人かに結びつけるであらう。或人は前半の源氏を伊周に、後半の源氏を道長に擬してゐる。

か丶る素材的特徵を有つ平安朝文學の中に在つて源氏物語は、その素材の配置に依る內容の結構、形式に於ける假名文の意の儘なる驅使に於いて、一頭地を拔いてゐる。

尤も彼女の文章については異論がある。森鷗外氏は、

『源氏物語を讀む度に、いつも或る抵抗に打ち勝つた上でなくては詞から意に達することが出來ないやうに感じます。そして夫れが單に現代語でないからだといふだけではないのでございます。……

併し源氏物語の文章は、詞の新古は別としても、兎角讀み易い文章ではないらしう思はれます』（晶子新譯の序）

と言つて居られる。更に和辻氏も、此の鷗外の言葉及び鷗外氏に語られた松波資之氏の『源氏物語は惡文だ』（同書）といふ言葉（尤も此の言葉は、どうも逆説ではないかと思はれるが）を引いて、これに左袒して居られる（日本精神史研究）。然し又上田敏氏は、

『源氏物語の文章は、當時の宮廷語、殊に貴婦人語に頗る近いものだらう。……文脈に至つては純然たる日本の女言葉である。例へば冒頭の「いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに」云々の語法は、今もなほ上品な物言の婦人に用ゐられてゐる。源氏物語の文體は決して浮華虚飾のものでない。……後世の型に囚はれた文章よりも、この方が、余程、今日の口語に近い語脈を傳へてゐて、抑揚頓挫などといふ規則には拘泥しない、自然の儘の面白味が多いやうだ。』（晶子氏新譯序）

と言つてゐられる。又谷崎潤一郎氏も、源氏物語の文章を引例して、現代口語文の改良を唱へてゐられる。

紫式部の文章が時に晦澁を極めてゐることも事實であらうが、一般的に觀て、措辭の妙に依つて、よく優美繊細な趣を出してゐるといふことは言へるであらう。尤も單に優婉な趣といふことだけ言へば、それは又平安朝文學の時代色でもある。そのことは、平安朝文學を、例へばそれに先行する奈良朝文學の豪華・雄宕なるに比較するとき明かである。そして平安朝文學のかゝる時代色を有つたのは、平安朝時代が、前に述べた如く、經濟狀態の過渡期であり、その生活が、世紀末的な句を多分に有つてゐるためである。で私の言はうとするのは、紫式部の文章が、内容の結構・措辭の妙味で、此の色を效果的に（變な言葉だが）出してゐるといふ點である。

彼女の文學の此の如き優越は、勿論彼女の性情や其他個人的なる情の中に求めねばなるまい。

× × ×　　× × ×

紫式部の性格の中で、その基底をなしてゐるのは、强い世俗的な關心である。

世間的な關心は、若い式部の胸に、夙くから芽生へてゐた。彼女は、幼時から雋英なその才の閃きを見せてゐたのであるが、人々が、「男でさへ學問を衒らう人は、將來どうであらうか？ 一體に出世しない様だ。まして女は……」など言ふのを聞いて、早速その學才を包み始める。然もその包み方は又頗る技巧的である。例へば、一條天皇が、源氏物語を、人に御讀ませになつて、『此の人は、日本紀をこそ讀み給ふべけれ、誠に

才あるべし」と仰せられて、日本紀の御局と綽名されるに及んで、彼女は、「御屏風の上に書きたる事だに、讀まぬ顔を」するのである。

此の例でも分る様に、式部は、その生涯を通じて、世評に頗る敏感であつた。

儕輩の女房どもの批評に對しては、

『皆人々が、私を、莫迦に優雅で、他人に對しては交り嫌ふ様に見え、不愛想で冷淡な風をし、物語を好んで讀み、何事も故由あり相にし、とかく歌などを言ひ出して、人を人とも思はず馬鹿にしてかゝる人であると、想像して噂したり、憎んだりしたが、實際面と會つてみると、「あやしきまでにおいらかに、こと人かとなむ覺ゆる」と言ふ』

と書き、更に中宮の御批評に對しては、

『いと打解けては見えじとなむ思ひしかど、人よりけに睦まじうなりにたるこそ』

と折々仰せられたと書いてゐる。然し式部は、かく自分に對する世評に敏感であつたばかりでなく、他人に對する世評に對しても、決して平靜な氣持で迎へることが出來なかつた。殊に當時世間的評價が、學才に於いて彼女と並稱した人々に對しては彼女は辛辣な批評を加へてゐる。

和泉式部は、藤岡博士に依つて公任・好忠の上に置かれる寛弘前後第一の歌人であり(國文學史)、江侍從は、此の和泉式部と歌才を併稱された赤染衛門の娘ではあるが、紫式部は先づ和泉式部に對して「されど和泉はけしからぬ方こそあれ。……はづかし氣の歌よみとは、覺え侍らず」と言ひ、江侍從に對しては「やゝもせば、腰離れぬばかり折れかゝりたる歌よみ出で」といふ調子である。更に當時、香爐峰の雪の話でその才學を謳はれた枕草紙の清少納言に對しては、「清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。……かく人に異らむと思ひ好める人は、必ず見劣りし、行末うたてのみ侍れば」と假借する所なく辯難してゐる。

彼女は、夫宣孝との死別後、當時の女性のすべてがさう思つた様に、一度は出家を思ひ立つたらしい。然し畢るにその思を果してゐない。彼女の世俗的な關心がこれを妨げたのではあらう。源氏物語の帚木の卷で、彼女は夫に死別したのではないが、男に見棄てられて出家する女を、白眼を以て迎へて居る。

『それも人から、殊勝な心がけだなぞと煽動られ、自身にも感情が募つて來ると、そのまゝ尼にもなつてしまふ。さて、かうした發心の當座は、精神もおちついたやうで、いつかな俗をふり向かふともしない。

それで「まあおいとしい、こんなにまで、よう思ひ切つて仕舞はれ

たこと」といつた工合に、昔馴染の人々が尋れて來ては言ひ、又、今でもまだ水臭い女だと、すつぱり諦め切れないでゐる男が、それを傳へきいて、未練の涙を墮す折もあるので、召使のもの、古女房たちも、「殿の思召は、こんなにお優しいものを、あたら盛りの御身を、尼なぞに……」などゝ云ふにつけ、女も昔戀しくなつて、尼そぎにした額髮へ、そつと手をやつて見て、なさけなさに氣が滅入るので、つい沈顏になつてしまふ。初めの中はこらへてゐるが、一旦こらへ袋の緒きれ始めたら、何かにつけて、もう辛抱が出來なくなつて、今更出家を悔むことが多からうとおもはれるから、佛樣も、却て心ぎたなく思召すでございませう。憂世の濁りに染んでゐた昔よりも、かうした浮びきれない道心では、かへつて三惡道に流轉しさうにも思はれます。』と。

世間と直接何等かの交渉を有たない生活は、彼女の堪へられない所であつた。當時中宮を中心とする女房の一團と、齋院を中心とする女房の一團とが、その才藻の上で、一寸對立の形であつたが、式部は、それに對して、中宮側の辯護を試みながらも判然言つてゐる。『上臈・中臈の女房たちは、餘りに引入りすぎて高踏的な點がある樣だ。その樣な點は、中宮の御爲めには何の飾りにはならぬ。却つて見苦しいことゝ思はれる』と。式部にとつては、寂寞とした出家の生活よりも、才華の渦を描いてゐる宮廷生活の方が、――よしその才の鋭鋒を陽には包みたる證にもせよ、彼女の身を寄せるに適した天地であつたのである。

彼女は、數多の侍女にかしづかれる中宮の端麗な御姿を仰いでは、『憂世のなぐさめには、かゝる御前をこそ、たづねて參るべかりけれ』と、その日記の冒頭に記してゐる。更にその日記の隨所に、壯嚴華麗な種々の儀式の有樣が、なみ〳〵ならぬ關心を以て描かれてゐるが、中宮御産養の夜の御儀に感激しては、夜居の僧の伺候する御屛風をそつと開けて隙見させ、『此の世には、かう芽出度きことまだ得見給はじ』など言ふ彼女である。

又彼女は、こまといふ人を批評して、その美を讃へた後、『昔はよき若人』であつたが、『琴柱に膠さし』た樣に、處世の融通が利かず、今は里居してゐるといつて、その宮廷を辭したことに慊らぬ口吻を洩してゐる。

彼女が、出世の障碍だと聞いてその學才を包み始めたことは既に述べたが、中宮に參つてからも、こんな事があつた。それは、若宮をもうけられた中宮の土御門殿へ、御幸のあつた翌日であるが、宮の家司・別當・おもと人等の職が定つた。それに對して彼女は、『かねても聞かで妬たきこと多かり』と、甚だ不平なのである。

こんな世俗的な關心の強い式部も、時にはその世俗的な交渉の煩しさに打負かされて、弱々しい氣持になることがある。

中宮が土御門殿から御參内の夜、彼女は、右馬の中將と同車にて御伴するのであるが、此の女が、面白くない相手と乘つたと思ふ振りをするので、式部もすぐ反感をそゝられるが、相手の態度は、可成り露骨なものであつたらしく、式部は、『いとゞかゝる有様むづかしう思ひ侍りしか』と嘆じてゐる。彼女は又華麗優艶な宮廷生活の中にあつて、胸を壓する哀感に襲はれて、時々出家を思つたことが、日記の隨所に見えてゐる。然し彼女は畢るに宮中生活に別を告げることが出來なかつた。彼女の世俗的な關心が、此等の煩雜さに打克つたのであるが、又彼女の性格の一面に、なんとなく飄逸なところがあつて、――兄惟規にもそんな一面があつたのであるが――此の性格が彼女を慰安してくれたらしい。例へばすぐ前に引いた右馬の中將の話であるが、車が大裏に着いて、女房たちが降りると、月が隈なく照つてゐて、歩くのが極りが惡く、足も地につかない程だが、式部は、その時、右馬の中將が、前に立つて行くのを見て、車の中では、あれ程反感を示し合つた女であるが、平氣でその陰にのこ〳〵と隨いて行く。そして誰か自分の滑稽な歩き振りを眺めてゐるかも知れぬと思ふが、『我がうしろを見る人、恥しくも思ひ知らるれ』と言つて澄してゐる。

源氏に於ける近江の君・末摘花・源内侍の描寫は、藤﨑博士の『讀者の笑を博する』ものである。日記に於いても、道長の醉態の描寫は、特に冴えてゐる。例へば、寛弘七年正月二日の饗宴が果てゝ、酩酊した道長が、『中宮が長い間御子様がおゐでならなかつたので、淋し相にお一人おはした御姿を、私は淋しく見奉つてゐたが、今は、「斯くむつかしきまで、左り右りに見奉るこそ嬉しけれ」』と言ひながら、寢入つて居られる宮たちの衾を引開けて、覗かうとするあたりや、又酩酊の折ではないが、道長が、若様を抱き奉つておしとをかけられ、『あはれ、此宮の御しとに濡るゝは、嬉しきわざかな。これ濡れたる炙るこそ思ふやうなる心地すれ』と言ふあたりの描寫は、優れた諧謔味を湛へてゐる。

×　×　×　　　　×　×　×

式部は、その青春その戀愛をも、此の世俗的な關心への犧牲に捧げたのではないかとさへ思はれる。

平安朝の女性は多情多恨の和泉式部は言はずもあれ、――何れもその時代に相應しい華やかな戀愛の面紗を被つてゐる。たゞ紫式部には、そのことがなかつたらしい。と言つても式部の性格のどこかに、情熱の火が潜んでゐた事は、何人も否定が出來ないであらう。源氏物語に於いて、光の君の胸を去來して消

えない藤壺への思慕、紫の上を失つた彼の慟哭、薫大將と匂宮の戀の的となつた多感な浮舟の投身――此等を描く式部の筆は沈める情熱を湛へてゐる。此の情熱を式部は、世俗的な關心の犠牲に供した。――といふ意味は、二重の意味に於てゞある。一は後に説く様に此の世俗的な關心が、物語創作の『野望』に凝集されるのであるが、此の『野望』が戀愛を顧みる餘裕を與へなかつたらしいことである。此れはたゞ源氏創作に對する彼女の抱負等から、さう推測するのである。一は、例へば蜻蛉日記の作者の様に、戀愛に身を托した女性の多くが味はされた様な、男に棄て去られた悲慘な境遇に對する、彼女の世俗的な關心の警戒である。

彼女は、夜もすがら渡殿の戸を叩く道長に、遂に戸を開かなかつた。

又或る『月いと面白き』夕暮、實成中宮權亮が加階の御禮に中宮にやつて來る。齊信中宮大夫もやつて來る。然し御殿は、『御湯所のけはひに濡れ、人の音』もしない。二人は、式部の局を叩く。然し式部は、はか〴〵しい應答をしない。却つて彼女は、『若やかなる人々こそ、物の程知らぬ様に』淺はかな振舞をしても許されるであらうが、自分は思慮すべき年輩だから愼まねばならぬと考へてゐる。

又或時式部が、小少將の君と一緒に局にゐると、道長がやつて來て、『御二人でゐられることです。相手の知らぬ人を、そつとお引入れあるな』と、露骨な冗談を言ふのに對しても、『さるうと〳〵しき事なければ、心やすくてなむ』といふ戒心振りである。

かく觀て來ると、源氏物語の主人公光源氏が、多くの女性と交渉を有つが、然し一度び交渉を有つた女性には、長くその面倒をみる『多情佛心』の持主に描かれてゐることは、意味が深い。式部は光源氏を、多情一扁の當時の物語の主人公交野の少將と對立して、『さるは、いと世を憚かり、まめだち給ひけるほどに、なよびかにをかしき事はなくて、交野の少將には笑はれ給ひけむかし』（帚木の卷）と辯護してゐる。又乙女の卷で、夕霧が、父源氏の花散里に對する情愛を評して、『かゝる人をも、人は思ひ棄て給はざりけり』といふ嘆辭は、又式部自身の感慨でもあらう。

此の戀愛に對する彼女の戒心を深めた今一つの理由がある。それは彼女が大した美貌の持主でなかつたらしい事實である。尤も後世の源氏供養では、紫式部は、石山觀世音の生れ變りな

どにされてゐるが、これはどうも容貌には關係がない。

或る『しめやかなる夕暮』式部と宰相の君とが、物語りしてゐると、そこへ若き貴公子賴通が簾のつまを引擧げては入つて來る。さて彼は、『うちとけぬ程にて』女郎花多かる野邊に宿りせば、と、口誦みながら立つて行くのであるが、その時、此の若年好色の貴公子が、二人の年增の女と交はした會話の內容は凡そ想像されるが、その中で、彼は『人は猶心ばへこそ難きものなめれ』と言ふ。此を聞いてゐた式部は、日記の中で、賴通に對する『稚し』といふ世評に反對して、『年の程よりはいとおとなしく、心にくき樣』と感心し、此の夜の一寸した會話を、何時までも忘られないでゐる。此時の賴通の言葉が、『心ばへ』のみを問題として、容色を問題としなかつたことに意味を見出す事は出來ないであらうか。

又式部は、明瞭の宣旨の君の楚々たる美しさを讃へた後で、

『宣旨の君が物かげから步いて來られる姿も、眺めてゐる自分自身、己が姿はどうか知らと、心恥きせられて、氣の品ある人といふのは此の樣な人を指すのであらうと思はれ、心ばえや物の言ひつきもかうか知らと思はれる』

と言つてゐるが、宣旨の君の淸楚な美の前に壓迫されてゐる式部の姿が見える。

所で彼女の世俗的な關心が、安全を保證する範圍內では、時々彼女の中の『女性』が頭を擡げて來る。

中宮御產の祝宴の夜の事である。

道長始め皆亂醉して席が亂れて來る。公卿は泣き出す。齊信は女房に戲むれる。道長は露骨な冗談を飛ばすといふ有樣である。式部は、宰相の君と相談して逃げ出さうとする。然し人々が立騷いでゐるので、出て行くことが出來ず二人御帳のかげに隱れる。然し到頭道長に見付かつて、御帳をとり拂はれ、『二人ながら捕へ据ゑられて、和歌一つづゝ、詠まされる。だが日記の此處の敍述は、酒席の狼藉を厭ふ式部よりも、多少蓮つ葉な式部が出てゐる。几張のかけは、素晴らしい思ひ付きだつた。顯光などは、初めから此處を狙つてゐる。

最後に一つ面白い事實がある。それは新に載集に收められた彼女の『逢ひみんと思ふ心は』の歌に、『淺からず賴めたる男の、心ならず肥後の國に罷りて侍りけるが云々』といふ詞書が附けられてゐる事である。たゞ紫式部和歌集には此の詞書がなく、又此の男に就いても何等此以外知る事が出來ないので、此の事實に付いて、此以上想像を逞しうする事は出來ない。

×　×　×

×　×　×

式部の世俗的な關心の強さは、明かにされた。

ところで如何なる時代にあつてもその時代の文化――更に又その如何なる領域であるにしろ――の核心に立つ人物は、常に此の如き強い世俗的な關心乃至『野望』の持主であつた。

社會は、勿論その必然の過程の中に、多彩の文化を織り出して行くのではあるが、然し又此の必然の流れに、進んで棹ささうとする熱意を以て、積極的に社會に働きかける人々だけが、初めてよくその社會を、そして又その社會の思潮を率ゐ得るものである。何故なら、社會の歴史は、過去から手渡された一定の條件の下に於いて、造られるのではあるが、これを造るものは、畢に人間自身に外ならないから。

例へば明治文學を觀ても、根岸派の領袖子規の『野心』の火は、その死の病床にあつても、猶熾烈に燃え續けてゐた程である。平安朝文學についても、單に藝術的な深さといふ點からばかり言へば、枕草紙の清少納言は、或は紫式部の上にあつたであらう。然し猶當時の代表的才媛として、紫式部の名が先づ擧げられるのは、實に式部の有つ強い世俗的關心――その關心が書かしめた、源氏五十四帖の膨大な精力的な著作である。勿論それが藝術的な價値を有つてゐなければ問題にもならないが。

式部の有つ強い世俗的な關心が、源氏物語といふ大部の小説の創作に凝集されたことについては、猶式部の個人的な諸事情を考慮に上さねばならぬ。

式部の家には、文學者の血が流れてゐた。彼女の曾祖父は、堤中納言物語の作者と傳へられて居り、父爲時は『才有つて世にめでたく優しかりける人』であり、源氏物語さへ彼の創作だといふ説があるほどである。又彼が『苦學寒夜、紅涙霑襟、除目の後朝、蒼天眼に在り』の詩句に依つて、道長の拔擢を受けた事は有名な話である。兄惟規は、泣菫氏の『中有』(茶話)の主人公と思はれる才人である。彼は、臨終の床に、經文の功德を説く法師ばらに、中有の野にも『風にたぐふ紅葉、風に隨ふ尾花などの下に、松蟲の音など聞ゆる』かと反問した男である。

此等父兄の血を享けた式部の天禀は又十分の教養に依つて磨かれた。

彼女に十分の教養を與へたものは、――少々話が逆轉するが――先づ第一には當時の好學の風潮である。

當時大化改新に續く氏族制度の崩壊は、氏族間の婚姻の制限を全く撤廢し去つてゐた。源氏の藤壺や朧月夜内侍に對する關

保は、此事情を暗示するものである。從つて一般貴族の間には××××××、經濟的優勝者は、此關係に依つて、その地位の確保繁榮を期し、經濟的劣敗者は、此關係に依つて經濟的優位を獲んとする風潮を産んだ。從つて子女の教育には周到の用意が盡された。又君寵を競ふ後宮の女性が、爭つて學才ある侍女を召出してその勢力を張らうとした事が、女子好學の一原因ともなつた。皇后に於ける清少納言、中宮に於ける紫式部の對立は興味深いものがある。尤も中には、源氏物語の藤式部の情人の様なすさまじい賢女（帚木の卷）も現れたのであるが。

それと今一つ、當時の文學が、必然に女性文學たるべき運命を有つてゐた事が、又女子好學の刺戟となつた。當時の文學が優艶纎細の文學たらねばならなかつた事は前に述べたが、當時の男子は皆漢文を用ゐて居り、假名文は、僅かに女性の間に用ゐられるに過ぎなかつた。それは、紫式部日記に、清少納言の衒學を誹難して、「さばかり賢しだち眞字書き散らして侍るほども、よく見ればまだいと堪へぬこと多かり」と言つてゐるのを觀ても明かである。ところで優艶纎細の文學の形式として、假名文の優れてゐることは、言ふまでもない。果して、假名文は流行を極めて「萬づのこと、昔には劣りさまに淺くなり行く世の末なれど、假名のみなん今の世は、いときはなくなりたる」（梅枝の卷）といふ有様である。

然し式部が、此の女子好學の風潮に十分浴することが出來たのは、矢張り彼女の家庭の事情乃至彼女の天禀である。

父爲時の正五位の位は大したものではないとするも、國司の官は内福を思はしめる。然も此の官が、道長の拔擢に依るものであることは、此の想像を强める。で彼女の家庭に於ける教養に缺けるところがあつたらうとは思はれぬ。殊に式部の親は、彼女自身「書に心入れたる親」と記してゐるほどである。

彼女の學識は、年とゝもに深められ博められた。日本紀の局の綽名のことは前に述べたが、又或時は、私かに中宮に樂府をお敎へして、道長夫妻を驚かした。

源氏五十四帖が、當時の物語の集大成とも觀られることや、卷中の引用が、和漢に亘つてゐることや、更に源氏や日記の隨所に現れてゐる彼女の音樂・和歌・繪畫等に關する識見（若菜の卷・帚木の卷・日記中の消息文等）等は、何れも彼女の博學を物語るものである。

彼女の才學・彼女の情熱・彼女の諧謔――これに冷徹な觀察力が、附け加へられゝば、長編の物語の作者としての主觀的條件は略々間然するところなく具はるであらう。

彼女が、かゝる觀察力の持主であつたことは、此處に詳しく說くまでもない。

中宮御難產の折、人々の立騷ぐ中にあつて、侍從の小中將の君や宰相の君の、化粧くづれや顏がはりに、冷やかな觀察を向けてゐる彼女である。そして帚木の卷に於ける雨夜の品さだめや、日記中の儕輩の文才の批判は、彼女の觀察の冷徹を證明するものである。

そして彼女は、一度び物語創作の筆をとるや、「よきも惡きも世にふる人の有樣の、見るにも飽かず、聞くにもあまることを、後の世にも言ひ傳へさせまほしきふしぶしを、心にこめ難くして言ひ置きを始めたるなり」（螢の卷）といふ程の抱負に燃え立つてゐる。

平安朝の文運の隆盛と文人の輩出の中にあつても、矢張り紫式部を缺いてゐたならば、此の如き物語の大作は、畢に生れ出なかつたであらう。

× × ×

最後に――源氏物語其他に反映された平安貴族の行樂漁色の陰には、陰慘な奴隸や農奴の生活の潛んでゐることを忘れてはならぬ。絢爛華麗な平安文化は、此等奴隸や農奴の搾取の上に開いた幻華である。

源氏物語の中に於いてさへ、吾々は、下層の民の悲慘な生活を覗ふことが出來る。

源氏が夕顏と五條の宿に一夜を過した明け方である。「隣の家々のあやしき賤夫の聲々」が聞えて來る。

『あはれ、いと寒しや。今年こそ、なりはひも賴みところ少く田舍の通ひも思ひかけねば、いと心ぼそけれ。北殿こそ聞き給ふや』

更に地方に於いては、氏族社會の遺制が強く、その搾取の有樣が一層悲慘を極めた。壓迫に堪へかねた農民は、一揆を企て國司を襲ふものもあり、又群をなして逃亡するものもあつた。此等は、中央に於ける零落貴族の餘儀なき土地からの離脫と相俟つて、彼等の哀れな流離漂泊の生活が始まる。そのうちに彼等の一部分は、止むなく剽盜となつて、山野や海上を橫行する。當時地方の物騷であつたことは固よりであるが、然し此等の剽盜は、京洛の地をも脅したのである。芥川氏の『運』で、女にそれこそとんだ幸運を與へた盜賊は、八坂の塔に巢喰ひ、「羅生門」の、論理の鋭い然し腹の減つた男は、其處で物とりの老婆から、更に略奪してゐる。

紫式部日記にも、寛弘五年の晦日の夜、追儺が濟んで、式部が辨内侍と一緒に自分の局にゐると、御前の方で、たゞならぬ叫聲がする。慌てゝ騙けつけてみると、二人の女房が、追剝のために、無慘に裸體にされてゐるといふ始末である。

× × ×　　　× × ×

源氏物語は、吾が國文學に於ける一大收穫であらう。更にそれは又世界の文學に於いてさへ、相當の地位を要求すべきものであらう。

此の如き文學を産んだ紫式部の文才は素晴らしい。然し又此の如き才女を産み、その文才に活動の地を與へた平安朝の時代は、更に素晴らしい。然し又此の如き平安朝時代の『アトラスの肩』となつた奴隷や農奴の受難は、更に々々――『素晴らしい』ものではないか？　では次の引用を以つて、此の拙い評論を終らう。

『奴隷制度は、……從つて又古代世界の花たるギリシヤ文化をも可能ならしめた。奴隷制度なくして、……ギリシヤの藝術及び科學はない』

紫式部の評論は、古くに安藤爲章の『紫家七論』より、近くは手塚氏『源語及び日記より見たる紫式部』に至るまで、殆ど論じ盡されたかに見える――私の言はうとするのは、紫式部の有つ主觀的條件が、彼女の強い世俗的な關心に裏打ちされてゐること。此の世俗的な關心と、それに裏打ちされてゐる其他の主觀的諸條件が、客觀的な諸條件に規定されつゝ、彼女の偉大なる文學を産んだといふことである。分かり切つたことである。全く分かり切つた――たゞ『コロンブスの卵』を倒立ちさせた先學に眞似て、私もまた卵を倒立ちさせ樣としたゞけである。

原文の口譯は、王朝文學叢書源氏ものがたり・永野氏『紫式部日記評釋』に依る、

手塚氏『源氏物語の新研究』池田氏『宮廷女流日記文學』藤岡博士『國文學全史――平安朝篇』西岡氏『日本文化史――平安朝中期』竹岡氏『同――平安朝末期』

資本蓄積と資本主義の崩壊

——グロースマンの蓄積論並びに崩壊論の批評の一節——

E・ヴァルガ

學者にしてその處女作(註一)の中でかくも際限のない自惚を臆面もなく曝け出した點においては、おそらく未だH・グロースマンに優るものはないであらう。序論の中で既に彼は、自分の研究の結果、

「何よりも先づ第一には、マルクスの『資本論』の基礎となつてゐる方法が改造され、第二にかうして得られた基礎の上に於てはマルクスの理論的體系の重要なる分野が本質的に新しい光明の下に描かれてゐる。この新たに得られた認識の一つは、カール・マルクスの經濟的思想體系の中で大黑柱をなしてゐる次の如き崩壞理論である。」(註二)

と宣言してゐる。

(註一) ヘンリーク・グロースマン、「資本主義的組織の蓄積＝並びに崩壞法則(併せて一つの恐慌理論)」、ライプチッヒ一九二九年。

(註二) V頁、傍點は——他にことはりのない限り——グロースマンによつて附せられてゐるのである。

謙遜なんかしてゐるのは見すぼらしい人間だけだ！ グロースマンは、すこしも謙遜と云ふことを知らぬ。マルクス主義を救はふといふ彼の將來の功績をもう一度強調するために、彼は二三行先で次のやうに聲明してゐる、

「從來のマルクス研究の狀態が不充分であつたと云ふことは、惟ふに今までマルクスの研究方法について明確な考へが持たれなかつたばかりでなく、異樣に聞えるかも知れぬが、これが少しも考へられて居なかつた、といふことに歸せらるべきであらう」(傍點はヴァルガ)。

從つて、「異樣に聞えるかも知れないが」、「今まで一人としてマルクスの研究方法のことを考へたものはなかつたと言ふのであ

る！　それ故、グロースマンも亦、すべてのマルクス主義者を特徴づけるのにたゞ誹謗の言葉しか持ち合せてゐない。プレハーノフはかつて言及するだに値ひしない！　レーニンは、鄭重な言葉を用ゐてではあるが、帝國主義の理論家として拒けられてゐる！（吾々は、後でこれを問題にする）。否、エンゲルスさへ幾度も、マルクスの學說を誤解してゐると言つて非難されてゐる。（註）最後にマルクス自身でさへも、資本主義の崩壞を說明せんとして「無理なスタートを敢てした」と言つて、非難されてゐるのである、――「人々はこゝで最後の解答が與へられるであらうと信じてゐる。然し、解答は與へられて居ない。そこでマルクスの崩壞學說に關して疑ひが生じたのである……」（一五頁）。たゞ獨りグロースマンのみが、マルクスの「無理なスタート」を體系的な理論的全一體に齎らす……ところの、神の意に叶つたマルクスの解釋家であり、補足者であるといふのだ。

（註）「エンゲルスはこの問題（資本の回轉に際しての貨幣資本の遊離）を甚だしく過少評價し、剰さへ誤解した……」（三九四頁（傍點はE・ヴァルガ）。一九五頁では彼グロースマンは、エンゲルスとモーアとが利潤率と剩餘價値率との割合に關する章に間違つた手の入れ方をしたと言つて非難してゐる。「此處には誤解したり誤りを犯したりする機會が澤山あつたこと、またこの誤りがそれから利潤率の傾向的低下の章にも……容易に移され得たといふことは、豫め信ぜられることである」等々。

吾々はこれから、わが英雄が如何にマルクスの方法を改造してゐるかを見たいのである。

グロースマンは、マルクスの研究方法を絶對に理解してゐない

マルクスの方法を改造した最初の人としての功績を自分に歸しようとするグロースマンの豪勢にも拘らず、吾々は敢て彼グロースマン自身こそマルクスの方法を理解してゐない當人だと主張するものである。吾々はこのことを先づ第一に、彼がロシアに於ける資本主義の倒壞について口を緘して語らないことによつて證明しようと思ふ。

グロースマンの考への主たる道筋は――先廻りして極く簡單にスケッチすれば――、次の如くである、

「新調和論者」の見解とは反對に、マルクスの思想體系は崩壞學說を含むでゐる。「資本主義的生產方法の沒落の必然性を……資本主義的生產方法そのものの嚴密に科學的な分析によつて正確に敍述すること――これこそはマルクスが『資本論』の中で打ち立てた本來の任務であつた」（五頁）。グロースマンは、資本主義が「純粹經濟的に」、過剩蓄積から生ずる資本の不充分な價値實現の結果、「經濟的に許されなくなり」、崩壞せねばならぬ。とい

ふことを説明することによつてこの問題を解決してゐる（六四頁）。注意せよ、マルクスの言つてゐるやうに「蓄積の刺戟を鈍らせる」利潤率の低下のためではなくて、もつと以前に高い利潤率の場合においても價値實現の不可能の結果、崩壊する、といふのである。

吾々は今、次の問を提起せねばならない。

グロースマンは、地球上の六分の一を占むる領域に於いて資本主義が既に一九一七年に於いて、崩壊してゐることにたゞの一言も言及せずに、一九二九年に資本主義の崩壊の必然性についての一書を著したときに、果して彼れは本當にマルクスの研究方法を適用して居ると信じてゐるのか？　彼は、既に十二年來事實としてロシアに存在してゐるところの資本主義の崩壊の具體的諸原因を研究せずに、來るべき可能なる崩壊に關する理論的演繹法を實在に卽せしめることなしに、資本主義的體制の今後可能なる——必然的ではあつても——崩壊の原因を演繹法によつて抽象的に研究することがマルクスの方法だとでも信じてゐるのか？　マルクスは、決してかゝる態度を彼の方法と認めたことはなかつたであらう！　マルクスは具體的な現實を最も愼重に研究した。對象の本質に、辨證法的運動に具體的に近づくために、彼は幾年も讀み、拔萃した。彼は「資本論」第一卷の第二版への序言の第十七頁に於て言つてゐる。

「勿論敍述の方法は、形式的には研究の方法と區別されねばならない。研究は材料を細大洩れなく探り集め、その種々なる發展形態を分析し、そしてこれらの諸形態の內的紐帶を探し出さなければならない。この仕事が完成した後初めて現實の運動は、適當に敍述され得る。この敍述がなしとげられ、そして今材料の生命が觀念的に反映するならば、問題は宛も先驗的に組みたてられて居るかに見えるかも知れない。」

一九二九年に於て、既にロシアに於いて起つた資本主義の崩壊について一言も言及することなしに、資本主義の「崩壊法則」について六百頁の本を書く勇氣を持つてゐる者は、たとひマルクスの引用を山程積んでも、マルクス主義の方法について如何に該博な考證をしようとも、——彼は、マルクス的研究方法のイロハさへ理解してゐない！

（註）ハンガリーに於けるブルジョアジーの一時的倒壊は、ロシアに於けるブルジョアジーの倒壊に比すれば全く小さな出來事であつた。それにも拘らずレーニンは、私に直接、幾度も、ハンガリーに於けるブルジョアジーの倒壊の歷史を書くやうに促した。彼は拙著を「世界のすべての言葉に飜譯させよう」と言つた。レーニンは短命なりしハンガリーの獨裁が資本主義の今後の運命の認識にとつて有する意義をかくも高く評價した。然るにグロースマン氏は、ロシア

革命を默つて通り過ぎ、而かも自分がマルクス主義者だと信じてゐるのだ！

何故にグロースマンはかくも執拗にロシア革命に關して沈默を固執してゐるのか？

彼が頭から事實に反對しようとしてゐるためなのではない、彼は實に彼の理論を證明するために全世界を探し廻つてゐる（註一）、彼は、既に十七世紀のオランダに於いて、資本の過剩蓄積を發見してゐる——従つて、マルクスの言へる如く「ブルジヨア社會」が漸く「準備」せられてゐた時代に於いてすでにこれを發見してゐるのである（註二）。（にも拘はらず、資本主義がオランダに於いて何「崩壞」してゐないのは、注目に價する！）

（註一）　彼はまた歷史の中で多くの證明材料を發見してもゐる、けれども吾々はレーニンの賢明なる言葉を忘れてはならない。「社會的生活の現象はおそろしく複雜してゐるので、どんなテーゼをも確認するに適した例や個々の材料を好む數だけ見つけることは何時でも出來る。」「帝國主義論」のドイツ版への序言——

（註二）　マルクス「經濟學批判の序說」十三頁。

グロースマンによれば資本主義の崩壞を惹起すと言はれてゐる原因が、ロシアに於いて事實上起つた資本主義の崩壞に際して何等の役割をも演じなかつたことは全く明瞭だから、彼れがロシアに於ける資本主義の倒壞についてかくも執拗に沈默を固執してゐるのだ。事實、資本主義がロシア——周知の如く資本に甚だ乏しかつた、そして絶えず多額の外國資本を輸入してゐた——に於いて資本主義が資本の過剩蓄積で崩壞したと主張するのは笑ふべきことであらう！　ハンガリーに對しても同様に資本の過剩蓄積などを確認し得ないであらう。其處でグロースマンは生粋のタルムド法律學者として彼の理論と現實との對審をおそる〲避けてゐるのである。それ故吾々は問はねばならぬ、——資本主義の「不可避的崩壞」の原因についての理論も、この原因が資本主義制度の崩壞の二つの現實の場合に絶對に適合しないとしたら、何の價値があるか？と。尠くともグロースマンは、資本主義支配が彼れの想像上の原因以外の原因によつても崩壞し得ることを承認せねばならない。昔の論理が正當にも言つてゐる如く、De esse ad posso valet consequentia ——或るものが既に存在するときその可能性を否定することは出來ない、のである。

吾々、戰鬪的××××者は、資本主義の現實の崩壞が、グロースマン氏によつて鳴物入りで吹聽された原因のメカニズムと關係してゐないので、大いに安んじて可なりである、蓋し、贋マルクス主義者グロースマンの間違ひのない崩壞公式は、——後

に吾々が示す如く——資本主義の壽命を幾百年にも延ばしてゐるが、資本主義の不可避的崩壞について浩澣な書を書くばかりでなくなほ他の國々に於て資本主義を倒壞させるために積極的に働いて居る純粹のマルクス主義者は、全世界の資本主義が近い歴史的將來に於いて、全世界にくまなく資本の「過剩蓄積」が起り得る遙かに前に、××することを期待してゐるからである。

然し、グロースマンが、ロシアやハンガリーの資本主義の具體的な崩壞の分析を心配げに避けてゐるのには、もう一つの理由がある。何となれば彼の見解——それはルクセンブルグのそれと一致する——によれば、戰爭は、過剩に蓄積された多大な資本を破壞することによつて、資本主義の崩壞を延期するからである。彼は書いてゐる。

「資本主義の崩壞を促進させた……事情であるどころか……戰爭の齎らす諸々の破壞と價値低下とは寧ろ、迫り來る崩壞を弱める手段なのである。」(三六九頁)。

今やロシアに於けるブルジョアジーの倒壞の歴史を少しでも知つてゐるものには何人にも、戰爭が崩壞の最も重要な原因であつたこと、戰爭に敗れなかつたならば「帝國主義戰爭が××に轉化」しなかつたならば、この倒壞はそのときはまだ起らなかつたであらうといふことは火を睹る如く明かである。戰爭が崩壞を引き延ばす作用をもつてゐるといふグロースマンの理論は、事實の前に虚僞の責めを問はれて居る(勿論吾々はその反對の誤謬に陷り、プロレタリア革命の勝利が戰爭の結果としてのみ可能であると考へてもならない!)グロースマンが心配げにロシア革命に觸れることを避けてゐるのは、それが戰爭に關する彼の理論と全く合はないからである。

戰爭に關する判斷の例で、グロースマンの辨證法的方法に對する全くの無理解が暴露されてゐる。彼にとつては戰爭は戰爭であつて、何の辨證法的具體性もない。どの戰爭も崩壞を引延ばすといふのである。辨證法的マルクス主義者にとつては、事態はこれと異る。戰爭が、賣れない商品の大ストックがあつて恐慌の切迫を告げてゐるやうな瞬間に勃發し、それが自國の領土外で行はれ、あまり永く續かず、おそらく新植民地領土を獲得して勝利に終るならば、さうした戰爭は崩壞を引き延し得る。戰爭が永く續き、それが自國の領土で行はれ、敗北に終れば、それは事態を「崩壞」に、切迫した××的情勢に近づける、而してさうした場合に於いては「到達せられたる」資本の過剩蓄積の程度」ではなくて、××に於いて××を手にした鬪爭が、資本主義的社會體制の崩壞か存續かを決するのである。「戰爭」が崩壞を引き延ばすといふグロースマンのテーゼは、機械的であ

り、非マルクス主義的であり、眞實ではない。世界戰爭がもつと續いたら、ハンガリーに於けるプロレタリアートの孤立した、短命な××の代りに、ヨーロッパの廣い範圍に於けるブルジョアジーの××の最後的倒壞があつたであらう。

更にまた、グロースマンは帝國主義戰爭を資本主義の辨證法的過程に於ける一要素とは見ずに、何か外部から作用するもの、偶然的なものと見てゐる。彼は書いてゐる。

「瓦解は(ブハーリンにあつては)經濟的な諸根據からではなくて、資本主義の機構そのものの不可避的な、固有の經濟的合法則性によつてではなくて、戰爭によつて、外部から生産機構に破壞的影響を與へる經濟外の力によつて起る。」……さうした崩壞は「經濟の内部で働いてはゐるが、それにとつては超越的な、原因の啓示である」(四七―四八頁)。

從つてグロースマンは、一面に於いて「崩壞」をば、同時に競爭、對外貿易、資本輸出及び恐慌の原因でもあるところの唯一の原因、過剩蓄積に歸しつゝ、(彼は唯一の原因を獲るために、他のすべての矛盾を否定してゐる)、他面に於いて彼れは資本主義的發展の總過程をば機械的に經濟におけるものと「經濟外の力」としての戰爭におけるものとに分離して居る。これは全く非辨證法的、且つ非マルクス主義的である。

非辨證法的な、從つてまた非マルクス主義的な見解は、全卷に溢れてゐる。彼れは、經濟を階級鬪爭から引き離してゐる(註)、それ故彼の「崩壞」は資本主義的社會體制の倒壞ではなくて、純粹に經濟的な空想である、資本家が――彼等が如何なる事情の下に於いても、どんなことがあつても、グロースマンの百パーセント承認してゐるところのオットー・バウエルの公式に從つて、蓄積するならば――蓄積を最早繼續し得なくなる時點の到來である。崩壞は、グロースマンにあつては、階級支配の終焉ではなくて、實に、ブルジョアジーが最早やオットー・バウエルによつて豫定せられた規模で蓄積を繼續し得なくなることなのである。

(註) 序言の中で彼は、自分が「生粹の經濟主義」と疑はれないために、注意をしてゐる――「經濟と政治との間の關係について――と彼は言ふ――一言だに費すことは餘計なことである」――言葉を費すのは餘計なことだが、階級鬪爭のない經濟は決してマルクス主義ではない。――

然し、資本主義にとつて資本の蓄積が如何に重要であつても、それにも拘らず蓄積の停止が資本主義の崩壞と同一のことを意味しないのは明かである。何となれば、一、どの産業上の景氣循環の過程にも蓄積されない期間もある、二、ブルジョアジー

が、腐爛し行く獨占資本主義の時代に於いて、蓄積なしにもこの階級支配を、彼等がプロレタリアートによつて倒壞されず、若しくは蓄積の可能性が再び與へられる限り、單純再生産の形で或る期間維持するといふことも極めて考へ得べきことである（註）からだ。グロースマンが辨證法の代りにタルムード法學をやつてゐる限り、彼はこのことを理解し得ない。

（註）吾々は、ドイツのブルジョアジーが戰爭後、一時、××的醱酵のうちにあつたプロレタリアートを憤激させないでおいて、その瓦解した權力機構を再建する時間を得るために、蓄積どころか剩餘價値の占有をさへ拋棄した事實を想ひ出す。

辨證法に對する理解の缺如は、全巻に溢れてゐる。マルクスに於ける「抽象の段階」とか、「逆行體系」とかいふ議論のすべて、資本主義のすべての現象のための唯一の原因を見出すためにすべての矛盾を排除しようとする努力。——これらのすべてこそは全然マルクスの方法ではない。辨證法なくして、何處にマルクス主義的方法があるか！

彼グロースマンがマルクスからの引用を積み重ねて、恰かも彼が正統マルクス主義者としてマルクスの理論を説明してゐるかの如き外觀を與へさへしなければ、今や人は彼の理論を一笑に附し去ることが出來るであらう。このことは或る種の混亂を惹き起すに足るものがある。右に述べた、唯一の原因としての過剩蓄積といふ彼自身の非辨證法的な、非マルクス主義的な理論をばマルクスだと僞るためには、彼グロースマンは露骨な歪曲さへ敢て辭しない。彼は彼の理論の據り所として、マルクスが全く異つた連關に於いて用ゐた文句を引用し、見當違ひな文句を斷りなしに引用文の中から引張り出してゐる、斯様にして彼はマルクスを歪曲してゐる。それ故、立ち入つて彼の著書を問題にする必要がある。——

最後に、グロースマンは、自分自身を歪曲してゐる。彼は、亞流や新調和論者の陣營から超然とした唯一のマルクス主義者を裝つてゐる。然し、彼は自己の政治的見界を完全に隱蔽してゐる！　彼はその著書の中でかつて何處においてもプロレタリアートの××に對して、ブルジョアジーに對する××闘爭の必要に對して賛意を表明してゐないし、サヴエート同盟支持の態度を表現してはゐない。然し乍らこれこそは、今日純粹のマルクス主義者と、マルクス主義的な言辭を弄して資本主義を擁護する裏切者との間の王水(試驗水)として役立つ問題である。グロースマンは口を緘して語らない。彼グロースマンはサヴエート同盟に於ける現在の制度を始まりつゝある社會主義の建設と觀てゐるのか、それともカウツキーのやうに、幼稚な、質の

劣つた資本主義と觀てゐるのか？——吾々は知る由もない。グロースマンは口を緘して語らない。然し、苟くもマルクス主義者なら、默してゐることは許されない、その政治的見界を陰蔽することは許されない！　彼は、フランクフルトの大學教授になる機會を取逃す危險を冒しても、それを語らねばならぬ！　さあロードス島だ。一つ踊つて見よ！

譯者附記——世界經濟恐慌は、急速に發展しつゝある。今まで資本主義の一時的安定の動搖が問題であつたとすれば、今ではその崩壞の開始が問題となつてゐる。マルクスの資本主義崩壞論は、この發展によつて益々その正當性を立證されつゝある。ブルジョアジーが、資本主義制度の生存能力の科學的「基礎づけ」、言ひかへれば崩壞理論に對する一つの新たなる歪曲を要求したのも偶然ではない。そして彼等はこゝに一人の、甚だ貧弱ではあるが一寸コケ脅しのきゝさうな役者を見出した。それはドイツの大學教授志願のH・グロースマンである。彼は、マルクスの著作の中から山程の引用を、全く出鱈目に引き出してきて、それに全く役に立たぬ數學の方程式を附加へて六百餘頁の浩翰を拵へ上げ、結局、資本主義は資本の蓄積が經濟的に不可能にならない限り崩壞するものではない、といふことを「論證」しようとした——ロシア革命の事實などには全くお構ひなく。グロースマンのこの「崩壞」論、實は「非崩壞」論は、共産主義の理論的陣營から、完膚なきまでに批判された。こゝに譯出したものは、ドイツ版「マルクス主義の旗の下に」誌に載せられたE・ヴァルガ氏のグロースマン批評のうち、グロースマンの「崩壞論」の非マルクス主義的方法論を取扱つた部分である。（高山洋吉）

教育勞働者の組合結成

江口渙

荒れ狂ふ經濟恐慌の大暴風雨は、今や地球の全面積を押し包んで、到るところに日一日とその狂暴化を逞しうしてゐる。ますます激化する資本の集中。大資本の中小資本への強壓的統制併呑。中小資本の沒落壞滅工場閉塞、閉店。そして二百萬を突破する失業者の大洪水。かくして完全に××しきつた日本の資本主義は、到るところにその骨だらけな姿を現はしはじめた。

これ等の現象の中で、ここに一つ、特殊の失業群の存在することを見逃してはいけない。それは民政黨内閣の緊縮節約政策の強要のために、市町村といふ所謂自治體の中から、一萬五千にあまる小學教員の大群が、恒久的な失業者として、新たに街頭へほうり出された一事である。

井上藏相が組閣以來の一大名案と私かに誇つた官吏減俸案は、司法官の猛烈なる集團的反抗と、ブルジョア新聞の全力的な攻撃のために苦もなく撤回させられてしまつた。

だが、それに反して地方自治體に對する政策の強要は、遺憾なく徹底した。ことに、自分の首をつなぐためには、極力、時の政府の政策に迎合しないわけに行かない地方官どもは、ただひたすら遲れまいとするもののやうに、緊縮節約の大斧鉞を自治體の上に加へた。本年度の縣の豫算に於いて、縣會の猛烈な反對を押し切つて強行された知事の原案執行が、可なり多かつた事は、明らかにこの事實を裏書きしてゐる。

市町村の中では何處に向つて、最も殘酷に節約の斧が打ち降ろされたか。それは甚だ團結力の乏しい社會群であり、そして反抗的な氣魄を殆ど持たない存在である小學校の教員に對してであつた。

由來、小學教員なるものは、自治體の指令によつてその管内の小學校に配置せられ、初歩的なブルジョア文化、ブルジョア・

カルトの宣傳、煽動、擴大、强化のために不斷に酷使される特殊な生ける××である。そしてその大部分は師範學校と呼ばれる官營の初等教育者製産工場内に於いて、毎年全國的に頗る大量に製産される。

最初、小農、貧農、或は小市民層の下位から生み出された、幾多年少の男女子弟達が、貧困のために、義務年限と呼ばれるところの××制度の年期奉公とほぼ同一の契約條件のもとに、××××體をその工場へ×り渡すと、師範教育家と稱せられる特殊な技術を備へた熟練工の手でもつて、先づ第一に、人間的な、或はプロレタリア的なあらゆる感情、觀念を×り取られる。そして更に灼熱されたプチ・ブル精神で、あぶられ、燒かれ、烙かされて、やがて小學教員といふ全國的に劃一された鑄型の中へ流し込まれる。

かくて生ける機械は完成され、しかもただブルジョアジーのためにのみ、百パーセントに使用される。

「ブルジョアジーはすべて從來、名譽な敬虔な畏敬をもつて見られた一切の職業から、その後光を剝ぎ去つてしまつた。醫師も、法律家も、牧師も、詩人も、科學者も、自分達のお雇ひの賃銀勞働者に轉化してしまつた。」

マルクスの有名なこの言葉は、××の現段階に於ける小學校の教員に對しても、そのまま直ちにあてはめることができる。

事實、小學校の教員はもはや「××なる天職」でも何でもなくなつた。そしてブルジョアジーの力の擴大强化のために、初等教育家といふ特殊な技術技能を買ひとられて自己の欲すると欲せざるとにかかはらず、長時間の教育勞働を××せられ、不斷に酷使されて止まない點で、たしかに生ける機械でもあり、賃銀××でもある。その上その技術技能を買ひとつてもらふ場合、被雇者側の意志は全然無視されて相手方のいひなり放題にされるばかりか、更に景氣不景氣の動き次第で、代價を上下される點でも、他の職業人と同じく、疑ひもなく××である。しかもその大多數は「師範」といふ工場内で特殊な製産方法で製産された××品であるだけに、それだけ一度失業者として投げ出されると、殆んど市場價値を失つてしまふ。

かういふ商品が政府の緊縮節約政策の結果、一度に一萬五千以上も街頭へ投げ出されたのだからたまらない。全日本の小學教員の間に、大動搖を捲き起したのも、決して無理ではない。そしてその上、全國三十萬の虐げられたる教育勞働者を糾合して、自己防衛のための一大教員組合を結成し、その團結の威力によつて「轉免の濫用絕對反對」「性別による待遇差別の撤廢」「政黨加入の自由獲得」「消費組合への積極的支持」「言論、集會

結社の自由獲得」等のスローガンをかかげて、被壓迫階級としての鬪爭を開始しようとする運動が、最近猛然と展開され出したのも、あまりに當然過ぎるほどに當然ではないか。

全日本に溢れる同じ失業者の大洪水の中でも工場勞働者や農村勞働者と教育勞働者との間には、一つの大きな差異のあることを、私はとくにここで注意して置きたい。何故ならそれによつて今まで巧みに冠つてゐた教育行政者の假面が見事に剝ぎとられて、その正體が遺憾なく暴露されるからだ。

こんどの資本家的産業合理化によつて投げ出された失業勞働者の大部分は、いひ合せたやうに不熟練工である。そして熟練工乃至は高級勞働者の大部分は、いまだに工場内に殘されてゐる。ただ舊に倍する勞働の强化、能率の増進によつて、資本家的合理化のために、百パーセントに利用され、極度に酷使されてゐるといふ點が前とは甚だ違つてはゐるが。

ところが教育勞働者の失業に於いては、それとは正反對な現象が現はれてゐる。つまり老朽淘汰の名に於いて、實際は高給淘汰が行はれたのだ。そして教育に關してどんなに多年の經驗を持つてゐやうと、又、どんな熱意と優れた頭腦の所有者であらうと、市町村の中心的權力者に少しの縁故もなかつたり、或はブルジョア政黨の背景を背負つてゐなかつたら、ただ高給者であるがために遠慮なく首をちょんぎられた。

しかもその補充として給料の安い代用教員が、どしどし採用されてゐるではないか。そして市町村の當局者は、それによつて自治體の歳出が可なり節約されたと稱して、上司に向つて少なからず自慢してゐる有樣ではないか。

資本家的産業合理化に於いては、ただ、生産費が節減せられ製産品が優秀化されればそれで目的は達成せられるのだ。だから現在の資本家達のやり口は、ブルジョア的觀點から見れば、たしかにあれが當然かもしれない。

だが、小學校に於いては、ただ、經費が節約されさへすれば直ちにそれが教育の合理化になるだらうか。答はまさに「否」である。その上、熟練工である高級教員を減つて、不熟練工である代用教員を補充することは、ブルジョア的な見方からさへ明らかに教育技術の低下を意味する。

市町村の當局者達は、平生口を開けば必ず國民教育の普及徹底だとか、教育による國民精神の振興だとか、ひどく利いた風なことをいひたがる。だが、一度、時の政府の政策に迎合する必要に迫られると、教育もへつたくれもあつたものではない。一も二もなく蹴飛ばして、ひたすら經費の節約に專念する。

その上、今までは正規の教員でなければ、教育者として殆ど

無價値なもののやうにいひならしてゐた市町村當局も、一度自分達の身勝手な必要に迫まられると、見事に前言をひるがへして、昨日まで排撃して止まなかつた代用教員を正規の教員と、いくらでも平氣ですりかへ始めた。

これが小學教員に對する、許すべからざる侮辱でなくして何であらう。

今年の四月初旬に、三重の山田で行はれた全國町村長會議に於いて、たつた一人、熊本縣玉名郡の某村長の反對意見があつただけで、小學教員初任級の五圓引下げが、滿場一致で決議された。更に全國的に教員住宅費補助の低減撤廢が行はれ、昇級の停止が强制され、續いて一萬五千にあまる大量馘首が强行された。

明治以來、日本に於ける小學教育の歴史は隨分長い。だが、××が今日ぐらゐみじめな境涯に立たせられたのは、いまだかつてないところだ。

階級對立の激化、尖銳化は小學校の教員にさへも、昔のやうにあいまいきはまる立場に立つて、××的中立を××することを許さなかつた。

ブルジョアジーはあらゆる場合、教員に對してブルジョア・イデオロギィを、いとも露骨に生徒の頭へ注入することを、××して止まないことは、無論、今更いふまでもない。表面では教育は全人類のために存在すると、至極、體の好いことをいひながら、事實に於いてはただ自分達の階級のためにのみおくまで××たせるやうに仕組んでゐる。その上資本家・地主はいふに及ばず、小市民の上層部ですら、自分達の子供がどんなに低能であらうと、不良であらうと、斷じて落第をゆるさないばかりか、進んで優越な席順をさへも購はうとしては、しきりに金品を贈つて、教育家的良心を痲痺させる。

その一方では、社會的情勢の必然から最近、見る見るプロレタリア的自覺と認識とを銳く持つやうになつた勞働者・農民の子供達は、××の非プロレタリア的なイデオロギーと行動とに對して、恒に峻烈なる階級的批判を加へては、××内に於いてすら公然と痛撃し排撃して止まない傾向を見せ始めた。「少年戰旗」に毎號出てゐる勞働者・農民の子供達の通信文を讀めば、如何に彼等が××の非プロレタリア的行動に對して、深甚なる不平不滿、憤激憎惡を抱いてゐるかを、直ぐ明らかに知ることができやう。

今や多くの教員達はかくの如く銳い階級對立の中にあつて、上からの重苦しい壓迫、誘惑と、下からの痛烈限りなき批判、排撃との絕えざる挾撃の十字砲火を浴びながら、かつて見ない深刻な苦惱のどん底へ、ぐんぐん突き落されて行つた。久しく多少とも階級的良心のある者ならば、職を賭してでも自ら進んで

勞働者農民の子供達の、正しい××とならないわけに行かなくなつた。

かくて、無智と、偸安と、妥協と、屈辱とに永年慣らされて來た小學教育界にも、何時かペスタロッチの時代が過ぎて、遂にマルクス・レニンの×××××××。これも亦、今日として極めて當然なことであらう。

だが、これ等の傾向に對して、決定的な××の役割を演じて何時も××な反對闘爭を挑んで來るのは、小學教育界の直接的な權力所有者である町村長、學務委員、校長、及び典型的ダラ幹、府縣視學である。

昨年九月、東京府南多摩郡潤徳小學校に、突然、二人の教員の強制轉任が起つた。それは二人が他の同僚のやうに酒ものまず、愚談もせず、社會科學の書物を讀んでゐるのが、校長及び府視小島直太郎のお氣に召さなかつたからだ。

ところがいよいよ轉任の朝になつて、校長が生徒を一堂に集めて二人の教員の告別式を始めると、忽ち大騒動が持ち上つた。それは校長が挨拶の中で「兩先生は自分の都合で他校へ轉任して行く」と、いふひどい出鱈目をいつたために、裏面の事情を知つてゐる多數の生徒が、一度に憤慨を爆發させたためだ。「おれ達の先生を返へせ。返さなければ校長を追ひ出せ」と、口々に叫んで、式後、附近にある高畑山といふ不動尊の祠つてある山へ引き揚げ、更に高等科一二年の男女全部を代表者として村役場へ送り、村長と府視學小島直太郎と校長とを眼の前に置いてその不法處置をあくまで糾彈した上に、遂に四日に亘る××××を決行した。

この事件は何を吾々に教へるであらうか。生徒に對する教員の熱意や、教員に對する生徒の信頼などは、視學や、校長や、町村長の利己的な考一つでいくらでも蹂躙されて終ふばかりか、更に教員と小學校とは、ただ、彼等×××どもの好い×にされてゐるのだ、といふことの證明以外の何物でもない。

この事件に刺戟された東京市内外の進歩的な教員達が、かかる蹂躙と搾取から彼等自身を正しく解放しようとして、私かに同志を糾合し、小學教員聯盟を結成するに到つたのも、至極、當然な歸結ではないか。

だが、この××は間もなく當局に嗅ぎ出された。ことに佛蘭西にある國際教育勞働者同盟、エドキンテルンへ××の教育界の隠されたる眞相、苛辣な被搾取、被壓迫の實狀がこの團體の手でもつて委しく報告されたことが、ひどく當局を驚愕させ、そして聯盟は即時に解散を命ぜられ、木庄勝郎、佐野五郎、八田信、その他五名の最も闘爭力ある教員は、府視學横溝某の手でもつて、依願退職の形式で間もなく首をちよん切られた。

更にこの事件は八王子にも飛火した。そこでも最も進歩的な

教員、小口近治、町田知雄、増淵樸の三人が馘首された。

　だが、教員の自己解放の運動は、當局の××でそのまま壊滅したかに見えて、實は一層大きな力でひろがり始めた。そして新たに生まれたものが、こんどの全日本教員組合準備會である。

　最近、新潟縣長岡附近では四五十名集つた教員の地方的結成が彈壓され、新潟市では七名の集團が蹴散らされた。その一方で、不景氣で疲弊しきつてゐる農村では、教員に對する俸給の四ヶ月、五ヶ月、六ヶ月位の不拂は到る處にざらにある。

　實際、教員は教育者であるが故に、何時でも喰はずに働けといふのか。しかも喰はんがために當局に對して少しでも集團的に動いて見せれば、平氣で××××といふのか。その上如何に稼いでも働いても、ますます貧困の底へ突き落される無産階級の子弟に對して「稼ぐに追ひつく貧乏なし」とか「正直の頭に神宿る」とか、いふ嘘つぱちを、教へ込まなければいけないといふのか。

　これ等の有ゆる不合理を排除して凡てを正しく置き換へるべく、全日本教員組合準備會が、彈壓の中に起ち上つて猛然と運動を展開しだしたのも、當面現在の客観的情勢の中に十分その必然性がはらまれてゐるからだ。

　だがここに注意して置きたい事がある。

　この運動は、勿論、被搾取者、被壓迫者としての教育勞働者の自己解放の運動であると同時に、それはまさしく他の勞働者農民の解放運動、農民組合、勞働組合、消費組合その他の政治經濟、文化の諸戰線と恒に緊密に×××、そしてプロレタリアの正しい主體によつて絶えず××されなければならないといふ一事である。

　でなければ、それは全く孤立的な、利己的な、そして非階級的な運動となり下るばかりか、窮極に於いては無殘に反動化する危險さへある。ことに近代的プロレタリアートとしての本質を勞働者のやうに十分具へてゐない階級である教員に於いては尚更である。

　更にその運動は單なる生活權獲得の運動に終ることなく、進んでは唯物辯證法の上に打ち建てられたプロレタリア教育理論によるブルジョア教育理論との鬪爭、勞農少年團の組織によるブルジョア教育組織との鬪爭にまでも、必ず××されなければ窮極の目的を達成し得ないものだといふことをも併せて最後に注意して置きたい。（一九三〇・七・七）

產業合理化と失業保險

園　乾　治

一、合理化は失業を激成するか

產業合理化は失業を激成するものであるか否かに就ては、產業合理化と稱せられるものの內容が、人によつて不同であり、失業統計殊に原因別の失業統計が完備してゐない爲めに、解答が仲々困難なる問題であるが、當面の重要なる運動をなしてゐる合理化は、經濟行き詰まりを打開する政策であり、其の本質に於て企業家の資本利潤の維持若しくはその增加を目的とするものであることは、一片の疑念を挿む餘地が無い。而して合理化の實行せられる方法は種々あるが、大別して技術的方面に於ける合理化、乃ち機械の利用、勞働能率の增進、工場設備の改善と、組織的方面に於ける合理化、乃ち經濟的協力による企業の統制、若しくは產業組織全體の改善とに分つことが出來る。次ぎに是等の合理化が如何に失業に影響するかを觀察するであらう。

先づ第一に擧ぐべきものは機械の利用であるが、之に就ては三つの方面から論ぜられる。不熟練勞働者が機械の爲めに驅逐せられ、其の地位は少數の熟練勞働者が之を占むるに至ること、例へば鑛山に於ける運鑛夫、煉鐵爐に於ける給炭夫の如きこれである。次に之と正反對の影響、乃ち機械の利用の爲めに熟練勞働者が驅逐せられて、不熟練勞働者が其の地位を奪ふことが起ることもある。アメリカに於けるフオード自動車工場に於ける變革はそれであり、ライン――ウエストフアーレン地方の重工業に於ても同樣の變革が起つたのであつた。尤も斯くの如き場合に於ても、大量生產を行ふことが比較的困難なる工業、例へば機械工業等に於ては、特殊機械の組立又は据附を爲し、それと同時に新しき技術に容易に適應し得る熟練勞働者は依然として重要なる地位を維持するのである。最後に擧ぐべきは、不熟練勞働者と熟練勞働者との間に、短時日に技術を習得せる見習勞働者が介入して來ることである。織物業に於ても又製靴業に於ても、此種の變革が見はれたのであつた。何れにしても機械の爲めに驅逐せられたる勞働者は、新しい作業技能の習得又は移住によりて別に就業の機會を見出すまで相當の期間失業せざるを得ないであらう。

第二に擧ぐべきものは勞働能率の増進である。これはテイラーの創意に出づるものであつて、分業組織を改善し、また動作研究を基礎とする訓練によつて生産力を増加せしむるものである。而してそれは機械の改良によると同樣に勞働者を失業の危險に導くものである。

第三に擧ぐべきものは工場設備の改善である。これは建物及び作業設備の問題、并に衞生、愉樂、安全、作業過程の改善等の技術的組織の問題を含み、また個別的企業をして市場の狀態に適應せしむる經濟的組織の問題を含むである。而して斯の如き組織の改善は、徐々に失業者を發生せしめるのであるが、季節的産業に於ては却つて就業を確實ならしめる利益を伴ふこともある。

第四に擧ぐべきものは企業の統制である。これは個人主義より協同主義への推移を示すもので、自由競爭の弊害に眼醒めて、大なり小なり獨占の利益を收めんとする企圖であつて、生産額、販路、價格其他に關する一時的協定より、企業經營の一般意思の決定に及ぶ合同及び聯合等に至るまでの諸形態がある。是等の獨占形態は、結局に於て大企業が小規模の科學的ならざる經營の下にある競爭者を併存し、吸收することを意味するものであつて、勞働者の地位は一見安定するが如くであるが、其の地位は一層隷屬的となり、其の道程に於ては失業者の發生することを免れない。此の場合に勞働者の地位が安定するの利益があると論ずるものもあるけれども、巨大なる獨占的資本の壓迫の下にある勞働市場并に勞働者の運命が、風前の燈火以外の何物にも譬へ難いことは自明の理であらう。

以上の觀察を要約すれば、産業合理化が失業の原因たることは否定出來ない。殊に此の合理化が其の手段の如何を問はず、利潤を維持し若しくは增加することを目的とし、それが爲めに生産費の低下を來さしむるものである限り、價格の低落は之を期待することが出來ないであらうし、縱令これを期待し得るとしても伸縮性を有しない貨物の生産業に於ては、勞働の需要を增加し、就業の機會を大ならしむることとはならぬであらう。從つて合理化は失業を激成せしむるものであると斷定せざるを得ないのであるが、之れには自ら限度があるとも言ひ得る。又その影響は一時的であるとも言ひ得るであらうが、此の過程は實際に於ては連續的であるから、永久的失業の原因に算することが出來やう。

二、最近に於ける各國の失業對策

合理化が失業の原因となることは前に述べたる如くであるが、實際に於て幾何の勢力が此の點に作用したるかは明白でない。唯だ知り得るところはアメリカとドイツとを風靡したる合理化が世界的不況と失業の發生の渦中より生じたることである。ヨーロッパ大戰に基づく財政の必要から通貨が著しく膨脹したのであるが、平時の狀態に復するために收縮政策を執るに至りて各國何れも共通の不況に遭遇するに至つた。而して産業合理化は斯くの如き事情の下に於いて企業の整理を企圖して主張せられたのであつた。アメリカに於いては既に數年前から合理化を實行して居り、その結果生産額が一般に增加し勞働者一人當りの生産額も亦著しく增加したと云はれて居る。然るに工場勞働者の就

業數は最近十年間に於いて殆んど增加せず却つて減少を來して居る。これは新たに勃興したる産業に就業の機會が創造せられたるためでもあらうが、大體に於いて勞働の需要が減少し失業が發生せることを意味してゐる。現に尠なくとも百萬、或は三百萬、五百萬の失業者が存在すると云ふ推定さへ行はれて居る。勿論政治的原因に基づく經濟上の不安、ミスシツピイ河の氾濫等に基づく失業もあるであらうが、大なり小なり合理化が部分的原因を構成してゐることは否定出來ないであらう。

次にドイツに於いては一九二三年まで通貨の膨脹に苦むだのであるが、一九二四年以來その安定を圖り合理化に着手した。而して其の後四年間に於ける經過を觀察すれば、始め約一年半は失業の激減、其の後の一年半は失業の激增を招き、而して最後の一年は再び其の激減を生じた。斯くの如きドイツに於ける合理化と失業との關係は、戰時に於ける出生數の變動、金融政策による物價の維持等を、併せて觀察しなければ正當なる斷定を導く事が出來ない。殊に一九一五年以後の出生數の減少は、一九二八年以後に於いて失業を緩和し、合理化にとりて最も好都合なる條件を提供すると云はれてゐる。それにも拘はらずドイツに於ける失業者は、常に二百萬前後を算し、好況時代に於いても其の數は百萬に垂んとしてゐる。

更にイタリーに就いて見れば、一九二六年以來纖維工業及び自働車工業の如き輸出工業及び國內の需要を目的とする各種の工業が最初に危機に襲はれ、失業者は漸次增加し、偏頗なりとの定評がある同國の失業統計に依るも、三、四十萬の失業者があると言はれ、事實は其の四倍にも達するであらうと言はれて居る。而して賃銀を減少して生産費を低下せしめ、輸出貿易に資せんとする政府の方針は勞働者の購買力を薄弱ならしめ、國內の市場を一層萎微せしめた。

イギリスに於ける合理化運動はヨーロッパ大戰による同國の經濟的優越が顚覆せられ、國外に於ける市場を喪失せるがために發生したのであるが、其の企業統制は、過大なる資本化のために充分なる效果を發揮しないと言はれてゐる。併し乍ら既に鐵及び鋼業、炭坑業、綿工業等には大なる資本の集積が實現せられて居り、根本的改造が企てられたのであるが、失業者は百二、三十萬乃至百六、七十萬を上下する有樣であつて、産業合理化は決して失業を減少せしむるものでない事を立證して居る。此の數字は强制的失業保險の加入者に關するものであるが、此の外短時日の失業者を加算すれば更に大なる數字となること勿論である。

次に重要諸國に於ける失業統計を、最近到着せる國際聯盟の『統計月報』より摘記しやう。素より其の總てが合理化の結果でないことは勿論である。(左表のイギリスの數字は强制的被保險者であり、ドイツの數字は給付を支給せられたる失業者である)

	イギリス	ドイツ
一九二七年三月	一、一八七、七八三	一、三四四、八〇七
一九二七年六月	一、〇六九、三八六	七四九、二三九
一九二七年九月	一、一三六、一三七	四〇九、〇三八
一九二七年十二月	一、一九四、三〇五	一、一八九、五八六
一九二八年三月	一、一二七、六二三	一、二〇八、四〇六

一九二八年六月	一、二七三、三六〇	七四、二八三
一九二八年九月	一、三五五、〇一一	六六三、七四五
一九二八年十二月	一、三三三、六二一	一、八三九、七一六
一九二九年三月	一、二〇三、七八五	二、〇九一、四三五
一九二九年六月	一、一六三、六五七	九三九、六二一
一九二九年九月	一、二〇三、四三三	九二〇、二四五
一九二九年十二月	一、三四四、三二〇	一、六九四、八二一
一九三〇年三月	一、六九四、〇一六	二、三四七、一〇三

三、失業救濟策――失業保險

一般に失業救濟策として算へられるものは、職業紹介事業特に失業救濟の目的を以てする既定事業の繰上げ又は新規事業の開始、失業保險の三種の施設を擧げることが出來る。是等の事業は我が國に於いても既に部分的には經營せられつゝある所にして、職業紹介事業は勞働に對する需要、供給を場所的に又時間的に調節する機關であつて、現在我が國には全國樞要の地に二百六十七個所これを公設してゐるが、尙所謂桂庵及び口入屋なる私設營利の職業紹介機關が多數存在する。是等の私設營利の機關は將來撤廢せられるべき運命にあるが、前に述べたる公設の機關に對する信頼は漸次强大となる傾向があり、其の機能を一層發揮せしむるために改善すべき餘地が尠くない。

次に失業救濟のためにする事業は地方團體をして主として土木事業を興さしめ季節的失業の對策とするものであつて、此の種の事業には既定の事業に公債の募集を許し、低利資金を融通する場合と新に起工せる事業に國家が補助金を與ふる場合と、少額給料者のためにする事業に國家が補助金を與ふる場合とがある。而して第一に擧げたる起債事業としては東京府、大阪府、大阪市、横濱市、門司市、小倉市、巢鴨町、堺市に行はれ、豫算總額は九百二十萬圓、其の內、勞働費に充てられる豫算額は三百八十萬圓、使用勞働者延人員は十三萬人である。次に第二に擧げたる補助事業は、東京市、京都市、大阪市、横濱市、名古屋市、神戸市、其他に於いて着手せられ、豫算總額は六百六十五萬圓、勞働費に充てられる豫算額は二百七十萬圓、使用勞働者延人員は百十萬である。而して第三に擧げたる少額給料者に對する授職事業は各官廳等に於ける筆耕、計算、調査等に從事せしむるものであつて、これ等各種の事業に依つて救濟せらるゝ延人員の總數は四百萬、一ヶ年にして一日平均一萬一千人を救濟することとなる。

以上は我が國に於ける主要なる失業對策であるが、イギリスに於いて最も早くより發達せる失業保險の一種としては、大阪、神戸及び東京の三都市に小規模の事業が存するのみであつて、未だ猶ほ萌芽時代を出ない。イギリスに於いては一九一一年の國營保險法を以て若干の產業卽ち建築業機械工業及び造船業等七種の產業に從事する勞働者に對して强制的失業保險を行つた。尤も其の以前に於ても失業基金に對して地方自治體が補助金を交附する制度は、一八九〇年代にベルギー及びフランスに行はれたことがある。是等は其の規模に於いて、又其の成績に於いて到底イギリスの施設に比較する事が出來ない。從つて正

確に言へば、失業保險はイギリスに其の起源を發すると言ふも敢て不當ではない。而してイギリスの一九一一年の法律は其の後數次の改正を經て、適用範圍、保險料及び給付金額に就いて改善が加へられた。一九二七年の改正法に依れば年齡十六歲以上六十五歲以下の者にして雇傭契約の下に於いて勞働に從事する總ての者を被保險者とし唯だ農業及び家内工業の場合を例外とするのみである。而して保險料は勞働者傭主及び國庫が分擔し失業せる被保險者には十五週間を最高限度として規定の保險給付を支拂ひ、被扶養者に對しては別に扶助料が支給せられる。一九二九年の改正法に依れば更に農業にも失業保險を適用し、被保險者の年齡を低下し、保險給付の請求に就いても若干の改正が加へられた。

ドイツに於いては憲法第百六十三條第二項によつて總てのドイツ人は經濟的勞働によつて其の生計の資源を得べき事を保障せられ、若し適當なる勞働の機會が紹介せられない時は、其の必要なる生計に對して扶助を與へらるゝ規定である。此の憲法の規定は勞働權と生存權とを國民に保障するものであるが、ドイツに於てもイギリスの先例に倣つて失業保險法を制定した。即ちドイツに於いては一九一八年失業手當法が制定せられ、各州が國庫の補助によりて失業手當を支給したのであるが、一九二七年失業保險法の制定をなすに至つたのである。此の法律に於いては農業及び林業に從事する者、年收三千六百マーク以上の勞働者、六千マーク以上の職員以外の一切の從業員に適用せられ、最高限度二十六週間以内に於て規定の失業給付を支給せられるのであつた。然るに一九二九年の改正法は年收八千四百マーク以下の職員に對して此法律の適用を擴張し、一週二十四時間以上勞働せざる者を此の法律の適用から除外し、保險給付を受くるには、二十六回以上保險料を支拂ふことを要件となし且、特に季節的失業の危險大なる職業に對しては保險給付の割合を低下せしめ、これによりて保險關係より生ずる財政難を緩和することゝなした。

以上は强制的失業保險を有する主要なる國であるイギリス及びドイツに就いて論じたのであるが、此の外に强制的失業保險制度を有する國としてはロシヤ、ポーランド、イタリー、オーストリア等が擧げることが出來、任意的失業保險制度を有する國としては、デンマーク、フランス、ベルギー、オランダ、其他を擧げることが出來る。

四、失業保險に關する若干の問題

失業保險に關する最も重大なる問題の一は、其の財源の問題である。蓋し失業保險の取扱ふ事故乃ち失業は、勞働者自身の心身の狀態によりて勞働不能に陷り、又は勞働者自身が就業を拒絕したる場合の所謂主觀的失業があり、勞働に對する需要供給の均衡が破壞せられたる場合の所謂客觀的失業がある。而して此の客觀的失業の原因は、國家の政治又は財政狀態に原因し、或は季節的物價の變動に原因し、若しくは產業の一般的恐慌に原因することがある。初期の失業救濟制度に於いては總ての責任を個人に負擔せしめたのであるが、其後勞働者の加入せる團體が其の責任を分擔し、次いで國家若しくは地方自治團體が

補助金交付の形式を以て共同責任を分擔すること、なつた。大戰前に於ける多數諸國の實行せる所は何れも此の種の制度であつた。而して何れの國に於いても勞働者のみに全責任を負擔せしむるものは皆無であり、勞働者及び傭主の二者に分擔せしむるものもイタリーを除いては他に例が無い。又勞働者と國家の二者に分擔せしむるものもない。

何故に失業保險に對して勞働者が醵出する必要があるか。それは勞働者が直接此の制度から利益を受けるためである。次に傭主が醵出する責任を有するのは失業が企業自體に關係を有するがためである。而して最後に國家が補助金を負擔するのは社會を組織する一構成分子たる勞働者を保護すべき道德上の理由と社會秩序を維持することが國家の義務であることに出る。然かも勞働者、傭主及び國家が其の責任を分擔する程度は國により大なり小なり不同である。アングロサクソン系の諸國に於いては是等三者の分擔額を略々均等ならしむる主義を採るに反し、ドイツに於いては國家の負擔を極めて輕減する方針に基づくものの如くである。然るにアメリカに於いては傭主の責任を全然無視し、失業保險に對する醵出を否定するが、故に同國に於ける失業保險制度は今日に到るまで傭主が參加して居ないのである。

失業保險に關する靜態的財源問題は以上の如くであるが、其の動態的問題としては國家財政若しくは經濟界に於ける變革に基いて保險料率を屢々變更するの必要を擧げることが出來る。此の事は責任を分擔する傭主に對しては豫定し難き隨時の支出を增加せしむることとなり、又保險給付の金額を增加せしむるが故に、保險者をして失業保險の經營を一層困難ならしむるものである。斯くの如き困難は毎年繰返さるる季節的變動に就いて眞理なるのみならず、景氣循環より生ずる變動に於いても生ずるのである。而してこれがためには一年内に於ても數年を通じても收入と支出とが均衡を保つ樣に十分なる積立金を準備しなければならぬ。此の事は理論上正當であるが實際に於いては容易に實現し難きものであるから、失業保險は其の財源の安定は到底得難いと速斷してはならない。蓋し此の種の安定を得ることは國家の財政及び信用の威力によりて容易である。即ち國家の失業保險に對する參加は動態的財源問題よりも必要となるのである。

次に現在各國に行はれる失業保險機關を見るに、其の形態は種々であるが、強制主義をとる場合には國家が管理し、任意主義をとる場合には勞働組合が組織する場合が多い。何れの方法を採るも畢竟するに大差なきものとなるのである。國營公營に對しては被保險者たる勞働者が管理に加はり私營に對しては國家が監督をなすからである。任意制度の下に於いては一般に勞働組合が管理に當り政府が補助金を交附する場合に特定の規定を遵守すべき義務を付し、若しくは保險機關の管理に直接容喙することもある。尚ほ保險機關に關聯して論ずべき事項には職業別若しくは產業別の機關の問題があるが、斯くの如き區別を立てたのは任意制度に多く之を見、強制制度に於いては區別をたてざるを普通とする。尤もイギリスに於いては強制制度を採り、一般的保險機關を有すると同時に特殊の產業に對しては勞働組合の管理する保險機關が存在してゐる。

(昭和五年七月四日夜稿)

勞働組合法政府案に反對す

藤原銀次郎

（一）

政府は勞資の協調產業の健全な發達を圖る目的を以て勞働組合法案を來るべき議會に提出せんとする。法案規定する所が協調主義の組合のみを公認し產業平和を增進し、眞に產業の健全な發達を促す趣旨に成り、且つそれを明白に表はすものであるなら決して反對するものでない。けれども政府の主張する所と法案規定する所とは明に矛盾反對するものであつて、口に勞資の協調產業の發達を唱へながら、革命主義の組合を保護し助長せんとするのだから、法案規定する所は爭鬪の激成產業の破壞を誘發速進せんとするものに外ならぬ。これ吾人が斯の如き組合法の制定を拱手傍觀することを得ない所以である。況して現下我國は未曾有の難局に直面し、失業に泣く國民に食と職を與へて生活の不能を去り、生活の不安を一掃して社會の安定を圖ること緊要不可缺なるに、この目的を達成するの途は勞資の協調產業の發達を圖る以外には到底之を見出だし得ないと信ずるが故に、之に反する組合法の制定には到底贊成することを得ない。

（二）

第一に組合の目的に就いて見るに、現存の組合は左翼より右翼に至る迄殆んど悉く勞働組合の假面の下に經濟組織社會制度の變革を企圖するものである。勞働組合本來の職能たる勞働者の生產者としての利益や消費者としての利益を增進するよりも寧ろ資本主義を倒壞し資本家を追放し社會主義共產主義の新社會を實現せんとするものである。從つて組合の綱領も宣言も戰

術も悉くこの見地から割り出される。綱領や宣言が革命的文句から成るは勿論、爭議も亦勞働者解放の爲めの階級鬪爭として行はれる。即ち爭議の爲めの爭議を敢行し、罷業に次ぐに罷業を以てし、然も事業經營上到底認容することを得ない條件を強要し事業主をしてその經營權を放棄せしめんとするものの如くである。爲めに事業經營を著しく妨害し困難ならしめるは勿論勞働者の利益增進の爲めに行ふと稱せられるその罷業の爲めに勞働者は却つて再び立つ能はざる窮地に陷り失業に泣くことすら少くない。そこで事業主が組合に好意を持ち得ないのは勿論眞面目な勞働者も亦組合に加入することを好まない。これが組合の發達遲々たる所以であつて、社會局が熱心に辯護するに拘らず組合員數は勞働者總數の七%に過ぎぬ。

斯の如く組合不振の原因は最も多く組合の目的組織運動方法等組合内部の缺陷に基くものであつて、それを除去しない以上は到底組合の著しい發達を望むことを得ない。換言すれば現存の組合は目的も組織も戰術も共に我國最大多數の勞働者の賛同し難いものであるのに、少數の指導者は指導される者の心理要求を解せず徒らに歐米に於ける過去の組合に倣ふて拙劣な指導をなすそれが組合不振の根本最大の原因であつて、社會局の云ふが如く事業主の壓迫とか組合法の缺如とかは一種の口實たるに過ぎぬ。然るに社會局は組合法を制定して組合運動に基準と方向を與へると云ひながら、法案規定する所は現存組合の缺陷を除去せんとするものでなく却つて反對に現存組合に缺陷なしと辯護しその儘之を公認し保護せんとする。誠に大なる誤りでなければならぬ。從つて法案が將來の組合の主要目的を勞働條件の維持改善に置くも、之に依つて從來の革命的組合の行動を勞働者の生產者としての利益增進の範圍に限局すると云ふよりも寧ろ組合の抵抗の任務を明確にし之を遂行せしめるに法の力を以て援助せんとするものと解すべく、換言すれば依然として階級鬪爭を續行せしめ勞資共に失ふも亦止むを得ないとするものに外ならぬ。斯の如きは政府が立法の趣旨として揭げる勞資の協調產業の發達に反するは勿論、歐米組合の最近の傾向に著しく反するものである。若し英米組合が最近分配の鬪爭より生產の協調へと進み事業の繁榮が結局勞働者の最高の幸福であるとなし、且つ組合運動の中心が抵抗の任務から漸次共濟協働其他の任務に推移しつゝあることを知らば明かに社會局の法案は時代遲のものたることを認めざるを得ない。

（三）

第二に組合の組織に就いて見るに立法の趣旨が勞資の協調產

業の發達にある以上組合員は勞働者であり且つ生産活動に從事する者に限らるべきである。賃銀時間其他勞働條件の改善に直接利害關係のない非勞働者が之に加入し、然も多數勞働者の眞の要求を無視して之を指導するが如きは到底許されぬ所でなければならぬ。同樣に協調を目的とするなら組合は幹部から卒伍に至る迄工場を同じくし事業主を同じくし職業を一にし產業を一にすることが望ましい。勞資の折衝妥協に不便な一般組合を認めて階級鬪爭の具に供せんとするが如きは斷じて認容することを得ない筈である。然るに法案は一方には第三者の加入を殆んど無制限に許しながら事業主又はその代表者の加入を認めずして階級的對立を認容し他方には協調に便なる職業別產業別組合を排して協調に不便な一般組合を容認せんとする。政府の立法方針に悖ること大なるものと云はねばならぬ。

(四)

第三に組合の保護に見るに社會局は革命主義乃至は階級鬪爭主義の現存の組合を公認し、事業主に對して斯の如き組合員の使用を强要するのみならず、斯の如き組合並に組合員の爭議に對する責任をも免除せんとする。卽ち法律が組合を公認した以上事業主が今更兎や角云ふ譯はない。又組合に加入すれば解雇の威もなければ罷業の責任もない。と云つて組合員がその勢力を擴張することを希望するのである。けれども事業の如く繼續性を有し人的關係に支配せられること多きものの經營には勞働者の選擇取捨の自由を事業主に與へなければ到底之を圓滿に遂行することを得ない。從つて英米の法律は完全にこの自由を保障してゐる。然るに獨り我國のみ理論を無視し組合法の最も發達せる英國の先例をも無視して特にこの自由を制限せんとする。果して公正を得たものと云ふことを得るや。況して現存の組合が社會制度の變革を目的とする以上事業主は斯の如き組合に加入せる者を解雇し雇入を拒否する義務があり且つ權利がある。のみならず假令革命的組合加入者でなくとも組合員が技能能率訓練勤勉の諸點に於て必ずしも優秀とは云ひ得ないのに、現下我國の產業は合理化に依る能率の增進と生產費の低下とを得るにあらざれば到底この難局を切拔けることを得ない有樣であり、然もその合理化の斷行には勞働者の取捨選擇の自由を事業主が完全に保有することを必要とする。要するに解雇權の制限は理論上からも實際上からも之を認容することを得ない。

同樣に爭議の免責規定に關しても立法例少く、英國にこの規定の存するも偶々タッフ・ヴェール事件が突發したからであつて、然もその規定は斯の如き事件は當事者間に適當に解決すべ

く裁判所は之に關與しないと云ふ趣旨に成るものにしても、我法案の規定とは明かにその趣を異にしてゐる。のみならず從來我國の組合にして損害賠償を訴へられたものなく又賠償の責を果たし得る能力あるものも殆んどないのであるから斯の如き規定は實效なきは勿論、强いて之を設けんか、徒らに爭議を刺戟し不法手段を誘發する結果となる。

（五）

之を要するに社會局の法案は政府の立法趣旨に全然背反し、却つて勞資の協調産業の發達を阻止するものに外ならぬ。それも歐米先進國に於て類例の多く存する程度のものなら兎も角、法案規定する所は歐米先進國立法の到底認容し難い所である。然もそれが勞資の協調産業の發達を促進するものでなくて徒らに闘爭を激成し産業の發達を阻止する外なきものなるに於ては到底之に贊同することを得ない。

ガストニア纖維勞働者の闘爭

松澤兼人

一、序

五十有餘日戰はれたる對鐘紡闘爭は未だに後始末がはつきりつかないでゐるが、この眞因は、會社が結局に於て勞働組合なるものを如何なる型態に拘らず、自己の領域に入らしめず、これを飽くまで非組合工場（ノン・ユニオン・ショップ）たらしめんとし、組合は、この闘爭を契機として、これまで溫情主義の名の下に組合の潜入を一歩も許さなかつた鐘紡に自己の勢力に屬する組合を組織せんとする意圖を放棄せず、こゝに於て、表面解決したと見えたストライキが依然として、內部にあつてぶすぶす燻つてゐて、時々、火の手があがるのである。

我々は、想起する、かのガストニアの纖維勞働者が、同じく組合確認のために立つて果敢なる闘爭をなして、社會の耳目を聳動したことを。私は、今、この一つの事件を取上げつゝ、アメリカの資本主義の發展の諸情勢に關聯せしめて考へて見たいと思ふのである。

二、アメリカ資本主義の發展とガストニア事件

世界資本主義の没落期に於て、獨り、超然として、所謂『アメリカ繁榮』なる空景氣によつて伴奏せられて舞踏してゐたアメリカ資本主義は、その內容の極めて不確實なるものであることは、屢々、識者の指摘したところで、最近に於ける株式取引所に於ける數度の混亂は、この內容の自然なる發現であるとされてゐる。世界的不況に關聯して、アメリカ繁榮を持續し、若くは、（嚴密に云へば）これが更生の基礎づけを行ふためには合理化に俟たなければならない點は、凡ての人によつて認められた意見として考へられてゐた。アメリカ產業に於て一つの特色であると考へられてゐた高率勞賃も又企業經營者にとつては一つの問題であつたので、これがアメリカ產業の原因であると見る人は、單に、ヘンリー・フォードに限らないが、眞實に、利潤的に產業を經營するためにはもつと生產費を切下げなければならぬと云ふことは、例へばアメリカゴム工業を支配してゐる有力なる企業者の言に見ても明かである。只、勞賃は、正面より切下げることは、組織力の微弱な場合の他は、必ず抗爭を勞働者側より期待しなければならないので、形態を異にした勞賃率の切

下げを敢行する。產業合理化は、產業上の冗費を排除することであると說明する政治家は、眞實の事態を知らざる迂遠さを嘲笑せられるであらうが、私は、產業合理化の政策の實行の中に、明かに、從前の勞働條件を、(勞働者に)不利に變改せんとする意圖を見るのである。その具體的表現の一は、今も述べた如き勞働賃率の變更(請負賃率の引下げ)であり他は勞働の生產性の增加(搾取率の增加)である。この二つの重要なる目的は、企業經營者の側から見れば正に成功してゐるのであつて、例へば、最近、アメリカに於ける失業者の洪水は『繁榮』なるアメリカが生み出しつゝあるものであり、產業合理化と關聯するものであることは云ふ迄もない。これらの失業者は、一時的の不況によつて、職を失つた勞働者と異つて、產業合理化の行はれる限り、如何にしても、何處の產業に於ても職を得ることの出來ない所謂『技術的失業者』であるのである。

私は、聯邦準備局の發表にかゝる左の表を示すことによつて、詳細なる說明に代へようと思ふ。

米國に於ける生產量と勞賃の指數

年次	製造品生產量	工場勞働者數	一勞働者當生產量	勞働總賃額	一勞働者當勞賃
一九一九	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一九二〇	一〇四	一〇三	一〇一	一二四	一二〇
一九二一	八〇	八二	九八	八四	一〇三
一九二二	一〇四	九〇	一一六	八九	九九
一九二三	一二〇	一〇四	一一五	一一三	一〇九
一九二四	一一二	九五	一一八	一〇四	一〇九
一九二五	一二五	九五	一三二	一〇七	一一三
一九二六	一二九	九六	一三四	一〇九	一一四
一九二七	一二六	九二	一三七	一〇五	一一四

これによつて之を見れば、工業生產物の總量は、先づ顯著に增加しつゝあり、一人當り勞働者の生產量は、最も驚くべき程度に增大されて居つて、約三割七分の增加である。一人當りの生產性が增加せられる結果は、必然的に失業者を生ずることになり、工場勞働者はこの表によつて見れば八分の減少である。而して、勞賃に關して云へば、明かにその總額に於ても(微弱であるが)、一人當り收入も(稍顯著に)、增加してはゐるが、生產量の增加に比較すれば、遙かに低く、この二つの關係丈について見れば、前より多くの仕事をしてゐるのに、その勞賃は、それに伴つてゐないと云ふ譯になるのである。

產業合理化の强行せられるところ、斯のごとき事實は、アメリカに限られない。しかし、この事は記憶されねばならぬ、かのガストニアの事件が持ち上つたのは正に斯う云つた時機だつたことを。我々は、このアメリカ南部の小さな町に起つた一つの事件の中に、全アメリカの資本家階級が、彼らの立場を好轉させるために、とらうとしてゐる產業打開策、卽ち、合理化政策を、又別な立場にたつて自己を擁護せんとして反對した勞働者の組織された力を蹂躪するためにあらゆる社會の機關を巧みに利用してゐるのを見るのである。

三、事件の發端

元來、南部諸州は、特に、南北カロライナ、テネシーの三州は、新し

き産業地方であつて、多くのニグロを使用してゐるために、勞賃も低く、組合の組織率も低いので、繊維工業の如き粗工業が盛んに行はれ、全アメリカ繊維産業の過半は南部で行はれてゐるのである。勞働者數も、繊維勞働者約百萬の三分の一はこの地方に住んでゐるのである。而もこの地方の一般の勞働條件は著しく低惡であつて、一九二五年の産業調査の結果について見ても分る如く、北部の繊維勞働一年の平均勞賃收入が一〇二二弗六六仙に達してゐるに拘らず、南部の平均は僅かに六五一弗四五仙に過ぎない。使用せられてゐる勞働者は、主として婦人及び少年であるが、總數の三分の一は十六歳以下であり、何れも、十歳十二歳頃より勞働に從事してゐるのである。例へば北カロライナ州では、夜間勞働や一週六十時間を超える勞働は禁止せられてゐるのであるが、『職工の希望により』これを七十二時間まで延長してゐる。勞賃は、これを個人的に見れば、週約八弗から十二弗と云ふところである。これらの職工達は、會社から所謂社宅をあてがはれ、會社の指定する商店で品物を購入することを強制される。而して、屋賃や商店への支拂は、天引制度であつて、勞賃から最初に支拂はれてゐるのである。不健康にして高價な社宅、粗製品を高く賣る店、これが共同して、勞働者の生活を低惡ならしめ、借金が、勞働者を縛つて窮乏のどん底にあつてすら、他に職を求むることを斷念せしめる。イムプレコル一九二九年五月十四日號(第九卷四十二號)に於て、A・G・リッチマンの報導するところに依れば、斯の如き勞働條件の一般的低惡は、銀行や電力會社等の希望するところでもあり、勞働者側の無力にも拘らず、資本家側は強固な組織をとり、北米の資本が、この搾取に好條件を提供する南部に於て擡手してゐるのであつて、單に産業上のみならず、地方の政治組織にまで喰ひ込んでゐたのである。

斯の如き傳統的窮乏の中に、南部の繊維勞働者達は、長年に亘つて、資本家の恣の儘なる搾取に滿足してゐたのであるが、産業合理化が、露骨に、勞賃の値下と馘首と勞働の搾取増加とを齎しはじめた時に、自ら自己の狀態を考へはじめた。元來、この地方は、A・F・Lに屬する繊維工組合(United Textile Workers)が、數度(一九一九年、一九二一年、一九二二年)の組織運動を斷續して敢行してゐたのであるが、常に、ストライキをサボタージすると云ふ批難が高く、既に南部の勞働大衆の信望を得ることが出來なくなつてゐたのである。階級的(共産主義的)組合である全國繊維勞働者組合(National Textile Workers Union)は、この南部の組織が、全アメリカの階級運動を組織する上に缺くべからざるものであることを考へて、最も有能なるオルガナイザーであるフレッド・ビール(Fred Beal)エレン・ドウソン(Ellen Dawson)、その他を南部に送つた。ビールは、ニュー・ベッドフォードの二萬八千人のストライキやパサイックのストライキを指導し、運動者の總檢束と云ふ彈壓にも拘らず、見事に成功した勇敢な左翼闘士である。彼が同志と共に繊維勞働者の間に潜行的に運動してゐた時に、三月十二日、エルザベスタウン(テネシー州)のアメリカ人絹會社に一つのストライキ(參加人員二、〇〇〇人)起り、續いて、附近のアメリカ・ベンバーグ會社に飛火した、U・T・Wは、裏切つて一つの口約を信じて妥協したので、勞働者は一度工

場に歸つた。しかし、賃銀を上げてやると云ふその口實が實行されなかつたので、兩會社の五、〇〇〇人の職工は四月十五日に兩ストライキを決行した。最初のストライキから一週間後、北カロライナ州に續々とストライキが勃發した。これらのストライキの原因は日常の不平不滿が結成されたものであることは勿論であるが、その中心の問題は、ストレッチ・アウト（緊張作業とでも譯すべきか）であり、このために、賃の淘汰も、勞賃の減額も起ると勞働者階級が考へたからである。もう一つの問題は團結權の確認、即ち、組合の承認であつた。南部に於て組合承認と云ふことは重要な意義を有してゐることは既に述べたところによつて明かである。ストレッチ・アウトとは、これまでの受持機械臺數二四臺を七二臺に増加し、諸賃單價二七セントを十一セントに切下げて、能率を擧げようと云ふのである。テネシーに起つて南北カロライナに傳播した纖維産業のストライキはかくして、歷史的事件――全世界の左翼運動者をして悲憤、蹶起せしめた――を生むに到つたのである。

『事件』は北カロライナの工業都市ガストニアのロレー工場に於けるストライキを原因とする。ロレー工場は、北カロライナ最大の木綿紡績會社マンヴイル・ゼンクス會社の經營するところであり、勞働條件の最も低惡な工場と云はれ、一週六十時間の州の制限時間は、強制された『自發的理由』によつて七十二時間まで延長され、勞賃は、最低生活費にも足らない僅少な金額、即ち、約八弗より十二弗しか得てない。その上に全市は會社の支配する商店網が張つてあり、日用品は、これらの店より買ふことを強制され、その支拂は、勞賃から天引される。社宅と稱する不完全なる住宅が提供されるが、その家賃は一般の平均よりは高いと云はれてゐる。かくて、ロレー工場の勞働者約三千名は、（一）ストレッチ・アウト制度の撤廢、（二）最低勞賃二〇弗支給、（三）土曜日公休の一週四十時間勞働、（四）社宅家賃の値下及改善、（五）纖維勞働者の階級的勞働組合の承認等を要求して立つた。組合に關係ある勞働者の馘首の問題を衝撃として、四月二日、N・T・W・Uに加入することに決定すると共に、ストライキを宣言した。

四、彈　壓

マンヴイル・ゼンクス會社で、この要求を容れる譯はない。直ちに、罷業破りを入れ（中にはアラバマやテネシーから連れて來たものもある）、嚴重なる取締りを州當局に依頼した。州知事は――彼も又紡績工場の所有者である！――即刻、主要なる人物の檢束を行ひ、州の軍隊を派遣して、資本家の利益を擁護せしめた。暴力團は官憲の眼前に於て罷業者に暴行を加へ、罷業團の反抗を煽つて、單純なる經濟的鬪爭を轉じて、ある意味を有する運動たらしめ、以つて、南部からコムミユニストを根こそぎ追拂らはうと計畫した。資本家新聞も又この彈壓に對しては決して默つてはゐなかつた。特に、常日頃から會社によつて養はれてゐる田舍新聞『ガストニア・ガゼット』は最も忠實に御用を働いた。このストライキを以つて、『陰險極まる大陰謀』であるとなし、『ガストニア及び南部の市民は、共産黨が如何なるものであるかを知つた。……彼らの目的は世界革命であり、彼らは宗教を信ぜず、人種の區別を認めず、自由戀愛を信じてゐる。彼らは合衆國南部にとつて光榮ある萬事を悉く破壞せんとしてゐるのである』と主張してゐる。この言葉は且て、サッコ・ヴ

アンゼツチ事件の時にも用ひられた。凡ての社會主義的運動に從事するものは、この言葉で片付けられるのである。ストライカー達はこれらの彈壓に拘らず、結束を固め、益々組織化された。何もしらずに遠方から引張つて來られた罷業破の連中も、ストライキの性質を知るとぼつ〳〵逃げ出しはじめた。會社はピストルを持つた番人を門のところに置いて、一々出入を誰何し、會社から逃げようとするものに對しては暴力を以つてこれを引留めた。會社は、社宅にゐる勞働者を追ひ出し、商店の取引を中止せしめた。正面からは暴力で、からめ手からは糧道を斷つと云ふ戰略で臨んだのである。

これに對抗するためには、勞働者側は、あらゆる救援機關を利用した。インタナチオナーレ・ローテ・ヒルフエ、インタナチオナーレ・アルバイターヒルフエ、コミユニスト青年同盟などは、これに對して最も熱心に活動し、追出しを喰つたストライカーをテントに收容し、救援商店を經營し、食糧品を供給し、ヴエラ・ブッシユ、クラレンス・ミラー、ソフイ・メルウインは、特に婦人、少年少女の保護と監督に當り、檢束せられた主人の留守をまもる子女の面倒を見てやつた。

資本家側の彈壓が、勞働者側の組織化された救援機關の活動と、拔目なきビールの指導のために全く無効であることを知ると彼らは焦り出した。その狼狽と憤慨とが、愈々物理的な力をとり、白色テラーに移らしめた。四月十七日深更、官憲が指導者の捕縛のために組合本部を襲撃して、抵抗せざる勞働者を連行すると、その直後に、數十名の覆面の一隊が本部に乘り込み、これをめちやめちやに××し、次で、救援機關經營の商店を襲ひ、商店を街路へ投げ出して去つた。(ニユウ・マッセス、エラ・フオードに依る)。而も、この騷擾は、後に何のお咎めもなかつたのである。而も、これが秩序維持のために派遣せられてゐる光榮あるアメリカ××の眼前で行はれたのである。五月七日には、更に六十二家族の追出しがあり、小ぜり合ひは常に起つた。六月はじめ、ロレー工場の再度のストライキが計畫され、あらゆる方法をつくしてもつかまらないビールの手によつて萬事が打合せられた。全勞働者の脱出の日が七日と決定せられ、内部との話も濟んだ。處が、この重要な計畫が、會社のスパイによつて嗅ぎつけられ、内部の職工達は一歩も外部に出られないやうに嚴重に監禁せられた。會社は、すべての問題の源泉であるビールの捕縛を全力を擧げて努力することに決定し、豫ねて組織されてゐた會社の暴力團、百人組(Committee of Hundred)は××して手ぐすね引いてゐた。その夜演說會が行はれることを聞き知つた百人組は、會場に乘り込んで、あらゆる亂暴を働き、ビールにピストルを向けて××しようとしたが、ストライカーにさへぎられて成功しなかつた。デモが敢行せられ、途々到るところで、衝突が繰返へされ、ヴエラ・ブッシユやソフイ・メルウインは髮の毛をつかまれて、引張り廻はされた。ストライカーの一人は官憲によつてなぐり倒され、泥靴で踏みつけられた。かくて、兩方とも殺氣立つて、危險は刻々と增していつた。

それでも、大部分が、本部に引きかへして、休息してゐた。夜暗に乘じて襲ひ込んで來た官憲は片つ端から檢束しようとした。ストライカーの一人が逮捕命令のことで抗議を申込むと「そんなものがいるならいくらでも後から出してやる」と官憲は答へた。興奮してゐる官憲は手あたり次第に暴力を振ひ、文句を云ふものにはピストルの臺でなぐりつけ

た。その中に、官憲の方から發砲が起り、ストライカーも應戰した。この手入れを指揮した警察署長アダーホルト(Aderholt)も負傷し、後に遂に死亡した。騒ぎを聞いてかけつけた百人組は、更に暴力を振ひ、本部の一切の記錄を押收し、器物を破毀した。このために百人以上のものが捕へられた。この種の白色テラーはこれが最後のものではなく、五週間に亘つてこの後もつゞき、ピケツト線の破壞、襲撃、犯罪の作り上げ、毆打などが行はれ、ニグロ勞働者はリンチせられた。

六月七日の事件の結果、翌日負傷した同志を病院につれてゆき、電信局で事件を報じようとしてゐた際に捕へられたビールをはじめ十六名の指導者達は殺人罪で起訴され、五十八名は同豫備罪と云ふ名目で拘束された。(ニユー・マツセスに依る)

五、事件の推移

裁判は、特別陪審に附せられ、七月廿九日からガストニアで開始せられることになつてゐたが管轄變更の願が出て延期された。ビールは最初から、この事件を以つて單なる經濟鬪爭であるとなし、組合確認のために鬪つたのであると云つてゐる。ビールは、アメリカ・コムミユニストパーテイーの正規の機關の援助を受けてゐることを認めてゐるが、『黨とは何らの關係なく、組合が確認せられた後に、政治敎育的運動に取かゝるつもりである』と聲明してゐた。(ニユー・リーダー・一九二九年四月六日)この點は、死刑執行せられるであらうと噂せられてゐる十六名の指導者のアツピールにも明かである。

『我々はストレツチ・アウト、賃銀値下、工場主と官憲の彈壓に對して團結する權利、ストライキする權利のために戰つた。我々の事件の論點は、勞働者が自分を護り、自分を組織し、勞働組合を建設し、生活條件の低下と戰ふ權利に存する。』

と。裁判は、アメリカン・デモクラシーの本質を暴露した。先づ、判事ホイル・シンクは工場に關係ありと云ふ理由で忌避せられ、バーンヒルと變つた。彼は、管轄をガストニアからシヤーロツトに移した。陪審員は一定の偏見の下に選擇せられたかの如く、六名の陪審員の中に一人の勞働者の利害を代表するものも含まれてゐなかつた。州局の意向によつて

『勞働組合に同情を有するもの、勞働新聞を讀むもの、工場で働くもの、產業的紛爭の解決にストライキを武器として行使することが正當であると信ずるものは排斥された。』

勞働者農民は、ガストニア事件に對して深甚なる同情を表してゐるのであるが、それらの人々は『偏見を有してゐるので』『裁判の公正を期待することが出來ない』と云ふので排斥せられたのである。これに對しては直ちに猛烈な挑戰がなされ、『陪審員を勝手に選擇することの不當を』嚴重に抗議した。結局、任命されたものは、會社側の壓迫と勸誘によつて、その意思を決定するが如き種類の人々であつて、これらの人々は、勞働組合そのものに反對であるとか、假令さうでなくても、その急進的方法には一種の恐怖を感ずるのである。屢々、豫定の期日が延期せられて容易に、その決定を見なかつた。八月廿六日審理が開かれ、最初の六日間は、陪審員の宣誓に費された。ザツコ・ヴアンゼツチの如く、ありもしない罪狀によつて、十數名のものが電氣椅子に坐らなければならないであらうと噂されてゐたが(ウアーカース・ライフ、一九二九年八月

三十日)、審理が進むに從つて、最初に考へられてゐた程の犯罪の嫌疑は薄らいで來た。任命された陪審員の一人が、狂氣になつたと云ふエピソードまで入つたり、前記の如き勞働者側の抗議があつたりして、陪審員が新に任命されなければならなかつた。最初の審理は陪審員の狂氣によつて『誤審』であると判事バーンヒルが宣言し、事件は全く新しくやりなほしとなつた)

國際的救援運動の結果、首謀者被告は十六名のが十三名となり、他に殺人豫備罪として三名を有罪と決定した。これは、一切の眞相を、アメリカのみならず、歐洲にまで訴へて、資本家達の惡辣なる犯罪デッチ上げ(Frame-up)を暴露した國際勞働防衛團(International Labor Defence)の活動に俟つところが多かつたのである。

その後數度の審理によつてシャーロット裁判所は、被告達に、署長アダーホルト殺人の陰謀的計畫を作り上げる爲には材料が不足であり、且つは、大衆の反對運動があり、被告を有罪にする便宜上から云つても、陰謀を最初から伴つた殺人として第一級殺人罪とするとは不穩當であると考へ出したので、最初の方針をかへて單なる殺人罪の名目で處分することになつた。かくて、事件は全く、死刑の心配から免れ單なる刑期の問題となつて來た。

更に、事件の進行と共に、十六名の行動が、全部直接に、署長××に關係するものではない事實が判明し、十六名中の九名が無罪で放免せられることになつた(九月三十日)。この結果これまで含まれてゐた婦人三名は全く放免された。十月十八日のウアーカース・ライフは、『大衆の壓力に對する讓歩』なる見出しの下に、この事件を報導し、

『既報の如く、ガストニア事件は、デッチ上げの謀殺罪から、單なる殺人罪になつたのであるが、更に報導によると、十六名の被告の中、九名は刑務所から放免せられることになつた。

『これは疑もなく、國際勞働防衛團の各部署の世界的アヂテーションによる大衆壓力の結果である。』

と主張してゐる。

事件の法律的進行を別にして、ガストニアの天地は、決して晴れ渡つたのではなかつた。相不變、暴力團は救援本部や爭議團にあばれ込み、負傷者や死亡者も屢〻出た。例へば九月十日の襲撃に際してはエラ・ウイギンスなる婦人が射殺された。アメリカ各地やイギリスでは、ガストニアの犧牲者の救援のために常にデモンストレーションを行ひ、基金が募集せられて、ガストニアに送られた。勞働時間はこの事件の結果六十時間より五十五時間に減少された。

裁判所は陪審員の改選をなして、公判に備へると共に、愈〻最後に殘つた七名の指導者達の罪狀を作り上げるべく努力をなした。救援團は差迫つて來た公判のために、一層、活動をするし、資本家的新聞は、××主義である被告達の嚴重なる處罰を要求した。

十月二十一日、シャーロット裁判所は、ガストニア事件の七人の指導者達に判決を與へた。檢事は、陪審員達に、被告達が恐るべき犯罪者であることの印象を與へるために巧みなるゼスチュアを用ひ、悲憤・慷慨の結果、實際に床上を轉り歩くと云ふ程の熱心振りを發揮し、或は美辭

麗句を並べて獨り陶醉した。彼が、事件そのものに關してよりも、コミユニズムや被告達の反アメリカ的であること、例へば、神を信ぜざること、黒人を大切にすること、自由戀愛論者であること（この點ではビールは裏切者ウヰンスの妻君と一緒にニューヨークへ旅行したと噂された。事實は、ウヰンスの妻君は夫と反對に熱心なるストライカーであつて救援を求めるために獨りでニューヨークに行つたのであつた。——ローテ・ゲウエルクシャフツ・インタナチオナーレ、一九二九年六月）等を擧げて論告したことは最も遺憾であると被告の辯護人から苦情を申込まれた。判事の判決は、北方の人に重く、南方（ガストニア市民）の人に輕かつたと云ふことであるが、ビール二十年、ミラア二十年、カーター二十年、ハリソン二十年、マツギニス十五年、マクラリン十五年、ヘンドリツクス七年と云ふのである。被告は直ちに上告をして、最後の黒白を爭ふことになつた。彼らは、昨年十一月には何れも多額の保釋金を提供して保釋となり、その後アメリカ各地に於て開かれてゐる失業反對鬪爭に勇敢に活動してゐると云ふことである。

上告審は、この四月末日か、五月の初めに、北カロライナの最高法院で開かれることになつてゐる。最後の決定が未だ手に入らぬことは殘念であるが、前判決より輕くならないであらうとは充分期待されてゐる。

六、ガストニヤ罷業の歌

左の歌は十一歳のガストニア・ストライカーであるオデル・コーレー（Odell Corley）の作であつて、ガストニア纖維勞働者の間に愛誦されてゐるものである。

ビルさん今夜はお前のテントで寢てもいいかね？
だつて、地べたの上では寒いし、
北風は遠慮なく吹くし
體をねかせる處もねえんだもの。

マンヴイル・ゼンクスの奴あ俺達を眞黑にしやがつた、
あいつは俺達を地べたにおつぽり出した。
俺達はお前さんと一所にやらなかつたことが口惜しいよ、
他のものは仕事をよして一所にやつたのにさ。

おゝビルさん赦しておくれ、
俺達を一所にお前さん達のテントに入れておくれ
これから俺達は組合に喰つついてゐよう、
もうもうお前さん達のスカツプはやらないよ。

お前達は本部をめちやめちやにし、
お前達はあばれ込んで來て、食物をおつぽり出した。
あのお太陽樣丈が知つてござるよ
お前達スカツプのしたことを。（ニユウ・マツセス所載）

土曜日全休論

林癸未夫

一

勞働は強制される。法律や權力によつて強制はされなくても貧乏によつて強制される。勞働所得を以て唯一の生活手段とする無産者は勿論、些少の財産所得を有する中產者ですら、勞働の回避が餓死を意味する限り、常に勞働すべく餘儀なくされてゐる。彼等に勞働をしないことの自由は全然殘されてゐない。所謂個人主義的經濟秩序が嚴として彼等に勞働を強制してゐるのだ。

強制されたる勞働は常に必ず若干の苦痛を伴ふ。汗と埃とに塗れて機械の側に立ちつくす人たちは勿論、店頭に銀貨と包み紙とのやりとりに忙しい商店員でも、ペンと算盤に指端を痛める會社の書記でも、賣るために繪をかく美術家でも、脂粉をこらしてステージに立つ踊子でも、それが彼等の生活手段として日々夜々に繰返されて息むときなき間は、それは必ず多少の苦痛であるに相違ないのだ。「仕事は面白いです」、「愉快に働いてゐます」といつたやうな言葉が放たれる時ですら、それは大概の場合、無意識の自己欺瞞か、さなくば一時の氣やすめだ。苦痛なるがゆえに勞働である。愉快なる勞働——若しそんなものがあれば寧ろ遊戯だ。

勞働が苦痛だとするならば、其苦痛の皆無は人間に取つての必然の要求だ。そして此要求の達成は勿論勞働の放棄を意味する。だが不勞所得によつて優に生活し得る有產者でない限り、勞働の放棄は生命の放棄を通じてのみ可能であることの餘りにも明白である以上、勞働の放棄は生命を欲する者に取つて絕對に不可能だ。疑ふを止めよ、これは資本主義的社會に於てのみ特

にさうなのではない。「働かざる者は食はざるべし」とする社會主義的社會に於ても亦然りだ。人は勞働の苦痛を通じて生きる。しかも此苦痛からの離脱を瞬時も希望せずには生きないのだ。

二

失業は強制される。資本主義經濟の基本的一要素たる營利主義が勞働者に失業を強制する。産業技術の機械化が、生産力の集中が、企業の縦斷的及横斷的結合が「勞働力の省略」を通じて生産費の低減と利益の増加とに役立つ限り、失業は必然的に強制される。働かなければ食ひ得ない者が、働かないことを強制されることのいかに悲慘であるかを顧慮すべく營利主義は餘りに徹底し過ぎてゐる。營利競爭は企業家に強要するに生産費の低減と生産量の増加とを以てする。そして企業家は勞働力の省略を殆ど唯一の手段として此強要に順應しようとする。より多く勞働力を省略し得た企業家が常に營利競爭の優勝者となる。そして一人の企業家を優勝者たらしめるために、常に幾百人か幾千人かの失業者が街頭に投げ出される。これが何人によつても阻止することのできない資本主義的社會の一法則だ。

曾て失業は景氣循環に伴ふ週期的現象だと説明されてゐた。そして此説明が妥當する限りに於て、失業者は聊か現在の苦難を將來の希望に慰めることができた。舊式の社會政策家もこれによつて自己の無策を蔽ひかくす一つの口實とすることができた。併しながら不幸にして景氣循環論に立脚するところの失業週期説は今や殆ど其根柢を失はんとしつゝある。そしてこれを失はしめる原動力は所謂合理化運動の進展にほかならない。

戰後に於けるアメリカの驚歎すべき經濟的繁榮は今更説くまでもあるまい。そして其繁榮の有力なる一原因が合理化にあることも周知の事實だ。一九二一年フーヴーの商務卿就任以來、彼は全力を擧げて合理化の進展に努めた。「合理化」なる語の創造はドイツ人によつて行はれたにせよ、合理化運動の尖端に立つたものはアメリカ人であつた。彼等の努力によつて同國に於ける一九二五年の生産總量は過去四半世紀間に一七八パーセントの増進を示し、勞働者一人當りの生産力は五〇パーセントの増加を遂げ、從つて生産費は約三〇パーセントの減少を贏ち得た。かくの如くにして蓄積された富は巨大なる金融資本と化して、容捨なく歐洲諸國に侵入して行つた。ドイツに、イギリスに、フランスに、そして又ロシヤにも、アメリカ資本は襲ひかかつて暴威を逞しくするに至つた。いかにして此アメリカ資本の暴威に對抗して、自國の企業の存立を擁護すべきかといふ問題は、歐洲各國の資本家に取つては焦眉の急であつた。そして

其方策として案出されたものが、國際カルテル或はトラストの結成であり又合理化であつた。歐洲列國協力してアメリカの資本的侵略を防遏しようとすることが、此運動の最も有力な原因であつた。

それほどまでに歐洲列國を脅威したアメリカの富は何によつて造られたか。それは急速なる生産力の發展によつてである。しかも此生産力の發展は大規模なる合理化運動によつて促進されたのである。だが併し此合理化の成功は實に三百萬の賃金勞働者と百萬の俸給被傭者とを失業者たらしめることによつて可能とされたのである。憫むに堪へたる犧牲者よ！

今や眼ざめたる歐洲の資本家及企業家は、合理化を以て最大の産業復興策と信じ、之に熱中して他を顧みない狀態にある。彼等は既に或程度まで成功した。彼等の企業は幾分の安全率を加へたであらう。併しそれと同時に失業者は增加した。合理化によつて景氣は恢復するかも知れない。だが失業者はこれに伴つて增加して行く。アメリカ既に然り、ドイツ、フランス、イギリス亦其例に洩れないとしたならば、景氣の上昇は却て失業者を增加するといふ新法則が吾々の前に立證される。もはや前の失業週期說は崩れざるを得ない。失業者は永久に失業者として殘り且其群を加へて行くであらう。

三

苦痛なる勞働は強制される。この強制を甘受せざるを得ざらしめるものは人の生存慾だ。一層苦痛なる失業は強制される。この強制を忌憚なく行はしめるものは人の營利慾だ。この生存慾と營利慾とが兩立する間はよい。併しそれが兩立しない場合に於ては、營利慾が當然其途を讓るべきであることが、社會正義の名に於て要求される。

凡そ失業の根本的原因は就職人口に對する勞働人口の過剩にある。勞働人口は人口そのものゝ自然增加によつて、將又不勞人口から勞働人口への移入によつて增加する。そこで此勞働人口の增加に伴つて就職人口が增加しさへすれば、原則として失業問題は起らないし、又假令起つても其解決は比較的容易である。之に反して勞働人口の增加にも拘らず、就職人口が減少する場合に於ては、其差數だけの失業者を生ずることが必然であつて、しかも其解決は甚だ困難である。困難ではあるが併しそれを無解決のまゝ放棄することは、失業者の餓死によつて勞働人口の自然減少を待つところの一種の消極的失業對策であるとも言へる。唯かくの如き非人道的、反社會的たる政策を取ることが、現代人の社會觀念によつて忍容されないことは明白だ。

果してさうだとすれば、結局失業問題の解決は就職人口の増加政策によるよりほかはないのだ。

然らばいかにして就職人口を増加すべきか。その最も可能性に富む方法は、蓋し勞働時間の減少である。

一週六日、一日八時間勞働は多年勞働組合運動のスローガンであつた。だが此のスローガンはすべての勞働者が一週七日、一日十時間も働いてゐた間だけ、運動の好目標たり得るのであつて、此目標に到達し得た瞬間に於てそれが廢棄さるべきであることは論ずるまでもないことだ。イギリスの炭坑夫は既に二十餘年の昔に八時間制を獲得した。すると間もなく彼等は七時間制を要求して再び其目的を遂した。若し他の事情が妨げなかつたならば、恐らく彼等は更に六時間制を要求したであらう。勞働が苦痛なる義務である限り、其最少化を欲求することは人情の自然だ。たゞ之を妨げるものは社會生產力の缺乏と企業家の營利主義あるのみだ。

だから若しこゝに生產力の缺乏を來たす憂ひもなく、又企業家の利潤をも奪ひ去る虞なしに、勞働時間を短縮し得る方法が見出されるとしたならば、之を阻止すべき理由は消滅しなければならぬ。こゝに合理化と失業問題とに對する政策上の契合點がある。

合理化は商品を標準化し、生產力を集中し、機械力を擴大することによつて生產費の減少と生產量の増加とを企圖する。その事自體は之を非とすべき理由は毫末も存しない。唯それが企業家の營利主義を本位として行はれ、勞働力省略の名によつて就職人口の減殺を招來するに至つて、重大なる社會問題と化するのである。言ひかへれば失業を強制されたる勞働人口をいかにすべきやの問題が重大化するのである。

こゝに於て此問題を解決すべき責任は、當然合理化の受益者たる資本家及企業家によつて負擔されなければならぬ。彼等は合理化の名によつて一旦驅逐したる勞働者を再び其產業にまで復歸せしめることによつて、其責任を果たさなければならぬ。そして其手段が勞働時間の減少である。一人當りの勞働時間を減少することによつて、多數の勞働者に就職の機會を提供し、企業利益の一部を割愛して之を賃金にまで充當することによつて勞働者の生活を保護する。かくの如くにして合理化と失業との矛盾は取除かれるのだ。

四

流石にフォードは卓越したる見識を有する。彼は其事業を合理化することに於て何人にも劣らなかつたが、併し勞働時間の

減少によつて失業を防止する策に於ても亦何人にも後れなかつた。乃ち彼は土曜日全休の五日勞働制を率先實施することによつて、斷然時運の尖端に立つたのである。

フォードの好例は今や多くの追隨者を得つゝある。昨年六月のアメリカ勞働統計局の調査によれば、被服工業に於ては工場數の五割三分、職工數の三割三分、自動車工業に於ては職工數の三割、建築業に於ては勞働者の一割五分、機械工業に於ては四分、鐵鋼業に於ては二分、製靴工業に於ては一分が一週五日勞働制の下にある。だがこれは全米の勞働者に割り當てれば固より僅少な數に過ぎないであらう。何故なればまだそこに數百萬の勞働者が失業者として殘存するのだから。

我國に於ける五日勞働制の實例としては大阪のゼネラル・モーターース株式會社がある。同社は生産過剩のため不況に悩んでゐたが、去る六月事業縮少の必要上二百人の職工を解雇する計畫を中止して、土日兩日を全休とすることに決定したと傳へられる。但そのため職工の賃金は一日分の減收となるが、彼等は甘じてそれを承認したといふ。仲間を失業者たらしめるよりも減收を忍ぶことの方が、彼等としての道德であるのは勿論だ。

五日勞働制にして尚失業者を救濟するに足りないとすれば四日勞働制、三日勞働制固より不可としない。現にソヴヰエト・ロシヤは改曆まで斷行して全國的に四日勞働制の實施に着手してゐる。勞働せざる者は食はざるべしとする社會主義國家は、勞働を欲する者に其機會を提供することが、政府としての當然の責任である。それが四日勞働制の實施を避くべからざるものたらしめたのだ。

勞働時間の減少は六日勞働制を維持しつゝ、一日の勞働時間數を短縮する方法によつても行ひ得ないではない。だがそれは殆ど例外なく勞働者自身によつて回避される。彼等は一日の勞働時間の短縮よりも一週の勞働日の減少を歡迎する。殊に休日の二日續きは彼等の最も歡迎するところである。これが日曜日の全休を既定の事實として更に土曜日全休制の行はれる所以だ。

賃金勞働者の土曜日全休は勿論當然俸給被傭者の土曜日全休を招來する。だが其理由以外に俸給被傭者の土曜日全休は一層實行が容易であるべき筈である。試に日本の現狀を見ても、大多數の賃金勞働者が毎月二日の休日しかもたないのに、俸給被傭者の大多數は毎週一回(日曜日)の休日を與へられてゐる。そして又土曜日の半休をも。して見れば此土曜日の半休を全休にまで伸張することは、それが失業者の救濟には直接の效果を期待し得ないにせよ、傭主に取つては格別の經濟的損害なしに實

行し得べき筈のものだ。しかも其結果がいかに多くの歡喜を俸給被傭者に與へるであらうかは想像に餘りある。だが併し私は賃金勞働者をさしおいて、獨り俸給被傭者のみが、先づかゝる特權を享有することを是認しようとしてをるのではない。

五

六日勞働を五日勞働に改めるとすれば、就職人口の二割に相當する失業者が新に就職人口の仲間に入ることになつて、失業問題は完全に解決されるか、或は少くも著しく緩和されることは明白だ。唯問題は企業家の營利主義が之に堪へ得るか否かにある。

營利主義に立脚する合理化は極力生産費の低減に熱中する。そこで若し政策的に勞働日を減じて、被傭者を増員するとすれば、其増員の割合だけ賃率を引下げるならば、それで生産費の増加は抑制することができる筈だ。だがさうすれば勿論勞働者は生活費の窮乏に苦しまなければならぬ。前に擧げたゼネラル・モータース會社の場合は、二百名の失業を救ふために千名が賃金の二割減を甘受したのだが、併し此場合は原因が合理化にあるのではなくて、生産過剩に基く利益の減少にあつたのだから已むを得ないとしても、アメリカの場合の如く合理化によつて勞働力が省略され、それによつて生産費が低減し、利益が増加した場合に於ては、其増加利益を資本家や企業家が獨占することの代りに、勞働者に分配する意味に於て賃率の引下げを食止めることは決して難事ではない筈だ。現にフォードはそれを實行したのである。合理化が資本家や企業家の營利慾を充たすために行はるべきでなく、國民全體の福利のため行はるべきであるとするならば、獨り勞働者をして其犧牲を拂はしむる理由のないことは勿論だ。そして又勞働者の賃金を全體として増加することは、彼等の購買力を増進する所以であり、彼等の購買力を増進することは、合理化によつて増加する生産量の消化を可能ならしむる所以であることを思ふならば、それは必ずしも資本家や企業家の利益に反するものでもないのである。勿論吾々は彼等に向つて營利主義の放棄を期待することはできない。何となれば營利主義の放棄は資本主義の撤廢を意味するからだ。資本主義の現實に即する限り、吾々の提出し得る要求は利子及利潤率の低下だけだ。鐘紡に對する場合の如く、滅法界の高率配當を低下することによつて、賃率引下を中止せよといふことだけだ。若し彼等が此要求に聽從するだけの理智と道德とを有つならば、勞働日の減少と賃率の維持とは必ずしも兩立し得ない筈はないのである。

失業保險制度は今や全く行詰りつゝある。此制度は元來景氣循環論を基礎とし、失業を以て一時的變態と見る理論の上に計畫されたものだ。だが既述の通り合理化が景氣を恢復しても尚且失業者は減少せずに却て增加するとしたならば、最早失業は不景氣に基く一時的變態ではなくして、寧ろ好景氣の維持を可能ならしめるところの永續的常態となる。しかも此永續化し常態化したところの失業者大群を、無爲に放任しつゝ扶養しようとするところの失業保險制度が、到底經濟的破綻を免かれ得ないことは、火を睹るよりも明だ。失業問題解決の唯一の方法は失業者を扶養することではなくして、彼等を勞働せしめることだ。彼等に就職の機會を與へることだ。だが此機會は單なる産業の振興によつて見出されるのではない。何となれば産業の振興は失業者を一層增加せしめるやうな方法によつても行ひ得ることが、合理化によつて證明されたからだ。果してさうだとすれば、結局勞働日の減少のみが此問題を解決する。資本主義的經濟を所與條件とする限り、これ以外に失業問題解決の途はないと私は信ずる。

暴露文學の檢討

青野季吉

私が『調べた藝術』を提唱したのは、今から約五ヶ年前だつたと記憶する。その當時、この提唱には、賛同とともに、いろ〳〵な非難があつたが、その中で一つだけ、いまだに強く私に印象されてゐるのがある。藝術は、『調べた』だけでは創造されるものではない。その『調べた』結果を藝術的に構成する主觀力がなくてはならない、と言ふ非難がそれだ。私の記憶に間違ひがなければ、新居格君なども、さう批判した一人だつたと思ふ。この非難は、一見尤もらしいが、『調べた藝術』提唱の歷史的の意義をすつかり見失つて、抽象的にこの提唱を取扱つた結果で、批評にも、非難にもならない代物だと思つて、私は當時これを反駁することさへ無駄だと思つてゐた。つまり、理論や提唱の正當性を決定的に證明するものは、文學的實踐以外の何ものでもないからだ。

その後、約五ヶ年間の文學(プロレタリヤ)的實踐は、何を決定的に證明したか？　私の『調べた藝術』の提唱が、決して、『藝術的創造』の上の提唱として、間違つたものでも見當違ひのものでもたかつたといふ、一事だ。その最も顯著な實例は、その後の行程の中の謂ゆる『暴露文學』の發展だ。と言ふのは、暴露文學は、その文學的實踐の基調をたしかな『調べた』根據の上においてゐるからだ。

現在、日本のプロレタリア文學は、その內容的特殊性から言つて、尠くとも四五の方向を持つてゐる。だが、その中にあつて、最も旺盛なものは、暴露文學であると言つてよいであらう。而して今日では、暴露文學が恰かも日本のプロレタリヤ文學の本陣を形造つてゐるかのやうだ。これはいかにも理由のあることで、資本主義社會內では、プロレタリヤ文學は必然に鬪爭の文學たる社會的約束を持つて居り、その鬪爭性は第一に、資本主義社會の機構の暴露において、有力に發現せざるを得ないからだ。尠くとも當のプロレタリヤ文學が、リヤリズムの上に立つてゐれば、それ以外に現はれ方はない。

さてそれならば、それほどまでに旺盛な暴露文學は、果して實質的にどれほど發展してゐるか？　これについては、私は、つい先頃、『新興文學としての暴露小說を論ず』(文學風景創刊號)で、比較的詳しく

論じておいたから、こゝで再論はしない。たゞ茲で必要な範囲で、その要綱を述べておかう。暴露文學は、相當に前進はしてゐるが、一、まだその暴露の對象が狹隘であり、二、その暴露の態度がリヤリスチックでなく、且つ、三、その暴露の仕方が機械的であつて藝術的でない、と言ふのが、その一文での一般的結論であつた。即ち、これまでは暴露の對象は、狹い意味の經濟的機構に限られてゐたが、これは最も廣い意味の政治生活の全分野に擴大されなければならぬ。またこれまでの暴露の態度は、或は說明的、知的、或は敎導者的であつたが、これはリヤリスチックな藝術家的態度でなく、その作品の暴露性が本當に發揮されるためには、暴露そのものが十分に藝術的に具象化されて、その內在的の力によつて大衆の心を捉へるものでなければならぬ。最後にその暴露の仕方の問題だ。あらゆる機構は元來人間と人間との關係に現はれる。ところで『一つの機構における人間は、その機構の一つのネヂ、一本の釘に等しいとも、立派に言へる。だがそれだからと言つて、その人間は(元來)一つのネヂであるのでもなければ、一本の釘であるのでもない。ネヂでもなし釘でもない人間が、ネヂとして、釘として、そこに篏め込まれてゐるのだ。こゝに藝術的暴露における重大な問題が潛んでゐる。一つのネヂとなり、一本の釘となつてゐる人間を、一つのネヂ、一本の釘として取扱つたのでは、それは藝術的暴露ではない。一つのネヂでもなく、一本の釘でもない人間が一つのネヂとなり、一本の釘となつてゐる——その全體が取扱はれなければ、與へられた機構(人間的社會での)の生きた、立體的な形象と、その暴露とを與へることが出來ないのである。』これがその結論の說明の輪廓だつたのだ。

最近日本の暴露文學で、一つの大きな收穫があつた。それは言ふまでもなく細田民樹氏の長編『眞理の春』だ。この作品は、極めて嚴肅な意味において、一般に日本のプロレタリヤ文學、特殊にわが暴露文學にあつて、劃時代的な作品だと言つてよい。

他の論點、例へばプロレタリヤ文學の大衆性の問題に觸れた點での、この作品の劃時代性について——等々に關しては、こゝで一切論じない。私が前項で指摘した諸點でも、十分にこの作品は、その劃時代性を證明してゐると思ふ。

一、『眞理の春』の暴露の對象は、從來の狹隘性を見事に突破してゐる。一東亞モスの破綻を中心として、その前後左右に、ほゞたぐり得られるだけに、關係・連絡の糸がたぐられて、その全體が、ブルジョアジーの社會機構(單に經濟機構でなく)の暴露に向つて、ほゞ集中されてゐると言つてよい。しかもその『骨格』には日本社會の現代性を物語る特長的な現象と、場面とが、これも周到に附着されてゐる。

二、作者細田氏の暴露の態度は、從來の型に見るやうな、俺はかう言ふ『內幕』を知つてゐるから知らしてやらうと言つた誇示的なものでもなければ、かう言ふ『事實』がある、これを知つておく必要がある、と言つた敎導的の態度でもない。この作品での暴露の態度は、出來得る限り、觀て、『調べて』形象的に論じて、その內的の力で人々に訴え

て行かうとするリヤリスチックなそれだ。

三、作者細田氏は、特に機構人としての人間の一面を描くことに意を用ひてゐるが、それと共に、人間の全體的な取扱ひにかなり細心な用意をしてゐる。一例をかゝげると、『森井コンツエルン』の生野齊信だ。この日本の大金融王は、この作品で特によく描かれてゐる存在だが、彼は金融資本主義の、柱石たる機構人として、從來の定型のやうに、『惡玉』的に描かれないで、人間として全體的な擴がりと影とにおいて描かれてゐる。その結果たしかに彼は、『惡玉』でない『惡玉』、『惡玉』より無限に以上の恐ろしい存在として、人々の感覺と頭腦とを壓して來るのだ。正直にこれでなくてはいけない。この作品の新しい意味で主人公と言ふべき若きサラリーマン栢山啓作、『タコ』的存在の老サラリーマン檢杉文六についても、同樣なことが言へる。

――暴露文學としての『眞理の春』の劃時代性は、こゝに指摘した限りでは、或は人々、特にブルジョアジーの文學者には、文學的に極く『當りまへ』のことであつて、劃時代性などと大袈裟に取扱はる可きでないと思はれるかも知れない。がそれは異ふ。問題は、その極く『當りまへ』のことが、今日ではブルジョア文學者には、實現し得られない『當り前』のことゝなつてゐるところに在るのだ。それは彼等の間の一般的文學的磁石が、最近全く主觀的の極を指してゐるのでも、一見明瞭だ。この『當りまへ』のことは、言ふまでもなく、作者に蓄へられて客觀性の肥料によつて始めて、當り前でなく藝術的に開花するのだが、その客觀性は、更に根底的に言ふと、今日ではプロレタリヤ・イデオロギーの基礎においてのみ可能なのだ。

細田民樹氏とシンクレヤー、『眞理の春』と『資本』（マウンテン・シテイ）は、對比としては何程の意味も爲さないが、一個の暴露文學の傾向として、大洋を隔てたその二つの作品が、ほゞ同一の藝術的軌道に在ることは、注目に値する。『資本』については、曩に『文戰』六月號）解剖しておいた通り、その特徴的傾向は、いま『眞理の春』について指摘した所と、ほゞ同樣だ。例へば、ゼット・ラッシャーや老ワーナー氏などにしても、アメリカ金融資本機構の一つのネヂとして『定型的』に描がいてゐると共に、ラッシャーは牧場青年からの成上り者として、後者はヘンリー・ヂョーヂの狂的崇拜者として、それぞれ特殊性において、人間的に全體性的に描かれてゐるのだ。それだけアメリカ金融機構のマッスが出て居り、彼等は『惡玉』でなく、それ以上の吸血的怪物として、そこに捕へられてゐる。この大洋を隔てゝの『一致』は、アメリカの作家がこれまで、藝術的に遲れてゐたとか、日本の作家が藝術的に、飛躍したとか言つた理由でも、その他、普通に考へ得られる『文藝的』理由からでもなく、基本的に言へば、世界を基準として、プロレタリアートの意識が、激情性とロマンチシズムとの時代を去つて、觀照・正視とリヤリズムの時代に入つたといふ事實に基くものだ、と私は觀察する。即ちその基礎から發した樣々な『文藝的』理由の作用だと觀るのだ。

これまでは『眞理の春』を一個の暴露小說として、日本の暴露小說界

の歴史的作品としての意義において見たのだが、更に立入つてそれ自身として見て行くと、以上にその一部を指摘した價値ある達成に加へて、この問題の作品には、相當に多くの缺陷が指摘されると思ふ。しかもその中には、『根底的』なものさへ認められるのだ。いまそれを（誌面がないので）個條書きにして、若干の示唆的説明を加へておくことにする。

一、『眞理の春』全體の暴露性――大衆に與へる暴露的感銘――が、作者の努力と、準備とを多少裏切つて、比較的に稀薄だと考へられる。何故このことがあるのか？ いろ〳〵理由が數へられやうが、その主なるものは、作家細田氏のこの作品における關心が、十分に統一的でなく、金融機構の内幕と、サラリーマンの現實と、勞働階級の生活とのそれ〴〵の描寫が、十分に相關的でなく、均衡と對照とを十分に持つてゐないからだと思ふ。例へばこれはコンポジションに關聯したことだが、金融機構の『暴露』は、ほとんど日本のその尖端の全野を一應カバーしてゐると言つてよい。だのに、サラリーマンの現實と、勞働階級の生活運動は、一東モスとビルヂングの中と、工場の中に『封鎖』されてゐるのだ。私は、『眞理の春』の場合、金融機構の全尖端をあれほどカバーする必要は必らずしもないと思ふが、一旦それが試みられたら、それの全擴がりにおいて、サラリーマンも勞働階級も取扱はれねばならないであらう。

二、『眞理の春』全體のコンポジションが、ダイナミツクな展開の線に沿つておかれてあると言ふよりも、諸現象、諸事實の並列的連結の行き方の上に、より多くおかれてある。そのために作品の内部から必至的に展開して來る力で、讀者を捉へるといふ效果がたしかに弱められてゐる。例へば、東モスの沒落にしても、若い社長赤江祥太郎の莫大な使ひ込み等の二三の事實は、それ〴〵の意味をもつて、巧みに描かれてゐるが、それらによつては、また東モス沒落の不可避性は、具象化されない。また例へば、ブルジョアの『幸福な』お孃さんで、××系の闘士となつてゐる吾浦初實にしても、一個の現實的存在としては、約束的に肯定出來るが、彼女がかく『生長』し、楯山容作との『同志愛』を受け納れる等の行爲が、この作品の環境の中での不可避的行程とは、どうしても受取れない。

三、金融機構の暴露、一部ブルジョアジーの極端な浪費生活の展示、これが言ふまでもなく、『眞理の春』の重要な要素だが、前者について言へば、藝術的壓縮乃至單純化が、殆んど行はれてゐないと言つた印象を與へる。現實はかく入組んでゐても、それを不可缺の要素に還元すれば、もつと單純化され得るし、そのことが大衆を目標として見て、もつと效果的であることは疑ひない。後者について言へば、作者は特に苦心してさま〴〵な歡樂・遊戯の場面を取入れてゐるが、人物がいづれも、消費生活では『第一位』的の階級である以上、もつと『執拗』な浪費慾と、その實現相が描かれてよい筈だと思ふ。例へば江東の『人肉の市』にしても、こゝの描寫と觀察とは、眞に我々の胸を打つものがあるけれども、この限りでは大ブルジョアの道徳的荒廢が、具象化されてゐるに過ぎないうらみがある。

四、『眞理の春』において作者は、飽までリヤリスチックの心構へを離れまいとしてゐることは、よく觀て取られた。また敬服にも値するが、やはりそこに感傷的な理想化が忍び込んでゐる。これは作者の人のよい、乃至は『甘い』ためばかりでなく、プロレタリア作家としてもつと根柢的な、或る意味で普遍的なものが、そこに作用してゐるのだ。それはとにかくとして、このことはこの作品の持つ現實的重壓力と言つたものをよほど減殺してゐる。例へばこの作に出て來る他の『半分の世界』の人間、即ちプロレタリヤ運動に、何等かの關係と程度で目醒めた人間は、作者によつて溫い手で撫で廻されてゐるに過ぎない。泉もそうだ。房森もそうだ。香浦もそうだ。目覺めた女工たちもそうだ。而してこれらの人々が尖端となつて、こゝに示唆されてゐる日本のプロレタリヤ運動もそうだ。この『赤い一線』の要素も、『眞理の春』の場合、必らずしも削れる必要はないと私は思ふが、一度びそれの幕の一端がまくり上げられるとすれば、やはり作者は、こゝでもリヤリスチックな明澄・冷嚴な眼を据えてゐなければなるまい。それでなければ、『今の日本の生動する社會的現實を通じて、何が眞實なものであるか、ひたすらそれを探求しやうと努めた』と言ふ作者の言葉は、實質上、甚だしく割引されることとなる。

五、『眞理の春』の藝術的特長の中には、その暴露的內容の外に、モダーンな生活姿態の『明るい』描寫がある。思ふに一部の人々は、その暴露的內容の魅力よりも、この生活姿態の多彩な描寫に誘惑を感ずるでもあらう。いま發表機關や、その他の機械的事情を抽象して考へれば、一個の暴露的作品としては、それは危險を約束するやり方ではないだらうか？ 暴露文學の單調や理智的要素の偏重が、暴露そのものの展開・變化・回轉・爆發等々の『興味』によつて『救はれる』のはよいが、扉を開いて、さわやかな外氣と、花園の匂ひで『救はれる』やうに仕組まれるのは、一個の機械的な安易性に手頼ることであると思ふ。——だが、これは飽までも『眞理の春』を一個の暴露文學としての基準から、一元的に觀ての批判なのだ。

最後に私は、隱すところなく、『眞理の春』を人々のまへに高くかゝげて日本の暴露文學も、『運動』の力によつて、こゝまで歩いて來た。だが、まだこゝまでだ、さあもつと前へ進まふと叫びたいのだ。

（七・八）

個性の文學と類型の文學

谷川徹三

問題の多面性は限られた紙面に於いての考察を結局答案的なものとするであらう。しかし、忠實な生徒らしく問題を一通り全般的に鳥瞰して後には、私はできるだけ、こゝに含まれてゐる——もしくはこの題目のもとに理解し得る——問題の現在的意義を取上げよう。

一

すべての文學論がそのどこかに必ず次のやうな敍述をもつであらう。

特に個性的な作品と特に類型的な作品とがある。云々。或は、作家のうちには個性を描くに巧みなものと類型を描くに巧みなものとがある。云々。或は、詩人の人生觀に於いてはわれ／＼は個性的と類型的とを區別することができる。云々。

これらの、人生觀の、素質乃至技術の、作品そのものゝ、に見られる個性的と類型的とは、勿論絶對の對立をなしてゐるのではない。今あげた諸敍述も、そのそれ／＼の言葉の次に、多くは「然しながら」をつけ加へてゐる。たとへば、

然しながら、個性的と言ひ類型的と言ひ畢竟程度の問題であつて、或標準から類型的なものも他の標準からは個性的なものとなりうべく、或立場から個性的なものも他の立場からは類型的なものとなるであらう。云々。或は、

然しながら眞に偉大な作家は、個性のうちに類型を生かし、類型を描きながらそれに生き／＼した個性的實在性を與へる。云々。といふやうに。

ギュヨーは一方「生命は本來個性である。われ／＼は、個性

乃至個性的なものにしか共感しない。創造に個性化の極印をうつことは、藝術にとつて絶對の要件である、」と言ひつゝ、他方やはり次のやうに言つてゐる。「然しながらまた、單に個性的であつて毫も類型的なものを現してゐない藝術は永續的興味を生じ難い。……一流の劇作家や小說家の手に成つた偉大な類型は、同時にまた藝術の世界に於ける偉大な個性であるといへる。そしてそれらは必ず深い實在性を有すると同時にまた象徴性をもつてゐる。文學史上にこれらが重要な意義をもつ所以は實にこの二つの長所を結びつけてゐる點にある。實際の人間から取つてきた性格の描寫は數あり、その中には全く眞實なものもあるが、しかも文學上に特記すべき影響を及ぼしてゐない。何故であるか。それは單に實在から切り取られた一斷片に過ぎず、何ら象徴的なものをもたず、何ら一般的觀念及びこれを通じて得らるべき廣大な實在そのもの、生きた表現になつてゐないからである。單に個體を描くだけでは十分とは言へぬ。眞に顯著な個性、すなはち、一地方の、一時代の、或は他の諸存在の一群の全體の主要特質を一個の存在の中に凝縮させたものを描かなければならぬ。」

しかしかくの如きはなほ後の問題である。事實ギュヨーも一般的に、個性的な藝術と類型的な藝術、もしくは類型的にして個性的な藝術、とを對立せしめてをり、その個性的な藝術（單に個性的な藝術）を、「社會的感情の崩壞と非社會性の復歸とを特徴とする」デカダンの藝術に於いて見出してゐる。

二

個性的と類型的との對立は如何なる表徴をもつてゐるか。

第一。類型的が社會性をもつてゐるに反して單なる個性的は社會性をもたない。（これは社會性一般を抽象的に規準とした場合である。）

第二。（社會性に多少とも具體的な內容を與へて見れば）、類型的は、一種族の間に、一民族の間に、一國民の間に、一宗教の間に、一宗派の間に、一階級の間に、その他さまざまの社會圏の間に、共通性をもつものであり、個性的はそれをもたぬものである。尤もこの社會圏を極度に狹くとり、一定の文學上の流派に限定するやうな場合には個性的にも共通性がないとは言へないし、逆にまた具體的社會圏の如何によつて類型的に於ける共通性にも程度と限界とがある。更にまた、あらゆる人間的文化的存在が歷史と社會とを離れては存在しえないといふ立場からすれば、如何なる個性的存在も、その歷史的社會的發展段階を反映するものであり、その意味で多少とも類型的に見られう

るであらう。しかしここではそのやうな見地をしばし除外する。たとひそのやうな見地を取つても、その範圍内に於いてより多く反映するものとより少く反映するものとを區別できるからである。一般的に「如何に」反映するかを區別できるからである。むしろこの「如何に」反映するかに、この場合にも重要な問題があるからである。

第三。社會性の具體的な内容は、社會の歴史的發展に對應して、或時はこれ、他の時はあれが重要性をもつ。從つて個性的と類型的との對立は歴史的社會的發展段階に應じてその對立の具體的意味を――從つてまたその表徴を異にする。たとへば或時代には國民的が社會性の最も具體的な内容をなしてゐる。他の時代には宗教的結合が社會性の最も具體的な内容をなしてゐる。更に他の時代には階級性が社會性の最も具體的な内容をなしてゐる。（或時代に國民的が社會性の最も具體的な内容をなし他の時代に宗教的結合がさうなる所以を一層基礎的な原理から導き出すことはここでは問題でない。むしろここではさういふ基礎的原理に執するのあまり、具體的事實の諸相を閑却する公式主義者達を警めねばならない。）そしてこの國民的類型的と宗教的類型的と階級的類型的とはそれぞれその具體的意味を異にすると共に、そのそれぞれの類型的と個性的なるものとの對立もまたその具體的意味を異にしてゐる。

第四。或時代（もしくは一定の歴史的社會的發展段階）に於いては、社會的結合が緊密なため、個性的なものが全く或はほとんど存在しえない。それに反して他の時代（もしくは一定の歴史的社會的發展段階）に於いては、社會的結合が弛緩してゐるため、大きな類型がほとんど見出しえない。個性的と類型的とはこの兩極端の間に、それぞれの度に於いて對立してゐる。ここでも、さきに述べたやうに、圏の大小によつて、視點の置きどころによつて、その對立は異動し、交叉し、且無數の段階をもつ。たとへば、フリーチェはあたかもここにいふ個性的と類型的とに當る「藝術の二つの根本型」として、分化的・非社會的・親近的・非モヌメンタールな藝術と、綜合的・社會的・モヌメンタールな藝術とを區別し、紀元前三四世紀のギリシャ・ブルジョア社會、十五世紀の資本主義的イタリア、十七世紀のオランダ、十九世紀のブルジョア・ヨーロッパに於ける藝術に前者を見出すに對して、古代エヂプト、アルカイツク・ギリシャ、浪漫的中世の藝術に後者を見出してゐるが、それは彼の獨自の立場に立つた極めて大雜把な（と言つて悪ければ原理的な）掴み方であつて、われわれはそのそれぞれの範圍内にあつて更に同じ對立を見出すこともできる。十九世紀ブルジョア・ヨーロッパの藝

術に於いても、われわれは、より分化的・非社會的・親近的・非モヌメンタールな藝術と、より綜合的・社會的・モヌメンタールな藝術とを十分區別し得る。フリーチエは特に造型美術、建築について語つてゐるのであるが、われわれ當面の問題たる文學にあてはめて考へれば、ボードレールとユーゴーとを對立させて見るだけでもすでに十分と言へよう。

第五。主觀的と客觀的、超現實的と現實的、表現的と形成的、浪漫的と古典的、といふやうな諸對立も、しばしば個性的と類型的との表徴として理解される。しかしこれらの概念はそれぞれ概念形成の獨自の背景をもち、從つて立場を變へれば、個性的として意味されたものがかへつて類型的を意味し、類型的として意味されたものがかへつて個性的を意味するやうになることがあるから、さういふ混雜をさけるため、特に必要な場合以外比較考察をしないで置かう。

さてこれで私は個性的と類型的との對立の表徴を大體述べたやうである。

個性的といひ類型的といひ、藝術家の人生觀乃至素質の對立として見る場合と、作品そのものの內容（特に描かれた人物）の對立として見る場合と、手法の對立として見る場合とを（一の初めに擧げた諸例にも示される如く）一應區別して置く必要があるかも知れない。一作家、一作品を他と比較してこまかく見る場合には、その間に多少の喰違ひのあることがしばしばだからである。しかし本來この三者は離すべからざるものであり、また多くの場合三者は一致し、たまたま表面一致してゐないやうに見える場合にも、一層深く見れば結局一致してゐる場合が多いから、私はその區別に固執しないであらう。――そのやうな區別のどうしても必要な特殊な場合を除いて。

三

これだけ一般的考察をして置いて、この問題をもつと現代に即した側面から取上げて見よう。

最近四五年來われわれは各方面にしばしば、文學に於ける個性と個性的なるものとの意義の喪失が語られるのを聞いた。更に積極的に個性と個性的なるものとの排斥の聲をも聞いた。

それは先づ個人心理の解剖を主內容とする小說、特に、所謂心境小說に對する不滿に口火を切られたが、ひいて一般的に個性及び個性的なるものの價値の懷疑へ、排斥へと向つたのである。かつて個人心理の描寫は文學の中核的內容であつた。それなしには「高級な文學」は成立しなかつた。かつて個性のある

ことは價値であつた、價値の最大なるものであつた。しかし今やさうではない。價値の規準は明かに移動したやうに見える。(この現象を一般的に、近代個人主義――政治上の自由主義、經濟上のレッセ・フェール、哲學上の主觀主義（それと結びつく近代心理學の隆盛）等――の崩壞過程のうちに理解することは間違つてはゐないであらう。否、さうすることによつてわれわれはこの現象を全體的に大きな關聯のもとに把捉することができるであらう。しかしわれわれはその背景のもとになほ一層こまかく事象を見よう。)

では新しい傾向は如何なる方向を示してゐるか。

もつと生きた社會を描け。社會の各方面の機構を描け。集團を描け。こまかい心理の穿鑿の代りに映畫的多角的描寫。内面的感情の表出の代りに感覺的構成。體驗の切實性の代りに場面的變化。何よりも速いテンポ。かくして小説の中に統計的報告がはひり、經濟的機構のこまかい分析が文學の重要な内容をなす。報告文學。暴露の文學。かくして制作に於いても一個性による内面的統一が無視され、多人數の連作に於ける變化と多樣性とが讀物的興味の對象となり（尤もこれは多くの場合眞面目な藝術とは受取られないらしかつたが）、しかし多數の調査にもとづいた資料の編成といふ方法（シンクレア的手法）は眞面目な重要な方法として受入れられ、更に一般的に共同の制作が企圖されてゐる。（これらはかつてフローベールがサラムボーのために等身の資料を集めたのや、またゴンクール兄弟が共同制作をしたのや、更にまた某々の流行作家が代作に少しばかり手を入れて自分の名をつけるのとは意味がちがつてゐる。）

これら一連の現象には一層積極的に個性の蔑視が見え、意識的、無意識的に、新しい類型的文學への指向が見える。

言ふまでもなくわれわれはそこに二通りの方向を區別することができるであらう。特に社會意識階級意識の勃興を背景にするものと、特に近代機械文明と都市生活との性格を強度に反映したものとの二つの方向に。

プロレタリア文學者は主としてその階級意識の立場から、個人主義と個性とを斥ける。從つてこの立場に於ける類型的なるものとは階級意識によつて結びつく一つの社會團の結合の緊密がおのづから生むところの類型化であり、また、マルキシズム世界觀に於ける方法の一樣性がおのづから生むところの類型化である。他の一群に於いてはその類型化の性格はこれとは異つてゐる。それは近代機械文明がもの、内面と個性とを奪ひ、すべてを機械化し、規格化し、事物化し、合理化し、量化するあの性格を特に反映してゐる。都市生活の速いテンポとコスモポリ

タニズムとを特に反映してゐる。そこにあらはれる類型化である。勿論前者に於いても現代のかゝる性格は反映してゐる。機械化、規格化、事物化、合理化、量化、コスモポリタニズム(地方的特殊性の減少)。これらは總じて現代の一般的徵候である。映畫の影響の如きもさうである。その他幾多の共通點が數へあげられるであらう。時代は、社會圏とイデオロギーとのあらゆる對立にもかゝはらず共通な內容と背景とを與へるからである。しかもわれ〳〵はそこに拒むことの出來ぬ大きな區別を見なければならない。そこに、同じく個性の拒斥と言つても前者がそれの止揚であるに對して後者がそれの分裂解體であり、同じく類型的なるものへの要望と言つても前者が積極的であるに反して後者が消極的であり、むしろ或意味では(卽ち個性の分裂解體を一層個性的になることゝする意味では――これは必ずしもさうは解せられないのだが)反對の方向に向つてゐるとも見られることを注意しなければならない。

四

これらの方向を「歷史的社會的必然」としてわれ〳〵は一應認めよう。しかしそれを「歷史的社會的必然」と認めることは、直ちにその方向をそのまゝに是認することにはならない。もしくはその方向に於ける作品をことごとく價値ありとすることにはならない。たとひその評價を現社會に卽してするにしても。

勿論必然が必然である限り、われ〳〵はそれを一應受入れる。受入れなければならないであらう。受入れずにはゐられないであらう。しかし一定の歷史的社會的地盤の上に必然的に生れた若干の作品に於いて、われわれは事實、その或ものを受入れ、或ものを斥ける。或ものを價値ありとし、或ものを價値なしとする。この相對的自由は「歷史的社會的必然」の中にも存在する。その自由もより大きな見地に於いては必然の中にあるであらう。われわれが或ものを價値ありとし他のものを價値なしとする場合、その價値の基準は歷史的社會的制約を受けてゐるであらう。現社會のそれでなければ過去の社會のイデオロギーの。しかも過去のイデオロギーのそれはいつまでももち續けることはできないで、いつとは知らず時代の流れに流されてしまふであらう。しかしそれにもかかはらず「必然的な」若干の現象に對して、その或ものを受入れ、或ものを斥け、或ものを價値ありとし、或ものを價値なしとすることには、儼とした意味がある。必然を認めないものは盲目である。自由を認めないものは空虛である。

このやうな立場からあのすでに述べた最近の傾向――一つの

歴史的社會的必然——は如何に見られるか。

ここで私は個性的と類型的との對立に含まれてゐる意味のうち、さきの考察に於いてはわざと僅かしか觸れなかつたものに觸れなければならない。

個性的なものが兎もすれば特殊性、偏向性、氣隨、偶然性と結びつき、類型的なものが兎もすれば型にはまつた、因襲的な、通俗な、常識的な性質と結びつくといふ點である。本來個性的とは單なる特殊性、偏向性、氣隨、偶然性ではなくて、普遍性、必然性をもちうるものであり、本來類型的とは型にはまつた、因襲的な、通俗的な常識的なものではなくて獨自性を示し個性と結びつくことの出來るものであるのに。

實際眞に秀れた藝術は昔から個性的にして類型的であつた。言ひかへれば、特に個性的な作品にあつても決して單なる個性的、即ち偏向的、偶然的ではなくて、普遍性と必然性とを示し、特に類型的な作品にあつても決して單なる類型的、即ち型にはまつた通俗的なものではなかつた。さきにあげたギュヨーの言葉はこの消息を語つてゐるのである。「然しながらまた單に個性的であつて毫も類型的なものを示してゐない藝術は永續的興味を生じ難い。……一流の劇作家や小説家の手に成つた偉大な類型は、同時にまた藝術の世界に於ける偉大な個性であるといへる。云云。」それ故に如何なる歴史的社會的背景のもとにあつても、或は、時代のめまぐるしい變化にもかかはらず、秀れた藝術品には大きな共通點がある。

論點を一層はつきりさせるために、小説や劇に描かれてゐる人物を取出して問題にしよう。ハムレットやカラマゾフの兄弟達は、最も秀れた意味で個性であると共に類型であり、類型であると共に個性である。ここにはたましひの深みが殘りなく描かれてゐる。彼等は生きてゐる。われわれが周圍に見る實際の人間よりも力強く生きてゐる。そしてその「力強く生きてゐる」所以は、彼等が、實際の人間の單なる特殊性と偶然性とを脫して、一時代の（むしろあらゆる時代に亘つての！）一群の人間を代表してゐるからである。ドン・キホーテはハムレットや、カラマゾフの兄弟達が生きてゐるやうには生きてゐない。ここには類型化のあとが露はである。しかもわれわれにとつてドン・キホーテは生きてゐる。ドン・キホーテは儼然たる存在である。

これらの事實は忘れられてはならない。これらの事實は文學概論のあらゆる頁に記されてゐるため、かへつて人はともする

と忘れ易いのであるが。しかしこれらの事實にこそ、眞の藝術の何であるか、眞の文學の何であるかが見られるのである。

然るにこの點から見る時、この國の文學の最近の、すでに示したやうな、傾向の中には多くの不安と危險とがある。

その類型化への方向には型にはまつた、通俗的なものへの頽落の徴候が見える。これは、新しい文學の先頭を切つた最も獨自な才能ある作家横光利一氏のものに於いても、たとへばその上海を舞臺にした長編の中に示されてゐる事實であり、プロレタリア作家の多くに於ける、勞働者の概念的英雄化と資本家の淺薄な戯畫的描寫にその典型的表現をもつたものである。多くの非通俗的作家が通俗小説に走つたのも一面これと關聯した現象と見られるであらう。

私は通俗小説を一概に輕蔑するものではない。所謂通俗作家と謂はれてゐるもののうちにも二四の秀れた才能を見出してをり、そしてそれらの人達の作品をしばしば非通俗的作家の作品以上に尊重してゐる。元來、通俗と非通俗との限界そのものが甚だ曖昧である。しかしそれにもかかはらず、私はその區別に一應の理由を見出し、そして眞の藝術家は通俗的であつてはならず、通俗的になつてはならないと信じてゐるものである。では通俗と非通俗とを區別する基準はどこにあるか。その時代の一般的常識にのみとどまるか、それより多少とも踏み出すかである。その意味でうしろを向くか前を向くかである。勿論眞の作家は大衆の心を語らなければならない。しかし眞の作家は大衆の言はんとして未だ言ひえないものを語る。すでに語られた、已に一般的の言葉となつてゐる、大衆の心を語るのではない。大衆と全く離れてゐるのはたとひ彼が眞の藝術家であつても常に第二流以下の藝術家であらう。第一流の藝術家は時代と社會と大衆の心とに密接な交渉をもつてゐる。しかし單なる通俗の作家とは異つて――即ち第二流以下の藝術家でもない、一般に藝術家ではないところの作家とは異つた仕方で、交渉をもつてゐる。ここにわれわれは通俗的（通俗的類型的）と個性的（單なる個性的）と類型的（必ずしも個性的と矛盾しない類型的）とを明かに區別することができる。

最近數年來の通俗小説の隆盛は、一つには、自然主義以來の個人主義作家の「面白くない」ことに因由した。しかし自然主義以來の作家は兎に角自分を掘り下げることによつて、通俗な常識以上に出てゐた。常識で割りきれないものと取組んだ。しかるに通俗作家達は常に常識以上に出ない。時に常識で割切れな

い問題を取扱つても、その取扱方と解決とは結局常識以上に出ないのである。かかる態度を然るに新しい傾向の或もの達はもたうとする。それを、個性の無價値と個人主義の排斥との名のもとに、新しい文學への要望の名のもとに、さうするのである。――しかし實際に於いてはそれは藝術から非藝術へ顚落することである。「面白くない」ことはその藝術の價値の少いことの一つの理由でありえても、藝術を非藝術とすることではなかつた。しかし今の場合には藝術を非藝術とするのである。

私は藝術の評價の具體的基準の歴史的に變化するのを否定するものではない。或人達の如くこれを簡單には解しないで、比較的變化の速かな側面と變化の緩漫な側面とを區別し、更になほ複雜な問題をここに見出すにしても、その變化そのものを決して否定しはしない。しかし今の問題は決して單に基準の變化の問題ではない。基準の變化の問題としては片づけられないものをもつてゐる。即ち、私が二に於いて取扱つたやうな、それぐ＼の文學の歴史的社會的背景の問題としては片づけられないものを。

いふまでもなく、ここに於いてもまたわれわれは、二つの群、所謂藝術派と所謂プロレタリア派とを區別しなければならないであらう。プロレタリア派に於ける型にはまつた通俗化が、主として、マルキシズム世界觀の公式的な、消化されない、窮屈な反映にあり、更に一般に、頭で理論的に理解した儘を藝術に盛らうとする點にあるに反し（藝術とはそんなものではない！）、藝術派の通俗化は、現象の表面を浮動するところに、ものを掘下げないところに、個性の分裂と解體とに見出される。しかしこの二つの傾向はいづれの側にあつても、しばしば混交し、交錯してゐる。

かくして新しい文學の方向はそのいづれの側に於いても大きな危險を含んでゐる。そのいづれの側に於いてもブルジョア文學――それは結局廣い意味で個性の文學であり個人主義の文學であつた――の全盛期に於けるやうな秀れた作品をまだ生んでゐないのに、これを如何に見るべきであるか。われわれは一先づ未來に期待する。しかも未來に期待しながらなほ一つの不安におびやかされる。新しい時代はすでに文學をその適當な形式としなくなつてゐるのではないか――文學は、少くとも在來の形式に於いては、すでにその全盛期が過ぎたのではないかといふ不安に。

世阿彌の花

野上豐一郎

能では役者が揚幕を揚げさせた瞬間から見物席に對して相互排擊的の交渉が始まる。彼が見物人の心を捉んでしまふか、しからざれば、見物人の方が彼を壓倒してしまふか、といふ一種のオルタナチヴの對立である。それは意識的にも、また、多くの場合、無意識的にも行はれる。役者の側に於いて意識的である場合には、明白なる挑戰的態度である。いづれにしてもすぐ第一の決定はつく。役者が勝てば、彼が橋掛一の松に立つて上げる一聲(いつせい)は、手もなく出陣第一の功名にきほひ立つ凱歌の如く聞こえるであらう。若し勝ち得なければ、彼は下歌をうたつても上歌をうたつても、舞臺に入つてサシをうたつても、容易に形勢挽回の機會を見出すことは困難であらう。惡くすると、彼は最後までその狀態を持續して、最も氣乘のしない、最も屈辱的な留拍子を踏まねばならぬかも知れない。我我はしばしばさういつた氣の毒な演能を見せられることがある。

併し西洋の演劇に於いては必ずしもさうではない。アリストテレスは、俳優が見物人を向ふに廻してなすが如く見える行動と話し方をば避けねばならぬと云つた。それは、舞臺に立つてゐる人たちは彼等同士の間の存在のみであつて、見物人はのぞき見をしてゐるが如く假定されねばならぬといふ意味である。けれども、それは根本原則であつて、實際に於いては或る程度までの妥協が行はれ、役者は全然見物人のことを考慮に入れないで芝居を有效にすることはむづかしい。

此の點、能と芝居とは反對である。能では初めから見物人を相手にして、見物人に話しかけ、見物人のために舞つて見せるのである。之は私の持論であるが、能は本來主演者一人の演戲を、見せることを建前にしたものである。主演者は多くの場合シテの役者である。そのほかワキの役者もあるが、之は本質的に助役的若しくは對役的の任務を持つ者ではなく、單に見物人の代表者の如き資格を以つて主演者の演戲を引き出すために登場するに過ぎない。(「安宅」「正尊」の如き能に於いては、ワキが成長して完全にシテと對立するやうになつて居るが、それは能の戲曲的に發達した後の形式であつて、能本來の行き方からは區別して觀察されねばならぬ。)能の此の主役一人主義は何を語るか。それは云ふまでもなく、能が最初から見物人を相手に舞つたり歌つたりするやうに出來たものであることを實證してゐる。讀者は能の登場者が「斯樣に候者は」とか「これに出でたる物狂の」とか、形は第三人稱を用ひた紹介の口調であるが、その實自分を推薦する意向を以つていかにしばしば直

後見物人に話しかけるかを記憶するであらう。また、見物人の代表者なるワキが、もはや當然沈默してゐて然るべき狀態になつてゐるにも拘らず、常にシテの舞を督促する言葉をただ一句挿しはさむことを忘れないのに氣がつくであらう。これ等は著しい二三の徵候を示したのに過ぎないが、それだけでも如何に能が見物人を相手にするやうに出來てゐるかがわかる。

それ故に昔からすぐれた役者はどうすれば相手を有效に征服することができるかを常に工夫した。殊に初期に於いては、能の創始者たちの自由思想が十分に動いてゐたから、たとへば眞劍を以つて戰場に臨む勇士たちの如く、彼等は見物人に對した。後代に於いては、役者はただ先人の型を受けついで器械的にそれを模倣するやうになり、演戲の根本精神は殆んど忘られてしまつた。彼等は見物人を相手にすることだけは知つてゐても、見物人の鑑賞力と取つ組むことをばしないで、ひたすらに見物人の低下した趣味に迎合することのみを心がけた。能は生命を失ひ、品質を落した。能を生命ある藝術にまで復活させるためには、先づ當初の精神から理解してかからねばならぬ。

能の創始者の一人なる世阿彌は最もよく見物人征服の戰術を心得てゐた。その頃は立合といふことが行はれてゐた。猿樂の座でも田樂の座でも行はれてゐた。猿樂と田樂と入り交つての立合も行はれてゐた　立合は普通の演技ではなく、特殊の競技であつた。「花傳書」の「問答條條」の一項として、「申樂の勝負の立合の手立は如何」といふ問題に對して、世阿彌の說いてゐる所は、單に立合の場合に適合するのみでなく、進んで一般演能の表現方法としても考へられるものである。彼は、先づ能數を持ちて、敵人の能に變りたる風體を違へてすべし、と敎へた。能は和歌の抒情主義を根本精神とする演戲であるから、聲樂と舞踊の舞臺的技術のほかに、更に歌道の修養を積んで、自ら歌詞をも綴り得るだけの才能を備へて居る時は、單なる技術の役者に比して一段の有利な武器を持つことになる。若し、敵方色めきたる能をすれば、しづかに模樣變りて詰め所のある能をすべし。これは前の命題の實地指示である。斯樣に敵人の申樂に變へてすれば、いかに敵方の申樂よくとも、さのみには負くることなし。どこまでも對抗意識の現はれで、敵人と云ひ、勝負と云ひ、實によくそれが露出してゐる。此の對抗意識がひとり立合の相手方に對してのみならず、一般見物人に對する場合にも強く現はれるべきものであつたことは、例へば「花傳書」の同じ卷中「先づ座敷を見て吉凶をかねて知る事」に就いての記述にもよく出てゐる。

役者は橋掛を步きながらも、その第六感を以つて見所の客氣を直感し得るものである。たとひその顏面は假面に依つて遮蔽され、その耳は假髮に依つて隔斷されてゐても。最も好ましい機會は、見所に大いなる期待の緊張が程よい程度に充滿してゐる時である。その潮先を見て、所謂時の調子を捉んで、一聲でも上げたならば、役者はやすやすと見物人の心を支配することが出來る。けれども見所に秩序のつかないことがある。喧騷が反抗したり、倦怠が潛伏したりして。その時は發聲をも動作を常よりは一倍と強調してどやしつけなければ、歌舞すべからざる狀態に陷つて

しまふであらう。さうして後、次第に冷靜の調子に引戻すべきである。世阿彌は座敷のきなひ(闌位)おくれ(銷沈)といふ言葉を用ひた。見所の空氣があまりに興奮してもわるければ、あまりに銷沈してもわるい。前者は陽氣に過ぎ、後者は陰氣に失するからである。他の陽氣にはわが陰氣を以つて臨み、他の陰氣をばわが陽氣を以つて引き立てる。見所を見て豫め吉凶を知るとは、即ち陰陽和合の機先を制するが爲で、言ひ換へれば見物人征服の一つの戰法である。

世阿彌は此の戰法の熟達を名づけて花を極めることと呼んだ。「花傳書」は要するに此の戰法の虎の卷である。そもそも花といふに、萬木千草に於いて、四季折節に咲くものなれば、その時を得て珍らしきゆへに弄ぶなり。能も人の心に珍らしく感じる所が即ち花である。花は散る。散るからこそ咲いた時が珍らしく感じられるのである。能も住するところなきを先づ花と知るべしと世阿彌は說いた。之は非常な卓見である。花とて別にはなきものなりと喝破してゐる。劵の物數を盡して、工夫を積んで、珍らしさの感得をわきまへること、それが即ち花である。例へば鬼物を演ずるにしても、或ひは力動風といひ、或ひは碎動風といつても、徒らにいかつく物すごく演ずるだけでは珍らしさはない。見所の期待もそれに過ぎないであらう。鬼を雜ふ口傳に巖に花の咲かんが如し、とある。巖は鬼のいかつさである。そのいかつさの上に若し幽玄の情趣が加はれば、是れ即ち巖に花の咲き出でた珍らしさである。その珍らしさは見物人の心を奪ひ去らずには措かないであらう。

世阿彌はまた說いた。祕すれば花なり。祕せずば花なるべからず、と。一切の藝術に於いて祕事といふのは、祕するから效果があるので、初めから現はして置けばおかしくもおもしろくもない。だから珍らしさは祕することの結果で、その蓋を取つて見て、大したことではないと云ふのは、祕することの效果を感じ得ないからである。「道成寺」の能を初めて見る人は、息苦しい亂拍子の後に爽快な高速度的の急の舞があつて、その舞の終で綱の解けた獨樂の如く、白拍子姿の演者が跳ね上ると、同時に上から大きな釣鐘が墜落して伏せてしまふので、その珍らしさに壓倒されるであらう。けれども若し翌日また同じ「道成寺」を見たらば彼はもはや驚かないであらう。その時演者が釣鐘の眞下から入りもしないで、ぱつと手前の外側から身を躍らして遙かに高く飛び込んだならば、見る者は再び更に壓倒されるであらう。併し、もはやその外に鐘入の方法はない。若し期待が一層高まつたならば、演者は反對にその裏を掻いて今度は慇懃に鐘の下に立つて靜かにそれを迎へるが如くにして入るも一つの方法であらう。その方法さへ巧みならば却つて人の意表に出でて有效であるかも知れない。「土蜘蛛」にて前の傳などと稱して、打ち振る五本の指の間から細かい雁皮の紙が縱横無盡に噴出して、舞臺も賴光も、一人武者も綱も金時も、一の松も電燈も眞白になつてしまふことがある。けれどもその夥しい蜘蛛の巣に慣らされた者は、却つて一二本の幅廣い紙を下手な術に見る薄の如く後見座から投げられた絲の方に驚の目を見張らないとも限らない。要するに期待の裏切である。それが花の本體である。やりさうな時にやらないで、やりさうもない時にうんとやる。それは規矩に住することなき自由溌溂の精神からでなければ現はれない。其處に藝術の眞生命を置いた世阿彌は、まことに藝能の戰術家であつた。

附錄「最新社會科學研究の頁」新設

われらの言はんとするところは、別揭那須博士のステートメントに盡きてゐる。二十世紀が社會科學の時代であり、吾々の生活が社會科學の進展と切離して考へられないことは解りきつた事實である。然しながら、博士も言はれる通り、此等の專門的智識を洩れなく涉獵することは、專門家と雖も至難である。況して一般同攻者にとつてそれは不可能事である。われらは混亂に近き眩しさを以て、朝に夕に、この新興科學智識を迎へ容れんとしてゐる多くを餘りに多くわれらの周圍に見てゐる。

聞くところに依れば、アメリカから發行されてゐる「社會科學抄錄」は世界各國二十ヶ國、千四百名の學者によつて抄錄されたものである。今後本誌に發表せんとするものは、之に參加するに我國學界の權威十八名家を以てし、更に摘錄し、加ふるに我學徒の諸研究にして海外に發表せらるべき新研究を拔萃附加して紹介せらるゝのであるから、わが社會科學に關心を有つ多くの學者學生にとつてこれほど至便なものはない譯である。單に便利重寶といふ以上に、我國社會科學の研究は、これより紛糾錯雜の域を脫し、頓に整然としてその前途に一大巨火を投ぜらるゝことになるであらうを信ずる。

斯くの如き有意義なる事業が我國の碩學大家を網羅して成立つたことは我學界のために寔に慶賀すべきことであり、之を本誌中央公論によつて提供せらるゝことは本誌の名譽とするところである。

庶幾くば此企てが我學界並に智識階級に裨益するところ多きと同時に、我學界の威力を世界に誇示し得るに至らんことである。さうして、更に願はくば、此限りなき榮譽をしてわが中央公論誌の上に彌が上にも光輝あらしめられんことである。(記者識)

社會科學研究の國際的協力とS・S・Cの誕生

那須皓

一

十九世紀の文明は自然科學の進步によつて一大躍進を遂げた。二十世紀の文明は社會科學の進步によつて一大變革を來たすのではないかと云はれて居る。それは勿論、自然科學的進步の行詰りを豫想してゐはない。自然科學は今後も日進月步、驚くべき業績を擧げるに相違ない。さり乍ら二十世紀は十九世紀に於て比較的其の發達の遲々たりし社會科學方面に於ける躍進を以て其の特徵とするであらうと考へられるのである。一には自然科學の發達に基づく各種社會事情の集積が、それを促すのである。二には社會そのものを自然科學者的眼光によつて觀察するを學び得たと云ふことが、それを促すのである。嘗て「自然」に對立せし「社會」を、我々は今や一の自然的事實として發見した。社會を動かす樣々の力、その相互關係竝びに法則を、客觀的、數量的のものとして說明せむとする努力も茲に生れた。

法律と經濟、歷史と經濟との連鎖は、かくて其の全貌を明らかにせむとしつゝある。否、進むでは人間心理の秘奧すらも、精神分析學は之を客觀的社會事實、特定なる生活經驗そのものの派生物として解釋せむとしつゝある。社會的事實に關する此等研究の成果は、吾人の社會觀、人生觀の基礎を漸次震撼しつゝあるのである。此等研究の萌芽は既に十九世紀にあつたとは云へ、その發育大成は關係諸學科が轡を竝べて併進し、社會統計其他の資料蒐集も漸く完からむとする二十世紀に之を俟たざるを得なかつた。而して過般の世界大戰竝びに之を機會として生ぜし各種の社會的大變革は、恰も斯かる研究的勢力を在來のあらゆる羈絆より解放すべき一大狼煙を擧げたるの觀あるのである。

二

社會科學は社會學、法律學、政治學、經濟學、統計學を含み、更に廣義には史學、人文地理學等をも網羅する。而して上揭諸學は各々、更に幾多の專門的分科（例へば經濟學に於ける經濟學史、經濟原論、經濟政策、財政學等）に分岐せるを以て社會科學の廣大なる領域に包含せらるべき學問の種類は、實に數十を以て算せらるゝのである。方今、學藝日に進み研究益々精緻を加ふると共に、かゝる數十の專門的研究は、それぞれ特別なる專攻者を有するのである。而も此等研究者は各自の狹き領域内の研究に沒頭する餘り、漸く他部門に於ける研究の成果を知得すべき機會を喪失しつゝある。專門的研究の餘弊が玆に現はれる。鹿を逐ふ獵師山を見ざる時、專門的研究者は自己立脚地の那邊にあるかを忘失する。斯くの如くむば關係諸學科の成果を參照することによる自家專門的研究の深化も之を望み得ず、又社會諸科學の綜合大成による實際的效果も甚だ影薄きものとなり了するであらう。偏頗なる學的認識は偏頗なる人間を生み、偏頗なる社會進化の軌道を作る。かゝる缺陷の除かれざる限り、二十世紀文明に吾人が期待するところも却つて一の跛足化せざるを保し難い。

三

斯くのごときは蛇足に屬すとなして之を考慮の外に置き、更に又、社會諸科學の綜合に關する努力や、他部門に於ける知識吸收の必要も暫らく之を問題外として視野の外に卻けたりとせよ。吾人は今、限局せられたる專門的知識の吸收と云ふ一點にのみ注意を集中するであらう。然らば專門的研究者は自家領域内に於ける重要なる諸研究を洩れなく且速かに知り得べき便宜を有するやと云ふに、決して然らず。學問の進步は多數の新刊書、多數の專門雜誌の誕生を齎らし、此等を悉く讀破することは、專門家に對してすらも非常なる難事業とならむとしつゝある。之を國内に限るも尚且つ然り、況むや諸外國に於ける同種出版物の膨大なる數量を附加するに於てをや。假りに語學の障壁が悉く除かれたりとするも、此等一切を讀みこなすことは時間的に殆んど不可能事たるに近い。かくして同種研究の既に存するを知らずして無用なる努力を再び繰返す危險が生れる。また、學問研究上に於ける國際的協力の機會が著しく狹められる。それは研究者の精神的努力の浪費であり、更にその研究に際して消耗せられたる經濟的物質の浪費である。

資本主義經濟社會の無政府主義的生產を喰ふところの學者自ら、その研究過程に於て之と同一なる錯誤に陷りつゝあるのである。かく觀ずる時、吾人は社會科學の一部門内に於ける專門的知識の交換すら、未だ合理化せられざるものなるを知るのである。

四

自然科學の方面に於ては、上述せる如き遺憾は夙に除かれて居つた。これ蓋し、自然科學的研究の結論は之を簡明に云ひ表はすの比較的容易なること、研究の數が割合に限られて居ること、又新しき發見及び理論に關して自己がその創始者なることを確認せしむるの必要が痛感せられたること等に基くかと思はれる。一方、社科科學方面にてその遲れたるは、矢張り遲れたるだけの相當の理由があつたに相違ない。

さり乍ら今や時勢は、社會科學の健全なる進步を阻害すべき如何なる障碍をも押し流さずしては已まざる時機に到達した。それは學究者の要求であると共に、社會全體の要求である。如何となれば社會科學的知識は、今や社會大衆の常識の一部、而も現代に於て最も切實に要求せられつゝある常識の一部となつたからである。機は正に熟した。何人か敢て此の時代的要求を具體化するものぞ。恰も好し、此の機運に乘じて社會科學研究に關する有力なる國際的協力機關が、昨春來、米國を本據として其の活動を開始したのである。何であるか。曰はく「社會科學抄錄」(Social Science Abstracts)の刊行、即ちこれである。これは全世界に於ける社會科學最近の研究を紹介するを目的とする月刊物であつて、各國多數學者の協力によつて生れ出たものである。その事務所はコラムビア大學内にあり、その編輯主任は一米國學者であり、その理事としては米國諸學會（米國地學協會、米國史學協會、米國政治學協會、米國統計學協會、米國社會學協會、米國經濟學協會、米國人類學協會）の代表者が名を列して居るが、編輯顧問としては各國の學者二十七名が參加して本事業の國際的性質を明かにして居る。

その目的とする所は、人文地理、文化人類學、史學、經濟學、統計學、政治學、社會學の各部門に亙り、全世界に於て發行せらるゝ數千の專門雜誌や定期刊行物中より重要なる最新研究を拔きて其の内容を極めて簡潔に指示せむとするにある。紹介せらるべき論文は、

（一）　新調査又は既存資料の比較研究に基くところの新知識の提供

(二) 既存資料の新解釋

(三) 新假說

(四) 新研究方法

(五) 調査方法又は其結果の新批判

(六) 假說の新批判

(七) 資料の新解釋法の新批判

の諸項中のいづれかを具へたるものなるを要し、單に教科書的に編述せるに過ぎざるものや、何等新しきものを加へざる批評や、又は假說としての體をなさゞる空想的理論等、凡て學界に新しき寄與をなさゞるものは、全部之を除外するのである。而して紹介は何等の批評をも加ふることなく、唯論文の内容を專門的研究者にも一般讀者にも解り易く且興味あるやうに、極めて簡明に敍述するを以て本旨とする。此等紹介は凡て適當に分類せられ、且つ將來の檢索に便なるやうに整理せられ索引づけられる。

五

此の「社會科學抄錄」の出現は、誠に社會科學の研究上に於ける一大事實と云はざるを得ない。專門的研究者も一般教養ある讀者も之によりて得るところ[illegible]。[illegible]れば目下の處、新刊書の內容紹介までには及んで居らぬが——將來此の方面にも仕事を擴張する企圖はあるやうである——新刊書は數に於て比較的限られて居るし、又內容紹介についても或程度までは其の途が開かれて居る。在來、最も缺けて居つたのは無數の雜誌に出づる重要新研究の紹介であり、而して最新研究は圖書の形態を取る前に、先づ雜誌上にて發表せらるゝが常なのである。又、此等研究中には永久に圖書の形を取らざるものも多々あるのである。此等を專述並びに一般讀者に見易き形態に整理して提供する刊行物の出現は、確かに劃時的事件と稱して差支ないのである。吾等は或る問題に關して參照すべき重要なる論文の所在を、[illegible]中の[illegible]を探るがごとく之れによりて探り得る。研究者に取りては、之れ[illegible]優れたる助手幾名又は以下名[illegible]座右に置くに匹敵する[illegible]。[illegible]れ社會科學刊行物の國際的意義を論ずるならば、[illegible]に國際聯盟が新渡戶前調事務總長の下に於てなせる知力的活動の國際的協力は、本事業によりて有力なる一具體的表現を得たりと云ふべきであらう。

本事業を創むるに當りて、其の委員[illegible]國際[illegible]協力協同委員會との間に交渉せられたこと、又、新渡戶博士の[illegible]

[illegible]國の[illegible]目下の[illegible]、其[illegible]

むに足らないのである。

本事業は其の愼重なる準備に數年間を費したる後、昨年いよ〳〵「社會科學抄錄」を發行するに至つたものであるが、抄錄者は世界の二十ヶ國に跨りて千四百名の多數に達し、二十四ヶ國語の定期刊行物約三千種が吟味せられる。第一卷初號乃至十二號に揭載せられたる抄錄數は一萬一千九十三個である。而も號を逐つて本誌の內容は充實しつゝあるが故に、第二卷所載の件數は遙かに第一卷を凌駕するであらう。洵に一大偉觀であつて、社會科學研究の便宜は斯くて自然科學研究のそれに劣らざるものとなりつゝあるのである。

六

我が日本も當初から本事業に參加を求められて居た。既述せるごとく新渡戸博士が之に參劃せられた外に、不肖筆者も亦編輯顧問として之に加へられた。然も日本として充分に之に參加し寄與する爲めには、固より學界各方面に於ける多數權威者の協力に之を俟たねばならぬ。茲に於てか同志協議の結果、新たに生れ出でたるものが日本に於ける社會科學委員會である。

我々は之をS・S・C（Social Science Committee の略稱）と假りに呼むで居る。此の委員會委員として參加を承諾せられたるは左の諸氏である。

人文地理	新渡戸稻造氏
文化人類學	松村　瞭氏
史　學	村川堅固氏
	黑板勝美氏
	池內　宏氏
法學及び政治學	美濃部達吉氏
	穗積重遠氏
	高柳賢三氏
	高木八尺氏
	蠟山政道氏
經濟學及び統計學	上田貞次郎氏
	小泉信三氏
	阿部賢一氏
	河合榮治郎氏
	矢內原忠雄氏
	那須　皓氏
社會學	戸田貞三氏

筆者は本委員會創設事務に參劃せる一人として斯くも多數

の碩學が、學問的國際協力の爲めに欣然、委員たるの面倒を快諾せられたることを深謝するの念に堪へない。本委員會の顔觸れは本邦社會科學の進步を廣く世界に紹介するに最も適したるものと信ずるのである。本委員會は最近に形成せられた許りであるが、今や既に其の活動を始めむとしつゝある。

本邦に於ける社會科學の進步は、新しき事實、新しき理論、新しき解釋、新しき批判として世界に紹介するに足るものを出だすこと漸く多からむとして居る。在來、言語の障壁に遮ぎられて本邦學徒の業績の廣く國外に傳へらるゝこと少なかりしは吾人の深く憾みとした所であつたが、此の遺憾は今や正に除かれむとして居る。「社會科學抄錄」は學問的新研究の登錄簿として、創始的事實又は理論の研究者の學問的名譽を確保する役目をも果たすであらう。知力的國際協力の效果は單に研究者の研究上の便益を増大するのみに止まらないのである。

七

翻つて想ふに、本邦に於ける社會科學關係の定期刊行物は優に數十或ひはそれ以上に達し、その悉くを通覽することは、往々にして專門家と雖も難しとする所である。況むや一般讀書階級に取りて、此等雜誌に每月掲載せらるゝ數百の研究中より最も重要にして價値あるものを選み出して之を讀むことは不可能事である。

國外に紹介する價値ある事實乃至理論は、國內に對しても、それ以上、之を紹介する必要ありと云はねばならぬ。之を怠る時は、社會科學委員會は其の當然なし得べき社會的一大寄與の機能を自ら放棄するものと云ふべきである。この點に氣付きたる我等は、茲に社會科學新研究の國內紹介につきて適當の組織を設けざる可らざるを感じた。然もかゝる紹介は、單に外國へ紹介すべき新研究のみに之を止むることなく、今少しく其の範圍を擴大して甚だ重要なる諸論策は必しも創始的ならざるものと雖も之を網羅することが妥當なりと考へられる。更に國外に於ける重要新研究を併せて紹介することは、最も必要である。換言せば「社會科學抄錄」が國際的に遂行しつゝある事業を、日本の爲めに日本の事情に卽して行ふことが必要と感ぜられるのである。

此の爲めには本邦に於ても獨立の定期刊行物を出版することが一策として考へられる。さり乍ら各種事情を愼重に考慮せる後、我等は先づ有力なる既存の一雜誌を斯かる紹介發表の機關として利用することが、差當りて最も賢明なる策なることに意見の一致を見た。斯くの如くにして選まれたるものが中央公論であり、同社長嶋中雄作氏は欣然として本事業の

爲めに其の紙面の相當部分を割き且つ必要なる經費を支辨せらるべきを快諾せられたのである。筆者は玆に島中氏が此の有意義なる事業に對してあらゆる利便を提供せられたることを謝して置きたい。

中央公論誌上に於ける我等の事業は、勿論、米國に於ける「社會科學抄錄」のごとく大規模なるを得ぬ。我等は海外に於ける諸研究中の最も重要なるものゝみを採錄し、比較的重要なるもの、幾多を割愛せざるを得ぬであらう。我等は謙遜なる態度を以て之を始める。我等に幾多の脫漏なきを期し得ぬ。然も我等の志す所は、學問的精進に對する利便の提供であり、同時にまた大衆教養の向上である。二十世紀文明に對する社會科學の寄與を最も健全、合理的、且つ效果的ならしむることに對し、我等の努力が此少なりとも貢獻するところあれば、我等の勞苦は以て報ひられたりとすべきであらう。

社會科學研究に於ける國際的協力は、本邦に於ける社會科學研究者の國內的協力を齎らした。筆者は之を玆に報道し得るを悅ぶと共に、此等國際的及び國內的協力が堅實なる發育を遂げて其の重大なる使命を果さむことを祈りつゝ擱筆するものである。

（附記、本稿は他の委員諸氏の校閱を受けて居らぬ。筆者個人の責任に於て之を認めたものである。昭和五年七月二日記）

チャップリン著
高瀬毅訳
僕の旅

チャアリイ來る！　と傳へらるゝや類書簇然たる中に獨り光つてゐるのは本書だ。何故かならばこれはジャーナリズムを離れてチャツプに對する純粹な愛からなされた完全な全譯だからだ。

『チャアリイよ、消えてなくなれ！』旅に出る時の彼の至願がこれだつた。彼は閑寂を欲した、靜穩に憧がれた休息を求めた、たゞひたすらに逃避したかつたのだ。……然しそのすべては容れられなかつた。此處に憂鬱な喜劇役者、人生受難者としての可哀想な彼の姿を見る。人間チャアリイ淋しい詩人チャツプリンを見てやつて貰ひたい。

四六判三〇〇頁
瀟洒フランス綴
珍貴寫眞數葉
定價八十錢
送料内地六錢

新版
大東京案内

本書は斷じて在來の案内記の類に非ず選ばれたる藝術家數氏を統整するに今和次郎氏の科學的頭腦を以てせる前人未踏の興味津々たる大東京の活現だ。特撮寫眞三百又一大都會藝術寫眞帖だ

【内容】
東京の顔
動く東京
七火盛り場
享樂の東京
カフェ料理店
ダンスホール
遊覧の東京
新名所
スピードの展観
味覺の東京
郊外生活展望
特殊街九題
花柳總覧
玉祝儀一覧表
私娼公娼六宿
旅館・ホテル
東京生活百態
新職業百態
マネキン波瀾記
細民の東京
復興の東京

東郷青兒氏裝幀
四六判四〇〇頁
特撮寫眞三百葉
石版刷地圖四枚
定價一圓八十錢
送料内地十二錢

東京驛前丸ビル五階　**中央公論社**　振替口座東京三四番



海賊

(南支那奇談)

村松梢風

前書き

海賊といふ言葉には、何んとなく中世紀的なロマンチックな響きがある。少なくとも餘り現實的な匂ひがしない。けれども、それは日本や歐米の文明國に住んでゐる人間の感覺であつて、現代の、今日でも海賊はある。考へ樣では、陸地にさへ窃盜や強盜があるのだから、法律や警察力の稀薄な海の中に海賊の現はれるのは當然である。さういふ日本だつて瀬戸内海にはいまでも小海賊がゐるさうだ。先年東京灣へ海賊船が現はれたことがあつた。かう云つて來ると、海賊といふ言葉も幾らか現實味を帶びて來る。海賊だつて何時までも毛剃九右衛門式であるわけはない。

、しかし、何んと云つても日本や其の他の國々では海賊は珍らしいものになつてしまつた。なる程海賊は海で働く[illegible]だが、掠奪した品物は矢張り陸地へ持つて來て處分しなければならない。それともう一つは、生命の[illegible]出來ない。たつた一人でピストル一挺持つて勝手口のガラス窓を切り破つて入るといふ[illegible]仕事でないから、[illegible]

達してゐる文明國ではやりにくい稼業である。

私の話は支那の事である。支那では現今でも大概の不埒な事がやれる。陸上で強盜を働くにしても、馬賊とか土匪とか云へば、少きも五六十人、多きになれば數百人數千人の大部隊で活躍する。海賊も矢張り其の通り、時によると出來心でやる小さいのもあるが、五百石積の戎克船(ジャンクせん)に大砲を据へ付けて數十名の海賊が乘り組んで海上を横行するのもあり、更にもう一ぱい大きなのになると人煙遠き港灣の奥深き處に五百人千人を容れる山寨を構へて爰を根據地とし、上海香港はじめ各地と聯絡をとつて大々的手段を揮つて大仕事をする組もある。

南支那海は海賊の晴れの舞臺である。同じ支那でも北方は比較的海賊の難が少ない。北方の海は港灣が乏しく住民の間にも古來航海業が發達してゐないので自然海賊の發生することも少ないのである。然るに南支那の沿岸地方、即ち福建廣東二省の住民には遠い昔から海上生活を營んでゐる者が非常に多い。海岸は港灣に富み、無數の島嶼がある。漁民、貿易業者、移民等も大部分此の二省から出てゐる。さういふ風で水の上の生活に慣れてゐる此の地方の住民の中には自然海賊も澤山出來る道理である。然し、海賊にもいろ／＼種類があり、必ずしも海賊を常習にしてゐる者ばかりとは限らない。平常は眞面目な漁夫であつたり、運漕業者であつたりするのが、時あつて豹變して海賊となるのや、貿易を本業にして海賊を副業とする者なぞが澤山ある。

陸上の土匪が其の通りで、うまい仕事の無い時は苦力(クーリー)を働いたり、鋤鍬を手にして神妙に土をほじつたりしてゐる連中が、何時でも土匪に早變りするのである。だから、土匪だ海賊だといつて別に惡人がなると極つたわけではない。

或る私の知人が、臺灣で新聞記者をしてゐる時、新聞社の命令と總督府の保護の下に福建省へ海賊調査に出掛けた。其の時總督府では最も信用のある戎克船の船長を頼んで其の船へ某君を乘せてやつた。處が、船が福建省の片田舍の港へ入つて船長の郷里へ行つて見ると、何ぞ知らん此の船長こそ界隈切つての海賊の大親分だつたといふ珍談がある。

此の春私は廣西省へ旅行したが、廣西の子弟に對つて理想を尋ねると「軍人か、土匪か、教師」と答へるといふ話を聞いた。しかし是は敢て廣西人のみの理想ではない。支那には或る意味で惡といふことが無くなつた。同樣に善といふこともなくなつた。善惡といふことは餘り強い意味をもたず、只、災難といふことだけがある。道徳といふものがあるとすれば、それは消極的に自己を衞るといふことだけである。軍人も土匪も海賊も致

師も僧侶も商人も道徳的に同じレベルに置かれてゐる。

汕頭の公設市場はなか〳〵盛大であるが、魚類は川魚ばかりで海魚は殆んど見られない。此の邊の人は海魚は好まぬのかと云つて聞いて見ると、さういふわけではないが、海へ出て漁をしても折角の獲物を必ず海賊に掠奪されるので近來は海へ出て漁をする者が無いのだと云つた。是れなぞは最も貧弱な海賊である。

廣東（クワントン）の市街を七分三分に貫通して流れてゐる珠江といふ川がある。其の川の上には無慮三十萬と稱する水上生活者の群がゐる。これを蛋民（タンミン）と云つてゐる。彼等は一隻の小艇をもつて其の家庭とし、城廓とし、財産としてゐる。生れるのも此の艇の中なれば死ぬるのも此の艇の中である。冠婚葬祭すべて此の小艇の中で行つて、水に浮び波を伴侶として其の生涯を送るのだ。蛋民は一種の賤民階級を以て目せられてゐて、普通陸上の人民は彼等と交通しない。革命以來人類平等の大義に基いて彼等を虐遇することは禁じたけれども、其の思想はまだよく徹底せず、彼等自身も自覺しないので、依然として差別待遇の風は改まらない。

蛋民の歴史は茫乎として窺ふことが出來ないが、通常周の時代に越族が朝命に服さず追はれて南方に走つて水上に遁居したのが蛋民族の始めだと云はれてゐる。後世戰亂が屢〻起つて、其の敗北者が蛋民族中に投じてこれに同化したものも少なくない。彼等は一種の自由民である。

蛋民の職業は主に渡船廻漕等の船頭や、漁業などであるが、彼等の中には勿論海賊も居る。明の中葉に台一本といふ大海賊が出現して一時天下を震撼させたが、彼は蛋民であつた。

水の面積よりも船の面積の方が多いかと思ふ位の珠江の、市街に接近した川の上に、時々漂賊が出沒する。甚だしい例は、僅々三四丁の珠江を横斷する渡しの小蒸汽船が川の中幅で海賊に襲はれて、掠奪人質と勝手に荒されたことさへある。

香港から廣東へ通ふ汽船が時々海賊に襲はれた。此の地方は所謂西江デルタと云ひ、數十哩に亘つた三角洲は網の目のやうに水路が附いてゐる。此の地方の住民は平素は漁業に從事してゐるが、其處を通過する船が一朝機關に故障でも生じて進行を停めやうものなら、何處からともなく蟻が穴から這ひ出すやうに小艇に乘つて集つて來て、船の中の物は一物も殘さず釘まで拔いて持つてつてしまふのが例になつてゐる。

廣東省の最南端なる雷州半島といふ處は女海賊で有名になつてゐる。此の女海賊は男を捕虜にしても直ぐには殺さず根據地へ伴れ歸つてめい〳〵の共有物にして養つて置き、役に立たな

くなると殺してしまふのだといふ。

海賊の手段方法も時代と共に變化し、進歩して、近年は餘程組織的になつて來た。何故かといふと、古來あり來りの舊式な戰法では、戎克船や發動機船位のものなら襲へるが、航海中の大汽船を襲撃して是れを占領するといふことは不可能だ。それでは大きな仕事にならない。そこで活動の方法をもつて合理化し、能率的にすることを考へて來た。それはどうするのかといふと、海賊が少くも二三十人ほど旅客に化けて目ざす汽船へ乘り込んでしまふ。一等二等三等と各等へ別れて乘る。そこで、程よい時分を窺ひ、十分な機會を捉へて、頭目が命令一下するが否や一度に蜂起して各々隱し持つたるピストルを放つて、船内の有ゆる機關を占領し、船長以下の重なる船員を檻禁するか殺してしまふ。其の上で運轉士を脅迫して、船を彼等の思ふ方向へ進行させる。さうして彼等の根據地まで運ばせた上で、乘客の所持金は勿論、貨物でも手荷物でも船内の有ゆる器具でも、一切の物を掠奪して小舟で陸地へ運び上げてしまふ。猶其の外に女でも男でも乘客の中で目ぼしい者は人質に伴れて行かれる。女は賣れば直ぐに金になるが、金のありさうな男だと人質に取つて置いて、其の家族に對して身代金何萬圓寄越せば返して遣るといふ交渉をするのである。

此の方法でやられた商船が今までにどれだけあるか分らない。支那の汽船ばかりでなく、英國や佛蘭西の商船でもしばしばやられた。勿論商船の方でも十分警戒はしてゐる。支那の沿岸航路の汽船は、一等二等三等各等の境界に嚴丈な鐵の柵を造つてあつて航行中は通行の出來ないやうにしてある。これは各等へ乘り込んでゐる海賊の聯絡を斷つためだ。中には船の側面まで金網を張つて、船全體を巨きな鳥籠のやうにしてある汽船もある。私が乘つた香港と廣西省の梧州間の西江を上下する英國汽船などは其の鳥籠式だつた。それから運轉室だけは別に鐵柵で閑つてしまつてこれは丁度ライオンの檻のやうにしてある。其の上に船内の要所々々に印度人の巡査が鐵砲かピストルを持つて立つてゐて夜通し見張り番をしてゐる。船長以下の船員もイザと云へば直ぐ様武裝の出來るだけの用意はしてある。

かういふ風に、一見不愉快を感じる程嚴重に警戒してゐるにも係はらず、矢張り海賊の被害は絶えない。それも小汽船ならまだしもだが、相當の大汽船が屢々やられるといふ有樣である。しかし是は聞いて見れば無理もない話ではある。商船の乘組員は航海が本職であり重大責任であるから四六時中海賊の心配だけしてゐればいゝといふものではない。又、軍人と違つて戰爭をすることは得意でない。然るに一方海賊共の方は、高い船賃

を掠つて大勢乘り込んでゐるのだから必ず仕事をしようと思つて隙を狙つてゐる。而も命知らずの人間ばかり揃つてゐる。船の方に一寸した油斷があれば忽ち其の機會に乘じて事を擧げる。鐵柵位のものは爆裂彈で破壞することも出來るし、そんなことをしなくても、鍵を預かつてゐる者から鍵を奪つてしまへば自由に開かれる。印度人の見張人(ウオツチマン)なんかは廿五弗か卅弗の月給を貰つて申譯けに乘つてゐる人間だから、かういふ時は何の役にも立たず眞先きに鐵砲を抛り出して、船底の穴倉へでも遁げ込んでしまふ。かうして船全體がやす〳〵と海賊の手に占領されてしまふのである。勿論實際は海賊とてもかう口で云ふ程手易く仕事は出來ないから、到底手出しが出來ずに船賃だけ奉納してしまふことが隨分多いといふことだ。何しろ何千噸といふ汽船を船ぐるみ人間ぐるみ掠奪しやうといふのだから船賃位は問題ぢやない。

廣東省の沿岸で、汕頭(スハタウ)と香港との中間よりも少し香港寄りの處にバイアスベー灣といふ非常に奥深い灣がある。此處に巢窟を構へてゐる大きな海賊の一團がある。彼等の魔手は南支那全體に擴がつてゐて途方もない大きな仕事をする。今までにバイアスベーの海賊に占領された汽船や帆船は數限りなくある。英國では香港から軍艦を派遣して常に此の邊の海上を警戒してゐるけれ共、廣い海上を一隻や二隻の軍艦で警戒しても無效である。殊に海賊の方も注意深くてかういふ仕事は夜に限り、占領した汽船は燈火を消して、灣の入口にあるチイランポイントの燈臺の火を目あてに暗い海の上を曳きずり込んでしまふので一度も目付かるやうなヘマなことはない。

支那の汽船は勿論、イギリスやフランスの商船も頻繁にやられたが、どういふものだか日本の商船だけはこれまで襲はれたことがなかつた。それについて、或る海賊の云つたことは、臺灣近海などで海賊がたま〳〵仕事をすると、日本の驅逐艦が實にしつこく追窮する、船が陸(おか)へ乘り上げてしまふまで追ひ廻すのであるからどうもあれは苦手だ、そこへいくと流石英佛などは大國だけにノンビリした處があつて自國の商船がやられても好い加減な處で止めてしまふ、と、英國や佛蘭西を貶めたさうである。日本の商船が海賊の難を蒙らずに來たのは、勇敢な南支那の海賊の頭腦にも何んとなく日本海軍の威力がしみ込んでゐるのだと、これまでは自惚れてゐることが出來た。

處が、其の夢は破られた。到頭日本の商船にも恐ろしい魔の手が伸びて來た。

デリー丸事件

昭和四年九月廿一日。

其の朝、香港は霧に包まれてゐた。大阪商船會社の、臺灣の高雄と香港間の定期汽船デリー丸は、普通だと六時に入港する豫定なので、會社の棧橋には其の時刻になると出迎人や、ホテルの客引や、手荷物運びの苦力などが澤山群がつてゐた。處が、デリー丸は時間が過ぎても一向姿を見せないのである。やがて七時を過ぎ、八時を過ぎ、霧が晴れて、ピークの山は眼醒めたやうな鮮やかな容姿を現はしたが、依然としてデリー丸は入つて來ない。出迎人は甚だしく倦怠を感じてガヤ〳〵騷いでゐた。すると、八時過ぎに、O・S・K支店へ無線電信で駭く可き報告が入つた。それはデリー丸の無電ではなく、外國船から大阪商船香港支店へあて、打つた無電だつた。

最初の報告は

デリー丸ガ昨夜海賊ニ襲ハレタ、被害甚大ナレドモ、船體異常ナク、香港ニ向ツテ航行中

といふだけであつたが、後から續々と詳報が入つた。其の電信を綜合すると、昨日の午後四時汕頭を出帆したデリー丸は、航海中夜の十一時頃、乘客の中に交つてゐた海賊の襲撃を受けた。海賊は印度人の見張巡査(ウオツチマン)二名をピストルで射殺したる後、非常に敏捷なる行動を以て突嗟の間に無線電信室及び運轉士室を占領し、船員全部を監禁し、乘客を脅迫して船内を掠奪した。而して二名の海賊に左右からピストルを差し向けられてゐる運轉士は、彼等が命ずるがまゝの進路へ船を向けなければならなかつた。船はバイアスベー灣に引き入れられた。爰には數百名の海賊が舢舨を浮べてゐて、掠奪品を全部持ち去つた。猶、海賊は引上げに際して四人の乘客を拉し去つた。四人の内三名は中國人であり、一名は臺灣人である。

乘り込んでゐた海賊の人數は、いまのところ正確には判然しないが、略二十名位と推定される。其の中に、頭目と思しき妙齡の婦人がゐた。

デリー丸の無線電信機は完全に破壞されてゐる。

O・S・K支店は色を失つた。

此の報告は香港政廳へも入つた。さうして忽ち全市を震撼させた。世界各國の新聞通信員は電報局へ殺到した。

デリー丸は二一六〇噸の汽船である。

O・S・Kの棧橋は物々しく武裝した警察隊で戒嚴され一般の出迎人は當局の臨檢の濟むまで立ち入ることを禁じられた。其處には支店長以下の社員と、日本の領事や領事館警察吏、香港政廳の警察官、新聞記者等が極度に緊張して待ち受けてゐる。

棧橋附近の海岸通はたゞさへ繁華な場所であるが、デリー丸が

どんな姿で入つて來るかを見やうとする弥次馬で通行止になるばかりだつた。

　正午近くなつてデリー丸は漸く入港した。船體の外觀は別に異常はないが、氣のせいかションボリとして入つて來て棧橋へ横着けになつた。

　竹内支店長は眞先きに船へ飛び移つた。其處のデッキには船長も事務長も機關長もゐたが、支店長は其處で簡單に事件の經過を聽取した。海賊は全部汕頭から乘り込んだ者で、一、二、三各等のほかデッキパッセンジャーの中にも數名交つてゐて、合計廿人位の人數であつた。海賊は第一番に上甲板にゐた二名のウォッチマンを射殺した。それから各等間の境界柵を開放して手に手にピストルを振りかざして客室やオフィサーの室を襲撃した。勿論船の方にも相當武器の用意はあつたが、機先を制されたゝめにどうすることも出來ず、只オメ／＼と彼等の爲すが儘に委せてゐるより外はなかつた。

　齡頃二十二三の、妖艶な美人が一等に乘つてゐた。これが海賊の大將であつた。ウォッチマンが殺されたのは此の女が側へ近付いて撃つたものらしく想像される。それから此の女は、一等から二等へ降りる口の階段の中央へ腰を掛けたまゝ、左右の手にピストルを持つて、絶えず部下を指揮してゐた。其の豪膽と沈着なことは驚くの外なかつた。

　海賊に伴れて行かれたのは全部で四人だが、一等船客は一人で、それは朱澤氏といふ人で、厦門から乘船した。年齡は卅五と記してゐる。上海にある英人經營の鐵工場の技師で住所は上海法界愛多亞路吉益里八號となつてゐる。

　一人は陳嘉光といふ臺灣人でこれは三等船客だつたが、此の人は臺南の商人で、香港へ仕入れに行く途中で千六百圓程の現金と手形を持つてゐたゝめ海賊から案外の金持と見込まれたらしい。

　一般乘客の被害は入港の上警察と立會ひで調べて貰ふつもりで、船内では調べを行はずに來た。

　殺された印度人巡査の二個の死體も上甲板へ其の儘横たへてあつた。食堂の中は野原のやうに荒され、踏み付けられてあつた。階段を降りて一等船室の方へ行くと、其の邊も戰場の跡のやうな慘憺たる光景を呈してゐた。

　支店長は、後から附いて來た事務長を振り返つて云つた。

「君、其の誘拐された支那人の技師の部屋は何番だね」

「五番の部屋です」

　支店長は直ぐに其の船室へ行つて見た。其の時は其處へはまだ警察官も來てゐなかつた。部屋の中は、毛布が踏み付けられ

てゐたり、新聞紙が散亂してゐたり、何やら入つた籠が轉がり出てゐたりして此の部屋の主人公の不幸な運命を物語つてゐた。支店長は此の未知のエンジニヤに對して云ひやうのない同情の念に驅られた。それから其の部屋を出て廊下を向うへ行きかけた時、フト眼に入つたものがあつた。それは其の竝びの第四號船室の扉が開け放されてゐて、其處に一組の夫婦者がゐるのが見えた。男は三十歳位、女は廿二三で、男はハイカラな背廣を着て、女は支那服であるが、いづれにしても相當な階級の生活をしてゐる夫婦であることが一と目で分つた。これを目撃した刹那に、支店長はある疑惑を感じた。それは、隣室のエンジニヤが誘拐されて行つたのに、寧ろそれよりも海賊の眼に付きさうな此の夫婦者が揃つて無事でゐるとは不思議ではないか……と考へたのである。

　そこで支店長は一寸立ち留つて、部屋の中の男に向つて英語で話し掛けて見ると、相手は見掛けのハイカラにも似ず英語は話せなかつた。支店長は支那語が話せないのでどうすることも出來なかつた。

　見ると、トランクや、風呂敷包みや、何もかもチヤンとしてゐる。

「此の人達は幸福でしたよ、金も奪られずに濟んださうですからね」

　事務長が後ろからさういつた。支店長は益々怪奇を感じた。さういつて見れば此の夫婦者は何んといふ落ちつき方だ。殊に女の方は昨夜の戰慄すべき事件もまるで知らずに過ごしたかのやうな、無關心な、晴れ〴〵した顏をしてゐる。支店長の頭の中には、ある確定的な想像が生れた。彼は其の時心理的には、明敏な頭腦をもつた探偵家であつた。

「君、實に怪しいぢやないか」

　支店長は其の部屋を出ると事務長を顧みて云つた。

「何がです」

「何がつて今の夫婦者がさ。あれはことに依ると海賊の一味だぜ」

「どうしてゞすか」

　支店長は、日ごろ頭のいゝ此の事務長の頭を、今日ばかりは疑はずにゐられなかつた。

「考へて見たまへ、隣室のエンジニヤが海賊に連れて行かれてゐるのに、あの男も女も連れて行かれないわけはないだらう。おまけにあの夫婦に限つて金も品物も取られてゐないなんて、有り得べき事でない。假りに海賊の一味でないとしても、何か其處に曰はくがあると僕は睨んでゐるのだ」

「竹内さん、あなたがさう疑問を抱かれるのは御尤ですが、しかしあの夫婦は海賊とは關係ありません。あの細君はエラ物ですよ、女つてものはあゝいふのですかね、實はわれ〳〵も舌を卷いてゐるわけなんです」

事務長は先づかう夫婦を辯護して、それから徐ろに話し出した。

「私達も最初不思議に思つたが、事情を聞いて見るとかうなんです。あの夫婦の部屋も勿論襲はれたのです。第一にあの部屋へ行つたらしく、海賊は先づあの亭主のはふを取つつかまへて上のデッキへ連れてつたさうです、勿論人質にするつもりです、あゝいふ場合に必ず男を捉へて行くものださうです、つまり男のはふが人質としての價値が多いからです。それであの細君一人キャビンに取り殘されてゐると、一旦デッキへ連れて行かれた亭主が、どういふ隙を見出したものか、逃げ出して自分の部屋へ戻つて來た。亭主とすれば女房のことが心配だつたのです。しかしグズ〳〵してゐれば又捕まつてしまふばかりです。すると其の時女が、部屋のあのソファーですね、あの下へ亭主を這ひ込まして隱してしまつた。あれでなか〳〵奥深くて人間一人位樂に隱れることが出來ますよ。それだけなら誰でもやれる事ですが、それからあの女がですね、ソファーの上に倒れて泣いてゐると果して海賊が男を探しにやつて來て、貴樣の亭主を何處にやつたと云ふと、女が大聲を舉げて泣きながら、夫はさつき何處かへ連れて行かれてしまつた、わたしはあの夫を失つては生きてゐることが出來ない、どうか夫を返して下さいと云つて、益々聲を高くして哀號したさうです、其の有樣が眞に迫つてゐたので流石の海賊も一杯食つて、さては男は此處へは來てゐないと見たのでせう。それから他を探したでせうが、しかし海賊もあゝいふ際で仕事が多いからさう一つ事にばかり掛つては居られないので、到頭取り紛れてあの男は助かつてしまつたのです、おまけに金は全部男が持つてゐたし、荷物もあれで多少は奪られたさうですが、何しろ細君が無闇に哀號するので海賊も少し閉口したと見えて、割りに被害が少なかつたのです。それに支店長、あの人達は香港の人間で身許がチャンと判つてゐるから大丈夫です」

支店長は「フーム」と唸つたきり沈默してしまつた。支店長は自己の探偵眼と明敏な頭腦とに對する自信を失つたが、同時に、女といふ奴はエライものだ、さういふ陳腐で而も新しい觀念を獲得した。

デリー丸遭難事件は可成り大きなセンセーションを起したが他人の災難に對しては社會は比較的寛大である。誘拐されて行

つた人達に對しては勿論同情が集つたが、しかしそれよりも更に、海賊の頭目が水の垂れるやうな妖艶の美人であるといふことのはふが、遙かに強く世間の興味に訴へた。香港政廳の警察は入念に此の事件を調査した。それから日本の外務省は、事件が廣東省内で起つたことであるゆへ、廣東駐在の總領事をして廣東省政府に向つて嚴重な抗議を提出せしめた。しかしそれは單に、調査し、提出したに止まつてゐた。何等それ以上に發展したわけではない。若し廣東省政府や其の軍隊の力を以てバイアスベー灣の海賊を逮捕し、殲滅することが出來るくらいなら、蔣介石氏の武力統一はたうの昔完全に行はれてゐなければならないのである。

前にも云つたやうに、支那といふ國で可能なことは自分の力で自分を守ることである。日本の汽船までやられたといふことが一つの刺戟になつて、各國各會社の南支那沿岸航路の汽船は俄かに警戒を嚴重にした。よくしたものでさうなると海賊の方でも手を出さない。彼等は多年の經驗でよく知つてゐる。警戒といふことはさう永く續くものでないといふことを。

上海フランス租界愛多亞路吉益里に住んでゐる朱澤民氏の留守宅へ、或日一通の手紙が届いた。事件があつてから三週間位經過してゐた。

朱氏の夫人が開封して讀むと、

朱澤民氏の身柄はわれ／＼の手で完全に保護を加へてゐる。われ／＼は朱氏に對して從前通りの自由と幸福を與へてやり度いと思ふ。其の件に就いて爰に誠意ある交渉を開始するものである。われ／＼の希望を卒直に云へば、朱氏を釋放する交換條件として貴方は五萬元をわれ／＼に提供することは當然の義務であつて、而も輕い負擔であると信ずる。是の回答は二週間以内に香港郵政局私書函××××號宛にて發せられたい。猶、勿論御承知の事と思ふが、該交渉中は絕對秘密を嚴守する事。萬一此の事を漏洩せしむる場合は、貴家は更に現在の不幸を百倍にして負擔すべき覺悟を要するものである。くれ／＼も誠意のある回答を期待する。

夫人は、八つの男の子と、五つの女の子と二人の母親だが、齡はまだ廿八九であつた。夫の朱澤民氏は浙江省杭州の人で、英國へ留學して機械科學を修めて來たが、元來末弟であつたから其の家庭は細君と二人きりであつた。

夫人は早速夫の從兄弟で矢張り上海へ來て暮してゐる朱毛成といふ人の處へ電話を掛けると、直ぐやつて來た。朱毛成氏は

海賊から來た手紙を讀んで考へてゐたが、
「どにかく返事を出さずばなるまい、錦煌さん（夫人の名）幾らに値切つてやつたものかな」
「さあ、妾には分らないんですが」
「一萬圓か、それとも五千圓か、いや、三千圓位から切り出すかな」
朱澤民氏の財産は洗ひざらひすれば五萬元位は纏るのであつた。賊の方ではよく其の邊も調査をしてゐるものと思はれた。然し朱家とすれば全財産を抛り出してしまつては後が困るのである。さうかと云つて餘り馬鹿にしたやうな値切り方をして海賊共を怒らせてしまつたら一大事であるから、此の邊の掛合ひは六ヶ敷いところである。

夫人と朱氏とは額を寄せて協議した結果、最初は先づ金額を示さず、只五萬元といふ莫大の負擔は到底果す力が無い、遙かに金額を低下して貰はなければ悲しいかな交渉に應じ難い、何分の御同情を願ひ度いといふ意味の返事を指定通りにして出すと、日を越えて又賊から書信が來た。今度は賊の手紙にも金額は云つてない、一體幾許までの身代金を提供し得るか、決定的の回答をせよとしてあつた。そこで、五千元ならば此際工面して提供しようと云つて遣ると、折り返して、五千元ばかりではとても釋放することは出來ない、朱澤民氏の財產狀態は當方でよく調査してある、然し特別を以て三萬元までは減じて遣るゆへ、此の上は一文も負けることは出來ぬと云つてよこした。これが皮切りで其の後双方十回宛も書面の往復をして談判を繼續した結果、一萬一千六百元といふ處で折合ひがついた。一萬一千六百元とは莫迦に刻んだものだが、これは朱家の方で最後まで一萬元を固守したので到頭海賊の方でも折れて來て、それでは一萬元で承知するが、香港へ出張したり、當人を送還したり、其の他各種の雜費として一千六百元を要するゆへそれを附加せよといふ條件を出して、其處で手を打つことになつたのだつた。

此の協定が成立したのは、民國十八年も押し詰つた十二月の初め頃だつた。海賊の方から、朱家の代表者に現金を持參して香港へ出張せよ、香港到着の上は直ぐさま例の宛所にて知らせよと云つてよこしたので、從兄弟の朱毛成氏は現金を香港上海銀行へ託送して自分も香港へ出發し、同地の皇后酒店（クイーンスホテル）に宿所をきめ、銀行から現金を受け取つて來た上で、到着の通知を例の私書函宛で出した。

それから朱毛成氏は、海賊のやつて來るのを首を長くして待ち受けてゐると、どうしたものだか海賊はさつぱりやつて來ない。クインスホテルは香港一流の旅館であり、自分の姓名も部

屋の番號もチャンと通知してあるのだから間違ふ道理はない。が、二日經つても三日經つても五日經つても誰一人彼を訪問して來る者はなかつた。朱毛成氏は退屈で弱つた。と云つて何時海賊の代表がやつて來るかも分らないから一歩も外出することは出來ない。

是れは海賊の手段である。なぜかと云へば、かういふ場合にウカ／＼やつて來て、萬一相手が警察とグルになつてゐやうものなら、直ぐ樣縛られて今度は反對に自分達の方が人質にとられるやうな馬鹿な目に會ふことがある。だから訪問する前にあらゆる方面から危險の有無を確かめて見る、例へば仲間の一人が普通の客に化けて同じ旅館へ泊り込んでゐるといふやうなこともある。さうして相手の誠意を見屆け、絕對安全といふ時までは決して近付かないのだ。

六日經ち七日經ち八日經つた。朱毛成氏の退屈は極度に達した。彼は金持らしくよく肥滿した體と溫厚な風采を具へた立派な紳士だが、因果なことに性來讀書嫌ひで、書物は一頁も讀まぬうちに睡たくなるはふで、おまけに煙草も酒も嫌ひと來てゐるから、全く無聊を慰する何ものもなかつた。彼は骨も筋肉も溶けてしまふほど退屈した。三度の食事以外の時間をどうして過ごしたらいゝか途方に暮れた。彼は一時間に百以上もあくびを連發した。さうして、運動不足ですつかりうんでだれてしまつた體を持てあつかつて、時たまサロンへ出て來てソファーに身を持たせ掛けたと思ふと、其處でもまた續け樣にあくびをして、人の好い悲しさうな眼付きをした。

ホテルの支配人は、朱毛成氏に對して注意深い眼を向け始めた。投宿して以來只の一回も外出せず、それかといつて一人の訪問者もないのに、毎日閉ぢこもつてあくびばかりしてゐる此の不思議なお客に對して支配人は多大の疑惑を抱いた。さりとて一見して此の善良な紳士が何物の祕密も持つてゐさうには思はれなかつた。

「變なお客があるものだ……」

或日も朱毛成氏がサロンへ出ておくび製造をやつてゐると、先刻から彼の側のソファーで新聞を讀んでゐた英國人の紳士が突然流暢な廣東語で話し掛けた。

「貴下はもう永く御滯在ですか」

朱毛成氏は吃驚して答へた。

「ハイ、もう今日で八日になります」

「御商用ですかそれとも御見物ですか、お言葉の樣子ではあなたは上海の方らしいですね」

「ハイ上海から參りました、いや別に商用といふ程の事でもあ

りません、一寸した用事が御座いますので」

「さうですか、いや失禮しました」

紳士は灰落しの上のシガーを取つて啣へながら向うへ行つてしまつた。朱毛成氏は其の後を眺めながら、外國人にしてはよく廣東語を話すものだと感心してゐた。それから卅分ばかり其處にゐて、自分の部屋へ戻つてボンヤリしてゐると、部屋のドアをノックする者があつた。多分ボーイだらうと思つて「おはいり」と云ふと、意外にも先刻サロンで見た英國人が入つて來た。

「どうか其の儘」

英國人の紳士は砕けた態度で人懐つこい笑を浮かべながら兩手で押へるやうな恰好をして、自分も朱氏と向き合つた椅子へ腰を掛けた。

「私は香港警察の者です、突然失禮致します」

さういつてテーブルの上へ名刺を置いた。

「私の事は此處の支配人がよく知つてゐますから後でお聞き下さい、少しあなたにお尋ね致したい事があるのです」

「はあ……」

「甚だ立ち入つたことを伺ふやうですが、あなたは誰か人と約束をなすつて、其の人をお待ちになつてゐるのでせうな」

「はあ、實は少々……」

「誰をお待ちになつてゐるのだかそれをお話し願へませんか」

「それは少し……」

「あなたは、朱澤民氏の御親類の方ではないのですか」

朱氏はドギマギした。

「どうして其の事を御存じです」

「いや、私の想像が的中したまでゞす。支配人の部屋であなたの名刺を拝見すると、あなたの郷里が浙江杭州と入つてゐます。朱澤民氏も矢張り杭州の人で、而も同姓であるから、多分御親類かと想像したのです」

朱氏は探偵の烱眼に驚いてしまつた。

「いかにも彼は私の從兄弟です」

「それで私の疑問も氷解しました。處で、あなたが香港へおいでになつた用件の内容を私にだけ秘密でお洩し願へないでせうか」

「それは困ります、それだけは何んと仰言しやつても申し上げられません」

「いや宜しいです、それでは無理に伺はふとは云ひません。それから、今日私にお會ひになつた事は少しの御心配もいりません、私の事は念頭に置かずに、あなたはあなたの御用をお果し

になるが宜しいです」

「有難う御座います、さういふことに致します」

「失禮しました」

探偵は愛想よく握手をして出て行つた。

朱毛成氏が滯在中に起つた事は只是れだけのことだつた。探偵はそれきり彼の視界へ顔を見せたこともなかつた。朱氏は最初は何んとなく不安を感じたが、二日三日經つと、いつかそんな不安も消えて又以前の退屈ばかりが殘つてしまつた。

朱毛成氏がクインスホテルへ投宿してから十三日目であつた。クリスマスが眼の前に迫つて、香港は華やかな年末氣分に包まれてゐた。

朱毛成氏は突然二名の訪問客を受けた。それこそ朱氏が待ちくたびれてゐた客であつた。一人は廿二三の若者で、もう一人のはふもせい〳〵三十位にしか見えなかつた。二人とも洋服を着てゐた。三人は無言のうちに或る諒解を感じてゐるやうにテーブルを中にして三方から腰を掛けた。知らぬ人が見れば非常に親しい友人同志が何か話し合つてゐるとしか見られない空氣である。

「大變永く待たせてお氣の毒でした」若い方の男が先に云つた。

「いや、然し大分退屈しました」

「お約束の金は爰に持つて來て居られるでせうな」

「勿論です」

「では、受け取りませうか」

「金は約束だからお渡しするが、朱澤氏の身柄は何處で渡して下さるか」

「三日以内に、九龍（カオロン）の某所でお渡しすることになつてゐる、間違ひなく實行します」

「それは困る、身柄と現金と引き換へにして貰ひ度い」

「いや、われ〳〵の方にはさういふ規約はない、金を受け取つた上で身柄を引き渡す例になつてゐる」

「さうかも知れんが、私の立場になつて貰ひ度い、本人を見ずに金だけ交付するといふことは困る」

其の時始めて年上の男が云つた。

「あなたは、われ〳〵を信用しないのですか」

「信用せぬといふわけではないが、しかし」

「信用したら、それでいゝでせう。われ〳〵は絶對に信義を重んずる人間です、約束した事に決して間違ひは無いです」

朱氏は弱つた。彼等を信用していゝやうな氣もするけれども、幾分か不安もある。

「それでは、彼は現在餘程遠方に居るのですか」

「そんなことはお答へ出來ない」

「それではせめてかうして貰ひ度い、澤民と電話で話しの出來る程度迄伴れて來て、一度彼の言葉を聞かして呉れたら早速金を渡さう」

「駄目です、われ〳〵はそんな手數の掛ることは欲しない、貴下の方で約束を履行すれば、われ〳〵も義務を完全に果すばかりです」

其の言葉には少しの淀みもなかつた。朱氏は彼等を信用する心持になつた。

「宜しい、では金を渡さう」

朱氏は鞄の側へ行つて、腰に附けてゐた鍵を取つて鞄を開き、一萬一千六百元の香港紙幣を取出してテーブルの上に置いた。

「さあ、改めて受け取つて下さい」

二人の男は、百圓札と五十圓札のまじつた其の紙幣を手速く數へてから、若い方の男はそれを幾つものポケットへ別けて仕舞ひ込んだ。

「確かに受け取りました、では遲くも明後日一杯迄にあなたに電話を掛けるから、私達の指定する場所へ來て下さい」

二人は普通の訪問客と少しも變らぬ平靜な態度で出て行つた事件は圓滿に解決に向つて近付きつゝあつたのである。是れに對して邪魔を入れる第三者が現はれない限り、朱澤民氏は必ず三日以內に自由を取り戾すことが出來たのである。支那では此の種類の信用取引きは無數に行はれてゐる。殊に、バイアスベーの海賊が信義を重んずる點に於て他の大商人に劣つてゐるやうな心配は絕對にないのである。處が、好事魔多しで、折角三月も掛つて交渉した結果漸う纏つた此の解決が、最後のドタン場に於て意外な邪魔者が出現したおかげに一遍に崩されてしまつたといふのは、人質になつてゐる朱澤民氏にとつても彼の家族や親族の人達にとつても實に氣の毒といふよりほかはなかつた。

香港警察では、クインスホテルに泊つてゐる朱毛成氏の身邊に巧妙な網を張つてゐた。それを看破し得なかつたのは海賊の方も手拔かりであつた。朱氏から現金を受け取つてホテルを出た海賊の一味は忽ち御用風をくらつた。けれども流石に海賊も油斷はないから其の場で刑事を突き飛ばして逃走した。折から日の暮れ方ではあつたし、あの雜沓を極めてゐるクインスロードに於ける出來事であつたから、刑事達が騷いでゐる間に二人の姿は見えなくなつてしまつた。

香港警察では、香港及び對岸の九龍に非常線を張つた。すると、其の晩のうちに一人は香港で捕まつた。それは年上の男で、

図々しくも或る小料理屋へ入つて飯を食つてゐるところを捕縛されたのだつた。しかし、此の男は金は持つてゐなかつた。警察では警戒を緩めなかつた。すると其の翌日もう一人のはふも九龍の廣九鐵路の驛で到頭網にかゝつて上げられた。警察へ連れて來て調べるとどうしたものか現金は八千圓しか持つてゐなかつた。

かういふ結果になつたので、朱毛成氏はそれから數日後悄然として香港を引き上げて上海へ歸つてしまつた。

年が變つて民國十九年(一九三〇年)になつた。今年の一月十四日に、又々香港に大事件が突發した。それは香港のドグラス會社の船で、福州香港間を往復してゐる「海澄(ハイチン)」といふ汽船が、デリー丸と同じ場所で海賊の襲撃を受けた。ハイチン號の上級船員は全部英國人だつた。

しかし、今度の仕事は海賊もデリー丸の時のやうにうまく成功しなかつた。ハイチン號は十分警戒をしてゐたし、それに乘組員は勇敢で且つ機敏であつた。海賊が蜂起すると同時に、船員達は全部一所に集つて武器をとつて對抗した。そして一方無線電信を發して軍艦の急援を求めた。

海賊の方もかうなると死にもの狂ひであつた。兩方共上甲板で旺んに鐵砲やピストルを撃ち合つて戰つた。海賊の方は愚図々々して居られなくなつたのだらう。何處かゝら石油罐を引き出して來てブリッヂの邊へ火を放つた。甲板上に炎々たる猛火が起つた。處が彼等も餘程慌てたものと見えて其の火炎は却つて自分達の方へ襲つて來るといふへマな結果になつた。海賊は二十人以上の人數だつたが、次第に其の旗色が悪くなりかけた。其處へ無線電信によつて英國の驅逐艦が救援に急行して來た。かうなつてはもはや海賊の運命も窮まつてゐた。彼等は思ひ思ひ海へ飛び込んだ。暗夜と云ひ、波の荒い此の邊の海で、而も海岸までは數哩の距離があるから、海へ飛び込んだところで命の助かる道理はなかつた。けれども、甲板の上で捕へられて最後は銃殺されるより、底知れぬ海へ飛び込んで悪魚の餌食になるはふが、彼等に適はしい最後であつた。處が、中には意久地無しもあつて、其のうち三人だけはオメ／＼と降參して甲板で捕縛された。

乘客にも船員にも一人の犠牲者を出さなかつた。ハイチン號は、慘憺たる戰ひの光景を其の儘、然し意氣揚々として、驅逐艦と一緒に香港へ入つて來た。それは腑甲斐ないデリー丸の時と比べて何たる相違であつたらう。

一時下火になりかけた海賊の噂が又々香港で燃立つて來た。

三月なかばを過ぎたある日のこと、大阪商船會社香港支店へ、異様な人物が二人づれでやつて來て、支店長に面會を求めた。社員がそれを竹内支店長の大きなテーブルの側へ伴れて行くと一人が達者な英語で話し掛けた。

「貴下が支店長ですか、私達はデリー丸に乘つて海賊に捕へられた者です」

二人とも髪は蓬々と伸びた儘であつた。着てゐる物はシャツだかチョッキだか判らぬ位垢じみてボロ／＼に破れてゐる。顔も手も眞つ黑である。

支店長は驚駭した。

「それでは、貴下は若しや朱澤民氏ではありませんか」

「ハイ、私が朱澤民です、それから此の人は臺灣の人でミスター陳です」

ミスター陳は四斗樽のやうに肥えてゐた。

「いつたい、あなた方は、どうして此處へ來られました、いろ／＼お話したいこともあるが、先づそれから伺ひませう」

「私達は大變苦勞しました、然し漸く逃げて來ました」

朱澤民氏は其の場で彼等の遭難の顚末を物語つた。其の概略を記すとかうである。

朱澤民と陳嘉光の二人は一緒につながれて海賊の巣窟へ連れて行かれた。其處は或る漁村の中を通り拔けて行くと其の背後の山の麓であつた。入江が其處まで達してゐた。山は裸山であつたが、水邊には樹木が繁つてゐて、靜かな風情のある景色であつた。バラック式の建物だが可成り澤山家があつた。二人は物置同様のひどい小屋の中へ抛り込まれた。さうして、大きなピストルを持つてゐる監視人が晝夜のわかちなく交替で附いてゐた。大便の時以外は屋外へ出されることも殆んどなかつた。食事は可成り離れた處から運んで來るらしかつた。無論粗末な食事だが、それでもたまには豚の肉や魚類なども見れた。

最初のうちは、煩悶したり、焦燥したり、恐怖したり、極度の無聊に苦しんだりしたが、こんな生活でも日數を經ると追ひ／＼慣れて來て以前ほど苦しまなくなつた。それに何んといつても二人一緒であることで助かつた。監視人は時々交替するけれども非常に嚴重で少しの油斷もなかつたが、それでも顏馴染になると矢張り相當の親しみが持てるやうにさへなつた。只、外界の事情は何一つ知ることが出來なかつた。

時々部落が騷がしくなることがあつた。さういふ時は海賊共が仕事に出掛けるとか、又は歸つて來た時かであつた。見張り番の手下までが忙がしさうな様子をした。彼等はよく福州、汕頭、シンガポール、ハノイ、などの地名を口にした。

或日朱澤民氏は、此の部落から、漁村のある入江の口の方へ斷髮の若い女が馬を驅けさせて行くのを見た。女は青色の短衣に同じ色の袴子をはき、朝風に髮を翻らせながら靜かに馬を走らせていつた。朱澤民氏はチラと其の顏を見た時、其の女はあの晩汽船へ乘り込んでゐて海賊を指揮してゐた其の女に違ひないと思つた。しかしあの時は女は斷髮ではなかつた、それが一寸腑に落ちなかつたが、其の後に斷髮したのかも知れんと思つた。

「今馬に乘つて行つた女は、あれは誰だね」

すると監視の男が答へた。

「あれは金仙蓮姐御さ」

「すると私達を此處へ連れて來たのもあの女なんだね」

「いや違ふ、今のは妹のはふだ」

此處の海賊の頭目はどういふ人物かと云つて尋ねると、其の手下は言下に「知らない」と云つた。それは全く知らないらしかつた。

「俺達は昨今手下になつたばかりだから頭目の顏を見たことがない。頭目は偉い人で、上海だか香港だか知らんが遠方に居るから滅多にこんな處へ來やしないさ」

「それぢやあ此處の大將は誰がやつてるんだね」

「白蛇線が總指揮だ、何しろ彼は海軍少將までいつた男だからな」

月日がドン〳〵經つていつたが二人の生活には何んの變化も起らなかつた。すると、今年の三月十五日のことである。其の日の暮れ方近くなつてから部落には何やら大騷動が始まつた。監視人の男は呼びに來られて小屋の戸へ鍵を卸して出て行つた。いつもの事と思つてゐると間も無く、餘り遠くない處でパン〳〵いふ鐵砲の音が聞え始めた。監視人の男が顏色を變へて飛び込んで來た。

「大變だ〳〵、オイヽお前達も逃げるんだ、俺と一緒に來い」

「一體何が始まつたんだね」

「戰爭だ」

「政府の討伐隊が來たのか」

「さうぢやあねえ、討伐隊位なら恐くねえが、土匪が攻めて來た、恐ろしく強い土匪が千人もして此の山塞を攻めて來たんだ。愚圖々々してゐると取つ捕まつて殺されるから早く逃げるんだ」

「それあ大變だ」

臺灣人の陳氏は眞つ先に戸外へよろめき出た。漁村の方へ逃げやうとすると敵はそつちから攻めて來てゐるのだつた。部落

は宛ら蜂の巣をつゝいたやうな騒ぎで、めい〳〵大事な品物を持ち出して、入江に浮かんでゐる舢舨へ乘つて遁ける者もあれば、山の方を目がけて遁ける者もあつた。朱澤民氏の組は海へ遁げやうと思つたがもう船が無くなつてゐたので人々の後について山の奥の方へ遁けて行つた。

恐い中でも朱澤民氏は滑稽でならなかつた。土匪の捕虜になるのも海賊の人質になつてゐるのも同じ事であつて見れば何も慌忙てゝ遁ける必要はないと思つたが、皆が命カラ〴〵遁げ出すので自分も遁けないわけにはいかなかつた、就中陳氏は夢中になつて遁けた。ところが彼は豚のやうによく肥滿してゐたので少しも走れなかつた。一丁も走らぬうちに息が切れてヘタばつてしまふ。

「ヤイ速く走らないか」

監視人の男はピストルを振り廻しながら叫んだ。背後から土匪の一隊が勢よく追つ掛けて來た。陳氏はこけつまろびつして走つた。

朱澤民氏は陳氏のことが氣になるので自分ばかり先きに遁けるわけにはいかなかつた。この半年あまり艱難辛苦を倶にして來た人だと思ふと、見捨てゝ行くのがひどく無情な所業のやうに考へられた。

「早く走らないと手前達を撃ち殺してしまふぞ」監視人は呶鳴つた。

山道へ掛つた。其の時朱澤民氏はフと後方へ氣をとられた拍子に、道が狹いので足を踏み外した。「あッ」と思つた時はゴロ〳〵と崖の下へ轉がり落ちて行つた。監視人は面倒と思つたのだらう、崖の上から朱氏を狙つて二發ばかりピストルを放つた。彈は中らなかつたが朱氏は腰骨をしたゝか打つたゝめに起き上ることが出來なかつた。

それから間も無く、朱澤民は土匪の一隊のために捕虜になつた。土匪共は棒切れで無やみに捕虜を毆つた。それから彼は土匪に引つ張られて行つた。其の時分はもう殆ど日が暮れてゐたので、何處をどう歩かせられたか分らなかつたが、行き着いた處は土匪の陣所らしかつた。彼は其處で一番最初に臺灣人の陣を見出した。

土匪の小頭目らしい男が五六名の部下を伴れて捕虜の居る處を巡檢に來て、一人々々を糺問したり、所持品を掠奪したりしたが、朱澤民氏と陳氏の二人は何を聞かれても實際知らない上に、何しろ着てゐる物と云つては去年の秋捕まつた時すつかり剝がれてしまつて、苦力が着るやうなボロ〳〵の布子を着せられてゐるし、髮も鬚も伸び放題だから全くみじめである。これ

が一萬元以上の價値をもつ肉票であらうとは流石の土匪も氣が付かなかつたのは二人にとつてもつけの幸だつた。

捕虜の中には、何處かへ連れて行かれる者もあれば、高手小手に縛られてゐる者もあつたが、朱と陳の二人はいゝあんばいに其の場へほつて置かれた。其の晩、二人は監視人の隙を窺つて土匪の陣所を逃げ出した。夜通し譯の分らぬ處をさ迷ひ歩いて、漸う夜が明けると小さな村のある處へ出た。それから後も夜晝なく歩いた。空腹になると芋畑の芋を盜んで生の儘噛つて餓えを凌いだ。そして三日目の今日九龍（カオロン）迄辿り着いた。其處で渡しのランチへ切符も買はずに乘つてしまつたが、降りる時別に小言も受けなかつた。香港へ着くと、先づ第一に此の事を報告しやうと思つてO・S・K支店を訪問して來たといふ次第であつた。

竹内支店長は、探偵小説を讀むよりも遙かに強い實感的興味を二人の物語から味はつた。それにしても不思議なことは、朱氏にしても陳氏にしても、是れ程戰慄すべき運命の虐待の下に半年以上も牛馬に等しい生存を續けて來たにも係はらず、其の顏の色は艶々として少しも衰へがないばかりか、むしろ仙人の健康を思はせるやうな血色を呈してゐることであつた。これは支那民族の特質を物語るものだ、と支店長は思つた。日本人がたま〳〵土匪に捕へられたりすると、恐怖と絶望の餘り發狂する者が少なくない。しかし支那人はさうでない。もがくだけもがいても駄目だとなると、最後は案外落ち着いてゐる。惡く云へば無神經であるが、それよりも彼の大陸民族の樂天的氣質をよく現はしてゐる。今此の二人がつや〳〵しい健康を持ち續けることができたのも、あながち豚の肉のおかげばかりではないのである。

陳氏は香港の取引先の友人の處へ行くと云つた。朱澤民氏は此の土地に知人が無いので、支店長が當座の費用を貸し與へ、メトロポリタンホテルへ投宿させることにし、それから上海の留守宅へはO・S・K支店から詳しい電報を打ち、一方、此の事を香港政廳へ報告して、兩人の身柄に對する責任を警察に一任した。

すると其の翌日、朱澤民氏が一人で會社へやつて來た。見ると、昨日のあの姿は何處へやら、頭も顏も床屋で綺麗に手入れをして、最新流行の、洋服からシャツからネクタイからまるで洋行歸りのやうな恰好である。朱氏は、支店長と威勢よく握手をして

「支店長さん、私は今日は大金持になりました。それは今朝警察へ行くと、私の從兄弟の朱毛成が取られた金が警察に保管し

てあつて、八千圓といふ金を卽座に下げ渡されました。それで早速洋服屋へ行つて着物を買ひ込んだといふわけです」

と云つて、昨日支店長から借りた金を返した。それから朱澤民氏は、彼の親友が廣東に住んでゐるから、今日はこれから廣東へ行くと云つた。O・S・Kの社員達は朱澤民氏の幸運を祝福するために陶々仙館に赴いて祝杯を擧げた後、彼を廣東行の船まで送つて行つた。

すると、それから三四日經つて朱澤民氏は廣東から歸つて來た。が、更に意外なことは、彼は其の時彼の細君と、二人の愛兒を同伴してゐるではないか。聞いて見るとかうであつた。彼の妻は海賊から狙はれてゐる上海住ひが不安でならないので、一時行方を晦ますために、最も遠い廣東の夫の友人の許へ親子で身を寄せてゐたのだつた。

「人間の運命は全く分りませんね。しかし私は、朱澤民氏のやうに、不幸のどん底から、有らゆる幸福を一度に取り返した人を見たことはありませんよ」

竹內支店長は、此の事件の委曲を私に話したあとで、感慨深げにかう言ひ添へた。

（完）

附記

此の物語は、最近私が南支那を旅行してゐるうちに得た材料によつて書いたものだ。デリー丸事件の眞相は、親しく事件の衝に當つた大阪商船會社香港支店長竹內氏の談話を聽いて書いたのだからほぼ誤りは無いつもりである。それにかういふ讀物は、事實である處に興味があり、且つ多少の意義も加はるのであるから、努めて潤色を避けて筆を執つた。讀者も其の點を諒せられたい。更に私は本誌との契約によつて、廣東方面に於ける旅行記其の他の作物を以て讀者の批評を仰がうとしてゐる。本篇も要するに其の一部として見て頂くのである。（楕風）

煙草・煙草・煙草・煙草

伊藤正徳

A……中毒の所產？

柄にないことは分りきつて居るが、煙草に誘惑されて了つた。それほど、私は煙草に中毒して居るのだ――。

そうだ、この隨筆も、所詮、中毒の所產である。文壇に、若しも「煙草文學」と云ふような懷かしい領域があるとすれば、それは、馬場君や下田君等のものであらう。普通なら、私などの闖入は許されない所である。私などは、謂はゞ此土に施肥する一勞働者だ。隨つて此筆は禁區を犯すもの、卽ち中毒の爲に迷ひ込んだものに過ぎない。

もう一つ。煙草を物語り、文草する資格は無くとも、その熱煙者――愛煙家の上だ――であること、更に一つ、煙草に就いて一言述べて見たい野心があつた爲に、中毒を意識しながら、敢て禁區干犯を試みた譯である。

その野心を滿たす前に、是非、言つて置かねばならぬことがある。それは此執筆の直接の原因、そうして同時に、一つの「敷島」のエピソードである。

B……敷島の手卷

板倉博士が岩手縣へ講演に行つて花卷溫泉に泊つたとき、例に依つて、一尺四方位の新聞紙で包んだものをブラ下げて居ると、之を見付けたのが公論誌の記者であつた。

「何か、御土產ですか？」

「イヤ、煙草ですよ」

「花卷溫泉で煙草の御土產とは……………」

之が此隨筆の依て產れる根源なのである。溫泉から煙草の出る筈もなし、何か理由のあることであらうと追究が始まつた。結局、その紙包の中は、全部が「敷島」の手卷であることが分明し

た。そこで其記者は、いつか、煙草の物語を板倉さんに書かそうと胸に疊んで別れたのが、今度、夏の讀み物の場合に利用されることになつたのである。

頼まれた御本人は、何かの都合で逃げを打つて居る所へ、折しも編輯上の打合せに這入つて行つた私が、輕々と捕まつて了つた。

「君に書いて貰おう」と云う板倉さんの注文に次いで、本誌の記者から疊みかけて依頼を受けた。常道からすれば、平にお斷りする所であらう。それを、フラ〳〵と引受けて了つたのは、是れぞ中毒の所産であると云う所以。

C……硬軟の違ひ

時事の主筆、慶大教授、法學博士。肩書に不足はないが、「敷島」の不足には、隨分惱まされて居る。機械製の「敷島」は、不景氣に連れて十分に市場に積まれてあるが、板倉さんは機械製のを決して喫わずに、必らず手卷と決めて居る。そこで品不足を訴へ、捜すのに大骨を折つて居るのである。

そも〳〵敷島の「手卷」と「機械卷」とを識別する秘訣は？ 是は一目瞭然なのであるが、大概の人が、この區別の存在を知らない爲に、問題が起らない。また、味覺の識別も知らないのである。

吸口から覗くと、敷島の大多數は、葉止めの所が、簡結に、平面的に、五つの菊形の凸片で出來て居る。之が機械卷。手卷の方は、吸口用の厚い紙の端が、立體的に渦を卷て葉を止めて居る。俗に渦卷と呼ぶ。

相違は之だけであるが、鋭い味覺、或は慣れた舌には、一喫して硬軟の差が分る。無情の、硬い機械卷と、心ある女工の軟い手——と云う相違では無いが、前者は、煙と熱とが直接的に舌を刺すに反し、後者は、それが渦卷を通して來るだけ軟かくなる。

一は尖鋭、一は含蓄。

しかし、もツと適切な相違は、觸覺から來るであらう。手卷と機械卷とは、挾んだ指でも分り、また咬へた齒ざわりでも直ぐに感別が出來るからだ。

手卷は、それを挾む指に厚味を傳へ、咬へる口へ輕い齒答へを送るのである。機械卷が、何となく、薄ッぺらな、頼り無さを感ぜしむるに反し、手卷の敷島は一種の重厚味を誇り、それで喫つて見ると軟かいのであるから、同じ拾八錢なら、値打に明確な優劣がある。

私は庭を眺め乍ら思ふ——少なくとも此差は、本欄（もつこ

く）と冬青（もち）だけの違ひはあらう。

D……敷島黨へ

さて手巻の値打は此邊にして（不二と國華とは無論全部が手巻だ）、問題は、何うして之を買ひ入れるかだ。

箱を破つて見なければ、渦巻だか菊形だか全く分らない。それなら不見轉で買つて冒險するのかと云へば、それは財政的にも馬鹿々々しいことだ。苦心の結果、經驗の末、手巻黨の人々は、遂に手巻の多くある地方を發見した。それは中央線の沿線、埼玉、茨城の地方、及び百本入の箱だ。人の一念は恐ろしいものである……。

この邊で買入れると、海軍ではないが、七割は當ると云ふ話だ。この比率なら、先づ以て我慢しなければならない。

と云ふのは、今日、機械巻と手巻の生産割合は一〇對一ぐらゐになつて居る。手巻を造つて居る工場は、川越と鹿兒島だけであり、その鹿兒島も近く機械巻に代るから、いよ／＼以て手巻の影は薄くなつて行く。

序ながら。手巻が中央線沿線や埼玉に多いのは産地が川越である關係から交通經濟的に當然であり、また『九州の敷島がうまい』と云ふのは、鹿兒島製手巻の爲ではあるまいか。

生産文明は、極めて當然に、敷島の手巻を驅逐して行くが、之は手巻黨から見ればグレシャム法則の最惡の現われであると嘆ずる。いづれにしても、趣味が多く機械文明を呪ひ、また人の力が、物の味を護る點に於て斷然機械の上にある眞理を、「敷島」も亦、雄辯に吾々に敎へるものである。

外國でも、煙草の味を廣告するのに Hand made（手製）と云つて居る……。

E……敷島衰へ朝日興る

敷島の話が長くなつたが、しかし、敷島を愛煙する人は、私の推定では六十萬人はあるから（一人が一日一箱强として）、もう少し、敷島を中心に話を進めよう。

先づ景氣と不景氣とが、敷島に三倍の増減を及ぼしたことは、單なる數字上の興味だけでは無かろう。

大正十二年頃は實に敷島全盛の日本であつた。口付煙草二百二十億本の中、百五十億本が敷島であつた。「近頃は猫も杓子も敷島で、人が贅澤になつた――」と云ふ慷慨家の説を聞いたのは、回顧すれば此頃であつた。

然るに其後は何うだ。濱口さんの値上げをスタートとして急坂をすべり、昨年は四十六億本に落ち、今年は三十億本も怪し

い程の凋落である。

中産階級の沒落を語ると云つては激越に過ぎようが、購買力の國民的減退、消費節約、緊縮、不景氣——と云つた幾多の暗い影が、明るい敷島のレッテルに掩ひかゝつて居ることだけは事實だ。

その反面を見よ。「朝日」は驚異すべきスピードを以て敷島を追ひ越し、今や樂々と煙草界の政權を掌握して了つた。「敷島」が百五十億の絕對大多數を擁して居た頃には、僅か十億前後の淋しい勢力に過ぎなかつた「朝日」が、今日では百二十五億の激增を誇つて、悠々と王座にすわつて居るでは無いか。

こうなると、あの格好の悪い四角の箱に安定の位が付き、薄ぼけたような綠と赤のレッテルが、淺綠淡紅のさつきの美を點出するから不思議なものだ。

時勢には勝てない——。

F……景氣の直射

まことに、「朝日」は源氏再興の勢、「敷島」は平家の運命にも近い。

店頭に見る「敷島」の姿を、壇ノ浦の夕浪に漂ふ朱欄鷁首の御座船に例へたい程の哀れである……。

が、敷島黨ひとり嘆くべきに非ず。時の勢は、不景氣は、安い物に天下を與へて、高級品一同に揃つて下野を命じたのである。兩切煙草に就いても、總數百四十億本の中、バットは實に百〇五億を占め、それに次ぐものは「胡蝶」の十二億、若し夫れスターなどに至つては、活動寫眞界のそれの如く果敢ない。

とにかくも、安物全盛の時代である。

勿論、煙草の消費量は、不景氣につれて幾分減つては居るが、しかし、依然として、所得稅總額と拮抗するだけの利益を政府に獻ずるだけの大消費を示して居る。一億八千萬圓近くの純利益が、煙の中から財政を護る。この上、いかに不景氣になつても、日本人の吞吐する煙の分量は餘り減るまい。たゞ、敷島から朝日へ、エーアシップからバットへのカーブが鋭くなるだけであらう。

恐らく他の例は刻み煙草にある。本誌の讀者は、刻みと聞けば「白梅」か「さつき」を最もポピュラーなものと考へるであらう。

然るに事實は大違ひで、値段の順を以て安いもの程多く喫はれて居る。刻み總額七百三十萬貫の中、最下等のなでしこが二百七十五萬貫、はぎが百八十六萬貫、あやめが百二十八萬貫（昭和五年三月までの一ヶ年）と云ふ順だ。文字通りの粗葉時代とはなつた。

G……米國の煙談

話の筋が苟しくも「景氣」に觸れた以上は、アメリカの事に及ばなければ、話が纏まらないのが近頃の流行のやうだ。私も一つ、その流行を趁つて見よう。日本と米國の、富や景氣の隔てを、一番適切に語るのは、葉卷の消費だ。

日本人が一年に三百萬本しか喫わないのに、米國人は七億本をくゆらす。正に二百三十倍に當る。まさか之程に貧富の差はないが、食べ物の關係、習慣、流行等の原因が加わつて斯かる相違が生じたので、從つて例に取るのは少々酷かも知れない。

しかし、紙卷煙草の方で較べても、米國は民營であるから、統計の新らしいのが得られないが、一昨年の消費は一、二〇〇億本で、毎年增加して行く。日本が安煙草へと落ちて行くのに反し、米國では高級品へと進み、または同一品の內容が高まつて行く。

されど、米國の煙草に就いての興味は、景氣の結果よりも、寧ろ其原因の方面にある。卽ち產業合理化が、商品の單純化、標準化を、煙草の上にも及ぼしたことだ。規格統一の勢が遂に煙にまで及んで、生產を增し、價を低め、消費を刺戟し、自然財政を豐富にしたのは羨ましい話である。

H……煙草の合理化

米國では、產業合理化のレールに乘つて、卷煙草まで立派に標準化、規格統一へと展開し、極言すれば四つの種類に減じて了つたとも言ひ得る程である。

卽ち前記一、二〇〇億本の中、一、〇八〇億までが、僅かに四種類の煙草に集中されて居る。四品種の名は、日本にも來て居るラッキー・ストライキ（Lucky strike）キャメル（Camel）チェスターフィールド（Chesterfield）の三種と、オールド・ゴールドであつて、いづれも十五仙ものだ。

素より高級品として世界的に名高いコンダックス（特にストロー・チップド）や、ポールモールや、フィリップ・モーリス等の味は、今でも私の忘れ得ない香味であるが、しかし、總數の九割までが、十五仙煙草（直徑二十六ミリ、紙袋入）に統一されてドン／＼賣れ高を增して行く。

勿論、かゝる經濟化は、人の味覺に統一を强ゆるの弊はある。が、之は喫ひ方の荒い米國人には恰度好い具合に適合して

居るから便利だ。

日本には、口付と両切とで十八種に及ぶが、之を半減したら、何んなものであろう。

I……味と習慣

さて煙草の味だ。

舌先で味う人と、肺で味う人とでは、選ぶ煙草が違うであろうし、肉食の人と菜食の人とが、選を異にするのも既定の事實。

それに身體の具合で味が變り、氣溫に依て煙草そのものが味を變へ、巻き方の硬軟で違ひ、更に原産地の豊凶に從つて變味する。だから、味を論ずることは、とてもうるさい仕事で、先づ夏の讀み物には適しないと逃げて置く方が無事であろう。

大體が習慣だ。喫ひつけた葉に愛着を感じて、朝日が輕いとか、バットがうまいとか、カメリアに味が深いとか、銘々が主觀を輪に吹いて他を排するのが普通だ。而して米國などに較べると、日本人がいろ〳〵の種類を喫うことは、輸入巻煙草が百四十種を算することでも分る。

そうして、埃及のキリアヂが一番だとか、アブダラが第一だとか、必ずしも常用しない面々が矢釜しく吹き立てる……。が、其アブダラの最上は十六番で、次は十一番、兩者とも日本へは來て居らぬ。日本に來て居る廿五番と五番とは、本場では大した高級品とは言へないのだから、味のことなら、國産品の方を論究する方が現實の利益でもあろう。米國ものでも、コンダックスとか、フィリップ・モーリスの味を論ずるなら値もあれ、ナチュラルとオックスフォードの優劣論では、未だ煙が黄ろい。

暴言多謝。さて、何んな時の煙草が一番うまいか？私が、中毒の理由以外に、執筆の『野心』を起したのは、實は此點にあつた筈だが、少し放漫な書き方をした爲に、紙の豫算が減つて了つて、野心を滿たすのが心細くなつて來た――。

J……何時が美味い？

仕事の後の一服！　運動して休んだ時。頂上を極めた山上の煙。湯上り。食事の後。いづれは、人に依つて違うが、大體に於て、一定の仕事を完了した直後の煙草には、責任を果した祝福の歡びが、ゆら〳〵と流れる煙に罩められて、何とも言へないうまさがある。

飯よりも、お茶よりも、先づ一服である。この一服は休息と慰安の權利であり、同時に、次の仕事への豫約でもある。

度が過ぎる私などは、原稿一枚をめくる毎に新らしい煙草を喫へる。次の仕事よりも、次のページだ。更に、文章に迷つては喫ひ、之を切り拔けては喫ふ。部屋中煙だらけだ。況して、慣れない此原稿には、少なくとも、既に三箱のエーアシップが投ぜられて居る――。一枚の用紙に二本の割合。

元來、筆を執る人に多煙の人が多い。遂に、煙草を喫はなければ文章が出て來ないのがある。この意味で、新聞は煙の中から生れると言つても大過ないであろう。

私は、朝眼がさめたとき、薩摩か水府を、五、六服ばかり咽喉へ當てるのが、堪まらなく美味い。一箱づゝ交替に――きつい代表と、軟かい代表とを――求めて居るが、之が一番快い床離れの道だ。のどの味感と、煙と、それから莨盆の音とが、私を醒ますのである。

しかし、美味いのと同時に效果的、且つ藝術的の味をも誘ふものは、庭を造り乍ら喫ふ時の煙草である。

K……植木屋の煙草

昔から、植木屋は怠け者で煙草ばかり喫つて居ると非難されて居る。

私に言はせると、凡そ是れぐらゐ無理解な、非藝術的な批評は無い。極端に言へば、己が無趣味を白狀する淺薄千萬の失言！と評し度くなる程だ。

それなら初めから植木屋を雇わなければ宜い――否な雇う資格が無い――。苟しくも雇ひ入れる以上は、彼に、半日位は煙草を喫わせて置く理解が無ければならぬ。

一木一石の配置は勿論、細かい一枝を切るのにも輕卒は許されない。常に木の姿を眺めて、その現在ばかりでなく、來年、來々年の枝を考慮に入れなければ、決して鋏を下し得るものではない。左から右から、前から後から、一本の少さい姿をも整調する爲に、植木屋は、雇主の知らぬ苦心をして居る。

彼は最初、木をにらんで方針を決める。一服を喫する。仕事にかゝつて暫くすると、彼は退いて考へねばならぬ。當然、一服する。鋏の進むにつれて、左右の釣合を見直す。また一服である。再び戻つて、今度は違つた方角から眺めて見る。必然、一服なかる可からずである。單なる切りすかしに就ても、本當の植木屋は之ぐらゐ喫ふ。

況んや、庭を造らんとして、正面と側面をとり、背景に微し、座敷に鑑みる場合の配石布木に至つては、十分の時と煙草とを要すること、當然中の當然である。

L……喫はぬ奴はもぐり

この場合の煙草の値打は大きい。

紫の煙の中から、庭の想定圖が流れ出るのである。一服、二服して、善い思ひ付が浮び、三服四服して庭の藝術が造られる。

床屋にも藝術的良心があつて、いかに忙がしい時でも、急いで虎刈をする事を卑しむ。自分が滿足する形に刈り込むのが普通であるが、植木屋は、芝を刈るのにさへ此良心を要する。だから二三尺の木槲を整へるにさへ、朝日の二本ぐらゐは容認するのが、主人の心掛と申すべきである。

斯くて私は言ひ度い――煙草を喫はぬ植木屋はもぐりであると。彼等は、土運びか根堀りか、又は精々垣根の杻木でも刈る位の低級なる助手に過ぎない。

修業の初め、先づ松の植込を造るに、小石をつかんで投げる。そうして其石の散り落ちた所へ植へる。之は、自然の實生が、風に誘はれて配置される原理を取り入れるものだ。植木屋の人工は、如何に自然を點出するかに在り、而して右の礫投げの修業から出發した經驗を、造園の基礎として頭をひねるのである。

煙草は、植木屋の頭に、恰度自然の風の作用を營むものではないか。

……以上、私は少し植木屋の肩を持ち過ぎたかも知れない。近頃は、世相の大勢につれて、荒ツぽい、粗笨な植木屋が增へて來たから、煙草は勿體ない、チューイング・ガムでもかませ乍ら追ひ使う方が庭園策の合理化かも知れない。この間、南洋から貯金をもつて歸つた女の床屋さんの話に、五分間で頭を刈ると威張つて(?)居るのがあつた。

刈られた男の人柄までが卑まれるが、如何にスピードの時代でも、未だ庭の世界には煙の搖曳とした流れがあり、繁劇な勤勢の私達に甦生の別天地を與へて居る。

M……私の煙草

少なくとも、私は、自分の造庭の半分は煙草に依ることを承認する。

私の庭は三百坪――借地ではあるが――、數百本の樹がある中、之を支配して居るのが周圍四尺の樟木である。之は加藤高明傳を書いた記念に、熱海奥から池上、池上から自邸へと、三年がゝりで移植したもので、斷然全庭を睥睨して居る。私は樟の姿に王者の風を認めるのと、一つには加藤伯の記念のこともあるので、之に『宰相』の樹名を付けて大事にして居る。

初め此樹に一つの缺點があつた。夫れは、『梢は一たる可し』の栽整原理に反して、梢が二本等分に聳へて居たことた。私は其孰れを切取るかを決めるのに三日を要したのである。煙草を喫ひ乍ら、惜しい大枝の切斷に、決めては迷ひ、躊むいくたびか繰返して後、遂に正面右の一間半(周圍一尺)の大枝に別離を宣したのであつた。

樹の手入れの中、椎は大抵自分が演る。三間位のものだが、攀ぢ上つて鋏をならす心持は、之を味つた人でなければ分らない。

鮮かな綠が、肺から全身に廻つて、細胞が悉く淨化され、人間が一新されたような爽快を覺へる。その樹の股へ腰を下ろして、煙草を喫う味は、之はまた、植木屋には認められて居ない特殊の、超俗味がある。

切りすかされて、清々とした青葉の間を、紫の煙が靜かに縫ひ乍ら昇るのを見詰め乍ら、仕事そのものと、枝の新裝と、煙草の味とを、綜合統一して滿喫する自分は、この時ほど幸福な、健康な、安らかな自身を意識する時は無い。

下りて整姿の跡を眺めての一服、また何とも言へない味だ。

N……半は殘して

本來、煙草の味は、舌と咽喉と肺との外に、鼻と眼とが加わり、五官一致して報告するものである。暗闇では煙草の味は半減、いな夫れ以上失はれる。して見れば、眼と煙草との關係は最も密接であると言へる。庭の煙草の美味いのは、その煙の自由に流れるのを見るのと、更に背景に新淺暗の綠や、樹石の布置の優美なる繪があるからであらう。

斯くて樂しい煙と快い復活とは、また良庭佳姿を作る原動力となる。私の經驗は、植木屋の煙草を、自動車のギヤソリンほどに重大視するのであるが、之を無稽の說としても、私自身は、庭で喫ふのを最佳とする。

本當に私は、煙草をうまく喫ひ得る爲に、その爲に健康を祈る。

煙草に就いては、未だ二、三書き度いこと、書いて面白いと思はれることもあるが、兩切は半分までが美味い……。

また、畑違ひの私が、こゝへ飛び込んだ由來を考へれば、素と敷島の渦巻の一件に過ぎないのである。それが煙に迷つたように、半可通の堅苦しい筆を運んで、聊か氣がさして來た感じもする。

この邊で、引き揚げるのが、自ら罪を輕くする所以でもあらう。

（完）

海門號の秘密

板倉卓造

日露戰爭の當時、倫敦タイムスが汽船海門號を傭入れ、之に其頃ヤット利用されたばかりの無線電信機を据付け、威海衞に根據地を置いて、旅順方面から仁川に至る海上を遊弋せしめ、新聞の海戰通信に一新機軸を出したことは、世界の新聞界に有名な話であるが、其通信船海門號は久しからずして露國極東大守から日本の間諜であるとして、見付け次第捕獲處罰すると云ふ宣言を發したので、遂に戰場を引揚ぐるの已むなきに至つた。新聞の戰時通信に從事する船を以て間諜と認め、之を嚴罰に處せんとした露國の宣言は、當時は勿論その後に於ても、內外國際法學者の間に、無法極まるものとして非難せらるゝ所である。併し露國が何を以てタイムスの海門號を日本の間諜と疑つたかは、今日まで全く不明であつた。然るに其海門號の秘密が最近に至つて暴露された。卽ち之に乘込んで親しく通信に從事したライオネル・ジエームス本人が、二十餘年來の秘密を今こそ打明けると稱して、一切の事實を彼の自著中に發表したのである。此著一たび出でゝ、內外學者の著書は海門號事件に關する部分を訂正せねばならなくなつたのである。

一　其頃の無線電信

ライオネル・ジエームスは一九〇三年の夏、ロンドン・タイムスから米國出張を命ぜられた。此使命の眼目は米國陸軍と其軍事教練所の視察に在つたが、紐育に到着すると、時恰も國際ヨット競爭の進行中であつた。當時無線電信は未だ搖籃時代を脫してゐなかつたけれども、紐育の新聞中には氣早やに之を利用して、シャムロック號（世界的に有名な英國紅茶王リプトンの愛乘した非常に快速なヨット）と其敵手たるアメリカ側のヨットの競爭を報道する爲め、新聞社前に模型ヨットを並べ、無線電信に依り刻々その情況を報じてゐた。ジエームスは米國新聞の此奇抜なる思付きを見て、彼の念頭に不圖浮んだのは、無

線電信と云ふものは或場合には新聞記者の仕事にうまく利用することが出來るかも知れないと云ふことであつた。そこで彼は色々違つた式の機械を比較して見た處、其時代に改良されてるたものの中では、リー・デフオーレスト博士の機械が、他の競爭者の群を拔いて新聞報道上に最良の成績を示してゐたことを知つた。

滯米中、彼はデフオーレスト博士が工風した無線電信の改良に關係してゐる或人物に會つて、同人からこんな話を聞いた。夫れはデフオーレストが獨特の工風を凝して、話を口頭のまゝ受取れる受話機を發明したと云ふことであつた。此話をジエームスに語つた人の說に依ると、前記のヨット競爭の報道にデフオーレスト式が最も成功した理由は、他の式の無線の起した妨害の爲め、若干の受信機を無效に歸せしめたに拘らず、デフオーレスト式は完全に通話を持續したに止まらず、他の一切の競爭相手となつた機械が、一分間に精々五六語しか接受出來なかつたに反して、一分間三十語乃至四十語の割合で受信することが出來たからであると云ふのであつた。此事實は彼の腦裡に深甚な印象を刻し、彼は將來自分の專門の新聞記者の仕事の上に、之を應用する機會も到來するであらうと、他日の用意の爲に確と頭の中に入れて置いた。

其後、バルカン方面からロンドンに歸るや、彼は何時にても直に極東に出發の準備をして置くことの社命を受けた。當時日露兩國間の外交關係が極度に切迫した狀態であつたからである。尤もタイムスの支配人モーバリー・ベルは未だ談判破裂は避け得るかも知れぬと一縷の望みを繫ぎ、又タイムス社としても更に一つの大戰爭の經費を免れたいと云ふ考もあつたが、併し兎に角に彼は出發の準備と必要な豫備的手續を整へて置くことを命じられたのである。

彼は自分の職業上に何とか無線電信を應用する意圖を、どうしても忘れなかつた。極東に於て日本とロシヤとの間に起るやうな戰爭は、地圖を研究して見てもニユースの敏速なる報道に、此嶄新な利器を應用す可き特殊の機會であるやうに思へたのである。併し其時支配人モーバリー・ベルに此問題を持掛けても、とんと氣が乘らないらしい狀態であつた。と云ふのは特別の經費のかゝるやうな提案をすれば、彼が尻込みすることは明白であつたからである。又ジエームス自身にしても之を提案するに足るだけの的確な計畫は未だ持つてゐた譯ではない。唯彼はタイムスに四年間勤務してゐる間に、支配人に近付く最良の方法を覺えた。即ち單純な假想を提案して、之に大金を出せと支配人を急き立てゝも夫は無駄であるが、併し苟も具體的な計畫であ

つて、又それが新聞紙としてのタイムスの聲價を高める可能性があることを見出せば、彼は立所に之に贊成すること請合ひであつた。そして彼が一旦承諾した上は、假令ひ私信中では相手を小つぴどく痛罵したり、又は其事業の利益が少いとか、利益の上り方が遲いとか、口やかましいことを云つたりするけれども、然も必ず飽くまで相手の味方となつて、援助する人物であつた。

併し支配人ベルの承認を求める問題は別として、ジエームスは彼の計畫を進めるには、極めて注意深くやらねばならぬことを感じた。抑々此計畫たる新聞界に於ける一新機軸である。彼の考案にして少しでも外間に感付かれたら、忽ち萬事窮するのである。其時代に於ても戰時通信の競爭は激甚にして、ロンドンの大新聞社は互に辛辣な競爭をやつたものである。だから一寸とした暗示でも與へたら最後、彼が斯く大事に祕藏して居る考案を、忽ち競爭者に奪はれてしまう恐れがある。又無線電信を應用する此計畫を實行するのは、此場合に唯の一社だけで、然も機會は此時限りであることを彼は十分知つてゐた。蓋し若し此計畫がうまく成功すれば、將來の戰爭には此種の計畫は軍事當局者の爲に嚴禁されることが必定であつたからである。夫れで彼は誰にも——タイムス社内で最も親しい同僚達にすら此祕密を洩らさず、若し運命と彼の傭主等の同感を得ば、計畫を實行することの出來る手順を廻らす可く、二三日の餘日の間に之に取掛つた。

彼が極東の地圖や海圖や海陸軍の事情を懸命に研究してゐる最中、丁度リー・デフオーレスト博士が英國に來て居ることを聞いた。又博士がマジエスチツク號で紐育へ歸らうとする所であることも知つた。そこでジエームスは兎も角も此汽船に同乘することにした。

半信半疑の裡に是等の日を送つてゐた恰も其頃、彼は舊友デヴイツド・フレーザーのことを想ひ出した。之より先きモーバリー・ベルはジエームスと細目の諸點を協議して、若し國際戰爭が開始された場合に、彼の助手を一名又は若干名選定する方が宜しいと云ふことを力說してゐたのであるが、ジエームスがタイムス社に居る時、恰も宜し、以前ラムスデン騎兵隊にゐたラムスデン大佐がフレーザーを同伴して彼を來訪した。ラムスデン大佐は曾て南阿戰爭中、印度植民の間から募集した義勇隊を率ゐた頗る勇敢なそして俠氣に富んだ司令官であつた。其日大佐は若し戰爭が勃發すれば、タイムスへフレーザーを推薦する積りで連れて來たのである。一體このフレーザーと云ふ男は銀行の書記から身を起したスコツトランド人で、頑丈な面構へ

をしてゐた人物である。彼は銀行の用向きで前年印度に渡つたが、彼の地に行くや、忽ち印度の浩然たる風物に感化されて、何時の間にか心が變つてしまつた。夫れで間もなく起つた南阿戰爭にラムスデンの騎兵隊に應募して出征したのであるが、彼が戰爭から歸つた時は、もう事務所の椅子などにぢつとして居る氣分は全くなくなつてゐた。彼は生れながらの新聞記者であつたのだ。ジエームスはフレーザーを見て彼の助手とするには丁度誂へ向きの人物だと考へたのである。後年フレーザーは有名なモリソンの後を繼いでタイムスの北京特派員と爲つた。

其時にはモーバリー・ベルも未だ不安心な氣分であつたから、卽座に經費を出すやうな意思もなかつたが、併し若しフレーザーが如何にかして日本へ行くことが出來たら、ジエームスが入用と認め次第、同人を雇入れることだけは承諾した。處が遺憾ながら其頃のフレーザーは、甕中頗る缺乏して二進も三進も行かない狀態であつたし、おまけに其晩になつて極東の風雲俄に急を告げると云ふ報道に接したので、彼は取敢へず支配人を說いて、フレーザーを從僕として連れて行けば割引率で旅行出來るから、極東までの旅費だけ支出して貰ふことにし、支配人の同意を得た。

二　一局は威海衞に　他の一局は傭船

さうかうする內に、愈よデフォーレスト博士と一緖にマジエスチツク號が出發する日も迫まつた。併し夫れには例の無線電信の祕密をモーバリー・ベルに打明けねばならない。一九〇三年十二月二十一日の月曜日、彼は少からず當惑した。實際その時機が未だ適當でないのだから、彼は非常に惱んだのである。處が運命は偶然彼に幸ひした。と云ふのは何事か支配人の決心を促したもの丶如く、丁度彼が其日の晩餐のテーブルに着こうとする處へ、モーバリー・ベルから簡單な手紙が屆いた。出來るだけ早く日本に出發しろと云ふのであつた。

十二月二十三日、彼はフレーザーを從僕としてマジエスチツク號に乘り、リヴアプールを立つた。立つに先立ち、未だ社の財政上の考から平和に戀々たるモーバリー・ベルはジエームスに向つて、若し極東の事局が其內に鎭靜すれば、紐育か桑港に到着した時、其處から呼び戾すかも知れないから其積りで居れと云つた。船がクインス・タウンを通過してから後は、彼は餘り從僕の顏を見なかつた。夫れはマジエスチツク號は恐しい西南の强風に會つたし、又フレーザーは餘り船に强い方でなかつたからである。夫れに彼の船室が船の中で一番ひどい所であつ

たことは云ふまでもない。併し此『從僕』を同作したと云ふことは、其半面に多分の愛嬌味を帶びてゐないものでもなかつた。其次第はこうである。船客名簿には『エル・ジエームス大尉、竝に從僕』とある。そこで之を認めたアメリカの探訪記者達は、彼等の紐育到着の際も又米大陸橫斷旅行中も、假令ひロンドン・タイムス社の者とは云ひながら、一介の戰時特派員たる者が從僕を引連れて居るなんてことはどうも解せない。夫れで此問題はアメリカの無數の新聞紙上で、或は嘲笑、或は諧謔の種子と爲つたのである。

扨てジエームスがデフオーレスト博士に會つたのはクリスマス當日のことである。ジエームスは長い間、胸中に祕めてゐた問題を試に打明けて見た。處が彼の豫想した通り相手は彼の投げた餌に早速飛び付いて來て、すぐ熱心に此問題に就いて談じ始めた。彼は此計畫の大事な意義は祕密裡に決行する點に在るから、お互の間に約定した計畫を若し他人に洩れでもすると、忽ち競爭新聞社ばかりでなく、他の式の無線電信の競爭を誘發する虞のあることを博士に懇々說いて印象させたのである。博士は易く此間の理窟を諒解したので、計畫は技師や機械がシヤトルから日本に向けて送出されてしまうまで完全に祕密を保つことが出來た。其後この祕密は漏洩したが、併し其頃には彼等は後から追ひ驅けて來られても、到底追ひ着かれない程に前進してゐたのである。

デフオーレスト博士が彼に要點を說いて聞せた色々の可能性を十分咀嚼した後、ジエ！ムスは航海中の餘日を種々な今後の見込みに就いて工風を凝して見た。そして紐育も間近になり、天候も靜穩になつたので、彼は愈々フレーザーに祕密を打明けた。マジエスチツク號が大晦日に紐育埠頭に繫留した時、彼等が如何に多大な關心を以て極東からの報道を待つてゐたかは、想像に餘りある所である。而して報道はすぐに來た。タイムス社よりの電報に曰く、

『情報變りなし、行け。ベル』

ジエームスは豫て用意して置いた左の暗號電報を、シカゴで大陸橫斷の列車と連絡する紐育發急行列車に乘込む前に急ぎ打電した。

『デフオーレスト式無線電信採用を望む。デフオーレストは二電信局用の機具を二百五十ポンドで提供する筈。送先きは日本。技師四箇月分の經費は七百五十ポンド以內。一局は威海衞、他の一局は傭船又は朝鮮海岸。勿論アメリカ新聞の加入を許して宜し。許可せば紐育レスポンダー（フオーレストの電信記號）と桑港サイベリヤ號內の私宛にイエスと打電せ

よ」

彼が桑港に到着した時、デフォーレストの件に關するモーバリー・ベルからの返電如何は、彼の運命を玆に決するものであつた。返電は來た。僅に二語、曰く『フォーレスト取極めた』此二語の暗號電報は彼に取つて非常に深長な意味を現したものである。第一にモーバリー・ベルは今や日露開戰の避く可からざることを確信するに至つたことだ。彼の無線電信の計畫はタイムス社の承認を得た。彼は紐育から打電した最初の提案中には、浮動無線電信局のことを不明瞭にして居る。同電文中に『備船』と云ふのは此浮動局のことを云ひ現す爲に使つた文字だ。夫れからそんな場所ではとても目的には添はぬことを十分承知しながら、もう一つ朝鮮海岸に固定電信局を設備する代案を附加へて置いたのである。

彼等の乘船サイベリヤ號が目的地に向つて桑港を解纜するまでに、僅か四十八時間しかなかつた其間に、彼は大急ぎで据付け機械と技師の送出しをデフォーレストと打合せた。

桑港出帆の前日、彼は最後の爆彈をモーバリー・ベルの支配人室で破裂させた。支配人も今ではもう十分に計畫を納得したと考へたので、次の如き電報を打つたのである。

御許可の電報を受取つて實行した。汽船總體に必要なり。香港の返電、キノルト、頼む」

ベルは彼の計畫を許可した。彼等は二月末日まで協力した結果、次の組織を完成した。即ちジェームスは日本の海陸軍當局者と近付きに成る爲め、一時東京に滯在してる間に、フレーザーを威海衛に送り、受信局及び根據地係として留まらせた。他方、香港で千二百噸の汽船『海門』號を備船して、デフォーレスト式無線電信機を据付け、浮動發信局として威海衛へ廻送させた。フレーザーは色々な困難を打破して威海衛に固定無線電信局を設置して、其電信係としてアサーンとブラウンと云ふ二人の米國技師を置いた。東京にはジェームス自身の關係として、曾て濠洲海軍に屬し、殊勳章を持つて居るカフーン大佐がゐたが、同人はベル支配人が海軍從軍記者として採用した男で、日本の戰鬪艦隊に乘込む爲め當局の許可を待つてゐた。

斯くて無線電信の設備を施した汽船が、愈々既成の事實となるまでの間、彼の計畫の祕密は完全に保たれてゐた。然るに當時多數の外國從軍記者が東京に集つて居り、彼等は世界の有らゆる國々から來た者であるが、就中英米兩國の記者達が自然大多數を占めてゐた。彼等が遂にジェームスの計畫を知るや、之を妨害せんとして種々の運動を試み、或は個人的に抗議したり、或は自ら模倣を企てたりした爲め、結局面倒な外交問題たるに

至らしめた。ジェームス自ら記して曰く、

『米國公使の如きは、日本が獨りタイムスに對して特別の優遇を與へるのは怪しからぬと云つて、外務省に抗議を持込んだ。之に對して日本外務省は公海に於てタイムスの行動を取締る權能はない。又同社が如何なる計畫を企てゝも、夫れが日本の海陸軍の安全と利害の衝突を來さぬ限り、之に對する責任を負ふ理由はないと撥ねつけたのである。

東京駐在の英國大使サー・クロード・マクドナルドは始終私に對して親切で又親密であつたが、公使は私が時間と傭主の金を浪費してるのではないかと注意して呉れたり、又私の同僚で日本に永住してゐたブリンクレー大尉（タイムスの東京通信員）も私が何か無分別なことでも仕出來して、彼の第二の故鄕たる日本の利益を害するやうなこともあるまいかと心配して、其本心では私の計畫に反對であつたりしたが、併し此計畫の精神を嘆賞するだけの新聞記者氣質はブリンクレーにも十分あつた。

嫉妬心に驅られた同業者等は、私の船が若し日本側で報道されることを欲しない海戰を目擊した場合には、船は過失のやうにして擊沈される筈で、之は日本の或祕密な方面から聞いたことだなどと私に耳打ちした者もあつた。支那艦隊司令官であつた英國提督某の如きは、嚴めしい調子で、私の行動は明に英國の嚴正中立を侵害するものであると暗示し、其積りで私を警戒しろと部下の艦隊に訓令したやうな有樣であつた。

併し私は日本に關する限り、決して同國の不安など釀すやうなことを本旨として、此高價な冒險を始めたのではないから、夫んな邪魔は凡て平氣で見て居た。思へば日露戰爭後既に四半世紀の星霜を閱した。過去二十有餘年の長年月に亙り、私が隱してゐた一大祕密を口外しても宜い時が今や到着したのである』

三　『日本海軍の公認間諜』

彼の所謂一大祕密とは何であつたか。再びジェームス自身をして語らしめねばならない。

『私は東京に着くが早いかすぐに海軍次官齋藤中將と會見して、こう云ふことを彼に提議した。卽ち表面では私の通辯と見せ掛けて置いて、實は私の通信の檢閱官たり、又東鄕艦隊の爲の情報官たるに適當な日本海軍將校一名を、私の船に乘込ませることを提議したのである。簡單に判り易く云へば、私がタイムスへ迅速且つ獨占的なニュースを送る機會を與へ

らる丶代りに、私の方からは海門號（同船は出さうと思へば時速十三哩は出た）を、無條件で日本海軍の通報機關の中に編入しても宜いと提供したのである。

日本海軍當局は愼重に考慮し、又度々會見の後、此提議に同意した。其契約書は日本海軍大臣の署名のあるもので、內容は左の通りである。

汽船海門號に依つて發信する可き無線電信通報の件に關する海軍大臣閣下宛、本月十二日付の貴翰正に落手仕候。

帝國政府は兩國間に存續する最も良好なる關係と諒解とに鑑み、若し貴下に於て同封訓令書の內容に御同意被成候はば、貴下の御要請に何等の異存無之、且つ特別の例として之に應ずる意圖なることを貴下に對して御通知申上げ得るを欣快とするものに御座候。

此機會に於て、必要なる場合、貴下の電信機及び專門技師を帝國海軍の使用に供せんとする貴下の信實なる御申込を感謝し、又同時に貴下の必要と認められ候ことにて、現下の狀勢の下に於て小官等の爲し得る所のものに候はゞ、何事にても喜んで貴下に對し御助力可申上候間、御承知被下度候。敬具。

一九〇四年二月二十一日

日本帝國海軍中將
伊集院五郎

タイムス社特派通信員
エル・ジェームス大尉殿

書中に訓令書と云ふのは、私に同伴する日本海軍將校に關する件及び日本の電信局との電信暗號と無線電信に關するものであつた。

海軍大臣は私に此文書を手渡しながら、非常に懇ろな態度で、貴下の企ては嘆賞の外はない。又貴の下日本側に對する至誠は感銘する。我々は海軍作戰上に貴下の御助力の提供を受諾することに決したのである。而して其爲に日本海軍部內の無線電信專門家外波中佐を選拔し、檢閱官として又必要な場合日本艦隊との聯絡係として貴下に同伴せしむることにしたと話した。さう云つて海軍大臣は私の幸運を祈つて引退かつた。其時齋藤中將は私の爲に訓令書を用意して置くから、明日再び來訪せよと云つた。そして再び別を告げながら中將は私にこんなことを云つた。

「君、此協定のことは誰にも洩してはいけない。我陸軍當局にも知らしてはいかん」

更に彼が私を驚かした一命令がある。

「當分の間はどんなことがあつても、決してプリンクレー大尉（タイムスの東京駐在通信員）に我々の取極めたことを知らせてはいけない！」

私は俗語に天を翔けると云つた勢で海軍省を退出した。自分は之から日本海軍の公認間諜になるのだと云ふことは少しも氣が付かなかつた。私の腦裡を支配した唯一事は、自分が準備を完了して、公使館の壓迫に會ひながらも、其準備した計畫を愈々實行に移して、タイムスの社の自分に與へて呉れた信頼と、それから其信頼の結果、現に生じてゐる多大の出費や、又今後生ず可き出費等の當然なものであることを立證す可き其鍵を、首尾よく獲得したのだと云ふことであつた。

翌朝、彼は齋藤中將と會見し、其席で次の打合せを濟ませた。即ち彼は表面石炭を積込むと云ふ口實の下に、海門號を長崎に呼寄せる事、但し同船は三月八日の朝までは同港を出發せぬ事。そして其前夜、外波中佐は彼の通譯の資格で同船に乘り込み、服裝は勿論平服とする事。一方齋藤中將が極く特別な許可として取計らつて遣つた所に從ひ、艦隊從軍の前記カフーン大佐を同伴して、日本海軍の前衞根據地で彼を東郷大將に會はせる事、と云ふやうな手筈であつた。

「齋藤中將の考では、私（ジエームス）は外波中佐とは東京で面會せぬ方が宜いと云ふのであつた。夫れは東京には歐の澤山の人々が警戒の眼を光らして居るからで、外波中佐は長崎まで密航し、同地で平服姿で人に見付からぬやう、船に潜り込んでしまへと云ふのである。そして其時の打合せでは、私は自分の計畫を放棄したと云ふことを觸れ廻り、夫れを本當のことと思はせる爲に、出征中の日本陸軍第一軍に從軍方を出願する段取りであつた。そこで齋藤中將は極めて親切に且つ溫情溢る、面持ちで、私の爲め『幸運を祈る』と云つて呉れた。

私は早速電報を打つて、海門號に石炭積込みの爲め、長崎に來航せよと命令した。私自身はカフーン大佐と同伴し、三月三日横濱發、同八日長崎着の郵便船に乘り込んだ。夫れは非常に愉快な航海であつた。

極東到着以來、私は初めて此不思議なそして人心を恍惚たらしむるやうな國土の美しい風光を眺めることが出來た。私等の船は瀨戸內海を通過して前後四日間の航海をしたのであるが、夫れは私の審美慾に對して間斷なき滿悅を與へて呉れた。至る所に驚く可きほど無數の風光絕佳な島や、岩や、入江や、岬を持つて居るこんな美術的な國民が、事もあらうに、現代的戰爭のやうな俗惡な非美術的なことをやつてるなんて、私

には殆ど信じられなかつた。

三月八日拂曉、我乘船は長崎に到着し、其處で水先案内に依つて、世界で恐らく一番美しい港に入つた。本投錨地點に近付くに從つて、邊りの風景は私に取つて更に一段の美觀を加へた。外でもない。僅か一鏈（一海里の十分の一）許りの眼前に、あの恰好のよい海門號が如何にも端然と、そして大海を平氣で乘切つて見せると云つた具合に、附近の石炭船や、日本船や、老朽船等を斷然威壓して投錨してゐたのである。見れば出帆旗は翩翻として檣頭高く飜つて居る。其上甲板にはフレーザーが白毛布の外套を見せびらかして、如何にも最近まで威海衛の英國艦隊にゐましたと云はぬ許りに立つて居るのを見付けることさへ出來た。

間もなく私等は「我等の船」に乘移つた。外波中佐は既に乘込んで居て、凡ての手順は全く完了してゐた。

海門號は全くジエームスの期待した通りの船であつた。乘組員は船長の外五人の歐洲人幹部を始め、支那人水夫約四十人と馬來人の舵手四人であつた。船長バッスモーアは當年五十歲位の顏色淺黑い老練家と見受けられた。彼は少々用心深い男ではあつたが、船乘りとしては上物であつて、其一番の缺點と云へば、支那海に面した或僧院の觀測所に居る一學者が發明したとか云ふ一種特別の晴雨計を、殊の外熱愛してゐることであつた。此複雜な器械は颶風を豫知するもので、バッスモーア船長の元氣は其水銀の昇降と共に上下した。だから若し此晴雨計が、例へば汕頭の南方五百浬の邊に低氣壓の生じたことを示さうものなら、バッスモーア船長は黃海の方にゐても、朝食の車蝦のカツレツなど、とても口には入らないと云ふ有樣であつた。尚併し此男にも私に解せる一つの虛榮心があつた。夫れは彼が少年時代に英國近代の名女優リ、ー・ラングトリーと同じ庭で遊んだことがあると誇るのである」とジエームスは冷かして居る。

一等運轉士マットンは船長とは大分違つた性質の男であつた。彼はバークンヘッド生れで、其祖先は航海業者であつたやうだ。卽ち英帝國をして今日あらしめるに多大の功勞のあつた階級の有力なる後裔であつた。他の乘組幹部等に就いては茲に特記す可き點もないが、皆揃つて勇敢な有爲の海員であり、タイムス社の爲に忠實によく働いた。

「外波中佐との交際に至つては誠に愉快なものであつた。勿論初の程は彼は幾分內氣で遠慮勝ちであつたが、お互に馴じんでからは、私（ジエームス）は齋藤中將がよく同中佐を選んで吳れたと感謝せずには居られなかつた。外波中佐は何よりも先づ第一に眞面目な日本海軍將校であつた。彼に取つては

任務と云ふものが一番大切なものであつた。併し任務は任務として、彼は實に愉快な友達で諧謔的氣分の滿々たる人物であつた。船橋に立つて居る所は正に四十男に見えるが、庇のある帽子を冠つた時は、未だ二十歳をチョット出た許りの青年みたやうであつた。私は私の善良なる友人外波君を通じて、他の何者よりも、もつと確に日本人の敬慕す可きことを學んだのである。相互に祕密を語合ふまでになるには多少の時日もかゝつたが、然も一度び此視察の關係が結ばれた後は、夫れはタイムス社に取つての一資產となつたと同時に、我同盟國に對しても貴重なものになつたことゝ信ずる。

私等は艙口の下に六百ポンドの値打ある荷物と、夫れから私に取つては更に遙に貴重な或物を積んで、午後二時いよいよ長崎を出港した。私の內ポケットには日本海軍省發給の許可證が祕められてあつた。目的地は仁川である。」

四

威海衛の劉公島に
立つ無線電信柱

三月九日、海門號は向ひ波を蹴立てゝ、仁川に向つて驀走しつゝあつた。

三月の月は海軍方面では先づ休養とでも云ふ時であつた。ロシヤ軍は開戰當初に受けた大打擊の回復を急ぎ、日本側では其間に海軍作戰の補助運動として、頻に朝鮮侵入の步を進めつゝあつた。併し東鄕大將の艦隊が其間全く無爲に日を送つてゐたのではない。其枝隊は一定の期間を置いて旅順口の沖合に現はれ、長距離砲擊を加へて、同軍港內の沮喪狀態を存續させんと試み、同時に間歇的の水雷襲擊や、港口閉塞等の壯擧も行はれた。

當時露國海軍が唯一の望を屬したマカロフ提督は、既に旅順に到着してゐた。彼の存在は露國艦隊に靈感的效果を與へ、破損した諸艦の修理も急速に行はれ、又旅順口の水道を測量して、先に日本側で沈設した障害物等も、水中爆破を以て取除き、三月二十日には港口はもう通過し得るやうになつた。露國艦隊が再び港外進出の出來るやうになつた其五日以前に、黑木大將は第一軍の鎭南浦上陸を完了した。大同江の結氷の破れ始めるや、日本軍は直に上陸を開始した。

海門號は十日の早朝、仁川港口を通過して、島や淺瀨の間を縫ふやうにして進み、正午頃、丁度一箇月前に瓜生艦隊の爲に擊沈された薄幸の露艦ワリヤークとコリーツの殘骸近くに投錨した。其處には一隻の日本警備艦と一二隻の水雷艇が碇泊してゐたから、先づ海軍省の手紙を携帶して居るカフーンと一緒に、外波中佐は軍艦に行つた。海門號には多額の貨物があつた

ので、翌日までは同港を去れる望はなかつた。

『外波中佐と聯絡を取り、又彼の同意を得て海門號を威海衛へ廻送し、鎭南浦を經て又仁川に歸ることに定めた。外波は途中東鄕艦隊の集合地を訪ひさへしなければ差支へないとの意見なので私（ジエームス）は東京の日本海軍省に暗號電報で、船の行動を極めて詳細に報告した。蓋し私は海軍内の關係者に凡ての情報を、若し望むならば之を利用するに十分な時間の餘裕を以て、與へたのであるに拘らず、日本陸軍當局は海軍當局に反對して、私等の鎭南浦寄港を妨げやうとしてゐたからである。海門號は翌十一日、仁川を去つて、十五日までは、鎭南浦に現れなかつた』

三月十二日の黎明、船は山東角に達し、支那の姿を初めて瞥見した。午後一時になるまで、威海衛には着かなかつたが、港に入る一時間手前から港内の劉公島に少くとも百呎ばかりの無線電信柱が立つて居るのを望み、又この柱の側に廣々した小屋が二棟ばかり建てられてあつたのが見えた。是は二人の米人技師アサーンとブラウンが萬事心得て、フレーザーの賴んだ請負師に仕事を急がせて出來上つた無電局であつた。

此無電局の電信柱の立つて居る絕壁の頂上まで、うねくねした立派な道路が出來てゐた。劉公島には非常に氣持のよい小さなホテルがあり、又相當の身分ある人々の爲にサーヴイス・クラブ（海軍俱樂部）と云ふのがあつた。此俱樂部は最初は支那道臺の官邸であつたもので、日淸戰爭の末期、日本に降服した提督丁汝昌が悶々の餘、自殺したのも此の同じ官邸であつた。

明くれば快晴の春の朝であつた。乃ち早朝ジエームスはフレーザーと無線電信局へ步いて行つた。其處で二人は色々と意見を戰はして見たが、結局この分なら決して悲觀的な狀態ではない。技師アサーンはジエームスに請合つて、今の狀態でも若し彼とブラウンの兩人で、四時間かけて海門號の無電室の設備を仕上ぐれば、百浬位の通信は出來ると云ふのであつた。此話に大に力を得て彼等は丘陵を濶步して下りながらかう決定した。卽ち日本陸軍に從軍記者達の同行を許可されたら、早速フレーザーを從軍させることにし、ジエームス自身は海門號でこつそり出掛け、當局が許可を與へ次第、直にフレーザーを鎭南浦へ放り出すことにしたのである。

アサーンとブラウンは其日上々の仕事をして、海門號は午後六時、出帆の用意が出來た。乘込んだのはジエームスの外に英國陸軍武官ヴインセント大尉、フレーザー、ブラウン技師であつた。

『其夜、威海衛を去る七十哩の所へ行つた時、無線電信で二

ユースを一くさり發信したが、其日は格別の種もないので、長文の電信ではなかつた。で私（ジエームス）は居心地の良いサルーンに控へて、六時、電光(スパーク)がタタツ〱と電報を打つてゐるのに耳を傾けて居ると、威海衛でアサーンが鉛筆を手にし、聽音機を耳にあて、あの小屋の中で受信してる姿が目に浮んだ。彼は此方からの電信をうまく受取つてるだらうか？　此電報こそは、有史以來、海戰の動亂地から無線電信で發せられた最初の戰時通信である。間もなくタタツ〱と云ふ音響は止んだ、發信が終つたのである。先方でうまく受信したらうか？　三分間の緊張した沈默が續いた。するとブラウンが底力ある聲で叫んだ。

「あれはアサーンだ——受信した」

此刹那こそ實に偉大なる瞬間であつた。時は私等がロンドン出發後七十四日目、東鄕提督が旅順口に最初の攻擊を加へてから三十日目であつた。開戰から一個月と立たない內に、絕對的に新奇なそして其發達が最も廣汎に亙る考案を實地に遂行する爲め、一切の設備を整へて、我等は今その現場に在るのだ。此考案を結實させる爲に、先づ頭の中で發芽させ、夫れから色々な不利な事情を排して、大切に培ひ育て上げねばならなかつたことを想起すれば、一九〇四年三月十四日夜、黃海の眞つたゞ中で聽取つたあの「受信した」と云ふ報告は、實に新聞事業界に於けるタイムスの偉大なる成功として、何人も之を認むるに異存はないであらう。之れまで仕上げる爲に、凡て其衝に當つた自分は、胸の高鳴るやうな滿悅の思で其夜、せゝこましい寢棚の中へ轉げ込んだことを、今でもはつきり覺えて居る」

翌拂曉、船は德嶼に到着し、大同江口へと舵を取つた。前方には軍隊を滿載した日本運送船がゐたので、パツスモーア船長は海門號を之に續いて進行させた。半分道ほど行つた頃、水路を警備してゐた一隻の日本巡洋艦が「止まれ」と信號した。

「此時、丁度少し以前に結氷が溶けて流れ出した流氷に恰も出會はした。右の日本巡洋艦から一隻のボートを海門號へ送つたが、武裝した一隊が乘込んで來た。乘込んだ士官は稍々面喰つたやうな樣子だつたから、私（ジエームス）は彼の艦長の許に行つて面會しやうと自ら進んで申出た。行つて見ると小柄な親切な艦長は私を迎入れて云ふに、彼の受けて居る命令は許可を得てゐない船には、一切其處から北方へ侵入させてはならぬと云ふことであつた。夫れに對して私は此船は夫んな種類のものではない。外波が青山列島背後の根據地に居る日本聯合艦隊を訪問する事情がなかつたら、同人を一緒

に此船に乘せて來る筈であつたと說明したら、艦長は夫れで滿足したらしく、夫れでは進行しても宜しい。併し鎭南浦へ着いたら旗艦扶桑の細谷提督へ報告せねばならぬと云つた』
此許可を得たので船は航行を續け、水道を通過すること若干哩にして、午後三時鎭南浦に達し、其處で錨を下した。其時、恰も黑木軍の主力部隊が上陸の最中で、投錨地は運送船を以て充滿し、幾千と云ふ大部隊を驚く可き敏捷さと手際を以て上陸させて居る所であつた。愚圖々々してる時間はないので、ヴィンセント大尉を上陸させた。大尉は黑木軍附の觀戰武官だつた。

五　デーリー・メールの冒險記者を欺く

ジエームスがヴィンセントを、とある怪し氣な茶屋へ連れて行くと、其處に目をぎよろつかせてゐる一人のヨーロッパ人がゐた。夫れは別人ならぬデーリー・メールの從軍記者エフ・エー・マッケンジーであつた。彼は突然ジエームスの頸に飛び付いて來た。彼は兩の目を輝かせながら、ジエームスにこんな冒險談を聞かせた。『唯支那へさへ行つて、檢閱のない電信局を使ふことが出來たら、自分は本當の戰爭記事を報道することがある。自分は有らゆる制限令を破つて平壤と更に其先きの方へも行つて、日本の前衞部隊とロシヤのコサック兵との最初の衝突を實見した。自分は日本憲兵に逮捕されて鎭南浦に護送され、最近便で日本へ向け退去の命令を受けてるのだ。君、僕を連れて行つて吳れないか』と云ふのである。
ジエームスは、夫れでは喜んで仁川まで連れて行つてやらう。其處から君一人で何とかして釜山を經て、日本へ行けば宜いだらうと答へた。
『支那へ連れて行つて吳れまいか』
『いや、夫れは出來ない。第一僕は支那へは行かない。少くとも行くには未だ間がある。第二に僕は通信員は誰に拘らず支那へ連れて行かぬと云ふ約束を、日本に與へてるのだ』
するとマッケンジーの云ふには、
『君は勝手の出來る身分だから、支那へ行かうと思へば自由に行けるではないか。君が若し僕を手傳つて、此「大特種」を打てるやうにして吳れゝば、將來大に君の爲になることがあるよ』
ジエームスはマッケンジーの爲に、明朝正六時に棧橋の所に發動汽艇を用意して置いてやる約束をして、ヴィンセントに別れを告げて、フレーザーと共に本船に歸つた。折柄大同江の潮流は非常に激しく流れてゐたので、動力の弱い汽艇で本船に歸り着くまでには可成り難儀した。彼等が丁度舷門に着いて夫れ

へ跳び移るが早いか、汽艇を繋いだ綱が切れた。夕暗をすかして最後に此汽艇を見た時は、ドン／＼海の方へ押し流され、運轉士は未だ發動機を動かすことが出來ない模樣であつた。若し發動機が動かなければ、あの急流の中で運轉士と汽艇とはどんなに成るだらうと、ジエームスは心配でならなかつた。其夜は到頭その汽艇を再び見なかつた。

翌朝六時一寸前、昨夜の汽艇がパツ／＼と白い煙を吐きつゝ、海門號に近付いて來るのを見付けた。見るとマツケンジーが乘つて居る。扨ては汽艇は綱が切れて本船と離れてから、運轉士が發動機を動かすことが出來るやうになるまでに、一二浬も押し流されたのだ。そして暗夜の爲め海門號を見出せなかつたので岸の方に行き、其處で朝になつてからマツケンジーが夫れを見出したらしい。彼等が乘ると直ぐ樣、海門號は錨を上げ、扶桑艦に敬意を表する爲め、本船の旗を下げて水路を下航した。途中尚ほ數隻の日本運送船を通り越して、十一時三十分港外に出た。船が德嶼を出ると、ブラウンは昨夜ジエームスが書いて置いたタイムスへの長文の通信電報を打電し始めた。タツ／＼と云ふ音を聞いて、マツケンジーは殆ど氣が氣でないらしく心中少からず悶々の體であつた。

併しジエームス自身とても同樣に心配があつた。と云ふのはブラウンが一生懸命で耳を澄まして聽入つて居るに拘らず、海岸の局から『受信した』と云ふ合圖がチツトも聞えない。之は一大事と思つたので、ジエームスは船長の所へ行つて相談した。其結果、若し船の進路を威海衛の方に變更すれば、同夜の十時頃には投錨が出來ると判つたので、直に進路變更に決定した。併し船が中立國の港へ行くと云ふことをマツケンジーに知らせることは、責任上出來ない。マツケンジーは必死的な決意を抱いて居る男だから、若し威海衛へ着いたことが判つたら、船から海中へ飛込み、岸まで泳いで行つて、其『大特種』と云ふ奴を、檢閲なしに中立國支那の電信局へ持つて行く位のことはやり兼ねない勢であつたからだ。そこでジエームスは其夜お祭り時のやうな晩餐をやり、マツケンジーを御馳走責めにして、船の行動などには氣が付かぬやうにしてやらうと圖つた。

處がマツケンジーもさる者、仲々その手に乘るやうな新參者ではなかつた。其日の午後、ジエームスが彼と一緒に上甲板を歩いて居ると、マツケンジーは船尾のコムパスの所で突然立止まり、

『船は進路を變へたね。チヨツト前までは南へ走つてゐたのだが、今は大分西の方へ行つてるぢやないか』

ジエームスは出來るだけの自信を以て、

「いや、淺瀨を避ける爲め、チョット此航路を取らなけやならんのだ」

と返事はしたものゝ、考へて見ればあのコムパスのことをすつかり忘れてゐたので。少し許りたつてからマッケンジーはお茶を飲みに下へ降りて行つたので、ジエームスは一等運轉士のマットンを探し出して、彼に問題を說明した。するとマットンは一片のコルクを持つて來て、瞬く間に問題を解決した。と云ふのは、マッケンジーがお茶を終へて再び船のあちこち見廻つた時には、例の船尾のコムパスは眞南を指して居た。幸にもマッケンジーは日沒には氣が付かなかつたので、ジエームス等は無事に難關を切拔けたのである。

其夜、彼等は豪勢な晚餐を奮發した。そしてマッケンジーに彼が飲める限りのシャムペンを勸め、夫れでも足らねばカクテールや火酒類を以て盛りつぶした。マッケンジーにして見れば、過去二週間と云ふものは、日本の干海老と砂搗米ばかり食つて生きてゐたのだから、こんな御馳走にあり着いても良い譯であつた。だから海門號での此慰安は、彼に取つては一大快事であつたのだ。彼は床に入る前、二三分間風に當る積りで甲板へ上つて來た時、丁度左舷の方に當つて山東の燈臺の光が見えた。マッケンジーは立ち止つた。

「何だね、あの光は？ 僕は朝鮮海岸の燈臺は、日本人が皆消して居るものと思つてゐたが」

之は難問題であつた。併しジエームスは出來るだけ無雜作に答へた。

「皆消して居るのだが、あの一つだけは殘してある。日本軍隊の上陸する間は、運送船の爲にあれだけは點燈して置かねばならないのだ。あれは靑山列島の危險な島を通過する水路の目標になつてるんだよ」

此返事で十分だつた。瞬間の疑は消えた。二三分間してマッケンジーは長らく渴望してゐた綺麗な純白の敷布があると聞いて、早速下へ降りて行つた。ジエームス等は彼が寢込んでしまうまで、一時間許りの猶豫を置いて、夫れから豫定の計畫通り彼の船室に外から鍵を掛けた。で海門號の短時間の威海衞寄港が過去の一出來事となるまで、デーリー・メール紙の戰時大特種の此持主は、前後全く不覺の狀態でジエームス等の捕虜になつてしまつたのである。

ブラウンは勿論前以て威海衞のアサーンに彼等の行くことを通知して置いた。海門號が威海衞沖合に投錨したのは、夜の十時であつた。ジエームスはフレーザーに發信電報を持たせて港に送つた。折柄海は大きなうねりでもあり、又汽艇は餘り波浪

に堪へるものでもなかつたので、彼に取つては固より愉快な航程ではなかつた。フレーザーは二三分上陸してすぐ引返へした。午前一時三十分錨を揚げて、船は再び出帆した。

推進機の動き出した音を聞くと、ジエームスはマツケンジーの室へコツソリ降りて行つて、扉の錠前をはづした。彼は扉の鏡板を通して、スツカリ疲れ果てた男の深い〳〵寢息を聞き取ることが出來た。

『事情止むことを得ずして、私等が彼に對して取つた其臨着手段に就いて、マツケンジーが果して薄々ながらも知つてるたかどうかは判らない。私等は此事に關しては、次の日も決して一言も云はなかつたのである。此書が若し彼の目に入らば、恐らく彼は私等の接待を前とは違つた考へで見ることになるだらう。併しさう云ふものゝ、戰爭は、就中戰事通信は、戀の如く手段を選ばないものだ』

とジエームスは後日その著書中に記して居る。

六　第二回港口閉塞失敗の發見

海門號は三月十七日に投錨地點に達することが出來なかつたので、同夜はボーデガ群島の避難所に假泊した。

『今度の航海中は始終日本戰鬪艦隊に屬する數隻の軍艦と連絡を取つてゐたのであるが、然も極度の注意を以て取扱はねばならない情報を澤山持つてゐた。外波は私(ジエームス)の用心深いのを認めて、露國側に多少でも利益のあるやうな情報を排つてしまう點に於ては、私は外波自身よりも、もつと几帳面だと云ふのであつた。日本海軍が自分に與へて呉れた信頼を、私は決して裏切ることはなかつたと思つてゐる。

日本海軍が私等に就いて爲した決定は賢明であつた。何故と云はゞ、海門號が彼等自身に取つて有用であることは、其後二三週間の内に、事實上に展開するに至つたからである。

外波は私等と同樣に、見られるものは皆見んと甚だ熱心であつた。又彼は日本軍艦や、日本領事館との連絡を取つて、荷も情勢の變化を示す材料を集める機會を決して逸しなかつた。私等は或期間、外波に關する秘密を守つてゐたのだが、本船の最初の頃の航海中に、哨艦から哨兵の一隊が私等の船に乘込んだ時、其隊長の士官は外波が背廣服を着てゐたに拘らず、直に彼を認めて、哨兵等に「氣を付け」と號令したので其秘密の大部分は失はれてしまつた。處が私の聞知した所では、東京の日本海軍省は我海門號の排斥を叫んでゐる競爭者に對して、海門號は權限なぞ與へられてゐるのではない。だから日露の何れかの側に於て、擊沈することも好都合たと認め

たら、立所に無鐵砲の罰を受けるにきまつてゐると說明したと云ふことである。そんな事情であつたから、東京には早く私等が行衞不明者として報告され、ばよいと、毎日祈つてゐる戰時通信員が約百人もゐたのである。外波は今までに私の遣り方や、仕事を能く觀取する時間が十分あつたので、彼は私の用心深い點に全然信用を置き、又それを彼の直屬長官等に報告したことを私は知つて居る。

三月二十五日の夜、私等は東鄕大將が第二回の港口閉塞を企てた旅順口から短距離の地點にゐた。夫れはとても昂奮的な經驗だつた。翌日私等は日本に對して最も價値ある助力を與へることが出來た。東鄕は此最近の閉塞がうまく成功したものと信じてゐた。卽ちセメントを滿載した四隻の商船が、港口の通路へ沈められたのである。然るに此閉塞が失敗であつたのを海門號は發見したので、卽刻無線電信を以て、其旨、日本艦隊に報告した。と云ふのは、同日の午後遲く、露國の戰鬪艦隊が旅順口外十哩の邊に遊弋してゐるのを見たからである。

其日は新聞報道上に於ても、亦偉大な日であつた。朝の間には前夜の作戰行動と、日本聯合艦隊の洋上に於ける活動振りを報道し、午後には露國の大艦隊が之れまで航行不能と信じられてゐた一主力艦隊さへ最早や修理されて之に加はり、洋上に出動してる狀況を報道したのである。「天皇陛下は君の今日の功勞に對して、勳賞をお授けになるだらう」と叫んだ時の外波と云つたら、とても其昂奮を抑へんとして抑へ切れないやうな有樣であつた。

翌日は艦隊間の戰爭にうまく出會はすかも知れないと思つたから、其夜は一晩中、洋上に遊弋してゐた。午前二時になると、見張りに當つてゐた二等運轉士のクラムプから、船橋へ昇つて來いと知らせて來た。私等の船は旅順口の探海燈の照明區域内に入りつ、あつた。そんな危險な區域へ、燈火も點ぜずに進入するなんて、全く氣味の惡い仕事であつた。測り知れぬ黑暗澹たる闇夜を貫いて、獨り探海燈の弧光が照り渡つて居る。何時如何なる時に、コツソリ忍び寄つた水雷艇や、隱れた沈設水雷にやられてしまうかも判らない。私等は確實に砲火の危險のない地點まで砲臺に十分近寄り、夫れから私は船長に遇岩附近へ行くやう進路を取れと云つた」

翌拂曉、東天漸く白らむ頃、海門號は遇岩附近に着いた。全く明け離れて水平線がハツキリした時、見渡す限り四方の海上、一隻の船影だに見なかつた。然るに間もなく西方に當つて一條の煤煙の立上るのを見た。夫れがやがて追々一列に續いて現は

れた。此煤煙の列の中から、隼の如く水雷艇隊が突進し出し、後に續いて戰鬪艦隊が疾驅して來るのを見た。威風堂々、戰鬪旗を海風に翻へしつゝ、凜然たる東鄕大將の戰鬪艦隊が進航し來たのである。すると一隻の通報艇がまつしぐらに疾走し來て大聲で呼び掛けた。外波中佐が之に高聲に報告してゐる間に、艦隊は其まゝ旅順口方面に航進し去つた。東鄕艦隊は挑んでマカロフをおびき出さうとしてゐるのである。

海門號は艦隊の戰鬪を見んとして、是等巨鯨の跡を懸命に追ふた。併し其日、戰鬪は行はれなかつた。日本艦隊は二三時間示威運動をやつて西方へ去つた。海門號は威海衞の碇泊所へ大急ぎで歸航した。

『無線電信の狀態は頗る面白くなつてゐた。技師達はデフォーレスト式檢波器で、黃海方面の無線電信は殘らず聽き取ることが出來た。之は外波に取つて非常に貴重な情報であつた。露國のポポッフ式無線電信は旅順口と何處か私等の附近に在る局――私等は芝罘と推定した――との間で通信して居り、一イタリー船も亦妨害を試みてゐた。私は此イタリー船が山海關に居るのか、又は仁川に居るのか判らなかつたが、芝罘の方が確かだと思つたので、外波は芝罘駐在水野領事に此旨報告した。すると夫れから四十八時間もたゝない内に、芝罘の方は沈默してしまつた。で私は一體誰の咽喉ッ首が締めつけられたんだらうと、聊か好奇心を感じたものだ』

鎭南浦へ行けば日本海軍の人々に會へるし、海門號の爲に最も有利な場所を知らせて吳れるだらうと云ふ外波中佐の言に從つて三月二十九日の午後八時三十分、海門號は鎭南浦へ向けて出發した。處がパッスモーア老船長は運惡く大同江で船を淺瀨へ乘上げてしまつた。偶々日本の警備船が之を見付けて、信號旗を掲げた。『滿潮になれば大丈夫浮き揚る』此信號は果して適中し、そして其日本軍艦は船が滿潮になつて浮き揚るまで側に付いて居てやつた。

七　『此美しい小島』

鎭南浦の投錨地に到着したのは、四時三十分であつたが、扶桑艦から時を移さず一隻の哨艇がやつて來た。旗艦の方へ來いとの細谷提督からの招待狀を齎したのである。ジェームスは外波中佐と共に早速同艦を訪れた。提督より多くの新情報を得、且つ『王侯の如くに歡待された』翌日歸航の途上、德韻を經て遇岩へ向け進路を取つた。

『其朝、私(ジェームス)は外波と上甲板を步きながら長話をした。外波の言に依れば、初めの程は海軍當局も私に對して

斯程に多大の信用を置くことの、果して賢明な策であるかどうか、多少の疑を抱いて居たのであるが、私等兩人が既に長い間一緒に働き、且つ外波自身で私が有らゆる報道上、日本海軍の利益を掩護する爲め、如何に愼重な態度を取つたかを目撃してるので、海軍當局は今では私が大切な盟友であるとて、スツカリ滿足してると云ふのであつた。之を聞いて私は甚だ愉快に思つた。併しながら私には海軍の信用は信用として、陸軍の信用は又別物だと云ふことが未だ判つてゐなかつた」

外波中佐は芝罘の水野領事への通信を持つてゐるし、又遇岩附近の遊弋も何等興味を感ずる出來事にも會はないので、海門號は芝罘へ向け進路を取つた。四月一日の夜、海門號は芝罘港に入り、ジエームスは直に上陸して、ビーチホテルに入つた。

「外波は水野領事と日本陸軍の森少佐を同伴して來た。森少佐の話では、私等のお蔭で前日旅順口と通信を交換してゐた露國側の無線電信局を發見して、夫れを凹ましてしまつたと云ふことであつた。水野も芝罘駐在露國領事から聞いたと云ふ同僚の話だとて、こんなことを私に知らせて呉れた。夫れは露國側では海門號が交戰海上を出沒する爲め、幾分惱まされたが、まあ餘り重大視せずに置いて、此美しい小島が若し本當に何か露國側に損害を與へるやうなことでもしたら、立所に捕へることに決定したと云ふ話であつた」

翌朝海門號は威海衛に歸港した。と同時に東京のブリンクレーから從軍記者等の一行は、四月六日門司を出發して仁川に向ふ筈であるとの電報が來た。夫れではフレーザーを送り屆けるには、未だ十分餘裕があるとジエームスは思つた。

四月三日午後六時、海門號は交戰國の艦隊と最も接觸し易い邊を巡航する心算で出港した。最初は南東に進路を取り、夫れから翌未明の頃には、圓島附近に達するやうな方向を取つた。此圓島と云ふのは遇岩と同じく、黃海中に浮いて居る瘤のやうな島で、遇岩から僅か二三浬の所に在る。ジエームスと外波中佐は是等の二孤島の中何れかゞ、旅順攻擊の爲の艦隊集合地點であることを知つてゐた。併し拂曉の頃彼等は空鬮を引いたことが判つた。綺麗に晴れ渡つた水平線上、何處にも燻火の煙り程のものも見えない。圓島あたりにウロ〳〵してゐては何にもならないから、海門號は半速力で靑山列島の方へ南東に進路を向けた。日本の無線電信の極く近くに在るのを聽き取ることが出來たが、一隻の船影さへ見えない。朝鮮の一角を認めたので、再び船を廻し、尙ほ半速力で四月六日夜明け頃、圓島に歸着するやうに航路を取つた。

彼等は未だ運が善くなかつた。と云ふのは、六時半に圓島に達したけれど、一碧拭ふが如く明けはなれた眼界には、物の影一つ見えなかつた。で全速力を出して遇岩へ航走した。が其處にも亦何者もゐない。そこで船を廻はして再び圓島に歸り、朦朧たる旅順口の哨丘を望みつゝ南西に向つた。

海門號は、帽子島の方へブラ／＼と徐航した。恰も大凪だつたので、ジエームスはパッスモーア船長に今夜は此處で投錨しようと云つた。其處は旅順口から二十七浬の地點であるから、其夜もし豫期された港口閉塞が決行されゝば、砲聲に依つて知り得る短距離である。がパッスモーア船長の神經は可成り鎭靜を缺いてゐるらしく、此提議にはひどく反對であつて、殊にカフーンとジエームスが沈設水雷のことを考へて、何時でも應急救助の出來るやう、ボトトは全部廻はして置いて貰ひ度いと云つたので、倘ほ更ら氣を揉んだらしい。夫れでは燈火を消して投錨すると船長が云ふから、ジエームスは之に異議を差挾んだ。

『船の燈火を見せないのは、自ら危險を招くやうなものだ。若し交戰者のどつちかの偵察艦でもヒヨッコリ來て、旅順口から僅か三十浬以内の此場所に、船燈もつけずに投錨してゐる船を見付けたら、有無を云はさず其場で敵艦同樣にあしらふだらう。封鎖は未だ宣言されて居らず、又私等は公認の通商航路にゐるのだ。私等の船燈こそ何の後暗いことのない保證である』

と斯うジエームスは主張したのである。遂に老人を說き伏せたが、彼は重々し氣に首を振つて、そして例の大事な／＼颶風晴雨計の水銀に見入りながら、僅に自ら慰めてゐた。

ジエームスとカフーンは、其夜旅順口の燈臺が空中に廻轉照明をやつて居るのを眺めながら、長い間甲板で腰掛けてゐたが併し彼等を喜ばせるやうな銃砲の閃火や、唸りはチッとも起つて來なかつた。

八　露艦バーヤンに停船監檢さる

翌朝五時、海門號は錨を揚げ、船長は例の古巣たる遇岩へ向けて再び進路を取つた。處が此第二日目に至つて、海門號に取つて一大事變が突發した。

彼等は遇岩を通過し、午前九時頃丁度圓島の眞横に達した時暗黑の大連灣を背景として、一隻の大きな巡洋艦が突如として現はれたのを發見した。海門號は進路を變更しなかつた。巡洋艦は彼等の方へズン／＼進み寄つて來た。間もなく夫れが露國の巡洋艦バーヤンであることが判つた。バーヤンは大將旗を翻へして居た。恐らく露國艦隊司令長官が其快走の巡洋艦に座乘

じて、附近の偵察をやつてゐたものであらう。で海門號は國旗を掲揚したが、露艦は約一浬これと並行して走つた。ジエームスは之は多分停船を命じて船内に乘込んで來るものと思つたので、手早く次の無線電信をフレーザーに送つた。

『旅順口沖、一九〇四年四月六日午前九時、我が船内に露艦から乘込んで來さうなり。三時間内に我等から音信なければ長官、高級海軍將校及びタイムス社へ報ぜよ』

此無線電信は果然露艦をして行動を取るに決定させたらしく、露艦は急回轉して大速力で追つて來た。ジエームスは船橋に昇つた。パッスモーア船長は恰も最後のラッパと最後の審判日を待つてるかのやうに、あの淺黑い皮膚の下に心持ち青白い色を浮べて、木石の加く無感覺の狀態で突立つてゐた。

『奴等は此船へ乘込まうとして居るな』

ジエームスがさう解釋すると、

『それは貴方の關係したことだ。私の知つたことではない』

と船長は云つたが、彼がさう云つてる間に、バーヤンの舳から非常に物凄い黃色な火煙が突然飛び出すや否や、一彈がブーンと唸つて海門號の船首を横切つた。

『船を止めろ！』

とジエームスはパッスモーアに云つた。

船長が機關室に命令を通ずると、海門號は直に停船した。

さあジエームスは眞劍に考へねばならなかつた。時間は餘りない。船橋から梯子段を滑り降りながら、彼の腦裡に浮んだのは、前日露國人等の云つた『美くしい小鳥』も愈々掴つたなと云ふことであつた。併し彼の最も心配なのは外波中佐であつた。彼は中佐を其船室で見付けた。

外波中佐は其携帶してゐた日本海軍の暗號帖をジエームスに渡した。

『君、之を預つて呉れ。そして僕等がうまくのがれたら戻して呉れ給へ。うまく行かなかつたら破いて捨てゝ呉れ！』

ジエームスは其包を受取つた。

『外波、君はどうする積りだ？』

『そいつは大分むづかしいね。僕は、あの船へ連れて行かれちやいかん。あれはバーヤンだ。あの艦長は僕を見覺えてゐる。僕等は巴里で一緒だつた。大變困つたことになつたなあ！　僕は何處かへ隱れよう。それで若し見付かつたら、僕は日本將校だ。爲す可きことは知つて居る』

外波中佐はそれ切り何も云はなかつた。併しジエームスは彼の意味を十分知つてゐた。彼は生捕（いけどり）にされる考へはない。又もし露國人等が此艦で切腹した日本人を發見し、そして其死骸が

日本海軍將校であると認めたら、ジエームス自身と彼の船がどんなことになるかも、亦能く知つてゐた。

海門號の乗組員中に四人の馬來人の舵手がゐたことは、ズッと前に一言した。其時、彼等の中の一人が前を通りかゝつた。ジエームスは其男と夫れから外波中佐を見比べた。人相上二人の間には大した相違がない。で二分たゝない内に、中佐は馬來人の舵手に成り澄まして、船橋の舵機を預つてゐた。

バーヤンは既に海門號から六百呎許りの所に迫つた。ジエームスは甲板に上ると、此方に向けられた巨砲の怖ろしい砲口を覗いたのである。ボートは最早や半分道も海門號の方に進み寄つてゐた。ジエームスは一等運轉士マットンに舷梯を卸ろせと命じ、カフーンには臨檢士官を迎へて、眞直ぐに船橋の自分の居る所に案内して來いと申付けた。夫れから彼は船長に、云ふ可きことは皆自分が云ふ積りだと云つて聞かせた。

二人の露國士官が乗込んで來た。彼等は如何にも緊張し、又如何にも不安な顔付をしてゐた。

上役の方の臨檢士官は船舶書類の提出を命じ、是等をザッと一瞥した後、ジエームスの方に向き直つて、ジエームス等が何者であるかと説明を求めた。で彼は一通り説明した。次に士官は無線電信は何處だと聞くので、早速彼を案内した處、彼は電報を見せろと云ひ出した。併しジエームスはこんな場合に應ずる爲め、豫て用意して置いた一束の電報を持つてゐた。是等は勿論どんな露國士官でも言ひ掛りを付けるやうな内容のものではなかつたのであるから、臨檢士官はチョット夫れに目を觸れたが、果して何の意味をも爲さぬと見たので、今度は『君が半時間許り前に打つた電文を見たいのだ』と云ふに依り、ジエームスは側に立つてゐたブラウンにあれを出して呉れと頼んだ。

ブラウンが其紙片を持つて來ると、ジエームスは夫れをフランス語に譯し始めた。士官は『私は英語は讀めるが、流暢には話せない』と云ひながら、ジエームスから其紙片を取つた。彼が一字々々ゆつくり讀んでゐる内に、素晴しい頓智が咄嗟にジエームスの頭に浮んだ。彼は其露國士官の腕に親し氣に手を掛けて斯う云つた。

『私は中立國の新聞記者だ。だからこんなことを君に話す權利はないのだが、タッタ二時間許り前に、帽子島附近で四隻の日本巡洋艦を見た。私は君等がチットの間でも私にかゝはつてゐた爲に、どうか彼等をして君等の船を遮斷させ度くない。殊に君等の船には大將が乗つてるぢやないか』

ジエームスは此若い海軍士官が急に顔を顰めるのを見失はなかつた。彼は忽ち此餌に引つ掛つて早速甲板に出た。彼は臨檢

隊の一人を呼び、大急ぎで本艦へ送る信號報告を口授した。妙策はうまく利いたのである。此報告が巡洋艦の艦橋の方に通じると、直ぐ先方からメガフォーンで大聲に何か命令をした。すると臨檢隊は海門號が恰も疫病船でもあるかのやうに大あわてにあわて、放棄して行つてしまつた。挨拶もそこ〳〵にして士官と水兵等はボートの中へ轉ぶやうに飛び乘り、水兵等が懸命に漕ぎ出すと、露艦の艦橋にゐた性急な連中は、メガフォーンで『もつと早く〳〵』と叫び續けた。併し斯うなるとジエームスの胸中に一番怖れたのは、彼等が海門號から一旦離れた上、船を擊沈しようとするのではないかと云ふことであつた。で露艦が動き出して、あの薄氣味の悪い砲口が、海門號の方から横の方へぐるりと廻はされたのを見た時、ジエームスは初めてホツとした。彼は船長に敬禮旗を揚げろと云つてやつた。彼等は禮儀位は盡してもよかつたのだ。危機一髪の所で助かつたのだから。

ジエームスが先に午前九時に送つた死物狂ひの無線電信を受けてからのフレーザーの心理狀態は、想像に難くない。又その無線電信の中に云つた三時間以内に、彼等が難を免れて、威海衛の方へ歸航中であるとの報告に接した時の彼の安堵も、亦想像し得られる。

外波中佐の安心したことに至つては、又非常なものであつた。彼等がバーヤンが旅順口の影へ疾風の勢ひで歸航して行くのを見つめてゐる時、中佐は昂奮的にジエームスの手を握つて『君は實にうまいなあ』と云つた。『君の國が若し今後大戰爭でもやる時には、君に非常に高い指揮權を與へなければなるまい！』

バーヤンの掲揚してゐたのは實にマカロフ大將の旗であつた。彼れ露國司令長官が此出來事に關して深思熟考した結果は何であつたか、夫れから兩三日にしてジエームスに判るのである。

海門號は午後五時、威海衛に投錨した。パツスモーア船長は無限の安堵の内に『錨を下ろせ』と命じた。と云ふのは、最近二三時間の間、彼の晴雨計は颱風襲來を豫示してゐたからである。

（未完）

學校騷動裏表

大森義太郎

わたしは以前にN大學を教えてゐた。夜間部で經濟原論を講義したこともあつた。その學生の數が大變なもんだつた。夜間部は、説明するまでもなく、經濟、政治、法律、社會等々といくつかの學部に分れてゐるのだが、この多くの學部に對して經濟原論の講義はたつたひとつしかない。そして經濟原論のやうな重要な課目はどの學部の學生も聽講しなくちやならないし、またしたくもあらう。そこで聽講の學生數はいつも七八百を超してゐた。試驗の答案はこの倍ちかく調べた記憶がある。こんな澤山な學生の前で講義らしい講義をするなんて不可能だ、こみ入つたことなんか云へやしない。第一、そのころから健康のよくなかつたわたしなんぞ聲がとほらない。それに、當時は木造のトタン屋根だつたから、夏ちかくなど、ザアーと一雨くると、全く聽えなくなつてしまふ。仕方がない、しばらく講壇に立往生して喋るのをやめなくちやならなかつた。

それぢや學生の方も聞えたつて聞えなくたつていゝつもりで來てゐるかといふと、決してさうぢやない。わたしの知つてゐた二三の學生のことを云つても、例へばY君は砲兵工廠の職工だつた。五時工場が退けると、そのまゝ飯もたべずに五時半から始まる講義に馳けつける。F君は丸の内の、いまは忘れたがどこかの會社の事務員だつた。F君自身の話で、なんでもほかの人の倍働いてその代り皆より三〇分早く歸してもらつて、途中で夕飯のパンを嚙りながらあたふた講義にやつてくるんださうだ。それでも少し遲れると前の方の席が一杯で、後の席にゐたつてなにも聞えないんだとこぼしてゐた。學生諸君の話によると、かういふ仕組にしておくのは、第一、經費節約のためだが、同時に、聞えないから學生が講義案を買ふ、つまりその教授の講義案なり著作なりの賣上げ高を多くする方法だと云つてた。

これで學生が默つてゐるのが不思議だつた。かういふところに學校爭議が起らないのが不思議だつた。だから、わたしは日本大學でこの間おそらく學校爭議としては最大の規模の騷動が勃發したとき、豫期してゐたものが豫期のとほりやつてきたといふ感じを受けたことだつた。しかし、學校騷動は日本大學に限らない。それは今日流行病のやうに蔓延してゐる。

例へば、この四月の新學期から今日まで僅か三ヶ月の間にすら學校騷動は驚くべき數にのぼつてゐる。まづ、いま云つた日本大學。その前に、これと同じく爭議一と月に及んだ立正大學の事件。浦和高等學校。京都の大谷大學。小さなものでは日本獸醫學校（四月一九日）、遠江商業學校（六月六日）の盟休がある。さらに東大では、騷動とまではいかないが、數百の學生がデモンストレーションを行つた。そして最近には第三高等學校が爭議に入つてゐる。實に八といふ數に達してゐる。のみならず、このほか新聞に出ないものがまだ

まだあらう。わたしの知つてゐるだけでも二三ある。もし全國にわたつて詳しく調べたら大變なもんだらうと思ふ。

たゞ數が多いといふだけではない。日本大學の場合は典型的であるが（授業料三割値下げのほか一八項目の要求がほとんど容れられてゐる、犠牲者も事實上出さないのと同じ程度である）、そのほかにしても大體要求を貫徹して、學生側の決定的な勝利に終つてゐる。しかも、これは學校側が自由主義的であるとか、ひどく弱腰だつたとかいふんでは決してない。學校側も最初一様に最も「强硬」な態度に出てゐる。それが學生の闘爭力の激烈さに押されて遂に全く屈服してゐるのだ。それほどに學生側は强い、そして、動員がすこぶるよく行はれ、從來學生運動にありがちな途中からの挫折なしにがんばりとほしてゐる。爭議の深酷さも注意すべきだらう。この場合も日本大學の例は典型的であるが、警官との衝突、流血までも見てゐるぢやないか。

これはどう考へても單なる流行ではない。偶發事件ではない。そこには充分な動かしえない原因がなければならぬ。

この原因は私立大學その他私立の學校の場合は見易いと思ふ。わたしが最初に語つたところからでも明かではなからうか。學校の非常なる設備不充分、それに對する學生の不滿の勃發である。この場合原因は學校經營の企業化といふことに歸する。わたしは私立大學の當時者がまさか最初から學校を利潤獲得の對象としてのみ考へたとは思はない。しかし、わかりきつたことだが、學校をやつてゆくといふことは隨分と金のかゝる仕事だ。ところが私立の學校の場合にはどうしたつて金がない。そこで主として學生からの月謝收入をほとんど唯一の財源にしなくてはならぬ。そのためには學生の多いことが必要だ。從つて私立大學の當局者は學生誘引策にいろいろと腐心する。建物を立派にする。綜合大學らしい威容をつくる。野球部を盛んにし强くする。さまざまな方法で地方宣傳をやる。ところが、これらのことは、またこれで、金がかゝる。そこで、ついに設備の方は全く不完全といふことにならざるをえないのである。ふらふら入つてきた學生はもうあまり尊重しないで、たゞ搾りとる。その一例が私が經驗したN大學の經濟原論の場合のやうである。かうやつて教室を儉約し、講師の謝禮を節約する。それからかういふこともあつた。冬の間教室が實に寒い。しよつちう風邪をひく、また風邪のいちばん恐ろしいわたしなど堪へられない。やむをえないから學生諸君にも外套を着てもらつて、自分も外套を着て講義する。それでもまだ寒い。寒い寒いとわたしが不平云つたら、學生が辯解した。これでも僕等は月謝のほかに炭代を冬の間は別に取られるのですよ、と。さういへば、室の隅に火鉢があつて、火らしいものがちよつぴりある。もちろん、この學生の云つたことがほんとうかどうか知らないし、まさか今はそんなことはないと思ふが。しかし萬事がかういつた具合なんである。

この状態から學校經營の純粹の企業化に進むのはたつた一歩だし、また進まざるをえないだらう。學校でも擴張してゆかうとすればもちろん程度の差はかなり大きいが、一般に私立學校がかういふ傾向にあることは爭へない。そしてその多くのものはすでに學校を全く利潤獲得の對象と考へてゐるのだ。こゝでもうひとつ最近の事情をつけ加へておく必要があらう。現在の深酷な不景氣は、いろいろな企業に對してと同じく、私立大學やその他

私立學校をもはなはだしく脅かしてゐる。農村の疲弊は地主が息子を大學に入れることを不可能にし始めたし、失業や給料の減額は多くの事務員や店員に夜學に通ふことをやめさせた。入學者の數が減つた。入學してゐる學生の月謝滯納がいちぢるしく多くなつた。學校の當事者は弱りきつてゐる。この不景氣に寄附なんぞ集る筈もない。だから、これに應じるためには維持費の切り下げを行はればならぬ。一方では學生からなんとかして少しでも多く金を取る算段をしなければならぬ。學校經營の企業化は一段と強まるよりほかない。

しかし私立大學には爭議などを生じない原因も働いてゐたのである。それは學生の素質である。こゝで注意しておかればならぬが、私立大學では晝間の學生よりも夜の學生の方が多い、いはゆる夜間部が主である。この夜間部の學生は、前にもちよつと觸れたが、大抵晝間働いてゐる人達である。自分で働いた金で學校へ來てゐるんだ。そして、その人達の多くが、かうして大學の卒業證をもらつて、それでいまの職業よりいゝ職業につかう。またいまの職業で上へゆく條件を作らう、文官試驗を受けようといふんで來てゐる。いはゞ立身出世を夢みて孜々として勉學してゐるわけである。かういふ連中は爭議なんてものを起す筈はない。純粹の勞働者の場合にもさうだが、この人達は、よしプロレタリアであつても、プロレタリアの階級意識をもつてゐない。少しでも學校の卒業成績をよくして、少しでも立身出世の路を講じよう、早くプロレタリアから足を洗はうと考へてゐる。下手に騷いで退學にでもなつたらつまらない。かう考へてゐる。晝間の學生にしてもさうだ。官立大學には這入れない、しかし大學を出たといへば結婚のときにいゝ相手が貰へるしといふんで、入學條件のルーズな私立大學を目がけてくる田舍の地主や金持の息子が多い。それでなければ、夜學部の學生と同じやうな、例へば働いて學資を蓄へてきて、それで大學を卒業して、次の立身出世の段階に移らうといふ人達である。もちろん、なかには生活苦を充分に經てきた、しかしそんな立身出世のためではなく、ほんとうに學問しようといふ者はある。しかし少數だ。假りにこれらの人が學校に對する當然なる不滿をなんらかの手段によつて叩きつけようとしたつて、ほかのものはついていかない。小市民的な冷靜さで傍觀してゐる。これでは學校騷動は起らない。

ところが、この事情は最近全く變化した。財産をもたないものゝ立身出世なんていふことは勸業債券で五千圓を當てるよりもつとはかない望みだといふことがはつきりしてきた。それどころぢやない。狂風のやうな就職難だ。せつかく學資を稼ぎためて大學に入つて、さて卒業しても仕事はなささうだ。疲れはてた體を夜學に通つて、その揚句が上に行かれる代りに今の職業が失はれさうだ。學校へ這入つたが考へて見ればつまらない、學校なんてどうでもいゝ。この氣持が強くなり出した。學校に對する不平不滿はもとからある。いまこれを摘出して面前に突きつけるものがあれば、喜んでその後に從つてゆく。學校騷動だ！

かうして、知識階級の就職難こそが、さつき述べた高まりゆく學校經營の企業化とならんで、むしろこの原因を現實に働かせる、最近の學校騷動の根本的な原因でなければならぬ。

この就職難はひとり私立大學の爭議の原因であるばかりぢやない。官立大學についても

ちろん云へる。のみならず、頻發する高等學校の學校騷動にも、間接だが、强く働いてゐると思ふ。

もとは高等學校からおとなしく大學を出さへすればほとんど例外なしに職があつた。大學を出るといふことは事實上生活を保證されることだつた。ところが最近にはさうゆかぬ。下手すると字義どほり食ふに困らなければならぬ。これぢや一生懸命になつて學校を卒業するにも當らない。學校をやめたつて大した違ひはない。それから就職の際だつて、財界の巨頭の息子だとか親戚だとかは學校の成績が惡からうと少し低腦だらうとどしどし採用されてゆくが、そんな背景のない普通の學生はよい成績を得てゐたつててんで問題にならぬ。かうした事實は最近においてますます露骨になりつゝある。だから、學生が先生の云ふことをよく聞いておとなしくして、熱心に勉强するなんてことが全く馬鹿らしくなつてきた。これらの事情こそが今日の學生をば、當局の言葉でいへば、「思想不健全」にしてゐるのだ。マルクシズムではなくて、この爭ひ難い客觀的事實だ。

けれども、官立學校の場合に學生をしてやゝらすれば學校に反抗し爭議といつたやうな行動に出でしめる決定的な原因は、學校なるものゝ、それと共に教授の、權威が完全に失墜してしまつたといふことである。以前には學校といへば學問の府として、教授といへば眞理の探究者として、ともかく聖なるものと考へられてゐたのだが、今日ではそんな妄想をもつてゐる者は、よほど頭の惡い學生でなければない。高等學校や大學は、軍隊や警察と同じく、支配階級がその支配を維持するための機關にほかならないこと、教授は——數人の赤色教授を除けば——支配階級の學問ある番犬でしかないことを、學生は充分によく知つてゐる。この際にはマルクシストのたゆまない暴露が效を奏してゐるようけれども、こゝでも學生に上の事實を確信させたものはやはり現實、學校なり教授なりの現實だといふことを忘れてはならぬ。どう考へたつて學問的に價値あると思はれる書物が、たゞ「赤い」といふだけで、讀むことを禁止される。教授のマルクシズム批評は、學問上の理由からでなく、他の理由からやつてゐると考へなければほかに說明のつかないほどに辻褄が合はない。頭のいゝ、眞面目な同級生がたゞマルクシズムに走つたといふだけで放校される。これと類似した無數の不合理な事實は、正義感の强い、まだ世故的な考へで頭を曇らされてゐない年の若い學生をして學校と教授との階級性をはつきりと理解させずにはおかない。そして、いち度これを理解すると、純眞な學生達は學校や教授に對して一片の尊敬をすら拂ふことをやめる。それは當然ではないか。

おそらく、かうした學校と教授との權威ゐ失墜をさらにも激しくしてゐるものは最近の教授連の完全な學問的無能であらう。それは世間一般の學問的水準が非常に高くなつたのに、教授連は研究室といふ溫室のなかでのんきに居睡りを續けてゐることからも來てゐる。相對的に質が惡くなつたことからも來てゐる。しかし、それよりも、教授連の學問上の能力が絕對的に低下したのである。そして、その事情はかうである。例へば大學を例にとつて見れば、教授なり助教授なりの採用の標準はその人の學問的才能ではない。たゞ反マルクシストだといふことだ。わたしはこれをいちいち指摘できる。恐しい頭の(惡い)男でも、あれはマルクシズムには反對のやうだと

いふことで大學教授になる。もちろん例外はある。が、之れは極めて稀れだ。このことが大學教授の質を全體として非常に低下させたことは當り前である。以前だつていろいろ情實だとかその他非學問的なことが教授採用の際に働いたけれど、今日のようにリトマス試驗紙をもつて大學教授の任用を決するといふやうな馬鹿なことはなかつた。高等學校においても、程度の差はあれ、同じやうなことが行はれてゐる。だからして、學生は、その階級性といふことを別にしても、教授を馬鹿にするやうになつてきた。なにか事があれば少しも躊躇せずに教授に反抗する。

そして、學生は高等學校なり大學をもつてなんら學問研究の場所ではないと考へてきた——事實そのとほりなんだが。學校を卒業することが世間的な利益、就職に役立たない、しかもほんとうに學問もできない。して見れば、學校を出ることは、學校を放逐されることは別になんでもない。學問についていへば、學校以外で充分に、或はその方がもつとよくできる。そればかりぢやない。昔であれば學校を放逐されたといふことは非常な不名譽であつた。しかし今では、思想問題を原因としてゞあれば、少しも不名譽ではない。世間もこれをそんなに咎めない。少くも、新興階級は喜んでこれに手をさしのべる。この階級と共に、無產者運動のなかで最も生甲斐のある生活を送ることができる。學生が、放校の危險を冒して、平氣で學校當局と徹底的な鬪爭を行ふのは當然である。よかれあしかれ年少學生に特有な青春の客氣は、むしろ進んでこれに赴かしめさへするであらう。

これだけでは、けれど、まだ學校騷動は現實には起らない。これを今日のやうに、特に頻發させるものは當局の慘忍な彈壓政策である。例へば浦和高等學校の場合などはその適例である。春の高等學校長會議（六月一五日）は取締りを『一層嚴重に』することを申し合せた。その實現の第一步として浦和高等學校ではちよつとした記事を楯にとつて學生新聞を禁止し、責任學生を處分した。この彈壓に反抗して學生は起つたのである（六月二五日）。實際今日の高等學校は最も苛酷なる警察國家の雛形にほかならぬ。學生の間にはスパイを放つてゐる。生徒主事は寄宿舍の學生の居室に這入りこんで持物を調べる。警察と本屋と連絡を取つて學生の讀む本を調へあげる。そして少しでも不穩な態度があれば直ぐ處分だ。一例を擧げると、わたしの知つてゐる東北のある高等學校の學生K君は東京の本屋からマルクス＝エンゲルス全集を買つてゐた。學校當局はこれを郵便局から調べて來て、K君はすぐ呼び出されて嚴重に戒告された。おまけに保證人まで呼び出されたのである。高等學校は、たゞ學校といふ名前をもつてゐるだけで、刑務所と大して變らない。マルクシズムに對してあまり興味をもつてない最もおとなしい學生でも反感を催さざるをえないのである。

この極度の彈壓政策と並べて當局がシキリにやつてゐる思想善導運動といふものがまた、ひとへに學校騷動を勃發させる方向に最も有效に働いてゐる。思想善導運動の具體的な、いちばん行はれてゐる方法は、思想を善導しさうな學者（實はなんら學者に値ひしないが）を呼んできて話をさせることだ。ところが、この思想善導學者がお話しにならないほど愚劣を極めてゐる。例へば浦和高等學校の爭議の原因になつたところの新聞『浦高時報』で彈劾られた矢吹慶輝だとか、——これなどといゝ方だ——その他深作安文、蛯川新だ

とかいふ札つきの――愚劣さ――學者だ。今日の學生はこんな連中のいふことを眞面目に聽くほど知識水準が低くない。それを無理に聽かされるんだが、話の內容はなつてない、そこへ必ずマルクシズム批評をやる。これが徹底的な的はづれで、ちよつとマルクシズムを知つてゐる學生がその場で反駁できるやうな程度である。それも思想善導學者は眞面目くさつて、えらさうに喋つてゐる。學生はすつかり反感を催してしまふ。マルクシストの學生ばかりぢやない、さうでない一般の學生までもがだ。

それから、思想善導のひとつの方法としてやつてゐる本を推薦して讀ませるについても同じだ。推薦された本といふのが內容のまるでつまらない、さうでなければ古くさい黴の生えたやうなもんだ。學生は第一讀みやしない。それを押しつけられるんで反感を催す。ついでにいへば、文部省はさきごろ反マルクシズムの文獻を飜譯刊行するとて數種のものを發表した。あれを見てもわかる。反マルクシズムの文獻としてともかくわれわれも一顧を與へようといふのは、あの中でたゞ一册、ト・ガン・バラノフスキーの著書ぐらゐだ。それすらすでにマルクシストの側から批評濟みで、學生の多くは知つてゐる。かうして思想善導運動なるものは、結局、支配階級の選定する學者なり本なりをもつて實體をみづから曝露することにより、その上に學生の反感をしきりにそゝることによつて、專ら思想惡導(支配階級の立場から云つて)に役立つてゐる。(その意味でわれわれは×××あたりが思想善導を大いにやることを歡迎する。)

さて、これらの學生の反感、反抗に對しては嚴罰主義だ。ところが、これが學校騷動を妨止するには大して效果をもたない。一般にさうであるが、嚴罰主義は、このやうな思想的な犯人の場合、その犧牲者を殉敎者化し、英雄化する。他の人がさう見るばかりでなく、本人も殉敎者の氣持になる。殊に多かれ少かれロマンティックなヒロイックな靑春時代の學生にとつて、一層である。だからして、嚴罰をもつて脅かされゝばされるほど、一層激越に果敢に行動することになる。わたしは最近の高等學校の學生の行動の痛烈さは全くこゝから由來するやうに思ふ。

われわれが學校騷動を觀察する場合に、官立學校の場合も私立學校の場合も共に、一般無産者運動からの影響を忘れてはなるまい。そこに挫折と後退とはありながらも、全體としては一步一步力強くなりつゝある。學生が學校に對して、壓迫者と被壓迫者として、私立大學の場合にはこれに加へるに搾取者と被搾取者としてすら、對する場合に、無産者運動から鬪爭を敎えられ、組織を學ぶといふこと、かうした無産者運動からの影響は極めて大きい。しかし、このことはちかごろでは世間の一般の人々もよく知つてゐるだらう。これについて多くの言葉を費すまでもあるまい。たゞ次の點は充分述べる必要がある。

いつたい學校騷動の原因としてわたしは上に種々なるものを擧げたが、これらの原因を働かせて、具體的な場所で一定の時に學校爭議を起させるについては人的な要素を見逃すことができない。學校に對する不平を凝集させてひとつの反抗運動にまで高めるには中心人物がなければならぬ。まして、最近の騷動に見るやうに、ほとんど全校の學生を動員し、これを決定的な鬪爭に導いて當局を屈服させるには、すぐれた指導的な人物が必要である。そして、その人物は、人望をもつてゐる、頭

がいゝといふやうなこと以外に確乎たる理論をもつてゐなくてはならぬ。もつと大事なこととしては組織能力を具へてゐればならない。かういふ人物がゐないんでは有力な學校騷動は起らぬ。事實、最近の多くの爭議の場合にはかういふいゝ指導者がゐたやうである。これらの人物を輩出させたものは一般無産者運動の進展でなければならぬ。これらの指導者は、なんらかの形で無産者運動と連絡することによつて、組織能力とかその他指導者に必要な條件を具へ、また磨いたのである。

この點はもう少し說明する必要がある。わが國ではいはゆる學生運動が一時非常に旺んであり、華々しかつた。それが最近には一見下火である。しかし、だから學生運動は駄目になつたといふのは、ある意味では正しいが別な意味では全然間違つてゐる。數年前の學生運動はより多く思想運動だつた、——このことは當時の無産者運動の發展の程度に對應してゐた。しかしそれについてはこゝでは詳しくは述べない。それだから大きな學生團體として存在したし、打ち見たところいかにも賑やかであつた。けれどもまた、それだけに根柢の弱い、浮いたものでもあつた。今日では學生運動は思想運動ではもはやない、もちろんその點も含んではゐるが。從つて學生運動をやつてゐる學生は少數である。その代りそれらの學生は純粹の實際運動家として徹底的にやつてゐる。これらの人達は直接に無産者運動の戰士として、ちようど勞働組合や婦人運動を受けもつやうに學生運動を受けもつて鬪爭してゐるのだ。

學生運動のかういふ變化は嘗て×××においても見られたものだが、それは學生運動の下向ひではなく深化であり。進歩である。そして、これこそが今日わが國にあつても學生の間におけるいゝ指導者を生み出してゐるのである。

實際最近の學校騷動における戰術は巧妙を極めてゐる。以前とは比べものにならぬ。この點日本大學の場合は模範的であるが、他の場合でも決して劣つてゐない。その整然たる組織を見るがいゝ。また、その鬪爭のスローガンを見てもわかる。學生の實際生活に卽してその不平不滿を摘出するやうなものを選んでゐる。嘗てあつたやうに單に抽象的なものを掲げるのではない。例へば、日本大學の場合のやうに、專任敎授が少くて講師が多く、しかもそれが看板講師だから休講ばかり多い。そこで學生はこれぢや高い月謝を拂はせられるのは馬鹿々々しいと考へてゐる。のみならず學生の生活が、それでなくたつて、苦しい。そこで『月謝三割減』をスローガンに掲げる。また月謝を一度に納めるのはやりきれない。これに對しては月謝三期分納を主張する。電車の定期劵を買ふのに在學證明書が必要だが、學校はこれを出すのに手數料を取る(隨分ひどい話だ)ことに對しては、その廢止を要求する。その他學友會費の問題、運動部の問題、學科制度の問題。といふふうに具體的な現實的なものを選び出す。そこで思想上では必ずしも一致しない學生もこの運動に加はり鬪爭を支持することになる。しかも今日の學校にはかうした問題がいくらでも轉がつてゐる。私立學校に見るお話しにならない出鱈目なやり方は別として、學校制度そのものに伴ふ缺陷が澤山ある。例へば學校騷動は多く試驗の時期に起されるが、これなどもどんな學生でも試驗で苦しめられるのは嫌だ、少しでも先きへ延びた方がいゝと思ふ、そこでこの期に盟休をやるとすれば全部の學生が喜んでこれに加はるからである。このやうな學

生の氣持がどこまでも正しいかどうかは別として、試驗制度といふやうなもの自體が缺陷をもつてゐる、今日の社會の動きと一致してゐないことは確かだ。そのことは——話が横路にそれるが——カンニングが旺んに行はれることなどからも知られる。官立大學の場合でもわたしは帝大で知つてゐるが、私立大學の場合は猛烈である。ほとんどみんなやつてゐると云つても決してそんなに誇張ぢやない。試驗期の神田だの三田だのゝカフエーへ行つて學生の話しを傍で聞いてゝ見給へ。どんなにうまくカンニングをやつたか、どういふ冒險をやつたかの功名話、また失敗談、カンニングの手筈の取り決め相談でカフエーがごうごうと賑はつてゐることを發見することだらう。これは決して愉快なことではない。しかし試驗制度にも罪のあることを忘れてはならぬ。たゞ暗記させる。そして短い時間に要領よく書くことだけを要求する。試驗さへとほればあとはどうでもいゝといふ、この古い官吏登用法の遺物たる試驗制度がそもそも不合理なんだ。

しかしこの問題は措くとしよう。要するに、學校制度そのものゝ不合理性から生じる多くの問題がある。そこへもつてきて、或は當局の野蠻な彈壓政策から、或は學校經營の企業化から問題が出てくる。問題はいたるところに存するわけである。學生のなかの戰鬪的分子はこれらの問題を取りあげることが正當だと考へ、必要だと考へる。しかも一般の狀勢は、上で說明したやうに、充分に熟してゐる。大規模な、深酷な學校騷動は起らざるをえないではないか。

おそらく最近の學校騷動の原因はかうだらうと思ふ。

そこで最後に。これからさき、それはどうなるか？　知識階級の就職難、失業は將來もとうてい除去されるものでないことは明瞭だらう。大學の、學校の階級性の暴露、これもその深度を增しこそすれ、決してやむものではない。無產者運動はもちろん伸びてゆく。當局の彈壓政策は？　これを幾分緩和することは可能である。むしろ進んで欺瞞的に緩和するかもしれぬ。しかし、わが國の帝國主義は教育機關の場合にも、他のすべての場合におけると同じく、ほんとうに自由主義的な政策を取ることを許さない。それは欺瞞であるよりほかがない。欺瞞であるかぎり、事態を根本的には變へないだらう。だから學校騷動は依然として起る。

殊に私立大學の場合は、不景氣の深酷化と共に、ますます經營難に陷る。學生を犧牲にする勢を枡さればならぬだらう。それでなくとも、今日のまゝでも、多くの私立學校では多くの實にひどいことが行はれてゐる。これを摘出し問題とすることによつて容易に騷動になるだらう。そして、私立大學では大抵當局者間の猛烈な暗鬪がある。これを利用してでも行けば學校爭議は極めて好望なわけである。もちろん、大きな騷動になるためには、さつき云つた人的の要素だとかその他いろんな具體的な條件が必要である。だから必ずしも大きな學校騷動が今後具體的に起るとはかぎらない。しかし、小さな形で、或は未熟な形で、依然として頻發するに相違ない。

學校騷動は、結局において、これもまた日本資本主義の衰頽期を表示する、それが解決しえない事象のひとつであらう。

井上準之助論

馬場恒吾

井上準之助は毀譽褒貶の旋風の中に立つてゐる。彼が濱口内閣の大藏大臣となつてから、金解禁を斷行する迄は、彼は一世の英雄兒であるかの如く見られた。歴代内閣の爲さんと欲して爲し能はざる所を爲した。緊縮節約が餘りに急激であつても、それは日本の經濟立直しの爲めに忍ばねばならぬ。兎も角も命懸けの決心を以て日本を國際經濟圈の一員として復活せしめる。其勇氣は之を買つて遣らねばならぬと、是が少くとも輿論の大體の傾向であつた。然るに今は井上が演說すると株が下る。だから成るべく演說して貰ひ度くないとさうした怨嗟の聲を聞く。不景氣と失業、經濟界の暗澹たる展望がすべて、井上の金解禁と緊縮政策の罪に歸せられる。人氣は夏の雲の如く動く。明日は又如何なる風が吹くか。畢竟するに井上の評價は未定である。蓋し天下の醜態は吾々が不景氣に慌て騷ぐ事であらう。必ずしも不景氣を打開せんとする努力が愚だと云ふ譯けではないが、此不景氣が並大低の政策轉換などで打開されると信ずるならば、それこそ愚の極だ。例へば日本が努力したら、世界的生產過剩が少なくなるか。或は世界の購買力が增加出來るか。世界到る所に賣れない商品の山が出來てゐて、從つて荷物が動かず、船は空のまゝで往來してゐる。生產過剩に依つて世界の經濟が行き詰る事はマルクスの公式通りではないかと得意氣に云ふ人さへある。だが生產過剩と云ふ事と、購買力減少と云ふ事は楯の一面づゝであつて、實體は同じものだと云へる。生產過剩がなくとも、購買力が減少すれば生產過剩になり、生產過剩でも、購買力が增加すれば、生產過剩でなくなる。其購買力減少は只支那に於ける銀の暴落、印度に於ける綿布關稅の增率が原因をなしてゐるのみならず、歐洲全體が世界的不景氣の重も

なる原因を作つてゐる。露西亜は貿易を國營にしてゐるが爲に人民が如何に要望しやうが、政府は外國品の輸入を極端に制限する。獨逸は過去數年間は米國から金を借りて、それで商品を買つてゐたが、今は最早借りられる丈けは借盡した。米國も最早金を貸さなくなつた。從つて此所にも商品に對する需要が起らない、佛蘭西は金解禁に際して通貨フランの價を五分一、白耳義は七分一に切下げた。卽ち貨幣價値が五分一、又は七分一となつた結果として、物價が非常に騰貴したが其割合に勞働賃銀は增加せず、一般民衆の困り方は言語同斷だと云ふ實情だ。かうした世界不景氣の原因は日本が如何に奮闘努力しても少しも變化さるべき性質のものでない。そして其等の原因に變化なき限り、歐洲の購買力は增加せず、米國の景氣恢復せず、從つて日本の景氣の基礎たる生絲と綿布の貿易は有利に展開せぬと云ふ事になる。

經濟國難を叫ぶが、實は經濟世界難である。世界が未だ經驗した事のない程の、大規模の經濟的受難時代を經つゝある。比較的に富める米國に於て失業者六百萬、英國に二百萬近くを算する事が世界の不景氣の深刻さを證明する。それの原因は結局は歐洲大戰から來て居る。日本も此大戰に參加して相當の努力はした。併し歐洲諸國に比較すると、日本は大戰の勝敗を決定する上に於て決定的な役割を勤めたとは云へない。世界の不景氣を打破するにも亦日本が決定的な役割を勤め得る地位には居ない。

畢竟するに、日本は只座して不景氣風の吹去るのを待つ外はないやうである。元より此世界的不景氣を打開する爲に日本は相當の努力をする。恰も世界戰爭に參加した程度の努力はするであらう。併し其努力に依つて世界戰爭が決定されたと自惚れる事の愚なる如く、日本の努力で世界的不景氣が打開されると思ふのも愚である。結局、天候の恢復を待つと云ふ外に方法はなくなる。只問題は日本が果して此暴風をして頭上を通り越さす丈けの我慢があるか否かである。今少し具體的に云へば大藏大臣としての井上準之助が此客觀的狀勢を達觀し、總ての不人氣と汎ての迫害に對して不死身になつて我慢するか否かである。

彼れの今迄の經歷を表面的に見れば、さうした逆境時代の苦難を知らざるかの如く見える。だから彼れには幸運兒と呼ばれる時代もあつた。彼れが年齡三十五、六の時、日本銀行の大阪支店長から、本店の營業局長になつた。その當時はさうした地位は年輩六十前後の堂々たる紳士が占める習慣であつたのを、井上の如き白面の書生が其地位に据ゑられたのを見て世間は先づ彼の幸運に驚いた。そして井上の存在が認められるに到つた。

當時の日本銀行總裁松尾臣善は井上の將來に目を付けて、これを國際金融の擔任者たらしめる意圖の下に、彼を日本銀行代

表者として紐育に駐在せしめた。其所に居る事二年、彼れは明治四十四年日本に呼戻されて、正金銀行の副頭取になつた。頭取は貴族院の政治家三島彌太郎子であつたが故に、銀行の實務の上の頭取は井上であつた。三島が日銀總裁になつたとき、井上は正金頭取になり、大正八年三島が死んだとき、井上は日銀總裁になつた。

井上が正金頭取になつてゐるとき、正金は殆んど潰れんとする程の受難時代に遭遇した。それは歐洲大戰が勃發した當初に於ては、世界各地にある正金の支店は皆資金難に苦んだのである。外國で支拂ふべき手形の期限が到着して、金は拂はなければならぬ。然るに日本から送りつゝある受取爲替は、戰爭の爲めに汽車が不通になつて、支店に到着せぬ。或は伯林に、或は西伯利亞鐵道の何處かに停滯して、倫敦へは屆かぬと云ふ狀態であつた。其時は大隈内閣時代であつて、若槻禮次郎が大藏大臣をしてゐた。井上は若槻と相談して、何んとかして此金融を疏通すべき方法を講じたのであるが、何分世界動亂の中に立つて、彼等に施すべき術もなかつたのである。だが此資金難は永續きはしなかつた。戰爭が進むに從つて、日本の輸出貿易の全盛時代が來た。歐洲は戰爭に沒頭して、汎べての生產事業を顧みる暇がなかつた。苟くも日本にある商品は輸出して儲からないものはないと云ふ時代になつた。そして其金は外國にある正金支店に集つた。正金支店は多額の金貨を抱いて其始末に困つた。と云ふのは、戰爭中米國は金の輸出を禁じた。英國と事實に於ては同樣であつた。其他の諸國何れも金の輸出を禁じてゐるが爲めに、正金は集めた金を本店に送る事が出來ず、從つて本店は日本銀行から金を借りて爲替資金にする外はなかつた。一時は正金は外國に於て七億の正貨を所有しながら、本國では五億の金を日銀から借りてゐる事があつた。かうした狀態は正金の經營を根底から破壞するものであつた。その理由は本國で借りる金には五分の利息を拂はねばならず、外國で預ける金は一分五厘か二分しかに廻らない。のみならず、爲替關係で日本の貨幣が高くなつて、外國貨幣が安くなる。日本貨百圓が米國貨五十二弗以上にもなつた。此の爲替相場の爲めに外國に正貨を有する正金は莫大な損失を負はなければならなかつた。だから其時代に於ては日本の輸出が盛んになつて、國が富めば富むほど、正金銀行は損をしなければならぬ立場に居つた。日本の爲替銀行としては正金がまだ殆んど唯一の銀行であつて、大部分の取引は正金の手を通じて金融が斷はれたからである。さうして正金に損を負はす事に對しては、井上は株主から攻擊された。併し井上は日本をして經濟的に世界に進出せしめる爲めに

は、假令正金に多少の犧牲を負はしても、此機會を逸すべからずと云ふ方針で進んだのである。

戰爭の末期になつて、寺內內閣が存在した頃は、井上は時の大藏大臣であつた勝田主計から殆んど辭職せよと云はん許りの仕打ちを受けた。其頃は殆んど每日のやうに井上は勝田と大藏大臣官邸で接觸した。それは必ずしも喧嘩ではなかつたが、井上は正金頭取として爲替相場を相當に上げんとする。勝田は尙此上にも輸出貿易を盛んならしめる爲めに、爲替を下げしめんとする。其相場の高低に關して大藏大臣の諒解を得なければならなかつたのである。勝田が井上に辭職勸告を匂はしたとき、井上は、自分は國家大體の利益を思ふて、正金を難局に立たした。それ故に、正金をして此難局を凌いで安心の境地に達せしめるのを自分の責任だと考へてゐる。政府が其權力で正金頭取の更迭を斷行すると云ふのならば兎も角、自分から辭職すると云ふ事は斷じてしないと頑張つた。井上が辭職する前に、寺內內閣が瓦解し、それから間もなく歐洲大戰も終つたのである。

大正八年三月に三島日銀總裁が死ぬると、井上は其時の大藏大臣高橋是淸に勸められて日銀總裁になつた。其年に米國は金解禁を行つた。井上は之に敬意を表したと云つて居る。然らば日本も亦金解禁をすべきではなかつたか。貿易はまた大して逆潮には進んではゐなかつた、日本は外國に十三億からの貨幣を所有してゐた。然るに金解禁をなすべき此好機會は政治的理由の爲めに行はれなかつた。當時の有力なる政治家の意見では、歐洲大戰は終つたけれども、これは一時の休戰に過ぎない。何日又世界の變亂が起らぬとも限らぬ。今度起れば東洋に起る。その時は外國にある金などは當てにならぬ。國內に正貨を有つてゐる方が勝ちだと、此說が勝ちを制して大正八年には金解禁は行はれなかつた。然し井上が京都大學の講演で述べてゐる所を見ると、彼れは大正十一年加藤友三郞內閣の時、日本の爲替相場が四十九弗に上つたとき、最早解禁を躊躇すべき理由はなかつたと云つてゐる。其時も政府は解禁せずに愚圖々々してゐた。其內に震災が來て、當分解禁不可能になつたのである。

井上が日銀總裁になつた時の政府は原內閣であつた。原首相も高橋藏相も、戰爭に依る好景氣の永續性を信ずるものゝ如く見えた。其間に井上は大正九年一月廿七日手形交換所新年宴會の席上で、世界の經濟恢復の遲々たること、米國に不景氣襲來の惧れある事を述べて、日本も『今年は寧ろ經濟界に一層波瀾の多かるべきを思はしむる』と云つた。井上が此警告を發したのは前年暮れから、如何に日本が無謀な輸入をなしつゝあるか、それが爲替手形の動きに依つて知られたからであつた。それか

ら二月と經たぬ内に大正九年の瓦落が來た。

歐洲大戰終了後、日本の金融當局者として彼れの方針は緊縮を基調としてゐた。だから大正十二年山本權兵衛内閣が成立する際、彼れが大藏大臣になれと云はれたとき、彼れは山本に向つて一つの條件を出した。それは政府が緊縮方針を進むならば、彼れは藏相を引受けやうと云ふ事であつた。山本は井上が希望する以上に緊縮する積りであるとの返答であつた。それで内閣に入る事を承諾してゐると、九月一日の震災があり、二日には井上が日本銀行に行つて火事の消防を指圖してゐた。其最中に、内閣の成立を急ぐ必要から、直ちに宮中の親任式に參列する有樣であつた。其時彼れの年は五十五であつた。

山本内閣は虎の門事件で短命で潰れた。其最後の閣議から歸る途中の自動車の中で、彼れは、此際を利用して戰後の世界の經濟狀態を實地に見やうと決心した。そして家に還へると直ちに郵船會社に人を遣つて、井上とは云はずに最近の歐洲行きの船室を約束さした。

昭和二年春の若槻内閣末期に際しての彼れの行動が屢〻非難された。彼れが若槻内閣の爲に、臺灣銀行救濟案を成立さす爲に盡力し、そして其形勢が惡くなると、それを見捨て丶福岡に行つたと云ふのである。事實はどうであつたか。彼れは福岡に開かる青年團大會に出席すべく大阪迄行つたとき、内閣から呼戻されたのである。東京に還つて、首相の若槻、藏相の片岡に聞くと臺灣銀行救濟の勅令が樞密院を通過するのは困難な樣子であつた。そして愈々此救濟案が通過しなかつた場合にはどうするかと云ふ事であつた。片岡は政府の責任支出で此急場を凌ぐ。それには井上から一方は日本銀行を說いて、出來る丈け臺銀を援助なさしめる。一方には臺銀にコールを貸して居る市中銀行を說いて、成る丈けコール回收を猶豫さすと云ふ事であつた。井上は政府の希望通りに說いた。日本銀行も承諾し、市中銀行も臺銀が潰れるのでなければ別にコール回收を急ぐ必要はないと云ふ事であつた。殘る仕事は政府が責任支出の決心をする迄の事であつて、井上としては爲すべき用事が濟んだ形であつた。それで片岡藏相も同意で井上は福岡に向けて出發した。其後に政府は責任支出を實行せずして、内閣を投出したのである。

これ丈け見れば、井上の行動は別に逃げたとは云へないが、其間に世間をして種々の風說を立てしめる事情があつた。それは若槻内閣を潰さんとしてゐた故人の田中義一は若し自分が内閣を取れば井上を外務大臣になさんとする意志のあつた事である。其意志は人を介して井上に通ぜられ、高橋是清からも手紙で云つて來た。然しそれはまだ若槻内閣の存在中であつたから、

井上は諾否共に返事をしなかつた。だが井上が福岡に居る際、若槻内閣辭職して田中が内閣組織の大命を拜したと云ふ電報を受取つた、井上は直ちに田中の處へ電報で、自分は如何なる地位に關らず、入閣しないとハッキリ斷はつたのである。

金融恐慌の後始末を付ける爲めの臨時議會が終つた頃、或日高橋藏相は朝早く井上の處へ電話を掛けて、至急に話し度い事があるから來て吳れまいかと云ふ。井上は起きた許りで朝飯も濟まさずに居る。それでも其儘出掛けると、高橋も亦寐惚け顔をしてゐる。そして井上に向つて云ふには、

「實は昨日日銀總裁の市來を呼んで、辭職さしたのだ。其時市來は後任は誰れかと聞くから、後任はまだ決定してゐないと云つた。後任を決めて市來に辭職を要求すべきものでないと思つたから、實際決めてゐなかつた。所ろで其後任は君になつて貰ひ度いのだが、是非引受けて吳れまいか」

と云ふのであつた。井上はそれを斷つた。自分は戰後の世界を見て考へる所がある。大臣を斷つたから、今更日銀總裁でもあるまいと云ふ意味ではないが、暫らく自由の立場で國家の爲めに盡くしたい。だから、平にお斷りすると云つたのである。すると、高橋は顔を曇らして、甚だしく不滿の口調で、

「ハア、君はさういふ人かなあ。僕も此歳になつて、何を好んで大藏大臣なんかになるものか。只日本が、大變の場合になつてゐる。此金融動亂の後始末をせねば國が潰れる。自分は命を投げ出した積りで出て來た。君に賴めばウンと云つて吳れると思つたに」

見ると寐惚け顔の老人が目に淚をためて居る。井上も貰泣きをした。結局其場で井上は日銀總裁を引受けた。つまり人情に負かされたのである。それが井上の美點でもあり又弱點でもある。

井上が聰明其ものである事は衆論の一致する所だ。彼れが商科大學、京都大學で講演した戰後の財政經濟、國際金融の事が二册の本になつて出て居る。それを讀むと、大戰中から震災後迄の日本と世界の金と物との動きが手に取るやうに描かれてゐる。事理明白、如何に彼れの頭が澄んでゐるかゞ判る。彼れの聰明を以てして、金融恐慌後の日銀總裁が如何に儲からない地位であるかの判らない筈がない。事實に於ても、日銀が特別融通として五億圓の固定貸をした事は、今尙日銀の統制力を失はしめたものとして非難されてゐる。金融恐慌に際して名實共に潰れた銀行もあり、表面は潰れなくとも實際は潰れてゐる銀行もあつた。それらの銀行をして日本全體の經濟界の破滅を起さしめない爲めには燒石に水、椽の下の力持ちに似た貸出しをせざるを得なかつた。勞多くして功少ないのは勿論だが、後に非難

と悪辭の種を残すことは目に見えて居た。井上は其仕事を避けんとしたが、高橋老人に口說かれて、遂に斷り切れなかつた。

此性格の爲めに、彼れは財界世話業の名を受けた。大藏大臣を罷めて浪人してゐる頃、實業界の友人が來て、自分の會社が困るから智恵を貸せとか、誰れかに話して吳れまいかとか云はれると、矢張木で鼻を括つたやうな挨拶も出來ず、何んとか話を付けて見やうと云ふ。引摺られ、引張られて、誰れ云ふとなく、財界世話業者を以て見られるやうになつた。濱口內閣の大藏大臣になつた後も、此財界世話業の名が彼に對する非難の一つになつてゐる。此經濟界困難の場合に、日本の大藏大臣は大藏大臣たる丈けで、晝夜兼行して日も尙足らずとすべきだ。それが會社の合同とか、整理とかに口を出すのは甚だ怪しからんと云ふ。友人に賴まれゝば厭やと云へない彼れの性質が、此尤もな非難の種を作つてゐる。

彼が日本銀行監事として紐育に居た頃、私は彼の處世訓を聞いた事がある。曰く自分は狗も步けば棒に當ると云ふ主義だ。だから先輩知己の處をよく訪問する。併し日本の大先輩に會ふのは仲々六ヶ敷い。電話を掛けて、都合を聞合せて訪問するなどは失禮だと云つて怒られる。朝寢てる內に訪問して一時間でも二時間でも應接間で待つてゐる。するとあれは感心な男だと云はれる事になると、私は日本の社會は仲々六ヶ敷いと感心した。

井上はさうして先輩を作つた。併し彼れは如何なる先輩にも頭の上がらぬやうな世話になり方をしないと云ふ方針でおつた。嘗つて彼れが東京市長に推薦された時、彼れを推薦する連中が、彼れの先輩の山本達雄男の所に往つて、彼れに市長になるべく勸めて吳れと賴んだ。山本は答へて、井上と云ふ男は自分の事は自分で決める主義だ。だから、人からすゝめても駄目だと云つた。其陳情委員が歸つた後、山本は井上の處へ電話をかけて、今陳情委員が來たがかう云つてかへしたと告げた。

かうした點では、彼れは獨立獨行の人の如く見えるが、何日でも人情に絆される弱味が付き纏つてゐる。濱口內閣の大藏大臣になつた當初、官吏減俸案を出した。これは整理緊縮の論理的結論であつた。所ろで、これには新聞社が反對し、內閣の意志も動いた。若し井上が頑張れば內閣は行詰らなければならなかつた。井上は純理を突張る事が出來ず、中途で折れて了つた。

金解禁を實行した。生絲の値段が暴落する。製絲業者とそれに關聯する金融業者が悲鳴を上げた。純理から云へば、金解禁は經濟立て直しを目標とする以上、物價の下落は歡迎すべきだ。下落する所まで下落さして、そして新規に經濟を立てる。殊に生絲業こそ最も產業合理化の必要に迫られてゐる。生絲の値段

の慘落は此合理化を行ふ槓杆として利用すべきだ。然るに井上は絲價安定補償法を發動せしめて、一時の急場を救つた。その金で、製絲者は今年の繭を買ふ事が出來たと云ふから、萬更無駄ではなかつたであらうが、併し、金解禁を以て經濟立直ほしの理論から云へば、一つの道草を喰つた事になつた。

彼が大藏大臣としての功績を認められてゐる事は公債の價格を安定せしめた事である。公債の價格が動搖する事は、財界の地盤を連續的に震動せしめる樣なもので、人心を極度に不安ならしめる。それが安定した事は財界に喜ばれてゐる。所で、此政策が世間をして彼を金融資本の擁護者として攻撃せしめた。成程公債の價格安定は公債所有者たる財閥と銀行の財產を安定せしめる事になる。併し若し井上が大膽なる理論家であつたならば、それが何で惡いと逆襲すべき所だ。現代が金融資本主義であり、國が金融資本主義を土臺として存立するものならば、金融資本主義を安定せしめる事が國を安定せしめる所以だと云へる。だが、井上はさうは云はない。日本が十億か、二十億位の公債を背負つてゐる國ならば、自分も非募債主義は取らない。然るに日本は現に六十何億と云ふ公債を背負つてゐる。此上に公債を募れば國民はどうしてそれを負つて行けるかと云ふのである。

井上が聰明無比の政治家であると云ふ事には何人も異論を挿まない。だが同時に彼れは人情に絡まると四圍の事情に動かされる。殊に現代の如く、世界的不景氣の中に立つときは、怨嗟の聲が四方に起る。怨嗟の聲を放つ者は、同時に、蟲の良い救濟要求案を提出し來る。かうした場合には官業を民營に移し、若しくは民營を官業に移す計畫が立てられる、其多くは、民間事業で儲からなくなつたものを政府に買上させ、官業で儲かるものは民間へ奪ひ取らんとするものである。過去に於てもさうして多くの資本家が作られたのである。

不景氣の深刻なるに連れて、救濟要求の聲も深刻になる。其論理的結論に產業全部を政府に獻納すると云ふ事になるべきである。併し資本家の云ふ所はそれほど徹底してはゐない。困難の時丈け助けて貰つて、利益を生ずるやうにならば、矢張個人經營にして置かうと云ふのである。かうした救濟要求の聲を聞いてゐたならば、政府は幾度破產しても足りない。

現在の不景氣は夏のアルプスで濃霧と寒氣に襲はれたやうなものだ。じつとしてゐれば凍死する惧れがある。併し動けば必ず千仭の谷に落ちる。鐵の如き意志で、岩に噛り付いても此不景氣の過ぎ去るを待つより外に妙案はない。井上藏相が頑僻になる必要がありとすれば、只此時を以て然りとする。

失業體驗記

施療患者業を叩き出される

齋藤貞次

S君！
俺はもう一ト月半ねたつきりだ。低い天井の下で。夏がいきれる。
S君！ 俺は悲慘だ……俺はもう足が立たない。……歩く事も出來ない……足は蚊の脛だ……からだは骨だらけだ……息が切れる。毎日水ばかりがぶ〳〵呑んでゐる。
S君！ 俺は情けない。俺の枕元には臭い便器が置いてあるのだ。
その便器と並んで、桶に一杯の呑み水が、死人への手向けのやうに置いてある。（妹が工場への出がけに汲んで行くのだ。）その水を俺は毎日がぶ〳〵呑んでゐる。

そんな譯で病院にゐてさへ二千瓦も三千五百瓦も出た糖尿病の小便は、がぶ呑みの水を加へて、五千にも一萬にも（勿論メートル・グラスなんか無いが）氾濫する。時をきらわずひようぐり出す。その仕末がどうにもいけない。
やつとこさで枕元へ起き直つて、便器へ向つても、こいつだけ勢のいゝ小便は、シヤアッと盛きらわず、方角なんど無視して、疊の上、枕の上、障子、それから水桶の中、四方八方へひようぐり散るのだ。
赤い糖尿病の小便が、枕元ぢゆう降りしぶいて、桶の中の呑み水へまで、血のやうに降りかゝつて行く。
だが、どうしよう俺は足が立たない。
唯、むん〳〵いきれあがる小便の臭みの中へ、俺は頭をおつつけてねてるより他はないのだ。俺は小便の臭みの底で息をしてゐる。そしてやがてまた咽喉がかわいてやり切れなゝなると、俺は小便のふりかゝつた水を、（小便だらけな水を）がぶ〳〵鼻を鳴らし乍ら呑む。S君！ それを呑むより他に仕方がないのだ。——俺は小便のまぢつた水を呑んで、小便をたれて、また小便の水を呑んで、小便をたれて、やがて死ぬだらふ。蠅の奴等は臭氣を好んで、俺の枕元をねらつて、わさわさ街中總動員でたかつてくる。ぱあつと飛行機のやうに渦巻いて、俺の顔へ、鼻の穴へ、唇へ、眼尻へ、ぞよ〳〵ぞよ〳〵氣味が惡い。
だがどうしよう俺は體がきかない……

長崎から來た太田の手紙には右のやうな悲慘が血をぶちまけてゐた。私達十九人の××醫大病院第三内科の施療患者が、病院を叩き出されて（それは生命の失業だつた）から三月目だつた。それにしても其三月のうち私達十九人の運命は何と悲慘ではなかつたか。

病院を叩き出されるやいなや、血を月光にはね飛ばして汽車往生をしたものが三人。

遠い故郷へ歸る船の上で死んだ者が一人。

故郷で親に殺されたものが一人。

たつた三月のうち、新聞へ出た事實たけでも物凄かつた。そして更に、日本全國の隅々の故郷へ行きついたのか行きつかないのか、杳と消息の知れないものが十二人ある。

太田からの手紙は、私が最初に受取つた仲間のたよりであつた。死に切れない太田は、小便を呑んで、小便をたれて、小便の臭みの中で苦しんでゐるといふ。

苦しみと云へば私たちの苦しみは病院にゐる時から甚しかつた。十九人のうち私一人たけが脇尖カタルで、他は皆糖尿病であつたのであるが、彼等はみな――「無代で治してやる！」と云ふ甘言に釣り上げられて、全國各地の失業大衆の中からほぢくり出されて來たのである。そして糖尿病の徹底的研究によつて、金取り博士號をかち得ようとしてゐたブルヂヨア醫師の犧牲のマナ板に載せられたのである。が、善良な彼等は持つた病ひのおかげでかち得た「施療患者」と云ふ飯の種に、實にすい喜の泪をこぼしてゐた。

家にゐれば賣藥どころか飯も食えずに、暗から暗と地獄へ突き落される自分たちの運命が、輝く最高學府の大病院で、無代で病氣を快くして貰ふ事が出來る。一路全快へ！

十八人は天國をのぞんでゐた。

だが時代は資本の殺人的攻勢が公然たる暴刃をふるひ始めた一九二七年であつたので、「無代で人の病氣を治してやる」なんていふ心がけのブルヂヨアは一人もゐなかつた。

で、彼等十八人の糖尿病は、犬やモルモツトと同列な研究材料として、日に幾たびも血を搾られた。三日つゞけて絶食させられた。まづい試驗食に、ムシズを走らせた。そしてベーザルといふ物凄い機械で、ペッたり息をふさがれたり、強い注射を打ち込まれては、まつ青になる。卒倒する。――と云つた犧牲のめまいに打ち倒されてゐたのである。

が、いゝ氣な者の彼等は「無代でこんなに治して呉れる」事に悦び上つてゐた。今にからりと快くして呉れるにちがひない！　と漸々つくどんで行く眼で天國をのぞんでゐた。

尤も快くなつた者もあつた。がそれは一時的の事で、すぐ惡くさせられた。彼等は丁度生命を弄具にされてゐたのである。彼等は病氣をよくするため、いやその日その日をわづかに食つて行くために、いのちを削られてゐたのである。生命と取りかへつこに、彼等はわづかの物を食はされてゐた。云へば一つのそれは凄慘な職業だつた。

その凄慘な裏面を知つてゐるのは、施療患者のうち私一人だつた。私は鐘紡で腐らせられた脇尖を、治して貰ふ事を條件に施療患者となり醫師の手つだひ（施療患者苦しめの手つだひ）をしてゐたのであるから。

嗚呼！　私は幾百千回むざんと仲間の腕から血を搾つた事だらふ。幾度仲間の息をぺつたり塞いだ事だらふ。そして幾度強い注射を

ぶち込んでは、仲間を卒倒させた事だらふ。
私は仲間を苦しめる事を「飯の種」にしてゐた、と云つてよい。私は肺尖の病軀をふりもんで仲間を苦しめてゐた。仲間の血を搾るたび、私の血は疲勞に燃えた。仲間の息を塞ぐたび、私の息は切れた。私は病院から無代と云ふ賃銀を貰ひ乍ら、仲間のいのちを搾りつゝ同時に自分の息を削つてゐる悲慘な勞働者であつたのだ。仲間のいのちを搾る、それは死ぬ程嫌やだつた。が、この淒慘を敢てしなければ何處と食ふ處のない肺病の私だつたのである。私は身を殺し乍ら、仲間を殺しにかゝる。仲間は、施療患者の職分を忠實にいのちを搾らせる。血と血が殺し合をやつてゐた。

その上層で、醫師たちはどんどん博士論文を組上げてゐた。そして遂に嵐が來た。その年の五月上旬醫員三人が博士號をかち得ると、まる一年半搾り拔かれた施療患者十九人は、もういらない！ と病院を叩き出された。

「お前たちの病氣はどうしても治らない。出て吳れ。」といふ悲慘な診斷を下されて。

まさか私だけは病院に置いて吳れて、閑になつた體を治して吳れるものだ、と思つてゐたのに、やつぱり痩せ切れた糖尿病患者たちがしよんぼり病院の門を出て行く、その中に私も混らなければならなかつた。

思へば國家の誇り最高學府さへ、今では飽くなき搾取と屠殺の工場である。ブルヂョア搾取の牙城である。私は空に齒を嚙んだ。

そして周圍を見廻せば、何と悲慘な事だらふ。私も含めた十九人のこの人達は、皆かつては病氣故に失業して、更に施療患者からさへ失業したのである。不治の病ひをかゝえて何處へ行く。私達はたゞ茫然と五月の青空を失望の眼で見上るより他はなかつた。

そして氣の弱い女の患者は、故鄕に待つ貧乏な父母の身の上に泣き乍ら、三人心中の血を鐵路へ流して了つた。一番痩せてゐた北原は故鄕北海道へ渡る聯絡船の上で死んだ。長野の製絲場へ歸つて行つた三好は、「厄介者め！」と生みの親父に殺されたといふ。そして長崎の太田は、もう一ヶ月半もねたつきりで、小便の水を吞んで、小便をたれて、また小便を吞んで小便をたれて——ゐる悲慘にあるといふ。その他の十二人は杳と消息が解らない。夏のうん氣で死にはしないか。

私は故鄕上總の海べへ歸つたものゝ
「この肺病奴！ 出て行け。」「くたばれ。」「死ね！」と追ひまくる冷淡な家庭にゐたゝまれなく、又とぼとぼと海べりの道を十一里、××醫大のある××市へ歩いて行つた。そして泪を流して

「どうかもう一ぺん施療患者にして。」

と、その春私の手傳ひによつてP博士號を獲得した博士に賴んだが、

「駄目だ！ 君はもう肺がうんと惡くなつてバイキンが出るから、使ふ事は出來ない。」

と怒鳴られた。二度行つても駄目。三度も駄目。ほかの醫師に頼つても駄目だつた。私は知合の看護婦に金を借り、意を決して東京へ出て行つた。そしてその七月××醫大第三内科の教授から、東京帝大へ榮轉してゐたO博士の、市ケ谷驛前の堂々たる西洋館を訪ね、

「どうか東京帝大の方で施療患者にして下さい。」と泪を流した。が駄目！

「歸れ！」とブルヂョアは怒鳴りつけた。

「何を、人殺し奴が。」私ははぢめて反抗した。痩せた拳骨を叩きつけた。

勿論、肥つたブルヂョアにすぐとつつかめられて了つたが、私はぎゆうぎゆう目に逢ひ乍らも、ブルヂョアの腕の中で、

「人殺し奴！　人殺し奴！」と叫び乍らじたばた身をもんだ。ブルヂョアのアゴをひつかいた小突いた。骨だらけな頭を胸へぶつつけた。

と、ゲッ、と私の口から喀血の怒とうだつた。ブルヂョアの胸は眞赤に染まり、さつと顏蒼ざめさせて身を飛び退いた。私は吐き上げてくる吐血をペッペッと應接室中吐き散らかし、ブルヂョアの顏へもひつかけ乍ら、

「今に見やがれ！　今に見やがれ！」と叫んでゐた。血の唇で、――一九三〇・六・二八

小學教員の職業的癈疾

江藤三郎

紹介狀を先づ差し出して、實は、何か仕事を遣らせて頂きたいんですがあ……

雇はれなければ生きられない人間は、それでなくとも卑屈になるものだ。紹介狀を貰ふことからして容易なことではない。生活の苦しさをつぶさに申立てて、恐る恐る用件を切り出す、その用件といふのが、簡單な紹介狀一本である。天下の名士が總べて知己であるといふ風な口を利く人も、そんな時は急に話の幅を狹くして、中々、おいそれと云ふ具合にはいかんよ、が、まあ、とに角、書くだけは書いて上げよう。

そして、全く、そんなうまい具合には行かん世の中であつた。紹介狀は空手形だ。何よりも君の精神が氣に入つた、などゝ、煽てて

それ切りだ。煽てられたんでは腹が膨れない。

疲れて歸つて來ると、女はもう何とも云はなくなつた。年の暮れに留置所に入れられ、お正月を向ふでやつて、一月の末に世間に顏を出すと失業だ。それから仕事を搜しに何度出かけたか知れない。しかしその中、仕事のないのが當り前の樣に人も云ひ、自分もそんな氣がして來た。

家賃に恐れて、家は二ヶ月目毎位に變つた。女は家具の減ることと毀れることに腹を立てた。勿論、はじめから澤山はなかつた。

自分は小學校の教員であつた。

小學校教員といふ職業は、天職であるとか云ふ樣なブルジョアの欺瞞がある。が、こんな不景氣な智識階級の過剩時代は、矢つ張り職業戰線の勞働強制だ。市町村は財政難を教育費の故にして、一人でも減らそうとする。無産階級はブルジョア教化を排斥する。此處に、合理化が來た。すると教員淘汰には、よい口實が澤山出來て來た。その脅威を防ごうとした自分達が五六人集まつた。集まると集會である。しかも無屆集會である。無屆集會は檢束と來た。それから拘留だ。何しろ暮から正月で警察さんも面倒だつたらしい。

教員には法律的制肘がウサ〱ある。一般市民としての束縛の上に、準官吏待遇(?)と

しての官吏服務規定――これで二十年間校長を無事に勤め上げて、うまく行くと勳八等だ。それから小學校令、小學校令施行規則、文部省令、訓令、府縣令、市町村會議員との折衝、視學の印象、校長の氣持ち――そうして、その何處に觸れても、すぐに首だ。勝手に生活權を剝奪する都合のよいこんな條文がある。

――「第百二十二條(休職)又ハ第百二十六條(病氣退職)ノ事由ニ因ラスシテ休職又ハ退職ヲ命スル必要アリト認メタル時ハ府縣知事ハ文部大臣ノ指揮ヲ受ケ特別ノ處分ヲナスコトヲ得」

この絕對命令を拒ぐ團結の力もない。退職手當の要求も何もあつたものではない。そして、その必要ありと認めるのは、手近には校長視學、自分達の場合は警察當局であつた。認められたらそれ切りだ。一枚の辭令が三錢切手で送達されると萬事片が附くのである。樣々に陳辯して見たが何の役にも立たなかつた。そしてこれは、行政裁判にも受理されないのである。この階級裁判が、被壓迫層を勝利に導くなどとは、現在の日本では勿論考へられないのだ。

自分達は貧乏の故に師範學校に入學した。師範學校では、世間並な思想にも空氣にも觸させないで、成長盛りの十五六歲から二十一二歲までを教育する。兵營の規範を小さくした絕對專制に踏みにぢられて、侮蔑される小學校教員に作り上げる。そうしておいて、今、不用だからと無雜作に馘切りだ。とに角惡いから仕方がないと云ふ。惡いにもよいにも一升の桝に一升五合は這入らない。はみ出した五合の中に自分は居た。

だからと云つて食はないで生きて居られない。喪家の犬の如く彷徨する。赤い教員とレッテルを貼られた。其レッテルは全國各府縣の特高課に廻附されてゐた。教員以外に使ひ道のないのを自覺してゐる自分は、代用でもよいからと賴みまはつたが、前記の始末で、ニベもなくはねつけられた。

揚句、ある左翼の出版屋に自分は行つた。例の紹介狀を持つて。所が紹介狀をチラリと見てもフンとも何とも主人は云はなかつた。さんざん、何處へ行つても餘計な人間視されて、けんもほろゝの人情の世の中に、何故自分はそんな愚を重ねたか？ それは左翼の本屋さんなら少し位は好意を見せて呉れるかも知れない、しかもその紹介者が同じ教員の竹馬の友といふのであれば、と思つたからだ。

併し主人は、外つ方を向いて云ひ出した。

凡そ、世の中に、一番だらしのないのが、教員といふ人間だ。子供の前で威張つてゐるからと思つて、いゝ氣になり、反動教育の毒素をふりまいてゐる。酒はのむ、女は買ふ。現社會の職業人中で、花柳病の率は一番教員が高いそうだ。その癖生活權を衞るためだけの組合團結心も持たない。まあ土方からでもたゝき直して來るんだな。此の世の中の癈疾者だからねえ、この不景氣に、仕事なんてありませんよ。

取りつく島もない。すごすごと歸つて來た。歸つて來ると、夫婦喧嘩は米櫃から、といふ言葉通りになる。

――馬鹿野郎ッ――と、女の前だけでも威張つておきたかつた――こんな世の中が惡いんだ。そんなうまい具合に仕事が見つかるか。何しろこんな世の中だぞ。

すると、女も負けては居なかつた。

――世の中がよいか惡いかは分つてるよ。

が、世の中が惡いと我鳴つたつて、食つて行けなきやあ、仕方がないぢやあないか。一體どうする積りなのさ。

――どうするたつて、どうにも仕樣がないんだ。文句があるなら、お前が働けよ。子供がないのと、少し許り若いのが、もつけの幸ひだ。女給にでもなれ。

――勿論、なつてみせるわ。食ふためになら、何だつてやつてみせるわ。

翌日、女は出かけて行つた。女の方が、よつぼど底力があつた。男は新聞の廣告欄ばかり見て、日を暮した。

そこで、ひよいと發見した教育圖書出版會社に出かけた。主人は昔、自由教育の主唱者であつたと自分で云つた。だから理解ある樣な言葉つきをした。

――本府出の教員が欲しかつた――と、で話は案外、氣味惡いほどまとまつて、給料は月四十圓、あとは註文口數によつてきめる。仕事は、小學校に行つて、夏季練習帳その他の大口註文を取つて來ること。

翌日、小學校に出かけた。晝休みまで待たされた。多少知つてゐる教員を通じて校長に面會を申込むと、校長は給仕をもつて、斷つて來た。――お會ひすることは絕對出來ない。

それから、先刻の教員が、氣の毒さうな恐ろしさうな恰好で顏を出した。

――君達のことは、校長會で申合せがあるさうだ。とんでもないことをやつたんだねえ。お陰で僕も迷惑至極なんだよ。早く歸つて吳れないか。早く。ね、賴むよ。

閉め立てを食つた情ない氣持ちで、子供だつたら泣いてやりたい氣持ちで、歸つた。

女は、夜中の一時すぎに歸つて來た。寢てゐた所をたゝき起された。そして、今日はどうなの？　と來た。

――駄目さ。くだらん世の中だ。

――くだらん？　くだらんて、どう云ふわけなの。そんな考へでゐるから、女房を夜中まで働かしたりするんだ。學校の教員上りなんて、全く、くだらないものね。馬鹿ぞろひの組合みたいなもんだ。私は私で、勝手にするから、そう思つて頂戴。土方でもやつたらいゝぢやないか。プロレタリアらしくて。

土方か！　と思つた。

――だつて、土方だつて、矢つ張りあぶれて許り居るんだぞ。

――ほら、電車賃だけ上げとくわ。

そうなつては仕方がない。朝、口を開けて寢てゐる女に遠慮して床を出た。飯を一杯食つて出かけた。淀橋の奧に古い友達が、日雇勞働をやつてゐるのを知つてゐた。具合よく家に居た。

――働かして貰ふ所はないかね？

すると、そいつは、じろ〳〵と此方の身體を目で計量して、――どうもねえ、君等に向く樣な仕事はねえ。然し、ガスの穴ほりならないこともない。

――そいつに一つ連れて行つて吳れよ。嚊の奴が、承知しないんだ。

――何だ、そんなら嚊に働かせるんだよ。女なら何とか口はあらあな、ハヽツ。

――だが、そいつはどうも……と云つて女が、カフェーの女給をやつてるんだとは云へなかつた。

とに角、親方に紹介だけはしてやる、あとのことは知ら無え、と云つて麻布まで出かけた。親方と云ふのは、汚い色にデップリした男だ。その男が敷島をふかして、

——何をやつたね？　と聞いた。
——學校の教員をやつてたんだがあ……
——學校の教員？——と、頓狂な聲で面を見て——とても駄目だね。生れ落ちるとからの勞働者でさへ、一週間に一ぺんもあれば上等なんだよ。——と笑ひもしなかつた。

知識階級の失業登錄には、恐ろしい程集まつて來た。その中にまぢつて、履歴書を二通書いて出しておいた。全體から見ると自分の失業はまだ初歩なんださうだ。が、何しろ未だに何とも云つて來ない。そして北海道の親戚に問ひ合せた手紙では、北海道もえらい不景氣だから、おいそれと仕事はあるまい。まあ履歴書だけでも送つて見ろ、と、氣休めみたいなことを云つて來た。

女が飲んだくれて夜おそく歸るなんて、男に取つては何とも云へない氣持ちだ。

東京よ焼野原となれ

——自由勞働者體驗記——

村田辨次郎

「就職難と言ふのは、卒業後洋服を着んとするからである袢天を着る氣になれば譯無く解決する」……之は今年の四月就職難で世間が騷がしい時某私立大學の教授が云つたと俺は記憶して居る。成程彼の言ふ通り袢天を着て就職難が解決するなら今日この頃失業の爲猫イラズや鐵道線路の御厄介になる物好きの連中は無い筈で有る。

失業と云ふ言葉は今迄は全くサラーリマンか工場勞働者の専用語と成つて居た。然し現在では、社會の最下等たる俺達自由勞働者に迄押し擴げられて來た。

インテリがスコップを握つたとブルヂョア新聞には行々しく出て失業宣傳に務めて居るが、俺達土方がスコップを握る事が出來無い世の中を先づ俺達は考へなければならない。

俺が失業したのは何でも去年の正月だ。理由は至つて簡單だ。復興工事が終つて了つた事に有る。

俺等には今迄一定した職場は無い、殆んど長くて三ケ月位の工事を次から次へと轉々とするのだから、工場勞働者の如く失業時代を判つきりと區別する事は困難で有るが勞力を賣つて生活して居る人間が勞力の賣捌口が無くなつた時俺等は俺等の失業時代と呼ぶ。

「オイ、明日から、工事の見付かる間、當分休みだ」

此の言葉は工場の解雇通知書に等しい、勿論其の時勞賃以外の金は一文だつて呉れないし、土方道德で、あたり前と成つて居るから別に文句も言へない。

俺等は殆んど復興工事を轉々として居たので、此んな工事期間の失職には別に騷ぐ程の必要を認めなかつた。然し帝都は復興した。バラックとドブ道がビルヂングと三十間道路で都を飾つた時、都にはもうアスファルトの煙が勞働者の汗と土と塵埃のにほひは必要としなく成つたのだ。俺が氣付いた時、俺は俺の汗の染み込んだアスファルトの道路の上を

とぼ〳〵と勞力を金に代るべく歩んで居た。

「東京市救濟事業」

此の文字を新聞で讀んだ時、無智な俺はすつかり、此の僞瞞的な文字に魅せられて、早速失業登錄に失業の極印を押して來たので有る。

十一月三日

半ヶ年間のパンの保證を得たも同然と喜びの餘り未だ薄暗い四時に飛び起きて、初發の割引電車に意氣よう〳〵と、××職業紹介所に俺は飛んだ。太陽も未だ顏を出さぬ、五時半と云ふに、紹介所の前の廣場は俺等の兄弟で一杯だつた。それが淺草の活動街の割引前の如く、一列に並んで時間の來るのを待つて居た。俺は悲慘な氣持ちに就職喜びなどは何處へか消へて、失業者獨特の焦々しい氣持に襲はれ乍ら先づ小さく成つて列の末尾へついた。列は時間の經るに從つて次から次へと續いた。さながら葬式行列の樣に默々と。

六時半扉が開いて紹介切符を持つた宿直員が現はれた。俺はバンドに縛り付いた寫眞入りの勞働手帳をしつかりと握り直した。一人二人宿直員の姿が一歩〳〵進むと前方より列は亂れ始めた、十人二十人突如列の四分の一位迄來た時前で誰か怒鳴つた。がや〳〵と押問答が始まつた。列が後方よりはら〳〵崩れ始めた。俺は、何事ならんと、一團の後から喧燥を確かめるべく押しかけた。俺が近付いた時宿直人の手には紙片は無かつた。

「俺は知らない」

彼の言葉がこう俺の耳に這込つたと思ふと顏は扉の中に消へた。ドンと誰れか扉をけつた。一段と喋しい聲が朗かな朝の空氣に融けた。皆はしばらく紹介所の門を離れなかつた。然し扉は再び開かなかつた。二百人の失業に五十枚の紹介切符……然し勞働手帖には、東京市失業者救濟事業と麗々しく書いてあつた。俺は失望と落膽に泣き度い樣な氣持で職場へ出掛ける勞働者と摺れ違ひ乍ら歸つた。

翌日は駄目だと知り乍ら、外に賴る所無い俺だ。「よし先着順なら」と今度は三時に起きて途中巡公に「誰何」を受け乍ら、朝食代を握つて小走しりに五時前着いた。だが、驚く勿れ、俺等の兄弟はもう廿人もたき火の傍で居眠り乍ら待つて居るのだ。

「今日一日だけ働かなくては……嫁や子供がひ干しに成ります」

煙をふせぎ乍ら人の好さ相な老人は俺に訴へる樣に言つた。殆んど夜明しする人が毎夜十人位有るとの話だつた。

五十番以上と言ふ事は俺を安心さした。だが此の安心はもの丶見事引つくり返された。

「今日より公平に手帖番號順に」

宿直員の言葉は俺の聽覺を疑はした。俺の目を疑つた。俺の手帖には一〇二二番と太く書かれて有る。

「默れ」

興奮の餘り思はず前に出て怒鳴らうとしただが俺は出ようとしてぎよつとして又引退つた。宿直員の前後にはサーベルが朝日に輝いて居るではないか。……每日五十人づ丶千人迄は何日掛る……每日の電車賃は俺の働く日迄に幾等必要か……俺は考へ出すと言ひ知れない憤怒にむら〳〵と沸き起つた……「畜生〳〵」……自分に譯の分らぬ事を云ひ乍ら勞働手帖をずた〳〵に引破つて前のドブ河にた丶き込んだ。……「正月が來る」……俺は言ひ知れぬ不安のどん底へ突落された。救濟事業と言ふ文字に不安は除かれて居た。だが賴みの綱は切れたのだ。生活不安の念はもく

〳〵と俺を襲つた。焦々する氣持に饑も疲勞も忘て果て、十錢のパンをかじり乍ら次から次へと紹介所の門をくゞつた。芝橋、芝浦、神田、上野、江戶橋、淺草。その姿は恐らく狂人の樣であつたであろう。俺が本當の身分を感じたのは吾妻橋の橋上だつた。「勞力以外に使ひ道の無い俺だ仕方が無い」……自分で自分を嘲ひ乍ら夢遊病者の樣にフラ〳〵と歸つた。

下の親父は變な顏をして居た、部屋代がたまつて居る故だ、炭は小炭のみだつた、茶を沸す勇氣さへ失つて居た。前日の冷飯に朝のお茶の殘りを掛けてがさ〳〵流し込むと、其儘横に成つた。

次は、請負師の家を廻つた。之も無駄だ。アスファルトを撫でたコテもスコップも雨に打たれた道具箱の中で錆を待つて居るんだ。

其夜溺るゝ者が藁摑むの譬へ、貧農の鄕里へ「餓死しさうです」と長い〳〵手紙を書いた。

翌日からは自棄も手傳だつて終日家に居た。そして夜に成ると友達をたかり步いた。五十錢、一圓と、自分で自分が分らなくなつたのだ。「何うにか成る」之は俺の其の時の氣持だつた。

一ケ月ばかりすると田舍から繰返〳〵し困窮を訴へた後廿圓送つて來た。其の頃は失業焦燥時代も過ぎて幾分周圍を考へる餘裕が有つた。先づ六圓間代を拂つて米二斗と味噌醬油を仕込んだ。炭は二俵だ。そして小使は一切友人を借り步く事に決定した、然し之とて永く續かなかつた。年末頃には俺の顏を見れば皆豫防線を張る樣に成つたから。

正月が來た。然し俺等には盆も正月も無い。三日の間如何にして失業問題を解決するかをマルクス主義から學んで居た。

「畜生もう一度强震に襲はれろ、東京は再び燒けの原と化せ、破壞された東京こそが屋外勞働者にパンを保證するんだ」。

同じ境遇に有るSは正月二日の日記に以上の如く記して居た。

一月は七日だけ職にあり付いた、二月は十二日三月十八日、五月十二日、六月十一日。

以上は七月迄働いた日數だ。之は請負工事の方で有る。賃銀は五十七圓八十錢得て居る。一ケ月にすれば平均九圓。

だが如何に土方で獨身者でも一ケ月九圓では生活出來ない。以上の外俺等の階級獨特のやりくりをやつた左の通りだ。

一六銀行(質屋)十圓、借金廿三圓、書籍賣金三圓、雜入三十圓　計六十六圓

右の内一六銀行は元々勞働者に氣の利いた品物の有る筈は無い。單物を六月に持參する仕末、借金は友人から三圓、五圓とたかつた。之が爲二人ばかり絕交された。書籍はマルクス主義講座三冊の外史的唯物論など同傾の借り本迄十五冊持つてつて三圓五十錢、雜入は引越し手傳ひ、又は運搬などで得たのだ。此の外、川傍に行つて蟹を捕へて來て一錢二錢で子供に賣つて步いた事も有るが、之は失業者の親が子供に一錢與へる氣持を考へると二日とは續かなかつた。外に田舍から十圓送つて呉れた。失業期間八ケ月、俺は梅雨を前に何時迄續くか知れない、失業問題を、如何に解決するかを考へて居る。梅雨はカラ梅雨らしい。雨に惱んだ自由勞働者が今は天氣にも惱んで居るのだ。產業の合理化に工場を追はれた勞働者は街頭に進出して僅かに殘された俺達の職を奪つて居るではないか。

見ろ帝都は復興されて俺等が掘つて居たハ

ンマアもシヤベルものみももう用事は無く成つたんだ。

俺等には仕事が無いんだ。もう賃草も借金の可能性も、古本も無んだ、米も無く成る、味噌も醬油も。

爲政者達よブルヂヨア御用學者達よ

俺等は仕事が無いんだ。喰へ無いんだ。役にも立ゝない軍縮問題や、組合法案などゝ資本家の手先と成つて騷ぐより失業問題を一日も早く解決しろ。明日から腹の膨れる方法でも考へ出して見れ。空腹は來年迄持たねへんだ。

俺等は餓死に迫られて居るんだ。「餓死」か、さもなくば××より外明日から俺等は道がねえんだ。……

だが、失業問題は俺等が解決する。それは失業問題の解決なぞは勞働者農民の黨以外には解決出來ない事を失業體驗で俺等は知つたのだ。

一九三〇・七・四

町を彷徨する

首藤嘉子

朗らかな天氣。

電車に乘る。朝の七時過ぎ。ラツシユ・アワーの電車に動搖られてしみ〴〵思ふ事は、この車中の人々は殆んど總てサラリーマンで、一つ一つの椅子を與へられているといふ事。

停留場に立つている人々の大半が「仕事」を持つてゐて、一日の勤めを果たしに行く人々である事。白熱の街頭を行くサラリーマンの何と元氣のない姿よ。が、この人々はパンに不自由をしない。アメリカ風の紳士、銘仙姿のビジネスガール――。私はこれらの有職者と共に、大江橋の日本銀行の前で下車する。

さて、と、私は今先見た朝刊の三行案内を頭に浮び出してみるのだ。

M―運動具店は――？

まゝよ、此の紳士、淑女の後に跟いて、我もパンにありつく群の――と大きな顏をして歩いて行く事にしやう。

淀屋橋を渡ると、この群は取り澄まして一つの角を曲つて行く。そこで一人ぼつちになつた私は、いよ〳〵失業者の悲哀だ。履歴書をしつかり持つて――今日こそ職を得なければ、親子二人生きるか死ぬかの瀬戸際だ。面談の時には明るい顏をして活々返事するに限る。昨日のやうにべそをかいたりして澁い顏付を見せつけられては――。

M―運動具店――こゝだ。だけど鐵の扉がまだ下りてゐる。明かないかなア。明日からこの昇降口を出入りする身になればいゝが。少しの間、この邊を歩いて待つ事にしやう。

商店街の狹い道をうなだれて、こつ〳〵歩きながら、粥腹の頼りなさを感じる。

浮んでくるのは又あの憎らしい課長の顏だ。

目の下が紫色になつた、色の黒い――骨で固まつたやうな少さな男――あの男の「止めさしてしまへ！」の一言が人間の生活を左右

してしまふなんて●

果たして人間は人間の運命を隨意に側り上げる。父が失職して二ケ月目に父々娘の失職だ。この四年間、私共親子に一日として笑ひ顏を向けた日があつたらうか。四年の間に五つの勤め先を變へたといへば、五つの首を裏書してゐる。

六十を過ぎた父が働くといふのが第一間違つているらしい。門番が一ヶ月、藥の行商が二十二日、保險勸誘員が四日間、それから、オヤマ病院の炊事掛りに雇はれて朝も晩も菜つぱを切るのが三ケ月、この給料は二十五圓だつたが、郊外にある爲に、電車賃が十四五圓も要るのでこちらから止めた。最後が松島遊廓のT樓の帳場といふ奴。

こゝは朝の九時に家を出て朝方の五時に歸へつてくる。「おい〳〵登美、とみこう」と夜半のしゞまを破つて二階の私を外から喚び起すのだからたまらない。私は梯子段を跫音盜んで下りてゆく。安普請の梯子段が一寸でギイと鳴ると、下に枕を並べてゐる大工夫婦「しいつ、しいつ」とまるで鼠でも追ひ拂ふやうに舌打ちする。

此の女郎屋に二十五日勤め、さて給料の日となつて、そこの內儀さんが、二十圓の紙包みを出して父にいふ事には、「あんさんは元お役人はんやいふ事やよつてに、どうもこの家には向けへんわ。第一固苦しうて陰氣くさい。目をしよぼ〳〵する其の癖がいやで〳〵たまらんねん。それから娼妓と一緒に御飯をたべん。そやよつてん、もう明日から來て貰ふ事ことわりまつさ」

途方に暮れた父は、机の上にあつた十圓札を掴み、「借用證書」を置いて歸へつてきた。

その晩である。この內儀は數人のあらくれ男を引具して、私共の四疊半に現はれ、「警察へつれてゆく」と大聲で罵り出したのだ。別莊を三つも持ち、衣裳箱を二つもあるといふ此の大金持ちの女が……十圓位ひの金が何だ。私達は米の飯も食へず部屋代だつて半年分――四十八圓も溜まつているのじやないか。借金するにも人がない。着る物がない。食べる物がない。金――金――金！

今、父は切端詰まつて夜なき饂飩を賣つて歩く考へを凝らしてゐる。だがその十圓の資金が何處から出るといふのだ。

私は櫻橋の大きなビルに勤めてゐた。二十人一度に馘きりがあつた。女は大丈夫だといつてゐたのを、日頃から齒の好かなかつた(いやに取り澄まして人を顎で使ふものだから私はこんな厭やな人間はないと考へてゐた)課長が、小使室の裏で私が庶務の竹内さんと立ち話をやつてゐるのを見付けたといつて(私は馘になつた人の事を聞いてゐたのだ)不義は會社の法度なり！　で、女をやめさしちまへ！　その翌日「都合により今後出社に及ばす……」の白封筒だ。父が何度足を運んで退職手當をと拜み倒したつて、一圓の惠みさへありやしない。ヘッだ。あゝ私共は完全にこの世の落伍者になつたのであらうか。

オヤ、この巨大な建物は大阪一を誇るS――ビルだ。こゝに働ける何千といふ人――何て幸運な……見て下さい。こゝに一人失業者がゐる。パンの他には何の望みも失つた十九の小娘が――働きたい、どうかして働きたい。生きて行きたい。

傍を過ぎてゆく人々よ、どうしてあなた方はそんなにシヤンとした粧(なり)で、美しい洋服か傾けてゐるんです？　あなたをそうする金

は何處からどうして入つた？　こんな大きな家、裝飾品、自動車――一體これは何のために。地震よ、火事よ、大洪水よ、皆、皆、この世のものが一文なしの貧乏になつちまへ！

何故私だけがこんなに…泣いても笑つても、懷にある六十三錢が全財産だ。

引き返へしてみると、戸が開いてゐる、何だか入つていくのも、人にものを言ふのもいやになつちやつた。だが――六十三錢。神よ。

四階の會議室、うんざりする。狹い廊下一杯女の渦だ。二十人や三十人所ではない。

こゝも駄目――と直感がそう響く。すると反撥的にこゝを出てからの計畫だ。あゝ何處か私一人を雇つてくれる所はないかなア。暑い。もう二時間近くも立つてゐるのだ。ふえる、ふえる、娘の子。斷髮、耳出し、挑割れ、七三、女優髷、どれもこれもむつゝりして、あらぬ方向へ目をやつてゐる。灰色の事務服をきた女事務員が用もないのに、この人波を分けて歩き廻る。優越感に充ちた、何だこの蛆虫共が――といふ目付きで。私も一度あんな目をしてみたい。

「あそこの首に一杯白粉をつけた女――あいつ今日で三日も續けて來てるねんし」

これは、店員らしい少女の立ち話。灰色の事務服さん。失業者は固守〳〵しいくせに、涙もろいものですよ。

窓から見える蒼空。白い雲、市廳舍の時計が十二時と二十分過ぎ。腹の蟲がグーグーなつて、膝がガクン〳〵と折れさうだ。まつ白い雲、あれにのつて何處か知らない外の國へ行つちまひたい。又今晩も履歴書を書いて、明日も一日中、市内を驅り廻はつて、又その次の日も――、わあれは海の子、白波の…唄ひ出してやりたくなつた。わあれは海の子…側の目鏡をかけて黑袷の女が、今さつきから新聞記事を指して、この次は、B女學校の女事務員の募集か、心齋橋のカフェーかへ行つてみると、しつこく話しかける。

女給か――女給もいゝなア。一その事女給になつて、金持の爺さんから、たんまり金をせしめてやらうか。金が欲しい、戀も男も何のそのだ。あゝ金！　お金を儲けて一つお父さんと二人の少さな家を借りて、お父さんに好物の饅頭を毎日たべさして…樂な隱居にさして上げてから…事務員になつて二十五圓の給料もらつてお父さんと二人。どうして一ト月やつていけるの？

貞操も何もあるものか。金持ちの爺さんよ。妾か、私娼か、ダンサーか。この處女には黴が生えてゐる。――何だか氣が變になりさうだ。

さあ、私の番だ。緊張して何十人の同性の目を潜つて試驗室へ這入つて行く。若い男が一人、窓に脊を向けてこちらを向いてゐる。

「女學校をいつ出ました？」

もし〳〵あなた、私をお嫁さんに貰つてくれる氣はありませんか。氣味の惡い程心が暗くなつてくる。

「そうすると、お母さんは？」

訊かないで下さい。泣けてくる、泣けて……

「死にましたの、五年前に」

「では考査の上で」

この冷たい一言で私は「失望」を閃光のやうに感じる。足がガタ〳〵慄え出す。扉を押して出て來た私に集まる目、目、目。さようなら二度と來ないこの廊下よ。エレベーターで地の底へ曳摺りこまれさうな儚ぎ切つた氣持ちになつて外へ出る。

ぱつと目に沁む八月の空。私は、私は一體どうなるんだ？ 目眩ゆい日光の下を下駄重く歩いて行く。北濱にもう一軒行く所があつたつけ、もう足も向かない程の悄氣方だ。元氣を出して…ウンと胸を張つて…希望を失はないで…咽喉がひりつく。視力が薄れて行きさうな心細さ。

今日で何日こうして口を見付けて歩いてゐるかを算へてみる。五日と、十日と、十一、十二、あつい…お父さんはあの暗い部屋で素裸でねてゐるだらうか――十日と、九日、あゝ頭がクラ〳〵つとする。十日…もう何が何だか分らない。つと目を上げると、N—新聞社、こゝだつた。少さい普通の住家じやないか。格子戸から三四人、男がハダカで口に歯刷毛くわへて外を眺めてゐる。入らうか止めやうか…私はくるりと向きを變へ、さつさと逃れるやうに走り出した。曲り角に來た時、後髪を曳かれる心殘りから立ち駐まつた。あそこで働いて二十圓貰へたら…二十圓…米も買へるし、それから…あゝ二十圓の給料にありつけるやうだつたら…。

或る日のインテリ失業者

江崎秀夫

某月某日。都新聞社といふのに出掛ける。昨日手帳に控へて置いたのだが、昨日は雨に遭つて途中で引返した。それを之から更に訪問しやうと云ふのである。廣告に指定してある備後町筋を三度往復して、辛つと目的の看板が目に付く。甚い破屋だ。軒は朽ち壁は崩れペンキは色褪せてゐる。この造作で文撰竝に解版見習及給仕各數名採用といふのだからいゝもの凄い。出足が澁るのを、思ひ切つて案内を乞ふ。正面の襖（新聞社の玄關に襖があるのだ！）が開くと、うす汚い建物とは全く不調和な美しい娘が顔を出して、それが慇懃に三つ指を突いた。來意を通ずると、その娘が「昨日、仰山人が見えはりましてな。お氣の毒ですがもう皆採用濟みになりましたのや」と眞實氣の毒さうな顔をして言ふ。生存競爭の大都會相が疲れた腦裏にぴしやりと叩き込まれる。一つの新聞廣告を取圍む無數の萎びた手と青白い顔が浮ぶ。昨日の廣告を當にして今頃のこ〳〵と出掛けた自分の鈍感にペッと唾を吐いて、左様ならとも言はずに其處を出る。新聞廣告は小規模な現代資本制度の縮圖だと悟る。如何に夥しい個性の喪失者が、如何に殘酷な搾取制度の下にその生血を吸ひ取られる爲に、蹌踉と足を運んでゐる事だらう！ 今にこの煤煙の大都會が、侮辱された「生ける屍」群の腹の底から絞り出す苦悶の呻き聲でその心臟を破裂させる時期が來るだらう。急に身の周圍に無數の目に見えぬ敵を感ずると、足は急テンポを以て心齋橋筋に走く。忙しく交す歩調の間から、先刻の美しい娘がちらりと顔を覗かせる。あの娘も一片のパン

の爲に個性を失くして、それであの不調和な顔や容姿をうす汚い新聞社の一隅に晒してゐるのだらう。恐らく昨日迄は自分達と同じ運命に泣いてゐた不幸な仲間の一人だつたのかも知れない。あんな娘が魂に個性を吹き込まれたら、眞に目覺ましい女鬪士とかゞ出來上るのだらう。その娘の顔がデイ、クエンシイ作「オピアム、イータア」の中に出て來る薄幸の孤兒アンの顔と結び付いた頃、現實は私の見窶しい姿を心齊橋キクヤ蓄音器店の前に立たせる。此處にも個性を失くした二人の先客が居つて、私の這入つて來た姿を見るときらり警戒の目を光らせた。二人とも蒼い面だ。若者らしい生氣は身體の何處にも見當らぬ。ロイド眼鏡に手招きされて恭しく履歴書を呈出する。軈て、簡單な店員採用試驗が始まる。

「今日迄何をして居やはつた？」

「故郷で失職して、百姓をして居りました」

「その方がようおまんがな。都では何年居やはつてもえゝ仕事はおまへんぜ」

「田舍に居たつて仕方がありません」

「これ丈の學歴があつたら大したもんやがな田舍で中等教員でも出來まんがな」

「學歴の事なら決して御心配に及びません。少しも未練はないのですから……」

「此店は外交を賴むのですよつてな。外交は辛ふおまつせ」

「外交でも何でも構ひません。如何な辛い事でも辛抱します」

「貴方も餘つ程物好きやな。市内に誰か保證人がありまつか？」

「玉造に遠緣に當る人が居ります」

「とに角此履歴書は當方に預つて置きます。返事は二、三日待つて貰ひまつさ」とロイド氏は私の履歴書を無造作に摑むと、傍の手文庫の中にぽんと投り込んだ。之は少し見込があるわいと思つたので、急に元氣附いて

「此店に仕込ませてさへ頂いたら、何あに、最初の二三ケ月は無月給でゝも働きます」と正直な處迄曝け出して仕舞ふ。三〇年型の失業者は個性を失くした丈では充分でない。其を何等かの方法で表示する必要がある。ロイド氏に百パーセントの愛嬌と九十度の最敬禮を施して、人波の街路に躍り出る、幾らか明るくなつた心が私の足を道頓堀、千日前の盛り場へ誘ふ。安堵した故か急に腹が空く。うを伊の前で蒲燒の匂を嗅ぐと、足がぴつたり釘附けになつて仕舞ふ。樂天地では五月信子が半額の優待券で廿五錢だ。出し物が煽情的な——「娘義太夫紋喜代殺し。」私は五十錢玉を一つしつかと指の間に握り緊めて、うを伊と樂天地との間を何回となく往復する。二日間何も飯らしいものは口にせないでも、活動の看板が妙に目を惹くから不思議だ。空腹は腹の方で慣つ子になつて、それで新しい慾望が感興を唆るのかも知れない。結局どちらの慾望も滿足させないで、土佐堀の大瀧さんの家迄徒歩る事にする。大瀧さんと茲に如何にも心易さうに呼んではゐるが、大瀧さんと私とは別に一面識もある間柄ではない。廣告主に對する失職者の微妙な心理が、未知の廣告主を勝手に氏にしたりさんにしたりする。廿五六、中卒以上、眞面目ニ働ク方——何といふ自分には取つて付けの註文だらう！　明日からパンにあり付けるといふ希望が疲れた足を輕く、空いた腹を滿してくれる。途中で

塵箱を漁る男に逢つた。一つの塵箱では窗に緑な谷つけたのを拾ふと、素早く背中に荷ふた袋の中に蔵つた。他の塵箱では南瓜の腐つたのを拾つて、むしや／＼と口に頬張つた或る町ではぼろを纏ふた老人が稲荷大明神の旗を擔いで狂人の様に喚いてゐた。又、實際この老人は本當の狂人でもあつた。ともすれば襲ひ掛る憂欝を明るい希望と初夏の微風が吹き拂つてくれる。私は千日前から土佐堀迄の小一里の道程を何回大瀧大瀧と大瀧さんの名を懐しさうに反芻し續けた事だらう！　だがその結果を茲に記すには、私の心は餘りに重く筆は進まない。一間の間口に茶の暖簾が一杯に張り詰めてあつた。その暖簾の中央に「質」といふ大きな文字が眞白く浮き出してゐやうといふ奴だ。私は大瀧さんの家の前を三度素通りした丈で、流石に中に這入る事は斷念した。質屋に中卒以上――いや、私は疲れて笑へもせなかつた。然し、私はその時無駄足を運んだ一里の道程を左程辛いとは思はなかつた。私が辛く悲しく思つた原因はもつと他にあつた。其時遠い道程を午下りの太陽に照されて埃りと人込みの中を潜り抜けて來た私は、土佐堀に着いた時には流石に足が一歩も前に出ない程疲勞してゐた。この上無駄足を費す勇氣も出なかつたので、最寄りの派出所に立寄つて大瀧さんの住所を尋ねて見た所内には若い巡査と年取つた巡査とがゐた。

「大瀧？」と若い方の巡査が、私の風體をじろ／＼見乍ら言つた。「大瀧と云へば聞いた様な名だが、君は一體この邊を搜して見たかね？」

「何分すつかり疲れて居りますので、此方に最初に向つたのですが……」

「此所は案内所とは違ふからな。些とは自分で搜してから來給え。」と噛んで吐き棄てる様に言つたが、それでも私が今にも泣き出しさうな顔で出て行く後姿を見ると幾分同情したものか。

「その大瀧といふ家なら、確か西の方角にあつたよ」と附け加へた。そして年取つた方の巡査と顔を見合せると、何が可笑いのか二人聲を合せてゐはゝゝと笑つた。成程、大瀧さんの家はあつた。西も東もない、派出所とはつい目と鼻の先の四軒目にあつた。私は先刻大きな聲で笑つた若い巡査の顔と、「大瀧？」と仔細らしく首を傾けた横柄な態度を思ひ出すと急にかつとなつて、目の前が一時に眞暗くなる様な憤怒を覺えた。思はず固く握り緊めた拳がぶる／＼と震へてゐるのを見ると、不覺にも熱いたまがぐつと咽喉元まで込み上げて來た。だが――まあ、よい。あの若い巡査も今朝から幾人となく訪ねて來た生氣のない若者の顔によい加減食傷して、偶々、第何十何人目かに訪ねて來た私に思はず忠實な職務の遂行を怠つたといふ譯だらう。

これで今朝「毎日案内」欄から書き抜いて來た分は終つた。中之島迄引返すと朝日新聞社の時計塔が緩く四時を指してゐる。次手に、朝日「案内」欄の方も見てやれと思ひ付く。流石にこの時刻では「よろず案内欄」の前に立つ青白い顔も少い。日に焼けた詰襟の小倉服が一人熱心に廣告欄に見入つて居たが、私の近付く姿を見ると鋭い一瞥を與へて無言で其處を立去つた。この一ケ年、新聞は私に取つて廣告丈が必要となつた。講談と三面記事丈が必

要だつた時代があつた事を思ふと、不思議な氣がする。外勤採用——日本生命大阪支店、といふのを一つ手帖に書込む。ふと、キクヤといふ文字が目に付く。おやと思つて見直す店員採用男廿二以上通勤住込可市内保證人要面談即決——キクヤ蓄音器店。だあ！　之で日本生命を訪問する勇氣も一時に拔けて仕舞ふ。かうなると人間もから意氣地がなくなる。新聞社の客溜りに棒の樣な身體を投げ出すと、周圍の雜沓が一時に遠のいて、營業記者の忙しく立働く姿のみが夢の樣にぼんやり疲れた網膜に映る。「プライベイト、ペーパア」の作者が「時は金なり」と云へば格言だが、「金は時なり」と云へば眞理になると言つたが、成程と思ふ。今日の自分にも少し金錢の餘裕があつたなら今日の日程を一時間で濟して後の時間は溫泉にでも浸つて、緩り明日の計畫を廻す事が出來たらう。新聞社の椅子にぴつたり身體をすり付けて、出來る丈腹の減らない樣にする。日の落ちるのを待つて今宮の共同宿泊所までもの憶い四肢を曳摺る。其宿では同志のHが私の歸るのを待つてゐて、その暖い手で一日世間の無情に冷えた私の心をやんわり抱いてくれる。私がパンを失つた代償として得た、この世でたつた一つの人間味の溢れた暖い手だ。彼は近頃ではすつかり新聞廣告の方を見限つて、專ら口入屋を賴つて財卅萬の未亡人や丙午生れの不器量な持參金附を狙つて、一擧に金的を射落さうと焦心してゐる。この大膽な金的の射手は、同時に、同じ口入屋に賴つて別莊の番人や、書生、下男、三助の類まで漁り盡してゐる哀むべき小膽なインテリ失業者でもある。かうした矛盾のサイコロヂイは現代のインテリ失業者の殆ど全部が持つてゐる處であつて、之を不思議に思ふのは金と時間が有り餘つて散歩をせねば三度の「飯が甘くない」有閑階級の手合位のものだ。每日足を棒にして、五十錢玉が一つ宛消えて行く。今五日もすれば私の全財產がなくなつて仕舞ふ。如何やら水も底の見える所迄流れた樣だ。角力で云へば、正に土俵際迄押詰められた形だ。運命の方でうんと力むか私の方で呼吸を拔くかすれば私は際限もなく「轉る石」となつて乞食か立ん坊の境遇迄一直線に轉つて行くだらう。

選外佳作

僕は現實を見ろ！	渦佐　一男
土地飢饉	室町　重宜
ルンペン記	長濱　一輝
除隊後の失業難	柴田　正治
失業體驗錄	山田　哲夫
自由勞働者失業日記	岡山　定盛
失　業	川島　康民
失業體驗錄	島津　新
夜露を吸ふ	加藤　由藏
僧侶の失業	高尾　凡三
生活插話	戸谷　龍
失業體驗記	玉白　清
失業序曲	木野　久夫
失業體驗記	野村　秀雄
餌のない魚釣り	正木　文雄
失業苦から組合へ	渡部　士郎
失業體驗記	三宅　神洲
曲馬團・露店・騙まされる	齋藤　源次
ある高文資格者	大槻　弘道
子を殺して	戸倉　一樹
白き手の失業日記	曾我　健

西洋好色一代男

丸木砂土

「一代男」

性欲生活史として見た日本文學は、世界で最香芬の稀薄なものかも知れない。その中にあつて、西鶴の「好色一代男」のある事は、確に日本の奇蹟である。僕は日本文學として歐洲人に見せたいものは、西鶴以外にないとさへ思つてゐる。

「一代男」の主人公世之介は、西鶴の記す處によれば、七歳から五十四歳に渉つて女を犯してゐる。その誘惑した女の數は三千七百四十二人だとある。この數は芥川龍之介の解釋によれば、決して世之介が肉體的に犯した女人すべてゞなく、感覺的に享樂した女をも數へたものだとしてゐる。けれどもこれは芥川龍之介の弱々しい日本人らしい考へであつて、世之介が强靱無比なる一代男として、之丈の女を犯しても不思議はない。現に世之介と時代を同じくし、齢を同じくして、その一生を女の爲に、女を誘惑する爲に倒盡した男が西洋にゐる。伊太利ヱネチアの人ヤコブ・カザノヴである。

世之介が少女に戯れ、人妻を誘ひ、賣女に現をぬかして六十歳の一生を恋にし、更に女護島に船出した精力に比べては、さすがの西洋一代男も之には敵はない。唯世之介がカザノヴに敵はないのは、その十六巻に渉る「思ひ出」の著作である。世之介が抓みどりの女を見せんと、歡び勇んで船出をした時分に、カザノヴはボヘミアの寂しい田舎の館で、この尨大な追憶記を書いてゐたのである。その點に於いて西鶴の「一代男」はカザノヴに及ばない。けれどもその質に於ては、世之介とカザノヴは極めてよく相似てゐる。西鶴が世之介をして、あらゆる女を手に入れしめた好色的虚無精神は、遍に歐洲十八世紀に於て、この

カザノヴが持つてゐたものと少しも變りがない。僕はどうして之程よく相似た人物が、殆ど同時代に東西に現れて、好色三昧に一生を送つたかを思ふと、全く不思議に思はれる位だ。女を犯す事惡魔の如きドン・フアンが日本に生れるのは、甚だ覺束ない。昔吉井勇氏は戲曲「世之介」一篇を書いて自由劇場で演じ、世之介を以てドン・フアンと對比されたが、ドン・フアンと世之介とは本質的に違つてゐる。ドン・フアンは地獄に墜ちる人であるが、世之介は女護島に遠征する男である。カザノヴも亦決して地獄に墜ちる人ではない。女護島の代りには、ヸヌスの山にでも分け入る人である。

世之介の犯した女三千餘人に對して、カザノヴは何人の女を犯したか。これを數へるのが僕の目的であつて、しかもなほ途中で疲勞して中絶したのは、いつもながら力の足らぬ僕である。僕はカザノヴの十歲の初戀から三十歲頃まで、この主なるものを拾ひ上げてみた。「思ひ出」のこの期間にも、まだカザノヴの手を付けた女はいくらもある。芥川龍之介の解釋した女の數の見方をカザノヴも執つたとしたら、或は世之介の顰を摩すものかも知れない。

世之介とカザノヴとが殆ど同時代であつた事は、僕の最も不思議とする點だが、世之介の時代元祿は、カザノヴの時代十八世紀に外ならぬ。世之介がもし元祿に生れなかつたら、決してあれ丈の放逸を盡せなかつたやうに、カザノヴも十八世紀の人でなかつたら、ヸネチアの人でなかつたら、決してあの好色記錄は出來なかつたに相違ない。カザノヴが生れて死んだ十八世紀こそ、歐洲に於て最も美しく且退屈の世紀である。この退屈と憂鬱こそ、あらゆる人間の幻想を盡し、あらゆる淫樂と華麗と頽廢を盡した、白日夢の時代である。この世紀程歐洲史上に淫亂と怪奇を極めた時代はない。人は惡德のみならず死に對してすら好奇心を持つた時代である。そしてこの美しき退屈の中心人物は、佛蘭西國王ルイ十五世に外ならぬ。「飽きざる淫欲」と評されたこの國王は、「國王の爲の賣春婦」と評された玉の輿のポンパドウル夫人を擁し、國王の爲の娼婦街鹿苑を持つてゐた時代である。カザノヴはこの國王にも嬖妾にも拜謁してゐる。一世を擧げて耽美獵奇の極を盡した男女の世界であればこそ、あれ丈に容易に女も手に入り或は進んで入つて來た事と察せられる。この時極東日本も亦武士は遊女と情死し、官吏は賄賂を怪まず、黄表紙文學の横行した柔艶逸樂の世紀であつた。

漁色の本質

カザノヴの一生を通じた漁色の本質は何であらうか。ステフ

アン・ツワイグの說を聞かう。

まづ驚くべき事は、强靱なる健康である。カザノワは徽毒にかゝる事四回、毒殺を企てられた事二回、劍に刺された事十二回餘、牢獄生活さへ幾年かに渉つてゐる。しかもその間に歐洲の大部分を步き廻つて、足跡至る處に女を戀し戀せしめてゐる。その肉體は一切の疲勞を知らない。その欲望は盡きる事を知らない。その情熱は浪費を知らない。これ程の不死身の如き健康が、先づカザノワの色道を幸ひしたものである。

その次には、カザノワの戀愛獻身である。カザノワにとつて女は、音樂家に於ける樂器の如く、吝嗇家に於ける錢の如く、之を得る事のみが、最大事なものであつた。從つてカザノワは女以外に如何なるものにも振返らない。ツワイクの言葉によればカザノワは永遠の不貞者である。けれども女に對する情熱にだけは不貞でなかつたのである。名譽も役も位置も時間も健康も、一切女の爲の冒險には、惜氣なく投げ捨てゝゐる。單に女の爲の冒險の可能性に對して、既に何物をも顧みない。眞の好色家にとつては、まづ戀愛の陶醉を必要とするものではない。單に戀の冒險の豫想があり、未だ之を摑むには餘りに遠い豫感でさへも、その快樂と情熱の幻想を刺戟するものである。例へばカザノワは急用を持つてナポリに向ふ途中、或る宿屋で隣りの部屋に女の笑ひ聲を聞いた。カザノワはこの女が老人であるか若い女であるか、美しい女か醜い女か、自分の言ふ通りになるかならぬか、そんな事はどうでも好いのである。唯カザノワの心を動かしたものは、隣りの部屋の女の笑ひ聲だけである。カザノワは急用も何も打捨てゝ、この女に掛つた。たつたこの僅な摑み處のない機會に身を捨てゝかゝるのである。求めやうとする處には、何物も恐れない。獲やうとする處に、何物にも反抗する。目指すものが女である限り、短劍もピストルも、叱咤も恥辱も堪え忍ぶ。戀の冒險のない町は、カザノワには町ではない。女のない世界は、世界ではない。一月も一日も女なければ、カザノワは生きてゐる甲斐はない。節欲とは、鈍感と退屈の謂なのである。

カザノワの好色家としての本質は、この獻身から進んで、女を選ばない、といふ事で更に明かになつてくる。カザノワは決して美食家ではない。女の貪食家である。それは相手が女でありさへすれば好い。美とか怜悧とか優雅とか、それは有るに越した事はない。然し女そのものには、決して本質的のものではない。常に新しく、常に異つた女をカザノワは求めたのである。從つてカザノワの女は實に多種多樣を極めてゐる。ある時はラファエルの女もゐるが、ある時はゴヤの女もゐる。それは

美と醜、精神と卑劣の混雜であり、一切が偶然によつて集散する女の市場である。女の摑み取りである。道德も美學も、風姿も年齢もない。カザノヴの相手にした女は、年齢から見ても、ほんのか弱い少女から六十幾つのばあさんに渉つてゐる。カザノヴの相手となるべき女は、あらゆる形あらゆる骨格を持つてゐなければならぬ。唯、この類稀なる漁色家に特色とすべき事は、カザノヴが少しも變態的肉欲を好まなかつた點である。カザノヴは去勢者を嫌ひ、蔭間を好まず、唯專ら女色の天地に始終した。

この獻身的な、動物的な、自然的なカザノヴの欲情が、女の上に不可抗力に近い魅力を與へたのである。女はカザノヴに對して、本能的に男性を感じた。女の目の前に立つた男は、その全力を擧げ、一身を投じてくる男性である。女の爲には有らゆるものを捧げ捨ててくる男である。最後の快樂の一滴も、最後の囊中の一錢も、女の爲には使ひ盡してしまはふとする男である。カザノヴにとつては、女が幸福であり、悅び笑つてゐれば、それがカザノヴのあらゆる享樂の極致である。懷中に金があれば、出來得る限りの贈物を以て女を悅ばせる。カザノヴは女を裸にして見る前に、まづ華美な衣裳をつけ、高價なレエスに包まれてゐるのを見て悅ぶのである。そして之等は、すべてカザノヴの策術ではない。カザノヴにはトリックといふものがない。すべてがカザノヴの本質的な熱情性格の發現だからであり、欲情の正直さだからである。

この正直さは、カザノヴのすべての女に對する關係に現れてゐる。カザノヴは女との間に精神と感情との混交してくるのを嫌ふ。もしこの二つのものが入つてくれば、必ずすべての情熱は誇張され、僞瞞され、幻想されるのである。カザノヴは常に肉體以外に一步も出ない。從つてその約束した事は、之を守るのが容易である。快樂に對しては快樂を、肉體に對しては肉體を與へるばかりで、決して精神的の負債に陷る事はない。從つて女の側でも決してプラトニックな戀愛に欺かれる事がない。同時にカザノヴは女を幸福にする事はあつても、決して破滅せしめ絶望せしめる事がない。一人もヒステリイにはならない。純粹の感覺的冒險から、傷けられる事なしに、日常生活に戻つてゆくのである。或はその夫の處へ、その戀人の許へ歸つてゆく。けれども誰も自殺をする者もなければ、悲嘆に暮れるものもない。カザノヴの健康な熱情は、女の運命まで突入しないのである。カザノヴは丁度暑い風のやうに吹いて過ぎる。その風に觸れた花が咲くだけである。破壞する事なしに征服する。害する事なしに誘惑する。カザノヴには戀人として一切の惡魔的

なものがない。一度も悲劇的運命の主人公となつた事がない。どこまでも戀愛に於ける天才的挿話家だ、とツワイグは巧妙に名付けてゐる。

勿論このカザノヴの態度は、果して戀愛と名付け得るものかどうかは疑問である。これをヱルテルと比較すれば、極めて明であらう。或は之を情熱といふのさへ問題かも知れない。カザノヴの熱情は、單に好色的といふものであつても、その熱情に我を忘れる事はない。從つてカザノヴは一人の女に惚れるのでなくして、複數の女に、冒險の多數に、戀愛の變化に惚れるのである。從つて常に新しいものを追ふのは止むを得ない。カザノヴが女を取り且捨てるのは、恰も息を吸ひ且吐くのと變りはない。かういふ機械的な享樂が、カザノヴの思ひ出に現れた無數の女を、讀者の心に精神的にはつきり燒き附けない所以とされてゐる。或はこの無數の女の顏を、カザノヴは一々よく覗き込まないで、ある一定のパアスペクチイフから眺めてゐたのではないかといふ疑問も起るのである。カザノヴを刺戟するものは、常に下劣な女の性的瞬間である。「石膏で造られたやうな胸」とか、「尊い半球の乳房」とか、「氣高い姿」とかいふ文句に決つてゐる。

玆に於てカザノヴの「思ひ出」は、僕等に戀愛と好色との區別を極めて明瞭に示す貴重な文獻となるのである。ツワイグはカザノヴをスタンダアルと比較して、まだスタンダアルの方がより多く精神的要素を持つてゐると言つてゐるが、ツワイグに讀ませたいものこそ、「一代男」である。ツワイグはこれこそ極東のカザノヴだと直ちに斷言するであらう。

カザノヴとドン・フアン

カザノヴと最比較される西洋好色家は、かのモツアルトの歌劇によつて不朽になつた西班牙の男ドン・フアンである。けれどもカザノヴとドン・フアンとが最違ふ點は、カザノヴのだらしなさに對して、ドン・フアンは遙に貴族的であり、中世カソリツクの精神を持ち、肉體の價値を罪惡として承知してゐる事にある。女はドン・フアンにとつてこの罪惡の道具に過ぎない。女の存在そのものが、既に誘惑であり危險である、とツワイグは言つてゐる。女の貞操といふものは、ドン・フアンの目から見れば皮相な外觀に過ぎない。玆に於てドン・フアンはカザノヴに比べて遙に惡魔的であり、超人である。いかなる女と雖ドン・フアンは誘惑し得る確信を持ち、すべての女をその衣裳の下の裸體に見てゐる。けれどもドン・フアンを動かすものは、女の征服欲であり、征服に對する勇躍心である。もし女に抵抗力が無け

れば、ドン・フアンは全く興味がない。從つてドン・フアンは金で自由になる女は全く顧みてゐない。ドン・フアンは女を罪惡の中へ突き落し、人妻を姦通せしめ、處女を犯し、尼僧を欺く等、常に女を蹂躙する處にのみ、ドン・フアンの本領がある。從つて相手になつた女は、ドン・フアンを全く惡魔の如く恐れざるを得ない。ドン・フアンの戰闘的であるに反して、カザノヷは遙に妥協的である。ドン・フアンは永遠に女に對する戰士であるが、カザノヷは永遠に女に對する忠な友達である。ドン・フアンに誘惑された女は、自らその弱點を悔ひ、自分を欺いた男を呪ひ怨み且つドン・フアンの中に、あらゆる憎むべき男性を見るけれども、カザノヷに誘惑された女は、寧ろその隱れた祕密を悅び、自分を誘惑した男の獻身を愛し、カザノヷの中に本能的な男性を見るのである。ドン・フアンが西班牙の貴族であり、カソリック信徒であるに反して、カザノヷは伊太利の破戒僧であり、淫らな賭徒であり、惡魔的に對して、人間的であつた。

生涯

僕は先づ一通りカザノヷの生涯を見てみやう。この偉大なる好色家の數奇を極めた生涯は、千七百二十五年四月二日に初まつて、千七百九十八年六月四日に終つてゐる。あれ程漁色の一生を送つても、なほ七十三年の長壽を全うしたものだ。この時代は日本ならば、將軍吉宗の享保十年から、將軍家齊の寛政十年に渉る、元祿以後の桃李競研の時代と同じである。カザノヷはこの年に伊太利ヱネチアに生れた。父ガエタン・ヨオゼフ・ヤコブはフラゴレッタといふ女優に惚れて、家を捨てて、この旅役者の群に入り、喜劇役者となつて歩いてゐる内に、この女房とも別れ、ほかの旅廻りの一座に入つて歩く內、ヱネチアの靴屋の娘の十六になる美人に惚れ、娘は親の意に反して、二人でヱネチアの市役所に驅け込み、夫婦約束の屆を出してしまつた。この若い役者と靴屋の娘との夫婦から生れたのが、カザノヷである。

初め坊さんになる教育を授けられたが、或る金持のヱネチアの老人の命を助けて、その養子となり、次第に戀愛沙汰の惡戯我儘が烈しくなつてきて、警察から目をつけられ、若い牧師の姿で旅に出たものである。行く先は佛蘭西、獨逸、維納を經て、又ヱネチアに歸つてくると、若い女の誘惑者といふ罪で、監獄に入れられたが、十五ヶ月ばかり暗い處に入つてゐて、しかも極めて冒險的な方法で之を脫出し、再び放浪の旅に出て、策士、鍊金術師、賭博師等の芳しからぬ渡世で食を得て、或は色仕掛で詐欺を行ひ金を手に入れる等の罪を犯しながら、巴里、和蘭、

獨逸、瑞西を遍歴し、英國に渡つた時は、餘りの惡業に絞首の刑まで行はれさうになつたが、最後にはワルシャウで、波蘭貴族と決鬪を行ひ、やがて追はれて佛蘭西に來て、此處も追放され、西班牙では又監獄にぶちこまれ、遂に伊太利に戻つてきて、許されてヱネチア政府の密偵となつてゐたが、又喧嘩をしてヱネチアを去り、千七百八十五年までボヘミアのデュックスで、伯爵ワルドスタインの保護を受け、そこの司書となつて、この世を送つたのである。この寂しい靜かなボヘミアの町に老後を送る間に、初めて七十年の數奇を極めた戀愛一代記を書いたものが有名な十六卷の「思ひ出」である。

「思ひ出」

この「思ひ出」は、西洋大奇書の一つとして、今日まで愛讀され、舞臺化され、映畫化さるるに至つてゐるが、原文は佛蘭西語で書き、一つ折判紙六百枚に達した大部のものである。初めて書物になつたのが、千八百二十二年から三十八年に渉つて、ライプチヒのブロックハウス書店から出た獨逸版で、その次に初めて佛蘭西版が出た。カザノワの原物は、このブロックハウスが持つてゐるので有名であるが、何分尨大なものであるから散々に縮められ、改作され、手を入れられて、いろいろの形で世に出てゐる。この挿繪が又好色的な點で有名なものが多い。

内容はまぎれもない「西洋好色一代男」である。カザノワ自身は、「道德の驚くべき學校」だと名を附けたが、ステファン・ツワイグは、この「思ひ出」を批評して、小說よりは統計的報告であり、詩作よりは戰鬪記錄であり、好色法典であり、西歐のカマストラであり、肉體にさまよふオヂセエであり、永遠のヘレナを求める永遠の男の肉慾のイリアドだと言つてゐる。その價値は、質よりも量にあり、内容の多種的な處がおもしろいが、決して精神的意義によるものでないと斷言してゐる。この點に於てカザノワの「思ひ出」は、矢張り西鶴の「一代男」に近いものである。「一代男」に天國と地獄を貫くエロスの精神がないやうに、「思ひ出」も又神をも欺く惡魔的なものはない。カザノワ自身も「思ひ出」の序文の中に「私は決して一定の目的を追つたものではない。私の唯一の執つた道は、偶然に身を任していつた事である。(略)戀愛の感覺的悅びを享樂する事は、常に私の情熱であつた。これより大切な事を私は知らない。私は自分が女性の爲に造られてゐる感情を感じてゐた。機會ある毎に、私は女を多く愛し、又愛せしめた。(略)愛せられたる女の匂ひは、常に私には快く愛すべきものであつた。人或は私に對して、何といふ墮落だ、顏を赤らめることもなしに、こんな事を告白す

るとは、實に無恥厚顔だ、と言ふかも知れない。かういふ批難は、私を唯笑はせる丈である。なぜならばこの私の一生を幸福ならしめたものは、唯感覺的享樂あるのみであつた。」と斷言してゐるのは、かの世之助が「たま／＼一代男に生れての、それこそ願ひの道なれ」と豪語して、愈々色慾の離れ島に船出して行つた大望と、相去る事遠くない。カザノヴはさすがに實在の人物だけに、死を恐れた事が世之助と異る丈である。僕はこの「思ひ出」から、カザノヴの戀人のほんの一部を例示的に探つてみやう。

先生の妹　十歳

世之助は七歳の時に侍女に戯れて、「はや御志は通ひはべる」と悦ばれてゐるが、カザノヴの初戀は十歳の時からである。この年にカザノヴは學校の先生の處に預けられたが、その先生の十三になる妹ベッチナに初戀をした。カザノヴの言葉でいへば「この一生の間を支配した情熱の最初の炎を、私の心の中に焚きつけた女であり、カザノヴに嫉妬をさへ教へた娘であつた。ベッチナはこの少年の髮を梳り、寢臺に腰をかけて、足に觸れ體に觸れた。

「先生は旅行にゐらしつたので、私は舞踏會の晩まで待つ事は出來なくなり、ベッチナにみんなが寢てしまつたら、私の部屋にくるやうに賴みました。私は部屋の扉を開け放して、燈火を消して、着物は脫がずに、この幸福な瞬間を待つてゐたのです」

世之助は七歳で、「戀は闇といふ事を知らずや」と言つてゐる。

舞姫　田舍娘　十六歳

カザノヴは十六歳の時パドヷで法學士になつたが、心中決して辯護士や裁判官に成らうと思つてゐた譯ではない。そろ／＼大學生に交つた放逸生活が初まつたのである。「私はかういふ仲間に入つて、初めて世間を知つた」とカザノヴは自ら言つてゐる。世之助も亦この年には、人妻に戀して眉間を打たれ、次第に戀の裏表の分つてきた年である。カザノヴは先づ說敎師になつたが、ヱネチアで有名になつてゐた舞姫ジウリエッタに紹介された。この女は日本ならば藝者(くゐちざね)に近い女で、この時はまだ十八歳の花盛りである。眩い眞白い腰に、眞紅な唇と頰、美しく描いた眉は自然よりも藝術の價値の偉い事を私に敎へたと言つてゐる。カザノヴはこの女を五度程訪ねて行つてゐる。その年の夏には畫家の娘で、アンゲラといふ極く內氣な少女に戀をした。娘は刺繡を習ひに行つてゐるのを口說いたのだが、何としても內氣過ぎる。「この熱い刺戟の多い熱情の私には、

ベツチナのやうな戀人が必要である」と言つてゐるが、この戀は寧ろ息苦しい火に、かういふ娘は、まだ或る意味の純潔さを持つてゐるカザノヴには、尊い女にさへ見えたのである。

その年の秋には田舍で十四歲になるルチアといふおぼこ娘を誘惑した。ルチアはもう十七位の娘の體付をしてゐて、石膏のやうに美しい肌と、眞黑な無邪氣な目と、頭に輕くまつはる髮とを持ち、その着物は肌着と短いスカアトだけであつたから、好い形の足が見えてゐた。或る日の朝である。ルチアはカザノヴの處に珈琲を持つてきて、「今朝はお寒いわね」と言つた。カザノヴはまだ寢床にゐたが、寒ければ僕の傍においでよ、こゝは暖いよ、と言つた。

「でもお邪魔になるでせう」

「そんな事はないさ。でもおつ母さんがやつて來たらびつくりして怒るだらうね」

「惡い事してゐるとは思やしませんわ」

「そんならこつちへお出でよ(略)その前に扉を締めて」

「いやよ、變に思はれるわ……」

やがてルチアは毎朝この若い牧師の寢床に腰掛けるやうになつたのである。僕はかういふ他愛ないカザノヴの會話を讀んでどれ程この歷史的漁色家と同じやうな無邪氣な口說を、この世界の少年少女が繰返したかを思ふと微笑を禁じ得ない。驚くべき事には、この無垢の田舍娘ルチアが、後年アムステルダムの最下等な水夫相手の淫賣窟に身を沈めてゐるのに、カザノヴはめぐり逢つたのである。

ヹネチアに歸つてから、前に思ふやうにゆかなかつたアングラを、その女友達のナネツタ、マルチナ姉妹の氣の利いた取做しで遂に我物にしたが、やがてはこの美しい惡戯者のおてんば娘二人をも手に入れた。二人は一緒に寢卷一枚のしどけない姿で、裸足で、眞夜中にカザノヴの部屋で食事をした。

昇天祭の日にベルガリ夫人といふ女文士を訪問して、一緒に馬車に乘つた途中で、ひどい俄雨に逢つた。そこへ目の前へ雷が落ちた。馬は飛び上つた。夫人はカザノヴの腕に固く抱かれた。

やがて雨は晴れた。カザノヴは夫人の手に接吻した。

「……もう私、これからは主人と一緒でなければ馬車には乘つて歩きませんわ」

カザノヴは笑つてゐる馭者に「いいか、一デスカアテンだつ默つてゐるんだぞ」と金を渡した。

同性愛　女奴隷　十七歲

この年におばあさんに死なれて、カザノヴは更に神學校に入る事になつた。カザノヴはその寄宿舍で十五歳になる少年と相愛した。二人は毎晩一緒の寢床で寢た。暫くするとこれもばれて、カザノヴはゴンドラに乗つてヱネチアに歸つて來たが、或る日一人の兵士に捉つて、聖アンドレアの要塞へ入れられ、やがてそこを追放されて、ヱネチアに歸つたが、その要塞で知り合つた貧乏伯爵の娘を訪ねて、接吻してやつた。娘は繪が好きであつた。それからカザノヴは羅馬からナポリへある司教を訪ねに出掛けた。

カザノヴが賭博を覺えたのも、この時代である。チオッツアといふ町では旅費も荷物もみんな無くしてしまつた。アンコナといふ處で船を降りて、その檢疫所にゐる間に、ある年とつた土耳其人に使はれてゐる、美しい、若い希臘生れの女奴隷に戀をされた。カザノヴは床板の上と下とで逢引をした。床板には穴を開けて、女奴隷はその下の梱の上に乗り、カザノヴはその穴から手を差入れて、この女の體に觸れた。

辯護士夫人　十八歳

カザノヴは金も荷物もなく、歩いて羅馬まで來て、更にナポリへ來た。千七百四十三年の秋である。そこで司教の厄介になり、今度は再び羅馬に戻つた。その途中の馬車で美しい辯護士の細君ルクレチアと懇意になり、一緒に泊つたホテルで接吻した。羅馬でも幾度も逢引した。「神の如きルクレチア」と言つてゐる位であるから、餘程カザノヴの氣に入つてゐたらしい。丁度世之助もこの年には「旅の出來心」を娯んでゐる。

去勢された男　土耳古の人妻　十九歳

千七百四十四年の二月である。羅馬を立つて氣の向くまゝにコンスタンチノオプルに出掛けた。金と紹介狀は今迄の關係筋からたつぷり手に入れたものである。

アンコナへ着くと、カザノヴは歌唄ひの一行と懇意になつた。ところがその一行の中のベルリノといふ歌唄ひの娘は、去勢をされた男の子といふ觸れ込みであつたが、さすがにカザノヴは、確に女の子だと觀破したが、どうも之を確める方法がない。そこで或る日ベルリノの姉妹達に錢をやつて、部屋から外へ出しといて、ベルリノに向つて

「ベルリノさん、あなたは女でせう。どうもあなたの體付は、私の體とは違ふものね。確に分つてゐます」

「いえ、僕は男なんです。でも去勢されてゐるんです。ちやんと調べて貰ひましたよ」

カザノヴがやがて觸れたものは、美しい乳房であつた。ベルリノには二人の姉妹があつたが、これもカザノヴの手にかゝつた事は言ふ迄もない。ベルリノは本名をテレサといふ娘であつたが、この異常な變態に心を牽かれたか、カザノヴは眞面目にこの女と結婚しやうと思つた位であつた。二人は一緒にコンスタンチノオプルにまで出掛けやうとした處が、カザノヴは旅券を紛失した爲に、墺太利の軍隊に捉へられ、テレサとは別れ別れになつたが、やがて赦されて、馬に乘つてリミニまで來てテレサと再會し、ボロニアに來て、遂に僧服を脱いで、士官の扮裝に變へてしまつたのである。テレサにはその後十七年たつてから、又フィレンツエで逢つた。一度は去勢された男に僞つた娘は、或る若い男の妻になつてゐたが、この昔の戀人を見て、夫が晝食をしてゐる間に、カザノヴと逢引をした。

その年の四月にカザノヴは正式に軍人を志願して、コンスタンチノオプルに渡つたところが、そこの土耳其の大金持ユスツフ・アリに氣に入られて、回教徒になつてくれれば娘をやると言はれたには、さすがのカザノヴも閉口した。もう一人變態性慾の土耳古人イスマイル・エフエンヂイにも愛せられた。ある月の好い晩に釣に誘はれたが、その途中でこの男の妾が三人大理石の池で月光の中で水浴をしてゐるのを見せられた。娘をやると言つた大金持ユスツフの妻は、裾から美しい足や淫らに丸くなつた腰やふくよかな股を見せて、銀の帶を締めてゐたが、カザノヴの心を捉へたものは、その見事な乳房であつた。唯殘念な事に、土耳古の女だから被衣をかぶつてゐた。これを取らうとしたカザノヴははねつけられたが、後で土耳古の女は被衣さへかぶつてゐたら、どんな事をしても顏を紅らめる事はないのだ、と敎へられたさうである。

コンスタンチノオプルからコルフに歸つて來て、カザノヴは自分より上官の軍人の美しいF夫人と慇懃を通じた。夫人は髮を切つて、この青年に渡した。

伯爵夫人　田舍娘　二十一歳

その間にカザノヴは零落して、芝居のヴィオリン彈きになつてゐる間に、ヹネチアの大金持の命を助けて養子となつたが、

「私は金は十分にあつた。男振りは好い。大膽な賭博打ちである。手のつけられぬ浪費家である。辯舌には長けてゐる。ユウモアにも富んでゐる。そのくせ謙遜である。物を恐れない」

と自ら言つてゐる位だから、世間に嫉まれるのは無理はない。賭博で借金が出來れば、養父が拂つてくれた。そこへ親の家を飛び出してきた若い伯爵夫人A・Sを救ふて情を通じ、別れる時

には記念にこの女の髮を切つて貰つた。同時に美しい若いエネチアの女で、後に舞踊家ビネッチの妻となつた女と關係をした。この女の不思議な點は、いつ見てもとても若く見える事で、最後の情夫は波蘭人であつたが、この女の劇烈な性欲に累されて命を早めたと稱せられた。しかもその時女は六十三歲であつたとさすがのカザノヴも驚嘆してゐる。

　可愛いい百姓の娘クリスチナも手に入れた。これは伯父と一緒にゴンドラに乘合はせたのを見染めたのである。「あなたは天使のやうに美しい。あなたを接吻したい望みで死にさうだ」と言つたら、娘はすぐに承知した。二人は結婚すると迄言つたが、カザノヴはこの娘に相應な親切な男を亭主に見立てて添はしてやつて、この娘との關係も切れた。亭主になつた男はひどくこの娘が氣に入つて、みんなあなたの賜物だと禮を述べた位である。

軍服夫人　二十三歲

　ところが今度はある娘を母親の承知で手を掛けたのを、强姦だと言はれて、カザノヴはエネチアを追はれてミラノに來た。するとここの芝居に、あのベロニの妹のマリアが踊り子になつて出てゐた。それからパルマに行く途中で、匈牙利の大尉と一緒に來た佛蘭西の女アンリエットが、軍服を着てゐるのに目を付けた。匈牙利人は六十代だが、この女はまだ若く、體もしなやかで、男好きのする樣子であつた。匈牙利人はアンリエットをカザノヴに渡した。アンリエットは軍服の外に何も着るものを持つてゐなかつたので、女の衣裳をつけさせると目の覺めるやうな美人になつた。又ツエセナといふ田舍に、寶物が埋めてあるといふので、それを掘りに出掛けて、そこで十四歲になるゲノフエフアといふ娘と一緒に湯に入つた。

六十ばあさん　二十五歲

　千七百五十年六月一日に、カザノヴは久々でエネチアに戾つて母に逢つた。その頃の交友は、若い女ならば妾か賣女であり、男ならば賣女の情夫か美人局か蔭間であつた。その後に巴里に出掛けた時は、カザノヴも蔭間かと間違へられた。間違へた女はド・リユフエ公爵夫人である。尤もこの夫人は六十を越したばあさんで、カザノヴはこの公爵夫人に招かれて出掛けたが、曰く

「讀者諸君、想像してくれ給へ、いやに薄赤い顏の六十ばあさんである。肌はぶつぶつして、痩せ切つた體だ。あらゆる醜惡と貪婪がこの醜い顏と人格に集つてゐる。それがソフアの上に

ぐたりと軟くなつてゐたが、私を見ると、忽ち氣違ひのやうな悅びの聲を擧げて、まあ何て可愛いい子だらう、さあ私の傍へお掛けな、と言ふではないか。私は謹で命に應じたが、傍によると何だか腐つた麝香の匂ひのするのが、私には死骸のやうに思はれて、さすがに氣が遠くなりさうだ。するとこの堪らない公爵夫人は立ち上つて、醜い乳房を露はしたには、どんな勇敢な男も辟易しさうだ。(略)やがて二人きりになると、この白粉をつけた骸骨は、兩腕を開いて(略)私は臺へ上りました」と言つてゐる位だから、さすがのカザノヴも、いつも若い美しい女にばかり惚れられてゐた譯ではない。「お前さん、まるで赤ちやんのやうぢやないの」とこの骸骨は厭がるカザノヴの頰に接吻した。

カザノヴは巴里滯在中フォンテンブロオ離宮でルイ十五世に拜謁し、リシユウリウ將軍にも引立てくれ、ルイの愛姬ポンパドウル夫人にも逢つた。その間に泊つてゐるホテルの娘に手をつけて警察の御厄介になり、友人の紹介でオモルフイといふ女優と懇意になり、その妹の僅か十三になる娘が、すばらしい好い體をしてゐるのに惚れ込み、時の艶笑畫家ブウシエに裸體畫に描かせた處が、この繪が好色ルイのお目に止つて、召し出されて嬖妾になつた。

おぼこ娘　尼　三十歳

巴里にゐたのは二年で、ドレスデンに來て、維納までやつて來た。それから三年たつて又ヱネチアに戻つて來たのである。巴里にゐた時は二十八歲の年だが、「二十八の年は出來心にて、人の女を戀ひて、一命危し」と世之助は言つてゐる。ヱネチアではボナフデ伯爵の娘で、C・C嬢と懇になつた。まだ十四歲のおぼこ娘である。ところが之が父親の手で、尼寺へ入れられた。その尼寺で娘は早産をして、危く死にかけた。尼寺へ度々面會にゆく間に、そこのマリア・マグダレナ尼とも好い仲になつて、白い鳥の羽のやうな帽子に黑衣の聖女は、格子越しにカザノヴに接吻した。尤もこの尼さんはヱネチア第一の美人の一人で、時のヱネチア共和國駐在佛蘭西大使ベルニの思ひ者になつてゐた。尼姿で僧院を出て、外で衣裳を着替へるのである。その間にトニナといふ娘を手に入れ、これは後に英國大使に讓り、自分はその妹のバルバリナと慇懃を通じた。この娘も恥を知らぬ女であつた。ところがカザノヴが三十歲の誕生日を迎へて、二日目に、ヱネチア警察に捉へられて、監獄へ入れられてしまつた。この獄中記と脫出記とは、世界文學有數の作品の一つに數へられてゐる。カザノヴはこの監獄に入つてゐる間に、

かのリサボン市を破滅せしめた地震を經驗した。

この監獄を脱出したカザノヴは巴里に逃れた。丁度ベルニがルイ十五世の外務大臣になつてゐて、カザノヴを助けてやつた。

老いたる一代男

僕は僅に三十歳に至るカザノヴの生活を一瞥したに過ぎない。好色一代男としての世之介は「合せて三十年の夢、是からは何に成りとなれ」と勇氣を奮ひ起してゐるが、カザノヴと雖三十歳として、眞に漁色家の本領を發揮したのは、これからである。世に三十男程女に愛せられるものはあるまい。ところが最興味のあるべき三十歳以後の「思ひ出」は、分量にして三十歳までの約二倍はある。これから女を拾ひ出してゆくには、僕は意氣地なく疲れてしまつた。

けれどもいかにカザノヴと雖も四十六歳に達した時は、さすがに老ひの來るを感じたのである。千七百七十一年六月に、カザノヴは羅馬を立つた。その時まだ一人の若い女を戀人にしてゐたが、嘆じて曰く

「私もこの三十年間味ひ盡してきた快樂にも、今はもう疲れたやうである。私はこの女を全く捨てやうとは思はない。唯暫くの間時々輕く味ふに止めておかう。厄介な結果を惹き起すやうな義務は避けやう」

と弱音を吐いてゐるが、然しこの好色の巨人は決して廢兵になつたのではなくして、暴君になるのを見限つた丈である。これを世之介が六十歳に達して「身はいつとなく戀にやつれ、ふつ〳〵世に今といふ今心殘らず(略)いつまで色道の中有に迷ひ、火宅の内の燒けとまる事を知らず、既に早來る年は本卦にかへる」と歎いてゐるに比べれば、まだ幾分の覇氣はあるが、世之介が大綱に女の髪をより交ぜて、好色丸一艘を仕立てたに比べれば、さすがにカザノヴも之には及ばない。カザノヴは死んで天國の人となつたか、地獄の人となつたか、誠にこれこそ僕にとつては興味のある問題だ。(昭和五年七月)

新聞社大幹部論

來間恭

外電（東京朝日六月二十五日夕刊）によれば六月二十四日ロンドンのカクストン・ホールに開かれた英國保守黨大會で黨首、前首相ボールドウイン氏は黨内の反對派に對する糺彈の一節として

『近代の進化事象中巨大なる成金的暴富の效力と新聞の操縱ほど奇怪なものはない、それは頭腦の平衡を破り、酒精の如き作用をなすものらしい、諸君はこれ等の事象をアメリカのハースト新聞とわが國のロザーミーア、ビーヴアブルック新聞において見出すことが出來る、そこでは新聞事業の領域を離れて、指導、暴慢、脅喝の企圖すら行はれるのである』

と罵倒したさうである。それは一種の悲鳴とも聞こえる、が人もあらうにボールドウイン氏――典型的な資本家地主政黨として世に隱れなき英國保守黨の親玉の口からブルジョア新聞に對する呪ひの聲が出るとは、豚がケッコッコーと泣き出したやうに奇挺である。しかし考へて見ると不思議ではない、ロザーミーア、ビーヴアブルック新聞聯合は英國隨一の新聞トラスト、言ひかへると財界の特別席に雄視する新聞財閥だ。それが、ボールドウイン氏を支持する一般の財閥と對立抗爭するのは當然のことである。財閥同士は醜惡な競爭によつて肥え太る。たゞ階級戰場に出たときにはボールドウイン派の財閥も、ロイド・ヂヨーヂ派の財閥も、ロザーミーア、ビーヴアブルック兩翼の新聞財閥も仲よく階級線の右岸に共同戰線を布いて、對岸のプロレタリア陣營へ一齊射撃を開始するまでの話だ。

だが、さういふことは英國での話だから、どうだつていゝ。差し當り日本の我々にとつて問題となるのはボールドウイン氏が敵對關係にあるロザーミーア、ビーヴアブルック新聞をやつつけるついでにアメリカのハースト新聞へとばつちりを浴びせながら、日本新聞を見のがしてゐることである。ボールドウイン氏は日本の新聞を取るに足らずと輕く見たか、それとも東海の君子國では新聞も禮節を心得て毫も橫暴を働かないと認めてくれたのか。どちらにしてもボールドウイン氏は日本の新聞を引き合ひに出さなかつたに拘らず、カクストン・ホールで氏が放つた新聞攻撃の一彈は、ロザーミーア、ビーヴアブルック新聞を貫いて大西洋を渡つてハースト新聞を貫通した後更に太平洋を渡つて見事日本の新聞に命中してゐるのではなからうか。

新聞社の側では、新聞時代が來た、と威張つてゐる。例へば、普通選擧は主に新聞の力で獲得されたものであり、新聞は普選の生みの親であると、新聞社側は自家の威力を誇ると同時に民衆へ恩着せがましい顔をさへ見せ

てゐるが、なるほど普選の開通には新聞の力が大いにあづかつて力あつたことは明かだとはいふものの、新聞が普選要求で積極的態度に出たのは、果してすつかり慾得を離れた、社會奉仕とやらであつたゞらうか。若しかすると、敏感なる新聞人は、普選になれば新聞の讀者が非常に殖える、といふ見透しの下にちやんと算盤をはぢいて、普選行進曲を奏したのではないか。とにかく普選法が出來た大正十四年から、第一次普選の行はれた昭和三年にかけては、日本における新聞が全線的に非常な躍進ぶりを示したのだ。日本の新聞發達史上に特筆さるべき驚異的發展期と、政治史上の劃時代期とがぴたりと一致してゐる。つまり、新聞は普選の御利益を受けたわけだから普選が新聞に感謝していゝのが、新聞が普選にお禮を言つていゝのか問題だが、それは預かりとして、ともあれ、新聞の社會的勢力が恐ろしく強大なものになつて來た。

第一次普選に臨んだ田中内閣は、新聞紙上の不人氣、ことに東西朝日新聞の猛擊によつて與黨議員を更に七八十名は取るべくして失つた。濱口内閣も新聞の攻擊に會つては官吏減俸を取りやめにせざるを得なかつた。最近に或る政友會の代議士が『今若し政友會と朝日新聞が喧嘩したら政友會が負ける』と言つてゐる。その當否は別として、少くとも新聞の發言を無視しては政治が行はれぬ時代になつて來たことは確かである。政治的勢力ばかりでない、新聞が直接に民衆の心理、思想、生活に及ぼすところの影響力が大變なものである。說敎強盗の記事が載ると忽ち講談強盗以下の亞流強盗が發出するといふ風に。

ノースクリフ卿が日本へ來たとき『日本にも猛獸がゐるね、新聞といふ猛獸が』と言つたといふ話を思ひ出すが、新聞が猛威を揮ひ始めると、これに對する非難も急にやかましくなつた。昔から新聞の誤報や中傷に對する被害者からの抗議は行はれてゐるが、一般的な論題として諸家の新聞批判がしきりに雜誌に現はれ始めたのはこゝ數年來の現象だ。

或る者は近來の新聞を目して毒蛇だといふ。ニュース本位の假面をつけた俗惡煽情記事に對する咀咀だ。新聞の方にも、その害毒を認めて二三年前に新聞倫理化運動を唱へた人があつたけれども、いつしか立ち消えになつて、センセーショナリズムが誇らかに亂舞をつゞけてゐた。

或る者は新聞の「斬捨て御免」を痛擊する。が、これも一向改まらない。新聞の方では『昨日のことは昨日でお仕舞だ』といふ顏付をしてゐる。

或る者は『新聞の押し賣りだけは何とかならないものか』と言ふ。これには共鳴者が非常に多い。けれども無disc投人に惱まされることは少しも疑らない。いな、押賣りに來る配達人の口調が、もとは哀願的であつたのに近來では威嚇的にさへなつて來た。

何故、新聞の不良性が直らないか。いなそれが不良性にさへ轉化しようとしてゐるか。答へは頗る簡單だ、資本主義の新聞支配がますます深くなるからだ。資本主義のタンクは區々たる非難や呪咀や哀訴を雜草ほどにも思はずに突進する。明治初年の如く、主義主張を弘布するため、ビラでもまくやうな調子に新聞を出した時代、それから後、新聞の經濟に多少注意を拂ひながらもなほ社會の木鐸、天下の公器といふ風な自負心を備へてゐた前

資本主義的な時代にも道德性の發照はあつたが、凡そ道德とは仲の悪い資本主義は新聞の領域においても他の場合におけると同様、容赦なく不良性を發揮する。

『新聞は營利事業ぢやないぞ』と言ふ人があるか。御冗談でせう、立派な營利事業だ、政府は小役人の官舍から家賃を取り立てる前に、新聞から營業收益税を取るべきだ。儲からない新聞は營業の蹉跌者、資本主義の發達過程に必要な餌食とされた犠牲者に過ぎない。

『地方新聞や中央の小新聞の中には傳統を死守して悪戰苦闘をつゞけてゐるのもあるぞ』と仰有るのか。お氣の毒だが仕舞には城を枕に討死で御座らう。

資本主義から見ると新聞は商品だ。商品以外の何ものでもない。新聞には特殊性があるといつても、それは新聞の商品たるを妨げない。それは資本王の新聞征服途上における障碍物ではなくて、せい／＼新聞資本主義にインキの匂ひを付ける位なものだ。どこまでも新聞は商品である。賣らんがためにはアメリカの黄字新聞からセンセーショナリズムを輸入しようとどうしようと勝手だ、今では出藍の譽があつて、ハーストが排日の理由に『新聞黄禍』を附け加へるかも知れない狀態だ。

營業局の編輯局に對する壓力は次第に強くなりつゝある。新聞が主張本位であつた時代における編輯局と營業局との主從的な關係が、營利本位の今日ではすつかり逆になつて來た。資本家の氣に喰はなければ德富蘇峰翁でも放逐される。つまりパーソナル・ヂャーナリズムの滅亡だ。反資本主義の社會意識を持つた青年記者もみんな閉め出しを喰ふ。編輯局內で見られるものは降伏した文筆勞働者の卑屈だけである。

某新聞の某部長には『荷造り部長』の綽名がある。何んでも或る日社長邸へ御機嫌伺ひに行つたとき荷造りの手傳をして妙腕を認められ、それ以來、社長邸に荷造りの用事がある度毎に召し出されるんださうな。

某新聞の某部長は社命洋行の際、千數百圓を投じてピアノを一臺買ひ込んで、社長邸へお土産にと持ち込んだところ社長邸では彼れ部長の洋行中に三千圓もするピアノを新調してあつたので『まあそれも置いといてくれ給へ』位で邪魔ものの扱ひにされたのには何氣返つたとやら。

或る新聞の營業局長がゴルフをやり始めたら、その社の幹部が我れも／＼と仲間入りをして似合もせぬゴルフスタイルでゴルフ場へ通ひ、ゴルフの球を賭けて競爭するんださうだが、營業局長のポケットはいつでも戰利品の球で一ぱいに膨らむさうだ。但し、それは戰利品か賄賂か知れたものではない。

某社の販賣部長が紙數擴張計畫の書類を編輯局長に突きつけて承認を求めた。局長がそれに目を通して『擴張費が少し掛りすぎはせんか』といふと販賣部長は『あなた方の作つた拙い新聞が擴張費を掛けずに賣れるものか』と一喝した。すると編輯局長はグウの音も出さずに判を捺したさうだ。

資本家に降伏した新聞人は仲間同士の排擠をやる。相手を傷けて自分が昇進するために商賣道具の嘘と想像でこれ上げたヨタ放送を飛ばす、或は暮夜密かに權門を訪れて告げ口をする。新聞社ほど暗闘の烈しい所はあるまい。その卑劣さはとても素人の比ではない。

或る新聞社では甲部長が乙部長排擠のため故

正部長と結託し、乙部から校正部へ廻る原稿を保存して置いて、アラ探しをやつた結果とう〳〵乙部長追ひ出しの目的を達したさうだ。『コウセイ恐るべし』とはこのことだ。さういふ種類の悲喜劇なら新聞社の編輯局内には紙くづよりもよけいに轉がつてゐる。それでもイカサマ見せ物の客引きみたいに、賑かな、派手な、煽情的な、出鱈目な紙面を作りさへすれば新聞は賣れる。新聞はセンセーショナリズムこそ尖端的だと思つてゐる。それで新聞が賣れて、資本家が肥るのだから新聞資本主義バンザーイだ。

　新聞横暴時代だなどゝ惡口を叩いて見たところで、どうにもならないのだ。われ〳〵は當てがはづれたブルジョア新聞をおとなしく讀んでゐるより外はないのだとすれば、新聞首腦者の名を覺えて置くのも何かの參考にはなるかも知れない。こゝに新聞社大幹部をレヴユー式に並べて御覧に入れる所以である。

　大阪朝日と大阪毎日の發行部數は正確に分らないが、どちらも百五十萬前後の部數を持して、斷然と日本の新聞界をリードしてゐる。大阪朝日が支店として東京朝日を持ち、大阪毎日が東京日日を支店に持つてゐることは周知の通り。そして東朝、東日はともに百萬内外の發行部數を出し帝都の他紙とは段違ひの優勢を示してゐる。この大阪系四紙は完全に新聞界の覇權を握つてゐる。東朝を含む大朝と、東日を含む大毎の對立は壯觀と形容してもよからう。

　大朝社長は村山龍平氏、大毎社長は本山彦一氏だ。兩者ともに紹介すべくあまりに有名だ。村山氏は今年八十一歳、本山氏は七十八歳といふ高齢だがどちらもまだ矍鑠たるものだ。村山氏はこの數年來なるたけ仕事を部下にまかせようとする風があるが、それでも編輯、營業の兩方面に亙る重要社務を見て少しもボケたところを見せない。本山氏に至つては、まるで五六十歳位の元氣で大毎王國の專制君主といふ觀を呈してゐる上に、地方販路の視察やら、富民協會、東亞調査會の事業やらで日本全國を驅け廻つてゐるからエライものである。

　村山氏は五十何年、本山氏は約四十年、自分の新聞をもり立てゝ來た。明治の前期から中頃にかけては新聞一般に苦難時代であつたが、それを切りぬけてとう〳〵大正昭和の資本主義的な經濟方法で大當りを取るまでの經過を見ると兩氏が主力を注いだのは營業方面である、が兩氏とも新聞編輯のことも分る。本山氏は今でも大毎と東日には端から端まで目を通して編輯上の指圖をする。村山氏は、この頃あまり編輯に口を出さないけれども十年ばかり前までは編輯上の大綱について指揮したばかりでなく、何かヘマな處を見付けると編輯局の眞中で勵聲叱咤することもあつたさうだ。大朝東朝は記事の書き振りといひ紙面の作り方といひ何處となくドッシリと重味があり、貴族的であり、いく分か陰欝であるに對して大毎東日は才氣、俗氣、陽氣、ムラ氣を示してゐるところはたしかに兩社長の人柄を反映してゐると思はれる。

　村山氏は大朝(東朝を含む)總株數六萬株の中二萬四千五百株を村山一家で持ち、一萬四千株を上野精一氏(專務)に持たせ、殘りの約二萬一千株を社員約五百名にそれも頗る均分的に持たせてゐる。つまり實質的にいへば大朝は村山、上野兩氏の合資會社であり、最も

實際的にいふと現在の大朝は村山氏の私有物である。大朝株主名簿の中には村山、上野兩氏を別として一人の富豪、或は非新聞人が見出し得ない。この點は大朝の著しい特色だ。

これに反して本山氏は大毎（東日を含む）總株數十萬の中僅かに二千六百余株を（三個の名義で）所有するに過ぎない。そして大毎随一の大株主は三菱である、三菱は六千五百余株を相島像一、加藤武男兩氏に分け持たせてゐる、その外三千七百株乃至一千株の所謂大株主には田中、岡部、藤田、井上、浮田、湯川、外山、八木、山口、野村、島氏等、大阪財界の大物がズラリと並んでゐる外に現法相渡邊子が千百余株を持つてゐるかと思へば中橋德五郎、山本条太郎兩氏等のやうな政友系政治家も株主である、根津嘉一郎、武藤山治、益田太郎氏等の顔も見えるといふ風で、つまり大毎は富豪連の共有機關である。

右、大朝、大毎兩社の資本關係は隱微の間に新聞紙面に反映してゐるのではなからうか。最近の一例を言へば、あの勞働組合法問題について大朝東朝の社説は極力政府原案を支持し勞働組合側に味方したのに對して大毎東日は社説で、必ずしも政府原案を固執する必要なく、機宜の改正を施すがよいと主張して、勞働組合側を排撃しないまでも、資本家側に有利な意見を立てゝゐた。これは恐らく双方の筆者が資本關係を念頭に置いて書いたものではないだらう。しかし經濟關係は無意識狀態においても觀念を支配するものだ。少くとも大朝の論説委員は村山、上野兩氏以外のいかなる財閥にも遠慮することなく社説を書き得る環境におかれてゐる、が大毎の場合にはさうは行かない。

大阪系四紙の陣容を（社長を別にして）見ると、大朝は專務だつた下村宏氏を最近副社長に据え、上野精一、小西勝一兩氏が專務取締役、編輯局長は高原操氏、營業局長は小西專務の兼任、岡野告天子、原田獨來居の二氏が相談役兼輯編局主幹といふ名でなかなか有力な發言權を持ち、編輯の實務上一番大切な整理部長の椅子には原田讓二氏がドッカと腰を下ろしてゐる。

大毎は社長の次に社賓の名で德富蘇峰翁を置き、副社長岡實氏をその次に据えてゐるが、德富、岡兩氏は東京住任だ。專務取締役高木利太氏は營業局長で經濟方面の采配を振り、編輯局には高石眞五郎氏が主幹として社の主張に關する部門だけを受持ち、主張以外の一切の行政事務を切り廻はすのは俊傑城戸元亮氏、それとほゞ同格の編輯局總務に不染奥村信太郎氏あり、第一線には社會部長[illegible]、整理部長永原茂樹氏等を立たせ、顧問その他の名義で竹越三叉氏の外に新渡戸稻造、谷本富、木下東作、西村眞琴の四博士を連ねてゐる。

東朝はむろん村山社長の統制を受ける外、下村副社長をコンダクターとして編輯局長緒方竹虎氏と營業局長石井光次郎氏が兩翼となり、編輯實務上の實權者に編輯局主幹兼政經部長牧野輝智氏と編輯局主幹兼整理部長美土路昌一氏があり、社會部長鈴木文史朗氏も才腕を揮つてゐる外に、楚人冠杉村廣太郎氏は監査役兼記事審査部長兼編輯局顧問といふ無暗に長たらしい肩書で、前田利家と大久保彥左衞門を兼ねたやうな地位に居る。米田實博士と柳田國男氏は編輯局顧問、前田多門、關口泰兩氏は論説委員として光つてゐる。

東日は、本山社長の統率を受ける外、岡副社長が主幹を兼務して社務を指揮するが、取締役兼營業局長吉武鶴次郎氏は營業方面に絶大な權力を持つてるのみならず威風を編輯局にまで及ばせてゐる。編輯行政の執行者は編輯總務岡崎鴻吉氏、編輯實務の尖端を切る者に整理部長平川清風、社會部長小野賢一郎、政治部長西村公明氏等がある。千葉龜雄、稲原勝治、阿部賢一の三氏は編輯顧問の名でそれ〴〵獨得の力倆を示してゐる。このごろ世界周遊の途すがら名文章を綴つて東日に寄せてゐる冷洋松内則信氏は出發の前まで主幹として編輯局指揮の重任に當つてゐた。德富氏が一週に三四回づゝ、とても年には見えぬ元氣一杯の姿を社賓室にあらはして、あの文章を無雜作に書き流すことは言ふまでもない。

大阪系四社にはさすがに人材が多い、その中でも一番先に頭へ浮ぶのは城戸大每主幹と緒方東朝編輯局長だ。この二人は人間に味がある。二人の性格や長所は對蹠的な部分がかなり多いに拘らず、人心を得て人の頭に立ち、これからもドン〳〵伸びさうに思はれる　城戸氏の性格はかなり複雜だが、エキスを引き出すと第一聰明、第二闘志、第三親分肌その他となるだらう。城戸氏を由比正雪に譬へる人がある。今言つたエキスに照らし合はせても大體當つてゐやう。ことに味方を心服させる手際を考へるとこの比喩は至妙である。しかし正雪みたいに謀叛を企てる必要のない環境に始めから城戸氏は置かれてゐた。正雪から謀叛を抜いては正雪が半分になりさうで變だが、強いて言へば正雪に最初から松平信綱の地位を與へると城戸氏になるとでも言はうか。また或る人は『城戸は原敬だ』と言ふ。力、膽、策、略で敵を粉碎して進むところ、大世帶をピリッともさせずに押へて行くところは確かに「大每の原敬」である。僕は常に、この人が政界に出てゐたら、と想ふ。今でも大臣にしたら江木鐵相くらゐにはやりさうだ。

緒方氏は見るからに圓滿具足の紳士だ。先考緒方洪平氏からして圓滿無礙の人。これも圓滿家の故野田大塊氏がよく『天下に緒方洪平ほど圓滿な人格者はなか』と人に語つたものだ。緒方氏は無價の遺産を受けついだものである。機鋒だの精悍さといふやうなものをこの人から感ずることは出來ない。緒方氏を床次氏に譬へる者があるやうに氏は卓越した手腕家でもなし、策略家でもなし、新聞人としての野戰攻防には不適任かも知れないが、統帥者としては天衣無縫、少しも作爲のない自然そのまゝの將器と言つていゝやうだ。震災後に一時、東朝の編輯局には局長が居ず、美土路、牧野、鈴木、緒方の四部長合議制が行はれた。その時、四人の中で一番年が若いからといふので緒方氏が幹事役を申し付けられた位であるが、天禀といふか、幹事がいつしか議長といふ格好になつて皆の意見を緒方氏が纏める、氏が纏めると纏まる。そこで三氏が社長に向つて『緒方君を局長にして下さい』と言ふやうな醜悔で現在のやうなことになつたと聞いてゐる。東朝編輯局は統率者に人を得て平和の中に協力の實をあげてゐる。

緒方氏についてかういふ話がある。元勞働農民黨の書記をしてゐた益田豐彦君は緒方氏と同郷福岡の生れで、小さい時分から緒方氏とよく知つてゐる。或る日、勞働農民黨本部へヌッと入つて來た緒方氏は益田君を近くの喫茶店へ連れ出し、ポケットからむき出しの

十圓札を何枚かつかみ出して益田君の胸先へつきつけ『これで溫泉へ行つて來ませんか、疲れを直して來なさい』益田君も至つて淸廉だから『溫泉へなんか行つてる暇はないし、要りません』と極力辭退したが緒方氏は『まあ〳〵』と無理に受取らせてから紅茶を一杯飲んで歸つたさうだ。その後、勞働農民黨が解散命令を受けた翌日、緒方氏は府黨本部へ使をやつて益田君に朝日社へ來て貰ひ、面會すると『これで安心した、どうも君がつかまつてゐるやうな氣がしてならなかつたが、君の顏を見たから安心だ』と言つた。官憲の彈壓には泣かない益田君もその時は泣けて仕方がなかつたといふ。

城戸氏も太つ腹で親切だ。金に困る社員にはいくらでも貸して呉れる。と言つて城戸氏はあまり金持ちではないが、社員が賴めば何處からか借りても都合してくれる。退社して仕舞つた人にでもポケットマネーを呉れたりする。氏のやり口は人心收攬策と見られぬことはないが、財布の口を締めてばかりゐる人よりは人心收攬でも何でも親切にしてくれる人の方が有難い。誰でも『食ふに困つた時には城戸氏に泣きついて行ける』と思つてゐる。なほ逸し難いのは城戸氏の手紙だ。實にうまい。城戸氏から手紙を貰ふと大ていの人は感激する。手紙は城戸氏の持つ極めて尖銳な武器の一つだ。

大朝の下村副社長と大每の岡副社長がまたい〻取組だ。前者は杉村楚人冠氏の紹介で大朝へ、後者は後藤新平氏の推薦で大每へ入つたのが同じ大正十二年『朝日へ下村とかいふ局長上りの法學博士が入つたので每日も岡つていふ局長上りの法學博士が入るんださうな、妙な處で競爭するもんだね』といはれたもの、下村氏は朝日へ入ると同時に專務の要職に就いて東朝の營業編輯兩政の主宰者になつた。始めは『官僚に新聞のことが分るものか』なんて冷たい眼で見られてゐたが、間もなくやつて來たのが關東大震災、東朝は社屋が燒けて難關に面したとき下村專務は斷然、楚人冠氏のめがねにたがはず、働いた。『案外やるわい』となつた。下村氏一人の力によるものではないにしろ東朝がすぐに復興を通り越して、燒け太りに大きくなるに及んでは專務たる下村氏の名聲が高くならざるを得ぬ。また事實、下村氏は早く役人臭味（始めから少い）を淸算して新聞人になり切つてゐたのだ。かなり銳い切れ味をヌーボーの袋に包んでゐるところが永田市長に似てゐる。靑嵐が俳句やれば海南は和歌をつくる。とにかく下村氏はすつかり新聞界に根をおろしてもはや押しも押されもしない『朝日の下村』になつて仕舞つた。

岡氏はエコノミストに關係したり、地方の「東日講演會」に博士の肩書を利用されたりするだけで、下村氏に比べると振はぬ地位に大ぶん長くくすぶつてゐたが大正と昭和の境目に東日で元號問題（昭和の元號を光文と誤報した）が起り、城戸氏が責任を負うてポイと拋り出した主幹の椅子に据つてからの岡氏は急に伸び出した。元號の轉禍は氏にとつて運命の轉機であつたわけ。下村氏のやうな切れ味と潤達さはない代りに岡氏は公平と堅實でヒタ押しに押す。それで副社長に漕ぎつけたのは岡氏の方が一足先だつた。岡氏に向つて『もつと酒を飲んだり遊んだり乾兒を作つたりしないと根がつかんぞ』と忠告する親友も

あるらしいが、その忠告には耳を傾けないところが岡氏の長所、それで副社長になれたのだらうが、それだけに副社長となつても外様大名の感じが取れない。下村副社長が役人時代からの乾兒たる石井光次郎氏を營業局長に据え、編輯局にも杉村楚人冠氏のやうな知己を持つて、貧乏揺ぎもしない地盤に座り込んでゐるのとは趣が違ふ。

大朝の高原氏と大毎の高石氏はよく並稱された。高石氏は行政から手を引いて主筆の閑職に居るが久しく大毎主幹として群雄を統御したもので、行政家としては徹底的な是々非々主義を奉じた點が好評でもあつたが一部からは御利益の薄い人と思はれることにもなつたらしい。そこが城戸現主幹と違ふ點だが、城戸氏に缺けたところが高石氏にあり、高石氏の持たぬものを城戸氏が備へてゐるといふ處だらう。高石氏は留學と特派員で八年も海外生活を送つたゞけに風采だけでなく日本離れのしたゼントルマン・タイプ。從つてスポーツマン、殊にゴルフと來たら目がない。或る人が『高石さん、あまりゴルフに凝ると社内の工合が惡くなりませんか』と言ふと『ゴルフは職を賭してもやるんだ』と言つたところに風懐が偲ばれる。

高原氏は快活な點で高石氏と同じだが、高石氏は少しツンとしてゐるに對して高原氏は人の顔を見ればいきなり駄洒落を飛ばせたりなんかして氣の置けない感じを人に持たせる點は優れてゐる。東大文科の哲學科を一度卒業してから次に京大の政治經濟科を出たことでも分るやうに文學、哲學、政治、經濟なんでも御座れで知識がとても豐富だ。文章も社説のやうな硬いものでも、漫文的な軟かいものでも自由自在、輕妙洒脱なユーモアで評判であつた大朝經濟面の「水銀燈」は久しく高原氏が書いたもの、演說がとても好きで、またとてもうまい。硬い論旨をユーモアでほごして置いてやがて刺すやうな警句で引き緊める呼吸なんか鳥渡眞似手がない。「鏡堂」の號はユーモリスト高原氏を現はしてゐるが、大朝の編輯局長たること十一年、故舊にも部下にも溫かく上下の信望を集めてゐる、少くとも大朝における氏の足どりは蹇ではなく、春風を往く駿馬のそれだ。

杉村楚人冠氏だけは誰かと取組ませやうにも格好な相手が大阪系四紙にも全國の新聞界を見渡しても見つからない。それほどユニークな存在だ。新聞記者、といふと第一に楚人冠が唇へ出て來る。新聞記者は大てい俗中の俗人と決まつてゐるが楚人冠だけは垢拔けがしてゐる、とはいへ禪坊主ほどでもない、或孫子の方から東京の空へ痛烈な皮肉を浴びせる、不平や、叱言もいふ。實のところ僕は楚人冠氏を知らないのであるが實際つきあつて見たら隨分やかまし屋のつき合ひ憎い人かも知れぬと想像したり、その反對に、腹の蟲を筆の先で發散させてるから本人はいはゞ皮肉や叱言の投げ賣で案外好々爺かも知れぬとも想像する。「うるさき人々」の中で少しもうるさくない博士と坊さんをつきまぜたやうにサラリとした人物を想像に描いて杉村廣太郎と名づけても見る。とにかく主幹だとか主筆だとか編輯局長だとかいふものにならんだけは氣持がよい。重役にされても監査役でドン尻に控へてゐるところが嬉しい。その癖、朝日の全紙面で『今日の問題』ほど讀者を持つてる欄があるか。『今日の問題』が出來の惡い日は楚

人選氏が病氣か何かで許けなかつた日ださうな。顧問といふ隠居席へ腰かけてゐて實は讀者の大部分をさらつてゐるんだから面白い。

•

大朝營業局長の小西勝一氏は七十いくつかのお爺さんだが大朝の店先に構へ込んで二割配當のできるほど儲けるから偉いもんだ。商賣のやり口は堅實無類。一昨年増資の時に村山社長が小西翁へ功勞株を何百株か與へようとしたら小西翁は手を振つて『それだけ下の方の人に分けて下さい』と。これだけのことが言へる人は新聞界も廣いが容易に見付からない。

上野大朝專務は故上野大朝社長の後嗣。東大法科を出て朝日に入るとから幹部で來た人だが、物分りのいゝ紳士、育ちがいゝから生馬の目を抜くやうな業は無いが、大朝の專務として立派に勤まるだけの見識と手腕がある。今年四十九の働き盛りだ。頭はツル〱。三十そこ〱から綺麗に光つてゐた、福德圓滿の徴だ。

高木大毎專務は六十歳だが少しも禿げてゐない。二十一の年に慶應を出てすぐ大毎へ入り、經濟記者を振り出しに筆の人として頭角を顯はし日清戰爭には從軍記者に選抜された位、のち經濟部長や政治部長も勤めてから算盤の人に變つて本山社長を輔け大毎覇業の功勞者である。人物清朗、筆の方から出た人だけに編輯方面に充分理解がある。得難い經營者だ。

•

吉武東日營業局長は小柄で、白面で、いつもニコ〱してゐる。いかにも物腰が柔かだが、一と皮むいたら凄い腕前だ。明治三十一年以來今日まで大朝と東朝は恐怖の目をこの人に注ぎつゞけてゐる。新聞營業界では、右に左に相手を薙ぎ倒してゆくことを東日流と言ふが東日流とは吉武流のことだ。大正十二年に大毎から東日營業局長に轉じてから、東日は躍進また躍進で、吉武氏の威勢が今日全東日を壓する慨があるのも道理だ。

石井東朝營業局長はたつた三十五の時に今の職についたのだ。下村氏が見込んで臺灣總督府參事官から石井氏を引き抜いて東朝へ据えた。石井氏が腰掛けについたかと思ふと大震災、それからあらゆる畫策、奔走、努力、快漢石井の眞骨頂を發揮して東朝の復舊、復興、進出、大躍進を遂げた。石井氏には時勢を見る目と『矢でも鐵砲でも來い』といふ強氣がある。新聞界で最も多く明日、明後日を約束されてる男だ。柔道が強く、情味も解する。十年あまり前に警視廳の保安課長をつとめたこともある。

われ〱が毎朝ひろげて見る東京朝日新聞は美土路昌一氏が一人で作つてゐるのだと言へないことはない。氏は事實編輯主幹兼整理部長として編輯の任に當つてゐるが、もつと廣い意味で、東朝編輯局隨一の働き手だ。全國の新聞記者から最も優秀な人を求めて三指を屈すればその一人には必ず美土路氏を入れねばならぬ。敏捷、聰明、闘志、俠氣、すべて大毎の城戸氏と同型だ。部下の材幹を見わけて優秀な者を徹底的に世話する點では城戸氏よりも一歩上だ、が「切れすぎて怖い人だ」といふ感じを與へるのが損である。

そこへ行くと同じ編輯局主幹でも政治部長の牧野輝智氏はおとなしい。經濟記事の通俗化を遂行して一新生面を開いたのを始めとしてヂヤーナリストとしての鋭さを示した業績

はいくらもあるが、人物には記者らしい鋭鋒が見えない。「經濟學博士」が證明する如く學究的であるために社交方面へ出ないのは惜しい。規則な學問をして商業學校の先生をしたこともあり特許局の小役人を勤めたこともある。東朝でも獨立獨行、實力で今日の要位にある。

社會部長の鈴木文史朗氏は口も八丁、手も八丁、見るからに精氣が迸つてる、自分で飛行機に乘つてあのピチ〳〵した名文章を書いた。たゞ自分の腕が立ち過ぎて部下を使ひこなすことが不得手だといふ評がある。その點さへ圓熟して來ればおそろしい。

今は編輯局附部長待遇の名で政治部の實務を取つてゐる前政治部長野村秀雄氏は手腕、情味も豐かだが一言で言へば俗を措くに足る人。論説委員關口泰氏は溫厚な人だが、大新聞の幹部中で左翼思想を理解する唯一の人、近ごろ世間では關口氏が共産黨事件に關聯して取調べを受け社の方を首になつたといふ噂がある。それは嘘。野村氏といひ、關口氏といひ、その人柄が燻し銀の色合で、朝日に似合つてゐる。

東日編輯總務の岡崎氏は酒席で餘興を強ひられると六尺豐かの身體をスックと立て、『わたしは餘興ができませんから代りに酒を飮みます』と杯洗になみ〳〵と酒をつがせて一と息に飮み乾すところなんか面白い風格がある。身體は太いけれども紙面の端から端までどんな小さい記事でも見出し、書き振り、誤字に至るまで注意するといふ風で萬事にとても細かい所まで氣が附く。それも氏の東日第一主義から來るのであらう。本山社長の信任が厚い。

今海外旅行中の取締役松内冷洋氏はその昔他社をして『毎朝東日をあけて見るのが恐ろしい』といはせたほどの名社會部長。JOAKでおなじみの松内アナウンサーの兄さん。今は溫雅掬すべき重役。洋行から歸つて來ると再び編輯局の要位に即くかどうかゞ頗る興味を以て見られてゐる。

小野社會部長は往くとして可ならざるなき才腕で東朝の鈴木社會部長と對陣してゐる。最も未來を嘱望されてゐるのは整理部長平川清風氏だ。勉强家で頑張り屋で、それに御連枝である。東日で御連枝とは社長と同じ熊本縣人のことを言ふ。氏は御連枝でなくとも重役まで行ける人、人間の出來工合も水準線を拔いてゐる。

大朝編輯局は整理部長原田讓二氏を軸にして廻る。原田氏は曾て東朝社會部長として鳴らした人、頭の働く事、人の使ひ方、文章、編輯技術、その他何拍子も揃つて恐ろしい人。大每側でこれに對抗すべき人をと探し求めて城戶氏が大每社會部長に迎れて來たのが元、每夕編輯局長としてヂャーナリズム上の辣腕を謳はれた德光衣城氏だ。四六時中頭が社會部的に、天才的に閃いてゐる上に馬力の强い德光氏と原田氏の對戰は、大朝大每戰の中でも最も目ざましい劍劇的場面だ。

最近に全新聞戰線に異常な衝動を與へた大事件は野間講談社長の報知新聞入りだ。雜誌報國で瞬く間にミリオネヤーとなつた梟雄の新聞界遠征だ。他新聞の幹部は『なあに雜誌で成功したからつて新聞はさう簡易に行くもんぢあない』と冷かに微笑を送つてゐるものの、内心ではかなりの脅威を感じてゐる。野間氏は六月廿六日始めて報知へ乘り込んで全

社員を集めて「新聞報國」の大演說をやつた。その手土產にと金一萬圓也を全社員に分配した。そのせいでは無論あるまいが、その後報知社員の新社長に對する評判は非常によろしい。手土產の有無に拘らず資本の征服は被征服者に魔醉の快感を與へるらしい。

とにかくこれで去年から行惱み中の報知增資（百六十萬圓から三百萬圓に）は解決する。資本主義的經營法で報知の更生を期する野間氏の意氣込みは非常なものと聞く。

新聞界では『野間氏が新聞にキング、講談倶樂部式の低級ヂャーナリズムを引入れはせぬか……』と心配顏をしてる者もあるが今日の新聞人はそんな大口を利く資格はない。雜誌讀者層を狙ひ當てた企業家野間氏は新聞讀者層の測定にどんな炯眼をあらはすか。氏が東朝、東日を向ふに廻しての爭覇戰は一九三〇年の超特作的な見ものである。

報知新聞はさきに太田正孝氏去り高田知一郎氏去り、動搖また動搖で陣容うたゝ寂寥を覺えしめた際、野間氏は副社長に寺田四郎氏を連れて來て据え、講談社廣告部長赤石喜平氏を報知廣告部長に移した。編輯局長は廣田四郎氏の据置きであるが、まだ／＼野間氏は人材を入れて陣容の充實を圖るだらう。寺田四郎氏は東大在學時代に、その頃渺たる東大法科書記だつた野間氏に雜誌發行をすゝめ、それを助けた緣故から野間氏と長い親交があるが、野間氏と主從關係はなかつた。寺田氏は東大卒業後長く英國に留學して歸朝後辯護士開業、法學博士になり、のち一寸八千代生命の專務になつたが、八千代はあのていたらく、しかしそれは寺田氏の罪ではない、氏は地味すぎる位堅實だ。今度は社長の華と副社長の實とが案外にいゝ樂音を出すかも知れない。

『日本一』と誇つた時事新報は富士山をマークにしてゐるが、今の時事は登り坂にあるか降り坂にあるか。それは謎としておかう。社長門野幾之進翁は慶應閥の長老、昭和四年の增資（四百萬圓から六百萬圓）を行ふ爲めの臨時社長に擔がれた。增資は出來たがもう少し先の見据えが付くまでといふわけで「臨時」が長引いてゐるが自ら起つて働くには餘り老すぎた社長をいつまでも頂いてゐるところにも空氣沈滯の一因が有りはせぬか。

主筆板倉卓造博士は慶應義塾の講義と掛持ちである、政治家肌で腹もあるが、敢て編輯行政にたづさはらうとせず、超然と社說だけ書いてゐる。

で時事の筆政を主宰するのは編輯局長伊藤正德氏だ。ワシントン會議のとき歐米一流の記者を向ふに廻して、見事、四國條約を素つ破抜いて以來『マサノリ・イトー』の名は世界的になつてゐる。三十三歲の若さで編輯局次長になり、四十前に編輯局長になるなど、出世双六の進み方が恐ろしく早かつたが、氏はクリーアな頭で努力する。海軍記者時代には海軍大學校のノートを借りて勉強した位で、その遣り口が普通の新聞記者とまるで違つてゐる。ワシントン會議での成功は偶然でなかつた。若いに似合はず人間が出來てゐて情味もある。氏と對談してゐると爽快な氣分になる。

池田成彬、藤原銀次郎、武藤山治氏等、三田閥中の利け者が伊藤氏を支持するのも偶然でない。後藤伯などは、伊藤氏から電話をかければどんな眞夜中でも電話口へ出た。加藤高明伯邸では木戸御免だつた。とにかく伊藤氏は人に取り入ることの天才だ。增資後の時事が

『日本一』を取り戻すには、氏の肩にかゝる所が多い。

營業局長籾山仁一郎氏は去年入社するまで書店を經營してゐた。腰の低い商人肌である。新聞經營の手腕は未知數、注目されてゐる。籾山氏を補佐する神吉總務局長は早慶戰創始時代の「名選手神吉」だ。こゝで快打一番、時事を勝利に導くべきピンチに立つてゐる。

國民新聞は今年上半期の缺損約十七萬圓だ。根津嘉一郎氏といふ名うての儲け主義者が儲からぬ事業にまだ見切りを付けぬのは不思議と言へば不思議だが理外の利があるのかも知れない。

編輯主幹山根眞治郎氏は德富氏時代に社會部長として鳴らしたもの、鋭利な鉈のやうなジャーナリストだが、今は營業局長を兼任し編輯局長細野繁勝、總務局長布津純一兩氏を兩翼として頽勢挽回に能力を出してゐる。最近に各社との協定を破つて日曜夕刊を出すことにしたのはいよ〱背水の陣と見える。悲壯である。

中外商業新報は三井財閥を背景とする特殊新聞だ。金は三井がいくらでも出すことになつてゐる。三井財閥の一企業と見てもいゝ。中外では社長簗田鈫次郎氏の獨裁政治が行はれてゐる。編輯局長佐藤三郎氏と總務局長村上幸平氏はおとなしく員に備はるだけで、簗田御大自ら編輯、營業の總采配を振る。社員から給仕の末に至るまで一人殘らず簗田氏が直接に人物試驗をして入れたものだから統帥權の完全に行はれることは他に比類がない。飛び廻りの經濟記者から叩き上げた社長だから編輯にも明るい、經營の手腕もある。簗田氏に對する三井の信任は絶大だ。殊に氏と有賀長文氏とは好い。氏が三井へ行つて頭を下げさへすれば三井は資金を出す。獨裁政治の行はれる所以だ。こんな風に資本と有能な經營者が揃つてゐるのに、中外の營業成績は漸く收支相償ふ程度である。東朝、東日以外の新聞は現在では企業としては成り立ち得ぬ狀態にある。こゝに、將來における新聞トラストの出現を豫測し得る根據があると思ふ。

讀賣新聞は日本工業倶樂部に屬する大財閥の共同支援で立つてゐる。鄕誠之助氏の後援で社長になつた正力松太郎氏は東朝や東日に似た紙面を作らぬ編輯方針の下にラヂオ版創設、圍碁將棋欄大擴張その他創意的な紙面改革を行ふと同時に、營業方面でも持ち前の突進性を發揮したので、松山前社長時代からの頽勢をよほど持ち直してゐる。東京市疑獄事件に關係したのは大醜態だが、最近山崎光次郎氏を編輯局長に拉して來たのは傑作だ。山崎氏はもと大每と東日で整理部長をつとめてゐた頃、將來大每か東日の編輯局主幹になる人と見られてゐた。ある事情のために東日を退いたけれども人格といひ、手腕といひ申分ない。やがて讀賣の紙面に山崎氏の風格がにじみ出て來るだらう。

都新聞の社長福田英助氏は足利の織物商だけあつて『新聞は損をしてまで出さんでもいい、資本を出して新聞をやる以上は儲けにやいかん』といふ徹底した新聞商品主義者だ。演藝欄と社會面に力を入れて「花柳新聞」の株を守ると同時に經濟面、特に相場欄に力を入れて特殊な讀者層へ喰ひ込んだ結果、實際に儲けつゝある。現在東京の十八新聞中で相當の利益をあげてゐるのは東朝、東日の外には

都あるのみだから、福田氏が『損をしてまで新聞を出さんでもいゝ』とお天狗になるわけである。都の編輯局長山本信博氏と營業局長吉川庄一郎氏はどちらも溫厚で、福田社長の命これ奉ずる式にやつてゐる。

東京毎夕の社長木村政次郎氏は名うての黄金主義者で、記事やなんかはどうでも構はん賣れさへすりや、式に物分りのいゝ男だ。社の營業が損であらうと何であらうと毎月四千圓は社長費として現なまで持つて歸るさうだ。社員はこれを「皇室費」と呼んでゐる。毎夕の編輯局長御手洗辰雄氏は報知の社會部長時代に麒麟兒的な腕前を見せてゐた。

やまと新聞は近來走馬燈のやうに經營者が變つた揚句に最近、子爵藤波茂時氏が社長となり、今までの三十間堀から芝愛宕町に移轉し、三十間堀の地主たる富士製紙から呉れる筈の立退料五萬圓で一と息つかうとしてゐる矢先に、社内の望月一郎派と茂木久平派が大喧嘩をおつ始め、新聞はそつちのけで双方暴力團を傭入れて追ひつ追はれつの對抗戰をやつてゐる。新聞は無論出ない有樣だから富士製紙は『立退料を誰に渡していゝやら中心勢力が不明だから渡されぬ』といつかなこと五萬圓を出さないので兩派は暴力團に給料も拂へず青息吐息だとは悲劇の大詰めが飛んだ喜劇になつたものだ。

地方新聞に及ぶ餘裕が無くなつたが、いくらでも野に遺賢あり。一例をあげると金澤の北國新聞でしきりに氣を吐いてゐる鴨居悠君と競爭して負けない社會部長が東京の新聞にだつて何人あるか。

レヴユー、これで幕。

全體にすこし讃めすぎたやうだ。舞臺ではとても綺麗に見えた役者の素顏を見てびつくりすることがあるやうに、第一流の新聞人も鳥渡裏へ廻れば案外に醜いことや間拔けなことをしてゐる。そこは讀者諸君がそちらでよろしく割引して下さい。

買占銷夏漫談

高木貞二

一、

失業者百萬突破、前途を悲觀して家族心中、辨當のない兒童校庭に倒る。正に文字通りの殺人的不景氣のなかにあつて、百萬以上の金を儲けた上、その金で米の買占めまで目論んだ男がある。六月十九日の都下の新聞は米が十キロについて、八錢も急騰したことを報じた。

別段天候が不順だといふわけでもないのに諸物價の低落を尻目にかけたこの米の騰り方は、いふまでもなく相場師の手の振りやう一つによつたものだ。馬越某といふ高利貸兼職業的相場師が、東西の市場を通じて、十萬石以上の米を買占めたものだ。日ならずして相場は落ちついたが、それは無論米の値の上ることを心配して彼等が手を引いたゝめではない。

大正十年の米穀法實施以來相場は從來のやうな亂高をなし得なくなり、したがつて相場が少し上がれば一先づ利食ひ賣りをする必要があるためだ。馬越某の買占めも、それ故、今後とも多少のキッカケさへあれば再發すること當然で、準備に怠りないといふのが市場消息通の一致した見解である。

市場通が一致してゐる説にモ一つある。それはこの馬越某と共に、東西の米の買建てをしてゐるのは、大部分昨年來東西兩株式市場で賣り方に廻つて巨利を博した連中だといふのだ。西では例の借金王石井定七、島徳藏の一派、東では昨今の兜町唯一の成金林莊治、鈴木由藏の一派だ。

これ等の連中は昨年の春あたりから、株式市場で極力賣つて來た。何故賣つて來たかと云へば物價の低落、金融の引き締り、商賣不振、言ひかへれば今日の殺人的不景氣を見越してからのことだ。かうして不景氣を前提にして巨利を得、その得た金を資本にして、日本人にとつては命の綱である米の買占めを行つてさらに儲けやうといふのが彼等の魂膽なのだ。いまさらながら相場師のアクドさ加減には驚かざるを得ない。

この林莊治一派について、奇怪な噂が流れてゐる。本誌前々號の瀬田氏の文章のなかにも表はれてゐる高橋龜吉君や石橋湛山君、それに小汀利得、山崎靖純兩君のやうな優秀な經濟時評家諸君に關する噂だ。果して噂が眞實かどうかは筆者の知るところではない。たゞ此等の諸君、簡單にいふと新平價解禁論者諸君の卓抜の意見も、經濟國難を憂へる愛國的熱情もそれによつて、最も利益を與へられたのは彼等相場師中の賣方一派だつたことは疑ひを容れないらしい。

今日の日本の殺人的不景氣も、譏れる井上式財經政策のあらん限り打開し得ないこと諸君等の高説通りかも知れない。その研究、執筆の多忙な時間を割いて、西に東にかけ廻つて講演料の出さうもない講演をやつたり甲の

雑誌、丙の新聞に原稿料に縁遠うさうな健筆を揮つた熱情にも一應の敬意は拂ひ得やう。

たゞ筆者が甚だこれ等の諸君にお氣の毒に思ふのは、諸君の言説が大衆に訴へた力よりまた爲政者を動かし、反省せしめ得たところよりも、不景氣のうちにあつて米だけは買占める勇氣のある株式市場の賣り屋連の宣傳代りとなつた觀あることだ。

元來相場師にとつて、卓拔な意見や、憂國の熱情などといふものはそれ自身何等尊重に値ひしないこと、賢明にして、財界の事情通であるこれ等の諸君が最もよく知つてゐるであらう。

昨年來の株式市場での賣り屋連中にとつて不景氣必然論が盛んであればあるほど、儲けが多くなつたことは自明の理だ。それも赤い連中の××だらけの沒落資本主義論による不景氣必然論などではどうも劍呑だし、第一利用價値がない。少くとも株を賣つたり買つたりするほどの人間がそんな言説を信じないこと當然だからだ。そこへ行くと前記の林莊治の店の顧問格だと噂される高橋君の議論などは定評のあるプチブル的不景氣論で、しかも大衆的にも名を賣つてゐるし、他の諸君もそれぞれ株屋連の最も信頼してゐる言論機關に據つてゐる。

この間の連鎖を純粹に論理的に辿れば、新平價解禁論者の遊説費が林莊治のポケットマネーではないか、諸君の著書を、論文をその宣傳用パンフレットとして、餘計に買はなかつたかなどといふ噂も生じ得やうといふものだ。尤も噂さに上る御本尊に何等罪なきことはいふまでもなく、却つてお氣の毒の至りだと思ふが、噂する世間も別段惡い氣ではないかもしれぬ。それなら林莊治君に罪ありや、かうなると筆者も何とも云へない。むしろ先見の明を以て巨利を占めた眼光に敬意を表さすばなるまい。米の買占めについても癪に障ることは確かだが、現行法制と經濟道德の範圍內では何等批難すべき根據がない。

結局今日では致し方ない悲喜劇だと筆者は見てゐる。同時にこの結論はこの漫談全體の結論でもあるのだ。

華やかに呑氣なるべき買占漫談も、本論に入らぬうちから、はからずもジメジメして來た。これも殺人的不景氣の故か、乞ふ讀者諒せよ!

二、

明治の日本買占史に逸することの出來ないのは、何と云つても天一坊こと松谷元三郎だ。彼の關係した買占の主なものをあげても明治三十一年の參宮鐵道株買占、同三十二年の豐川鐵道株買占、四十四年の內國通運株買占、米の方では三十一年の堂島の買占、三十八年の蠣殼町における買占、四十二年の有名な松旋と組んだ買占等枚擧に遑がない。その遣り口も名打てのワルだけあつて、根強く、エグく、その策もなかなか深慮遠謀だつた。二つ三つ見本を拾つて見やう。

明治四十四年兜町の仲買店敏軒に、いろいろな名前で、內國通運の新株の買注文を發する者があつた。當時の仲買人は、少しまとまつた買注文をする客などがあれば逆に聯合して賣り向ひ壞滅させる位は常例であつたからこの時もこの買注文が、遣らずブッ賣りで有名な天一坊と露知らず例の如く賣り向つた。

實は天一坊のこの買占めにかゝつた計畫は新株から始めて親株に及び、內國通運を乘取つて解散してしまうといふ算段だつた。同社は全國の主要都市に、明治初年頃地價の暴落した當時買込んだ莫大な土地を有つてゐた。それにまた運送會社として種々な權利をも有

してゐたことは多言を要すまい。天一坊の目をつけたのはこゝだ。會社を乘取つて解散すれば土地の賣却金と、運送會社としての諸權利金とで株價以上の拂戻しのあることは必定と見たのだ。かういふ目算からその背後に相當有力な金主まで、用意してかゝつたのだから、十四軒の仲買を通じて約二ヶ月間に一萬數千の通運新株買越を擁して、さてその覆面を解いた時は、いまゝで田舍の慾深地主の助平思惑位に心得て賣り向つてゐた仲買人が驚いたのも無理はない。

もともと内國通運新株は全部合せて一萬二千五百しかないところへ、すでに天一坊は一萬數千株の買越を擁し、株價も二十六圓彌みから五十圓近くまでヂリヂリと高くなつてゐた時だ。いまさら賣屋も手が引けない。

いまに降參するだらうと待つてゐるが、乘取り目宛ての天一坊は利喰ひなどは少しもせずに、受け渡しの日まで待つといふ有樣だ。到々賣屋十四人が顧問辯護士帶同で集まつて見たが妙案の出やうはずもない。一方天一坊は例の如く『正株を渡せばよし。さもなければ非道い目に合はせるぞ』とばかりに火のついたやうな催促だ。かうなつては賣屋も不貞腐れて『どうでも勝手にしろ』とばかりだから、圓滿解決のしやうもなく、天一坊にもどうにもならないので任意解け合となつた。しかし賣屋連中その値合金も滿足に支拂はない始末、いな實際支拂ひ得なかつたのかも知れない。

カンカンになつたのは天一坊だ。取引所へは不都合な仲買人を何故除名しないかと吐鳴り込む、農商務省へは取引所へ早く仲買人除名の命令を出せのとうるさく騷ぎ廻つたがロルで定評のある天一坊のことだから誰も相手にせず、結局天一坊の泣き寢入りになつてしまつた。

この事件の後では流石の天一坊も『折角の妙案を持つてゐながら、俺が札付きのものなので、仲買人は不貞くされて、株も値合金も渡さない。だから金主まで俺を仲買の八百長の樣に惡く云はれる』とコボしたさうである。

相場師仲間でも流石に天一坊のやうなのにはボイコットを喰はせる事もあるのである。

明治三十一年の堂島でやつた米の買占事件もこれと相似た結末をつけてゐる。相場にかけては深謀遠慮の彼は、この時先づ堂島取引所の株から買占めてかゝつた。それから自己腹心の配下である杉山某を理事長に祭り込んで置いて、七月限の定期米買占めの策動を始めた。これに對し地場の相場師連中が聯合して賣り向つたが、肝心の取引所と肚を合はしての天一坊の仕事だから賣方が大勢でもビクともしない。

相場は急騰せざるを得ない。それと共に取引所から賣方に向つて急激な增證據金の納入を迫つて來た。いふまでもなく天一坊の命令からだ。如何とも仕樣がなくなつた賣方は、どうも取引所と買方との間に何かあると見たので、委員が上京して時の農相曾根荒助のところへ泣きついた。その結果却つて農商務省から米の即時受渡實行を取引所に命じたのであるが、時すでに遲くて、この命令を待ち切れず賣方中に天一坊の軍門に降つたものがあり戰は五分五分の引き分けに終つた。

ところがこんなことで引込む天一坊ではない、今度はさらに九月限の買占めに、かゝつた。そこで再び相場は上り增證據金の納入命令、委員の上京といふ前と同樣の筋書を追つた。しかし今度は農商務省が動かない。前例に懲りもしないで、定評のある天一坊などにかゝり合ふのが惡いといふのだつた。仕方が

ないのでさらに内田山の雷爺で通つた井上侯のところへ持ち込んだが、これがうまく成功して文字通り雷が農商務省に落ち、二名の書記官が急遽西下して、取引所の帳簿檢査をして見ると、案の定、買方の天一坊一派の證據金が入つてゐない。正に堂取の解散とまで行きさうだつたが、結局天一坊一派が追ひ出されて、この買占めは全く買方の失敗に終つた。

天一坊はその後明治三十八年に蠣殻町で四十萬石の大買占をしたが、この時は賣方の上清こと中村清藏が三十八萬何千石かの正米を深川に積んだため徹底的に、不成功に終つた。しかしこの時も天一坊は、この四十萬石に近い米を入れるところがなくて、澁澤倉庫の納屋に積んであつたのを奇禍として失敗を肯じなかつたが、結局倉庫側が罰金を出した位で天一坊の損失はどうにもならなかつた。

三、

もつと近頃の買占史で忘れられないのは例の石井定七だ。その借金を踏み倒した額六千餘萬圓被害銀行七十餘行といふ借金の點からも第一人者だつたが、買占めの大掛りなことも一頭地を抜いてゐる。

面白いことには彼がその石井姓を冒すに至つたまでが買占めを緣としてゐることだ。彼が生國近江の國から飛び出して大阪で奉公した店が石井といふ材木店だつた。まだ二十前の彼が、主人に内證で買占めた材木で儲け、それで見込まれて養子になつたといふのだ。もつともこれだけで濟ませば、あんな大騒ぎを惹き起さずとも、有力材木商で終始したことになつたらうが、彼生來の買占め衝動は遇々欧洲大戰の好景氣に際會して銅相場で一千萬圓近くの金を儲けて以來、色々の相場に手を出して、トントン拍子で儲けたが、その内でも買占史に華々しい名を殘したのは、五十萬六千石といふ前古未曾有の大受米を行つた大正十年の買占めと、その失敗を取り返へさうとして、却つて沒落の期を早めた鐘紡新の大買占めだつた。

大正十年頃の彼はすでに北濱や三品市場で横堀將軍の名を以て聞えた大相場師になつてゐた。夏の天候が不順を示すのを見てとつた石井は、畝軒の機關店を通じ極力買進んだ。値段は上るばかりで、到々正米より期米の方が二、三圓も高いといふ變態的な相場を生むに至つた。こうなれば全國の正米屋が期米に賣り繫ぐのは當然な話だ。しかし米は不作には違ひなかつたが、同時にまた、不作の聲に脅びえて食ひ延ばした前年の殘存米も相當數量に上つた。いまゝで騰りに騰つた相場は果然崩れ出した。

しかし石井にしても今さら手を引くわけにはいかないから、意地にも買ひ支へざるを得ない。到々十一月三十日の受渡しで果して石井が現金を積み得るかどうかといふ瀬戸際にまでなつた。

しかしこの時は兎も角、受米代金二千三百萬五千七百三十圓といふ大金を奇麗に揃へて、五十萬六千石といふ恐らく空前絶後であらうところの大受米を實行し得たが、この時すでに横堀將軍石井定七の運命は下り坂にあつた。

正米より二、三圓方高い受米をしたのだから、それだけでもすでに百四、五十萬圓の損はしてゐる。加ふるに受米代金の遣り繰りで無茶な借金をしてゐたのだが、たゞ次ぎに述べる鐘新の買占に失敗するまではボロが明みに出なかつたといふまでゞあつた。

さて未曾有の米の買占めに失敗した石井はこの損失を一擧にして取返さうと狙ふわけ

で、大正十年の九月末頃から東西の取引所に十數軒の機關店を擁し、鐘紡新株を買進んだ。全盛の石井が堂々名乘りを上げての買占めだ。之に所謂提燈をつける者も隨所に表はれて、二百圓臺にあつた鐘新は、十一月の定期先物三百五十七圓五十錢といふ高値を呼ぶに至つたが、石井はまだ滿足せずにさらに高値、高値と買ひ煽つた。遂ひには四十圓拂込の新株が五十圓株の親株よりもまだ高いといふ奇現象さへ呈するに至つた。鐘新全株數十六萬株に對して、石井の買占二十一萬株といふのだからこんなことも無理ではなかつたのだ。

すでに米の買占めで金の行き詰つてゐた石井が、どうしてまともの金で、これだけの大買占めの資金が集められやう。彼は先づ當時の大株理事長島徳二と島徳藏に談判して、證據金を手形で納入することに成功した。元來證據金は現金又は現金に代はるべき有價證券と定められてゐるのだが、島は石井に限つて手形で納めることを許した。

一方石井は、後になつて數千の預金者を泣かせた高知商業銀行を利用してこのカラクリ借金、その他借金術の奧儀の一切をつくして買占め資金を調達した。けれどもこんな金が何時までも續く氣遣ひはない。その義弟が不渡手形を出したのを轉機として漸次金詰りに陷つた。

三月に至つて鐘新が三百六十圓といふ最高値を唱へるに至つた時、到々短期の四萬株を受け切れなくなつた。賣方はこゝぞとばかりに極力賣り浴びせたから相場は忽ちにして棒下げに下げてしまつた。取引所も止むなく立會停止を行つたが、石井が差れば、同じ穴の貉である島徳も差るので、その翌日は『石井から確實なものが入つた』と唱へて立會を再會した。しかし時すでに遲しで、鐘新の相場は落潮止まるところを知らないといふ有樣になつてゐた。そこで再び立會停止を命じ、島德の指金で三百四十五圓で總解合といふ、石井にとつては頗る有利な解決が下されたが、その沒落を救ふことは出來なかつた。

かくして自らもお白洲の裁きを受けざるに至つたのみか、關係者數名の繩付きをさへも出して、稀代の相場師も沒落してしまつた？ しかし石井は今日なほ堂々邸宅に住み、依然として相場を張つてゐることは周知の事實である。

四、

以上に述べた二人のやうな相場師は、もう出まい。それはすでに今日の株式が、これ等相場師輩では到底齒の立たない大金融資本閥の監視のうちにあつて、取引所の投機も結局これ等金融資本閥の許可なくしては巧妙に作用し得なくなつたからだ。昨年暮れのアメリカにおける取引所恐慌は結局大金融資本閥に安値で株を賣渡す作用を演じたに過ぎなく、相場師としての利得を得たものはほとんどなかつた。この同じ理屈が日本の今後の取引所投機に表はれることだらうから、また米の買占めは、日本の帝國主義的食糧政策によつて鮮米の大量移入の行はれる以上、到底有效に出來るものではない。

それ故以上の二人を特に拔いて書いたのは今後おそらく表はれまいと思はれる典型的な相場師を說明したに止まる。

五、

明治三十一年の春、東株市場で行はれた北海炭鑛株の買占めは、明治四十四年の同じく東株市場での東新ジャ取引所の買占め事件と共に事件が波瀾に富んでゐて面白い。

北海炭鑛の方は、丁度日清戰後の反動時代

の出來事だ。兜町の有力仲買人の連中がその前年あたりから聯合して北海炭礦株を買ひ進んだ。これに對する賣方は天下の絲平で通つた田中平八と、これも横濱で名うての貿易商島清こと今村清之助だつた。

財力から云つて賣方の強いのはいふまでもない。ところが買方に如何なる黑幕がゐるものか、強力な賣方の賣り浴びせにも拘らず相場は上る一方だつた。五十圓拂込の親株が百十一圓、二十八圓拂込の第二新株が六十四圓といふ高値を呼ぶに至つた。

ところがどうしてもその背後にゐるものの正體が判らないので、そこは噂製造には最も天才的な連中だけあつて、途方もない說が聞え出した。どうもこれは日本人じやない、外國人らしいといふのだ。曰く『イギリス人が東洋の制海權を握る必要から、石炭供給のため北海炭礦に目をつけたものだ』曰く『ロシアが軍事上の必要から北海炭礦を自分の物にしやうとしてゐるのだ。』曰く『前のアメリカ大使らしい』又曰く『フランスの商人だ』等々々。

當時三國干渉で神經の尖つてゐた有様が目に見へるやうだが、後に至つてこれが、雨宮敬次郎と、當時羽振りのよかつた相場師横山清次郎であることが判つた時には、ナアーンダといふことになつた。

さてこの買占事件は賣方、買方とも兜を脫ぎさうにもないうちに、一萬五千株といふ受渡しが迫つて來た。先きに述べた黑幕の判つたのと、この受渡しのための買方の金策が出來たといふ情報が入つたと同時だつた。雨敬と横山は、三井銀行と横濱のアイス平沼專藏の手から合計百七十萬圓の金を拵らへつゝあつた。しかし賣方もさる者、三井銀行と、平沼にその貸出しの危險を極力說いて到々この借金談をオジヤンにしてしまつた。

かうなれば勝負は賣方のものだ。忽ちにして北海炭礦株は暴落するに至つた。取引所は他の株に波及することを怖れて臨時休業の札を下げ、その善後策を講じたが、なかなか片がつかずに到々廿五日間休業してしまつた。その結果漸く解合ひは成立したが、結局買方は總敗北で、天下の雨敬もこれがため沒落してしまつた。

北海炭礦はこれ以前にも屢々買占めが行はれたが、この明治三十三年のが一番面白い。その後三井が約八萬株を買占め、相場が最高の時に賣り放たうとしたものゝ、値が崩れさうになつたので五萬株はゞ殘つてしまつた。しかしこの五萬株が三井の北海道進出の礎石になつたことを思ふと興味津々たるものがある。

明治四十四年の東新のジキ取引事件は、例の松下軍治が登場したばかりでなく、これを機會に直取引が禁止された點からも注意すべき事件だつた。

當時の市場の一般的な形勢は甚だ不振の狀態にあつたが、ジキの東新だけはジリジリと高値に上つて行つた。買方は當時桂、大浦、清浦などといふ政治家連中の懐に食ひ下がつてゐた『やまと新聞』の松下軍治の主宰する三輪と、十の字だつた。松下が市場の鼻つまみものだつたことはもちろん、十の字もこれに劣らない連中だつたから、この買占めの渦中に飛び込むものはなかつた。

しかしそのうちに百八圓位にあつた東新が百十圓臺に上つた。百八圓でも高過ぎると見られてゐただけに忽ちにして賣り物が殺倒した。相場は直ちに五圓方暴落し、お定まりの立會停止になつた。そして賣買兩方に五圓の豫納金納入を命じた。

ところがこの直取引といふのは、五日の受渡猶豫付の現物取引同樣だから、松下は早速これを楯にとつた正株の受渡しを迫つた。それからヤツサモツサで三月から四月にかけてもみ合つたが、結局兩方とも一文にもならずに解け合つた。たゞこの時限り直取引制度は禁止されてしまつた。

六、

買占めも取引所や内部だけでは、問題が大きいと云つても大したことはない。社會的に一番大きい影響を持つたのはいふまでもなく大正七年の米騷動を誘發した米の買占め事件だ。その經緯はいまさら說くまでもなからう。しかし付言して置き度いのは、この米騷動は日本では單なる米騷動だが、赤いロシアの見解に從へばもう少し世界史的事實だ。その見解の當否は暫らく措き、彼等に從へばこれこそ世界の戰後資本主義が沒落期に入つた最初の時代の日本に於ける一徵候だつたといふのだ。すなはちソヴイエツトロシアを生み、獨逸革命を起し、その他全世界を赤化せしめずんば否まない情勢にあつた。あの直接的な革命情勢が、日本には米騷動といふ特殊な形をとつて表はれたのだと說かれてゐる。

かうなると買占めと雖もなかなか問題は重大だ。増質だの岡半だのゝ名前も、買占史の一頁どころか、革命史の片隅にまで席を與へられないものでもない。

七、

與へられた頁數も盡きた。最後にその昔の紀文の蜜柑船にも似た話を書いて擱筆しやう。

それは明治廿七八年頃の有名な土佐丸事件といふのだ。深川の正米問屋丸十組が、八軒の仲買を使つて買占めにかゝつた時の話だ。これに對して三十有餘軒の深川回米問屋、大坂、北陸筋の正米屋が賣り向つた。戰ひは遂ひに當限の受渡しといふ最後のドタン場まで來た。丸十組の方では東京の在荷を調べて先づ勝ちだと安心してゐると、突如北陸の正米筋が七萬石積みの新造船に正米を滿載して伏木の港を出たといふ報導が入つた。これが受渡しに間に會へば買占陣は總崩れだ。そこで問題はこの新造船土佐丸が東京へ何日に着くかだ。見物人まで大變な騷ぎで、何日着くかゞそれだけで賭けの對象になつた程だつた。

そのうちに土佐丸が途中で暴風雨に遭つて受け渡し當日までに東京着は困難だといふ噂が傳つた。一時は色を失つた丸十組も、いよいよこちらの勝だと喜んだのも束の間で、不思議なことに、その納會日の當夜丸十組の店から出火して、丸燒けになつてしまつた。それのみか、まだその燒け跡の煙が消へず、受け渡し日の朝日が昇り切らぬうち七萬石積の新造船土佐丸は滿載の米に何の障りもなく東京灣へつき數十隻の艀は渡米を積んで小名木川を上つて來た。

丸十組が完全にへたばり、賣方が凱歌を上げたことはいふまでもあるまい。

（一〇・七・三）

中央公論社代理部案内

東京市丸の内ビルデング五九〇區
中央公論社代理部
振替東京七八四七五番
電話丸の内(23)五三三五番

◇代理部への御註文はすべて前金に限ります。御送金にはなるべく一番安全な振替をお利用下さい。
◇御註文の際は郵税をお忘れなく爲替でお送金の節は必ず書留郵便に願ひます。
◇切手代用は拾錢以下の郵便切手で一割増の事。その他は一切お受け致しません。

最も經濟的な
實用替ズボン

本社代理部の替ズボンは、價格に品質に已に定評あるもので、何れも地方在住の愛讀者諸君のために、特選したものばかりであります。

上等純白絹セル	(ヒザ裏付)	六圓
優等純白絹セル	(ヒザ裏付)	七圓三十五錢
上等純白ギャバヂン	(ヒザ裏付)	六圓
優等純白ギャバヂン	(ヒザ裏付)	七圓三十五錢
上等黒絹セル	(ヒザ裏付)	六圓
優等黒絹セル	(ヒザ裏付)	七圓
薄ラシャ・フラノ	(焦茶、鼠、紺)	五圓

◆夏季特價提供品◆

スポーツ用白ギャバヂン	一圓六十五錢
厚地茶褐スレン(園藝用)	一圓六十五錢

寸法(大	腹廻鯨約二・四尺	股下一・九尺
(中	同　二・二尺	同　一・八尺
(小	同　二・一尺	同　一・七尺

御註文には大中小の別と参考に全身長も御記入下さい。(股下はクルブシ迄を計つたもの)

送料内地十八錢　領土四十五錢

古書賣買のお取次

「古書案内」は從來古文書、和本綸綸等も扱品中に加えてをりましたが、右の中には思はぬ高價な内容を持つものがあり、再び求め難いものを含む場合さえ少くありませんので、今後はこれ等の類に屬するものは一切お受けしない事に致します。

要するに賣買共に普通の古書のみをお扱ひ致します譯ですから、左の規定を御一讀の上どしどし御遠慮なく御利用を願ひます。

規定

A、御紹介には往復端書又は返信料を添附して下さい。
B、御註文はなるべく振替で、前金御送附を願ひます。
C、送品は着金後一週間位と御承知下さい。但古本の事ですから、御紹介後着金までの間に現品の移動があつた時には、再び探し出す迄に相當の時日を要する場合がありま す。隨つて價格等も時には變動する場合が生ずる事も豫め御承知をきを願ひます。
D、評價御希望の書籍は、署名、著者、發行年月日、發行所、汚損の程度等詳細にお書添へを願ひます。時には、現品を拜見の上ならでは評價致し兼ねる場合がありますからその旨お含みおき下さい。返送の費用は實費を申受けます。
E、御紹介の宛名は、「中央公論社代理部古書案内係」と明記して下さい。

直ぐ申込まぬと遅れます

オーダーメード夏服

上下 特價三十圓均一

(三ツ揃は七圓增)

◆理想的な夏生地、ポーラー、フレスコ、トロピカル等の上等品が多量に用意出來ました。

◆只今代理部には、南方温暖地方の夏服と北方樺太、千島方面の春着註文とが、錯雜してゐます。各需用期によくある時間的に無理な註文は、從來の通り出來る限り御要求に應じますが、註文殺到の場合には絶對に御註文順を嚴守しますから、お早くお申込み下さい。

◆**特に二回に分割拂込みのお便宜も計ります。**

◆從來の嫌やな流行の支配を受けず、一番紳士的な、而も明るい感じの洋服を求められるなら、どんなに不便な地方からでも居ながらにして、徒らに外國かぶれのしない眞に東京型の洋服を求められるなら、本社代理部を利用するに限ります。

◆先づ生地見本を御一覽の上、代理部考案の用紙に寸法を書入れて送れば、思ひ通りの型、思ひ通りの寸法の服が約二週間位でお手に入る譯です。

◆特に裁縫の入念と、品質の確實な事は、代理部で責任を持つもの丈に、世上にありふれた謂所通信販賣洋服と類を同ふするものではありません。

◆お持ち合せの洋服をお送りになれば、その通りの寸法の服も作ります。

◆**見本ノ請求ニハ一種毎ニ郵便切手十錢添付ノ事。**

◆尚特別高級品のお註文は、見本請求の時に大體の御希望價格をお申越しになれば出來る限り御要求に應じます。



◇洋服の生地見本は、御承知の通り種類多く全部取揃へる事は經費もかゝり、それに伴ふ不便も少くありませんから、必ずお希望の品、例へば「夏服見本」「夏服何圓程度」と云ふ風に御指定の上、お忘れなくお年齢をお申聞け願ひます。

◇代理部では直ちに御指定の種類の、お年齢向きなものを見立て、明確な圖入りの寸法書と共にお送りしますから、これに各部分のお寸法を記載してお送り下されば、約二週間で居ながらにしてシックリと體に合つた洋服がお手に入る譯でございます。

中央公論社代理部洋裁係

振替東京七八四七五番

贈答用品案内

千夜一夜ブックカバー

艶麗な圖案微妙な色彩は、ポプリン地裏打の堅牢さ。實用裝飾兼備　一部五十錢

中央公論社圖書券

この圖書券は中央公論、婦人公論、本社出版物の購讀は勿論、代理部の何品のお註文にも應じます。五十錢一圓、五圓、十圓の四種。

コーリンス・ホワイトナー

夏の化粧料として日焦止めに妙、婦人令嬢への贈答品に最適、海水浴には是非用意すべき品。定價一圓廿錢

コーリンス・リクイドホワイトナー

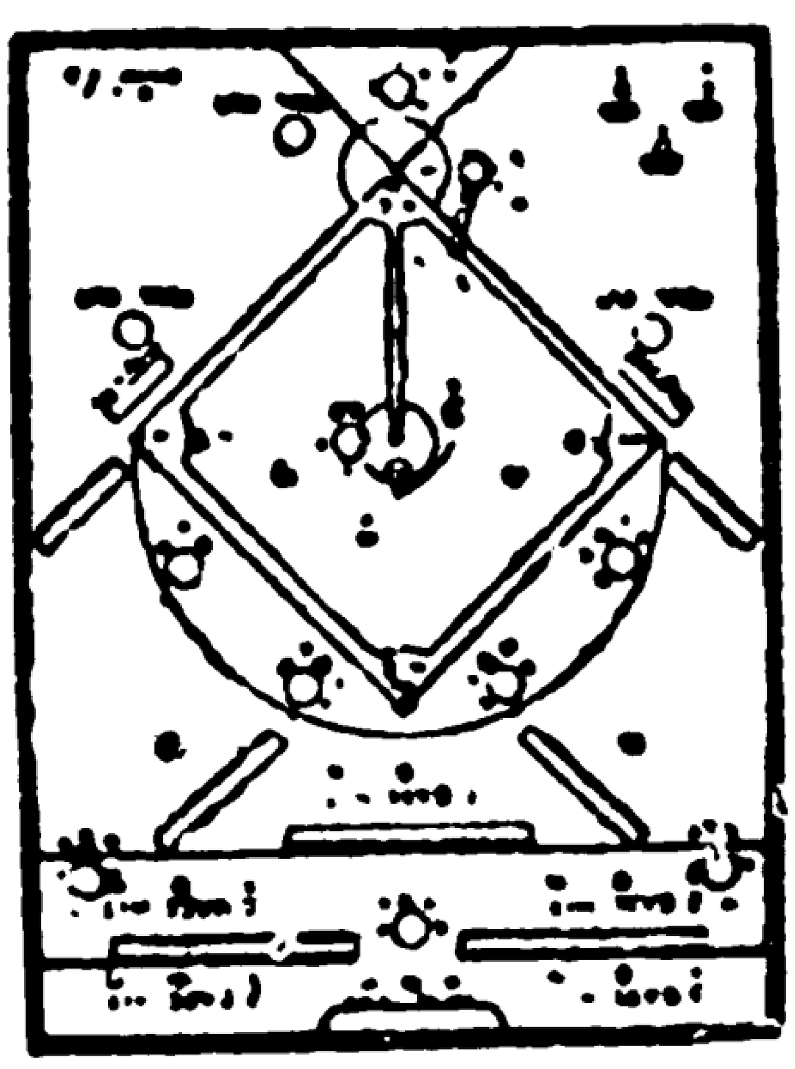
夏の婦人の美は、本品によつて保たれます、洋裝婦人の手に、襟に、日に焦けぬ事妙。恭様同志の贈物に第一等、定價一圓。

夏の香水（スヾラン）

本社四季の香水の一つ。佛蘭西製に優る本社特製品、紳士淑女の愛用品。二圓。其他四季一揃又は四個註文は七圓半

◆此の外、近親又は親友の壯年の方にサツポーターを、新家庭には昭和文庫を、學生にはアテナ萬年筆を、少年には野球競技盤を或ひは何にでも利用の廣い本社圖書券を、分により度に隨ひ自由に選んでお用命下さい。遠方から遠方へのお用も承ります。

誰にも愉快な野球競技盤



盤面は飛行機上から見た野球場さながらで、球にあてた指の力一つに、直球、曲球、軟球、剛球を自由自在に出す投手と選手がボックスに立つた氣持ちで立向ふ打手との興味ある緊張した氣分は、この野球競技盤ならでは、味はへぬ所です。

選手はもとより、春秋のシーヅン毎に野球の興味が婦人の世界にまで及ばうとしてゐる現今、高尚な新らしい家庭遊戯として、一般の家庭におすゝめ致します。

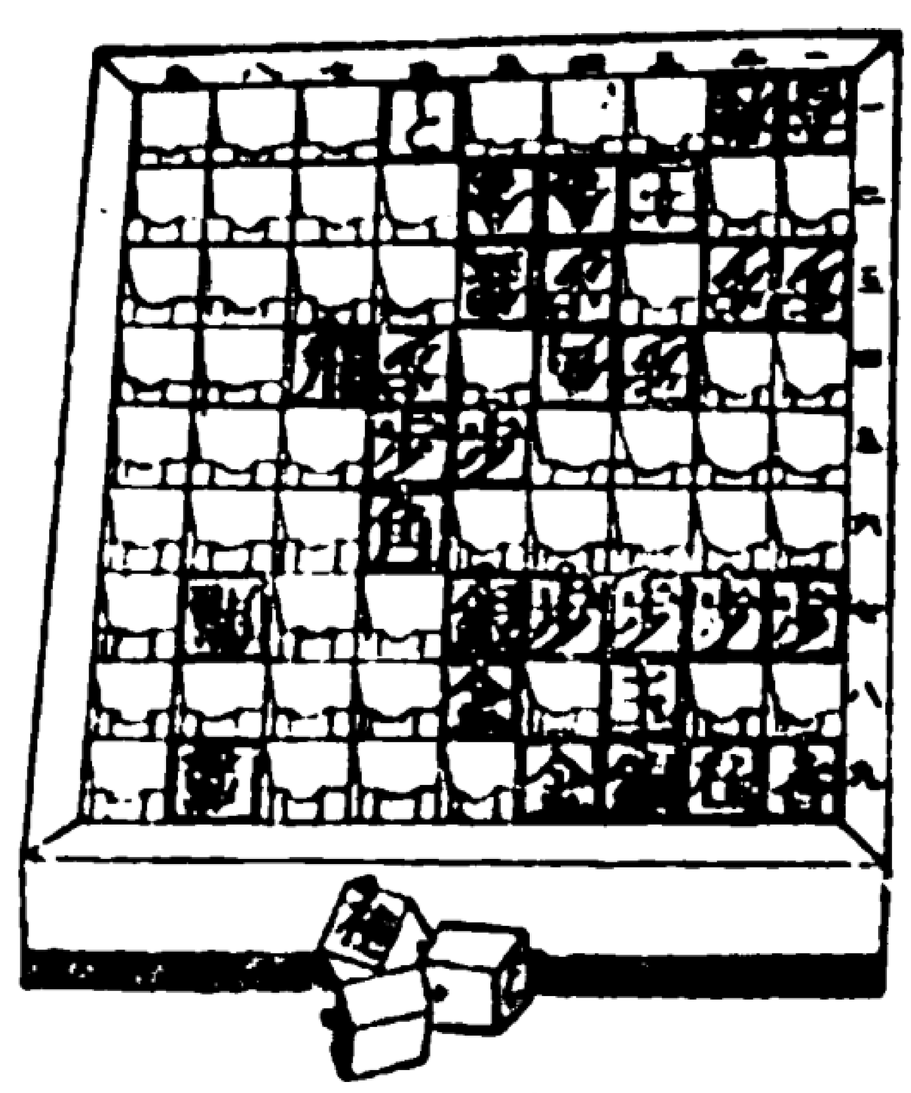
定價　小型一圓三十錢大型三圓八十錢

送料　内地小型は十二錢　中型は二十七錢　鮮臺小型は四十五錢　中型は五十五錢

最小型將棋盤

縦三寸七分巾二寸二分厚さ五分の最小型輕便將棋盤です。

木とアルミニユームとで造られてありますから。ポケットに入れて少しも重く感じる事なく。駒には一個一個磁石が附けてある等・婦女子の眼にも可愛らしい程のものです



駒は標準文字を用ひ、盤には縦横に數字が記されてありますから、新聞を見ながらの研究には一層便利です。

其の他喧噪な電車の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に、或ひは机上に、或ひは寝床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る、將棋家にとつてこれ程便利なものはありません。

定　價（[illegible]）　一圓八十錢

送料　東京市内十二錢、内地十八錢　鮮臺　四十五錢

御注意

◇御送金には振替の御利用が一番安全ですが、地方により普通便より四日乃至十日間以上遅れますから、御註文はそれ丈一層お早くお出し下さい。

◇為替での御送金は、必ず書留郵便に願ひます。

中央公論社代理部

新著月評

大内兵衞著
財政學大綱(上卷)

阿部賢一

久しく期待せられ漸く滿たされたものゝ一つは大内兵衞氏の財政學である。教授が東大で財政學を講ぜらるゝは既に年あり、その門下から立派な新進學者を數々輩出してゐらるゝことは何人も知つてゐる。が教授が如何なる立場と方法によつて學生を指導してゐらるゝかは何人も知りたい點であるが、同時に直接に教授のセミナリーに通ふてゐる學生を除いては、それは許されない事であつた。また教授の數多き論文や著書に觸れてゐるわれ等は教授の學說の片鱗を捉へ得たにせよ、その體系を見極めることは出來なかつたのであるが、今、教授の「財政學大綱」の出版せられたのを觀て、永年の渇が醫されたやうな氣がする。教授の爲に祝したいと共に私共も甚だ愉快に思ふのである。

尚も本書は色々の條件の下に執筆せられたのであるから教授の全豹を之によつて見たと云へば教授も迷惑であらう。教室での筆記代用のテキストであること、限られた時間内で講義を了られねばならぬから說明を盡すことは出來ぬ點など。それに本書は上卷であつて下卷は「秋までには是非書き了へたい」と教授自身も云はれてゐる。』今夏の烈暑が心身の病弱』に害まるゝ教授の健康を害することのないやうに祈るものがあれば祈りたい。

財政學大綱上卷の包有する範圍は序論、第一編財政制度における立憲主義及び第二編經費論であつて、その第一編の主題は豫算に關する縱横の論議である。で、その各々の章についてレビューすることは許されないから、たゞ讀後深く印象づけられた諸點について卑見を述べて見たいと思ふ。

本書の第一にして最大の貢獻は、謂ゆる唯物史觀の立場に立つて財政學の科學における地位を規定し、財政現象の解說の鍵となした點にあるであらう。今、本書の隨所に散見する文片章句をこゝに掲載しないが、その一二をこゝに引用するならば、『近代の自然科學は本能的に唯物論の上に立つてゐる。それについては物質は第一次的のものであり、思想意識學理原則は物質の存在を基礎とする第二次的なものである』しかもその『科學は萬人共同の財產であると云ふやうなことは一つの空語』であつて『昔から知識は主として支配階級の從屬者の獨占であつた。』と、科學の歷史性を檢討しつゝ『社會における個人の實踐は主として彼の生產的地位によつて規定される……』と、これ等の斷片を貫く唯物史觀的認識の立場を財政學認識の基調として財政現象の考究に志されるのであるが、從來財政を以て神祕なものとなし、又國民共同の意思發表であるとなした獨斷論に對する本質的反抗をこゝに見出すのである。で、背後に深き認識の根據なき財政思想や教科書の横行する學界に一新生面を打破した本書の價値は實はこゝにあると思ふのである。また財政思想の發展を論じて、イギリス經濟學と社會主義理論の『對立せる思想の爭覇』に現代の特長を見んとするが、教授の心中恐らく冷靜なる第三者としてゞはなからう。かくて『眞理は既成のイデオロギーの内にではなくして、たゞ事實の内にのみ存する』。現在資本家國家の財政あり、又勞農主義の露國財政が嚴然として

存在することは財政の研究をば世界大戰前のそれよりも遙かに多くの興味と研究上の實益とを與へてゐる譯なのである。教授の本書がこれ等現實の生きた資料を記載されないのは――他の歷史的事實につきては多くの說明を與へられながら――讀者として多少の不滿を懷かない譯に行かないが、思ふことあまり云ひ過ぎては膨脹れざる業なりと要らざる遠慮をせられたのではあるまいか。

「財政制度における立憲主義」は過半謂ゆる豫算論に關するもの乃ち立憲制度下における豫算の編成から決算に至るまでの法制の說明を主とする。併しながらこれ等の說明して置かればならぬ然もやゝもすれば乾燥な個所よりも「現代政治の諸問題」「地方財政制度と立憲主義」「財政上の立憲主義の現狀」及び「財政問題の經濟的基礎」などこそは教授の獨壇場であらうと思ふ。考へようによつては論點の摑み難いところ、皮肉が多少廻りくどくして流產するところがないではないが、現代の要求が『ブルジョア・デモクラシー』のみでなく、むしろソーシアル・デモクラシーである』となされる點はハツキリしてゐる。しかしながら、現代の誰が要求するのか。これは列つてゐるとして教授の多く引用せられたるブライスにさへ愛情をつかされてゐるデモクラシーにさへなほ「のみでなく」と云ふ文字によつてその存在を希望せらるゝが如きは、實踐的要求の所產であるとなす財政學的認識を混濁せしむるものではなからうか、とも思ふ。併しながら今日各國の財政がデモクラシーとか憲政有終の美とか云ふ粉飾によつて美化せられてゐるその眞相をば、一定の視角から犀利な眼光によつて曝露せんとする教授の努力はわれ等に幾多の示唆を與へずには措かないのである。

最後に經費論である。『財政全體が結局現代の經濟的諸關係の制約の範圍を脫し得るものでない』ことから『經費の費途決定の過程たる政治的勢力關係の對立性と矛盾の內に、その社會的經濟的諸關係の對立性と矛盾とをこそ見るべきであらう』。この提言は從來國家及び地方團體の經費を目して國民一般の公益の爲に支出せらるゝものとなす通說に對する根本的批判であつて密かに會心の感が湧くを覺ゆるものである。國家が個々の行政か取引行爲を通じて行動する場合、その『結果は之等社會的な個人又は團體に對しては何等か差別的なものとなるのはこれまた必然であり、否、かゝる結果を通じてのみ所謂國家目的の達成が可能でさへあり得るのである』とは、すばらしき斷言であると思ふ。例へばわが國の財政政策を點檢するとき、そこに盛られる經費の行き先が差別的に資本階級に偏倚してゐることはこゝに云ふ迄もない。單なる皮相なる實證論、經驗論に立つても然うであるが、經費の差別的結果が、つまるところ財政全體を規定するところの社會的原則によることを思ふ、とき、多くの財政學研究があまりにも無批判的に打過ぎてゐるのに驚かざるを得ないのだ。經費論を輕視する財政觀察が、古風に云へば盾の半面を見たに過ぎざることを思ふわれ〳〵には教授の透徹せる所論に接して愉快を禁じ得ないのである。無論本書においては何が如何に差別的であるかについて細論はしてゐられないが、行間を讀んで行けば教授の意見の展開を略ぼ推定し得らるゝやうだ。

財政學大綱一卷は沈滯し切つた經濟學界に一脈の涼風を送るもの。又同時に既成經濟學界の陣營に對して巨彈を放つもの。何人もその出現に對して眼を閉づることは出來なから

う。恐らく下卷に於て論ぜらるゝであらう租税及び公債論は蒋來の獨英流の官僚的又資本家的財政思想を一蹴して財政學の分野に新面を展開せらるるであらうと思はれる。下卷の上梓を待つこと切である。（岩波書店）

石井菊次郎著 外交餘錄

信夫淳平

一

石井子爵の近業『外交餘錄』は、世の外政研究者に向つて多大の衝動を與へたる近來の一大好著作である。私は子爵よりその惠贈に接したる即刻より讀み始め、趣味津々卷を伏せ難く、丸二日にて閲了し、顧みて少なからざる知識を獲たるを覺えたと同時に、邦人の之に依りて裨益を受くるの甚大なるべきを感じた。由來我國の外交界の先達は、歐米彼等と異なり、退隱後回想錄の類を書くことに甚だ怯であり、懶であり、僅に陸奥宗光伯の『蹇々錄』、林董伯の『秘錄』及び『後は昔の記』、林權助男談の『外交史片』（昭和二年四月二十八日以降中央新聞所載）位のものに過ぎない。英人ブレー編の林伯『秘錄』は、日英同盟の始末を知るに於て好參考書ではあるが、所紀事ら伯が倫敦にて自身實踐したる所の範圍に止まり今日之を歷史的に檢討する資料としては爾雜採擇の感がある。『後は昔の記』にも多少有益の外交史料はあるが、大體に於ては茶話的の漫錄に止まる。林男の『外交史片』もかなり面白く讀まれたが、若し男の語れる史實の裏に隱れたる當年の思潮と背景が筆者に依りて今少し描寫せられたならば、これ亦好個の外交回想錄として後世に傳はるものとならう。石井子の本書に至りては、その一半は林男のそれよりもより多く『史片』的であるが、量に於ては著しく加はり、且子自身の執筆に係るだけ、述者の意味着想が最正確に現はれ、それだけ讀者を動かすの力が多い。私は子の勞作と、その勞作を以て世の啓蒙に資せらるゝ指導精神的に對して全幅の敬意を表する。

二

本書の内容を細評するには殆んど本書同樣の大冊を要すべく、今は僅に二三の片鱗を擧ぐるに止むるとし、先づ以て義和團事變の善

新刊紹介

經濟國難打開の途（中外商業新報經濟部編）嘗て中外商業紙上に各方面有識者のものせる、當面の經濟國難打開についての具體策を收む。蓋し貴重な文獻の一。（四六判二九四頁、定價一、五〇千倉書房）

唯物心理學（伊藤道機譯）Watson, "The Ways of Behaviorism" の譯。現代我々の切實に要求する所のものは、人間性に對する科學的認識であるが、そしてそれは人類にとつて最も必須な事柄であるが、現代それは甚だ未發達であり、あまり關心さへもされて居ない。徒らに社會科學のみ云爲されて、人間科學の云爲されぬならば、その限りに於て現代は甚だ不聰明である。本書は、本譯書は、そのはの暗き不聰明を照破すべき先驅的高著だ。心ある人々の愛讀をすすめて已まない。譯筆亦明快。（四六判二六九頁、定價一・五〇、社會思想研究所）

村と町と（井上吉次郎著）是は民俗學に興味を持つ人にとつては、勿論面白い書だが、一般讀書子がよんでも、肩のこらない、而も有益な書物だ（四六判三一五頁、定價一・三〇、刀江書院）

文士の側面裏面（武野藤介著）是は文士が何氣なくおとしたゴシップの選集だ。筆者は尻を捲らないで眺めきつて居る。およそ

後外交に於ける對濟賠償要求と今次大戰の對獨賠償談判の對照談は、一の好教訓を後世に垂示するものとして、世人の一讀に値する。次に英獨協商と日英同盟の關係は實際世人の閑却し來れるもので、且日英同盟の發起者たりし獨逸が、離緣する頃に自然雲隱れしたる事情は、歐洲外交に關する文獻中に之に說及したるもの多々あれど、適切の見解としては一も見當らない。予のこの點に就ての明快の論斷は、當年の外交史料として貴重の賜である。

それからポーツマス講和談判に關し、讀者が本書に依りて興味を感ずべしと思はるゝ一齣は、予が八月二十七日の某外交官往訪の際に耳にしたといへる、同月二十三日に露帝が在露都米國大使に薩哈嗹南半割讓同意を洩しゝことの一條で『之を耳にせる予の功績は感謝に値する。が同時に、在露都米國大使がその翌日即ち二十四日に紐育へ打つた重要電報中には『露國はアラスカを米國に放賣したると同じ基礎に於て薩哈嗹の北半の地價を仕拂ふことに同意すべきやに思考す：：帝はその地價は如何に算定し得らるべきかと云へり』とある。つまり地價ならば之を仕拂ふに同意するかも知れずといふので、この思考は相當根據あるに非ずんば彼れ露都より打電する筈なく、又その情報は既に二十七日には轉じて在本邦の謂ゆる某外交官の手に入つて居つたことでもあらう。それが然しながら右往訪の際に予の耳には入るの機會が無かつたものか。この點は他日予の教を受けたいやうに思ふ。

三

謂ゆる石井・ランシング協定の締結始末は、予がその當事者たりしに於て最も權威ある文獻である。特殊利益なるものに關する予とランシングの問答は、ランシングが米國上院に於て說明したる所では、彼れ脚が話を纏めた所あるやうに讀まれるが（その際の議事錄の摘要は、載せてウヰルオーピーの『支邦に於ける外國の權利及び利益』にある）、今予の敍述に依つて經緯が明瞭になつたのは喜ばしい。予の勢力範圍撤廢意見は可い。政府の不贊成に傾いたのは、畢竟勢力範圍なるものゝ性質に對する當局有司の無理解に職由したのであらう。けれども、予の撤廢意見にして行はれたとしたならば、果して予の所期の如くに米國をして我が他の點に於ける、例へば我國の支那に於ける『優越の利益』の主張に同意せし

朗らかな「誤失歩」である。（四六判三六六頁、定價一・五〇、千倉書房）

ドイッチエイデオロギー（マルクスエンゲルス遺稿、河上肇、森戶辰男、櫛田民藏共譯）「獨逸的觀念形態の第一編フォイエルバッハ論」及マルクスの「フォイエルバッハに關するテーゼ」の飜譯。ともにリヤザノフ氏によるマルクスエンゲルス・アルヒーフ第一卷に始めて發表されたもの。本遺稿が唯物史觀の理論的研究に重要なる寄與をなせるは玆に冗言を要せない。今我國斯學の權威によつて玆に謹嚴な飜譯を得た事を深く喜びたい。（四六判二一六頁、定價・六〇、我等社）

キリスト教社會愛史（賀川豐彥、竹中勝男譯）ステッドの Stories of Social Christianity の譯、千九百年來淡々として盡きぬ社會愛の史的物語。（四六判四一一頁、定價一・八〇、新潮社）

赤い魔窟と血の旗（井東憲著）（四六判二七四頁、定價一・〇〇、世界の動き社）

ニイチエ傳（生田長江、野上巖譯）Daniel Halévy, "La vie de Frédéric Nietzsche" の譯。ニイッヱの人及著作を知る上に於て深切な行屆いた手引書である。（四六判六九八頁、定價二、八〇、新潮社）

藝術社會學（フリーチェ著、昇曙夢譯）マルクス主義文藝理論家、文學史家、批評家として、世界的な學名を持つた著者の晩年の大作であり、マルクス主義藝術學にその最初の體系を與へた名著。（四六判二八八頁、定價一、

むるの動機となり得たであらうか。ヂヤパン・アドヴアタイザー紙は本書を批評せる社說(六月二十六日)に於て、之を殆んど想像し得べからずと斷じた。之に就ても、他日重れて子の敎を受くるを得ば本懐である。

四

若し夫れ國際聯盟に關する說論は、全然子の獨壇場で、他人の追隨を許さない。『外交私觀』の各章も、通じて面白く讀まれる。子の國體と不戰條約の關係に對しては、就て更に敎を乞ひたいと思ふ節もあるが、謂ゆる舊式外交と新式外交の異同觀に至りては、さすがに一頭地を拔ける卓見と稱するも諛辭であるまい。最後の人口論も、着眼大體に於て正鵠を得たもので、殊に米國の排日法が優生學的見地に立脚し居ることは、米國にては公私の文書既に之を說いて餘りあるを我國にてはこの點に關する理解が割合に乏しいから、排日問題の科學的研究として一の好資料を本邦人に供したものと云へよう。

××××

この外、尙は欣然江湖に紹介したき點多々あるも、既に本誌の注文行數に達したので措くとし、最後に一二の希望を著者に呈して本評を結びたい。その一は、私の每度我國の著作者に要望し、而も餘り顧みられざる索引の添付である。このことは先頃拙著『反古双紙』中に詳述して置いたから、今その理由を繰返へさぬが、要するに斯かる有益の大册にして且長へに隨時參考の便にすべき著作に索引を附さぬといふ法はない。著者も蓋し平生歐書を涉獵せらるゝ折、時々インデツキスの參照に至大の便利を感ぜらるゝことならんと察する。再版の折には、是非共索引を附するの勞を惜むなからんことを希望する。第二は、願くは著者に於て本書を更に歐文にて上梓せられんことである。狹隘なる我國の讀書界のみを對象とするには、本書は餘りに貴重だ。宜しく之を歐譯殊に英譯し、依つて以て廣く世界の識者にアクセツシブルならしむるに於ては著者勞作の效果は蓋し倍蓰する所あらんと信する。(岩波書店)

五〇、新潮社)

金が書く(シンクレーア著、富田正文譯)經濟的見地よりせるアメリカ文學の研究、正直な痛烈な書物(四六判三三五頁、定價一、五〇、新潮社)

健康保險法提要(淸水玄著)健康保險法に對する詳細な解說、便利であり時宜を得た書物である。(菊判二五〇頁、定價二、〇〇、日本評論社)

新銀行法理由(小川鄉太郎著)新銀行條例の立法經過を明かにし、立法の意志を明示せんとせる勞作。(菊判五九二頁、定價五、〇〇、日本評論社)

乞食記

卜部哲次郎

活動寫眞を觀て感想を書く事さへもが一つの渡世であり得る乞食だつて一つの『勞役』なのだ。

『良寛和尚傳』は、時に左翼の鬪士の胸にさへも夢として現れるであらう。何んな夢？　閑寂、溫和、平靜、菜の花の畠に蜜蜂がうなつて居る田舍、その田舍路を行く乞食僧の姿。和やかな、心を刺す針を持たない夢は美しいが、實は、なほに働かずに食ふ方法さ。

『働かざる者は食ふべからず』の實際を排斥し得ない人間は、窮余それを倫理的規範として祭り上げて居る。一方、蟲の好い夢を描き、弄びながら。

自分は必ずしもその倫理の鐵則に積極的な反逆を試みたのでもなく、夢を現實に延長するの愚を行つたのでもない。夢は夢さ。

だが、何だか知らぬ間に、自分は乞食以外の何者でもあり得ない情勢に置かれて居た。自分は斷然として乞食になつた。むかし會社勤めをした時と、氣持ちの上に何れだけの相違があつたか、そんな些細事を研究する氣にもならなかつた。勞役たる事は同じだ。

『乞ふ勞役』だつて勞役だ。

で、乞食の『勞役』を書く。諸君の閑寂な、蟲の好い夢が消失しても止むを得ない。

破れ笠、破れ法衣、脚胖、草鞋、頭陀袋、鈴、格子、手巾、合羽、etc の乞食道具をもらひ集めた。笠には永嘉大師證道歌の不除妄想不求眞を大書した。

むし〱とした鉛色の朝から、自分はにこりともせずに、家

々の門に立つて食を乞ふた。

『弘法大師が來た。』と言ふ子供もあつた。『活動寫眞みたいな乞食が來た。』『三好清海入道！』『乞食、々々。』その他種々な事を言はれた。或る村では、子供達が自分に石を投げて、『乞食、々々。』と囃しながら逃げた。母親らしいのが樂しさうに見て居た。

大抵の家で、一錢呉れる時に、錢箱を掻きまはして一番汚い銅貨を選り出すのであつた。

江尻の街を乞食した。

洋品店の前に立つて鈴を振つて居た。主人が五月蠅さ相に店員に顎をしやくつた。縮みのシャツと股引を着けた若い店員であつて、髪を奇麗に分けて居た。彼は主人の感情を尊重してかやはり五月蠅さ相に自分の傍に來た。

自分はしつこく施しを乞ふ事はしなかつた。しつこくする事に依つて五月蠅さゝの餘りに提供される銅貨を期待する方が得策ではあつたが、自分はそれを敢へてしなかつた。

で、その店でも呉れる氣配があつたから、自分は待つて居たに過ぎなかつたのである。

店員はちえつと舌打ちをして、忌々しさうに一錢銅貨を自分に投げつけた。自分は伊勢の國の橋の下の乞食ではなかつたので、銅貨は自分の足許に轉つた。

『乞食だつて人間だぞ。』と言ふ風な考へ方を、自分はしなかつた。人間が何れ程有難いのだ。それよりも自分は若い店員の『人間』を睨み据へた。

さて、一錢銅貨を拾ふべきか、それとも靜に立ち去るべきか拾つて戴くのが聖者の行爲――見へ透いた聖者の行爲なのであらう。

自分はありふれた店員の顏を見ながら、しばらくはその儘でお經を誦へて居た。店員は憎惡と當惑とでもぢ／＼して居た。

夏の夜には明石擬ひの縞物に絽紗の帶を締めて、カフエーの卓で女給に小突かれでもすると大袈裟な身振りをして、それを見得と樂しみにする、その種類の若者であつた。

瞬間、自分の胸にむら／＼と込み上げて來るものがあつた。久しい間忘れて居た塊狀のものであつた。

頭陀袋に手を入れるより早く、店員と、及び一切の愚劣なる存在を目懸けて、自分は數枚の銅貨を敲きつけた。主人が起ち上つて何か言つた。自分は身構へをして腕を扼した。

『一錢は返してやつたから受取れ。』と言ふのも一つの方法であつた。或は、口を開いて大きく笑つて見せるのも、畸人としての賢明な常套手段だつたらう。しかし自分は口を歪めて唾を吐いて立ち去つた。

驛の待合室で寢て居たのは自分だけではなかつたが、驛夫は自分だけを搖り起こした。

『おい〳〵、此處で寢ちや困る。』

『誰が困るんだ？』

『生意氣な事を言ふな。此處は寢る場所ぢやないのだ。』

『ぢやあ、何をする場所だ？』

『わかつてるぢやないかつ。汽車を待ち合はせる場所だつ。』

『俺が汽車を待ち合はせて居る者でないと、奈何なる根據に依つて判斷するのか？』

『乞食の癖に餘計な事を言つてると承知しないぞつ。行け〳〵つ。』

『愚劣な奴だな、貴樣は、もつと他に怒るべき事がないのか。そんな了見だから何時までも驛夫なんかしてるんだ。交通勞働者？　何だ愚劣なつ。』

そこで巡査が來て自分を『つまみ出した』。『乞食、々々。』と自分自身に對して囃しながら夜通し歩いた。

『何うも御苦勞さまでございます。』と言つて米を吳れる駄菓子屋の老婆もあつた。そんな時には、自分は何處に居るのか知らない自分の母親の事を思つた。門口に立つて指を銜へて自分を眺めてゐる女の兒に依つては、自分の未だ見ない娘の姿を思はせられ、そんな日には、自分は家々の前に立つて鈴を振るに忍びなかつたし、夜、安宿の合客と天氣の話でもをする煩しさにも、彼等の日に燒けた、コークスのやうな縮んだ顏を見るだけにも耐へられる筈もなかつた。

自分は松林に入つて何時までも凝然と蹲んで居た。

夜になると、そつと農家の裏口に忍びよつて藁束を盗んで來た。

一面には、通俗な歎きを嘲つて居たのでもあつた。

諸君は、自分も亦過去に於いてさうであつたが、路を行く乞食や、河原の木蔭に佇んで居る乞食の動作の遲鈍と無頓着とに驚異と羨望を感じて居るに相違ない。彼等は人を眺める時には物憂さゝうにおろりと瞳を動かす。時としては、その儘無表情に瞳を停めて居る。それは憎悪の故でも、羨望の故でも彼等の

思索を破られた腹立たしさの故でもない。强いて言はゞ幾分かの煩はしさの故でもあらうが、それよりも、彼等には瞳を活潑に運動させる必要と希望と興味とがないまでの事である。瞳ばかりでなく、身體全體に就いて左樣なのである。或る者は朝の中に何かの拍子に首を傾けたならば、その日終日を首を傾けて居た。

また諸君は、大抵の乞食の無愛想に意外を感じるであらう。諸君が充分の慈悲心を以つて彼等に話しかけても、彼等無禮な乞食はまるで諸君を問題にしないであらう。食べる物だけで乞食は澤山なのだ。「精神」なんか何んな食べ物か知つては居ないのだ。

で、自分も亦乞食である。總べての猫が猫族であるやうに、自分も魯鈍で、既に瞳の動かし方に特徴を帶びかけて居た。

安倍川が海に注ぐ邊りの砂濱で、自分は大の字にぶつ倒れてしまつた。流れついた溺死體ほどの情緒もなかつた。

午後の太陽の下で、海は濁つた毛布のやうにうごめき、黃色い波打ち際に立つて居る男の姿もあつた。

背中にじめつく砂の暑さと、ずる〱と全身を流れる汗とを耐へて居た。仰臥した儘で、暑さと汗の儘で、晝飯の代はりにと駄菓子屋で買つて置いたビスケットを頭陀袋から摘まみ出しては口に運んだ。乾いたメリケン粉と日光とで顏の內部までから〱になりさうであつたが、その姿勢を代へるだけの希望もなかつた。その儘で數時間、モデレートな乞食の態度を、時に海岸を散步する――散步などに興味を抱いて居る男女に曝して居た。

やがて、日が暮れかゝつて來たが、海の落日の風景も、面白くもない彷徨の夕べ〱に見慣れた單なる當然事であつた。汚い海がばた〱と赤い陽光を彈き返して居るに過ぎなかつた。行水の湯を沸かす家と夕飯の仕度を持つ者にとつて、夕暮は煩はしく、心を惹く一刻であらう。自分は過去の家と夕暮を憶ひ出しつゝ、のろ〱と步き出した。

その夜は靜岡驛の待合室に眠つた。

娛樂機關の少い田舍では、時として乞食坊主にからかふ人もあつた。「每日、日記をつけて居ますか。」と自分に問ふた若い農夫もあつた。

「さうして步いてゝ、何んな時が一番愉快かね？」

「何時も不愉快だな。」

「雨の時は何うするんだ？」

「錢があれば木賃宿に寢てるし、ない時は仕方がないから濡れ

て居るか、神社の椽の下にでも蹈んでるかする。一度宇都谷峠で酷い嵐に會つて、一晩中トンネルの中に立つて居た事もあつた。」

「お寺ぢや泊めて呉れないかね？」

「僕も僧堂に居た事もあるので、泊り方の作法も心得て居るがお寺の方で、雲水に對するじんぎを知らない坊主が居るので驚くよ。庫裡のかまちに斯う言ふ風に頭を下げて、賴みませうと怒鳴る。どうれと向うで言つて、向うも慌て丶袈裟をひつかけて出て來るのが作法なんだが、なかには、何だ變な氣違ひみたいな奴が來やがつたてな顏して、ぽかんと見て居る坊主があるので驚く、そんな寺ぢや勿論泊めて呉れないよ。もつとも本當の坊樣の居る寺ぢやそんな事はないが、その代り、こちらが氣骨が折れる。何しろ草鞋の脫ぎ方まで一々方式があるからな。野宿の方が氣樂で好い。」

「警察はやかましくないのか？」

「規則ぢやいけないだらうが、警察だつて乞食の宿屋をして居る餘裕はないさ。强請したり、厭がらせをしたりしなきやあ大目に見て呉れるよ。」

「それあ左樣づら。そいで、いつたい一日に何の位のもらひがあるかね？」

「今までに一番多かつた日には錢が一圓五十錢と米が五合だ。だけど僕は大概五十錢ぐらゐ集まれば、もうその日は止めにして置くよ。もつともその五十錢がなか／＼大變だ。一時間十錢平均と見て居るんだがね。」

「さうかなあ。こ丶らの村方ぢや日傭取りが辨當持ちで七十錢の日給だ。お前さんの方が割が好いや。」

「ひとつ奮發して乞食になつちや何うだ。」

自分は此の種の問答を幾度もした。その都度、二錢ほどもらつた。

六十位の女乞食も居た。汚れた白い着物を地に引きずらして忙しさうに家々を廻つて居た。

彼女の乞食の方法は猿舞はしの猿の使ふやうな鈴の大きなのをがらん／＼と振つて、「わあ、わあ、わあ」と叫ぶ事であつた。

幾度聞いても、それは「わあ、わあ、わあ」であつた。

彼女と自分とは靜岡の街で屢々出會つた。自分に對しては許しを乞ふやうな、愚かな笑ひをした。時には、ねたましさうに自分の服裝を振向いて見て居た。彼女と同年配位の自分の母の事を思ふのも、自分はいやらしかつた。

　自分は概して憐憫よりか嫌惡の情の方が多かつた。『婆あ、くたばつてしまへ。』と思つてゐた。十圓紙幣を一枚呉れてやりたいやうな氣持ちであつた。その老婆を通じて、蹴飛ばすべきものを蹴飛ばして終ひたいもどかしさがあつた。

　その後、自分が遠州の秋葉山に行く途中、二俣の町外れでまたしてもその老婆に會つた。

　やはり大きな鈴を鳴らして『わあ、わあ、わあ、』と言ひながら、往來を縱橫にちよこ／＼走りをして居るのを見ると、實際の笑ひが込み上げて來たのであつた。自分を見ない振りをして行き過ぎようとした態度も可笑しかつた。

『おい、おい、婆さん。』と自分が呼びかけた時、くるりと振り向いてにこ／＼しながら近づいて來た。頰のふくれた、皺だらけの顏で、白眼に汚ならしい色氣を帶びて居た。

『お前さんは息子も娘もないのかね。』自分もそんな事を言つた。

『へえ、わしどもの家も不仕合はせだつたつけ、えへへへへ。』

そしてもつと種々の事を三日でも話して居たい素振りだつた。

　リア・カーに豚を載せて走つて來た若者が、不思議な男女の立ち話を振り返り、振り返り見て行つた。

　自分は若干の銅貨を與へて別れた。

　彼女はまだ生きて『わあ、わあ、わあ、』と叫んで居るであらう。

　べた／＼と朱印を澤山に捺した白衣を着て、大聲にお題目を唱へながら驅けて行く、乞食もあつた。跣足で、いが栗頭であつた。前屈みに合掌した彼はたしかに泣いて居たやうであつた。

　自分も一軒づゝ入口に立つてはお經を誦んだ。癪にさはつたやうな顏で銅貨を突き出す主婦も、丁寧に合掌した後に重も／＼しく銅貨を戴く自分には、極まりの惡い思ひもあつたのである。

　自分は白々しい上は眼をして標札を讀んで居た。噴き出したい氣持ちと、何時までも白をきつて居る氣持ちと、愚劣さに顏をしかめたい氣持ちとであつた。それ等の反對の感想もあつたのである。

　變にもつれて來ると、鈴も頭陀袋も、一切の乞食道具をかなぐり棄てゝ、平凡に銀行に勤める僞の履歴書を書いてもよかつた。

　或る朝には何の苦もなくスムースに錢をもらつて歩いた。

　中泉の宿では、綠色づくめの着物に、綠色の鉢巻きをした四十男が幟を持つて傲然として歩いて來た。幟には『天照公大神』

と書いてあつた。町の人々は此の異樣な人物を啞然として見送つた。自分も乞食をやめてにや／＼笑ひながら眺めた。彼は行き過ぎてから、同業者たる自分の服裝を、照れたやうな顏で吟味して去つた。

街の夏の朝のみづ／＼しさの中を彷徨する時には自分もみづ／＼しい存在となり、夏の朝のその風景を構成する上には乞食も一つの要素だつたが、やはり人々は乞食を擯斥した。

自分の友人の妻君達は必ず言つた。

『だけど、そんな風にして方々歩いてらつしやると、さぞ面白いでせうね。』

『面白い？』

自分は鷲津の町では、せめてその夜の行水の湯のある宿りの錢だけでも集めたかつた。硬ばつた心を慰めながら、午後三時の西日の中で、自分は强ひていそ／＼と、誰に示すともなく甲斐々々しさを表はさねばならなかつた。

町のとつつきは、何處の田舍にもある種類の洋食屋であつた薄汚れたカーテンが西日を吸ひ込んで居る前に立つて、自分は鈴を振り出した。

帳場に頰杖をついて居た銀杏返しの女中は土地の百姓の娘とも思はれなかつた。その種の女に特有の蓮つ葉さと驕慢とに、自分の乞食眼は期待して居たのであつた。自分は俯眼をして呟きながら、ぼんやりと自分の方を眺めて居る女に媚びる程の氣輕さゝへ生じかけたのであつた。

女が長煙管を持つた儘立ち上つて來た時、だけど彼女は吐き棄て、笑ひ捨てるやうに叫んだ。

『お斷りだよつ！　うるさいつ！』

そして、帳場の机の向う側に坐るなり、きやつ／＼と笑ひ崩れた。

障子の蔭からは、今まであがり込んで麥酒を飲んで居たらしい男の、赤黒い四角な顏が齒を出してた。

覗いた自分は、自分の後ろ姿の悄然たるを思つた。

すた／＼と、此の町には何の目的もない旅人のやうに、鷲津の町を通り拔けた。

濱名湖の沿岸の、落日の中の風に搖れ傾しいで居る桑畑に腰をおろして、自分は袖で顏の汗を拭いた。

その夜は豐橋の驛の待合室で寢て居て、またしても巡査に追ひ拂はれた。

『面白い？』

左樣、面白くもあつたのである。

自分は犬に對して恐怖に近い憎惡を感じて居た。犬の排他的な心理の憎らしさは、藝者である事を誇りとして居る女以上である。

犬の姿を見かけると、自分は半町も前から別の道に曲つた。伊勢の國の一身田で、突然大きな黑犬が自分に吠へつき、噛みついて來た。此の不當な攻擊に對して自分の憎惡も爆發し、結局、變な乞食と犬との格鬪が町の人々の腹をかゝへさせた事になつた。

直ぐ前の飮食店から出て來た女が『くろ、くろ。』と犬を呼んだが、それは寧ろ犬に聲援する態度であつた。思ひ切り犬の下顎を蹴飛ばした後に、自分は女の方に向き直つた。晝寢から醒めて來たらしい、淫賣もするやうな女中であつた。

『これは貴樣の家の犬か。』

『貴樣とは何や。さうや、うちの犬や。それが何うしたんや。』

『うちの犬なら通行人に吠へつかさないやう注意しろ。』

『ふん。犬は吠へるのが商賣や。』

『犬は吠へるのが商賣でも、「俺は吠へられるのが商賣ぢやないんだ。』

『ふん。そんなけつたいな格好してりや吠へられるのがあたり前や。馬鹿。』

自分は默つて歩き出した。後ろで人々はどつと笑つた。

晩秋三河の山奥に入つた時には、大木の空洞か、洞穴を發見する爲でもあつた。其處で靜心を養ふと言ふよりか、寧ろ爬蟲類の冬眠を覓める本能に似て居たのであつた。

しかし今の世の何處に、何の用意も貯へも持たない自分に安室を與へて呉れる世話好きな樹木や岩石が居やうぞ。結局、自分の行脚は強ひてその日〳〵を過ごす手段に外ならなかつた。

山家の農民達も、彼等の話題が穀物の收穫とお蠶樣に關する限りでは、それが日常の挨拶に等しき話柄であるにも拘はらず時としては激しく語り續け、さうでなくとも默して忠實にその事實に就いて考へて居た。要は金錢であり、金錢が齎らす、金錢に換算された幸福のみなのであつた。

傾いた軒端に咲いたコスモスが、何程彼等の慾望を減殺し得るものぞ。

農民達が生きて居る傍で、コスモスも勝手に生きて居る風景であつた。

その中を自分は乞食し歩いて居た。

自分に吠へかゝる豚の小屋の前を通り抜けると、何處の農家の庭にも薬と米とが積まれて、紺絣りを着た女達がうごめいて居た。自分に一握りの米を呉れた後には、女房は掌をはたきながら空を見上げるのが常であつた。それは、うらぶれ果てた心にとつて耐へ難い、明日の期待のある生活者の態度ではあつた。

柴を刈りに來た農夫と山路に腰を下ろして語る時には、彼は地主の富に就いて、彼自身の勞役と報酬の不均衡に就いて、嘆聲に似たものを發するのであつたがそれが茶話以上の何であつたか。

或る時、自分が農民組合に就いて語つた時、彼は急いで聲をひそめ、彼も亦その『趣旨』に對しては賛成である旨を告げた自分が更に人悪く、一揆と暴動と西歐のテロリズムとに就いて語り、彼の顔色を窺つた時、彼はそれらの『破壞主義』を一笑に付したのみであつた。

やがて乞食との閑話を濟ませると、彼は忙はしげに家計の胸算用をしながら、充ち足りた窮乏の家に歸つて行つた。

自分も亦一本の棒の如き存在に返るのであつたが、何かを農夫に盗まれた損失を感じた。

豊富な湯のやうなもの、流れて居た昔の自分の家を憶つた。

自分の服裝を見てためらふ主人に無理に強ひて泊つた安宿では、隣室に祭文語りが居た。飯を濟ませた自分は冷へまさる夜氣を脊に耐へながら、火の少い手焙りの前に端座して居た。

提灯を持つた宿の主人が出て行くと、間もなく村の人々ががやがやと隣室に集まつて來た。子供ばかりでなく、男も女も居た。

祭文語りは聲のしやがれた、多分五十位の男であつた。拍子木のやうなものをちやきちやき鳴らしながら、『北條三勇士』と言ふものを語つた。機關(カラクリ)の唄に見る野趣さへをも持たない、子供だましの劍劇の雜劍であつた。『抜けば玉散る氷の刄』と言ふ文句がやたらに出たし、『着て居る着物は黒羽二重の本物で』と言ふ句もあつた。

自分はにこりともせずに座つて居た。

一くさり濟ませると祭文語りは休んで湯を飲んだ。

『早う續きが聽きたいつけ。』

『まるで眼に見へるやうだもん巧いねえ。』

男も女もそんな事を大聲で喚いた。思い出したやうに故意(ワザ)と

らしく、村の組合での事件に就いて囁き合つて居る老人達もあつた。祭文語りは聽衆の一人をつかまへて、此の「北條三勇士」を演ずる者は同業者にも稀有である旨を得意氣に言つた。それは必ずしも誇張ではなく、自身に滿足したものがあつての口調だつた。

やがて彼が咳拂ひをして續きを語り始めると、人々は靜まりかへつて傾聽した。

夜が更けてから、人々はめい／＼に白銅を置いて、來た時と同じやうにがや／＼と我が家に歸つて行つた。我が家では祭文に就いての物語りをし、交接でもしやがるのだらうと自分は思つた。なかには、此の次には、何日また此の村に廻つて來るかを質して居る老人もあつた。

『わしも年は老つたが、馴染みは有難いもんで、斯うして方々で可愛がられて居る。有難いこんだて、のう旦那。』

祭文語りは滿足氣に主人を顧みてさう言つた。

木賃宿に泊る程の人間までもが、めい／＼の生活の城を手落ちなく守つて居た。小ぢんまりとしよう／＼と努めて居る傾向であつた。またその上に、自信と矜持とを自慢話しの形式で持つて居た。支那服を着た飴屋は印度に行つた時の話を少しづゝしては、同宿の一同の顔を見廻はして居た。弘法樣のお札賣りは一日三圓の收入を誇つて居た。

自分は何日になつてもさうした合客との會話の煩はしさに慣れず、蒲團をかぶつて寢たふりをする事にして居た。

『わたし共には女房もなし、子供もなし、好きな處で商賣をして、好きな處で寢ればよし、氣樂な身分ぢやないかいなと。』さう言つて横になるが早いか、自分の傍で鼾をかき出した三十男は靴直しであつた。

屢ゝ『物もらひ入るべからず』と書かれた杭が村の入り口に立つて居た。『物もらひお斷り』の札が家毎に掲げられた村もあつた。それ等の村は大抵は模範村少くとも、模範村たらんと志して居る村であつた。しかし、村の誰がいつたい『模範村』を目指して居るのか。

自分はそれ等の『合理的』な村では乞食を中止して、その代りに錢があれば購買者の立場に立つた。草鞋を覓めるか、食パンでも買ふかした。『模範村』に關心を持たない盲昧な主婦達は自分の提出する草鞋の代金を何うしても受取らなかつたり、パンを一つまけて呉れたり、二錢だけ割引して呉れたりして、著

々と村の先驅者達を裏切つて居た。

自分は憐憫を美徳とも思はなかつたが、些少な憐憫に角目立つて反對する功利主義の猪口才さには唾を吐きたかつた。

此の種の、乞食を排斥する村ばかりが連續して居る地方もあつた。自分は空腹に耐へる事は慣れて居たから、終日でも模範村を尻目にかけて歩く事も出來た。

雨の朝、濡れそぼちながら多摩川を渡し舟で越した。砂運びの女達が自分の姿を指さして何か囁き合つて居た。

「やあい、坊さんに惚れたのかあ。」と船頭が喚いた。

「馬鹿吐かせえ、感心して見てるんだい。」と女達も怒鳴つた。

船頭は自分を顧て、卑しく笑つたけれど、自分は樂まなかつた。

自分は魯鈍と無頓着の上に、益々無感興になつて來た。時々感興が湧く時は、それは侮蔑の唾を吐きかけたい感興にきまつて居た。或る地方では、入り口に小便壺を設けるのが農家の構造の常型であつた。鈴を振つて呟いて居る自分の鼻先きで、裾をまくつて小便をする主婦もあつた。馬の小便をぽかんと見て居る無關心さで、自分は鈴を動かしながら、小便をして居る汚ない靜物を見て居た。

「何ぢやい。見世物ぢやないぞ。助平野郎！」と小便をしながら怒鳴つた。

何も怒るほどの事でもない。

「空いたら、わしにも小便させて見れ。」

「勝手にしやがれつ。」

けれども此の位の事件では侮蔑への感興さへ湧かなかつた。侮蔑に値する材料を發見する爲に歩いて居る觀もあつた。

呉れるものならもらつて置く態度に出た。自分の容貌は愈々貧相になりつゝ、裏にふてぐ〳〵しいものが成長して來た。一介の乞食坊主として松並木に腰をおろして焼芋を嚙つて居る自分には可愛想なものゝ一片もなかつた。

エロ出版捕物帳

中川正吉

「隠居して居る私の居所がよく解りましたね、今年からさつきを少しばかり集めて、いぢつて居ますが、なか〳〵面白いものです。」

「イヤ、エロものをやる人で、貴様を知らない人はありませんよ、全く驚きました、一ツ昔噺が願ひ度いので伺ひました。」

「さうですか、辭めてから、酒をやり過ぎた故でもありませう、よくもなかつた頭が一層惡くなりまして、まとまつた話も出來ませんが、折角ですから……。」

と、話の口火を切つて、次の様な話を續けた。なる可く聞き漏らさない様にと心がけ、筆錄抄錄したのが次の如きものである。

歌麿や、北齋と落款はありませんが、名家の作と傳へられる、錦繪の春畫と云ふやつは此頃ぢやトント出ません。出た所で十二枚一組なぞ云ふのは殆んど見當りませぬ、ウント出た時には、木版色板が今ならトラック數臺もあつたでせう、處分に困つた揚句、色版で火鉢を造つたりした事があります、お客様は一向御承知がなうて、撫で廻はし乍ら話をする、可笑しくても笑ふ譯には行かず、隨分滑稽でした。モウ傑作と云はれる程のものは、納まる所へ納まつて、種本に引張り出すことも出來なくなつたのでせう。その代り、拙いものがザラに出ました、石版でやつた多産的なものと來たら見られたものぢやありません。この拙い奴を原に下手な寫眞にコッピイしたものは澤山ありますが、一打何十錢で密賣するので、あげる方でも魂がつきます。

何しろ餘裕のない、スピードの時代になつたものですから、萬事露骨になりましてね、××寫眞が續々出て來ます。古は寫眞に撮られる方でも、多少は恥を知つて居たと見えて、兩人が顔を出して居るのは滅多に無かつたものですが、今時は平氣で撮られて居ます、少々呆れます。××寫眞の場合が既にさう云つた調子ですから、單身裸體の場合なぞは問題でないと言ふ譯です。以前は、淺草あたりへ行つて女乞食をモデルに雇ひ込むだものださうです。相談がまとまると、女乞食に目隱しをして俥に乘せ、スタヂオに連れ込み、垢をスッカリ洗ひ落してから、奇麗な着物に着換へさせ、豫定通り色んなポーズの寫眞を撮ると、モデル代幾何をやつて、またもと通り乞食姿にかへ、目隱をして俥に乘せる、そして適當の場所へ連れて來ておつぽなす。それから女乞食の顔ぢや興が薄いとでも云ふのでせう、藝妓や女優の顔をツギかへる、上下に首をすげ換へたのは鳥渡解りませぬ。一時流行つたものです。それが貴様、今日では藝娼妓

の木統の裸體寫眞が出て來ますから、縱いたつて追ひつきませぬ。尤も美術家のモデルを稼業にして居る連中は、裸體寫眞位撮られたとて平氣で居ます。藝術寫眞のモデルになるのは決して汚い猥なものでないと信じて居る女があります。極端なのになると、女房をモデルにして裸體寫眞をつくるものさへある位です。これは寫眞道樂の普及から來て居る、脱線した寫眞藝術かも知れませぬ。しかし自分では藝術寫眞と自贊して居るだけあつて、ポーズの研究が行屆いて、さすがに局部を中心に撮影すると云ふ風は尠ない樣です。

裸體畫や、裸體彫刻を寫眞集誌に作つたもの、サロン名畫集と稱して賣つて居るものですが、これなぞも明治時代とは禁止標準も大分に變つて來て居ますが、エロチックな漫畫繪葉書が時々發見されました、大部分は外國もの、彫刻でして、奇拔なのがあつた樣です。エロ漫と言へば、此頃日刊新聞が競つて、掲載する樣ですが、感心しない、いづれはベシヤンコにされてやめるでせうが、時代の移り變りと云ふのは妙なものですよ。話が岐路へ外れました。恐縮々々。

淫本と云ふのは、所謂エロもの丶中心をなすものですが、明治大正の頃は、ガリ版印刷、謄寫版續筆のものが多くて、印刷法の性質として何千部と云つた大量生産はされなかつたものであり、タマに活版でやるにしても、活字をなにがしか買ひ込み、一頁組むで印刷しては、解版してまた次の一頁と云ふ工合に、手内職同樣に秘密にやられたものでした。從つてテキ屋か、過激な勞働のやれない、しかし鳥渡頭のある手合が關係して居ました。中には時代錯誤的に、毛筆で丹念にコッピイしたりしたのもありました。處が、此處數年前から、と云つて震災後と云つた方が適當かも知れませんが、ガラリと情勢が一變しました。印刷術の進步、手輕に印刷が出來ることや、關係者に敎育のあるものが殖えて來た事、販賣方法が巧妙になつたこと、その種類が多くなつたこと、大衆本で許需される圓本の流行からして、眞面目な出版をやつて居たのでは、ボロイ儲けがなくなつて來たこと、要するに不景氣の故と云ふ事になりませうが、以上申上げた樣な、色々な理由がより集つて、檢擧數の如きも大變な數に上つて居ると思ひます。淫本の値段の如きも、一體に安くはありませんが、裝幀なども凝つたものが多くて、値段だけのものとして充分受取れるのが、甚だ尠くありません。猥褻な一々あげることは遠慮いたしますが、輸入品そのまゝのものを內地で刊行したのなぞがありました。

だから印刷技術の進步は誠に結構なことに相違ありませんけれど、淫本出版の方へ應用されるのは弱ります。淫本の種類ですが、日本固有のものもあれば、德川時代から傳はつて居る支那ものもあります。日本固有のものは、挑發が唯一の目的となつて居る樣で、千遍一律で、醜劣そのものと云つて差支ないでせう、支那ものは、文章、文字の用ゐ方に面白い所があるやうで、夫々專門になつて居る所なぞが面白いと言へば面白いでせう。どちらにしても、研究家として蒐集して居る間は無事ですが、書齋だけの研究では滿足が出來なくなつて、折角の研究報告をまとめて、世

間に發表しやうと云ふ氣が起つた場合に、氣をつけなければなりませぬ。猥本出版業者は左樣な研究家を巧に利用して、飛むでもない間違を起す事例が乏しくありませぬ。奇態なもので、蒐集家から專門業者になると云ふ人が多いのであります。

反譯ものの淫本がウンと殖えて來て居ります、これなぞは淫本關係者に知識階級の人が多くなつた歷然たる證據であつて、英語、佛蘭西語、獨逸語から反譯したのがあります。獨逸語のには、所謂性學と云ふのでせうか、かなり六つかしいのがある樣です。日本のものと比較すると、小說を讀む氣持のものが多くて、催情の爲めの猥本でなく、エロ文學出版物と云ふものに屬するのかも知れませぬ。

日本語の現代ものもないではありません、有名な强姦事件なぞあると、早速それをいゝ加減に、淫本のフオームにデツチあげてしまひます。餘り感心しませぬ、やはり一種の天才とでも言へるでせう。

それから土俗學を研究なさる方は、性的出版物をかなり讀まれる樣でして、變態性慾研究者になると、グロテスクなものにも興味を覺えられる樣ですが、エロとグロテスクのグロとを一緒にして、漫談化したり、隨筆化したり、アブノーマルなもの、歡迎される、エクセントリックなもの、悅ばれる、時代の要求を充たさうとして出版される、輕く淫本なりと一口に言ひ去る譯には行かないものが出て來ました。この系統に屬する人達は、合法的に、祕密出版なぞせず、正規の手續を踏むでやります、やりますが矢張祕密出版もやりますであつて、油斷もスキもあつたものではありません。中には取締るものに、故意に油斷をさせやうが爲めに、刷り式の雜誌を發行して置き乍ら、裏へ廻つては、愛讀者名簿を作製して、第二段の仕事、即ち猥本購讀を勸誘すると云ふ順序で進むものがあります。畫報なぞ賣りに行つて、時にコンナ面白いものがありますが、一册如何ですと出る手とは違つて、最初から計畫的に着々と密賣方法を講ずるものがあります。アメリカのメール・オーダー・システムは廣告費節約の爲めに考案されたものだと聞いて居ますが、日本では檢擧の眼からのがれやう爲めにやる樣です。斯樣な珍談があります。ある淫本屋が廣告印刷物を配つたら、しきりと註文が來る、その註文の最後のものに、何故かしら、返辭を出したくなかつたのです、ですけれど商業であるからと、他の手紙と一緒に返辭を出した。其後警察へあげられて段々取調べられて居ると、返辭を出し度くなかつた手紙は、警察關係の人からであつたことが判明して、あれが蟲が知らしたと云ふのでせうと、淫本屋が苦笑したと云ふ事があります、奇體なものです。惡いことは出來ぬと云ふのは、まさしく斯うしたことをさすのであらうと思ひます。

肉筆のエロものは、嚴格に言つたら、出版物に入れられませぬけれど、エロ出版物の檢擧をやつて居る間に、自然とひつかゝつて參ゐります。どんな畫家かと云つて、一々名は覺えて居ません、けれども大家のタハムレとでも申しますか、時には大ものを探し當てることもあります。それは何年目に一包と云ふ程度で大したことはありませぬ。大抵は繪心

がある、器用な人が、生活に困つて、四六判位のヌメに、極々簡單な繪柄で、描寫して折本を造り、一冊何圓で賣るものばかりです。何時ぞや、近く帝展に油繪を出品し度い、その稽古に裸體畫から、春畫を描いて居ると云ふのに出會つたが、何處かの職工でした。小說の挿繪を描いたり、雜誌の口繪を描いたりする人で、この方面の繪をかく人も片手では數えられない位ありましたらう。創作です。

また近頃では、マッチ・ペーパー蒐集の流行をあて込み、且つはカッフエ、バー、ダンスホール、飲食店の廣告に、いかゞはしい、判じ繪的な、やはり猥褻なマッチを製作するものが殖えて來たやうです、その最初はフランスから輸入されたらしいです。斯うした小ものには、千社札、祝儀袋、名刺なぞもありますが、洒落氣とエロが一緒になつたもので、德川時代にあつたらしく思はれるものとは大分趣きが違つて居る樣に見えます。やはりこの系統に入れてよいと思ひますが、表紙は電車の回數券になつて居つて、中が石版印刷春畫になつて居ると云ふ變り種がありました。

これに就いて悲喜劇があつたさうです。不良老年の、ある會社の重役が、不用意にオーバーのポケットに入れて置いたものです。すると、女學校へ通つて居る娘サンがあつたと思ひなされ、ある朝通學券を使ひ果して、娘すンは阿父さんのポケットから、件のいかゞはしい回數券を持つて出たものです。一寸でも中味を改めたら何でもなく無事に濟むだのでしたが、左樣なものとは夢にも知らう筈なく乘換を切りませうと車掌が來たから、電車の中で平氣で差出した處、お孃さんよりも車掌の顏が赤くなつたものです、不思議に思つてお孃さんが切符を見ると、例のものですから、顏から火が出る樣に眞赤になつて、次の停留場で飛び降りたと云ふ話があります。お退屈でせう、これでも御覽になつて居て下さい、直ぐ主人は歸ゐりますからと、淫本を來客に差出したと同樣の話で、天罰と云ふの外はありませぬ。かうした御主人に限つて、春畫なかつては、家寶にする積りであつたとか、德川時代元祿期の文學を研究する積りであつたとか、猥褻なものを見たいために購入したのでは斷然ないと、合理的にあさましい心狀を胡麻化さうとなさるが、一度でも勸誘狀を貰つて注文を出すと、エロもの愛讀者名簿に登錄されたものと思はなければなりませぬ。その證據は次から次へ、不思議に、未知の人から、あやしげな廣告宣傳印刷物が舞ひ込むで來ます。それでも代金引替で、何か品物を送つて吳れゝばいゝですが、一回の送金に對しては折返して註文の品を送り、二回目の送金に對しては、私は只今警察から猥褻出版物の件で追つかけられて居る、非常に危險狀態にあるから、もう少し例のものは待つて吳れと云ふ文意の返信を寄越して、送金を欺取するものがある、全く大きな聲では、人に話の出來ない、莫迦々々しい事です。丁度、猥褻映畫の會をやると云つて、切符の前賣りをして置き乍ら、開催期日になると、警察で會場をかぎつけたらしいので、急に會場を變更する必要が起つた。追つて會場は通知する、と云つて、そのまゝ會費を猫婆極めるのと一緒です。

通信販賣業者もやゝ似通つた點があります。新聞界で云ふ所謂不良廣告を出して、新

業をする連中でして、誇大虛僞に渉る廣告の文字を用ゐて、立派に納本の手續をとつて、當局でも差支ないものとされて居る、それにもかゝはらず、何かしらエロものゝ如く思はせて、買はせやうと云ふのですが、地方青年はよく引つかゝる樣です。

何故、斯うも大仕掛なエロ秘密出版が續出するか、やめてから後も考へて見て居ますが、印刷屋サンも無關係とは言へない樣です。何かのキッカケで、印刷屋とエロ出版業者とが懇意になる。すると、今迄蒐めて持つて居るエロものゝ中から、何か一冊を選び出して、第一回の出版をやる。注文者の方では、その入金の全部を純益なりと計算して、印刷屋、紙屋、製版屋に一切金を支拂はない。矢の催促すると何とか彼とか言を左右にして金を出さず、どうも第一回は失敗した、所で第二回目のを計畫して居る、今度は必らず損はかけぬと言葉巧に持ちかける、一方では商業が可愛いから、また仕事にかゝると云つた調子で、續出するものと想像して居る。さうかと思ふと、印刷屋の方が上手を行くのもあります。限定出版または一千部と注文された場合に、餘分に印刷して置いて密賣する事もあれば、紙型を幾通りも取つて、注文主にも秘密に淫本を發行すると云ふ、ツルもあるのであります。

そして出來した出版物を隱匿する方法はと云ふと、探偵小說か地で行つたと云つても間違ひやありません、天井裏、床下、物置、空家の二階なぞは平凡な方です。アパートなぞ借りて、外見事務室と見せ、淫本の倉庫にして居ると云ふ大膽極まるのがありました。ある地方であつた話ですが、見た所は眞實物置小屋であるが、二階に事務室があり、淫本を山と積んで置き、昇降は梯子でやつて、梯子を決して眼につく樣な場所には置かないのです。注文がある度に、小包郵便にして、遠方の郵便局から發送するのですが、東京でやるとすぐ郵便局で發見される心配がある、だから地方へ行つて、其處から發送すればよからうと考へ、地方の郵便局から發送しやうとしたが、地方の郵便局では一時に左樣に多數の郵便物を受附けたことがなくて、かへつて不審に思はれるであらうと、再び東京へ持ち返つて、終に事發覺に及び、ソックリその儘差押へられたと云ふ珍話があります。

エロ出版に關係する人物はどんな人が多いと云つて、前にも話した樣に、此頃では知識階級の人が多い樣です。專門學校を出た人だつて珍らしくありませぬ。春畫や裸體寫眞の取次販賣をやる奴は、なか〳〵その系統を言ひません。極つた樣に、淺草公園を散步して居たら、年令何十歲位の男に會つて、その男から買つたのですと言ひ拔け、仲間に迷惑をかけない樣にとしますが、既に檢擧された品物の中には、大抵同一品物があるものですから見當はつきます。中には秘密結社の樣なものを作つて、品物の受渡しにも特別な方法を考へてやつて居るのもありますけれど、何處かにヘマな所が殘つて居るもので、さう大して苦にする程のことはありません、この邊が機密と云ふ所でせう。

ある男は、淫本の取次販賣をやつて居るもので、自分が發行したものでないと言張り、×

×町××番地の某からかつたと言ふものですから、現場へ行つて見ると、全然家なぞのない空地であるので、更によく聞いて見ると、いや實は某と云ふのは私の變名で、發行した本人は私ですと云ふ圖々しいのもありました。お化け淫本とでも言ひますか、よくある手です。お又慣れた淫本屋になると、留められるであらうと、鼻かみ、寢簪まで用意して來ると云つたのもありました。斯うなつて來ると全く始末におえない人達と言はなければなりませぬ。

それでガリ版淫本は今の所商品とはなり難いな、これまでの樣に見かけきせぬが、中學程度の學生が折りにふれて試みる樣です。つまり同級生の間に頒布するもので、かう云ふ方面に興味を持つて居る學生は、心理學者の研究資料にある樣に思はれます、單純な軟派不良と見る譯には參らない、その高級と云ふと變ですが專門學校位になると、英文のものをコッソリ複製する、その材料が英語の先生あたりから出たりするに至つては、悲しむ可き事だと思ひます。

ところで、エロ出版關係で面白い副業をして居るものがあります。と申すのは、名簿、お得意名簿と云ふ奴で、客筋のよい名簿だと相當の高價で取引されるのです。以前は註文して來た封筒を紙屑にしないで、チャンと整理して新規開業のエロもの屋に賣ります、其相場は石油箱に一杯もあれば四五十圓はするさうです、凡そこの位高い紙屑はないでせう。

何處から端緒を摑むかと云つて、一概には言へませんけれど、大體常習的にやつて居るものゝ行動を視て居れば自然に解つて來ますし、隨分大膽に廣告してやつて居る次第ですから、知れなければ不思議位なものです。具體的にエロものをやる人間は、普通人とどこか違つて居る、肺病患者の樣な、眼のギョロンとした、着物なぞもサッパリして居る樣で、垢染みたものを着て居ると、斷言出來るものではありませんが、やはり何處かしら違ふ、その違つて居る點が警察官の第六感を刺戟するので、この人間怪しと目星をつけて調べて見て、發見すると云ふ事例は澤山あります。電車に乘つて居る、どうも向側の男、臭い、終點で降りろから尾行して、手荷物を改めて見る、中から春畫が出て來たりする、第六感百パーセントと云ふ所です。新聞記者の第六感と同じことです、つまり何ですよ、長い間同じ仕事に從事して居ると、種々な經驗が蓄積されて來て、無意識の間に、此奴怪しい、追駈けて見ろと、耳のあたりでさゝやくものがあるのです。

ネタ屋がエロの方であると言はれますが、ネタ屋は風敎問題を眞面目に考へて居て下さる、有識階級の人々です、いつもよい材料を提供して呉れます、內容見本なぞ書留郵便で送つて呉れたりします、破棄しやうと思つたけれど、いづれ各方面へ斯樣な手紙を出して居るに相違ないから、この害毒を小範圍で止める爲に送付する、徹底的にやつて下さいと激勵の辭まで添へたりしたのでありました。かと思ふと、知人の間へ取次販賣する會社員が一人あつて、上は重役から下給仕に至るまでエロもの研究者になつて居たりするのを見ては、驚くの外はありませぬ。

いま流行る、モダーニズムと云ふのはどう

しゃたものか、深いことは私等には解りませんへけれど、エロチシズムとやら、グロテスクとやら、尖端的とやら、性的魅力とやら、イットとやら、左様なものがゴッチャになつて居るのぢやないですか、アメリカには、ドット・アンド・ダッシユ・スクールと云ふ小說に流派があるさうですね、エロ出版の大家が敎へて吳れました。さうすると、エロ出版は新時代の產物であつて、モダーン犯罪、ステツキガール、■タクガールと同列にあるものと言へるのぢやないですか、當分減絕することはないでせうし、印刷から頒布網の關係など、ふの手で失敗したから、今度はこの手といふ工合に、日一日と巧妙な加へて來るやうです。イヤ骨の折れる仕事で、自分のやつた仕事、どうこう云ふ譯ではありませんが、殺人强盜を捕へるのと變りがないです、エロ出版屋だつて變裝して逃げ隱れしますもの。

まだY老人の話は盡きたと云ふのではなかつたが、第一回の會談は、この邊で打切つて置つた。(五、七、一)

アメリカ通信

フォードの客となつて天才機械人を觀察す

本誌特派員 デトロイトにおいて 清澤洌

１.

ヘンリー・フォードは無學なる一個の技術家(エンヂニア)である……かう私が書き出しても、かれはこれに少しも憤慨しないばかりでなく、寧(むし)ろこれを素直(すなほ)に受け入れて『さうとも、さうとも』と肯づくであらう。私は約五日間ばかりかれの客となり、親しくかれと話す機會をえて、安心してこの方面から――比較的世界に知られざる方面から、かれを紹介することが出來ると思ふ。

始めにかれと逢(あ)つたのは、デヤボンの機械試驗所（Ford Engineering Laboratory）であつた。試驗所といつても、二町歩ぐらゐはあらうと思はれる廣大な建物で、フォード氏はこゝを根城として、その產業王國の指揮をしてゐるのだ。

併しその指揮が大きな机(デスク)に頑張つて、ベル一つで、人形師が人形をあやつるやうに事務員を驅使すると思ふのは間違ひであつて、自身(じしん)がたえず高級社員や、事務員の部屋を襲(おそ)ひ、掘りこんで話しかけるのである。

『大將(ボス)をさがすのに、かれの部屋に行くのは最後の場合ですよ、自分の部屋などにゐたことはないんだから』

フォード氏の秘書は私にさう話した。珍らしく事務室にゐるかも知れないといふので、私が行つてみると、かれは讀書してゐた――

私がかれと會見したのも、かれの事務室でなかつたのは無論である。私を紹介してくれたキャメロン氏の部屋で、そこにはフォード氏の一粒種で、名義上の社長エドセル・フォード氏も並んでゐた。エドセル氏は、小形のまだ若い青年紳士で、打ち見たところ三十歳の峠を越してゐると見えなかつた――實は餘程越してゐるさうだが。

私がロンドン會議からの歸途だといふので、話しは軍縮會議のことから始められた。エドセル君が最も語(かた)つて、ヘンリー・フォード君はたまに短い言葉を挿(はさ)んだ。日本の海軍が政府と議會に抗して、どうして頑張れるかといふことが、解けない不思議の謎であつたらしい。

『あなたの大量生產主義、高給主義が、日本のやうな國にも適(あて)はまりますか、市場が狹く、原料がなく、その上に人口の多い國に……』

自分の說を述べに來たのでない私は、話頭をかへてフォード氏に聞いてみた。

『日本には海軍があるではないか』

私はフォードの言葉を、『海軍のためなら幾らでも金をかけるではないか』といふ意味に考へてゐると、かれは直ぐ言葉をついだ。

『支那でも西比利亞でもとつたらいゝではないか。そこには原料が幾らでもある』

『現在の狀勢ではそう簡單に……』

『それなら海軍が、まだ小さすぎるといふことなのです』

かれはニコ〳〵しながらさういつた。今年の七月で滿六十八歲になるといふのに、そんな老の影はどこにもない。顏の眞中に盛りあがつてゐるやうに高い鼻が、やゝ顏面の調和を破つてゐるが、思考力を表象する秀でた額と、羊のやうに柔和な――併しどこか商人の狡猾さをも示してゐる眼が、極めて、いゝ感じを對手に與へる。殊にかれの笑ひには解けるやうな親しみがある。私はかれの話しを皮肉ととるべきかどうかに迷つた。

2

『日本は滿洲で、移民政策には成功してゐるではないか』

と、先頃、南米ブラジルに行つて、日本移民の實狀を見て來た高級社員が口を入れた。私は、『日本が滿洲で成功してゐるものがありとすれば、それは移民ではない。一國の移民政策は、生活程度の高いところから非常に低いところに流れ出て、その土着人と競爭して成功するものではない。滿洲が日本にとつて珍重すべきは、今のところ石炭と鐵道だけだ』と述べた。

この時である、フォード氏が突然口を出して聞いたのは。

『滿洲といふのはロシアだらう』

このフォードの質問は決して間違つて居りはしない。ワシントン會議の時に『支那とは何ぞや』といふ問題が、外交官の間に新しい疑問をまいたやうに、滿洲は日本だといつてもよければ、ロシアだといつてもいゝし、また支那だといつても無論いゝ。寧ろその一つだと云ひきることに誤謬がある。

併しこの場合、フォードの質問は滿洲はロシアの地圖の色の中にある場處だらう、といふ以外の意味ではなかつた。三十億圓の富の所有者に、滿洲が支那の北方にある一區劃であると數へうる勇者があらうか。フォードの質問は一座の四人――私を交へて――によつてイグノアーされて、話しは進められた。

私は驚いてかれの顏を見た。フォード王國の獨裁者、この世界に誰にも增して「文明」を持ち來たすに力があつたフォードが、小學校の生徒も、これを知らずして修業證書が握られないほどの問題の智識を缺いてゐるのだ。

私はこの事から、英國で聞いた話しを想出した。ある英人の華族が、いつかかれを訪問して『英國の產業が、石炭工のストライクの故に、悲しむべき影響を受けてゐる』ことを述べた。するとかれは例の調子で

『石炭罷業？　英國に石炭が澤山あるんですか』
と聞き返したといふことである。
　小學校も卒業しない内に學校をやめたかれは、それから技術家になつた。そしてその後その方面だけに精進してゐるので、普通一般の基礎的智識のないのは、容易に想像しうるところであるが、併しそれだけでこの無準備の缺陷が說明できるであらうか。
　かれは自己の無學を誇つてゐる‥‥といふ言葉に誤解があれば、少なくともかれは學問といふものを蔑視してゐる。その後、かれに逢つた時に、机の上(他人の机だ)に英國の經濟學者ホイザーの著書があつて、かれはそれを玩具にしてゐた。
『經濟學者で貴方の尊敬する人は誰ですか』
　私はかれに聞いてみた。
『誰も知らないし、從つて一人もない。また第一讀んだこともない』
『本を讀むことを獎勵しませんか』
『本を讀むと、餘り人の說に賴りすぎていけない。私は考へることを勸めてゐます』
　かれの說によると本を讀むとが、却つて創造力を殺してしまふのだ。人間は考へなくてはいけない。コロンバスが本ばかり讀んで、それを信じてゐたのでは、アメリカ發見は出來なかつたらう。
　本に賴らないで、自分で考へる事。そこにかれの事業の基礎と、哲學と、政策がある。これが時々、かれを滑稽役者とする所以であるが――例へば戰爭中平和船を仕立てゝ戰爭をやめさせようとした如き――併しそれがまたかれを今日の位置に持ちあげた原動力でもある。
　かれの社會觀、經濟觀がどれだけ間違つてゐても、それはかれ獨自の創造である。ハンマーとのみと機械の間から覗いて、そこに礎いた一個の信念がかれの政策である。從つてこれに機械人にみる矛盾があるのは元よりである。

3

　書籍を蔑視して自己の經驗と思考力に賴らうとするのであるから、その思想は極めて奔逸で、革命家の尖ひすらある。
　私達が日本のことを論じてゐた時のことである。フォードに日本に關する意見を求めると
『日本は丁度英國と同じだネ。長い間、金融家(フアイナンシアー)が國民を壓迫して、考へることも動くことも出來ないやうにしたのだ。產業が起つて、この金融家の力を奪つてしまふと、日本國民は自由になつて世界に活動するやうになりませう』
といつた。かれの言葉は無頓着な機械人そのまゝである。『ユー・ノー・ユー・ノー』と、米國人がよくやるやうに、手を擴げて振つたり、『ユー・ペット』といつた所謂米國の上流階級が使はない言葉を盛んに使つた。
　金融家が經濟の鍵を握つて、その力で國民を壓迫する。さう感じてかれは何時でも金融家を極端に嫌惡して居る。生產主義のかれは、生產しない何人に對しても、白い齒をむける。殊に銀行家といふものは自己が生產しないで、生產した者の利益を奪つて生活するものである。

かれにもし席を同じうすることを屑ぎよくしないものがあつたら、それは銀行家であらう。

これに關してフォード氏の祕書キャメロン氏は私にこんな話しをした。一九二一年頃、米國に不景氣風が吹きまくつた時のことである。大世帶だけにフォード會社が困つてゐるといふ實狀が世間に傳へられて、あるニューヨークの銀行家が金を貸しに、フォードを訪れた。

銀行家が話しを切り出して、かういふ場合には、かういふ風にしなければいけないといふ意味をいはうとすると、フォードは突然立つて、かれに帽子を渡し『出口はそちらにあります』と追ひ出したといふ。

かれは平生嫌ひな銀行家が、自己の事業に勸言めいたことをいつたので、その上聞くことすらも堪へられなかつたのだ。一時、かれのユダヤ人攻擊は有名なもので、これがため訴訟事件をも惹起したが、これもこの種族が金融界の喉首を握つてゐることが、大きな原因をなして居るのであらう。

かれはこの金融家が、日本や英國を慘めにしてゐると考へて居るのである。この「金融家」といふ文字を「資本家」といへば、かれの心の持方は、頗ぶる左翼的である。たゞこゝで注意すべきことは、かれは金融家と產業家とを明らかに區別してゐることである。金融家は搾取するもの、產業家は生產するもので、天地の差があるやうに考へてゐる。

今一つ私が、かれと話してゐて氣づいたことは、かれの結論が、いつでも自己一流のドグマから引き出されることである。英國、日本が金融家によつて慘めにされて居るか居らないかの事實問題は、この場合問題ではない。フォードにおいては、その結論は日英の狀態を研究した結果ではなくて、『金融家は搾取家なり』といふかれの信念から、故に日本、英國の現狀は金融家の壓迫の結果なりと結論するのである。

私はこゝにかれの機械人の特異性を見出すのである。二インチの幅の鐵板は、どこに行つても、二インチ幅として通用する。一つの前提を得た以上は、それは例外なく當て嵌んとするのがその心構へである。

私はフォードの經營してゐる學校——これも後で紹介したいと思ふが——に、日本の學生を入れることが出來たら、どんなによからうかといふので、これをかれに話してみた。かれは快よくこれを承諾した後で

『出來るなら北部日本の青年がいゝネ。身體も大きいし、それに寒いところだから、精神的にも忍耐心があつていゝから』

といつた。

北日本の人が特に身體が大きい、とは聞いたことがないが、それは假りに事實であつても、私の結論に交渉はない。フォードは、どこからかフォーミュラを得て來て、それを日本人に當てはめて居るのだ。

『心構へにおいて何と左翼的なことか』

私はそんな風に考へながら、更に進んでソビエット・ロシア觀などを聞いてみた。

4

フォードの意見を紹介する前に、私はも少しかれの人柄を語つておく必要があると思ふ。かれの經濟思想は、いつの間にか米國に受け入れ

られて、かれの意見は又、大きな意味において米國の意見であるほどな重要さを持つて居るが、併し面白いのはかれの性格であつて、かれの意見ではない。そしてかれの人柄を傳へるには、私の經驗を語つた方がいゝと思ふ。

私は米國に來た以上は、誰に逢はなくてもヘンリー・フォードだけには逢ひたいと思つた。そこで歐洲からニューヨークに歸ると、直ぐ手紙を出しておいた。それも個人の手紙では中々逢ふまいといふので、米國のある大通信社を通じて會見を申し込んだ。

返事が全然ない。『今のところ米國で一番難物でせう、私の方の新聞で××記念號を出すといふので、祝辭を貰ふために、種種手を盡したが梨子の礫でした。近頃はテンで顏も見ないで書く會見記が流行るやうですぜ、現に日本に二三のフォード會見記がありませう、あの手はどうです』。紐育に來て居るある日本大新聞の特派員が、笑ひながらそんなことをいつた。

そこで私は更に追ひかけて、ロンドン會議で親しくなつたデトロイト出身の米人特派員の紹介狀を封入して、祕書の一人に手紙を送つた。半ば絶望して居ると、それから二週間計りして突然その人から手紙が來た。

『來る月曜日に當地に來られゝば、フォード氏と會見するやうに取計ひませう』



とある。月曜日といふのは明後日で手紙を受けとつたのは土曜日の午後である。私は荷物を纏めて、その晩に紐育を出發した。

組織と能率は米國産業界の特長であり、殊にフォード會社において然りである。商賣のことであつたら、釘一つの問題でも、その能率の網の注意から逃れえまいのに、フォード自身のことになると、返事すら出したり出さなかつたりだ。

月曜日の朝、工場の事務所に行くと、こゝではないといふので自動車で、會社本部に送つてくれた。そこに行くと『研究所の方だ』と、また二哩近くを走つた。フォードを訪問するのには、そのためだけにでもフォード一臺を求めなければならぬほど屋敷が廣い。

祕書のキャメロン氏は親切に私を迎へてくれたが、『その内に迎へま

すよ。ゆつくりしてゐらつしやい』といふのだ。普通の米國實業家なら、『何時何分から何分間ならお會ひしませう』と來るところだのに、これはまたフオードらしくもない。私は研究所の前の奇麗に刈りこまれた芝生の上に横になつて寢てゐた。

併し、この時間もなにもないのが、却つてフオードらしいのであることを私は考へ出してゐた。歐洲大戰の時に、かれは平和船に學者や宗教家を一杯乘せて、これを歐洲に派遣したことは、前にも一寸言及した。舊派の芝居でよくやる『暫らく、しばらく』と、長袴を引きづりながら出て來るところが、フオードの踊つた場面である。

この時に、かれは當時確か國務長官であつたブライアンを晩餐に招いた。ブライアンはワシントンから態々紐育に出て來た。時間通りに客人が行つて見ると、主人の顏は一向見えない。待つ事、實に五時間。當のブライアンが無類の平和論者であつたから、よかつたものゝ、氣短かな客人なら、紐育を出發する前にフオードの一方の眼ぐらゐはつぶれてゐたかも知れない。

その同じ時である。新聞王のハーストがフオードの壯擧を送るために、かれを午餐に招いた。幾ら待つても當の客は來ない。つい／＼スツポかしを食はしたことがある。

私は面會時間もないかれに却つて興味を覺えて、かれを待つた。何時からといふ制限もない代りに、何分でなくてはならぬといふ制限もない。一度の如きは一時間も對坐して、かれが中々腰をあげようとしないので……この時も他人の部屋であつた……私の方から『有難うございました』と辭退したほどである。

殆んど總べての天才が然るやうに、かれは常に自己の發意と、衝動に動いてゐる。そしてこの性格が獨裁的、專制的に結果するのは說明するまでもない。

5

かれに『時間』がないといふことは、併しながらかれがだらしないといふことでは決してない。私はたゞこれによつて、天才によく見る二重人格的半面を示さんがためなのだ。

フオードの工場なり、關係建物を見たものは、二つの特長を見るであらう。一つは馬鹿々々しく大規模なことであるが、も一つは鏡のやうに奇麗なことである。研究所でも、工場でも、學校でも、病院でも、字義通りに埃一つとめない。その取扱ふ原料からいつて、どうしても汚なくならざるを得ないところでさへ、日本家屋の床前のやうな清潔さを見せて居る。

この奇麗な本部に陣取つて、かれはその王國において、自己の潔癖に反する如何なる行爲をも許さない。かれは子供の時から、どんな汚ない仕事をしてゐても必らず白いカラーだけはしてゐたとのことだが、その几帳面さを現在のかれの配下に强ひてゐる。事務所及び工場においては一切煙草を吸ふことを許さない。

『あなたは嘗て煙草を吸つたことがありますか』と私は聞いた。煙草を好きな私も、フオード王國にある間、つい吸ひたい氣も起らなかつた。

『六歳の頃、嚙み煙草を嚙んだことはあるけれども、その後一切ありません』と、かれは答へた。

會社で吸はない習慣をつけると、家に歸つても吸はなくなる。フォード會社員の多くは禁煙家である。

酒に對して彼の態度は更に嚴格である。工場で酒臭いものがあると、罰則か、免職はまぬかれない。世界で二十五萬人近くの直接使用人を使つてゐる者は、他に類があるまいが、併しそれよりもこの大人數に、少なくとも一日八時間だけは酒と煙草の臭ひをさせぬものに至つては是非の問題は別として異觀でなければなるまい。

そればかりではない、酒に關するかれの勢力は自己の工場以外にも及んでゐる。かれの住するデアボーンはデトロイトから五六哩のところにあつて、昔は荒地であつたのが、今ではかれの故に人口も十萬近くある。米國の都市で酒密賣所のないのはこゝばかりだとのことである。

『デアボーンは禁酒法が勵行されてゐるさうではありませんか』と私がいふと

『實行さへすれば立派に出來ることを示すためなのです』と、かれは笑つていつた。フォードの職工長が、警察力を有してゐるから、かれはこの一小國の帝王でもある。

酒、煙草を社員に強制しうるかれが、他の職務上のことを自己の意志通りになさしめないわけはない。かれは文字通りの獨裁者であり、專制家である。故にかれは自己の意志を行ひ得ない如何なる形式にも反對する。フォード會社に少數の外來株主があつたのは昔のことで、これに手を燒いてから、とつくにこれを買ひとつて、今は親子三人以外には實際上、一株の株主もない。勞働者に自會社の株を分與することは、米國の流行であるが、かれは俸給を增し、賞與金は與へるが、株を分與することをしない。經濟界の變動でもあつた場合に銀行家などの制肘を受けないためとあつて、いつでも三億弗乃至は四億弗の帳尻を持つてゐることを社員の一人が話した。

デトロイトにヘンリー・フォード病院といふのがある。かれはこれに千五百萬弗ばかり使つたさうであるが、この慈善事業においてすらも、かれは外部の重役を排して、自家三人だけの名を連ねてゐる。そしてそこにつとめる醫師も全部の時間をこの病院のために奉仕せしめて一切他で仕事をすることを許さない。

フォードを產業界のムッソリニに比較したものがあつたが、その專制においてムッソリニよりは、もつと徹底してゐるかも知れない。

『あの聲の低い、愛嬌のある、痩せた人が、專制家なんだからね』と、米國文壇に名のあるガーランド氏が、フォード研究所の食堂で僅な食ひながら私に大きな息をついて話した。

かれの二重人格的矛盾はまだある。

かれには如何にも優しい、デリケートな感情がある。私がかれの王國の中にあつて、かれの誇りとするエヂソン村に案內された時のことである。こゝにはかれの最も尊敬するエヂソンの、ランプを發明した家、

蓄音機を發明した家などが昔しながらに立つてゐる。かれはこれなニユージヤーシー州から運んで來たのだ。

一九二八年九月にエヂソンは、自分の建物を見るためにこのデヤボーンに來た。『實によく出來た、九割九分まで昔しのまゝだと喜びました。フオードさんが、一分はどこが違ふのか、と尋ねたら、こんなに床が奇麗でなかつたよと笑ひました』と、こゝの係り長で、エヂソンと蓄音機を發明した時に苦勞を共にしたエール翁が話した。

そこから嘗てエヂソンの圖書館であつた建物に行かうとすると繩が張つてある。エール翁が遮ぎつて說明した。『フオードさんは、ほんとに優しい方なんです。そらあそこに小鳥がゐませう、あれが卵を生んだのをフオードさんが見つけたのです。驚かしてはならぬといふので自分で繩を持つて來て、この通り繩を結つてしまひました。動物を通りがかりに介抱してやつたり、いたはることがいつでもあります』

これをかれの一時の氣まぐれにしてはならぬ。私はかれにそれだけの氣優しさの事實を見た。その學校や工場に孤兒を多く收容するなども、その一つの例である。

併しかうして優しいかれは、能率のあがらない職工を馘きるのに少しの躊躇もないのだ。またかれは慈善といふものに對して嫌惡をすらも感じて居るやうである。一文の金も代價なくして與へることをしない。かれの動物愛護の精神は、動物に及んで人類にまで及ばないかのやうである。

矛盾は外にもある。

かれは變化を人生そのものだと感ずるほど變化と將來に生きてゐる。『人間はたえず進歩するのだ、進歩しなければわれ等の生活は止るのだ人生における唯一の永久性のものは變化あるのみだ。』かれは會話の中に時々、短い哲學的な警句を入れるのが常だが、ある時、私にさう語つたほど變化を求め、沈滯を嫌つてゐる。

それだのにかれは一面また古いものに執着してゐる。かれの唯一の道樂は今のところ古物の蒐集である。米國開國當時の家や道具を山のやうに集めて、それを珍重してゐる。エヂソン村にも、研究所にも、ダンス・ホールがあるが、これはかれの子供の時に流行したもので、今のジヤズや、せはしいものが不可だとあつて、懸命にこれを宣傳してゐる。誰にもましてジヤズの世界を持ち來たすに力のあつたかれは、その結果を拒絕して、昔しのダンスを持ち來たさうとしてゐるのだ。

この矛盾をどう說明するか。

7

かれは機械人である。書籍の論理を排して、經驗の踏み臺に築く機械人である。

ある日、私は聞いた。『何十萬といふ人間が、貴方の下にあつて生活を維持してゐます。あなたは時々、自から重い責任を感じられませんか』

『いや、私は少しも責任を感じません、人間は經驗を得るために生きてゐるのです』

かれには毎日の經驗が生活そのものである。その經驗をうるためには、かれは問題を根本から確かなければ承知しない。かれは嘗て鐵道を買つて、これを自分の會社で運轉しようとした。最初にかれは機關車を引きとつて、これを全部くづした。そして自分の會社の技師に向つて

『自分で器具をこしらへて、これを組立つてみろ』

と命じ、新らしい器具から始めて、機械の組立を了したといふ話しがある。かれは在來のもの——人の考へたものでは承知しない。自身の經驗と納得を要求する。かれの經營する學校には、工場と教室の區別がない。工場が即ち教室なのだ。

かうして經驗によつて確信を得れば、かれはこれを實行するのに如何なる障害をも懼れない。その自動車において、かれは嘲笑を顧みずして主張を貫ぬき通した。その販賣方法において獨特の方法を用ひた。勞働者に對しては、世界が尚『最も安價に、最も長く使ふことが利益』であると思つて居る時に、かれのみは、最も短時間で、最高給を拂ふことが産業界に利益でありとし、今では他の自動車會社の工場賃銀平均が一時間七十五センツであるのに、かれの工場では一時間一弗を支拂つてゐる。そして原則としてはこのかれの主張は米國の産業界の受け入れるところとなつた。

『この大きな事業に對して、あなたのところの事務員が馬鹿に少いではありませんか』

私はフォード會社に事務員の數が非常に少ないのを見て、ある高給社員に聞いた。

『それもボスの苦心の結果ですよ。小さい一つの領收書の形式を造るために四十回も型をかへたことがある。かれは試驗のためならどんな大金でも惜みません。コークスの爐を二百萬弗で造つたのが、結果がよくなかつたといふので、直ぐこはしたこともあります。』とこの社員は答へた。

經驗主義によるフォードの社會觀、經濟觀は極めて樂觀主義である。かれは社會の需要力、消化力には限界がないと考へてゐる。『生産過剩だといふけれども、生産過剩がなくて、どうして進歩がある。唐黍が生産過剩だつたばかりに、今まで食ふことしか知らなかつたのに、肥料になつたり、いろ〳〵な發明が生れたではないか』と發表したのは、それから少し前であつた。

私がその話しをするとかれは説明していつた。

『賣ることばかり考へるからいけない。賣るものはまた買ふものなのだ。買ふ者にとつては安すぎるといふことはない筈ではないか。かれ等は買ひたい意志はあるのだが、買へないのだ。高すぎるのだ。ビジネスが惡いといふのはビジネス自身が惡闘々々してゐるので、購買大衆が惡闘ついてゐるのではない』

このフォードの意味は、商賣が不景氣になることの罪は自分であつてお客樣ではない、お客樣に買へるやうにしないのが惡いといふのである。

自分の意志を行ふのに獨裁的、專制的であるかれは、購買大衆に對し

ては極めて謙遜である。故にかれは不景氣の際には、いつでも思ひ切つて値下げをして來た。丁度私が行つた六月にも一臺につき五弗から廿五弗の値下げを發表してゐた。

8

生産主義を中心にして、經驗で押し進むのだ。『働かざるものは食ふべからず』。かれは人間と金と時間の浪費を、酒、煙草、埃と同樣に憎んで居る。米國の富豪が慈善事業に對して驚くべき金を支出してゐるのに、かれのみはこれをなさゞるは、かれのこの信念の故であらう。

働いて一歩先んずるものが勝つのだ。といふかれにとつては競爭は少しも懼れるところではない。私は聞いた。

『大統領フーヴアの客となつたそうですが、ワシントンはどうでした』

『世界は國際主義に向ひつゝあります。併しワシントンはこれを發見するに困難な場處だ』

『日本のやうな國は原料品を外國から自由に入れなければならぬが關税の障壁が困る』

『關税なんといふものは怠惰な人間の發明品だ』

かれはその獨特な立場からソヴイエツト・ロシアに對しては感情的、政治的には納得出來ないが、經濟試練としてはやゝ同情できる。かれは無代で總ゆる便宜をロシアに與へ、現に五十名計りのロシア人が見習つて居るとのことだ。

私『ソヴイエフト・ロシアはどうです』

彼『五ケ年プログラムなどをやれば結構だと思ふ』

私『共産主義をどう思はれますか』

彼『一體、共産主義とは何か、それが聞きたい』

私『例へば利益のために生産する現代の組織をかへることはどうです』

彼『そういふ時代は過ぎつゝある』

私『個人財産の所有を禁止することはどうです』

彼『皆なに分ける前に、何にも殘らなくなつてしまひませうよ』

かれは日本がロシアといふ火藥庫を手近に控へて居るといつた。社會主義のことに話しが移ると『モツプに事業をやらせることなんだネ、モツプが何がやれるかは皆な知つてゐる筈だ』といつて、ソヴイエツトよりも評判が惡い。

彼の智識が經驗で得られるものである間は、かれの主張は頗る堅い。そこに學問的に不思議に見えることでも、米國といふ富源の多い國に當て嵌めて見て、かれの理論が間違つて居りはしなかつたことが分つた。併しその分野が經驗だけで得られないものになると、かれの結論は頗る怪しくなる。かれはある時にかういつた。

フオード『私は生れ代りを信ずる』

私『どうしてそんな事が信じられますか』

彼『死は私達に一時の變化だ。變化であるなら現在でも本日は昨日と變つてゐるではないか。この世の中から何にもなくなりはしない。例へばこの部屋（われ等の話してゐた部屋をさして）には何ポンドかの空氣がある。この空氣をとり去つても、後に何か殘る。その殘つたも

のをとつてもまだ何かある。』

私はかれの Reincarnation が何を意味するものであるか、つい諒解出來なかつた。かれはキリスト教の天國や地獄を信じないといつたし、またフォードといふ人間が他の人間として、も一度この世に出るのでもないといつた。變化と經驗を人生の大きな目的とするかれには、早晩かれの前に立ちふさぐ「死」によつて滅却し去ると信ずるに堪へないからであらう。

フォードの有する矛盾は、觀じ來れば必らずしも矛盾ではない。それは書籍を讀まざる天才機械人の詐りなき自己表現である。かれの如何なる研究所、工場に到るも、毫末も祕密なく、徹頭徹尾開放主義であるやうに、かれは常に自己を他に暴露してゐる。

工場を案内してくれた二十二三歲の青年が、ある時フォードから孔子の事を聞かれたといつてゐた。フォードの運轉手もBOSSがいろ〳〵話したり聞いたりすることを話してゐた。この天才機械人には、見榮や氣取りは全然ない。

フォードが地理や哲學で危な氣である事は、法律家が繪で畫家と太刀打ち出來ないと同じ事である。われ等はフォード王國の土を踏むと、直ちにかれの思考力、組織力の偉大なる事に驚嘆する。そしてそれは自己の創造――書籍を讀まざる天才の頭からのみ來た創造である。

フォードは米國の大きな「現象」である。　（昭四・六・一八）

附記　かれの田舍の工場、かれの學校等も私は詳細に見ることを得て頗る面白いが、いづれ紹介する機會があらう。

文壇アンデパンダン

――第一次豫選結果――

應募原稿は二千三十七篇となつた。第一次豫選の結果、左記百八十四篇を殘し、之に對して、更に審査を續行する。因みに此の豫選に洩れた分は既に全部返送したから左樣御承知願ひたい。

爭ふ人々	小野金次郎
傲慢なる出發	桑島政詩
青い財布	小島かはたれ
胃の歎き	渡邊宏
わたくし	池田効
金の川と銀の川	林眞琴
賣られ行く女	橋本千三
舞人	中村彦
山に歸れぬ二匹の狼	佐藤賢
踊り子とサラリーメン	鱒見絢二
蕊魚	井上二郎
冬來	矢島包一
東西の村	脇田幸二
道	小西和三
轉落	田口竹男
大地の子ら	豐坂登
太陽は輝く	藤崎綠櫻
高等學校	齋藤榮治
怒號	根上欣二
プテイブル・インテリの絶望	小宮山文男
狂へる兄弟	近藤三郎
地を歩む人々	米田久子
8百貨店を繞つて	澤井正一
支配人	東奏雄
空虚	德永喜詩男
殺伐なる彼の半生とその弟	島田喜一
炭鑛病院長の手記	多々羅四郎
結婚狂想曲	坂本石創
最後の日まで	阿部眞二
お伽噺	槇田努子
浮浪者になつた兄貴	木田恒彦
月食	岡田經子
鑛山	梅田兒太郎
海から呼ぶ妹	藻上泗三
士族	石井李亮
喪失の黃昏	黑澤喜代次
模索時代のひとり言	佐山けい子
鉛筆娘と大統領	半田義之
若者	荒川武雄
失踪宣告	川瀨和夫
部落	大場龜吉
年増について	坂勘丸

秋期演習	田倡他家二
躍動する土の譜	南　彌太郎
ルペン生活	青木　榮
移　民	小濱櫟藏
さあ行かう！	島津友衛
陥　穽	小林隆一
病める色情	黒丸郁子
深　淵	綾部正俊
戰線に出づる	久志芙沙子
街と失業	永井廣吉
背　く	榛葉美代喜
青　春	大庭武年
前後左右	よしや　ゆり子
四分五裂	森　村　二
ニコライフスク	李　埼　雄
中間層	皆木駿三
弱小民族	江原鶴一郎
第三投手	山本御之
小島の死	平田旭浦
石炭現場	若宮秀三
燃ゆる階級	榊原創之介
敗者か？	櫻井秀郎
青葉の頃	柴崎重五郎
魚屋助左衛門	橋本靜雄

青い石膏像	佐伯盛美
學生運動	中村雄吉
窓	中川一市
記　錄	高橋良曳
途　上	南　日佐夫
飯	大泉行夫
私立八島簿記學校	藤田草之助
街の坐標	佐藤正志
運命の石	福田常松
水邊の街の渦紋	鈴木健治
心の斜塔	丘秋一路
屑	立花浩介
せゝらぎの音	州澤てい子
どん底に燃える	山口勝清
いたづら	岡田茂夫
甦　生	安　部　傳
失業者の手記	森　哲　文
工場、酒場、ビルディング	光田文雄
迷路に立つ	北島存雄
偶像南京に君臨す	野　口　活
左側を歩め！	田　宮　釧
るんぺん・れびゆ	三　枝　健
迷　戀	高山有木
セカンド・ステップに向ふ！	須田治代

女郎蜘蛛	栗田奇世見
開く扉	田中機一
黎明前の長き闇よ	高　木　仁
金を卷く渦	出水田長
曉暗時代	芳　賀　明
蠻　歌	飯田眞一
御牧原	小　山　啓
若き惠吉	青原千之
一枚の李の花が春の雨に濡れてゐる	浦上喜一郎
過渡期の颶風	和　田　隆
世界の孤兒	花岡幹夫
古典の殺	彌生潤男
彼の半生	愛田昌弘
三つの道	嶺　　靜
失戀した男	葉波無路
鎖を噛み切つた男	森本眞壽
織布工場	奈喜良憲吉
姫百合	堀　草　人
ふんだくられる者の群	木村不二男
貧乏大學生	古賀三保里
桃太郎	磯部純彦
左傾者、生産、事業、資本家	木　原　久
末期の女性	梅本武夫

清算	中村時雄
日本海に漂へる島	豐永智友
妹を活かす	川中重雄
綠の島	中村海六郎
泥を吐く	大樹建郎
女人新說	丹羽文雄
蒼白き騎士	湯淺一夫
野の飢渴大衆	和田傳
骸骨踊りの彼	森田新平
彼と放浪の姫殿下	鈴木政輝
もぐらの子	杉浦一三
火山灰	兒玉友夫
佛心鬼心	三堀正行
街の國際娘	北村透馬
監獄部屋	朝文黎明
彼の純情ははたして消え失せたか？	中村貴充郎
名勝地破壞	伊藤耿二
洗禮	鬼頭稷夫
滅びゆくもの	西村邦子
人の子	村口正夫
翼	舟木芳雄
夜盜と戀	波島曉雄
破綻者	長谷川德樹
人間に嗣ぐ	島本千禾
街の別れ	若木庸
時と人々	姫井千年
渚漂ふ彼	石塚天陽
一つの家	清水眞一
狂つた唇と頭	永野壽讓
絆	栗坂廣布
虐げられる儘	大友千鶴子
鋪鋪閉鎖	荒屋啓二
英領カナダ	松村靜子
女子賣買紹介人の子と女	星川清吉
校長の夢破れたり	竹下毅一
蔦吉物語	並木久
山國の町	山田政次
或る生	伊庭仁
壺屋	姜魏堂
姉妹草	橫彩子
文化	鈴木福太郎
都會の戲れ	東一郎
地下水	川崎長太郎
生活難	塚田茂雄
不良兒の街	北里街
庭	西村眞吉
怒號	水野覺
濱の上	葭谷青磁
翠	斉藤嘉子
波の戲れ	奥西佐郎
お鬼怒	井田敏行
夢想時代	勝俣俊行
士は叛く	寺神戸誠一
明るい世界	中島省一
亞熱帶地	陳東枝
墓石を戀ふ	永島彌吉
轉換期	山名三七男
野球狂時代	石井由太郎
明暗	多久榮一
彼女の夜光蟲	秋月れい子
夢	矢野幻太郎
マルキスト	中西政勝
直線	吉峰恒路
陋巷	原喜覺
街頭へ	杉本敏加詩
廿日間	佐々井一晃
戀愛双曲線	如月胖
戀の繪です	友二郎
親方と彼等と海と	堤武
インテリの矛盾	南光夫
ミッキ	米良武添

肉屋に化けた人鬼

—世界怪奇實話VII—

續「人肉の腸詰」

牧逸馬

4

この圖書館員ヘルベルト・グランスの息子ハンス・グランスは札附の不良で、フリッツ・ハアルマンよりもほんの一色薄いだけの悪黨だつた。廿四歳といふ若造の癖に、詐欺、竊盜、女衒で前科何犯といふ強か者、これがハアルマンと親分乾兒の關係を結んで、二人掛りで美少年狩りを始めた。美少年狩りと言つても、ハアルマンのは、子供を捕まへて何う斯うするといふだけではなく、揚句の果て×して肉を賣つて、自分も食べて、古くなると腸詰にしやうといふのだから、話が人間離れしてゐる。そこで此の共犯者ハンス・グランスだが、彼も、前回に述べた當時の事由からハアルマンと同じに警察の鼻、スパイを勤めてゐた。斯うして之とも警察に關係があつたからこそ、結果から視て皮肉に言へば、其筋の庇護の下に存分活躍出來た譯である。前掲の犠牲者表に就いて見ると、最年少が廿五番目に出てゐるフレンドルフ生れのフリイドリッヒ・アベリンクで十歳——この兒の外套から足が附いて直接間接にハアルマンの逮捕と服罪を見るに到つたのだが——最年長者は廿一番目のヘルマン・ボックで廿三歳、ミュンステル出生、となつてゐるのでも推定される通りに、ハアルマンは、十代の少年のみならず、廿歳を越した、美少年としては些さか薹の立つた者をも喑んだのであるから、ハアルマンとハンス・グランスとの交渉も初めは、ハアルマンが、

矢張り鷄姦と人肉賣りの目的から、グランスをノイエストラッセの自宅の肉屋へ伴れ込んだのだつたが、グランス自身同じ方面の變態性慾者だつたので、大いに意氣投合して、其の夜からグランスは女房氣取りにずるノ\べつたりノイエストラッセの「人肉屋」に腰を据ゑることになつたのだつた、グランスは小指の先が埋まる程の髭を有つ神經質に蒼白い顔をした、牝鹿のやうな眼の美少年――でもない、美青年だつた。鳥渡文學青年みたいなところもあつて、一度も掲載されないのに始終得體の知れない詩などを書いてはハノウヴァの新聞に投書してゐたと言ふから、われわれは、よくある斯うした型(タイプ)の青年を眼前に想描するに難くない。この色白で痩せぎすのグランスが「妻」で肥つてにこ／＼してゐる赫ら顔のハアルマンが「亭主」格だつた。二人で例の文字通りの人肉屋を經營することになつたのだが、實際この男同士の夫婦は、好くしたもので、全く世の常の夫婦に似た組合はせであつた。「結婚」後間もなく、文學女房のグランスが權力を振るひ出して、「家庭」に於けるハアルマンはぐうの音も出ない程尻に敷かれてゐる。獨逸語で、ねえ、あなた、とか何とかやつたのだらうが、ハアルマンはすつかり眼尻を下げて、一も二もなく、うむ、さうか、宜(よ)しよしと言つた調子――兎に角、可成り愛し愛された仲らしく、珍奇な同棲生活が續いてゐる。

この「妻」のグランスに促がされて、ハアルマンは一層その戰慄すべき犯行を重ねて往つたのだと言ふ。似た者夫婦で、所謂「鬼夫婦」の二人である。店に「柔い猫の肉」が尠くなると、グランスにやいノ\急きつかれるので、ハアルマンは夜停車場へ出掛けて行つて少年を捜して來る。「結婚」以後のハアルマンは、實に絶えずグランスによつて踊らされたのだ。こゝで妙な表現が記錄に殘つてゐる。一九二四年七月三十一日の公判廷で、ハアルマンが惚氣混りに陳述した所に依ると、

『グランスは毎夜寢臺で私の脇腹にぐりぐり肘を當て乍ら甘へた聲で何か言ひました。さうされると不思議に、私は、何事でも彼の欲する通りにしなければならないやうな氣がして來るのです。そして凡て彼の言ふやうに致しました。』

と言ふのだが、この「彼」の所が「彼女」でありさへすれば、普通の夫婦生活の一情景として別に異とするに足らないけれど、それが男同士なのだから、何ともグロテスクな限りである。おまけに、只の變態的な告白かと思つて聞いてゐると、流石ハアルマンだけに拔目がなくて、後へ持つて來て、

『ですから、それ以後の事件は皆グランスが主犯で、私は單に彼の命令通り動いたに過ぎません。』

巧みに責任を轉嫁しやうとしてゐる。

同じノイエツトラッセに、界隈の不良の集會所でカフェ・クルウブケといふ家があつた。二人は此家(ここ)の定連で、よく夜晩く迄麥酒を飲んでゐるハアルマンとグランスの姿が、通りからも見られた。其處を根據に附近の踊り場を廻つて歩く。そして毎晩明方近く、二人は肉店の前まで歸つて來て、グランスは家へ這入る。ハアルマンはそれから停車場の方へ稼ぎに行く。それが殆ど毎晩だつた。ハアルマンの肉屋で、殺した少年の肉を繼續的に賣つてゐたことは確然たる事實で、捕縛後、店に在つた肉を科學的に調査した所が、大半人肉だつた。腸詰は全部人肉で出來てゐた。が、當局は飽く迄この事件を單なる常習的殺人に局限して、人肉賣りや人肉腸詰に關しては、公判でも一言も觸れなかつた許りか、當時は記事差停めになつて誰も知らなかつた。永らく商賣をしてゐて固定的な購買者も相當多く、其の人々は朝夕ハアルマン方の肉を食卓に上せて來たのだから、その恐慌と騷擾を救ふ爲に、これは其筋として賢明な遣り方だつたと言はなければならない。

ロッテ少年から最後のハナベルに到るまで犯行の手口は大同小異だつた。何時も停車場に居眠つてゐる浮浪少年の中から犧牲者を物色して、ハアルマンが刑事顔をして作れ込むか、後からは稀にグランスも出掛けて行つて慣れなれしさうに話しかけて銜へこんで來た。二人で××を加へ乍ら何日か飼つた後、稼業用の大型肉斷庖刀で「處理」して、骨は溜めて置いて大概ライン河へ拋り込んだ。衣類や所持品は安値で古着屋に賣り飛ばして、エキストラ收入とし、其の金でカフェ・クルウブケで麥酒を飲むことにしてゐた。

鷄姦、殺害の順序方法等の細部に入ることは、單に不必要な許りでなく、伏字の連續になつて終ふが、全事件を通じてフリッツ・ハアルマンが單獨の下手人であつた事は言ふ迄もない。尤も本人はヘルマン・ウォルフ殺しだけは否定してゐるが、その理由が振つてゐる。このミンデン市から來た十六歳の少年は、彼の興味を喚く可く些さか醜く餘りに不潔だつたと言ふのだ。ハンス・カイムスもグランスが殺したのだと主張したが、グランスは當時入獄してゐたのだから、このハアルマンの抗辯は通らなかつた。廿三になるヘルマン・ボックを殺害した後の如きは、ハアルマンは當分ボックの衣服を着てゐた位だ。それは後で、ボックの父親と、ハアルマンの近處の者が其の着物を見て證言した所だ。ボックの場合丈けではなく、殺された少年の着衣や所持品は、各人に就いて大概一つ二つ宛、ノイエストラツセの家で二人に使用されてゐたのが發見された。秘藏されてゐる最後のアドルフ・ハナパル等は、グランスが其の洋袴を欲しがつ

た爲に、誘拐された晩に直ぐ×されて、翌朝から×××になつて店頭に並んだ。

玆に疑問にすべきは、ハンス・カイムス殺しとフリイドリッヒ・アベリンク殺しと二つの場合である。後者に於て、今迄實に要心深かつたハアルマンが、鳥渡不注意な動きをしてゐるのだ。此の事件は最後から四つ目なので、長期に亘る殺人生活に慣れつこになつて、免感的に神經が鈍麻して來てゐたに相違ない。一九二四年五月廿五日、その十歳になる少年が、菓子を與へるから尾いて來いとノイエストラッセの殺人窟へ伴れ去られてから、月が變つて、六月十七日のことだ。フリイドリッヒ・アベリンクは當時兄と姉と一緒にラレンドルフ町からハノウヴァの伯父の家に來て、ウヰルヘルム街三二二番に住んでゐたのだが、その十七日の夕方、フリイドリッヒの姉でアリスといふ十四になる少女が家の前の往來で近處の子供達と遊んでゐると、突然見知らぬ男が聲を掛けて、自分はお前の伯父の友人で、今お前の所へ綺麗なカアドを持つて來て遣つたが、お前が家に居ないので伯母さんに預けて來たと言ふので、アリスが家に駈け戻つて見ると、そんな人が訪ねて來た事實もなく、勿論カアドなどは殘されてゐなかつた。

後證據固めの時、この少女アリスとその時一緒に遊んでゐた子供達を呼び出してハアルマンを見せると彼等は一齊にそれがあの時の見知らぬ男に相違ないと證言した。ハアルマンは何の爲にそんな事をしたのかよく判らない。排他的に少年を好んで、女性には用のない筈のハアルマンだから、別に話し掛けて何うと言ふ氣はなかつたのだらう。只アリスが遊んでゐるところへ通りかゝつたので一寸、戲つたのだらうが、彼は、アリスがフリイドリッヒの姉であることや、彼等の家庭の事情は、或る程度まで殺した少年から聞いて知つてゐたに相違ない。何う言ふ心算か、多分賣りに行く途中ででもあつたのか、その時彼は、フリイドリッヒ少年の雨外套を抱へてゐた。それは、フリイドリッヒが行衞不明になる時着てゐたもので、アリスには勿論見覺えがあつた。が、綺麗なカアドと言ふのに氣を取られて、其の時はこの外套を見た事を言ふのを忘れてゐたが、後日このアリスの證言は、ハアルマンを絞首臺へ追ひ上げる重大な效果を持つた。

カイムス殺しの場合は、一層不可解なものである。捜査願ひに依つて、ハノウヴァの警察は、全市に亙つてこの十七歳の少年の姿を求めつゝあつた。すると、捜査が開始された數日後である。何となく其筋の手が身邊に迫るのを感じたものか、ハアルマンは奇怪な行動を採つて、例の非公式警官、民間スパイと

して、彼の方からドレスデンへ出掛けて行つてハンス・カイムスの生家を訪問してゐる。そして、悲嘆に暮れてゐる兩親から少年の寫眞を乞ひ受けて、必ず三日間に發見して伴れて來ると約束した。より奇怪なのは、其の足で直ぐハアルマンはハノウヴァ市へ引き返して警察へ出頭し、「愛妻」である筈のハンス・グランスをカイムス少年殺しの犯人として訴へ出てゐる事だ。ところがグランスは、丁度其の事件の前後他の事で入獄してゐて、彼が犯人であり得る譯はないし、第一、グランスが、カイムスが失踪した以前から引續き入獄中であることは、ハアルマンは先刻承知の筈である。何でこんな言動をしたのか判斷に苦しむのだが、それよりも、この事件の特異性は、それが屍體が發見された唯一の場合であることだ。カイムスだけは、ハアルマンの肉屋で切賣りされたのではなかつた。二個月後に、ハノウヴァ市を貫いてラインに合流してゐる運河の浚渫工事で偶然發見された。鷄のやうに四肢を一つに縛されてゐた。肉屋の遣りさうな縛り方だ。死因は頸部の扼殺だつた。

5

如何に大戰直後の混亂時代のハノウヴァ市でも、斯かる大々的人間屠殺が前後十六個月間も何ら警察の耳目に觸れることなく過ぎたと言ふのは烏渡信じ難く思はれるが、これには、當時の無政府的な狀態の他に、少くとも二つの特種の事情が作用して、この稀代の人鬼フリッツ・ハアルマンの犯罪をして發覺を遲らしめたと言ふことが出來る。其の一は、彼の職業が肉屋で、自宅で肉を切つたり骨を棄てたりすることは當り前だから、血だらけの卓子も床も何ら注意を惹かなかつた一事と、もう一つは、あの猥褻罪で九個月間ウンストルフ刑務所に投獄されたにも拘らず、ハアルマンは出獄後も未だ警察のスパイを解かれないで、絕えず部內と密接な關係を保ち、刑事や巡査とは友達交際の間柄だつたからだ。が、その以前にも前科があるのだし、斯う頻繁に少年が失踪し出すにつれて、何時、何と言ふことなしに漂つて來る噂や、種々ハアルマンに關する騷動不審な點や、第一、彼が刑務所に收容されてゐる間は、少年の行衞不明が、皆無ではなかつたが比較的尠なかつた事等から視て、警察は漸時ハアルマンに着眼するに到り、實際、可成り組織的にハアルマン方の家宅搜索を行つた事も一再ではなかつたが、併し、何しろ相手が同僚のやうなハアルマンではあり、快活なお人好しで通つてゐる「町の肉屋」なので、結局それは形式的な散漫な訪問に終つて、のみならず根本的に、別に重要な目的を意識しての家宅搜索ではなかつた。が、其の間もハアルマンは度び度

び冷やひやする眼に遭つてゐる。
一つは、あのフリイデル・ロッテ殺しの直ぐ後に踏み込まれた時だが、それから、ウンストルフから出獄して間もなく、二人の賣春婦が、彼の不在中にノイエストラッセの店へ肉を買ひに來て、寢臺の下に突つ込んである大きな肉塊に第六感的に怪異な驚怖を感じて、その一片を警察へ屆けたことがあつた。それは、細毛の生えてゐる皮膚が一部分殘つてゐて、人間の臀部の片割れを聯想させる形態を備へてゐた。警察はこれを調べても見ずに豚だと簡單に片附けて、ハアルマンとしては、危い所を救（たす）かつた譯だ。Roland Huch の父親も、數週間懸命に息子フックの跡を探し求めた揚句、ハアルマンの戸口で其の消息が絶えてゐる事を突き留めて、それから先の徹底的究明を警察へ持込んだのだが、此の時も單にお座なりに、刑事の一隊がハアルマン方を訪れて、赫ら顏の肉屋と騷喋しく談笑して引上げたに過ぎない。ウヰリヘルム・エルドネル事件の時は、父エルドネルの許へ、或る日 Hommerbrook なる探偵と名乘る人物が現れて、息子のウヰルヘルムは、浮浪罪の廉で自分が檢擧して保護を加へてあると話して立去つた。然し、ホネルブルックと言ふ名前は全市の警察員になかつた。これがフリッツ・ハアルマンであつた事は、彼が逮捕されてから、エルドネルと對質して判明したことで、當時其の僞刑事の人相着衣等をエルドネルから巨細に聽取しても、そしてそれに依つて自然且つ容易にフリッツ・ハアルマンを想起出來た筈なのに、警察は其の時は何ら歩を進めやうとしなかつた。犯罪が最後に近づくに從つて、ハアルマンは段々露見の惧れなど忘れたやうに大膽になつて、殺した少年のポケットから出た小刀（ナイフ）其他の小物品を平氣で市場で見せびらかしたり、友人に配（や）けて與（や）つたりしてゐる。

大犯罪には、よく散在的な小さな緒が集まつて自働的に發見の動機を作るやうに、このハアルマン事件もさうだつた。

少年が頻々と闇黑に呑まれて、流石腰の重い警察も、何とか全線的に活動を起さなければならない事情に迫つてゐる時、そして、何となくノイエストラッセの方面から異臭が漂つて來るやうで、ハアルマンの肉屋なる存在が眞劍な意味で氣になり出して來た矢先、一九二四年五月廿八日だつたが、四五人の子供達が、ラインの岸に近い淺瀨の泥の中で、少年の物と覺しき完態を備へてゐる頭蓋骨を發見した。そして引續き不思議にも、翌廿九日、矢張り同じ場所から、今度は三個同時に何れも少年らしい頭蓋骨が出て來た。それらは凡て即時警察へ送られたのだが、すると、又また警察は、奇妙な程無關心な態度を採つて、既に、例の電つちよの肉屋スパイ、フリッツフ・ハアルマンに關す

る充分疑はしい報告を受取つて、前提的な智識があるにも係らず、依然として泰然たるもので、それらの頭蓋骨は、通學生の惡戯か、或ひは上流の他の町から流れて來た物であらうとおつさり無視して終つた。そして、其儘二個月經つた。五月末から、六七と此の二個月の間に、ハアルマンの殺人リストには最後の三人が加へられてゐた。Friedrich Koch, Erich de Vries, Adolf Hannapper.

冷水を浴びたやうに、ぐつと警察を緊張させる爲には、この連續的な三つの失踪が必要だつたと見える。警察は狼狽して、今度は、嫌疑の眼を一時にハアルマンに向けた。が、實證を擧げる可く活躍に移る段になると、何しろ人員不足の場合ではあるし、それに、大概顔を識られてゐるので、彼を取巻いて内密の裡に洗つて往くと言ふことが出來ない。そこで、急遽伯林から二名の腕つこきの刑事が迎へられてハアルマンの看視に就く。

August Fromm と言ふ絶世の美少年を探し出して、これを囮に使つた。この時既にハアルマンはノイエストラッセ一〇三番の附近に煙のやうに立ち迷ふ其筋の注視を感知して、逸早く、市の他端に位する古い猶太區ロッテ・ライルに移轉してゐた。そこで日夜このアウギュスト・フロム少年を猶太區のハアルマンの家――それも矢張り肉屋の店だつたが――の近くに放つて根氣よく待ち構へてゐると、果して六月廿二日の夜、ハアルマンは街上でフロムを認めて自店の二階に同伴した。確證を掴む必要があるので、暫く時間を與へた後、矢庭に一團の刑事が乘り込むと、最初のロッテ少年捜索の時に發見されたレオン・グルンツと同じに、フロムは××にされて、床に轉がした大型椅子に××を縛され、ハアルマンが將に××に着手しやうとしてゐる所だつた。有無を言はさず、猥褻現行犯として拘引する一方、直ちに、此度は念入りに同家の家宅捜索を行つて、衣服、手廻品等片端から押收した許りか、最近迄住んでゐたノイエストラッセの家も、未だ其儘に締め切つてあつたので、其處からも、殆ど凡ての物品が證據品として貨物自動車で警察に運ばれた。此の時は大事を採つて、單に眼に付く凡ゆる物を押さへたに過ぎなかつたが、事實、その一個々々が法廷で役に立つて、ハアルマンの口を閉ぢ、斷罪を早からしめたのだつた。

斯うして、ハアルマンの罪が最早や動かす可からざる物となつてゐる最中、もう一つ、退引ならぬ證據が意外な所から現れて、頑固に白を切つてゐたハアルマンの顏色を奪つたのだ。以前のノイエストラッセのハアルマンの家主の息子が、失踪中の一少年の雨外套を有つてゐる事が發見されたのである。被害者の少年の兩親は、それが、少年が家を出た時に着てゐた物に相

違ないことを證言するし、家主の息子は確かにハアルマンから貰つたのだと承認した。玆に於て、初めは處女のやうであつた警察も、今は脫兎の如く猛然とハアルマンを攻めに掛る。酷烈な十字大訊問・第三梯(サアド・デグリイ)、一種の拷問である。が、それでもハアルマンは執拗に否認し續けてゐると、果然七月廿四日、暑い頃なのでラインの河岸は涼み客で賑はふ。夕風の中を輕艇(ランチ)が納涼の人を滿載して上下する。その錨の鎖に引つ掛つて河床から浮き揚がつたのが、等身大の馬鈴薯の袋だつた。大小の骨片がぎつしり詰まつてゐる。發見の現場は、以前頭蓋骨の出た淺瀨を少し下つた個處だつた。その、口まで骨の充滿してゐる袋を、ハノウヴア大學法醫學教室のシャックウヰッツ博士——Docto Schackwitz——に送つて鑑定を乞ふと、精査の結果、少くとも廿三の人體を構成する骨片である事が判明した。

ハアルマンが折れて來て、除ろ(そろ)口を割りさうな形勢を見せたのは、この七月廿四日からだつた。

6

Fritz Haarmann は、一八七九年十一月二日、ハノウヴア市に生れた。父は街燈點火人で、市廳の門番のやうな仕事をも兼ねてゐた。父、Gustav Haarmann、母、Verna。フリッツはこの母のヴエルナが四十三の時の出產で、男三人女三人の六人兄姉の末子だつた。父のグスタフも醉漢で評判の好くない男だつたが、長兄丈けは何うやら眞面目に進んで、伯林で稅吏を勤めてゐた。もう一人の兄は、幼女に暴行を働いて長く刑務所に入つてゐた。フリッツが少年期に達した頃、三人の姉は三人とも賣春婦だつた。

斯ういふ家庭が彼の生涯に致命的な暗い影響を投げたことは言ふ迄もない。幼少の頃から、人眼に付いて、後世恐る可しの不良兒だつた。趣味や行狀は、何うしても男の子とは思へなかつた。まるで女だつた。十五の年に小學校を出て、直ぐニユウ・ブライザッハの下士官養成所へ入り、後軍隊に編入されたが、一年も經たない內に、激しい癲癇の發作に襲はれるやうになつた。これが眞個の癲癇であつたか何うか、其處らは甚だ怪しいのだが、本人は日射病が嵩じたものと言ひ張つて、陸軍病院へ送られ、間もなく除隊になつた。ハアルマンの男色癖は、性來さういふ異常性のあつたのが、この兵營生活中に眼覺まされ、昂進したものと言はれてゐる。

ハノウヴア市に歸つて來ると、父親は、街燈點火人の仕事も、市役所の小使の口も止して、小規模な葉卷製造業を始めてゐたので、フリッツも此處に働くことになつたが、落付くと同時に

軍隊で覺えた變態癖が再發して、空地等に於て附近の子供に對する彼の行動が注目を惹くに到り、異常者として郊外ライン河畔の市立精神病院に送られた。が、六個月にして病院を脫走し、瑞西に潛入した。そして、暫く何事もなく働いてゐる。初めは短艇の舟大工、後には藥局に勤めて、小金を蓄めた。二年後にハノウヴァへ歸つて來た。この時彼は、姓名不詳の女と戀に落ちて結婚したのだが、妊娠すると同時に棄てゝ、こつそり國境防備の聯隊に入隊してアルサスへ行き、士官の從卒として、同地に三年暮らした。神經衰弱と稱して除隊になつたが、隊內の評判は仲なか好く、辭す時には善行章を貰つて、些さかの恩給まで附いた位だ。さうして四度目にハノウヴァへ歸つたのだが、元來父親とは反りが合はなくて、何時も一緒に生活すると喧嘩許りしてゐた。尤も呑んだくれのおやぢが觀てさへ、フリッツの素行が面白くないからで、此の時もフリッツは盛んに子供を襲つて、一家は迷惑の仕續けだつた。到々我慢し切れなくなつて、父親が警察へ訴へ出たので、フリッツは再び精神鑑定を受けることになり、腦の專門醫と神經系統の醫師と、二人が詳密に鑑査した結果、フリッツの兩親とも普通以下の道德的責任觀念しかないが、それかと言つて、直ちにフリッツ・ハアルマンは精神病者であるとは、斷言出來ない。換言すれば、精神病者ではないと言ふ事になつて、一九〇四年の夏、釋放された。それから丁度廿年後の同じ頃に、彼は死刑執行人の手に掛る可き運命だつたのだ。

多殺者は、その職業的殺人を開始する前に、多くの場合、窃盜犯であり、詐欺師であり、幾多の前科を潜つて來るものだと言はれてゐるが、ハアルマンもさうだつた。實に、その後の數年間、彼は監獄へ出たり這入つたりしてゐる。罪條は區々で、强竊盜、少年姦、掏摸、詐欺など、その間も父親は、何とかして息子フリッツに正業を與へやうと、一度は自分と同じ葉卷製造を、次ぎには、魚の天婦羅の屋臺店のやうなものを出させて試たが、何れも失敗に終つた。その內益ます低下して、裏街に隱れ住んで、常習的犯罪者と伍すやうになつたので、父親のグスタフ、母ヴェルナも呆れて、以後すつぱり交涉を斷ち切るやうになつた。その頃フリッツは、ライン河岸の倉庫に荷作人として働いてゐたが、相當額の在庫品を竊取したことが露見して、五年の懲役に處された。これが一九一四年の事で、つまりハアルマンは、あの大戰の期間を呑氣に刑務所で送つたのだ。一九一八年に出獄して見ると、世の中は一變して、サクソニィ州は戰後の飢餓狀態だ。古い社會制度は獨逸帝國と共に倒れ、新しいものは興らうとして未だ固まらずにゐる。この場合、警察の

怖るゝに足らない事を、ハアルマンは一眼で看取した。ツエラルストラッセに肉屋を開いて、公設市場から誤魔化して來た肉と、あの、停車場から誤魔化して來た「肉」とを賣り出して、物資窮乏の折柄、小さな店ながら素晴しく儲けを上げたのは、それから間もなくだつた。

公判は一九二四年七月三十日からハノウヴァ市サクソニィ州裁判所で開かれた。此の頃には既に、前記種々の動かす可からざる確證が續々上つて、ハアルマンは比較的あつさり事實を認めてゐた。出獄した許りのハンス・グランスも、共犯又は助犯として逮捕されてゐた。

法廷に於るハアルマンは、概して冷然と、興味のない顔で周圍の人々を見廻してゐた。何かグランスと自分と陳述が逸つて不利な立場に置かれると、彼は時どき其の尊大な自己滿足の態度を忘れたやうに、高い聲で喚いたり、罵つたりした。グランスは態とらしく無關心に構へて、ハアルマンの方を見やうとしなかつた。が、不思議なことに、人氣は何方かと言ふとハアルマンにあつた。ゴツテインゲン精神病院のシユワルツ博士と、ハノウヴァ大學のシヤツクウヰッツ博士とが、改めてハアルマンとグランスの精神鑑査をしたが、答へはネガテイヴで、二人とも立派に普通人の責任能力を有してゐる事が判明した。辯護士の唯一の論據もこれで崩れて、グランスには終身刑、ハアルマンには死刑の宣告が下つた。刑死前にハアルマンは長文の告白を認めたが、それは少しも悔悟とか求道とか言ふ、斯ういふ場合に在り來りの宗教的センチメンタリズムを帶びた物ではなく、却つて躍心的に、單に殺す爲にのみ殺すことの快樂を高調したものだ。

フリッツ・ハアルマンも人並みに、死ぬのを嫌がつたが、彼は、死んで終へば、もう少年を犯すことも、その肉を食べたり賣つたりする事も出來ないので、それで、死を呪つたのだらう。

廿八名の少年を殺した事に記載されてゐるのが、彼は大不服だつた。自分でも判然したことは解らないが、四十何人迄は記憶してゐると言つて、彼は、その犧牲者の數が實際より尠いのに引け目を感じてゐる樣子だ。ハアルマンは絞首臺に立つても其の一つ事をぶつくさ呟いてゐた。實に完全に人を喰つた男であつた。

（完）

編輯者雜記

×

次號から連載される筈の「社會科學の頁」には十二分の期待を有つて欲しい。かれて望んでゐた企てが期せずしてS・S・Cの誕生によつて果たされた譯である。我學界の權威十八名家を網羅し得たのも成功である。社會科學研究の流れと發展を一目に看守ることのできるのは本誌のこの頁以外には斷じてない。讀者諸君にも喜んで貰へることと思ふ。

×

近來本誌の加速度的讀者層の擴大につれて激勵稱贊の手紙が旺んに舞込んで來る。その手紙に交つて屢々傳へられるのは値下げ要求の聲である。これは一面本誌が勞働階級に切込んだ證據とも見るべきもので、それらの要求は洵に尤であるのみならず、その文面涙ぐましさを覺えしめるものがある。然しながら今日の經濟狀態を以てしては、品質の低下を豫想しないで値下げを實行することは不可能である。一年や二年、無理をして遣つてやれなくもなからうが、結局無駄である。それよりもいゝ雜誌を作る方がお互のためである。値下げを逆に行つた實質主義の表現として次號からの附錄「社會科學の頁」を見て貰ひたいものである。

×

婦人公論の方は、中央公論に較べて經濟的に餘裕がある。加ふるに消費經濟の一方をのみ掌つてゐる主婦並に婦人諸君には、わけても今日の經濟不況がこたへてゐるやうでもあり、もう今日までの所謂婦人雜誌に取つて替つて「婦人公論時代」を招來せしめてもよいと思ふので、早晩、一大大衆化を圖つて、場合によつては値下げを斷行してもよいと思つてゐる。さうして、然る後に、中央公論をして益々光輝あらしめたいと思ふ。

×

暴露小說として、又劃期的作品として社會的に注目せられてゐただけに、「眞理の春」の賣行きは素晴しい。次ぎはお待兼ねの「猶太人ジュス」である。多分今月末か、おそくとも來月早々には市に出るであらう。已に註文せられた方々にはお詫びしておく。

×

勞働組合法案は、今世論の中心にある。大山氏の堂々たる論文は勞農大衆の言はんとする凡てを眞向から言ひ盡した觀がある。之に對して藤原氏の所論また資本家の立場を明かにして兩々相對峙して一層の興味を覺えしめる。

×

先月募集しておいた「失業體驗記」は案の定机上に山積した。いづれも血の滲む體驗記である。現代世相の險惡さを反映して慄然たらしむるものがある。大學教授、僧侶、炭燒き巡査、小學教員、等々、どれもこれも掲出したかつたが、さうもならないので結局五編を採つて他は割愛した。

×

時事新報主幹法學博士板倉卓造氏の「海門號の祕密」は珍奇な讀物である。村松梢風氏の「海賊」も久しぶりの好讀物だし、伊藤正德氏の「煙介」にしても、殊に九大新進の經濟學徒淺野正一氏の「紫式部論」は珍中の珍。卜部哲太郎氏の「乞食實驗記」も滅多には得られまい。豫告までしておいた谷崎氏の「戀愛論」の脫稿されなかつたのは殘念だが。

×

土曜日全休論、新聞社大幹部論、學校騷動裏表、西洋好色一代男、題だけでも興味百パーセント。馬場氏の人物評論、牧氏の怪奇實話は已に定評以上。

×

かくて夏向きの編輯を終つて靜に新秋九月を待つとしよう。吾らに與へられたものは、たゞ破格の努力のみだ。炎暑酷熱もものかは。

×

東京近在の勤勞者は鎌倉へ、さうして暑休の幾日を得る人は高野山へ、われらと共にわれらの夏季大學に來り會し給へ。

¥1.20

泡立つしやぼん湧き出る微笑

快適無比の剃ごこち

剃刀で研器を兼ね一枚の刄が半年使へる

バレー自働研安全剃刀

"VALET" Auto-Strop Safety Razor

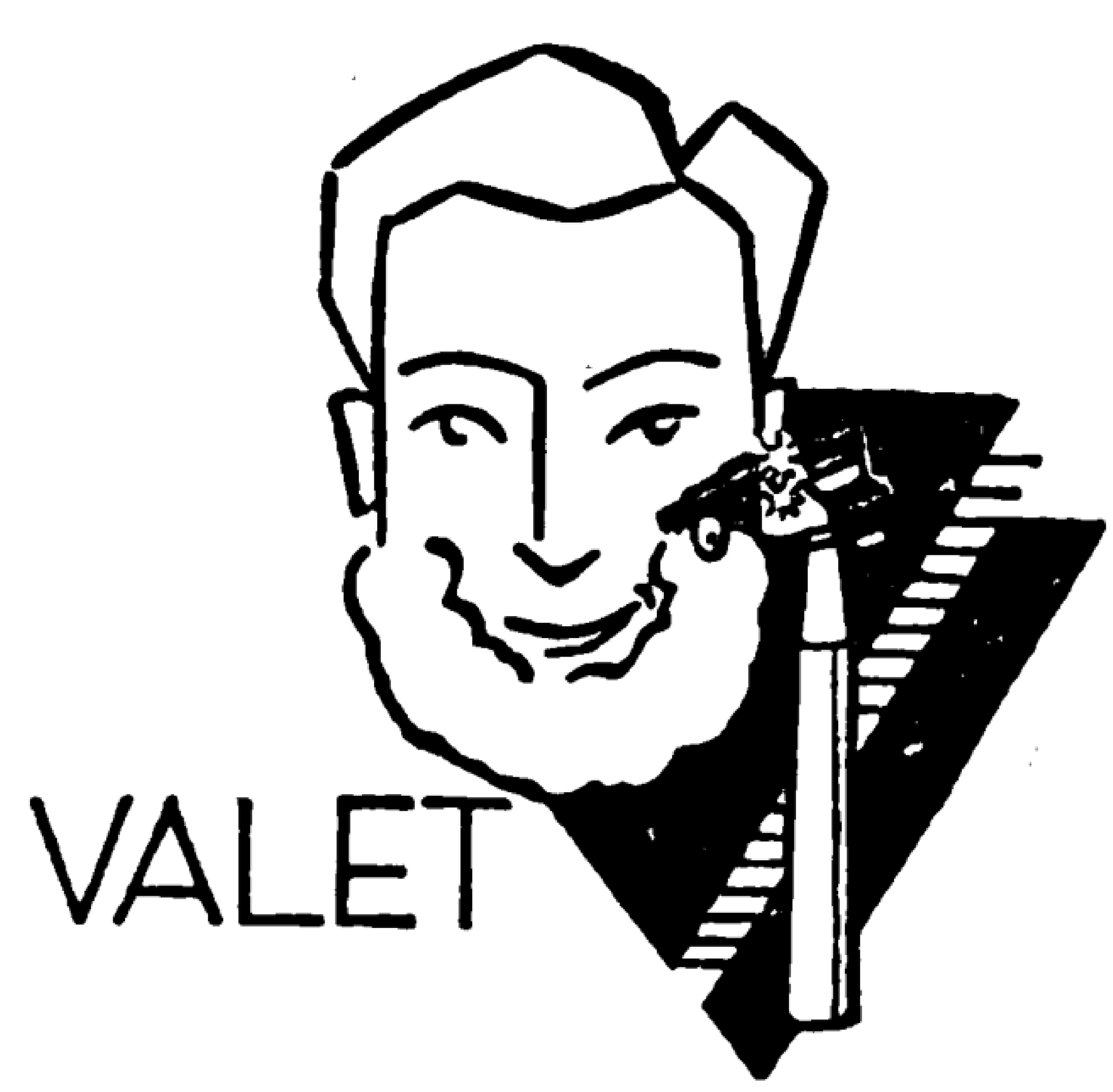
B型 一三・五〇以上各種

C型 一・二〇 一・七〇 三・三〇 四・八〇

替刄利用ナイフ（刄一枚附）・九〇

販賣所 大百貨店著名洋物雜貨金物店等

取次所 中央公論社代理部



Athena the Pen

能率第一、實質第一

優良第一の國産品

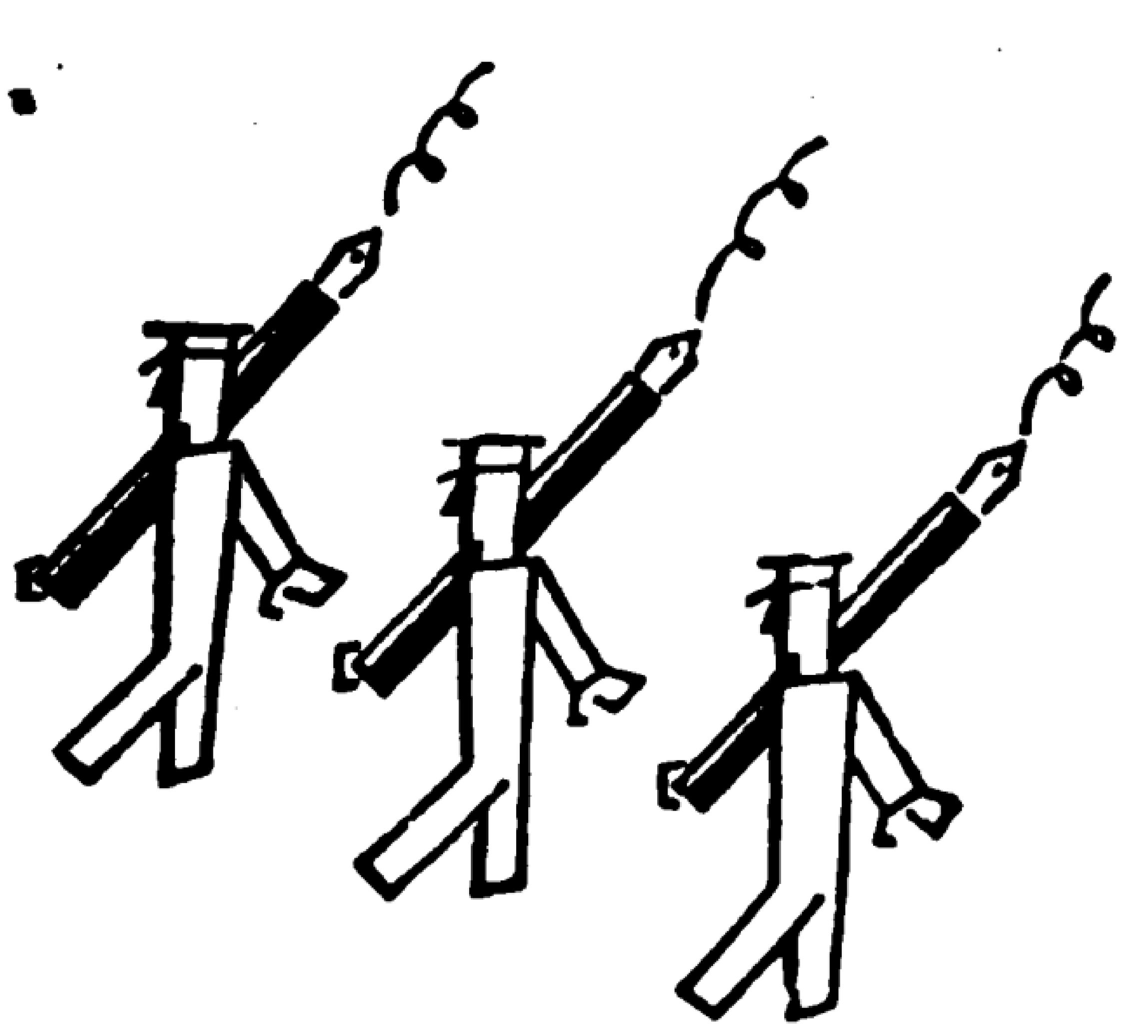
使へば使ふ程書きよくなる

アテナ萬年筆 參圓五拾錢以上

オノト萬年筆 七圓五拾錢以上

萬年筆には國産優良インキアテナを御使用下さい

送料各十八錢（カタログ進呈）



東京日本橋通

丸善株式會社

大阪 神戸 京都 名古屋

横濱 福岡 仙臺 札幌

東京＝神田・芝三田・早稲田・丸ビル

文藝時評

正宗白鳥

暫く東京の新聞も讀まないで、故鄕の舊屋に籠居してゐた私は、中央公論、改造、その他數種の新刊雜誌を手に入れると、ボツリ／＼と讀出して、いつの間にかあらまし讀終つた。平生、小說には取つきにくゝつて、雜文や論文の方に心が惹かれ勝ちであつたが、今度努めて讀んで見ると、文學は文學だけのことはあつて、論文雜文よりも讀後の印象は深い。議論はどうにでも云へる。ことに、責任のない地位にあつて、時代の好みにかなつた態度を取つて、讀者を喜ばせるやうな理窟を並べるのはさう困難ではないのだ。私自身の經驗から云つても、「文藝時評」はたやすい。創作は六ケしい。

創作にも種類はいろ／＼あつて、書き易いものもあり、書きにくいものもある。讀者の方から云つても、讀み易いのもあり、讀みづらいのもある。七月號の改造には、生田長江氏の「小公子」といふ長編が出てゐるが、中央公論には、下村千秋氏の「天國の記錄」といふ長編が出てゐる。偶然の對照が面白い。文藝時評の好題目である。後者はすら／＼と讀めたが、前者はなか／＼讀みづらくつて、途中で雜誌を投出して、窓外の海の景色でも見下ろして、頭を休めなければならなかつた。作者としても、生田氏は執筆に非常な苦心をしたであらうし、下村氏はそれほどに苦勞しなかつたのではないかと思はれる。一つは、釋尊傳の一部であり、一つは、最下級の賣淫婦の生活記錄である。

「小公子」を讀みながら、私はフローベルのサランボーの作風を連想したが、あとで、卷末の「作者附言」を見ると「はやくから、フローベルのサランボーや、メレヂコフスキーの三部作などに、制へ切れない競爭心を徵發されて來た私：：：：」と、書いてあつた。そして、この新作は、十年前から計劃してゐる釋尊傳の一部に過ぎないと云つてゐる。作者の藝術上の抱負は大きい。文壇の日雇稼ぎで甘んじてゐるないのだ。私は、長江氏の「神曲」の飜譯は、一讀したいと思ひなが

ら、まだ手に入れてゐないが、あゝいふ難解な古典を選んだ氏の意氣込には敬服してゐる。最近西洋で、何百版を重ねたとか何百萬賣れたとかいふ噂に釣られて、飜譯慾を起す人々とは、心掛けを異にしてゐるのを珍らしいと思つた。この頃は調べた藝術だと吹聽してゐる小說が、隨分あるやうだが、朝食前のお手輕な調査に過ぎないのがありさうだ。「サランボー」起稿のために數千卷の古文書を讀破したフローベルのやうな算盤外れの、時間と根氣のかゝる調べ方をするものがありさうには思はれない。原稿料や印稅を、執筆の最大原動力としてゐる作家には、「神曲」の飜譯や、釋尊傳の創作は企てられないに違ひない。しかし、長江氏は、流俗と異つた藝術家氣質を見せるだけのために、そんな難事業に打つゝかつたのでなくつて、自己內心の要求が自づからその方へ向つたのであらう。單なる浮氣心ではない。さういふ氏の心境には深さがある。

「サランボー」も、我々には可成り讀みづらいもので、佛文の解らない我々には、充分に味はゝれないのであるが、數千年前の古代を、今見る如く再現してゐる著者の非凡な筆力は、飜譯によつても、朧ろげに想像される。メレヂコフスキーの「神々の死」の如きも、數千年前の古代を描いたものであるが、この方は、昔を題材として現代人を描いたやうなもので、我々も氣樂に讀み得られるし、作者も書き易かつたであらうと思はれる。歐洲近代の歷史小說や歷史劇の多くは、この態度で製作せられてゐるやうである。日本でも、新代の作家の史劇なんかは、要するに、この態度で作られてゐる。私なども、歷史小說を書くとすると、メレヂコフスキーの「神々の死」や「先驅者」を標準にしたいと思つてゐた。しかし「サランボー」の方が、一段傑れた位置に立つてゐると、私はかねて思つてゐる。先頃、田山花袋氏の遺骸埋葬のため多摩の墓地へ向つた時、武林無想庵氏と行を共にして、氏からフランス文學の話をいろ〳〵聞かされて、蒙を啓かれたのであつたが、その話のうちに、氏は、「マダム・ボヴァリ」なんかは、フランス人にさう讀まれてゐない。フローベルのものは、誰れにも面白く思はれてはゐないと云つた。氏の云ふことは本當であらう。しかし、私には、フローベルこそ、古今に類の少い藝術家中の藝術家ではないかと思はれてゐる。サランボーを描いても、强いて現代化を試みなかつた。ある時代とある

時代の人々を、如實に再現させて、そこに、澄み切つた一つの世界を廻轉させるのである。古來、たまに地上に現はれて來る大藝術家の極致は、そこにあるのだらうと思ふ。明治以來の日本の作家の歴史小説のうちでは、私は、森鷗外の考證的史傳、「澁江抽齋」「北條霞亭」のやうなものに、最も敬服してゐる。これらの史傳小説は、今日の小説讀者には、さう讀まれてゐないだらう。面白く思はれてゐないだらう。そして、鷗外は、フローベルのやうに千差萬別の世上の光景を自在に描き出す技倆を有つてはゐなかつた。しかし、あの態度は澄んでゐる。面白くするための小細工がない。現代化のませ物がない。そして、作中の人間の心理や神經の動きは見のがしてゐない。

長江氏の「小公子」は、氏の計劃してゐる全作品の第一部たるに過ぎないので、充分な批評を下す譯に行かないが、文章だけについて云ふと、テンポがのろくて、それが讀みづらい理由の一つになつてゐる。整然たる古典文學に接してゐる如き感じを讀者に與へるほどに、作者は、文章に凝つてゐて、粗雜な語句は用ひられてゐないが、そのために、却つて平板な感じがする。この第一部だけの間にも、人間の感情の冷熱高低があるのに、作者の筆はいつも悠然迫らずに同じ筆法を用ひてゐる。悉達多が御者のチァンナから、生母に關する祕密の話をはじめて聞かされるところなんか、讀者の興味をそゝる筈なのに、それほどの效果を奏しないのは、作者が形を整えることに力を盡くし過ぎて、話者聽者の氣持に同化する力が手薄になつたゝめだらう。生母を知つたあとの悉達多の行動や心理にも生氣が缺けてゐる。生母波闍波提と互ひに祕密を打明けたあたり、たゞ「昔のお話」を讀者は聞かされてゐるのに過ぎないやうである。傑れた藝術家の靈氣が吹掛けられてゐるとは思はれない。

母子の打明け話のあつたあと、作者は、「愛する者が、愛してゐるにもかかはらず、否、愛してゐる故にこそ、如何に問ふべきかを問はず、答ふべきかを答へないか、如何に眞實を包み匿して虚僞を語るかを、悉達多よ、お前は追々に學び知るだらう。外見と眞相とが如何に距つてゐるかを想ひ見よ。そして、「お前が今眞相と信じてゐる悉くが、また單なる外見たるに過ぎなかつたとしたならば」と、作者は説明を添へて、讀者に念を押してゐる。これを一篇の狙ひ所として、大部

の釋尊傳が歩を進めて行くのではないかと、私には想像された。この世の人間が眞實と思つてゐるものはすべて單なる外見たるに過ぎないとは、ダンテの神曲の狙ひ所でもある。長江氏は、この態度を持して、どれほどまでに、釋尊の生涯を生けるが如く現はし得るであらうか。

作者は、フローベルなどゝ競爭しようといふ大抱負を有つてゐるほどあつて、中部印度大平野の自然の推移をよく描いてゐる。鳥をも花をも昆蟲をも巧みに點綴してゐる。それに、當時の政治や經濟の狀態をもよく調べてゐるらしい。多年の研究の結果、題材に關する氏の知識は、餘程豐富であるやうだが、これ等の知識が、論文家の知識として氏の頭に留つてゐないで、氏をして古代の社會をありありと、今見てゐるやうに幻想させるにのみ役立つやうであつたら幸ひである。私は、この大長編の進行に期待するところが少くない。日雇稼ぎ文學のみ多い今日、たまには、このくらゐな抱負のある作品が、出來不出來如何にかゝはらず、現はれてもいゝと思つてゐる。

下村氏の「天國の記錄」は實は、地獄の記錄であつて、「彼等はかうして、その血と肉とを搾り盡された」と、作者が傍註として書添へてゐるやうに、淫賣婦の悲慘な徑路を細叙してゐる。明治時代に廣津柳浪は、陰慘な事件をよく書いたが、下村氏はそれにもました陰慘な題材を書くやうである。氏のは、柳浪のよりも社會性を有つてゐて、周圍の組織的な私娼經營者の網から脱出されないで、底から底へと落ちて行く次第を叙述するに努めてゐる。これも、調べた藝術なのであらう。勞働者が誘拐されて、北海道などの監獄部屋へ落ちて行く徑路は、雜誌で屢々讀んだことがあつたが、人間の惡智惠が進むとゝもに、すべてが組織的に行屆いて來ることは、下村氏の新作によつても知られる。沖野岩三郎氏によつて語られた娼妓解放哀話など、人身賣買の社會の悲慘な話は、幾たびも聞かされてゐるが、下村氏のは、どれよりも詳しくつまびらかに叙せられてゐる。あまりに陰慘なので、しまひには讀むのがいやになるくらゐだ。時代の相違は爭はれないもので、柳浪の陰慘小說には、陳腐ながらも詩があつた。一葉の「濁り江」には、賣春婦がむごたらしくもなく、薄汚くもなく人を魅する情緒を橫溢させてゐる。ゾラの「ナヽ」には、かういふ女の淫蕩な生活が誇張されて描かれてゐると、識者をし

て眉を顰めさせたが、しかし、今日から見ると、ゾラも舊時代の人なので、薄汚い暴露小說には墮しきれなかつた。

調べた藝術「天國の記錄」は、正確に事實に基いたもので、小說的おまけはあまりついてゐないのかも知れないが、徹底的に事實の記錄に止めてゐるのなら兎に角、他の暴露小說家同樣、この作者も、所謂小說意識に幾分の未練を有つてゐるとしたら、私娼と情夫との關係などについて、もつと小說家的觀察を施すべきものであらうと、私は讀後に感じた。最後の「天國々々」の叫び聲なんかは、いかにも取つて付けたやうで可笑しい。悲慘な生涯に對するせめてもの救ひとして、天國の幻想を與へたつもりなのであらうか。

私は思ふ。人間といふものは、ことに女といふものは、どんな境遇にゐても、境遇相應に樂みを有つてゐるもので、賣春婦なんかは、少し馴れると、他の眞面目な社會の女よりも、變つた刹那々々の享樂氣分に刺戟されて、慘苦な境涯を意識する力は鈍るのぢやないかと思はれる。この小說の私娼にだつて、かういふ生涯を送つてゐる間に、人間通有の夢を夢見てゐたにちがひない。「天國々々」の、作者附言の慰藉の言葉はなくとも、日常の彼女の心境がもつと描かれてゐたなら、讀者も、もつと彼女に心惹かれて、この作品から受ける印象も却つて強くなるかも知れない。

この作者は、淫慾の巷を取扱つてゐながら、この頃流行のエロチックの色彩をあまり濃厚に發揮してはゐないが、今月の雜誌を見ても、作者と讀者と相互の興味から、現代的色つぽさが隨所に現はされてゐる。改造の伊集院氏の「歐洲の裸體文化」なんか、そのうちで、私には面白かつた。巴里が享樂の都であることは、素通りの漫遊客にも感得されるが、安つぽい淫蕩な所ばかりを覗いて、さも自分が世界的色道の通人になつたらしく、それを日本の雜誌や新聞の上にヒケらかしてゐるのを見ると、苦笑を禁じ得ないのである。マルセーユで、私も、人に連れられて春畫的活動寫眞を見たが、あまりに醜惡なので、私は過半、目を伏せてゐた。案内者に聞くと、日本人が最もよくかういふ所を見に行きたがるのださうだ。若し日本漫遊の西洋人が、「天國の記錄」に描かれてゐるやうな場所ばかりへ足を入れて、一ぱしの日本の色欲界の通人になつたつもりでゐるとしたら、大馬鹿である。それだけの知識で日本を總括的に批判されては、日本としても迷惑である。

川端康成氏の「風鈴キングのアメリカ話」は、多少の雜錄的興味のある短篇である。明治初年に渡米した日本人の異利の一端がうかゞはれる。

「經濟往來」の尾崎士郎氏の「轉換大流行」は、例の、文壇楽屋話として、私の興味をそゝつた。現今の政黨や政治家は、新聞や雜誌の上では、いろ／＼な點から侮蔑されてゐるが、私は、彼等が特別に侮蔑に價ひしてゐるとは思つてゐない。同時代に生きてゐる人間にそんなに差別のあらう筈がない。他の社會の人間が政治社會の人間よりも、一層清廉潔白であらうとは思はれない。地を易へば皆然りと思はれる。尾崎氏の作中の、ある文壇人が、「都合のいゝ理窟を見つけて」景氣のいゝ方へ轉換したり、自分は重役室にあるやうなどつしりした机の上で、一本二十圓の萬年筆で、「血にまみれて叫んでゐる勞働者」や「工場の壁に凭れて泣いてゐる女工」を題材として書いて、それから得た原稿料で、スキーに出かけたり、ダンスホールで踊つたりするのも、代議士が、景氣の惡い政黨から、いゝ政黨へ轉換したり、國利民福を計りながら、一方で利權とかをせしめると同樣、實際にありさうなことである。しかし、さう憤慨するには及ばないので、さうしてゐるうちに政治社會も文壇も推移するのである。「唯、道德的で甘いといふだけでは、此頃の讀者は承知しなくなつてゐるんです、何と云ひますか、どうしても此頃は左翼思想の砂糖漬といつたやうなものでないと、それでなければ、エロチックなナンセンスものでないと」いふのが、現代の流行を指示してゐるとすると、今日の文壇に成功するためには、その流行に乘つて行くより外仕方がない。流行のはかなさを知つて、自分の好みに從つて進まうとする人間は、獨自一個の心境に滿足するより外仕方がない。何時の世にも、どの國にでも、傑れた政治家や傑れた藝術家が、さう澤山あるものぢやないので、流行によつて右へ左へでも轉換するのは、古來の人間の狀態である。……それに、世間の風向きを見て、流行に乘つて、流行を征服して、群小政治家や群小作家を後へに瞠若たらしめるのも、男子として生存中の痛快事であつて、徒らに流行作家や流行政治家を忌々しがつて愚痴を云つていじけてゐるよりも、どれほど勝つてゐるか知れないと、私は思ふ。しかし、流行の潮先を看破して、その波頭に乘つて一代の衆愚に喝采させることも、凡才の爲し得られることでは

ないのだ。轉換しても、文壇の陣笠では仕方がない。

中央公論の、馬場恒吾氏の伊東巳代治論は、人間の機微をよく掴んでゐる。私はこの陰性な政治家には、かねて興味を有つてゐた。政治家といふものは、文學者と同樣、名譽心の強い人間の選ぶべき職業で、從つて、世間に媚びて人氣を取らうと努めるの常例としてゐる。犬養毅氏の如きは、長い不遇の間にでも、民間の人氣を得ることは巧みであつたところが、伊東氏は、たび〳〵問題の人として新聞に傳へられたが、何時も人氣が惡かつた。新聞では、氏に對して好意ある記事を書いたことがなかつた。氏が新聞記者をも世間をも眼中に置かなかつたのであらう。空人氣はなくつても實力は備へてゐたらしい。その點で、私は、伊東氏を珍らしい政治家だと思つてゐた。よく、西洋の政治家は、民衆に對して胸襟を披く、それが文明の政治家たる所以だと、新聞の論説などによく書かれてゐるが、政治家は實力があつて實績を上げれば、それでいゝのではあるまいか。且つ、西洋の政治家が果して胸襟を披いてゐるのであらうか。私は全然疑つてゐる。高座の落語家が必しも、聽衆に向つて胸襟を披いてゐるのではない。……馬場氏の所論を讀んで、私は、伊東氏の人のなりをいくらか明かにした。

改造誌上の、里見弴氏の「隧道」は、例の長編「安城家の兄弟」の一部である。主人公が妻をして秘密を打明けさせようと、さま〴〵に心を砕く有樣が、くどいほど微細に描かれてゐる。このくどさその事が、主人公のその夜の心理を反映させてゐるのだ。私はこれを讀んで、一人の心の眞實が的確に描かれて、そこに萬人の心が現れるのだと感じた。

シエークスピアは萬人の心を寫したと云はれるが、多數の心のどれもがぼんやり寫されたのでは詰らない。今月の小説中、作者の語るところを、終始を通じてピツタリ心に映して讀み得られたのはこの一篇である。

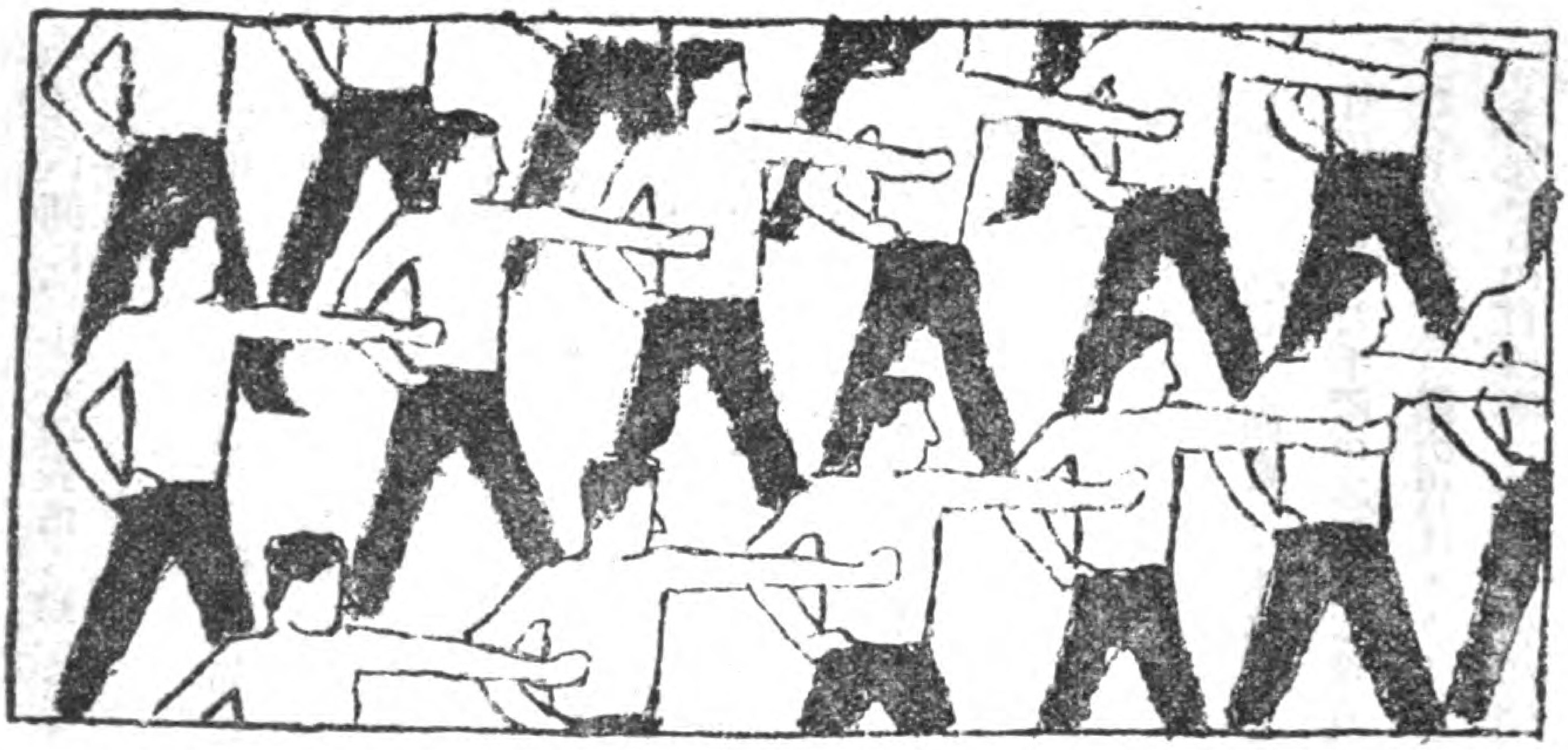
「三田文學」の木村庄三郎氏の「六月の創作評」を見ると、長田秀雄氏の「父」といふイプセン張りの戯曲を、流行おくれとして非難してゐる。「父が正に溺死をする刹那に、息子の心に父の死を希望する感情が閃いた」ことが戯曲の主題となつてゐるらしく、評者はそれを晒つてゐる。さういふ「主人公の苦悶を、僕の心は苦悶としない。それで僕はこの作品

が詰らなく、どうでもいゝではないかと思ひたくなるのだ」と云つてゐる。私は長田氏の作品は讀んでゐないから、それについては何とも云はれないが、個人の心理を問題として取扱ふことが詰らないといふこの若き評者の心と、私自身の心との懸隔を感じた。苦悶といふものは誰れだつて望みはしないだらうが、詰つても詰らなくつても、人間生きてゐる間は、何かの苦悶から離れられないやうに出來てゐる。他人の痴氣を頭痛に病んで、いろ／＼な暴露文章を書く人、それを讀む人さへあるのだ。

長田氏の戯曲は讀まなかつたが、この「三田文學」の青年批評家の感想を讀んだ直ぐ後で、「文藝春秋」所載の、中村吉藏氏の戯曲「三萬石」を讀んで、思ひ當るところがあつた。作劇術も老練であるが、この主人公の氣持が、私にはひどく愉快であつた。かういふ人生態度を私は好む。そして、天野某の如くそれを敢行し得ないのを遺憾とする。しかし、かの青年批評家に云はせたら、この戯曲の主題も詰らないかも知れない。「何のために天野某はそんなくだらない考へを起したのか」と云ふかも知れない。年齢の相違に基くのであらうか。

さう云へば、「財界の人事漫錄」の淺野總一郎翁の噂には、老人の淋しい心境が描かれてゐて、感銘が深い。私は今故郷にゐて、老いた人、死に近づいた人の、凄慘たる淋しい境地に直面してゐるので、淺野翁の記事が一層つよく身に染みた。若い作家のエロチシズムも眞實であらうが、凡ての人間のつまりは免かれ難い老と死の苦悶も、厳然たる眞實である。

芭蕉は、口癖のやうに「淋しさ」を云つてゐた。しかし、それは、風流の「淋しさ」であつた。「淋しさなくばうからましと、西上人のよみ侍るは、淋しさをあるじなるべし」と云ふのも、「うき我を淋しがらせよ閑古鳥」などと詠じたのも、詩人の淋しさで、現實の老人の感じる淋しさ、死を豫感する人の淋しさは、そんな生やさしい、しやれたものではないのだ。傍目には醜態を極めてゐるやうに見えるだらうが、當人は、救ひのない淋しさに惱まされてゐると思はれる。風流な「老」風流な「死」なんてあるものではない。それについて思ふに、文學は要するに、綺麗ごとである。尾崎氏の小說にあるやうな、二十圓の萬年筆を揮つて、香のいゝ埃及煙草でも吸ひながら書かれた「失業小說」なんかばかりが、綺麗ことであるのではない。



荒つぽい村

武田麟太郎

1

大きな熊が、それをのつけて來た荷車をそのまま利用した屋臺店の上にころがつてゐた。粗い毛のさきなんか泥がついてゐたりして隨分と汚かつたが、黑い鼻の先や、縮めてゐるやうな足の裏が、妙にこの動物の愛嬌さを人々に感じさせるのである。と云つて、こいつは生きてゐるのではなかつた。深い山奥から下りて來て、畠の物を荒すこの惡い奴は、二發もの彈丸を受け、その毛の中の傷口には赤い血を凍らした死骸なのだ。腹は立ち割られ、肩もとから鋭利な小刀で幾度も肉を切られては賣られてゐる。その切り口の肉は、空高くから吹きおろす寒風の中にひきしまり、脂つこく光つて見られた。

人々はそのまわりに肩と肩とを押しあつて、この見事な獲物を見物し、それを射ち殺してこの町に賣りに來てゐる多賀村の若ものたちは、どれも同じやうな圓

つこい顔に、少しの表情も動かさずに、ぢつと立ちはだかつてゐる。

石川は――後年この多賀村に組織者として這入りこんだ石川は、こんな情景を記憶してゐる。それはまだほんの小さかつた時だ。一月の末、町の西はづれで、藥師の緣日が催される。その日には、田舍町の人々の財布をあてこんだ旅廻りの露店商人や野師がたくさんやつて來るのだが――そして、この日に町の人々は呉服物や、化粧品や、帳面や、農具や、その他子供のものなぞを買ひ入れるのである。――それらの店にまじつて、この熊が切り賣りされてゐたのだ。その年は珍らしくこんな大きな奴がとれたのであらう。

熊の屋臺店にはサラシ木綿の旗が立ち、風に搖られ、筆太に「多賀村農會」と書いてある。商賣にもの慣れぬ村の若ものたちも、同じやうに記したキレ地を腕に卷きつけてゐた。

「でけえ熊ですな」

見物の方から感嘆の聲が出る。

「熊が出たぞ！」――そのしらせに村中がひつくり返つて活氣立ち、誰も彼もが手に手に銃をひつさげて、夏の間に見つけて置いた熊穴の方向へと、雪の山をかけめぐつた結果、この大手柄をした。そのはなしを、町の人間は聞きたがつてゐるにちがひない。

――けれど、「商賣」に來た村の若ものたちはブッキラ棒にダマリこんでゐるだけだ。肉を切るのはうまくても、それを竹の皮に包む手際の不器用な彼ら。大きな札でも出されると、釣り錢の勘定にまごついて、二三人ボシャボシャと相談するやうな彼ら。熊の膽はキタイに利くでな、と大量に買つてくれるいいお客にも、ありがたう一つあびせ得ない彼ら。――その彼らの口は熊について何の物語も語らうとしない。だから、町の人たちは、チロチロと熊を見、それから村の若もの

の顏を見、そして、この町から三里ばかり上つた、山と山とに挾まれた小さな多賀村についての定評を、ちよつと、頭の中に思ひ浮べるのである。

その定評と云ふのは——多賀村のやつらァ氣が荒らい、と云ふことだ。他と一割ちがつたやうに、荒つぽいこの村は、次のやうな事件のあつた後、恐怖さへつけ加へて、益々その定評を動かせぬものにした。石川は子供心にうつつた、その事件の概略を、おぼえてゐる。かうなのだ。

村に新しい駐在所の巡査が來た。こいつは軍人の古手だが、まだ若く、いやにキチンキチンとし、法律を振り廻し、村民にいつも澁面を見せてゐた。まだ獨身なので、暇のあるに任せ、村の改革を思ひ立つた。

改革することはいいことだ。だが、この出世をはげむ巡査は、村の惡風を、即ち一つは墮胎の習はし、もう一つは無免許に銃を所持することを、なくして了はうと考へたのだ。

彼の意見によると、どちらも法律上の罪惡である。墮胎は日本帝國の人口の減少を來すことだ、又、銃を持つてゐるのは秩序の上から困つたことだ。その銃は現在の平和を亂すことがあるからだ。

だが、村民の意見によると、「まびく」ことは別に惡いことではなかつた。このカツカツに食つてゐるところへ、もう幾つかの食物をほしがる口がふえて如何なることだらう。それに鐵砲も大切な生計の道具である。田作りと養蠶とだけでは、今の生活もつないで行けない。農閑期には內職として、獵に出なければならない。山へ行き、山の樹々が、鐵砲の音に木魂して震へ、そして、山鳥とか兎とかが彼らの手にはいる。もしも、鐵砲がなければ、それこそ、村の平和を亂して了ふのではないか。

いつもは頰が赤くて、肩のいかつい、五助の嬶は青い顏をし、トロンとした眼をして、町場の警察へつれて行かれた。

彼女は年兒を生まぬ算段をしたのだ。去年生んだばかりのガキは町へつづく長い街道を泣きつづけた。三月にもなつた腹に×を立てて、×をやぶつて、まだ×の塊りのやうなのを流し出したので、衰弱は極めて烈しかつたが、法律と云ふものはそんなことには容赦せぬ。アバラ家では五助が飯たきから一切して、殘された子供の面倒を見なければならなかつた。

雜草にまじつて生えてゐる「ノビル草」の根を、軒下につりさげて乾してゐた安藏のお神も長い間、駐在所で調べられた。その草の根を煎じてのみ、腹の子をおろすのだらう、と云ふのである。だが、お神はまだ妊娠してゐなかつたのだ。

こつそりと巡査は、巡廻の途中、脚袢をはいて農家の緣先に現れたり、裏の籔かげからのぞき込んだりした。鐵砲の手入れでもしてゐるものなら、ズカズカとはいつて來るのだ。

彼はすでに調べてゐた。村で銃の鑑札を持つてゐるのは、たつた五人だ。だが、大抵の奴が銃を持つてゐるのである。

「あきれたやつらだ、うしろ手になることも恐れねえで」

荒つぽい村民も巡査とか官員様にはわけもなく從順に馴らされてゐた。こいつは古い封建時代の名殘りの習慣であつた。だから、今度の××の仕打にも、最初は手向ひすることなんか考へもつかなかつた。

そこで、彼らは畑のものや獲物を持つて「ナキを入れに」駐在所に出向いて行くのである。

「こいつは屆けものが不足したと云ふにちがひねえ」

立てつけの惡い、山の影を歪んでうつしてゐるガラス戸をあけ、駐在所の中へ、へつぴり腰ではいつて行くのであつた。そして、大眼に見てくれるやうに頼んだ。

「前の旦那も大眼に見さつしておくれやしたで」

さう附け加へることを忘れなかつた。

けれど、何の效果もなかつたので、村民は面喰つて了つた。四角い顏の巡査は白い齒を見せて、どなつたものだ。

「何だア」

ぢいつと、ナキを入れる男の顔を見ながら、急に早口になつた。

「何だと！　莫迦こくな！　腰繩つけられてえか」

そして、彼は彼の任務にいそしんだわけだ。

春はまだ淺く、重い灰色の空の裂け目から、時々弱い陽が洩れ、それが西北につらなる日本アルプスの山々の雪を白く光らせて、帶のやうにこの村にも及んで來る午後だ。白樺の林の中から、モンペ姿の子供が三人、赤い手をあげ、走つて下りて來た。口々に何か大聲で喚いてゐるのである。——畑地にゐた男たちは鍬を休ませて、子供のこちらに段々近づいて來るのを待つた。そして、大へんなことをきいて了つた。

「死骸見つけたゞ！」

「駐在所さ死んでるど！」

——靜かな林の奧で、××は和服のまゝ、簡單に殺されてゐた。誰かゞ、その左の××に××を打ちこみ、それからてつぺんから×××したのだ。どつかで大分ひきづり廻したらしく、洋服や死人色の頬つぺたが土に擦り切れて來た。眼は白くむかれ、帽子はあとから持つて來て置いたのであらう、胸のところにチヨコンとのつかつてゐる。林の奧は小暗く、どつかで山鳥が鳴いた。次第に夕方は近づき、あたりは眞暗になるまで、百姓たちは、ぢつと立ちつくしたり、うづくまつたりして、死骸をとりまいて見物してゐた。誰一人として役場へ、この出來事を知らせに行かうとするものもなかつた。××××の死骸を見物するのは仲々飽かないものである。

だから、村役場にこのことが知れ、町の警察から官吏たちが、提燈をぶらさげた自轉車を幾臺もつらねてやつて來たのは、隨分と夜更けだ。村の家々は戸締りされ、燈は消されて、人々はすでに今日の異常事の昂奮からもさめて、寢につい

てゐた。——その散在してゐる家々を提燈は走り廻る。月が出た。戸はどん／＼と叩かれ、片つ端から縛りあげられた。誰も彼もが鐵砲をもつてゐるので、みんな嫌疑がかゝつたわけだ。官吏たちは朝方までに大活動をした。——だが、

「身におぼえのねえこたお、なんちゆはれても、知りやせんでごわす」

無表情な彼らが、强い太い眉を動かせて云つた言葉はこれだけなのだ。

めづらしく、その日は誰も山に狩りに行かなかつたと見えた。どの銃口をかいでも、最近の煙硝の匂ひはなかつたのである。

殺した男は遂に知れずに終つた。唯、おびたゞしく、無鑑札の罰金が云ひ渡され、村民に彈丸を密賣してゐた町場の鐵砲屋がばれただけだ。

もちろん、近在の者が噂して云つたやうに、××殺しは、村のものにちがひない。

「何せえ、熊を生捕つたちゆう男もゐるつちゆうし、氣性の荒つぽい村だに——」

さう、彼らは口を利いてゐた。

定評は嘘でなかつた。多賀村は氣性の荒つぽい村だ。そこでは人々は、せつぱつまると、命知らずの振舞をした。暴力の驅使できる人間は尊敬される。田植時の水爭ひ、正月の消防出初式、御柱引き出しなど、村々對峙の喧嘩には、女房や子供たちまで、一つの昂奮に押し包まれるのだ。

「おら村、昔つから、負けたことせえねえぞ」

——しかし、村と村で爭つて見たところで、彼らの生活が根つこからよくなつたことはないのだ。荒つぽい氣性はもつとちがつたところに使はれねばならなかつた。彼らの生活をどん／＼と苦しさの底に追ひつめて行くものに向けられね

ば！　そして、向けられた。そのはなしをするのが、この小說である。つゞけて讀んで貰ひたい。

2

――村は長い間、表面は平和にすぎてゐた。

射殺された四角い顏の××の後によく肥つた佐竹と云ふ男が來てから、もう十年近くになるのである。この男は山の中の、しかもお上をお上とも思はずばらゝして了ふやうな、多賀村に駐在されたことが、最初は大へん不平であつた。しかし、彼の頭はもうかなり白いものを交へ、そいつは增して行くのが眼に見えるのだ。さう云ふ年配になつて了ふと、不平も次第にあきらめに變化するらしい。――今となつては、巡廻のついでに、小高い山の中腹にあつて、村からはその土塀の一部と塔とが見える安養院と云ふ寺に立ちよつて、和尚にこんなことを云つたことがあつた。

「わしも、もうこゝでせえ骨になつて本懷でごわすわい。このお寺さまの御厄介になりやしようで――」

彼は村民を恐れ、憎まれてはならぬと、何ごとも事なかれ主義に、大眼にやつてゐた。だから、今では公然と、××も行はれ、鑑札のない銃も平氣で駐在所の前の道を通り、やアと彼にアイサツして行くのである。

百姓の馬が病死した、と屆けがある時なぞでも、彼は、うん、うんと頷くのである。

「そいつはでかい損をしたな。――だが、まあよく石油せえぶつかけて燒いてから、埋めて了へよ。病氣馬の肉は毒だで食ふでないど――」

さう云つただけで、佐竹巡査は、燒く現場には一度も立ち合はなかつた。彼は村の風習が規則とちがつてゐるのを知つてゐたからだ。――百姓たちは馬の皮を剝ぎ、それを燒きすてるやうなことはしない。そんなモッタイない丸損を見す見すやるはずがなかつた。毒だと云はれるその肉も、百姓たちは平氣で食ひ、又他に賣り、くらしのたしにしなければなら

なかつた。そして、その肉のうちの幾らかが、いつかこつそりと內々のお禮として、×××の勝手口に屆けられるのが例となつてゐる。

佐竹もそいつを食ひながら、女房に云つたものだ。

「こいつは、ドカンとやられるのとはでかいちがひだで――」

こんな巡査には百姓と云ふものは心易さを感ずるものだ。こいつはくだけた旦那だ。百姓たちは、大根や豆やの畑のものから、栽培してゐる林檎や杏や梅の實なぞを持つて來ては、白い髭の佐竹巡査と、おら口調で話しこんでは悅んでゐた。彼が村道をぶらぶら歩いてゐると、ひまな時には家ん中へ呼び入れられた。官服のままで上りかまちに腰を下して、茶の御馳走になり、お茶うけの漬け物を口に入れて、モグモグやるのだ。家々のこまごました、內わごとやら緣談の相談までも持ちかけられた。(この習慣は高作が村の『大立物』になるまでつづいた。)

時々は、それでも佐竹の手をやく事件が起つた。――二三人の百姓たちや、金切り聲をあげた女房が駈けこんで來ることがあつた。駐在所の戶口で、女房は氣狂ひのやうに疳高く喚くのである。

「またあん畜生が――暴れやがつて――畜生野郞！」

佐竹は、帽子が飛ばないやうに手で押へながら、アタフタと走つて行くのである。

村にはどこにも、手のつけられぬ亂暴者がゐる。ここにも際立つて亂暴な勘次がゐた。こいつが、醉拂つて少しでも氣に食はぬことがあると、喧嘩をぶつかけるのだ。相手か自分かのどちらかが血を流して、ヘコタレルまで、狂ひ廻るのである。けれど、荒つぽいことの好きな村の人々は、それまで止めようとはしない。そこで、勘次にひどい眼にあはされてゐる男の女房が、駐在所にかけて來る始末だ。――

佐竹の白い髭が現れると、大抵は勘次も靜まつた。
「少しは亂暴も手びかへろよ。いつもぢやないか」
すると、勘次は厚べつたい唇を歪めてクドクドと云ひ出すのだ。
「こつちにや、蚤のキンタマくれえのまちげえもねえ――ねえでごわす」
「まちげえのねえ」と云ふのが、この男の口癖だ。
「まちがひのあるもないも、醉拂つて解りつこないぢやないか、いつも」
「ねえ。ねえつたらねえ。わつしは解らねえ男ぢやごわせん」
「解らねえ男でなけりや、お前、さう何も亂暴なまねをしでかさなくても――」

勘次と云ふ男の毛深い右腕には、黑い傷痕があつた。これはある年の熊狩りにその爪を立てられたのだ。これが又、自慢なのである。
「なかなか消えねえもんだに、熊の爪傷せえは――」
そして、彼の殘念がるのは、近年は熊も滅多に出ないことである。――
荒つぽい多賀村のことだ。亂暴者の彼は、亂暴なそのことのため人望があつた。だから、どこの村でもやるやうな酒の振舞なんかしなくても、人々は彼をちやんと消防小頭に選擧することを忘れなかつた。村對峙の喧嘩には、いつも小頭の法被を着て、まつさきに乘り出して行つた。そこで、近鄕の人々も「多賀村の暴れもの」として、彼をおぼえこんでゐた
――繭賣りに、町の繭絲會社に行つた歸途など、居酒屋やソバ屋でよく、勘次は見知らぬ百姓たちに橫眼でヂロヂロと眺めまわされることがある。彼がおほひかぶさつたやうな眉の下から睨みつけると、こつそり向けてゐた顏をそむけてアタ

フタと出て行くのである。こんな野郎に係りあつては！　一度、彼がこんな場合に、それも醉拂つてゐたからではあるが、他村の若もの六人を相手に暴れ狂つたことを誰も知つてゐるからだ。

冬も來て、百姓たちが小作米を地主の庭に運び込む時になると、勘次はきまつたやうに燒酎に醉拂つた。小作が足りないのである。正氣ぢやタンカが切れないのだ。庭の席の上にアグラをかいて、上の旦那を見あげて云ふ。旦那はこれでは足りないのである。

「これ以上ぢや、こつちが食ふだけも殘りやせんわ。――今年はこれだけでまア――」

「お前とこだけ凶作つゞきでもなかんべえ。毎年、毎年！」

「凶作にしろ何んにしろ、こつちは食ふにも足りねえくれえの米しかごわせんわ」

これでつつぱなすのだ。地主も亂暴ものの勘次にだけは餘りキビシク文句も云へなんだ。こんな男は何を仕出かすか知れぬ。そこで、その償ひをしでもするやうに、他の百姓たちには一升のカケにもやかましかつた。――

百姓たちは地主の庭へ出ると、腰をまげ、首から手拭をはずし、むやみにペコペコとした。負けてくれるやうに苦しさを訴へに來たのだが、それは切り出しにくかつた。そこで、彼らも勘次にならつて、車をひく足もともヒヨロヒヨロするほど醉拂ひ、赤い顏をして、俵を地主の庭に運んで來るのである。こんな連中が次第に增して行つたが、こいつは百姓が益々食へなくなつて行くことを物語つてゐた。

赤い顏した小作人の訴へをきくと、地主は緣先に出て來てどなつた。

「ごろつきどもめ！　おとなしくしてゐりや、つけあがりやがつて――小作がいやなら、勝手に何處へでも行きやがれ！」

それから奧へひつこんで了つた。地主に使はれてゐる作男は桝目の足りない百姓を、自分の責任になるのを恐れて、ピシピシときめつけた。赤い顏して舌もつれの言葉でブツブツ云つてゐるのを小突きとばした。その百姓は倒されたまま、

醉拂つたからだを、地べたに横たへて眠をつぶつてゐた。頭の禿げた年寄りが、地に膝をついて、ペコペコと云ひわけなやる。作男は地主見たいな顔でどなるのだ。

「手前らタダで田地せえ作りやがるだか！　どいつもこいつも！」

百姓たちは腹の中では、「水でものんでゐろとでも吐かすだか。小作なんか納めやがつてせえ」と思ふのだ。だが、そいつは動作にまで出なかつた。小作米の取り立てが、どれ位苦痛でも、これは親代々あたりまへのことと考へさせられてゐたのだ。しかし、親代々耕しに耕して來た土地が——先祖から苦しみも感じ愛情を持つて手入をして來たその土地が彼らのものでないのこそ、おかしいことであつた。そこに、地主が一度でも手を觸れたことがあつたか。草一本ムシリ取つたことがあつたか。——地主は唯、苦勞の結果の收穫だけを取る權利を持つてゐるのだ。事實、小作人たちは親代々の長い間の耕作で、その土地はいつの間にか、自分の土地のやうに思へてゐるのである。しかし、小作米納入日には、あれは他人のものだつた、と寂しく氣附いた。

不景氣と云ふ字が、村役場に來る町の新聞に、幾度も使はれ出してから、百姓たちは蠶を飼つても、來る年來る年、損ばかりした。一貫十五圓から二十圓もしてゐたのが、七、八圓にまで下つた。かうした繭絲會社の相場はいつも、百姓の胸算用から、ひどくはづれてゐるのだ。——

「百姓しても食へねくなるつきりだよ」

だが、百姓をやめてどうするのだ。そんなことを考へるのは、彼らは不得手だつた。默つて家を飛んで、山の風を背にうすら寒く感じながら、町へ出て行くのもあつた。だが、それらが町へ行つて食へるやうになつたか、どうかはちつとも村の方へ知れなんだ。——そこで、彼らは榮養不良に陷りながら、田を作り、蠶を飼ふより仕方がないのである。

春繭の格安にアテがはづれ、ガッカリしてゐると、百姓たちの間にいつのまにか、夏蠶は値が出ると云ふ噂がひろがる。それにやつと彼らは元氣づくのだ。だが、繭にして見ると、相場はやはり同じであるのが常であつた。同じやうなことが秋蠶にも、待つてゐた。――繭の買ひ出しにやつて來てゐる仲買人や、製絲工場の買手たちは、かうして百姓たちからの繭「買ひたたき」や「買ひなめ」をやつた。

「何しろ生絲の値も安いし、外國向きも惡いつて云ふわい。不景氣なことだで」

百姓たちは語りあつた。しかし、會社は前と同じやうに儲けてゐた。不景氣のせいで損をするのは、百姓たちの方なのだ。――

村から町へ繭を賣りに行つても、アテにしてゐた金も受取れず、買はうと思つてゐたものも買へなかつた。そこで、町場の盛り場や、隣村の出端れにある、百姓相手のアイマイ屋は、養蠶になつても金が落ちて來ないのである。横太りに肥えた、首すじの鼠色の女たちは、のれんのかげから飛び出て來ては、繭賣り歸りのシホレた百姓の袖をヤッキになつてひつぱつた。だが、多くの百姓はからかひの言葉だけを投げ、それから女の手を振りきつた。すると、女たちはヤケになつて、彼らを罵しるのであつた。中には、目腐れ金に釣られて鉢になり、そこで懐にありつたけをぶちまいて、飲みつくす男もゐた。もう、どうにでもなりやがれ！

そしてある朝、眞夏の杉林の中で村の百姓が古びた鳥打を被つたまま、首を吊つてぶらさがつてゐた。帶から垂れた紐のさきの財布には、十錢白銅が二つ、銅貨が三つ四つ殘つてゐるだけだ。この百姓は五人もの子供を持つてゐた。女房が赤ん坊をせおつてやつて來た。赤ん坊は背中の上で女房の亂れた髮をひつつかんで笑つてゐた。

女房はどなるのだ。

「誰がせえおら父つあんせえ誘つただ！　スケベ野郎！」

死骸をとり圍んだ野良着の百姓や女や子供にまぢつて、勘次ものつそりと突立つて、默りこみ、厚ぺつたい唇を嚙みしめてゐた。彼の眼は黄色くドロンとし、少しばかりの涙もあつた。實は、彼はこの首を吊つた男と一しよに、前夜、隣村の上條村のアイマイ屋へ上つたのである。だが、誘つたのはこの百姓の方だ。——彼は暗い氣持の中に、何かに掴みかかりたい欲望を感じながら、腹の中でヒソカに云ひわけを吐くのである。

「おら、おら、これつぽつちも、まちけえねえ」

家では、手垢で汚れた長い財布を前にして、勘次の女房は子供の口に乳房を押しつけながら、ションボリしてゐた。夫が歸つて來ると、彼女は頭髪をくるんだ手拭の中から、日燒した黑い顏を歪めて、云ひ募つた。

「どこにせえ繭の金、棄てで來ただ、え？　お父つあん」

「おら、知らねえ！」

「あんまりひでえでねえか。無鐵砲云ふものずら。さあ、どこにせえ金、棄てて來ただ」

「だまらねか！」

「うんにや、だまらね。あんまり——」

「このあま！」

平手で打つ音がする。女房は泣かなかつた。夫に掴みかかつて行つた。子供は乳房を離されて泣き出した。

だが、翌日は女房は赤ん坊を背にくくりつけて、桑摘みに出かけるのである。勘次も髭面を暗くしかめて、默つて立ち働いた。彼は胸ん中であばれ廻るものを感じた。蠶飼つたり、野良働きやり通して、そいで百姓はいつてい何んの得せえするだ。莫迦くせえ。

――桑籠をかついで勘次が日光に白つぽい街道端へ出ると、自轉車を曳いた若い男がやつて來た。その汚れたズックの鞄を持つた男は經木作りの帽子をとつて、

「恐れ入りやすが――」と言葉をかけた。

勘次が頬かぶりの顔を向けると、

「宮田喜作さんとこ、どう行つたらようごわしよ」

勘次がブッキラ棒に敎へてやると、この若い男は禮を云つて、自轉車を曳きながら、尙も彼とならんで歩いてくるのである。そして、村の首縊りの話から、繭相場のこと、小作料のことまでも話しかけた。

「不景氣でごわすからな。こんなままぢや今に百姓はみんな首縊りでもしなけりや――」

勘次は返事もしずにこの若い男を、ぢろつと見た。それから、むつつりした言葉でたづねた。

「おめえさん、百姓かえ」

「はあ、上條村のもんでごわす」

「この忙しい時期に、おめえ――」

すると、若い男は眞黒な齒を見せて、薄笑ひをした。

「はあ、もつと忙しい要事せえできて――」

そして、ありがたうごわす、と云ひ、自轉車にまたがつた。だが、ペダルを踏まうとして、氣がついたやうに、又跳び下りた。汚れたズックの鞄の中をのぞきこみ、刷り物を出して、勘次に手渡すのだ。

「こいつを」

「何んだえ」――勘次は半分手を出しながら云つた。

「わしら百姓の首絞らねえやうに考へるやつで——」

「首絞らねえやうに？」

上條村の男はうなづいて、再びアイサツをし、自轉車を走らせて行つた。その土埃をあげてゐるうしろ姿を見送りながら、勘次はケタイな奴だと思つた。そして、その刷り物を懐にねぢこんだ。

夜、蟲の集つてゐる薄暗い電燈の下で、勝次は刷り物を讀んでゐた。假名をひろつて讀むと、何か百姓みんなに叫びかけてゐるらしく、仲々もつともなのである。

「今、丁度、養蠶期だし、農繁期だ。だが、新繭の相場はガタ落ちで、養蠶家の損失は莫大だ。それだのに政府は絲價補償法と云ふものをつくつて、農民や勞働者から捲きあげた金を、銀行や製絲工場の資本家にくれてやることをもくろんでゐる。こんなことは大反對だ。資本家に出す金があれば俺たちによこせ。桑畑の小作料は全免にしろ！

これから水問題が起こる。用水のせつびを地主に負擔させろ！

——————」

字を讀みつけない彼は疲れた。唯、「立禁」「共同耕作」「勞働者と力をあはせ」「町は失業者で一杯」「製絲女工、紡績女工の首きり、賃銀不拂、賃銀値下も我々農民の問題だ」「土地を農民へ！」

——なぞの文字が眼にチラチラした。最後に大きく「全國農民組合長野縣聯合會」と書いてあるので、彼は口の中で幾度も繰りかへし「ノウミンクミアヒ」と云つた。ぶんぶんと蚊が來る。ピシヤリと太股を叩き、その紙を庭に投げすてた。しかし、ちよつと考へて、彼はもう一度そいつをひろひあげ、佛壇の棚にのつけて置いた。

（ついでにここで云へば、この勘次に刷り物を手渡した若ものと云ふのが、最初の方に書いた石川と云ふ男である。）

3

山間の多賀村の秋は早く來る。秋晴れの高い空から寒い風が吹きはじめた。黃色く、重さうな穗がザワザワと鳴り、山の樹々は裸になるのである。早くも氷雨が橫に地を打つ日が來た。すると、百姓たちはあはてて、刈り入れにかかるのであつた。

その頃のある日、年寄り百姓が、隣りの上條村で地主と小作とのモメ事が起つてゐると云ふことを云ひふれて步いた。實は彼はそれを喜作にきいたのだ。おしやべりのこの老人は新聞のやうな役目をした。――彼はひどく亢奮して、首をかしげて話すのだ。上條村では、小作を負けろ、とのことから、地主が土地を取りあげて了つた。そこで大騷動が起つたわけだ。それを勘次もきく。

「農民組合とか云ふものが出來ただとよ」

「農民組合？」

「うん、そいで、地主の方ぢや渡り者を雇つてさ、おめえ、大喧嘩おつぱじめさうだわ。巡査も來てゐるつて云ふぞ」

「大喧嘩？」と、多賀村の暴れ者が、再びききかへした。

「うん」

勘次の眼の中に、もう忘れきつて了つたと思つてゐた上條村の若い男、經木の帽子をかぶり、自轉車に乘つて走つて行く姿が、見えた。年寄りの百姓が歸つてから、彼は思ひ出して、佛壇の棚を探した。しかし、れいの刷り物は見つからず、大きな掌がたまつてゐる埃で汚れて了つた。

「ここにせえ載せて置いた書きものせえ、どこへやつた」

「書きもの？」

女房は顔を向け、ケゲンな表情を浮べた。――「どねな？」

「書きものよお。莫迦！」

だが、女房には勘次が「書きもの」を探すのが解せないのである。彼の物を書くのは尚のこと、讀むのも見たことのない彼女は、ひどく熱心になつてゐる彼の様子がおかしくさへ思へた。

「だいじなものだか？　きつと、洟せえかんで、ぶちやりでもしただよ」

「ぶちやつただ！」勘次はうなつた。「この性なしめ！」

あの刷り物を讀みたくてたまらぬ氣が、隣り村の爭議に刺戟されて、彼の心のうちに起つたのだ。

朝早く、佐竹巡査が、巻いた黒のマントを肩にかけ、同じやうに黒い脚絆をつけて出て行く姿が見られた。

「上條村までな。なんか騒ぎが起つたつて召集されてな」

途で出あつた村民に、彼はしやべつた。この村でそんな騒動が起らないのが彼にはありがたかつた。この分では無事につとめおほせるだらう。

だが、多賀村に歸つて來た時、この白い髭の巡査はすつかり困惑してゐた。駐在所へ戻り、ドカツと腰を下すと、疲れきつたやうに脚をのばして、暫く休んだ。もう、日はすつかり落ちてゐたが夕飯も食はずに、佐竹はそのまま、再び出向いて行つた。そして、宮田喜作のところへ來た。

「わしも、もう十年もゐるんで、とやかくやかましくは云はんが、まあ、あんまり亂暴なことはせんでくれよ。君や他二

三人、上條村の騷ぎに加つてゐるつてんで、本署から叱られたでな」
「そいつはお氣の毒だで」
それから佐竹は喜作に、農民組合つてものは「日本人」のやることではないと說き出した。すると、喜作はもう彼の云ふことなんか聞いてゐないのである。藁繩をなひはじめながら、
「もう、あんたも恩給でごわしよ。大分長いことだで」
「うん、さよう」
「ようごわすな」
「なにお前、わしの恩給位ぢや暮せんわ。これで、今首にでもなると、土地を持つてゐではなし――」
そこでこの老いた巡査は、あまり表向きにはやらぬやう、喜作に賴むのである。今になつて、この村から事を起したくない、と彼は云つた。もしも隣村のやうなことが起れば、彼の責任になるからだ。小作が地主に對抗するやうなことになると、それは警察官の取締り不行屆きになるのだ。――すると、村の×××は地主のために存在してゐるのであるか。かう云ふ疑問が、クドクドと嘆願してゐるうちに、佐竹は自分の言葉の中から生じるのを感じた。彼は頭を振り振り、暗い夜道を歸つて行つた。

「喜つさんせえも、かう云つただ」
村民はよくこんな風に云つた。喜作は二里ほどさきの郡立農學校に三年まで通つた。百姓仲間では「頭のある」方なのである。農民組合の縣聯合會の石川は彼に眼をつけた。そして、この村では、彼を中心に若ものたちが三四人寄り集るやうになつてゐたのだ。

山一つ迂回した土地つゞきである上條村の小作爭議の噂は、嫌でもこの村にどんどん傳へられて來た。すると、村民は不思議な感を抱くやうになつた。どうにもならぬと思つてゐた地主の壓迫が「組合」と云ふものの力ではね返へさうとすることが出來るのを知つたのだ。生きた實例は隣村で、刻々と動いてゐる！　勝つか、負けるかは、ひとごとではなく、村民たちの氣をもませた。勝たせねばならぬ。そして、自分たちも勝たう！

「農民組合」と云ふ言葉は充分と村民の間に行き渡つて了つた。そして

「上條村の百姓が小作せえ負けさせたら、おら村だつて、組合せえ作らず」と云ふものさへ出て來た。

この機會を失つてはならない。喜作たちは、その間を、說いて廻つた。

「おら百姓たちはいつまで地主にこき使はれるこたあねえ。組合作つて、自分で作つた米ぐれえ口に入るようにするだ」

永の間の習慣は、たやすく、この言葉を受け入れさせた。誰もがうなづくのだ。もちろん年寄つた連中のうちには、

「そげえなこと、若いものでやつてくんろよ。賛成だが、おらまで出るこたあなかんべに」

と、云つて無關心を見せるものもゐた。

だが、丁度小作米納入の日をひかへてゐる。

この折に組合の力によつて、年貢米を負けさせねば、と云ふ意見が村を支配して來た。

霜柱が立つて凍りついた地肌を踏んで、喜作は勘次のところへ顏を出した。彼も十分と說き伏せて置かねばならなかつたのだ。すると、爐端にゴロリとなつてゐる勘次の方から、馴れ馴れしく、やあ、と云つた。

「おら、とつくにおめえにひとつ聞きてえと思つてただが、出かけるなあ、おつくうなもんで——」

彼は今年の暑い時分に、上條村の若い男に刷り物を貰つたことを話した。笑つて附け加へるのである。

「俺がおめいのとこ數へてやつたのさ。——ところが、その刷り物せえ讀まねえでなくしちやつたんでな」

勘次は隣村の大喧嘩の秘密も、あの一枚の刷り物が説明してくれるのだらうと思つた。そして、今、このやうな彼の態度に、喜作は元氣づいて、あの刷り物の代りになつて語つた。百姓の貧乏と地主の搾取、町の勞働者との關係。——勘次は首をかしげ、その太い眉の下の眼をぢつと据えてきいた。そして、時々分らなくなると、首を起して喜作を見た。喜作はもつとそこの點を丁寧に説明してやる。すると、又、フンフンとうなづいた。

「そいで、おら村でも、その——組合つくるに文句吐かす奴あるだか」

「ねえ。ねえわけだが、なかなか昔からこびれついた考へがぬけねでさ、まだ合點の行かねものもあるだ。まあ、大方のものは贊成だわ」

「早速つくれや。おらも出來るだけ手をかすぞ。邪魔でも入れようつてんなら、おめえ、こいつで——」

多賀村の暴れ者は熊の爪痕のある腕をまくつた。——「もう長いこと寢かしつぱなしだで」と云つた。

4

山から吹き下す風に粉雪が舞ひ、それが溶けずに積りはじめた。時々、日が照ると見渡す限りの白い反射が、眼にチカチカと刺した。その間を雪靴をはいた村民が黒く動いてゐる。

土間に俵を積んだまま、百姓たちは、例年になく早い雪を載せた家根が、時々ミシリと軋むやうな音を立てるのをきいた。

小作の納入日は眼の前に近づいて來てゐる。——

上條村はたうとう×を流した。百姓を×さうとした暴力團との間に××がひらめき、遂に小作のデモは大地主草鹿の邸

宅を×××つて了つたのだ。——こちらの佐竹も毎日、その後の大××のために動員されてゐた。

この隣村の××騒ぎは益ゝこの村の若ものたちを昂奮させた。愈ゝ組合の發會式にまでこぎつけるために、彼らは雪靴をはき、鼻を赤くして、家から家へと動き廻るのであつた。

發會式の日は定つた。そいつは、丁度多賀村の三人の地主のうち（この三人の中には、塔のある安養院もまじつてゐる）の最も大地主、降旗の納入日なのだ。村中をデモつてから、多賀半で、組合を結成し、その決議をすぐに降旗につきつけることとなつた。——すべての手はづは口から口へと傳はるのである。

——だが、爐端に話しこんでゐる年寄り連は、まだはつきりとは呑みこめぬやうだつた。彼らは發會式には出ないつもりだつた。小作米は如何かして納めなければ、いつ土地を取りあげられるかも知れぬ、と恐れてゐるのだ。

一軒の農家の土壁のところで、ゴマ鹽の不精髭をはやした百姓が、若い男に說かれてゐた。

「みんな出にや、おめえ。發會式だにさ」

「でもさ、おめえたち、若い衆にヨロシクやつて貰へばよ。何も反對だといふでねえで」と、その男は抗辯した。

「農民組合つて、おめえ、そねなもんとわけがちがふで——。みんなで、氣勢あげにや。人まかせのことではねえでな。出ろや」

喜作の狹い家には色んな顔が重なつてゐた。それらは野良でしやべつてゐるやうに大きな聲で話しあつた。——村の大方は出るがまだ動かない連中もゐると、誰かがみんな聞えるやうに云つてゐる。喜作は、忙しさうに、集つた連中に色々と言葉をかけてゐた。そこへ顔を出した勘次は、獨り言のやうに云つた。

「この三四年、熊も出ねえが、こいつは熊狩りの時みたいにやるがええぞい。出ねえ奴にや割り前もやらねえでよ。つ

まり、おめえ、意氣地ねく小作搾られても文句も云へねえでな」
側にゐた膏のヌラリとした、頭をエツマキで包んだ百姓が、うなづいてから、切り出した。
「腰据えてる奴ちみんな引つぱり出すにや、おら、ええことせえあるぞ」
こいつはいつも何か突拍子もないことを云つたり、したりする男だ。
「又かえ。おめえのええことせえは――」
と、ナタギセルを口から離して、赤ら顔の百姓が笑つた。この會話の中に、喜作はみんなに云つた。
「組合旗は間に合はねかつだが、赤い布でせえでけえ奴作らにや。そいから、筵旗も五つ六つ立てるだよ」

隣村は大檢擧で、男は一人もゐなくなつたと云ふ噂が、發會式の前日の夕暮れみんなのところへ屆いた。檢擧も今日位で打ち切りらしかつた。佐竹は疲れて戻つて來た。
その時、もう一つの報知が傳つた。そいつは、夜のうちに多賀村の隅々に行き渡るのであつた。
「熊が多賀平の上の方へせえ出たつて云ふぞ！」
今年の早い冬に、もう熊が出たのか。一匹五十圓になる熊ののそりとした姿を思ひ浮べながら、百姓たちは異常な活氣を表情に見せながら、銃と彈丸を調べた。――
この報知につづいて、又、口傳へが來た。
「明日は農民組合發會式をやつてから、熊狩りだとよ」
佐竹は隣村から歸り、もう動けねほど疲れた身體を再び町の方へ運ばねばならなかつた。女房の入れた茶を一ぱい飲ん

でから、腰をあけ、灯を入れた提燈を自轉車につけた。手さきはジクジクと冷さに痛み、そこだけ出てゐる頬つぺたは刻まれるやうに寒かつた。町の本署までは三里からある。——あす、この村でも恐ろしい農民組合が突然できることを、彼は少しも知らなかつたのだ。そんなことを探知し、豫め防ぐのが、彼の役目ではなかつたか。だが、今日の夕方になつて、降旗の代理人がこのことを知らせ、職務怠慢を責めに來たのだ。降旗の方も、はじめて、それを賣りに來た小作人からきいたのであつたが。——恩給前の佐竹の心は、自轉車のペダルを踏みながら、次第に痛み、白い髭の上には洟汁がカサカサと凍りつくのであつた。

喜作の家で、もうかなり更けてゐたが、人々はまだ散らなかつた。勘次が腕組みをして、頭をエリマキで包んだ男を見据えてゐた。

「おめえ、本當に見たのかや。うん」

「本當ともよ。でけえ奴が歩いてゐるんで、おら、まつくろけつて、逃げて來たわ」

云つて、このズラリとした男は、眼玉をキョロと動かした。すると、側の百姓が笑ひながら挾むのだ。

「おめえの云ふことだで。は。遠くの人間の姿でも見ちげえたのだらずに。はァ」

「莫迦こけ。人間が四つん這ひで歩くかえよ」

エリマキの男はおどけた眼をした。喜作がその方へ向いて云つた。

「いいでねえか。村中で熊狩り出來るんだでよ。ぶすぶす云つる百姓や女たちも手傳ひに出るで——」

普通ならば、百姓たちは車に年貢米を積み、地主の庭に運び、品質のことやら、枡目のことで、どなられ、こづかれする日だ。だが、今日は少しちがつてゐる。

「農民組合發會式だ！」

「熊狩りだとよ！」

白く積つた雪を踏んで、百姓たちは次第に列をなし出した。多賀平へと向ひつつ、各々の家から男たちは走り出して來て、それに加はるのだ。遠く離れた區の男たちはかたまつて石橋の上で列の來るのを待つてゐた。——先頭には赤い旗を立てた。幾つもの幟旗は列の中で分隊をくぎつてゐるやうに見えた。鐵砲を肩にかけたのが大多數を占めてゐる。地主の白壁の傍を通る時、加つてゐた女房たちが、先づ「わあつ！」と聲をあげた。すると、男たちも、それに和した。口々の罵り聲は暫くの間、ドヨメキ渡つた。門は堅く閉ざされ、三四の犬が後退りをしながら吠えた。——それから、多賀平へと進んだ。しかし歌を用意してなかつたので、時々列のはなし聲が雜然とし、それがダレた氣分を人々に與へた。喜作は、しまつたと思つた。彼はとつさに思ひついてうたひ出した。それは彼から一人に傳り、二人になり、三人がうたひ、四人に增し、五人ともおぼえ、やがて、耳をすました百姓全部にまでひろがつて行つた。

「もし、もうし、降旗、降旗さん
　世界のうちでお前ほど
　ごうよく非道なやつはない
　どうして年貢をまけないか」

×××は正午近くになつてやつと、町からついた。蒼く、眼まひを時々かんじてゐる佐竹の案内によつて、多賀平へと向つた。

だが、小高い丘の平に密集した百姓たちは、すでに農民組合を結成し、全村一致で、降旗、安養院、もう一人の地主に小作料永久減額の要求を提出することとし、その回答のあるまでは、年貢米××の武器を以て戰ふことにきまらうとしてゐた。

×××はこの野天の會合に臨み、事によれば解散を命じなければならなかつた。丘の平に進んで行くと、上の方で突然××がした。

たつた一發の銃聲であつた。だが、そいつは勢よく空にはねかへつた。それを射つたのは、れいのエリマキの男だ。彼は、

「熊が出たぞ」

と叫びながら、そのくせ、一歩も百姓の列から動かずに、もう一度、銃を肩にあてがつた。再び引き金は引かれ、冬空はとどろき、山々は暫くの間木魂して震へた。

×××は立ちすくんで了つた。見ると、大抵が、銃を肩にかけてゐるのだ。――しかたなく彼らは××したまま、籠に屯した。丘の上では決議文が讀まれてゐた。それから×旗と蓆旗が搖れて

「多賀村農民組合萬歲!」が三唱された。――

翌朝、午前三時。××ははじまつた。町の×××は安養院と村役場に殘つてゐたのだ。暴れ廻つた勘次、エリマキの男、喜作、その他三人が町へ引つぱられた。――熊が出ると云ふので打つぱなした、とエリマキの男は頑張つた。

みんなは二週間ばかり後、村へ歸つて來た。――降旗その他の地主は上條村の事件と思ひ、又、荒つぽいこの村民の氣性に恐れて、要求を通した。しかし、まだ、土地は彼らのものだつた。農民の手に×××××るのはまだまだ、これから組合にたてこもつて戰はねばならなかつた。

雪が溶け始め、春の鬱勃とした氣が立ちこめる頃になつた。村に十年から髭の白くなるまで駐在もした佐竹は、當然、××になつた。あとには、若い體格のいいのが、急に三人に増されてゐる。「老いぼれた、人のいい」××では、もう組合のできるやうな村は取締れないのだ。

佐竹は村を出發する日、水洟を白髭の上に玉のやうにためながら、アイサツに廻つた。勘次のところへも來た。

「あんたぢや、はりとばしも出來ねが、こんだは遠慮もいらねで、グヅグヅ云ひや、××だらうが、こいつを――はァ」

彼は腕をまくつて見せた。

「まあ、荒つぽいことはムヤミとするでねえで――こんだあ、わしもからだに役目がねえで、のうのうしたで、町へでも出たら寄つてくんろ。何か小賣店でも始めるに」

「行くぞい。こんど××に引つぱられた歸りにでも寄らすよ。はァ」

「うん、きつと、寄つてくんろ――ぢや、達者でな――」

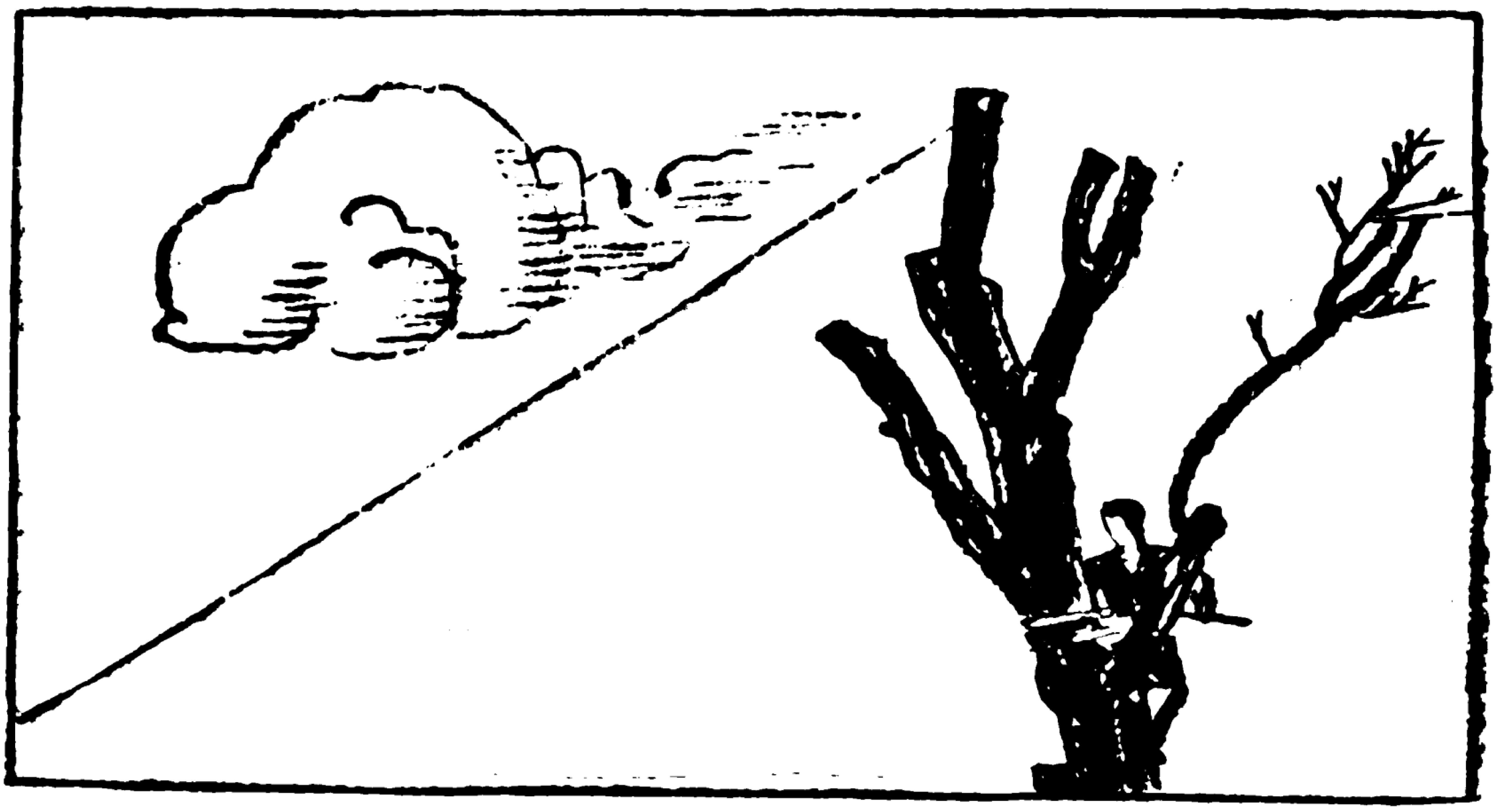
佐竹は去つた。

この事件の後、附近の村々や町場では、亂暴で定評のある多賀村については、かう語りあつたものだ。

「荒つぽい村だで。――××せえぶつぱなして、農民組合作つたつて云ふで」

だが、上條村爭議が多賀村の百姓の眼をさましたやうに、この荒つぽい村の話は、他村の農民に知らず知らずのうちに。階級的な影響を與へてゐた。その影響は野火のやうに遠くまでひろがつたが。その話は別の小說になるわけだ。

七月九日午後。



積木（二幕）

池谷信三郎

夫
夫人
志村
マッサーヂをする男
女中
會社の男

第一幕

洋室。正面と左手に窓。右手は奥に通ずる扉。その前面に煖爐がある。夏の事で、無論火は燃えてゐない。その上に大理石の置時計。二時ちよつと過ぎを指

して止つてゐるが、本當の時間は四時頃である。
その上の、落着いた色をした壁には、油繪の靜物畫が懸かつてゐる。
窓の外には綠の色が映え、夏の陽が明るく溢れてゐる。
正面窓の左手寄りに、壁につけて長椅子が置いてある。その上に座蒲團を敷いて、夫人が坐つてゐる。左手の窓の方を向く姿勢である。
夫人は廿八九の、どちらかと云へば瘦せぎすな、これも亦どちらかと云へば無表情な、それでゐて怜悧な感じを與へる女性。藍色の荒い浴衣模樣の麻の着物を着てゐる。
夫人の後ろには、これも長椅子の端に坐つて、もう五十近い年配の男が、夫人の襟のあたりを揉んでゐる。
暫く兩人はそのまゝ默つてゐる。

夫人。夏になると、私は想ひ出す事が澤山あるんだけど、…………
マッサーヂの男。…………
夫人。(男が默つてゐるので、ちよつと振り返つて見る。) 額に蚊がとまつてゐるわ。
マッサーヂの男。奥さんは、何か私に話しかけてらつしやるんですな。
夫人。別に話しかけてやしないけど、そりや聽き手のある方が、話のし甲斐があるし、それに、蚊に刺されりや痒いだらうと思ふわ。
マッサーヂの男。唇の動くのは見えますけれど、お言葉は殘念乍ら殆んど聞えません。耳が惡いのです。又聞えた所で、どうせ私には、奥さんの仰言るやうな事には、きつと氣の利いた受け答へも出來ないでせう。それを思ふと、却つて幸

福な氣も致します。
夫人。耳が悪いつて、あれ、まるつきり聞えないの？
マッサーヂの男。奥さんはい丶人相をしてらつしやる。負けると云ふ事がない人相ですな。
夫人。まあ！（彼女は可笑しさうに、くすくす笑つて、又窓の方へ眼をやる。）

暫く間。

夫人。（樂な氣持で、聽き手ない會話を初める。）私はあなたを、どこか言葉の通じない國の偉い哲學者だと思ふわ。だから、私が少し位丁寧な言葉を使つたからつて云つて、侮辱されたと思つたりしちや嫌やよ。尤もそんな心配はなかつたんだけど。
マッサーヂの男。私は今はかうやつて、この身につけたマッサーヂの技術で、どうにかやつて參れるやうになりましたが、これまでには隨分といろんな商賣をやつて來たもんです。
夫人。よく紙の上へインキを滴したりして、それを何んの氣なしに二つに折つて見ると、そこに思ひがけない形を發見する事があるでせう？……あ丶、さう〳〵。何んの話でしたつけ、お前さんの話は？
マッサーヂの男。私が初めて東京に出て參りまして、さうですな、もう二十八九年も前の話ですが、…………
夫人。あら、ぢや、私が生れた頃なのね。
マッサーヂの男。あの頃は、まだ電車が敷けてなくて、馬車鐵道つて云ふ奴でした。今の銀座通りなんか馬糞で一杯でした。こんな汚い話をしてまことに相濟みませんが、……

夫人。馬糞だつて時代がつけば美化されますわ。どうぞ遠慮なく、かまひませんわ。

マッサーヂの男。私は都へ出たてゞ、何んにもする事が無かつたもんで、その馬糞を拾つて集める、今で申しますと道路掃除人のやうな事を致して居りました。それから寒暖計の目盛りを書く職人の所へ見習ひに入つた事もあります。私は子供が大好きだつたもんで、芝居小屋へ雇はれて、見物中のお母さん達から連れて來た子供を預つて、それをお守りする商賣を初めようつてね、頼みに行つた事もあります。勿論斷られましたが。

夫人。お前さんがやつて來た商賣を、一つ〳〵聞いてもゐられませんわ。私は、又勝手に自分の會話を續けますよ。何んの話だつたつけ。あゝさう、インキを紙へ滴した話だつた。それを二つに折つて見る。するとそこに思ひがけない形を發見する。人々はその奇妙な形を見て、いろ〳〵な聯想やこぢつけを働かして、それを何かしらの形に結びつけたがるもんですわ。……

マッサーヂの男。私には、かう見えても女房があるんです。尤も今は一番末の子供と一緒に、八丈ヶ島に置いてありますが。別に島流しにした譯ぢやないのですが、實は女房の家があの島と關係があるのです。あの島は御承知でもございませうが、關ヶ原の合戰に破れた浮多秀家が、あすこに流されまして、それからずうつと、あの島の村長さん、……さあ何んて云ひますか、兎に角十五代迄の墓は今でも殘つて居ります。

夫人。私は丁度それなのよ。何んの意志も、考へもなく、たゞその時の環境と、相手の人の行動に對して、反射的に動くの。急に何かゞ眼に近づくと、人は思はずはつとして眼瞼を閉ぢるでせう。あれなのよ。たゞ單純か複雜かと云ふ違ひだけで、結局、私の行動はみんなこの外界に對するいろんな感覺の反應なの。反射作用なのよ。

マッサーヂの男。明治の初年でした。

夫人。何が明治の初年？

マツサーヂの男。前田さんが、その後裔の内の由緒の正しい四軒を、東京へ連れて來て、今の板橋の所に、各戸に一町歩宛つの地所をつけて住まはしたのです。今の當主はそれから四代目で眼鏡屋さんをして居ます。

夫人。それでゐて、私は、そのして了つた自分の行動を、後になつて、いろ〳〵と理窟をつけてこぢつけて見るの。それが嫌なの。だから、ほんとに私が自分を感じるのは、後になつてから、想ひ出の中に動いてゐる自分なのよ。……淋しいと思はない？

マツサーヂの男。何かお訊ねになつてらつしやるんですか？

夫人。淋しいと思はない？　つて訊いてるのよ。

マツサーヂの男。淋しい？　ええ、そりや淋しうございますよ。何しろ鳥も通はぬ、つて昔から申しますから。尤もあの唄は、あつちの土地の人は嫌やがつて歌ひません。誰だつて、自分の先祖が島流しの罪人だつて觸れ歩き度くはありませんからね。

夫人。あゝ、大分解れたわ、そこの所。

マツサーヂの男。あの島は御承知でもございませうが、周圍十一里で、村が五つございます。北側と南側とは、あんな小さな島の内でゐて、全く氣風が違つて居ります。やつぱり太陽の關係でせうかねえ。

夫人。多分磁石の關係かも知れないと思ふわ。私だつて、かうやつて、北向きの窓に向つてゐる時と、南向きの窓に坐つてる時とは、これで氣分がまるつきり違つて了ふのよ。昔の人は今でもさうだけど、茶室なんかの窓はみんな北向きにつけるものなのね。氣が澄んで來るからなんでせう。それに、庭は北向きに見るのが一番いいのよ。植木の葉の表が見えるから。植物の向日性つて云ふのかしら、あゝ云ふの？　御覧なさい、あの窓の外の新緑を。あんなに明るく光つてゐるわ。

マッサーヂの男。村で一番大きな所が六百戸ばかりでございます。女房はそこに置いてあります。土地の人は大概牛を飼つてゐます。漁をしたりするのは、こつちから行つてゐる連中でございます。土地の人はそんな危い仕事はしません。牛は一年中飼葉があるのでよく育ちます。牛乳は一升十八錢位でございます。震災後大きな牛乳工場が立ちました。

夫人。まあ、今度私、八丈ヶ島遊覧自動車會社をつくつたら、お前さんを案内人の頭にしてあげるわ。

マッサーヂの男。女房は家賃二圓の家に住んで居ります。毎月こつちからはお米を送つてやります。先は薩摩薯を常食にしてゐたんですが、この頃はお米を食べるやうになりました。あの島の人達もねえ。

夫人。……

マッサージの男。小遣ひだけは女房が自分で稼いでとります。裁縫をしたり、手紙の代筆をやつたりしてゐます。それから天ぷらもやります。

夫人。天ぷら？　（急に可笑しくなつたやうに、肩を震はして笑ふ。）

マッサーヂの男。あなたは笑つてゐなさるんですね。何が可笑しいんです。女つてもんはよく譯の解らない時に馬鹿笑ひをするもんだ。

夫人。あら、怒つてるの、何か？

マッサージの男。想ひ出した。

夫人。（振返つて男の顔を見る。）あら、泣いてるのね。

マッサーヂの男。私は炭燒きを習つて、あすこで一旗擧げようと思つてたんですが、私は何をしても駄目なやうに出來てるんです。私は村の若い者達を集めて、源太節を敎へてやりました。女房は出稼ぎの漁夫を相手に、露店の天ぷら店をやつてました。

夫人。あら、又天ぷら？　(又笑ひこける。)

マッサーヂの男。天ぷらが可笑しかつたんですか。やつと安心しました。人間と云ふものは、自分が笑はれてゐる原因が解らないと、不安なもんでしてな。女房と別れた時もさうでした。私はいよいよ長男だけ連れて、東京へ出て一稼ぎやらうと決心しました。船が出る前でした。私は女房の所へその事を打ち明けに行つたんです。女房は丁度、天ぷらを、……笑はないで下さいね。……

夫人。もう大丈夫よ。段々悲しくなつて來たわ、その話。

マッサーヂの男。女房は默つて聞いてゐました。そのうちに、眼から大粒の涙がぽたりと落ちました。それが、丁度天ぷらを揚げてゐる油の中に落ちるのです。するとその涙の玉がまるで水すましか何かのやうに、ちよこちよことお鍋の中を走り廻るのです。ぽたり、ぽたり、又さうするんです。二粒、三粒、……突然女房が大聲を擧げて笑ひ出したんです。丁度さつきの奥さんみたいに。

夫人。まあ！

マッサーヂの男。何が可笑しかつたんでせうかね。私しや、あの時急いでゐたもんで、とつくり考へて見る閑暇もありませんでしたが、……

夫人。さあね。

右手の扉から女中が顔を出す。

女中。あの、……

夫人。（そのまゝ）何んだい？

女中。志村さんがお見えになりましたが、……

夫人。さうかい。

女中。……

夫人。こゝへお通ししたらいいだらう。かまはないから。

女中。はい。

女中去る。

夫人。（獨り言のやうに。）私は純情で泣いたつて事はないわ。その代り、自分で感情を誇張すれば、いつだつて勝手な時に涙が溢せるわ。いつだつたか私、寝臺の中で、前に綺麗な西洋人が乘つてゐたの。無論男よ。その時、……

扉(ドア)が開いて廿五六の青年が入つて來る。輕快なスポーツ・スーツを着て、髪の毛を綺麗に撫でつけてゐる。

志村。奥さん、今日は。

夫人。あゝ、ゐらつしやい。

志村。（煖爐の上の置時計を見て。）おや／＼、二時六分ですか、今？　僕は箱根からドライブして來たんですが、出たのが二時でしたから、して見ると箱根からこゝまで、わずか六分で來た譯だ。こいつア世界的記錄(レコード)だ。

夫人。正確な時が知りたかつたら、置時計なんか見たつて駄目よ。お客を通す部屋の時計は止めて置くのが禮儀なのよ。二時六分過ぎなんて、いゝ時間ぢやないの。當り觸りの無い、人に落着きを與へる時間だわ。尤も嫌やな客が來る時は、わざと進めて置いて、遠慮なく時を打たしてやる事もあるのよ。あなたなんか時計が止つてる口だから歡迎されてる方のお客なのよ。

志村。光榮ですよ、奥さん。

夫人。眞理が知り度かつたら、自分のして來た事を振り返つて見るより他に、何んにもありやしないわ。人間は自分でした事は自分には隱せないでせう。

志村。太陽を見るんですよ。眞理は太陽の如く世を照らすつて云ふぢやありませんか。

夫人。太陽なんか嘘の塊りですわ。自分は動かない癖に、地球の廻りを動いてゐるやうな顏をして。あれは錯覺の標本よ。

志村。(正面窓の所へ行つて外を見てゐる。)こゝから見ると港が一眼ですね。いろんな國の船が澤山浮いてゐる。僕はああやつて、港の船が、それ〴〵思ひ〳〵の方向を向いて、停泊してゐるのを見るのが好きですよ。錯覺の標本があんなに赤く輝いてゐます。大きな船だな、あすこの岩壁に着いてる奴。

夫人。私は眞理だとか原始的だとか單純だとか素朴だとか、そんなものは嫌ひなの。つくりもの、嘘、氣取り、衒ひ、さう云つたものが好きなのよ。あすこにある油繪だつて、……

志村。(煖爐の上の壁に懸かつてゐる額を見る。)これは何んです。嫌やに赤いぢやありませんか。葡萄も梨もみんな、……

夫人。赤い電燈に照らされた靜物つて云ふの、その題は。新奇な企ての中から、段々新しい美をふるひ殘して行かうとする、年の若い畫家が描いたのよ。わざつとらしくて面白いぢやないの。あなたなんかどこか氣障な所があつて、それによく嘘をつくし、……

志村。それで面白いて仰言り度いんですか。
夫人。ほら、そんな風に拔目がなく、直ぐお先廻りをしたりして、……人間てもんは、殊に東洋人は、うつちやつてゐればひとりでに、俳味つて云ふのかしら、さびつて云ふのかしら、もの靜かな、素朴な、澄み切つた心境に落ちて行つて了ひ度がるものなのよ。あゝ云ふの、そりや、個人の完成にはなるかも知れないけど、文化の進歩には關係がないわ。あれは一種の逃避ね。それとも偉いのかしら。
志村。偉いのかも知れませんよ。
夫人。あなたは默つてらつしやい。
志村。はい。(さう云ひ乍ら、油繪を見乍ら、その側へ寄つて行く。)
夫人。だから、私は、ものをそつとして置き度いやうな人を見ると、わざつと側へ行つて攪き廻してやるの。私は、人間の隱遁性と鬪つてやるの。
志村。あゝ、いゝ風が吹き込んで來る。煖爐つて、夏もこんな役に立つもんだとはまるで知らなかつた。人間もかう云ふ工合に、何んにでも役立つやうでないと成功しませんね。あなたの御主人みたいに。
夫人。そのうちに、煉瓦が崩れて、火も燃えなければ、凉しい風も吹き込まなくなつて了ひますわ。
志村。えゝ?
夫人。私はちやんと知つてるの。覺悟をしてゐるの。さうしたら敵を取つてやらうと思つてゐるの。
志村。敵ですつて?
夫人。いゝのよ。これは夫婦の間の問題なの。だけど、……又これは眞理の話になるんだけど、この世の中では、さうね、そんなに大きく考へなくつたつて、夫婦の間でもいゝわ。經濟的能力を持つてゐる者が勝手な眞似をしてもいゝ事

に、さうなつてるのかしら。あなた、この頃どんな本を讀んで？
志村。僕ですか。さあ、……
夫人。讀まないの？
村志。いゝえ。
夫人。ぢや、……？
志村。最近讀んだのは、『趣味の鮎釣り』つて云ふんです。尤もあいつ、釣る針の種類が何百程だかあつて、五郎だとか正宗だとかつて、その日のちよつとした曇り工合、流れの工合で一々それを變へるんですから、いくら本なんか讀んだつて駄目ですよ。やつぱり實際にやつて見なくつちや。
夫人。そこに氣がつけば偉いわ、あなたも。
志村。（そこの煖爐の所に凭りかゝつて、夫人の方を見てゐる。）

暫く間。

志村。奥さんは南米のウルグワイつて國を知つてますか。
夫人。いゝえ。どうしてゞす？
志村。別にどうもしませんが、かうやつてこの部屋の趣味と、奥さんの容姿を見てゐて、それからそこにゐる按摩さん、……
夫人。按摩さんぢやないわよ。マツサーヂよ。

志村。えゝ。そのマッサーヂの、……
夫人。どうしたの。かまはないのよ。この人耳が聞えないんだから。
志村。ぢや、私が奥さんを愛してゐると云つてもかまひませんか。大きな聲で。
夫人。えゝ、この人に就いてはかまひませんわ。それでウルグヷイはどうしたの。
志村。いえ、ただ、その國のモンテヴイデオの沖合ひに、東京の對蹠點があるつて事を想ひ出したんです。
夫人。まあ！　この人を見て？
志村。ええ、まあさうです。
マッサーヂの男。はあ？
夫人。有難う。頭がすうつとしたわ。
マッサーヂの男。長男は工手學校に入つて居ります。小さい時から、發明する事が好きで、今はあの、蝙蝠傘の雨滴を止めるもんを研究して居ります。うまく行つたら新案特許を、……
夫人。もういいのよ。
マッサーヂの男。はあ。(肩を揉むのを止める。下に下りる。)
夫人。どうも有難う。(手を打つ。)

女中が出て來る。

夫人。呼んだよ。

女中。(そのまま、マツサーヂの男を案内して出ようとする。)
夫人。あの、手拭持つて來ておくれ。
女中。はい。
夫人。つめたい水で固く絞つて來るんだよ。
女中。かしこまりました。
マツサーヂの男。では失禮致します。

兩人出て行く。

志村。(おどけて、)や、失敬。御長男の發明の日を心から期待してゐますよ。
夫人。お止しなさいよ。下らない。第一聞えもしないのに、徒勞ぢやないの。
志村。僕達、徒勞だからつて云つてしないでゐたら、何んにもする事なんかありやしませんよ。
夫人。皆さん御元氣？
志村。ええ。箱根の蚊は嘘ばかりと見えますね。僕はちつとも刺されなかつた。妹の奴、右の小指を怪我してね。
夫人。どうしたんです？
志村。起きる拍子に葦の葉をひつぱつたんでせう、きつと。どつかの叢の中で。
夫人。まあ、そんな話をすると、私も聾の眞似をしますよ。

女中が手拭を持つて入つて來る。

夫人。旦那樣はまだ應接間かい？

女中。はい。

志村。誰なんです、お客は？

夫人。又整理委員とか何んとか云ふ連中でせう。

女中去る。

志村。(窓の方へ行く。) 塀の下の道を、外國人が歩いてゐますよ。おやおや變だぞ、立止まつて、しきりにこつちを見てますよ。

夫人。身長(せい)のそんなに高くない人でせう。

志村。ええ。

夫人。東京へ行く時、時々省線の中で一緒になるのよ。この間あんまり退屈だつたもんて、ちよつと眼でからかつてやつたの。

志村。そんな罪な事をするからいけないんです。實際あなた位芯が固くて、廻りの柔らかさうに見える人はありませんよ。あんまりよく知らない人は、あなたのその自由主義らしい明るい態度に尊敬と希望をつなぐし、よく知つてる人は、これは又まるで淸敎徒的なあなたの志操に尊敬を拂ふし、……

夫人。それ皮肉？

志村。皮肉ぢやありませんよ。

夫人。まだ見てて？

志村。何がです。

夫人。西洋人よ。

志村。ええ。あら、何んだか踵でくるくる廻つてゐますよ。口笛なんか吹いてら。………あなたと來たら、實際、男の人に誘惑したい欲望を起させるやうに誘惑するんだから。

夫人。ほんとに外國人なんて、日本の女さへ見れば、みんなあゝ云ふ種類の女だと思ふのね。巴里ぢやあるまいし、こんな堂々たる邸宅に住まつてゐる椿姫なんかゐるもんですか。大概見當つけたらよかりさうなものですわ。

そこへ夫が入つて來る。小柄な精力的な顔をした四十五六の男。

夫。(何か心配事があるやうに、深く考へ込み乍ら入つて來たが、妻の姿を見ると、急に陽氣な顔をして。)やれやれ、これで又離婚訴訟の理由が一つ增えたぞ。

夫人。(つめたく。)何よ。

夫。(ポケツトから手帳を出して、書きつける眞似をする。)ハクチユウ、ワカキツバメヲ、と、オノレノヘヤニヒキイレ、テウテウナンナンシタリ、と。

夫人。そんなにふざけてゐられるのは、あなたが私をみくびつてゐるからよ。何千年と云ふ長い人類の歷史を通じて、男

性はその支配權を支持する爲めに、あらゆる機會で私達女性を壓迫し、精神的にも肉體的にも、自由な發達を妨げて來たのよ。女性が偉くなるあらゆる機會を丹念に摘み取つて來たのよ。

夫。やれやれ、向うの部屋の一つの爭ひを逃れて來たら、又ここにも別な爭ひが待ち受けてゐようとはねえ。

夫人。さうやつて、いつも女性を劣等な地位に置いといて、男は常に勝手な眞似をして來たのよ。お妾を置いたり、藝妓遊びをしたり。……男の作つた法律はそれに對してどう云ふ制裁を設けてゐるの？

夫。男子一度家を出づれば七人の敵ありつて云ふが、これぢや、一度家に入れば必ず一人の敵ありと云ふ事になる。ユーディットを抱いて、同じ天幕の下に入るやうなもんだ。ツネニセイメイノキケンヲカンズ。こいつも附けとくよ、ついでに。(手帳を示す。)

夫人。(振向かずに、)さうしてこの不合理な差別に對して、あなたはいつも、たつた一つの切り札しか持つてやしない。

夫。二つのものが同時に存在し得るなどと云ふ事は、あれはほんの一時の方便主義だよ。どつちかが、相手を倒して了ふだけのはつきりした力がない時の、休戰の旗のやうなもんだ。勞資協調とか國際聯盟とか男女同權とか、みんな都合のいい騙かしだ。勝つか負けるか、わしはどこ迄も戰つてやるんだ。家の中でも家の外でも。西洋の諺にも云ふぢやないか。『二つのネクタイは一度にはかけられぬ』つて。利害は常にシーソーのやうなもんだ。

夫人。さうはつきりしてゐれば、もう伺ふ事はありませんわ。

夫。まあいいさ。さう理窟張らなくつたつて。

夫人。ほらほらそれが手なのよ。私が利巧にならうとすると、直ぐさうやつて、……

夫。何もそんなに一々つつかかつて來ないだつていいぢやないか。わしは少し頭の中でいらいらしてゐる事があるんだから。

夫人。ええ。解つてますわ。あなたが、あんな風におどけた事を云つたり、わざと陽氣にはしやいだりする時は、いつでもきつと、何か嫌やな苦しい事が頭の中におありの時ですもの。どうせ私なんか伺つたつて何んの助けにもなりはしませんから、訊きませんわ。それにあなたは又徒勞な事は一切なさらないんだから、どうせ訊いたつて仰言りはしないでせう。

夫。もういいよ。

夫人。でも、……

夫。でも。何んだい？

夫人。私も、もう大概の事は覺悟してゐますのよ。あなたが今そこで、もう明日からは十圓の金も自由にはならないんだつて、さう仰言つたつて、私、びつくりなんかしやしませんわ。

そこへ女中が入つて來る。

夫。（救はれたやうに、ほつとして、窓の方へ歩いて行く。）

女中。あの、高坂さんの奥さんがお見えですが。

夫。高坂？

女中。はい。

夫。さうか。會ひ度くないな、どうも。

夫人。どなたですの？

夫。この間首にした社員の細君なんだよ。……お前會つてくれんか？

夫人。嫌やですわ。私が會つたんぢや、その女來た甲斐がないでせう。それに私、人の卑屈な態度を見るのが辛いですわ。

夫。さうか。ぢや。ちよつと應接間の方へ通して置いておくれ。直ぐ行くから。

女中。はい。

女中去る。

夫人。私達ちよつと出て來ない？

志村。……？

夫人。どう？

志村。ええ。でも、……

夫人。でも何よ？

志村。もう晩かありませんか。

夫人。大丈夫よ。自動車持つて來てるんでせう？

志村。ええ。

夫人。ね？

志村。ええ。

夫人。まあ、ぢれつたい。はつきりなさいよ。まるで踏切で貨物列車を待つてるやうだわ。どうなのよ？

夫。志村君、遠慮しなくつたつていいよ。一緒に連れてつてやつてくれ給へ。

志村。ええ。

夫人。私ちよつと羽織を引つかけて行くから、こつちの部屋へ來てよ。

志村。ええ。ぢや。(主人に挨拶する。)

夫。やあ。

夫人と志村去る。

夫。(そこの椅子に腰を下す。ぼんやりとそのまま、何か考へこんで了ふ。)

暫く間。

やがてかすかに自動車の爆音が聞える。

夫。(はつとしたやうに立上る。)

——幕——

第二幕

第一幕と同じ部屋。

夜。電燈がともつてゐる。

主人ともう一人洋服を着た男と話をしてゐる。

夫。兎に角、最後の手段として、もうこれより他には無い。わしはもう名前とか體面とか云ふ事は云つてゐられなくなつたからね。

男。はあ。

夫。あの男が、うんと云つてくれさへすれば、わしはいつでも合併するつもりだ。

男。無論小池氏は承諾されるんでせうな。

夫。それが、工場と機械と會社の建物だけならいつでも引受けると云ふんだが、人が附いて行くので、二の足を踏んでゐるらしい。何しろこの間中（うち）からのうちの爭議は性（たち）があんまりよくないからね。

男。それで話はどう進んでゐるんですか？

夫。今頃、盛んに交渉を進めてゐる筈だ。晩（おそ）くも十一時頃迄には、何んとか電話が來る事になつてゐる。

男。今は何時（なんじ）頃でせうか。

夫。ええと。（眼を細くして、煖爐の上の時計を見る。）

男。あれは駄目ですよ。今二時六分過ぎです。

夫。十時頃ぢやないかね。

男。それぢやぼつぼつお暇（いとま）致しませうかね。

夫。さうかい。

男。明朝又早くお伺ひします。

夫。ぢや。

男。さようなら。

男、お辭儀をし乍ら、歸つて行く。

夫。（ひとりでぼんやりと又考へこんでゐる。獨言のやうに。）ほんとに何時頃かしら。………あいつ。

自動車の爆音がかすかに聞えて來る。

夫。（聞き耳を立ててゐる。）

志村が一人で入つて來る。

志村。奥さんはまだですか？

夫。どうも歸り道を忘れて了つたらしい。

志村。可笑しいなあ。

夫。まあ、いいから、そこへ腰かけ給へ。

志村。ええ。

夫。どうしましたね？

志村。僕にはもう責任は持てません。

夫。誰だつて、他人の事に就いちや責任なんか持てるもんぢやありませんよ。自分の責任だつて中々持てないんだから。どうです、一本？(煙草のケースを差し出す。)

志村。ええ、有難う。(一本とる。)

夫。さつきのお伽噺の續きをしてくれませんか。

志村。お伽噺？

夫。ええ、頭が少しくさくさしてるんだから。

志村。お伽噺つて、何んでしたつけしら。

夫。君も暢氣だなあ。ほら、美しい奥さんと美しい青年が、車に乘つて出掛ける所迄さ。

志村。あゝさう。それだつたら、僕、とても先を續ける勇氣ないんです。

夫。どうしてです？

志村。まるで筋がないんです。

夫。却つて面白いぢやありませんか。ね、話してくれ給へ。

志村。ええ。

夫。(鋭く、)話し給へ。

志村。あれから門を出て塀に沿つて、坂の方へ下りようとすると、さつきの西洋人がひよつこり出て來たんです。

夫。さつきの西洋人？

志村。あゝ、あなたは知らなかつたんですね。變な西洋人が家の前をうろうろしてたんですよ。あの前から。

夫。へえ？……それで？

志村。すると奥さんが、いきなり、ハロウつて呼びかけたんです。奥さん英語うまいですね。

夫。さうですか。

志村。そいつ、とても圖々しい奴で、どんどん自動車に乘つてくるんです。奥さん止めりやいいのに、却つて、隣りへ席をつくつてやつたりするんですから。

夫。成程ね。

志村。それから、そいつの案内で、方々の酒場（バー）だのダンス・ホールだの飲み歩いたんです。そいつ、僕のこと運轉手（シヨウフアー）と間違へて、おい君。右だ、なんて指圖するんです。僕は癪に觸つたから、小鏡の中で舌を出したり、顔を顰（しか）めたりなんかしてやりました。奥さんと丁度鏡の中に顔が合ふので、そのたんびに、奥さんも舌を出したりしました。

夫。……

志村。そのうちに美しい青年はいつの間にか仲間外れにされて了ひました。うまく撒（ま）かれちまつたんです。僕は方々散々探して見ましたが、どうしても見つからないんです。もう先に歸つてらつしやりやしないかと思つて、それで來て見たんですが。

夫。向うでもきつと君を探してませうよ。

志村。そんな事はありませんよ。わざつと僕を撒いたんだから。

夫。一旦撒きはしたものの、先に歸られても困ると思つてね。

扉の外で音がする。

志村。あ、歸られたらしいですね、奥さん●

夫。君ちよつとそこの長椅子の後ろにかくれてゐてくれ給へ●

志村。何故です。

夫。おどかしてやるんだ。……………早く。

志村。(云はれた通りにかくれる。)

扉が開いて、夫人が入つて來る。

夫。お歸り。

夫人。只今。(そこの長椅子に腰を下す。)

夫。どこへ行つてたんだい。

夫人。志村の自動車で、ずうつとドライブして來たの。今、あすこの坂の下でお別れして來たのよ。

夫。へえ?

夫人。(敏感に感づいてて、部屋を見廻はす。)

夫。頰紅がつき過ぎてるよ。

夫人。そんな皮肉仰言らなくつてもよござんすよ。これは　お、さ、け。

夫。お前は何故嘘を吐いたんだ。

夫人。嘘吐かれるとどんな氣持だか、教育して上げたのよ。

夫。馬鹿。そんな暢氣（のんき）な事云つてる場合ぢやないんだ。

夫人。私だつてちつとも暢氣ぢやありませんわ。私今日、素晴しい發見をしたのよ。

夫。何んだ？

夫人。私の嫌ひな眞理を發見したの。

夫。だから、何（な）、…………

夫人。（かぶせるやうに、）手帳へ書きつけときなさい。ツマハツギノゴトキシンリヲハツケンセリ。よくつて？イワク、「サイゴニケイザイテキノーリヨクヲユウスルモノワ、ヲトコニアラズ。ヲンナナリ。」つて。

夫。何んだ！（いきなり立上る。）

その時、扉が開いて女中が顏を出す。

女中。あの東京から御電話でございます。

女中そのまま引込む。

夫。（暫くぢいつと妻の顔を凝視してゐたが、いきなり、扉の方へ馳け出す。）

そのまま夫は出て行つて了ふ。

夫人。（夫の背中へ大聲に笑ひかける。）たうとう勝つてやつた。………勝つてやつた。私達は千年の間も我慢して來てやつたんだわ。（そのうちに急に淋しさがこみ上げて來る。肩が震へる。嗚咽の中に。）でも、………でも、やつぱり負けたんだわ。男に、………男に、………（彼女は帶の間からコムパクトを取り出し、顔を直す。コムパクトが手から滑り落ちる。拾はうとすると、その鏡にかくれてゐる志村の姿がうつる。鏡を拾つて立上る。後ろを振返つて、靜かに呼ぶ。）志村さん。

志村。（仕方なく出て來る。）

夫人。ここへ來て、私の顔を見て頂戴。これは嘘の涙だか、ほんとの涙だか。

志村。…………

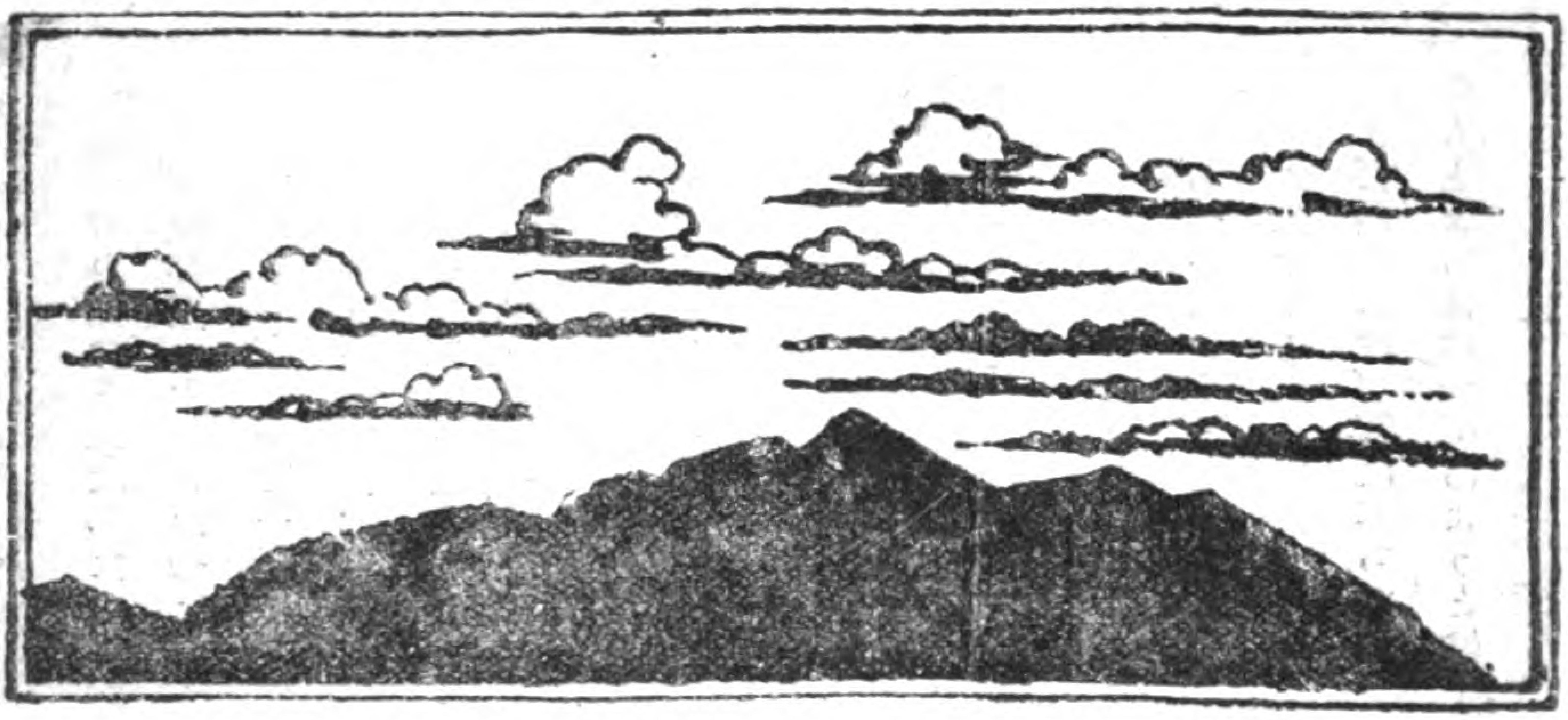
夫人。自分にも解らなくなつて了つたの。

扉が靜かに開いて、夫が蒼い顔をして、靜かに入つて來る。

夫と妻は、もう何んの感情もないやうに、ただぼんやりと顔を見合せてゐる。

——幕——

（一九三〇・七・九）



餘燼

未定稿「安城家の兄弟」の一部
「善魔」「不動」「大地」「隧道」の續篇

里見弴

一

「御飯、あがつていらしつて？」

うちからほど近い街角の、ポストのそばを歩み出た瑛龍のおこうは、こんばんは、の挨拶もなしに、いきなりかうだつた。

事件なかばに逢つて、相談しようといふ氣などさら／＼なかつたが、ひと片づき片づいたところで、第一に、一伍一什の話をして聞かせたいのは、なんと云つても矢つ張りおこうだつたので、至急に是非逢ひたい、との手紙を俥夫に持たせてやると、その返事に、八時に、番町小學校の表門の角で待つてゐる、とあつた、――無論、夜を徹しておしげを追求し、翌日の夕方に及んだ、その同じ晩のことで。

「え？」

はつきり聞きとれはしたのだが、あまり突飛な質問に、思はず昌造は訊き返した。

「もう晩御飯おすみゝなつたの？」

まだなら、どこかで一緒に食べようと誘ひかねない風の、平靜な調子を、昌造は心私に、そんな暢氣な場合ぢアないんだ、と、やゝ不機嫌に、肩を並べて、土手三番町の方へ歩きだしながら、

「いま食べて來たところだけど‥‥」

「奥さんも御一緒？」

「うん」

「あゝ、さう‥‥」

この「あゝ、さう」には、急に盛り溢れるほどの感情が罩つて、ほつとひと息、安堵の溜息を洩した。

「どうして‥‥？」

急き込んで、今度は昌造の方から訊き返した。

「あ、さう」

もう一度、深い息と共にそれを繰り返して、「さう！　奥さんがお宅にいらつしやるんなら‥‥。よかつた！　それで少し落ちついたわ！」

「どうして‥‥？」

まだ昌造には、腑に落ちなかつた。——三日前に健吉から聞かされたばかりの、寢耳に水のこの事件が、早くもおこうのもとまで傳はつてるようとは‥‥？

「どうしてつて……。なんか大へんなことが起つたんぢアない？」

「さう！　だけど、どうして、あんたがそれを……」

「それア知つてるわ」

「どうして？」

「ずうッと先から、しよッちうあたし云つてたぢアありませんか、——旅行するのおよしなさいとか、成可くお宅にいらつしやるやうになさいとかつて……」

「ぢア、そんなに前から知つてたの？」

「知つてたつて云つちアなんだけれど、大抵わかつてたわ。満津島のおやぢさんだつて、うちイ來てそんなこと云つてたこともあるし……」

「ふーん、さうですかねえ」

見榮も外聞もなく、昌造は、ひたすら感嘆するばかりだつた。——我ながら、底ぬけの頓馬さ加減に、却つていとほしむやうな好意が感じられて、昨日まで「町内に知らぬは亭主ばかりなり」からうけた激烈な毒氣も、今はもうさほどにこたえなくなつて了つた。自分の間抜けに業を煮やし、狭い胸いつぱいに、自己嫌悪の墨汁をぶちまけて悶え苦しますにすんだのも、年齢のせいか、云ふに足りないながらも、いくらかの修養のおかげか、兎にも角にも、昌造はそれを有難いことに思つた。

「あんたは、まるッきり思ひもつかなかつた？」

「聞いたあとでは、あれもこれもと、思ひあたることだらけだつたけれど……」

「さうお。誰からお聞きなすつたの？」

「健ちやんが、一昨々日のこつたよ、少し話したいことがあるからつて……」

「あ、さう。あたしもねえ、云つても悪いし、云はないでゐても、と思つてねえ、ずゐぶん一人で心配してたんですけど……。そいで、どうなつたんです」

「大體まア、何事もなく片がついたわけですから、安心してください」

「さう！　それアよかつたわねえ。あたしね、先刻のお手紙を見たとき、ドッきんとしちやつたの、――いよ〳〵これア大へんなことが起つたと思つて。そいでも、お宅で、奥さんと御一緒に御飯をあがつていらつしつたつてこと伺つて、そんならまア、と思つて、ひと安心したんですけど……」

「飯食つたか、飯食つたかつて、一體なに云つてるのかと思つた……」

「でもね、それを伺へば、大體の様子は知れると思つたから……」

「ふーん。さうですかねえ」

内心、好感はもてたとしても、思へば思ふほど、自分でも不思議なくらゐな間抜さ加減に、もう一度嘆聲を洩したが、然し、それを「なんて俺はぼんやりなんだらう」といふ風な言葉にしては、矢つ張り口からそとへ出しにくい氣持だつた。

――負惜み、といふほどのものはあつた。

それから、おこうに訊かれるまゝに、この三日間の事の次第を、昌造一流の、娓いほどの細さで話しつゞけるうちに、人通りの少ない土手添ひの道を、牛込の停車場近くまで來て了つたので、右に、靖國神社の裏手へあがり、もとの馬場をぬけて、今度は、濠ばたを半藏門の方へと足を向けた。四月上旬の朧月夜で、どこまで行つても變らない話題と、およそ不調和な、とろりと澱んだやうな大氣の濃艶さだつた。

ひと通り聞き終つてから、おこうはやゝ殉情的に、

「でも、ほんとによかつたわね。もしこのことで、奥さんがどつかへ行つてお了ひなさるとかなんとか、そんな騒ぎでも起つて來たとしたら、あたし、ほんとに誰にもわからないやうな山ンなかかどこつかへとんでつちまはうと思つて、それだけはちやァんと決心をつけてゐたんですのよ」

「どうしてさ」

「だつて、それァさうですわ。もとの起りはと云へば、みんなあたしから出てることなんですもの」

「つまり、おしげの、あなたに對する嫉妬とか反感とかいふやうなもんが、この事件の根本だつて云ふんでせう？」

「自惚、……とも云へないかも知れないけど、あたし、それァさうだらうと思ふわ。つまり、……仇討よ」

「無論それァ、その氣持のあつたことは、自分でも云つてたけど、さうかつてまた、さういふ意思の力だけで、無理にしようつて出來ることでもないんだから……。今度のことで、つくぐ〵あたしさう思つたんだけど、よく女のヴァニティとかなんとか云つて、虛榮心の強さにかけちァ、とても男はそばにも寄りつけないやうに云はれてるが、存外さうでもないつて氣がしたんだ。て云ふのは、同じ好きになるんなら、もうちつとどうにかした相手だつたら、と思つて、それがずゐぶん口惜しい、……つてほどでないまでも、可なり氣ンなつちやつたんだ。相手が、あたしが考へても、あたし以上の人物だつた場合を想像すれば、無論あたしのぺしやんこにされる度合はそれだけ烈しいわけなんだけれど、それでもなんでも、相手の立優つてゐることの方が望ましい。成程、あれなら無理はない、とひとから思はれることは、いよ〵もつて自分の面目玉が丸潰れになるわけなんだが、そんならまだしも我慢が出來て、へえ、あんな男をねえ、と云はれるんでは、とてもやりきれないといふ氣持なんぞ、考へてみれば、男のヴァニティつてものも、どうしてなか〵念の入つたもんだと思つて、自分ながら少し呆れちやつた。……無論、然し、そんなことは、二の次、三の次の問題で、大して氣にしたわけぢァないけれど……」

「それァさうでせうね。なんてつたつて、それァ男の人が、女の人よりえらいことはわかりきつてるんだから、……女のもつてるくらゐの感情なら、表に出す出さないは別として、なんだつて餘分にもつてなきやァならない筈なんだから……」

「そいから、もう一つはですね、あたしも、よくあんたやお民さんに、のめ〳〵學校の校長さんとかなんとか云はれたりして、……自分でも、ちつとやそつとのことでは動じないつもりでゐたんだけれど、今度といふ今度は、だいぶ動じましたね。」健ちやんから、初めてその話を聞かされた時は、まだ大出來だつたんだけれど、その晩、何もかも覺えがないほど醉つぱらつちやつたのを手初めに、昨夜あたりは、動じるなんてところは通り越して、殆ど取り亂したと云つてもいゝくらゐだつたが、實際、心の鍛錬つてことはむづかしいんだなァ。五尺の小身みなこれ膽、といふ言葉は、ずゐぶん好きなんだけれど、あたしみたいに、小心翼々に生れついてる人間には、一生勉強し通したところで、とてもとてもだと思つて、情なくなつちやつた」

「さうかしら。あたしはまた、ずゐぶん落ちついて、うまく、……つてのもへんだけれど、……それで何事も起らずにすんだんだと思ひますけどね……」

「一昨日の晩、二人を前に置いて、話をもち出した時には、豫め段取りをつけて置いたわけでもなんでもないんだけれど、わりに理路整然と、一つ一つ片ッぱしから片をつけて行つて、……あれで、彼方が、はき〳〵すぐ返事をしてくれさへしたら、正味二時間たらずで解決がついて了つたらうと思ふくらゐなんだけど、……それはまァ、わりにうまくいつたんだけど、それでゐて、どうもなんとなくまだ氣持が、天空開豁に、からッと晴れ亙つてくれないんだ。これには、なんかそれだけの理由がなくつちァならない筈だと思ふんだけれど、どうもまだそれが、自分でもはつきりわからないんだ」

「それァ仕方がないわ。一段落片がついたとは云ふじやう、まだすつかり腑に落ちきれないところがあるなんて云つてらつしやるくらゐなんだし、もしあたしがあなただつたら、これからさきが、なほのこと心配でたまるまいと思ふわ」

「どうして？」

「どうしてつてこともないけど、……女なら誰だつてさうだらうと思ふわ。男のなかでも、あなたなんぞまた特別よ」

「特別どうだつて云ふのさ」

「特別、……さうね、なんてつたらいゝんでせう、つまり、邪推したり、ひとを疑ぐつたり、さういふ可厭な氣持がまるでないのね」

「さう云ふと大へん立派だけれど、つまりは間抜で、なんにも氣がつかないのさ」

「いゝわ、その方がどのくらゐいゝか知れやァしないわ」

「それァ、正直な話、自分でも、内々ちよつと氣に入つてはゐるんだけど……」

いつか昌造の氣持は、すつかり明るみへ出てゐた。つい四五時間前まで、徹夜から引き續きに、飲まず食はずで、ねち〱と妻を責め苛んだ男とは、けろりと生れ更つたほどのほがらかさに浮びあがつてゐた。

「でも、ほんとによかつたわねえ」

繰り返せば繰り返すほど、この言葉は、おこうの胸に、穩かな喜びを滲み亙らせるか、實感の度は增すばかりだつた。

「然し、どんなに事件が惡い方へ傾いて行つたにしたところで、何もあなたが、誰にも知れない山ン中なんぞにはいつちまうことはないぢァありませんか。それァ、無論あなたの立場として、苦しいことはわかりきつてゐるけれど、苦しければ苦しいだけ、なほのこと踏みとゞまるのがほんとうぢァないかと思ふな。その勇氣を、もう一歩すゝめて行けば、この話を、第一にあたしの耳へ入れてくれたのがあなただつたとしても、敢て不思議はない、……どころか、最も然るべきだと思ふくらゐなんだが……」

「でも、それァ無理よ」

「無理……」

ッてことはない、と云ひかけた口を噤んで、……だね、まア。無理と云へば無理だが、然し、もう少しあなたが積極的な人なら、勢そこへ出て來るべきだつたらうと思ふのさ」

「さうしたら、だけど、結果は、きつと、こんな風にすらッとはいかなかつたでせうよ」

「それアさうだ。健ちやんでさへ、いゝ加減恨まれてたくらゐだから、もしあなただつたら、すつかりおしげをひねくれさせちまつて、事は面倒になつたかも知れない」

「鬼に角、あたしといふものは、誰が考へたつて、まつたく餘計もんなんですからね」

「さう。一夫一婦の家族制度からみれば、まつたくそれに違ひないんだけれど、あたしといふ一箇人から云はせるとなると、決してさうぢアないんだからね……」

「でも、あなたに、ちやんとした奥さんがあつたり、大勢子供さんたちがあつたりするつてことは、つまりあなたが、その家族制度とかつてものを、立派に認めてなさることになるんでせうから、さうとすれば……」

「自分に都合のいゝ時だけ、それから自由にならうつてのは蟲がよすぎる、つて云ふんでせう？」

「えゝ、さうよ」

「それは、……それくらゐなことは、誰だつてみんな知つてるんだけれど、一體、制度なんていふ、誰かの考へで出來た規則は、一般的には都合がよくつても、個人的にはひどく不自由な場合のあるもんだつてことも、初ッからわかりきつた話で、たゞ一般の都合を重く看る人たちが、自分の感情は犠牲に供しても、それを守り通さうとするし、個人の自由のためには、一般の都合なんぞどうだつて構はないつていふやうな質の人間なら、容赦なくそんな掟ぐらゐぶち破つて了ふといふだけのことで、どつちにどう轉んだにしろ、大した問題ぢァありませんよ」

「あら、さうかしら」

「無論、だから、一般の御都合を重く看る人たちにとつちァ大した問題でせうよ。あたしが大した問題ぢァないと云ふのは、つまりあたしが、たかゞ人間のきめた死んだ規則で、生きてる人間が縛られるのは馬鹿々々しいつて氣があるからで、一般的に通用しなくつたつて、どうもそれァ仕方がないんだ」

こゝまで喋つて來て、昌造は、一昨日の晩、千葉とおしげとの前にもち出した自分の論理に、この一般の御都合を身方に引きずりこんでゐる點はなかつたらうか、と反省してみた。無論、家族制度とか、法律上の姦通罪とか、さういふ人爲的な掟をたよりに、ひと言でも口を利いた覺えはなかつた。徹頭徹尾、「合理的な、健全な解決」を望んで、公平に、平等に、理路整然、正々堂々と押し進んで行つたのだ。かういふ事情のもとでは、三人が三人悉く幸福であり得よう筈はないが、少くとも合理的に、――誰もへまなまね、馬鹿げたまねをしないですむやうに、三人よつて、なんとかうまい解決を得ようではないか、――かう提案したのだ。二人の、石ころのやうに頑固な緘默に會つて、結局昌造ひとりで事を決して了つた態にはなつたけれど、それにしても、話を進めるには、一々相手の返事、――口はあかないでも、頷くなりなんなり、必ず承認、肯定を待つてしてゐる。自分の都合次第で、無理往生に捩じ伏せるやうなまねは一つもしてゐない、と思はれた。そしてまたその反省に依怙はなかつたけれど、而も昌造は、なんとなく氣持の冴々しないものをそこに感じながら、はつきりその理由の摑めないのが、齒痒く、もどかしかつた……。

「然し、結局それァ、我儘は我儘なんだ。あなたの云ふとほり、普段は、すまし込んで、家族制度の一般的利益に浴してゐるんだから……」

口に出してさう云つてみたが、まだそれだけでは足りない氣がした。足りないではない、我儘などは、いま始つたことではなく、百も承知の持前で、敢てそれを不徳とも感じないばかりか、内々長所とすら思つてゐるくらゐなのだ。

「我儘は、だけど、あたしたちとしちア、どうも仕方がないな」

で、續けてから云つた。

「えゝ、それア我儘にもいろ〳〵あるけど、それが通せる人は、矢つ張りどこかえらいんでせうね」

「さう云はれても困るが……」

「いゝえ、えらいと思ふわ。大抵の人は、いくら自分がしたいことでも、とても出來ッこないと思つて、頭ッから諦めちやつてるのに、どんな我儘でも、無理やり押し通しちまうなんて……」

「普通意思が強いつて云ふ、あれとは違ふ、また一種の別の強さかも知れないな」

「さうよ、つまり押しが強いのよ」

だん〳〵昌造には、一昨日の晩の自分のもちたし方が、氣持で、からッと晴れ亙らない理由がわかりかけて來た。……「合理的」「健全」「公平」「平等」「理路整然」「正々堂々」これらの總てが、ひと口に云へば、彼の柄にないことだつたのだ。決して間違つたまねをしたわけではない。それどころか、謂はゞ正しすぎたのだ。正義の概念に捉はれすぎたのだ。自力以外に、錦の御旗の威風を借りて、戰はざるに既に蟷螂の斧をへし折つて了つた態のある、その、かさにかゝつた官軍ぶりが、凱歌のうちにも、一脈の溷濁を殘してゐるのだ。なぜ、もつと、持前の我儘勝手が掉へなかつたのだらう。制度や法律の庇護こそうけなかつたけど、同じく人爲に成る正義觀念の傘下に走せ參じたとは……。弱いのだ、自力に乏しいのだ。これほどの事件に會つて、忽ち赤裸々な自分一人の立振舞を失ひ、何かの後援をたよるやうでは、まだ〳〵人間修行が先が永いと、我ながら歩みののろさに愛想のつきる氣持だつた。と云ふのが、この失敗は、決して際てゞはなかつた。十年ばかり前に、弟子分の若い作家と、矢張り時折短篇を見て貰ひに來たりしてゐた女學生との間に戀愛關係を生じて、手に手をとつて家出して了つた時に、兩家からの依頼で、二人で身を忍ばしてゐた宿屋まで出向いて連れ戻つたのだ

が、そのあと、熱しきつてゐるこの青年少女の處置や訓戒に、正々堂々、理路整然の筆法に出て、うんもすんも云はせないやうにしたため、却つて事を託した兩家の方で、祕に力を貸して、もう一度道行きをさせるやうな結果になり、おまけに昌造は、その旅先から絶交狀を送りつけられるといふ、甚だつまらない役廻りを演じたことがあるのだ。無論、意識的に、例へば不動の金縛りとでも云ふやうな、この正義攻めの一手を用ゐるやうな、毛頭そんな餘裕などはないので、たゞ一圖に、正しい處置、——誰に聞かせても、御尤だ、よくこそさうなすつた、とより云へないやうな、筋道の通つた扱ひをしようと思ふ一念から、遂に我が血、我が肉を離れて、概念的な正義の陣を張り、錦の御旗を振り翳すやうなことになつて了ふのだが、それゆゑ、當分は、自分自身でも、それに刄向ふ刄を見出す術なく、飽まで立派に振舞つたとばかり思ひ込んでゐる、——つまり、あんまり一生懸命になり、凝り固まりすぎての過失なのだ。今では昌造も、亡父の一生のうちにさへ、さういふ幾場面を見出すことが出來る。例へば、上司と爭つて官途を退いたり、日本鐵道國有の際、淸算事務に係つて同僚の不正をあばき、危く一身の廉潔を保つたり、或はまた昌造たち子女がくらつた叱言の端にも、概念的正義偏重の習癖は現はれてゐた。恐らくこれは、幕末朱子學者流の病弊の一つではあるまいか。——父親崇拜の昌造には、そんな古めかしいものまでも傳はつて來てゐる……。

度々の反省にも見出しかねてゐた鬱陶しさの原因が、おこうとの話のうちに、端なくも解けたことで、遂にさば〳〵と晴れ亙つた胸へ、突拍子もない、暢氣な想ひが飛びついて來た。——第一高等學校に、弊衣破帽の豪放ぶりや、直情徑行至上主義が瀰漫してゐた明治三十年代末期の彌次の唄に、「理窟いふなら眞面目でぬかせ、あとで拳固の雨が降る」といふのがあつたことを思ひ出し、その沒論理も甚しい、殆ど口から出放題と云つてもいゝやうな歌詞のうちに、昌造はふと、へんに強い同感を湧きたゝせてゐたのだ。

（まつたくだ。俺みたいに、すぐくだらない理窟ばかりこねたがるやつは、あとで拳固の雨でもくらふがいゝんだ）

と思ふと、我が身の上ながら、その「拳固の雨」といふのが、ひどく痛快で、二十年前の學生時代にでも還つたやうな元氣を感じだした。普通の話しぐらゐの聲とは云へ、野蠻な節にひときは力瘤を入れて、いきなり、

「理窟ゥ云ふなアらまじめでぬウかアせ、こりや、こりや、あとでエ拳固ォのォ、雨がふウるウ、よォい、よォい、でつかんしよ」

と唄ひだしたのに、おこうは吃驚して、ぴたりと足をとめて了つた。

「なアに？　どうしたのよ」

「どうだい、ちよいといゝでせう、この唄」

「ちつともよかアないわ」

「いゝよ。あとで拳固の雨が降るつてとこが馬鹿にいゝよ」

「一體どうしたのよ。氣違じみてるのねえ」

それから、一昨日の晩の自分の仕向が、正にその「拳固の雨」に値するものだといふ說明に、道のりにして一哩ばかり、かれこれ日比谷公園の近くまで行つて了つた。

二

四五日して、下見の時から氣に入らなかつた大町の貸家へ、ひとまづ引き移つて行つた。子供たちや雇人の手前もあつて、出來るだけ何氣なくは振舞つてゐたけれど、昌造夫婦の氣持は、あの夜以來の白々しさを續けて、二人きりで見合す笑顔などは、いつになつたら、と思はれるほどだつた。おまけに、その引越の晩から、昌造には、洟や咳も出ず、風邪をひいたとも思はれないのに、八度近い發熱があつて、ほと〳〵憂鬱になりきつてゐた。年に一遍も寢つくほどの病氣はし

ないだけに、馬鹿々々しく熱には弱く、寂しがりやの本性を丸だしに、誰かしら始終枕もとにゐてくれないと心細がる昌造だつた。

「おい、氷枕なんか、どこィはいつたか、まだちよつと出せないかね」

子供部屋のつもりにして置いた玄關わきの六疊から、こんな風に度々妻へ呼びかけたが、その都度ちよつと來て、立つたまゝ用を訊いて行くだけで、いかにも冷いお役目の感じだつた。

翌日も荷ほどきや片づけもので、うちぢう忙しくしてゐるなかで、昌造は、まるで邪魔ッけな丸太ン棒かなんぞのやうに、子供部屋の隅にねて暮した。生れて初めて住む亞鉛屋根の家に、花の盛りを嫉むやうな細い雨が、一日しと／＼と降りつゞいた。――鎌倉へ行つて、荷をほどいてからでなければ出せないと云つてゐた千葉の手紙が氣になつてならなかつたので、晩飯には昌造も茶の間へ出て、すんだあと子供たちの寢つくのを待ちながら、そこで夕刊など擴げてゐた。

やつと隣りの八疊が鎮まつたと思ふと、まだうちでは風呂がたてられないと云ふので、おしげが、錢湯へ出かけようとして、女中から、くる／＼とタオルにくるんだものなどうけ取つたりしてゐた。

「降るのに……、どうだい、明日にしたら」

「えゝ。でも近いんですから、ちよつとやつて頂きますわ」

出て行つたあと、湯呑の底に少しばかり殘つた茶の捨て場所がないまゝに、その上から鐵瓶の白湯を注いで、ピラミドンを服んだ。――往來からは、二百坪あまりの空地を隔てゝゐるだけに、まだ九時を打つたばかりで、しんかんとした夜更の感じだつた。――ふと見ると、まだはつきりそこを据ゑどころともきめてないらしい用箪笥が、鼠大津の壁際に目だつた……。馬鹿なまねをするな、と叱つてくれる良識も萎え凋んでゐた。膝行りよつて、上の觀音開きを引いてみたが、そこには鍵がかゝつてゐた。中段の三つ並んだ小抽斗には、錠がついてゐなかつたので、一つ一つそれをあけて行つた。

洋風の用箋や封筒が、有繋に女らしく、きちんと耳を揃へて積み重ねられてゐたり、ぎつちり桐の小箱で詰つてゐるのがあつたり、手巾と香水の瓶と羽織の紐と…。すぐぴたり／＼締めて行つた。二つに仕切つた下の段の、やゝ深い抽斗には、それ／″＼錠がついてゐて、而もかゝつてゐた。

長火鉢のそばに戻つて、煙草に火をつけ、二度三度、續けさまに大欠をした。…次第に雨の音が繁くなつた…。十時をうつた。おしげが出て行つてから丁度五十分たつわけだつた。内腿のあたりにぞう／＼惡感のやうなものが走り、柱時計の振子の音ばかりがいやに耳について來た。…今夜に限つて、子供の寢かしつけ方が、優しく、念入りだつたやうな氣がして來ると思ふと、兩足が絕えず小さな波紋を重ねてゐる、暗く鎭まり返つた海面が、ふと眼前に浮びあがつて來たりした。

「おい、おい！」

慌たゞしく煙草を灰にさして、女中部屋の方へ聲をかけた。

「はい」

出て來るのが待ちきれないで、

「奧さん、一人で行つたのかい？　誰かついて行つたのかい？」

「おあきさんがお伴して參りましたんですけれど、お送りしただけで、もうさつき歸つて來て居ります」

女中の方でも、姿は見せずに、廊下からかう答へた。

「あき、どうした？」

「たゞいま御飯を頂いて居りますが…」

「歸りにどつかイよるとかなんとか云つてたかどうか、訊いてごらん」

「は」

臺所の方で、何かごと〳〵話し聲がしてゐたが、今度は仲働のおきが出て來て、白キヤラコの前掛で、口のはたをひと撫ぜしてから。

「別にどこへよるとも仰有いませんでしたが……」

「そいで、迎ひは、來てくれつて云はなかつたのかい？」

「およろしいつて仰有いましたんですけれど、今から行つて參りませうかしら」

「一體、どこなんだい、風呂屋は？」

「そこを出まして、果種屋の横町を彼方へはいつたところでございます」

「近いんだね？」

「はア。お迎ひに行つて參りませう」

「いゝつて云つたんなら、まア、行かないでもいゝだらうけど、……ずいぶんおそいね」

「はア」

と、時計を見あげた時、がらりと玄關の格子戸があいた。

「あ、お歸ンなさいました」

敷居際の突膝を、ひよいと、腰でひとつ調子をつけるやうにして立つて行つた。

昌造は、讀みからしの夕刊を、もう一度膝の上に擴げた。

「たゞ今……」

廊下で小腰をかゞめたまゝ、湯殿に續く二疊の化粧部屋の方へ、急ぎ足にすツと通り過ぎて行つた。

「あら！　あき、こゝ、まだ電氣の球がつけてないんだね？　つかないよ」
「さようですか」
ばたく〳〵とあとを追つて行つたが、
「いた！」
「あら、御免くださいまし……」
「いきなり飛び込んで來て、……いやな人だねえ」
「すみません。暗かつたもんですから……」
「ないんだよ、球が」
「あら、さよですか」
「持つておいでよ」
「どこにございますんでせう」
「どこつて、昨日お前がどつかィ片づけた筈ぢァないか」
手傳に來てくれた、この土地に住む文學青年を使ひに賴んで、買つて歸つたのは、一つ殘らずつけさせて了つたやうに憶えてゐたので、昌造が、いくぶん聲をはつて、
「たしかもうないだらうよ」
それには答へないで、女中の方へ、
「あ、さうか。玄關を數へ忘れてゐたんで、一つ足りなくなつたんだつけかね」
「わたくし、存じませんでしたけれど……」

「あゝ、さうだよ。……ぢア、どうか一つ、要らなさうなとこのをはづして來ておくれな。……玄關のでもいゝわ」

「それより、お前、こつちィ鏡臺を持つて來させた方が早いぢやないか」

それもまるで聞えなかつたやうに、

「早く行つて、玄關の球とつといでよ」

「おい、おしげ！」

「はい」

「先刻ッから、俺が云つてること、聞えないのか」

返事がなかつた。

「おい！」

返事の代りに、足音が近づいて來て、廊下の薄暗がりに、羽織をぬいで、急に肩つきの淋しくなつた姿を現したが、敷居のうちへははいつて來ようとしないで、すぐもう聲の調子に、氣持の强張りをみせた。

「なんです？」

「なんですつて、別に用ぢアないけど、先刻ッから、こつちで俺が云つてることに、返事ひとつしないつて法はないぢアないか」

子供のやうに、默つてたゞ突ッ立つてゐた。

あの夜以來、用の口のほかには、一切話しかけず、出來るだけそばにもよりつかないやうにしてゐるだけならまだしものこと、さういふ不愛想、不機嫌は、良人に對する場合だけで、雇人や手傳の人、子供たちには、普段に變らない、或はそれ以上の輕快さで、談笑してゐる。つまり、事件以來氣を滅入らしてゐるわけではないが、あなたにだけは反感をもつ

てゐるんだ、といふ氣持を、露骨に、誇大に示してゐた。その日のおやつの時にしても、女中をさう云ひによこしたが、腹がいつぱいだつたので、昌造は寢床から出て行かなかつた。さうすると、手傳の文學青年や子供たちを相手に、さも面白さうに、賑かに笑ひさゞめく聲が、茶の間から聞えて來るのだ。もし昌造が出て行つて、その場に居合せたとしたら、いかに彼が主になつて、面白可笑しい話題をもち出したりしてみたところで、恐らくおしげは、くすり、とも笑ひはしずに、さつさとすませて、さも忙しげに立つて行つて了ふに違ひないのだ。敢て今度に限らず、良人に對して不平や反感をもつてゐる時のおしげの、かういふ意地のわるいやり方を、いやになるほど知り盡してゐる昌造だつたから、食べたくないまでも、たゞその一座に加はらうとして出て行くやうな氣は、間違つても起しはしなかつた。例へば言語の通じない他國人のやうに、遙にその團欒の圏外から、ひとり寂しく耳を聳てゝゐるよりほかはなかつたのだ。今の、女中との應答にしても、いくぶんそのでんで、電球がついてゐるゐないくらゐのことにしては、普通よりよつぽど言葉數が多く、どこかにこれみよがしの賑かさがあつた。その揚句、昌造の前に來れば、忽ち佛頂面だつた。

「明日でも球は買つてつけさせるとして、今夜はこつちイ鏡臺を持つて來させた方が早手廻しぢやないか」

「ですけど、御飯を食べる部屋で、髮をいじつたりするの、あなたがお嫌ひだからと思つて……」

「さうか。それほどまでに俺のことで氣を使つてゐてくれるんなら、ちよいとひと言返事をするくらゐ、なんでもないこつたらうと思ふがな」

「すみません。あきと話をしてゐたんで、つひ……」

「然し、是非お前があつちでなくつちアいけないつてんなら、玄關のでもどこでも、球をとつて來させたらいゝだらう」

「いゝえ。髮の毛が落ちても構はないんなら、こゝでしませう。……おーい」

と、ひと聲はりあげて女中を呼び、「そこの鏡臺、こつちイ持つて來ておくれ」

けれども、やがてそこに、――長火鉢のそばと鏡臺の前とに、氣まづい夫婦が、沈默の對座を續けなければならないことになつてみると、矢つ張り參るのは昌造だつた。風呂へ行つて來ると云ひだした時分からの、氣持の動きだけでも、いゝ加減もう勞れてもゐた。――千葉の手紙は、明日のことにしようか、さうも思つたが、然し今夜あたり受け取つて置かないと、やぶいて捨てゝ了はないとも限らない、みんながみんなやぶかないまでも、なかで、おしげの謂ふ「いゝのだけ」でもやぶかれはしまいか、といふやうな氣がして來た。このまゝ自分が寢に行つて了ひ、髮を整へ終つたあとなど、丁度さういふことをするのにいゝ折ではないか、といふやうな邪推さへ生じるのだ。

「おい、千葉の手紙、いま出せないか」

中古型の束髮の、ぺちやんこな髷にあげてゐた兩手をそのまゝに、

「いまですか？」

「これだらう？」

と、顎で用箪笥の方を指して、「鍵さへあれば、すぐ出せるぢアないか」

「えゝ。……ぢア、出すんですね？」

「すむまで待つてようと思つてたんだが、なんだかくたびれて來たから」

それには返事をしずに、濡手拭に、兩の掌の平をこすり合せてから、跫ざはり荒く立つて行つて、押入に首を突ッ込み、何か暫くがたこといはせてゐたが、小さな鍵輪を持つて用箪笥の前に戻つた。そこは、丁度昌造の眞背後にあたつてゐたが、それでもなほ、氣を樂にさせてやらうと、もう一度夕刊を把りあげ、がさ〳〵折り返したりした。にも拘らず、矢つ張り獵犬のやうな耳になつてゐたが、物音だけで、立派に一つの幻像を描きだされて來た。――下段の深い抽斗から、おしげが秘藏の、ほんの弄具のやうに小さいくせに、それでちやんと本式に出來た手提金庫をとり出し、そのまた鍵をはづ

して、桐の掛籠の下にものを索つたまで、いかにもはつきりとした幻像だつた。

「はい」

疊を摺つて、ずいと押してよこしたのは、薄いハトロン紙の安封筒の、ふくらみ切るだけふくらんだ一封だつた。把りあけてみると、眞中ほどから裏へ折り返して封じた、その封じ目に、恐らく地震後の間に合せに拵えた三文判であらう、丸のなかに「しげ」とあるやつを、二寸たらずの封筒の横幅いつぱいに、捺しも捺したり、凡そ二十ばかり、めちやくちやに重り合つて、輪つなぎと云ふより、殆ど眞赤な一文字に、べた／＼捺し連らねてあつた。——見るなり昌造は、しんからの可笑しさに、思はず噴きだしかけた。

「なんだい、これァ……」

振り向いて、鼻の先へ突きつけたのを、伏目に見て、おしげも有繋ににやりとしかけたが、すぐその口もとに力を入れて、どツこい、その手には乘らないぞ、といふ警戒を張つて了つた。が、そんなことにはかけ構ひなく、昌造は昌造で、どうにも愉快でたまらなかつた。いゝのだけとつて置いた、といふ云草と、このべた捺しの封印とは、實に合ひすぎるほど辻褄が合つてゐて、天眞爛漫、三歳の童子と選ぶところのない氣質の一面が、殆ど愛撫慾に堪えられないほどの、潑溂たる光彩を放つて、昌造の深奥に觸れて來た。

「ふーん」

もう一度ぢッと見詰めて、「實に、……いゝことをするねえ」

「何がです？」

鏡臺の前から向けてようした目の色は、よほどそれでも和んでゐた。

「何がつて、この判はいゝよ、素敵だよ」

何を、つまらない、といふ顔つきを無理にも扮つて、すぐもう髪へ手をあげてゐた。

もとより昌造には、妻の面前で、それを開封しようといふ氣などはなかつたし、いつまでそこにゐても仕方がないことなので、火鉢の縁に兩手を突ッ張つて腰を擡げながら、

「ぢア、これは、當分俺の方に預つとくよ」

「あたしはもう要らないんですから、すんだら、燒くなりどうなりなすつてください」

「うん、まア、それア、どうにかするよ」

上からはをつてゐた丹前の裾をとつて、昌造は、床の敷いてある玄關わきの部屋へ戻つた。

定價		
	定價	送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます

△御購讀は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御同答申上ます

昭和五年七月十八日印刷

昭和五年八月一日發行

（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作

印刷人　竹内喜太郎

東京市牛込區榎町七番地

印刷所　日清印刷株式會社

東京市丸ノ内ビルヂング五八八區

中央公論社

電話丸ノ内　五五三五・五五三六・五五三七番

振替東京三四番

同長野三二〇五番


内面艶消
新マツダ

CHUO KORON (*The Central Review.*) **Published Monthly.**
BY THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. TOKYO JAPAN.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

